B
5244
N34A1
1940
v.1

East
Asiatic
Studies

Nakae, Tōju
Tōju sensei zenshū

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

Digitized by the Internet Archive
in 2011 with funding from
University of Toronto

http://www.archive.org/details/tojusenseizenshu01naka

藤樹先生全集

B
5244
N34 A1
1940
V. 1

LIBRARY
SEP 2(1966
UNIVERSITY OF TORONTO
1128082

聖

春洞書

贈正四位中江藤樹先生眞像

門人淵岡山が當時藤樹書院に寄贈したるものなり。（巻之四十三藤樹先生補傳参照）

（藤樹書院藏）

陽明學時代の教學綱領「致良知」

巻之三解題並凡例參照

寛保元年三月京師三輪執齋翁の寄贈せる藤樹先生の眞筆にして、翁の高弟川田琴卿之を持參せりと云ふ。（巻之四十二藤樹先生行狀聞傳參照）

（藤樹書院藏）

縣社藤樹神社

藤樹書院

編纂總則並凡例

編纂總則

一

古人は楚山の璞が人に美とせられず、之に題するに石を以てせらるゝを哭したり。是と等しき事實は歴史上多々其の例を見出すを得べし。吾が藤樹先生の如き蓋し其の著しきものゝ一に非ざるか。先生の德行については世既に其の偉大なるを知る。されど此れも亦其の近江聖人と稱せらるゝことのみを知つて、世界的聖人に値する眞價の存するを解せざるが常なり。更に先生の學術に至つては、其の圓滿なる人格より聯想して、寧ろ平々凡々視せらるゝ嫌無しとせず。世に名ある學者の多くは古稀米齡に近き長壽を保ちて、始めて能く其の述作を大成したるに反し、先生は不惑を超ゆること僅に一歳にして長逝せられたり。卽ち準備漸く熟し、今や其の大成の緒に就かんとするに際し、俄かに一世仰讃の緣を絕たれたれば、成さるべくして未だ成らざりしもの頗る多かりしは惜し

みても尙餘りあり。然りと雖も先生の透徹せる頭腦と敬虔なる體驗とは、短命ながら猶能く人生の祕奥を開拓して餘蘊なく、之を發して偉大なる業績を無窮に垂れしめたり。而して此の業績は量に於て決して尠しとせざるのみならず、其の質に於ても、亦觀るべきもの多く、若し先生をして今日に在らしめば、世界的思想家として名聲天下に喧傳せらるゝ天資を抱かれしこと、亦想像するに難からず。現に淵岡山學派の中には藤樹の學術を以て王陽明以上のものとなし、文化を受けたる報恩として之を支那に逆輸入すべしとまで考へたるものあり。然らば何が故に世人一般は先生の眞價を認むるに至らざりしか。他なし、其の業績をして天下に周知せしむる方法其の道を得ざりしに由る。是れ乃ち藤樹神社創立協贊會が大正十年全集編纂の事を始め、拮据八年精究旁搜に努めて、之を世に公にし、以て我が文化史上の璞玉たる一大記念塔の表彰を企てたる所以なり。

二

從來編纂せられたる藤樹先生全集又は全書と稱するものは、固より全くこれ無かりしにあらず。而して現存する主要なるものに大凡三種あり。第一は先生直門江西岡田仲實

の息季誠氏が貞享前後卽ち先生歿後約四十年の頃先生永眠の地に在りて編輯したる全書なり。初め稿一たび成るや、江戸に在りし先生の季子常省先生の序及び校閲を請はんとて、之を江戸に送致したるに、會〻江戸下谷の大火に遭ひ、（元祿十一年か。）空しく烏有に歸したれば、刻苦して、後再び之を輯錄したるものなり。その由來は本全集卷末に載する三輪執齋の全書序文に見ゆるが如くにして、今日その全部を保存せざれども、藤樹書院に藏せらるゝ十數冊の寫本は卽ちその大部分なり。第二は大阪の儒者以禮篠原元博氏が文化文政或は天保年間卽ち先生の歿後約二百年の頃に編纂したるものなり。（先生の國字書簡に文化戊寅卽ち文政元年に元博の友津川仲通が伏見に至り米谷氏所藏の眞筆「與池田子」を見たることを載せたり。又篠原氏は安政二年六十八歲にて卒したること碑文に見えたれば、文化文政又は天保の頃に編纂せられたるものと見て大過なからん。）此は當時行はれたる各種の版本を比較して之を研究したる成績にして、頗る參考とするに足るものなり。明治八年九月以禮の息女里久子が藤樹書院に將來し、父の著朱陸年譜通攷五卷と共に寄納したれども、後故ありて全集は滋賀縣高島郡饗庭村川原林橘郎治氏の藏する所となりしが、更に同氏の手より出でて今は大津市陣內政雄氏の所有に移れり。第三は志村巳之助氏等が明治二十六年五月藤樹全書（十冊）として初めて出版したるものにして、今日普通世

に行はるゝもの是れなり。〔明治三十二年訂正再版の志村全書五冊は多少の修正削除あれども、却つて改惡の結果に至れる點多し。〕

同じく岡田氏本と稱せらるゝものも、凡そ三種に區別することを得べし。其の一は季誠氏自筆の全書にして、本全集附錄載する所の全書岡田氏本目錄に見ゆるが如き內容のものなり。此れは前述の如く火難に遭ひたる後、再び編纂したるものなれば、中には焼失前の草稿本と目すべきものも加はり、隨つて同一內容のものにして前後重複せる書册もあり、又追記を豫定せられたる部分にして、終に加筆增訂の完了せられざるものもあり。其の二は同じく季誠氏の自筆に係るものにして、篠原氏の全書別本と名づけたる無表紙寫本一册（諸家篠原氏の自筆書入あり。）近時藤樹書院が京都の書肆にて買ひ求めたるもの、其の筆蹟と其の內容より推して季誠氏晚年の筆なりと思はるゝものあり。（今は此の一册を存するのみ。）其の三は季誠氏の自筆にあらずして何人かの手寫に係るものにして、今日二册の寫本を存するのみなり。此には兩册とも開卷第一丁に後人の藏書印かと思はるゝ岡田之印の捺印あり。此の書は種々の點より見て、本全集第四卷文集四書及び第五卷文集五雜著解題並凡例に述ぶる全書岡田氏甲本（第一種中に甲本乙本の區別を附す。）の系統に屬するものを筆寫したるものなり。以上の三種

のものは主として岡田氏本目錄に見ゆる第一卷より第五卷に至る漢文集の部分について言へるのみ。第六卷以下には間々散佚に歸したる部分無きに非ざれども、猶其の主要なるものゝ現存するは喜ぶべし。

篠原氏本は其の碑文に徴して凡て十七卷と附錄二卷なることを知り得れども、現存するものは第二卷以下第十三卷に至る十二卷と附錄上下二卷（湖學紀聞其の他）との合計十四卷を數ふるのみ。特に全體の目次を載せたるべしと想像せらるゝ第一卷を散佚せる爲め總括的の内容を知るに由なきは頗る惜しむべき事なり。此の書は當時の版行本を底本とし、別に京阪地方にて資料を蒐集し、比較研究の後、更に藤樹書院に來りて各種の關係資料を調査し、忠實に對照し編纂したりしものゝ如し。〔以上十四卷は前記陳内氏より購入して今は書院に格納せらる。〕

志村氏本は初め大溝の人北川某、小川村の小學校に奉職の傍着々編纂の歩を進めたりしものを、後に至り志村氏之を讓り受け、其の順序を變更し、尚資料の增減を行ひ、齋藤耕三氏の出資を待ち、共編として剞劂氏に附したるものなりと謂ふ。

更に以上三種の全集の特色を観るに、岡田氏本は季誠氏が八九十年の一生涯を殆ど此

が爲に費したりと思はる丶、苦心の作なり。而して其の中の一二の材料例へば和文書簡又は年譜の如き季誠氏以前の人が既に之を編成したるものを同氏が全書中に收錄したるものなりと思はるれども同氏が苦心して各種の材料を蒐集整理し、以て現存の全書岡田氏本目錄に見ゆるが如き體裁のものに集成したることはその大功なり。詳言すれば初の漢文集の部分に於て、本全集に襲用したるが如き分類と定形とを與へたるは、全く季誠氏丹精の結果に基づけるものにして、（全書岡田氏本の中に嘿軒文集なるものあり。季誠氏編纂亦一次の草稿本にして此の書の卷首に見ゆる目次と後の全書目錄とを比較すれば内容及び編次に於て大なる差異あり。以て編纂經過の大要を推知するに足る。）諸家に藏する藤樹先生全書と名づくる多くの寫本類は悉く此の書を底本として書寫したるに過ぎざるもの丶如し。經解成書以下比較的單行本の性質を帶ぶる部分も亦其の排列宜しきを得、又倭文集の部分にも漢文集に於ける場合に準じて書簡と雜著との區別を設けたるが如き、皆季誠氏の工夫による。要するに先生の歿後年所を經ること未だ遠からざる時に丁つて、早くも材料の蒐集と研究に餘力を殘さゞりしと同時に、終始謹嚴の態度を持したれば、浩瀚なる材料なるにも拘らず、筆寫の誤極めて尠し。又先生の述作全體の上に一絲紊れざる組織と體系とを與へつ丶、此等資料の比較的

完全に今日に傳はれる素因を成したる季誠氏の功績は千載之を沒すべからず。本全集編纂に當りても、中心資料として最も信憑したるものなり。

篠原氏本は前述の如く各種の材料を比較研究し且つ多くの註記を挿入せる點に特色あり。又同氏は諸處を歷訪して取材の範圍を廣くしたれば、材料を多數の眞蹟に仰ぎたるもの丶如し。又岡田氏本に見るを得ざる大作を網羅したるもの一二にして止らず。特に和文書簡の部分に於ては自意を以て刪潤改訂の筆を加へたる萬年三宅石菴氏の定本に從はず、斷然原作に据りたる達識と、前後稿を易ふること數度なりし苦心とは最も敬すべく、又以禮は相當學識ありし爲、考證信ずるに足る者多ければ、岡田氏本と共に極めて貴重なる資料たり。

志村氏本に至りては、其の動機聖人の遺德を顯彰するに在りたることは言ふまでもなく、又その出版の爲には私財を蕩盡したりとさへ傳へらる丶ものにして、斯道の爲めに大いに多とすべきものありと雖も、其の成果に於ては甚だ遺憾とすべき點尠からず。材料選擇の上に熟慮を缺き、或は明人の著作を無批判に其の中に收め、或は蕃山の著書數

種を其の中に挿入しながら、却つて先生の眞著を多く閑却したるが如き、又印刷に魯魚の誤非常に多くして見るに堪へざるが如き、内容外形共に破綻百出の有樣なり。されば此の書を基礎として先生の學術を評論したるものには甚だしき錯誤に陷りしもの多く、今一々擧示するの煩に耐へず。斯くて先生の學術は此の全書の粗笨によつて傷けられしもの尠からず、藤樹神社創立協贊會が第一期事業として神社の造營を計劃すると共に、第二期事業として、全集の發行を企てたる際に、先づ全書志村氏本の版權を買收し、之が發行を永遠に停止したるもの蓋し故なきに非ざるなり。

以上の外に先生の著を部分的に編纂したるものとしては天和三年近江の人伊東俊廸編中江先生教化狀寫本一册、中村伯常傳ふる所の藤樹先師花翰詠歌寫本一册を始め、大洲傳來・岡山學派傳來、其の他十餘種の書簡集等あり。又大正十四年藤樹書院が名古屋の書肆にて購入したる藤樹先生全書と題する書簡集一册（愛媛縣大洲中學校藏有本にして此の書と同一內容のものに藤樹先生遺蹟と題せらるゝものあり。全書岡田氏本との混同を避けん爲、假りに此の書を遺教別本と名づく。）等あり。又草果と名づくる書並に大洲本全集の存したること及び享保の頃志村仲昌の編述に係る全書の存したることなど、何れも篠原氏本の註記に見ゆれ

ども、今は全く散佚したるものゝ如し。

先生の傳記に至りては、岡田氏本は唯僅に年譜一卷を載せ、篠原氏本は湖學紀聞一卷を傳ふるのみ。其の他には淵岡山學派傳來と思はるゝ藤樹先生行狀・同事狀及び小川の人志村仲昌筆行狀聞傳、大洲傳來の別傳、並に會津傳來の藤樹先生學統譜等あり。

翻つて考ふるに、岡田氏本目錄中書名を傳へつゝ、眞蹟本は固より岡田氏本にも、篠原氏本にも傳へられざるもの尠からず。その中各種の版本によつて始めて之を補ひ得るもの卽ち翁問答及び鑑草の如きものもあれども、其の大部分を失ひしものとしては、

一、大　學　啓　蒙。

一、（醫書）小醫南針。　卷之三十五捷徑醫筌の中に南針の一部轉載せられたれば、其の内容の如何なるものなるかは、略之を想像するを得。

あり。又全部を佚したるものとしては、

一、補拙。解宋本。

一、孝　經　翼　傳。

一、（醫書）日用要方。

あり。之に反し新に發見若くは增加し得たる材料としては、眞蹟其の他の五十有餘の書簡文の外に、

一、首　經　考。　岡田氏全書目錄中に無くして而も季誠氏の自筆に係るもの現存す。

一、論語鄕黨啓蒙。

一、古本大學全解。

一、孝經講釋聞書。

一、中　庸　續　解。　中庸の解釋に二本あり。第一本は中庸首章の解にして從來世に公にせられたるもの、第二本は第二章以下第二十七章に至る解にして從來門人の筆として書院の藏有に係れるもの、精査の結果眞蹟整理本なることを確證し得たるものなり。今第二本を中庸續解と名づく。

等あり。この外先生の遺著中の一部分に他人の註解を混入せりと思はるゝ古本大學旁訓を新に先生門人の家に獲たり。捷徑醫筌は書名は岡田氏本目錄に存すれども本文を存せず、同人は久しく其の實物を見ざりしが、大正十四年に至りて名古屋の書肆にて六本六百頁の板本を得て補缺するを得たり。明人顏茂猷の廸吉錄より拔採して先生自ら詳に訓點を加へられたる眞蹟附點孝弟論は先生の著述にあらざれども、同時代の語錄體の文章に對する先生の研究の程度を卜し、且つ徳川初期の訓讀法研究の資料たらんしめんとして

之を收錄したり。又先生の傳記に關しては、諸種の史料より綜合して別に補傳及び門弟子傳等を新に編纂して加へたり。これ小川委員永年苦心研究の成果にして、編纂同人の共同補正を經たるものなり。〔岡田氏本「鑑草」は後に發見し得たり。委細は岩波文庫本該書解題參照。〕

會津傳來の藤樹學に關する資料としては、岡山先生示教錄の外無慮十有七種の文獻あり。顧問東正堂翁は此等の資料を提示し、以て全集中に採錄すべきを慫慂せられたり。此は雜誌陽明學に其の一部分登載せられしのみ。其の大部分は凡て寫本のまゝにして從來世に公表せられたることなき貴重なる資料なり。然れども其の書甚だ浩瀚のものなれば、今は其の中につき會津藤樹學道統譜及び會津外藤樹學道統譜のみを採り、他は其の書名と原寫本の所在地とを道統譜卷末に附記するに止めたり。又洛下石川氏著藤樹先生學術定論及び附錄初學手段なるものあり。內容を檢するに藤樹先生の學術の要點を闡明し、又其の當時に於ける多くの陽明學者が受用の方法を誤れる點を指摘したるものなれども、藤樹の學術を誤解せる點あり。特に陸王諸家の學について研究未熟の點亦尠からず。而して此の書は既に井上、蟹江兩博士編日本倫理彙編及び雜誌陽明學大正元年八月第四十六號より大正二年二

月第五十二號に至る。に連載せられたれば、今茲に採錄せず。尚外國人にして藤樹先生の研究を行ひたるものに、亞細亞協會發行の論叢中にガレン・エム・フィッシャー氏の The Life and Teaching of Nakae Toju, the Sage of Omi あり。東京駐在の會計主任ロスコー氏を通じて同協會の承認を經たれば、之を本全集に轉載す。

これらの外、本全集編纂に際して、材料としたる各種の資料に就いては、各卷首に之を解說すべきも、茲に聊か編纂同人の意を用ひたる點として、特に敢へて述べんとすることは、博く現存する先生の遺筆を探りて之が鑑定に意を用ふると共に、其の正確なるものは、之を採つて材料の增加を圖り、且つ既に同一內容のものにして、全集中に採錄したる部分については、更に原作の眞意を發揮せん爲め、一々眞蹟と他本との對照註記を怠らざりしこと是れなり。これ一に交通機關の發達し、學術研究の進步したる聖代の餘澤にして、此等眞蹟によつて先生に關する史實の闡明に多大の便利を得たるは、書中到る處に之を見るを得べし。

三

如上三種の全集を通じて共通に遺憾とすべきは、何れの全書に在りても、各其の原據としたる底本を明示せざること是れなり。篠原氏本は第一卷に此等の說明を附したるかとも想はるれども、今は佚して之を知るべからず。岡田氏本は其の編纂、聖人の世を去ること未だ遠からず、聖人の居に近きこと此の如く甚だしきものあり、信を置くべきこと言を俟たずと雖も災火に禍せられて完璧たる能はず。又他の門弟子の家に傳はりたる材料にして之を逸したるあり。篠原氏は硏鑽怠らず、博引力めたりと雖も、當時の流布本を底稿としたるもの多ければ、其の間後人の改竄に出でし部分無きを保せず。且つ前述の如く、今日に至りては其の一部分を散佚せるあり。志村氏本の信ずるに足らざるは今更に言はず。されば本全集の編纂に當りては、主として前二者其の他の版本・寫本及び眞蹟に據り、且つ各書別に底稿を明示すると共に、傍記其の他の方法によつて對照の用に供したる各種資料に見ゆる所の異同を並擧する方針に從ひたり。

材料の性質及び選擇の標準大體上述の如くなれば、其の排列の方法に至りても、最初資料の有らん限り岡田氏本を底本とし、之に篠原氏本其の他を對校註記し行く方途に出

で漸次編纂の歩を進めたりしが、斯業の進捗と共に、篠原氏本には多くの題注あり、脚注あり、且つ岡田氏本には整理本の部分を燒失して偶〻未整理本の部分を殘存するに過ぎざるもの相當多きを發見し、中道にして委員協議の結果、豫定を變更して篠原氏本を底稿とし、岡田氏本其の他を以て之に對照追記する時は、完全に近きものを傳ふるを得ると同時に印刷上にも便宜多きを思ひ、斷然後者を採ること丶し、更に篠原氏本に無き部分は、岡田氏本の部分を底本とし、且つ兩全集に洩れたる著作は、夫々其の宜しきを考へて古寫本又は古版本によつて追加修補すること丶なしたり。但し材料排列の順序に至りては岡田氏本は大いに分類の要を得、又各篇の標目亦先生原作の眞を傳ふるもの丶如くなれば、此等二點は篠原氏本に從はず。之が爲め本全集附錄に別に資料一覽表及び岡田氏本と篠原氏本の內容目次を揭げ、其の面目の如何なるものなるかを知るに便したり。

四

本全集編纂上特別に注意したることは、前記眞蹟の蒐集鑑識と取材とに意を致したる

外、尙下記二三の事項の用意を怠らざりしこと是れなり。

一、凡そ底本及び關係資料の性質を詳記することは、編纂者が讀者に對して當然負擔すべき義務なるべし。本全集が前記三全集と全然趣を異にし、卷頭編纂總則を掲ぐる外各編首毎に必ず成るべく詳細なる解題を附し凡例を加へし所以の意全く玆に在り。唯一の編たとへば經解が他の編たとへば雜著に對して有する存在の意義を示し、或は其の內容の一斑を附說するが如く、時として研究途上の偶感に過ぎざるものもありて、或は改竄訂正を要するものも多かるべし。然りと雖も、此は編者が問題を完全に解決せんと試みたるに非ずして研究題目を提示せんとするのみ。編纂者が之によつて本全集全體の內容を總覽するに大に功果ありしを覺ゆると同時に、漫然蒐集するを厭ふ誠意に出でしことは幸に讀者の寬恕を請はんとする所なり。

一、底本の筆寫に際し、編纂に從事する者自ら之に當る時は、編纂者の材料に對する理解の程度を高め、又彼此對照上より得る發明も尠からず。加ふるに轉寫上の誤謬も比較的に之を減少するを得べし。これ本全集編纂に丁り多くの日子を要するをも顧みず、

猶全然寫字生を用ひざりし所以にして、一例を擧ぐれば、從來其の存在すら知られざりし資料に屬する古寫本の如き、他の資料に於て得たる知識と該寫本其の物の前後の關係より漸く判讀し決定し得たる部分極めて多く、隨つて寫字生が誤寫したるものを編纂者が從つて後より訂正するに比し、遙かに信賴するに足るものとなれることは深く信じて疑はざる所なり。

一、凡て何事も部分の比較對照によつて初めて全體の總括的知識を的確にするを得べし。是れ本全集が總目次總索引を附載する所以にして、讀者は之によつて容易に全體の內容を檢索するを得べし。

終りに本全集編纂に關し特別の指導と援助とを垂れられたる顧問及び大方諸君子の厚意を謝し、併せて貴重なる資料若くは眞蹟を藏有せらるゝ諸賢が其の祕篋を啓いて吾等の研究に多大の便利を與へられたるに對し深甚の敬意を表すと云爾。

凡例

材料の選擇及び排列については編纂總則に於て其の大要を記述し、又別に附錄として資料一覽表を掲げたれば、今復言はず。その他の編纂に關する凡例次の如し。

甲、文字の整理に關する件。

（一）原文に對しては訂正加除の筆を加へざるを原則とす。但し明かに誤謬なることを知りたる場合に限り、頭注に其の旨を附して本文中の文字を訂す。

（二）本文中假名遣の誤れるものあるも亦皆訂正の筆を加へず。

（三）古文又は特別の略字については多くは今日通用の文字に改め、且つ此等は一括して各編の凡例に表記す。〔但し變體假名は、今日通行の文字に改む。〕

（四）眞蹟又は原底本中に平假名を用ひたるものは平假名に據り、片假名を用ひたものは片假名に據り、又平假名と片假名とを混用雜記したるものも亦原の形式に從ひて別に統一的に之を改むるをなさず。

（五）漢文の部分に於て岡田氏本は其の多くは白文なり。篠原氏は全體に渉つて返り點のみは附せられたれども句讀點なく、又送假名はあれども頗る不備なるを免れず。今後者の足らざるを補ふと共に、前者の過誤あるものは編者の意によつて之を訂す。其の他の資料についても特記したる部分を除き、句讀訓點の如きは編者の見る所によつて之を附したるもの多し。

乙、資料の異本照合に關する件。

（一）照合の結果は傍記又は頭注の方法によつて之を明かにし、且つ其の異本書目は必ず註記す。但し傍記にありては、多くは略號を用ひて之を示す。

（二）現存の眞蹟を對校することによつて各種の發明をなし得たるもの頗る多し。此等は皆傍記若くは頭注の方法によつて之を示す。唯〻先生にありては同一の作を多人數別々に書き示されたること多ければ、同じく眞蹟と稱すと雖も、現存するものゝ中には明かに偶然の誤記と目すべき文字無きこと能はず。頭注稀に眞蹟誤つて某字に作ると記したものゝ如きこれなり。

（三）原底本にある文字にして對校の異本に之なき時は本文右側に符號△を附し、且つ前記の如く略號を用ひて其の據れる書目を明かにす。

（四）一委員が單獨にて校合したるものは、原稿の整理を終へたる後、今一度他の委員を加へて對校したり。

丙、編者の加へたる說明に關する件。

（一）卷頭又は篇首に必ず解題並凡例を附す。

（二）語句の註解及び說明は特別の場合の外は本文中に加ふるをなさず。傍記・頭注又は文末に附記する方法に從ふ。

（三）編者の執筆に係る說明に在りては姓名若くは雅號を記して、他の說明と區別し、且つ其の責任を明かにす。

丁、顧問並に編纂の分擔に關する件。

（一）顧問の芳名左の如し。

文學博士　巽軒　井上哲次郎先生

文學博士　君山　狩野　直喜先生
文學博士　惺軒　高瀨武次郎先生
陽明學會主幹　正堂　東　敬治先生

（二）編纂の分擔左の如し。

自卷　之　一至卷之十六
自卷之三十五至卷之四十一　主任委員　藤陰　加藤　盛一
自卷之二十二至卷之三十四
及卷之二十一之内春風陰騭解　委　員　春城　高橋　俊乘
自卷之十七至卷之二十一
自卷之四十二至卷之四十八　委　員　紫水　小川喜代藏
資料の蒐集及び報告　委　員　嘿天　柴田甚五郎
自卷之四十九至卷之五十……加藤・高橋・小川三委員共編

但し以上は分擔の大略に過ぎず、主任は全部を統一す。又一委員の編纂したる部分と雖も、必ず他の委員と交換して相互に訂正するは勿論、多くは同人の討議講究の餘に成りしものとす。但し解題に限り各委員間を廻覽して互に批正する處多かりしも、必ずしも全委員の一致したる意見と謂ふを得ず。これ研究途上の暫定的の所見に過ぎざるもの鮮からざればなり。

戊、其の他に關する件。

（一）題辭「聖胎純熟」の四大文字は、大勳位元帥閑院宮載仁親王殿下が藤樹先生の高德を慕ひ給ひて、特に本全集の爲に御染筆御下附遊ばされたるものなり。此の光榮に浴し得たるは、主として大阪なにには彌榮會長吉川又平氏の熱誠なる盡力に由れり。

（二）題簽「藤樹先生全集」の六大文字は、本會顧問京都帝國大學名譽教授狩野君山先生の薰沐齋戒の揮毫に係る。

（三）本全集の校正に際し、京都帝國大學大學院學生文學士斯波六郎君及び京都平安女學院講師井上正男君の懸命の努力と厚意の援助とを得たり。

卷頭併せ記して敬謝の辭に代ふ。

昭和三年戊辰六月一日

編纂同人敬記

増補再刊の辭

一　初版發行以後の經過

近江聖人の高德偉績に就いては今更架說を要しない。特に邦家奎運の興隆に伴ひ、或は學校教育の普及により、或は公刊圖書の弘通により、若くはラヂオ放送の發達等に由つて、今日では兒童走卒も亦聖人の崇敬すべきを知らざる者無き情勢である。しかし眞の偉人傑士は百載の下に能く其の知己を得ること多く、別して朴茂にして誇衒なく、實德あつて空言なき先生にあつては、歲を重ね世を代ふるに隨つて彌〻益〻其の光輝を發揚し來ること、恰も和氏の璧が數世を距てて後能く連城の價を贏ち得たるが如きものがある。實に叩けば叩く程其の門は啓かれ、撞けば撞く程鐘の響のいや高鳴る槪の存するのが先生硏究の佳興の盡きない所以で、顏淵の所謂罷めんと欲して能はず、既に吾が才を竭すの歎に堪へない。

本全集は最初十年の日子を拮据して漸く世に問ふを得たるも、其の後早くも復十星霜

の歳月を閲するに至つた。此の間藤樹頌德會が起つて各種の事業を續々實行しつゝある。或は月刊雜誌「藤樹硏究」を發行し、或は每歳夏季に小川邑に於て現地講演を開催し、其の速記錄を中心として昭和六年には「藤樹先生の學德」四六版三百頁の發刊せらるゝあり。或は孝經愛誦運動を提唱し、藤樹先生の假名書きに係る「國譯孝經」の課本を印行して個人的に將た團體的に無慮數萬部を頒布するを得たるあり。或は故紫水小川委員の爲に井上哲次郎博士外二十家の特別寄稿によつて成れる「藤樹先生を語る」菊版四百有餘頁の硏究が昭和十二年に發表せらるゝあり。或は會長西博士の「孝經啓蒙略解」及び「大學解通釋」が目黑書店によつて發售せらるゝあり。或は數千の頌德會員の協力によつて約九百坪の敷地の購入を行ひ、又聖人發祥の地高島郡青年團員等の勤勞奉仕によつて搬砂整地の功を竣へ、更に近江出身特志家數氏の厚意により、全國の參拜者若くは青年男女の無料休憩宿泊に便す可き小川寮の建設其の緖に就き、已に明德寮一棟の新造を見たるあり。或は近くは彥根市天晨堂によつて「藤樹先生遺墨帖」發行の實現するあり。或は別に藤樹神社にては「藤樹先生畫傳」を發行頒布し、或は愛媛縣大洲町出身

日立鑛山事務所長工學博士窪田哲二郎氏は縣立大洲中學校內先生邸址の地に至德堂と命名した藤樹書院を新建寄贈せらるゝあり。或は先生學術の闡明についても、全集發行以後更に明確に認知し得たる研究も亦尠くない。例へば岩波文庫本の「翁問答」及「鑑草」の解題並に前記遺墨帖の附錄「藤樹先生眞蹟攷」に於て加藤主任によつて闡明せられたるが如く、先生三十三四歲の大著翁問答に於て孝を中心とする報本反始的なる、そして基督教や佛教で言ふ三位一體的の思想體系の早くも成立せるを知り、又先生の佛教に對する造詣が如何なる佛典を根據とし、或は如何なる程度に進展し居たるかの跡を追躡し、又明の鍾人傑の編述に係る「性理會通」中の讀書錄及び陽明語錄等が陽明全書通讀以前に於て、先生によつて閱讀せられたるを始めて明かにし得たるが如きものあり。其の他西博士著岩波書店發行の「世界思潮」中の「中江藤樹」を始とし、加藤主任柴田委員愛媛縣立大洲高等女學校教諭近藤信氏等諸多の人士によつて、同類の著作並に研究が陸續として發表せらるゝありて、先生の學と德と日を追つて益〻顯彰せらるゝは學界の一大慶事たるを失はない。

然るに聖人研究の根幹資料たる全集其の物に至つては、其の後絶版狀態に在り。偶ゝ坊間之あるも市價昂騰驚く可きものあり。加ふるに時代の要求は國本を闡發培養し、倫常を明示維持したる先生の教說を求めて之を得ること能はず。爲に讀書子及び研究家購讀の渴望を醫するに足らず。かくて再刊要求の聲は澎湃として全國的に勃興するに至つた。しかし藤樹神社及び書院財政の現狀では到底此の要望に副ふ由がなく、さながら大旱の雲霓を望むが如く何人かの援助を求めて居た。是より先き昭和十一年四五月の交岩波書店主岩波茂雄氏は今の滋賀縣大溝町長上原茂次氏の東道によつて神社及び書院に參拜し、偶ゝ社務所に敬藏せらるゝ先生の全集五本の巨册を睹、其の發行の由來を耳にし又其の現狀を質して、前記の如き絕版狀態にあるを知り、隱然再版引受の意を洩されたとのことであつた。しかし初版刊行以後發見の新資料多く爲に增訂の切要を痛感しつゝ、編纂委員の繁忙其の他の事情から、當時は其の議も十分熟しなかつたが、其の後委員の發意と神社並に書院關係者の切願とを容れて、同店主は印刷費並に紙價激騰の際にも拘はらず、時局に鑑み斯道の爲め決然再刊を受諾せらるゝに至つた。唯玆に他の問題が殘

つてゐた。それは初版發刊に際しての印刷所たる京都市の內外出版印刷株式會社との關係である。神社並に書院當局者も亦同社も以心傳心的に再版發行の時機到來の日にはそれは必ず同處で行ふ心算であつた。しかし這回の再刊は單なる重版でなくて多大の改訂增補を行ひ、且つ用紙品不足の時局下に在つて東京に在つて發行する關係上、遠隔地に於ける印刷にては進行上の不便多々あり。是の點內外社に對し當局者を始め元理事長佐野眞次郞氏並に編纂同人の苦慮言ふ可からざるものがあつた。かゝる氣分を看取した同社社長須磨勘兵衞氏は同社重役に謀つて十年の永き歲月の間完全に保管し來つた紙型全部を何等の條件を附せず、虛心坦懷是亦斯道の爲め東京に送致する雅量を示された。茲に岩波書店主の義心と內外社長及び重役諸氏の芳意に對し深甚の敬意を表したい。同時に此の如き慶祝すべき結果に到達し得たのも、要するに聖人の高德を欣求するの一念が其の基調をなしてゐるものとして特筆せざるを得ない。

二　本全集の特色

本全集が從來の先生の全集若くは全書と異なる要點は左の如し。

一、正確なる根本資料を擇び、其の中より一の底本を定め、且つ其の他の資料を明示し對校し註記する等、嚴密に本文批評(テキストクリチーク)を行つたこと

二、內容の論理的排列に特長ある岡田全書及び研究が徹底して居る篠原全集の如き正確なる材料を根幹とし、更に藤樹書院若くは門弟子の家に傳來しつゝ從來世人に知られざりし諸多の雄篇大作を增入したること、又博く現存する先生の遺筆を探りて之が鑑定に意を用ふると共に、其の正確な者は採つて以て材料の增加を謀り、又他本との異同を對照註記したこと

三、孝經啓蒙翁問答の如き先生の主著にして且つ初稿定稿に屬する別種の二本あるものは、二本共に採錄して比較研究の便に供し、其の他の著作も異本と對照して夫等の出入を傍記の方法によつて一目瞭然たらしめたこと、隨つて本全集一部を藏有すれば、凡ての關係資料を同時に鳥瞰し得る樣特別工夫を凝らしたこと

四、編纂の方針並に經過を明示し、特に全五十卷の各卷各篇毎に詳細な解題並に凡例を附したこと

五、底本の筆寫に際し、編纂に從事した委員自ら之に當り、全然寫字生を用ひず。是に由つて材料に對する理解の度を高め、又版本によつてのみ傳はつた、例へば翁問答・鑑草並に捷徑醫筌の如きものは、正確なる遺著にして且つ最古のものを其の儘印刷の原稿となして、筆寫の際に生ずる誤脱を未然に防ぐと共に、特に校正を嚴にして原板の眞を傳ふるに細心の注意と努力とを拂つたこと

六、先生の傳記については門人の著作なりと斷じ得られる「藤樹先生年譜」を始め確實なる古傳の史料數種を加へ、且つ新に研究し得た事實を綜合して別に「補傳」並に「門弟子傳」を編纂附錄したこと

等に在る。其の後も全委員は探討を怠らず。又諸家の研究之を助くる者多く、從つて新得の材料も決して鮮少としない。是に於て前記の如き援助の下に改訂增補版の刊行を實現し得るに至つた。今再刊に丁つて大略左の如き特色を加へ得たのは編纂同人の洵に幸慶とする所である。

三　再刊本新得の資料其の他

一、湖東浦生郡桐原村益田家に於て門人益田義則の筆寫に係り、且つ同家に傳來した孝弟論不孝弟論・原人論・持敬圖說・孝經句解・四書啓蒙論語翼傳・大學考・大學抄・中庸抄・論語抄等八册九種の遺著並に謄寫本及び同家の系譜の援引によつて、初版の內容を大に修正し、又增多したこと（此の八册、今は藤樹書院に襲藏す。）

二、文學士松本亮三郎氏提示に係る先生晩年の大作「中庸續解」の筆寫異本を對校して前底本の誤記誤脫を前後數百項に亙つて補正したこと（因みに同寫本は後に同學士未亡人より藤樹書院に寄納せらる。）

三、門人中川謙叔作「中川子傷之文」と呼ばれる追慕藤夫子詩並序を前記益田家に得て之を增補し、又同人の著「全人論」の大作を大阪市鹿田書店に獲て之を究明し、以て門弟子詩文集に其の項目を追記したこと

四、詩文・書牘・謄寫並に手澤本等に亙れる幾多眞蹟の追加發見によつて更に材料を添加すると共に、傳來の材料の內容を吟味追補したこと、特に最近遺墨帖の發行に際して、復又幾多新得の遺筆を探り當てて之を補入するを得たこと

五、前記近藤佶氏の提示に係る門人小川覺及び仙の文章を新に加ふると共に、大洲地方

に於ける永田權右衞門・郡安兵衞正眞其の他の藤門弟子研究の端緒を開き得たこと、其の他顧問高瀨惺軒博士及び潛菴先生の令孫春日精之介氏提示に係る諸多の材料につき相當多量の增補を行ひ得たこと

六、大田錦城・佐藤一齋・貫名菘翁・春日潛菴・川田剛其の他潛菴門下數氏の 先生の眞蹟に對する題跋並に狩野君山・鈴木豹軒・加藤天淵諸博士の 景慕詩篇を加へ得たこと

七、全集初版の索引は各册各別の檢索によるものであつたが、 項目の數を增加すると共に、 今は改めて全册通檢の方法に從つたこと、 是は編者の苦心努力以外、 發行書肆多大の奉仕であること

八、明治二十六年と同三十二年の發行に係り、 且つ本全集初版發行の際、 其の版權を買收して之が發行を永遠に停止した志村巳之助氏編「藤樹全書」中に見ゆる諸篇に逐一檢討を加へ、 例へば「全孝圖」は明の江元祚の孝經大全中に在り、 或は「神道大義」は熊澤伯繼の述作なり、 或は同書中の詩篇偶成三首の內最後のものは王陽明の四句教言に過ぎず、 或は彼の全書中にある「大學抄」は藤樹先生の遺著に非ざるを論證し、

以て本全集中に此等の篇を採入せざりし理由を明示し、又先生の主著にして同書に收載せられざる篇名を指摘すると共に、同書中に存する金玉の篇を確實なる證左の存する限り再刊本に取材添加したこと（神道大義は、初め三種の象說として發表し、後に此の名に改めしといふこと、最近關儀一郎氏より之を聞く。）

九、前記の如く志村全書の吟味によつて先生金玉の篇を新に收載した結果、蕃山の門人岡嶋可祐の纂錄に係れる「集義和書」の吟味に及び、「心法圖解」の名を以て載せられたる彼の書卷第六全部は、實は藤樹先生の眞著なることを新に發見し、更に同和書檢討に第一歩を開拓し得たこと

之を要するに學界知名の士の敬虔眞摯の研究と編纂同人不斷の努力と江湖諸君子の深甚の援助、別して藤樹頌德會長西博士以下顧問理事委員各位の絕大の活動が、時代の要求と共に、再刊發行の機運を醞釀したものと謂はざるを得ない。京都帝國大學名譽教授豹軒鈴木博士は其の高作「豹軒詩抄」に於て「皇國の英豪算數なし、聖人の稱獨り先生に在り。」と喝破せられた。吾等は須らく我が邦家最大の高德たる聖人の眞髓把握を更に益々徹底せしめ、以て國民品位の向上に寄與し、又以て皇國光輝の增大を謀らねばなら

ぬ。

四　全集重刻告成。因陳感懷。

（一）高　堅　前　後

十年研覈輯刊新。
再閱十秋增益辰。
欲罷不能歎卓立。
斯文振起俟斯人。

（二）憶顧問正堂翁委員紫水君。

接膝前年驗覆詳。
編摩業就偉功彰。
商量今日無相共。
新訂舊書空斷腸。

皇紀二千六百年庚辰紀元節佳辰　編纂同人　謹識

再刊本印刷進行中にも諸多の眞蹟發見せられ、隨時取材追補し來れるも、最近に至りて前記近藤信氏の盡力により、愛媛縣大洲町西尾正敬氏祕藏に係る表裏共に金箔附の短冊に認められたる和歌一首を加へ、又同縣喜多郡新谷村香渡冨子夫人珍襲に屬する左記瀉寶の存するを始めて發見し得たり。

一、經解・詩・文・書・雜著並長篇倭歌	墨附	六十四枚	諸處訓點附せる	美濃大判　一冊
一、孝經啓蒙	同	五十四枚	全部訓點附せる	同　一冊
一、大學考	同	九枚		同　一冊
一、大學蒙註並解	同	二十八枚		同　一冊
一、中庸解	同	十二枚		同　一冊
一、和文書翰	同	二十九枚		同　一冊
一、陽明要語	同	二十五枚	全部訓點附せる	同　一冊

共計七冊　墨附貳百貳拾壹枚

短冊は喜多郡河邊村山鳥坂の庄屋岡部氏代々祕藏のもの、藩主御巡見の時にのみ展示し其の他は門外不出なり。短冊の上部に小孔あり。君侯に展示する際、之によりて壁間に掲げたりといふ。今は第五(別)冊眞蹟表に三十一文字を示すに止む。

香渡夫人護持のものは、もと藤門戸田孫助正度近江より歸國に際して先生が親授せられたるもの、夫人が外戚香渡家に入嫁せる後、故ありて祖父正臣翁祖母三津子刀自を香渡家に引受け老後の孝養を盡し、爲に生前の遺命により他の書册家什と共に夫人は之を授與せられたりといふ。

經解・詩・文・書・雜著・長篇倭歌は一文毎に諸處與へられたる門人の名の示さるゝこと、一大特色にして、例へば全集卷頭の格物致知解が熊澤子に與へられたるを是に由りて知り得るが如き是なり。孝經啓蒙は初版既載の初稿本と定稿本との中間に位し、益田家傳來の義則筆孝經句解と同一系統に屬す。大學考・同蒙註並解・中庸解は藤樹書院及び小川社司襲藏の眞蹟本と等し。唯蒙註の名を眞筆本に見得るを特色とす。先生が門人の爲にかゝる浩瀚の書を謹書し與へられる努力洵に涙なくしては之を視るを得ず。奮闘の一生想ふ可く、先生の早世故なきに非ず。和文書翰は倭書森井本の原本とも見らるゝものにして倭書解題所載の同書目次と一致す。唯二三項目多きは或は森井本目次筆寫の誤脱ならん。新出大洲高等女學校藏有文化十年神山忠良筆「藤樹先生書翰寫」亦同一系統のものとす。陽明要語に至りては從來全然是あるを知り得ざりし新資料にして全部訓點附せらる。第一册に附載したる孝弟論と同じく先生の讀書力及び訓點法を見るべき好箇の材なり。

第一册既載の材料は、卷頭目次の下に（戸）の字を附して、此の拱璧の內容を所與の門人と共に一覽的に之を示す。第二册に屬するものは、大學考以下中庸解及び和文書簡と長篇和歌 與戸田子 與中川子 及

び途岡村子の書翰のみ。且つ既に印刷配本後に屬するを以て、茲に陽明要語と共に其の名を示すに止む。（委細は藤樹研究第八卷五號拙稿京都だより參照。）

全體に渉りて字體謹嚴、前記朴茂にして誇衒なき先生の高風字閒に躍如たり。熟思諦觀、自ら容を斂む。加ふるに此の如き首著を含む多量の眞跡本が同一家に襲藏せられしこと他に其の例を見ず。洵に天下の鴻寶たるを失はず。本冊目次終の下門人戸田孫助正度傳來藤樹先生眞蹟影印を參照せられたし。（昭和十五年端午吉日追記　藤陰）

凡例

一、凡て初版既載の凡例に準ず。

一、再版增補に屬するものは、特記の外、凡て小大を問はず上下に〔　〕を附して、初版既載のものと區別す。

以上

藤樹先生全集

第一册 目次（自卷之一 至卷之十一）

卷首

閑院宮載仁親王殿下御題辭

編纂總則並凡例……〔増補 再刊の辭〕

卷之一

文集一 經解……一

〔 〕ノ内ハ香渡氏藏戸°田子本眞蹟ノ内容トス

（解題並凡例）……一

格物致知 三條〔(一)熊澤子(三)(戸)〕……（一）

誠意 三條〔(一)(三)田遜子(戸)〕……（四）

明明德 二條……（七）

明德 二條……（九）

艮其背云々 三條〔(一)(三)(戸)〕……（一〇）

艮背適應……（一三）

人心惟危道心惟微云々〔(戸)〕……（一三）

公孫丑問曰何謂浩然之氣云々……（一四）

保合大和乃利貞〔佃子(戸)〕……（一六）

子曰人之生也直罔之生也幸而免……（一七）

子曰天下有道丘不與易也……（一七）

子曰毋意毋必毋固毋我……（一七）

神之格不可度思矧可射思……（一七）

子曰六十而耳順……（一七）

大學之道在明明德云々……（一八）

致中和〔(戸)〕……（一九）

允執厥中〔(戸)〕……（二〇）

愼獨 七條〔(一)(二)(三)郡子(七)(戸)〕……（二〇）

自反 二條……（二三）

仁者樂山知者樂水（戸）……（二四）
愛敬　二條（一）（戸）……（二四）
至善……（二五）
衣錦尙絅（戸）……（二五）
爲己爲人（戸）……（二六）
緡蠻黃鳥止于丘隅子曰云々（戸）……（二六）
主忠信（戸）……（二七）
知止……（二七）
一貫……（二八）
欽崇天道……（二九）
藏密（戸）……（二九）
（附）點附孝弟論……三九
（解題並凡例）……三九
孝弟總論　上……（一）
同　上　中……（八）
同　上　下……（一三）
不孝不弟論……（一九）

卷之二

文集二　詩附贊聯句……七七
（解題並凡例）……七七
寄友（戸）……（一）
癸酉之歲旦（戸）……（一）
舟中見水月有感（戸）……（二）
乙亥之歲旦（戸）……（二）
於洛偶成……（二）
寄友（戸）……（三）
丙子之歲旦（戸）……（三）
送信古（戸）……（三）
送藤田嶋川兩生（戸）……（四）
丁丑鷄旦題草稿（戸）……（四）
送池田子（戸）……（五）
戊寅之鷄旦讀孝經偶成（戸）……（五）
偶成（戸）……（五）
送中川子（戸）……（六）
五福六極吟（戸）……（六）
論學（戸）……（六）
送吉田子（戸）……（七）
已卯之歲旦（戸）……（七）
送中村子（戸）……（八）
題竹生嶋（戸）……（八）
送森村子（戸）……（八）

庚辰之歲旦〔(戸)〕……（九）
題嘗廟〔(戸)〕……（九）
辛巳之歲旦　二首〔(戸)〕……（九）
參拜　太神宮準祝詞〔(戸)〕……（一〇）
壬午之歲旦〔(戸)〕……（一一）
送谷川子……（一二）
送熊澤子……（一二）
送中川子〔(戸)〕……（一三）
送横山子〔(戸)〕……（一三）
癸未之歲旦〔(戸)〕……（一四）
酬友人嶋川子〔(戸)〕……（一四）
甲申之歲旦〔(戸)〕……（一五）
乙酉之歲旦〔(戸)〕……（一五）
丙戌之歲旦〔(戸)〕……（一六）
偶成〔(戸)〕……（一六）
丁亥正月之吉試翰之次偶成〔(戸)〕……（一六）
又戲作……（一七）
送加世子歸鄉……（一七）
悼背友玉井子早世……（一七）
戊子之歲旦〔(戸)〕……（一八）
夏夜見月〔(戸)〕……（一八）
明德首尾吟……（一八）
死生首尾吟……（一九）
三月盡……（一九）
上巳對桃花有感……（一九）
和朋友問塞歌……（一九）
送崇保軒門弟治之……（二〇）
偶成　二首……（二〇）
題忍字……（二一）
乙亥之春二月十六日謹贊　文宣王之尊像……（二一）
癸未之秋玄之十三謹贊　文宣王之尊像……（二二）
丙子之冬十一月念五日謹贊　神農之尊像〔(戸)〕……（二二）
擔薪翁贊……（二二）
達磨贊……（二二）
儒聯句……（二三）
漢倭聯句……（二四）
倭漢聯句……（二六）
隔句　三條……（二七）
楊貴妃油之銘……（二八）
某年元旦作……（二八）

卷之三

文集三　文……一〇九

（解題並凡例）……一〇九

安昌弑玄同論……（一）

林氏剃髮受位辨……（五）

原人……（一一）

藤樹規……（一七）

學舍坐右戒……（一九）

大上天尊大乙神經序……（二一）

靈符疑解……（二五）

論坐禪……（二六）

知止章之辨……（二六）

卷之四

文集四　書……一五五

（解題並凡例）……一五五

答小川子疑問（戶）……（一）

明日又與仙（戶）……（一）

答小川子（戶）……（二）

折衷於小川子疑問（戶）……（三）

答小川子質問（戶）……（四）

答小川子……（五）

答小川子疑問（戶）……（七）

答族弟好古質問……（一〇）

原謹以遡言餞熊澤子之行（戶）……（一一）

送森村子（戶）……（一三）

送森村子（戶）……（一五）

書森村子卷（謙）（戶）……（一六）

送森村子（知止）（戶）……（一七）

送赤羽子（戶）……（一九）

送佃子（戶）……（二〇）

送山田子（戶）……（二三）

送國領子（戶）……（二六）

書清水子卷（孝）（戶）……（二九）

送中西子（戶）……（三一）

書土橋子卷（戶）……（四〇）

又（戶）……（四一）

書野尻一利卷（知意）（戶）……（四一）

答書……（四三）

與小川子（〈戸〉）……（四四）
甲戌春答仙（〈戸〉）……（四四）
代門人答西銘疑義……（四六）
（附）答中川貞良甫書 答原辰秀才書……（四七）

卷之五

文集五　雜著……三一
（解題並凡例）……三一
孝　八條（一）（二）（七橫山子〈戸〉）……（一）
心 坎 離 性中 神水 神火……（五）
心 坎神水 離神火……（五）
心 坎神水 離神火……（六）
心……（六）
天君（國領子〈戸〉）……（六）
中　四條（三）（四〈戸〉）……（七）
道　二條（一）（二〈戸〉）……（八）
樂　六條（一）（一〈戸〉）……（九）
獨樂　二條……（一一）
意（〈戸〉）……（一三）
忍　三條（一）（一淺野子）（三）佃子〈戸〉）……（一三）
學……（一三）
學（一本講論歌括）……（一四）
仁……（一四）
五常　二條……（一五）
敬……（一六）
謙（〈戸〉）……（一七）
虛……（一七）
夢……（一七）
惑悟……（一八）
習……（一九）
名（〈戸〉）……（二〇）
欲（〈戸〉）……（二一）
易簡（〈戸〉）……（二一）
大勇（〈戸〉）……（二三）
藥（〈戸〉）……（二三）
依丸藥示工夫……（二三）
吾（長尾子〈戸〉）……（二五）
忘……（二六）
立志……（二六）
志　二條（二）（〈戸〉）……（二六）
聖經（國領大〈戸〉）……（二七）

經傳〔（戸）〕……（二九）
賓〔（戸）〕……（二九）
謙意……（三〇）
嘿識〔（戸）〕……（三〇）
莊子曰顏淵曰云々……（三一）
易……（三一）
天地……（三二）

大虚天地人物……（三二）
四十二病……（三三）
經書摘語……（三三）
又……（三四）
又……（三四）
雜說……（三四）
（附）學術便蒙……（三五）

卷之六

經解成書一……二五一
（解題並凡例）……二五一
大學啓蒙（斷片）……二五三
經解成書二……二五五
（解題並凡例）……二五五
孝經啓蒙（初稿本）〔（戸）〕……二六三

卷之七

經解成書三……二九九
（解題並凡例）……二九九

孝經啓蒙（定稿本）……三〇三

卷之八

經解成書四……三八七
（解題並凡例）……三八七
論語鄕黨啓蒙翼傳……四〇五

卷之九

經解成書五……五〇一
（解題並凡例）……五〇一
（序）……五〇三
古本大學全解……五〇五
（解題並凡例）……五四九
（附）古本大學旁訓……五五一

卷之十

經解成書六……五七七
（解題並凡例）……五七七

首經考……五八五
孝經考……五九二
大學考……六〇七
四書考……六一三
讀四書法……六二〇
大學序說……六二三

卷之十一

圖說……六二七
（解題並凡例）……六二七
四書合一圖說……六三三
大學朱子序圖說……六三六
（附）大學序宗旨圖……六四〇
五性圖說……六四二
明德圖說……六七五
持敬圖說……六八四
（天命性道合一圖說）（附）易卦圖……七〇五

挿繪目次

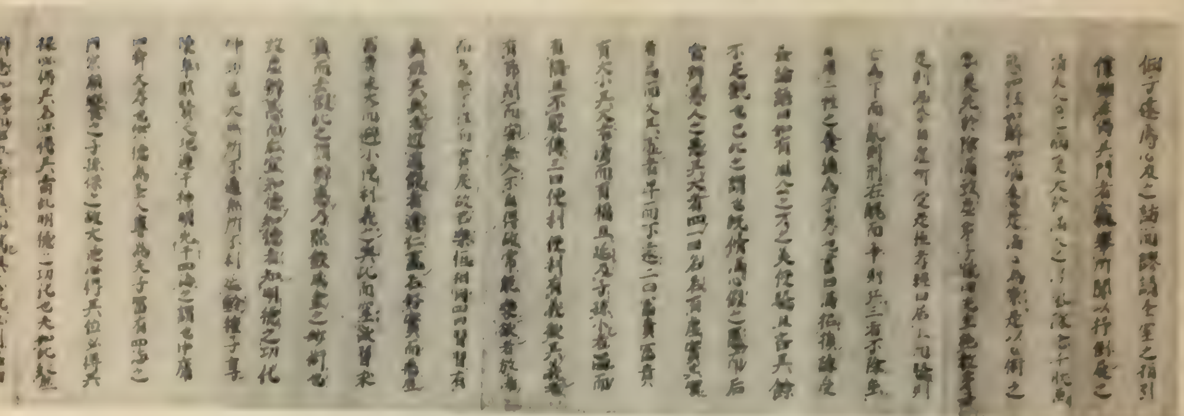
（特記したるものの外玆に掲げたる書軸類は凡て確信を以て鑑定し得たる先生の眞蹟のみなり。）

一、贈正四位藤樹先生眞像……（卷首）
一、陽明學時代の教學綱領「致良知」……（卷首）
一、縣社藤樹神社……（卷首）
一、藤樹書院……（卷首）
一、藤樹神社々寶先生眞蹟（一軸六種）……（目次―解題）
一、以物觀物、四句訣及誠意圖釋並手澤本二種、門人戸田孫助正度傳來藤樹先生眞蹟本……（〃）
一、格物致知……（四六―四七）
一、愼獨……（〃）
一、黄鳥畫贊……（〃）
一、附點孝弟論……（〃）
一、誠意並乙酉歳旦詩二種及聖經、癸未之歳旦並送森村氏……（九四―九五）
一、辛巳歳旦詩……（〃）
一、參拜太神宮準祝詞其の他二……（〃）
一、孝弟論寫本（小川氏本）……（〃）
一、送中川子……（〃）
一、丁亥正月吉詩……（〃）
一、孔夫子尊號……（〃）
一、某年元旦作・答西銘疑義……（〃）

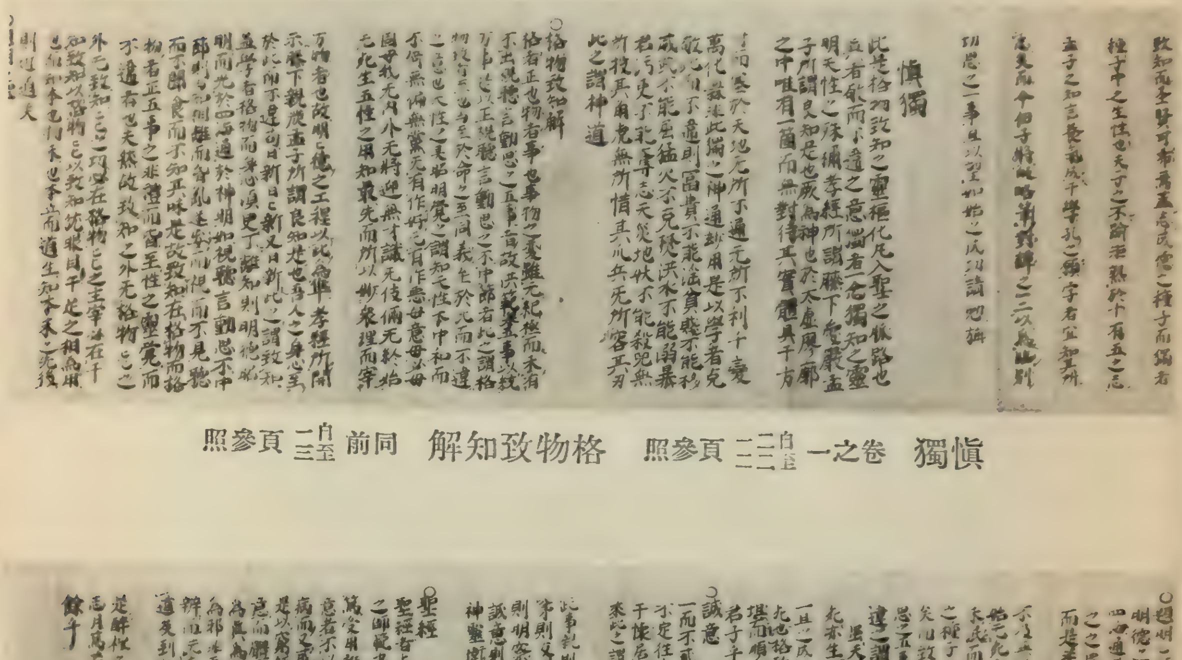
一、朱子學時代の教學綱領「藤樹規」……（一三四―一三五）
一、學舍座右戒……（〃）
一、送横山子並餞熊澤子……（二一〇―二一一）
一、送山田子……（〃）
一、中……（〃）
一、吾……（〃）
一、學術便蒙……（〃）
一、大學啓蒙（斷片）……（〃）
一、主なる全書本（其の一）九種……（二五〇―二五一）
一、主なる全書本（其の二）九種……（〃）
一、主なる全書本（其の三）九種……（五七六―五七七）
一、大學序說（敬寫本）……（〃）
一、四書合一圖說（同上）……（〃）
一、大學朱子序圖說及敬寫並眞蹟補筐……（〃）
一、五性圖說（二葉）……（六七四―六七五）
一、五性圖說（全書岡田氏本）……（〃）
一、明德圖說……（〃）
一、持敬圖說及圖解（稿本）……（〃）
一、先生自作の萩塗竹と易卦圖片……（〃）
一、（易卦圖）（六葉）……（七〇七―七一七）

第一册目次終

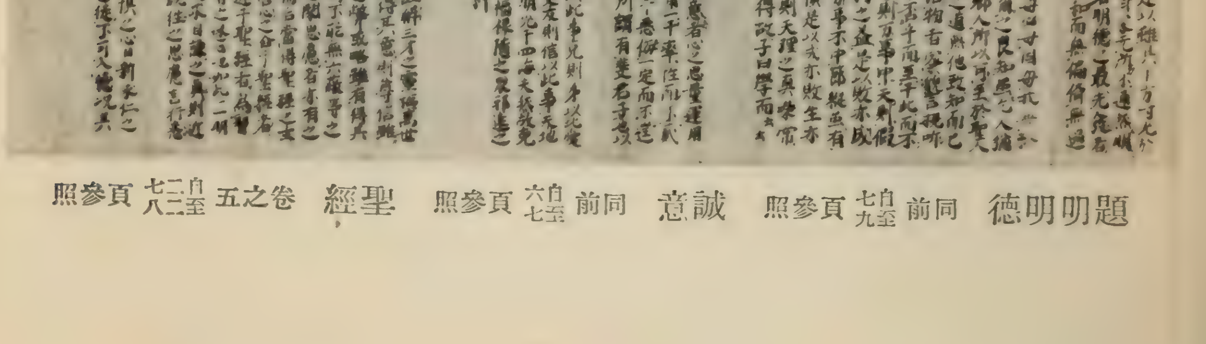
藤樹神社々寳先生眞蹟一軸　（大阪市外石切町　吉川又平氏寄贈）



送佃子　卷之四　自二〇至二二頁參照

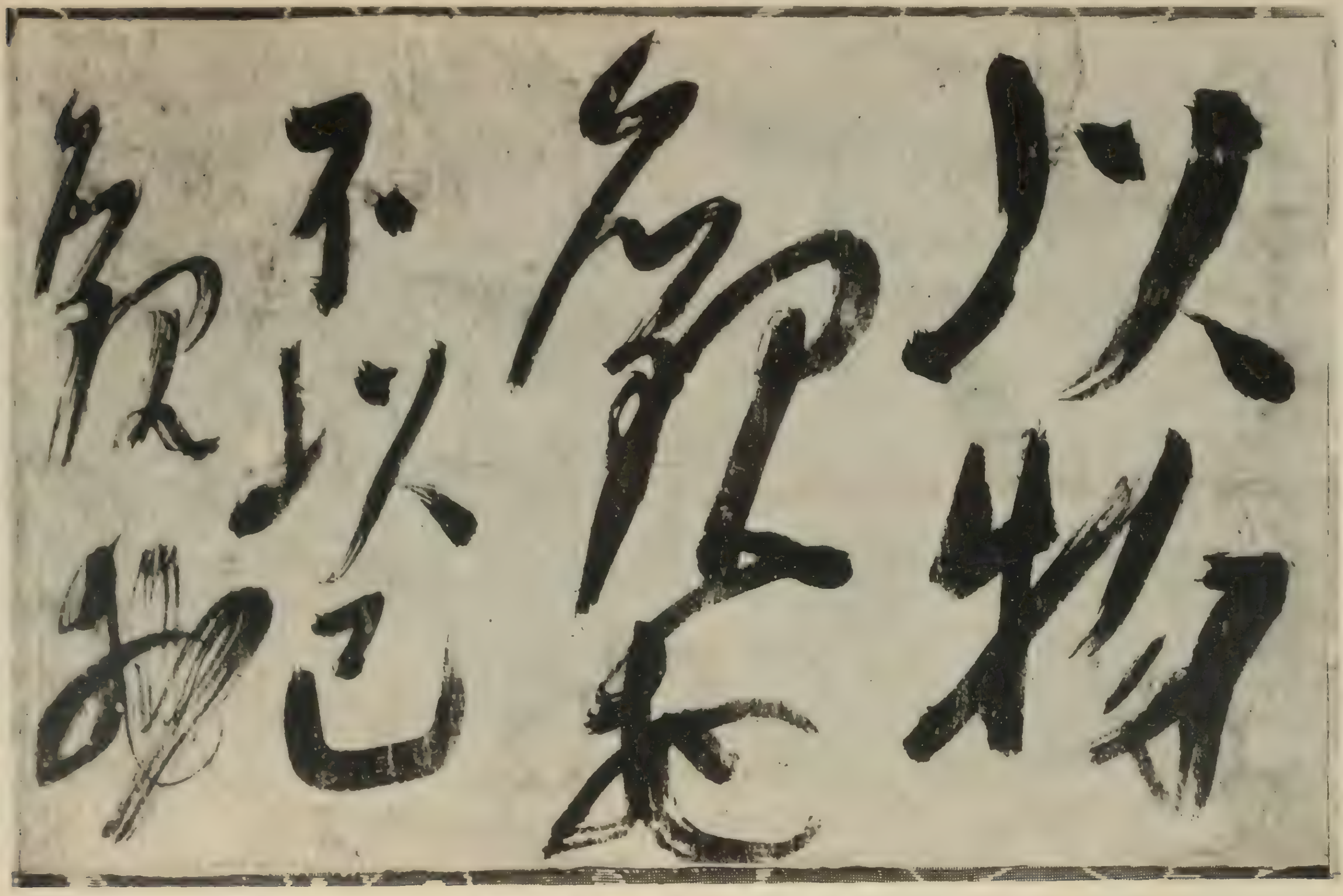


愼獨　卷之一　自二二至二三頁參照　　格物致知解　同前　自二至三頁參照



題明明德　同前　自七至九頁參照　　誠意　同前　自六至七頁參照　　聖經　卷之五　自二七至二八頁參照

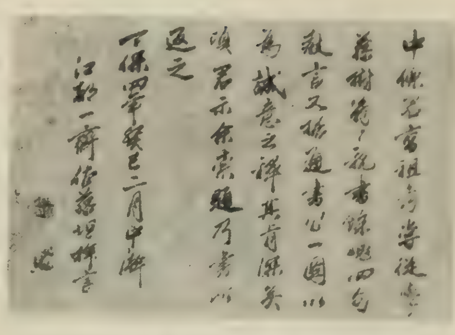
以物觀物（第一行と第三行眞蹟）（合作）（邵康節・皇極經世書の文）



藤樹先生遺墨帖附録「眞蹟攷」後文第十二項參照

（滋賀縣立藤樹高等女學校藏）

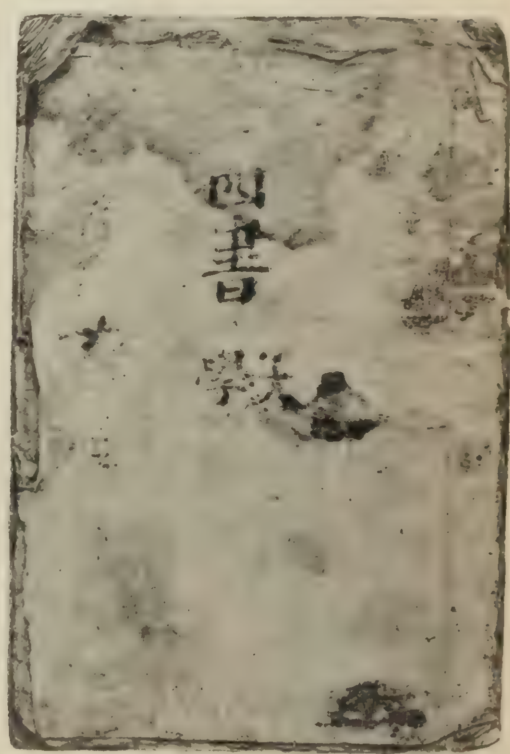
四句訣並誠意圖釋



第二冊卷之十四中庸續解解題第五項參照

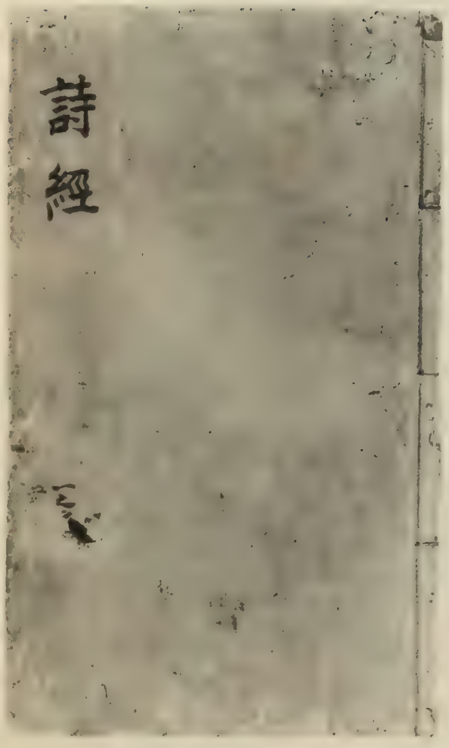
（東正堂翁主幹雜誌陽明學所載）

藤樹先生手澤本二種



（藤樹神社社司　小川秀和氏藏）

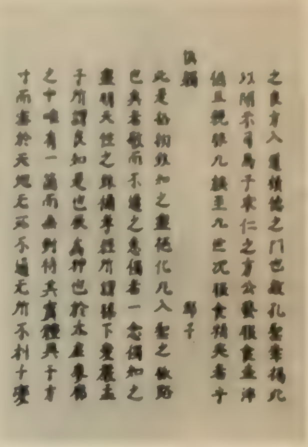
藤樹先生遺墨帖　附錄「眞蹟攷」後文第十二項參照

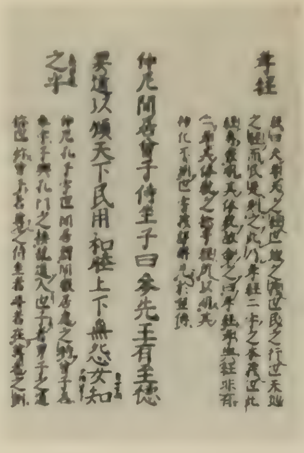


（藤樹書院藏）

門人戸田孫助正慶傳來藤樹先生眞蹟（伊豫新谷香渡富子夫人藏）

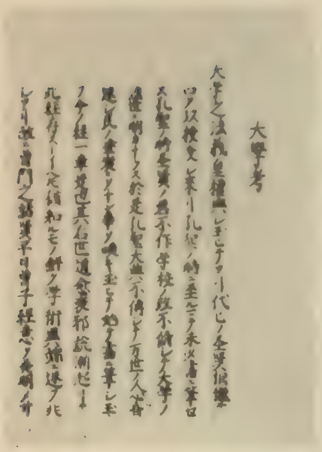
卷頭 增補 再刊の辭（三四頁以下）參照

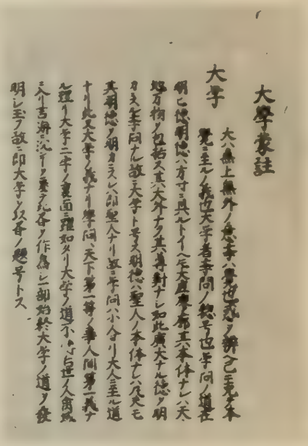

經解（詩・文・書・雜著、長篇和歌並倭書迄ニ岡村子ーを含む）


孝經

仲尼閒居曾子侍坐子曰參先王有至德要道以順天下民用和睦上下無怨汝知之乎

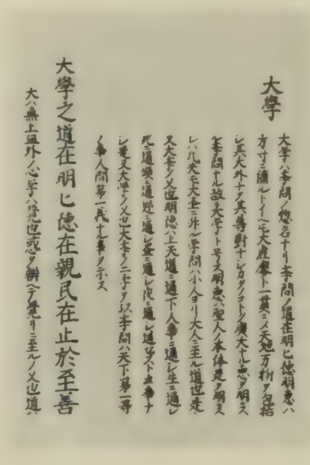
孝經啓蒙


大學考


大學蒙註

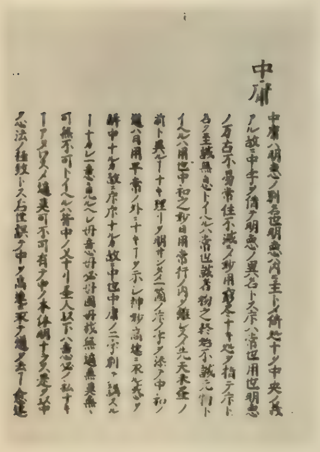
大學

大學蒙註

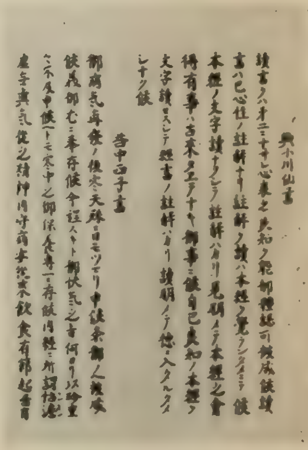

大學

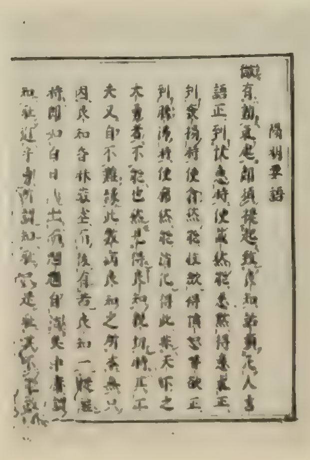
大學之道在明明德在親民在止於至善

大學解

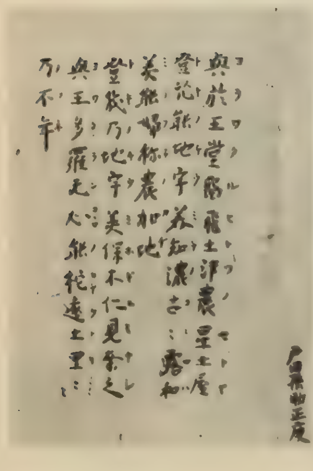

中庸

中庸解


國字牘


陽明要語

陽明要語


戸田孫助筆牘

經解　解題並凡例

解　題

一

本卷は四書五經等に見ゆる要語にして思想上特に重大なる關係を有するものに就き、藤樹先生が詳に其の經義を闡明せられたるものにして、後に出づる經解成書例へば孝經啓蒙・鄕黨啓蒙等が一の經書全般に涉りて其の經義を解說し思想を開拓せられたるものなると異なり、此は斷片的の經語を借り來りて修德の要領を說示せられたるものなり。又下編雜著に見ゆる各種德目の內容が先生時々の思索體驗の餘に出でし創作なると異り、此は經書中の成語について、各〻其の微言大義を發明せられたるものなり。而して此の卷の各篇は、其の內容上より觀て先生が朱子學より王學に轉換せられたる晚年の作に出づるもの多きが如く、經解成書等比較的內容の纏りたる大作が三十四五歲以前の作に係り、其の後先生易簀に至る五六年間の傳記の上に見ゆる著作としては、僅に大學考・大學解・鑑草等を數ふるに止り、此の間先生が萬世の爲に太平を開くの槪を示されし述作の、先生としては比較的少數なることの訝かしく思はるゝ點なきに非ざるも、一度本卷の內容を詳玩すれば、其處には確に此の期間の作に出づるもの最も多きを發見すべく、隨つて量に於てさまで大なりと謂ふべからずと雖も、其の實質に至りては、一として修德上極めて貴重なる材料ならざるは無く、又新に本全集に編入したる古本大學全解・中庸續解等と共に年譜並に行狀等に見ゆる以外の先生の傳記及び學術の變遷を知るに必須な

る知識を提示する資料ならざるは莫し。

二

吾人人間は天帝の所産なりとは、先生の深き信仰なり。實に天帝は人間の父母にして、又其の君師なり。されば吾等は君親に事ふる道を以て之に敬事せざるべからず。而して能く親に事ふる道は善く己が身を修むるに在るが如く、能く天帝に事ふる道も亦大學の所謂至善に止るにあり（欽崇天道）。至善とは何ぞや。先生以爲らく人の時處位に應じて善處する本性を謂ふ。止とは先生が特に重視せられたる所のものにして、人の本性は萬欲紛擾の際にも、尚且寂然として定止せるもの、中庸の所謂未發の中卽ち是れなり。艮背適應の條下にも背は不見未發の所なり。故に以て中の象となすとも謂ひ、又艮は中の象、止の義、睹ざるの地とも謂はる。されば自反以て昏迷の見を破し、愼獨以て神明の域に達し、此等定止の本性に復歸すること學者の第一義にして、吾人安心立命の樞軸なり（知止・自反・愼獨）。既に定止の本性に復歸し、中和の狀態に到達して、靜に自己の本性を諦觀すれば、其處に愛敬の源泉混々として盡きざるものあるを發見すべく、此等の至情を長養體得すれば、萬物を化育する天意亦此の愛敬に外ならざるを知るべく、これやがて天帝に敬事する所以ならざるは無し（愛敬）。

三

思ふに天帝が人間の本性として吾人に賦與したるもの、これを明德と謂ふ。或は之を親愛と謂ふも可なり。又之を至善と名くるも妨げず。一體にして名を異にするのみ。されば天より受けたる明德を修めて之を自己に昭明にすることは、其の影響の及ぶ所、やがて天下の人民を親愛して之を自己に同

化する所以なり。天下の人民を親愛して之を自己に同化するは、天性の至善を保持して失墜せざる所以なり。然り而して天性の至善を保持して失墜せざるは、これやがて天人合一の樞機なり（三綱領）。而して先生によれば、明德の最も先づ發する者卽ち知なり。此の知は是非善惡を照すべき明鑑にして、孟子の所謂良知これなり（明明德）。大學の致知格物の知は正に此を指し、而して致は至るなり。此に至つて違はざるの謂なり。學問の道は他なし、心良知の狀態に至つて去らず、陽明の所謂致良知の工夫を積むに在り。然らば致知の工夫は之を如何にずるか。先生以爲らく天下の人事窮極するところなしと雖も、要するに吾人五官の作用卽ち視聽言動思に基かざるはなし。されば良知の命ずる處に從つて之に違逆するところ無からんと欲すれば、須らく視聽言動思の五事、道に違ふことなきやう心掛くべし。これを格物と言ふ。蓋し格とは正すなり、物とは事なり。五事の不正を正して其の正に復るの義なり。既に五事の不正を正して其の正に復れば、凡そ天下の事一として可ならざるはなし（格物。致知）。これ正に王學に轉換せられたる時代に於ける先生の思想を示すものにして（王陽明の大學古本序並大學問參照）理性論の立場に立たるゝものと謂ふべく、大學の致知格物を解するに、經驗論の立場に立脚せる朱子とその趣を異にせる點なり。試みに致レ知在レ格レ物に對する朱子所說の大要を見るに、前述の如く先生が致を至るとし、知を良知とし、格を正すとし、物を事と解するに反し、朱子は致を推極也とし、知は猶識のごとしとし吾の知識を推極して、其の知る所盡さゞる無きを欲すと解し、又格を至るなりとし、物は猶事のごとしとし、事物の理を窮至して、其の極まる處到らざる無きを欲するなりと解す。朱子以爲らく心の發する所をして過なからしめんとするには、必ず先づ事の是非善惡を識別する知識あり、且つ其の知る所

六

篠原氏の見たりと稱する全書岡田氏本は、その中文集四漢文書簡・文集五雜著の部分一冊のみ予等編纂委員の用ひたるものと完全に一致す。其の他は脚注によりて之を觀れば、一見前記三種の何れにも屬せざるが如くなれども、實は篠原氏の記入を誤りしものに過ぎず。詳言すれば篠原氏は初め岡田氏一本を以て全書岡田氏本なりと思ひ、之に基いて全書某字に作ると註記を施し居たるも、後に至りて岡田氏一本の全書本に非ざるに氣附き、終に其の態度を一本某字に作ると改むるに至りたるも、猶初の部分を通じて一本某字に作ると書き改むるに及ばざりしものゝ如し。

門人原田氏の家に傳來し、今も滋賀縣高島郡大溝町原田知近氏の藏有に係る「藤樹先生艸稿集」と稱する一冊の寫本あり。その載するところ本卷經解の部分のみならず、第二卷詩第三卷文第四卷書、第五卷雜著及び倭歌倭文書翰等を含む。諸處參考するに足るものあり。今書名のみを附して研究の栞となす。

元祿二年己巳原刻、寬政元年己酉再板に係る心學文集乾坤二冊あり。藤樹蕃山兩先生の文を載すれども、明人の著作を誤り加へて直に兩先生の作となせる等、本文の考究に缺くる處尠からず。且つ篠原氏既に參考して諸所註記したるものあれば、今復引用するところなし。

本年に入りて藤樹書院が名古屋市其中堂書店より購入したる書に「藤樹先生文集」なる天地人三冊の寫本あり。此は全部漢文集のみにして、其の內容は別に記すべき特色あるものに非ざれども、其の編次は岡田氏及び篠原氏等の修したる全書本と全く一致せず。古くより前記艸稿集及び此の如き形式

のもの存したるものにつき、岡田氏等が之を整理して各〻其の定形となしたるか、或は岡田氏等の編纂と獨立に此の如きもの出で來りしか、其の邊の事情審かにするを得ず。

凡例

一、材料排列の順序は、全書岡本氏本に據る。これ岡本氏本が全集全體の分類其の要を得たるのみならず。各標目の如きも一二の例外を除き大體に於て原本の眞を傳ふるもの多く、且つ後人改竄の迹なきものゝ如くなるに由る。

一、各標目は岡田氏本により、その本文は主として篠原氏本に據る。これ岡田氏本には各標目の下に題注なく、又正文中に脚注もなし、篠原氏本には題注・脚注倶に有りて、參考に資するに足るもの多ければなり。

一、頭注は特記せざる限り、編者之を記入したれども、題注及び脚注は前記の如く全部篠原氏本による。但し岡本氏本にのみありし部分は附するに（　）を以てす。

一、本經解中にある篠原氏の引用せる草果と拾遺本と藤樹文集淵氏本、全書志村仲昌本とは、今之を見るに由なし。

一、前述の如く篠原氏本を底稿とし、對校の爲め、左記の數書其の他眞蹟を參照したり。（底本の性質については卷首編纂總則に詳記したれば、就いて參看せられたし。）

（一）岡田季誠氏自筆全書（本卷の部分白文）

（二）同　上　別　本白文

（三）岡　田　氏　一　本岡田之印の藏書印あるもの、本巻の部分諸處に訓點あり。

昭和三年戊辰四月一日

加　藤　盛　一　謹　識

「伊洲國香渡富子夫人所藏尊門戸田正度傳來藤夫子眞蹟ニ載此文。題首有浮子三字。參看眞蹟目次並卷首內刊之記。」

標目舊本作格物致知解。眞蹟同。今標目從之。全書同。田氏本下準之。

川上岡田氏自筆全書遺ニ副不字。亦係同氏之筆。眞蹟有不字。而五事下添加片字ニ文字。

致至也出於儀禮聘禮・禮記祭義鄭注及土氏大學問等。

諸眞蹟音訓如字。訓不爲去。今從之。

不倚訓讀唯眞蹟所附。

「參　藤樹先生遺墨帖附錄眞蹟攷ニ。以下同。」

藤樹先生全集　卷之一

文集一　經解（年次不詳）

格物致知。

全書無解字。今從草果。○按二首共晚作。然後人所類纂。而非一時作也。

格者正也。物者事也。事物之變雖無紀極。而未有出視聽言動思之五事者。故洪範擧五事。以統萬事。是以正視聽言動思之不中節者。此之謂格物。致者至也。與至於命之至同義。至於此而不違之意也。意草果作義。天性之靈昭明覺之謂知。天性本中和而不倚。無偏無黨。無有作好。無有作惡。毋意・毋必・毋固・毋我。無內外。無將迎。無才識。無伎倆。無終始。無死生。五性

所以眞蹟傍訓所字ノ下ロノ二字ヲ送ル。先生ニアリテハ以テ……所ト讀マシムル例特ニ多シ。〔蓋シ先生手澤永正古鈔本大學ノ訓讀ニ本ヅク。〕

日日新全書一本無。岡田氏自筆全書同氏自筆別本眞蹟並有。

須臾ノ下不字眞蹟寸ノ字ヲ送ル。時ノ字先生多クハ上ノ字ヲ送ル。今タマ〳〵此字アリ。

在格物下岡田氏一本脫而格物三字。

在于知三字底本作在于致知四字。全書三本俱作在于知。並無致字。而底本亦自係追記攙入。眞蹟亦無致字。文理當然。今改。

之用。知最先。知一作和。非是。而所以妙衆理、而宰萬物者也。故明明德、之工程。以此爲準。孝經所開示膝下親嚴、孟子所謂良知是也。吾人之身心。至於此而不違。苟日新。日日新。又日新。全書無日日新三字。此之謂致知。蓋學者格物、而身心須臾不離知、則明德昭明、而光於四海、通於神明、如視聽言動思不中節、則與知相離、而昏亂迷妄。而視而不見、聽而不聞、食而不知其味、是故致知在格物。而格物者、正五事之非禮、而皆至性之靈覺。而不違者也。夫然故致知之外。無格物。格物之外。無致知。致知之功。必在格物。格物之主宰。必在于知。致知以格物。格物以致知。猶眼目手足之相爲用也。而知本也。物末也。本立而道

復三本皆同。

此三本並作是。

謂下全書一本脫一致知。

外上全書及別本並無之字。

生。知本末之先後，則近道矣。

格物致知。此止見全書。

物者事也。洪範所謂貌言視聽思，五事是也。格者正也。正其不正，而復其正之義也。復舊作後。今以別本正之。五事中節之謂正。不中節之謂不正。節者自然之天則。所謂知也。知者下愚而不息之天機。孟子所謂良知此也。此一作是。致者至也。五事不離良知之謂致知。致知之功。在格物。格物之主宰。良知是也。是故格物之外。無致知之工夫。致知之功。在格物。猶言五事不離知之功在五事上用也。此是千古不易之學脈·入聖之正路。善得其竅可也。

底本標目作致知格物。此是係舊大洲藩主子爵加藤泰秋氏所藏眞蹟。可惜大正十二年九月一日東都大震災之際。歸烏有云。今據寫眞訂之。由是則篠原氏之疑團。釋然氷解矣。亦足以知全書之可尊。而拾遺本之不可從。〔本冊四六—七頁插圖參照〕

兩養眞蹟並作飬。以立命也作曰立命也。虛無全書一本作無爲。眞蹟全書及別本並作虛無。素問亦然。

篠眞蹟作惪。

格物致知。

性命雙修，妙術。○此篇据拾遺本。不著篇名。即併本注性命雙修，妙術六字。大書致知格物下。倶在正文所以養性以立命也後。又別界行以書恬澹虛無數語。愚疑此篇乃先生一時走筆偶爾書之者。未始就題命意。蓋若拾遺。必覩其藁。即便錄之。所以不著篇名。不移一字也。如夫修全書者。意難無篇名。故特裂之以置其首。爾姑從全書以俟知者。

艮其背，不獲其身，行其庭，不見其人。非禮勿視，非禮勿聽，非禮勿言。非禮勿動。所以養性，以立命，也。拾遺無也字。恬澹虛無。虛無全書作無爲。非是。○拾遺本注恬安靜也。澹朴素也。虛湛然無物也。無窅然莫測也。眞氣從之。精神內守。病安從來。飲食有節。飲食一作食飲。非是。起居有常。不妄作勞。所以脩命，以養性，也。拾遺無也字。

誠意。

此亦晚作。故草果卷末載之。

誠者本心之實德。所謂赤子之心・孩提之愛敬・當下不昧之

以眞蹟作レ目。以下準レ之。

爾無他全書及別本眞蹟並作レ無レ佗。格物別本同。二本眞蹟並作二格致一。文理亦當レ從二後者一。而已下全書一本無二矣字一。照全書一本作レ昭。淨二本眞蹟並作レ淨。全書一本似二清字一而非。

良知此也。草果無之字。此一作是。意者。凡心之實體。好惡之凝滯於物。草果無於物二字。非是。是非之素定於迹者。所謂適莫此也。以誠爲寶鑑。而照於鬼窟。則意我之魍魎。無所逃匿。以誠爲主將。攻伐賊巢。則意我之奸雄。不能出一籌。依著這工程。而無間斷。則鬼窟復靈臺。賊巢做安宅。天君泰然。五官敬事。八荒在我闥。四海運我掌。此之謂誠意。意誠也。蓋凡心昏迷顚倒錯亂。雖無紀極。究竟其病根。歸著意我一路。故明明德之功。無他。誠意而已。誠意之功。無他。格物而已矣。物草果作致。夫自欺者。意之運用卜度也。以誠照察而禁止自欺。照全書作昭。則意我淨盡。淨全書作清。而本體誠斯立矣。所謂格致工程是也。初學之時。於五事上不省察。

格物三本眞蹟並作格致。與草果合。文理亦當然。

總三本眞蹟並作物。

是三本眞蹟皆不作旨。

傳首下三本眞蹟並無章字。單擧云々亦見于古本大學全解。

哉三本皆作乎。眞蹟作哉。

底本合下文誠意二章爲一。今從岡田氏本之次。

則不能識得意知之辨。故誠意后說格物。物草果作致。以示用力下手之實地。聖賢教人千言萬語。總歸于誠意一路。舍此更無別事可做。無別路可走。路一作事。非是。所謂一貫宗是也。是疑旨誤。大學傳者。慮后學誠意外別求格致之功。故傳首章單擧誠意而以愼獨爲要領。又恐就意裏面而求誠。故以毋自欺解誠意二字之義。厥旨深矣。仁也哉。哉全書作乎。

誠意。藤樹文集題注與田邊子。

這箇是善惡之關。以人十己千之功。可急々透得了。

誠意。

一而不貳。實而不欺之謂誠。意者心之思量運用不定往來

傳下眞蹟全書及別本並無二而字
遺古往字
有斐君子詩衛風淇澳篇及大學

佑眞蹟作レ祐、而附ニ片字サイワイシ五字。衆下三本俱有ニ之字。

眞蹟亦有ニ題字一。

太虛全書及別本並作ニ大虛
無所不通訓讀今從ニ眞蹟一。
在上眞蹟有ニ只字一。

念也。心之思量運用。一于率性。而不貳于懷居，實于愛敬。而不欺于惡侮。而一定而不遑來。此之謂誠意。誠意，而不已。則所謂有斐君子也。以此，事親則孝。以此，事君則忠。以此，事兄則，弟。以此，愛弟，則友。以此，帥妻，則義。以此，交友則信。以此，事天地則明察。孝弟之至。通于神明。光於四海。夫然。故克誠意，則人皆敬之。天道佑之。福祿隨之。衆邪遠之。神靈衞之，所作必成。無所不利。

明明德。全書下同。明上藤樹文集淵氏本有題字。

明德之全體充塞于太虛。是以雖具于方寸。光於四海。通於神明。平天下，治國，齊家。無所不通。拾遺本載止此。然明之，之要在致知

不屑蹴爾之良知孟子告子章句上。所以可三字當在乃字下。

衆眞蹟作率。

格物（在上一有只字。）知者明德之最先發者。而是非之鑑也。其體段中和而無偏倚。無過不及。無將迎。無內外。毋意·毋必·毋固·毋我。無終始。無死生。無加損。不屑蹴爾之良知。雖乞人猶未泯。而況其餘乎。此乃自鄉人所以可至於聖人之種子脈路也。是故學問之道。無他致知而已矣。而致知之工程。在格物。格物者。察貌言視聽思之五事。常不離德惠乎否乎。而至于此而不違之謂也。克存此而常惺々則萬事中天則。假饒雖失眼前之利。必得不朽之益。是以敗亦成。死亦生也。失此而不索則萬事不中節。縱雖有一旦之成。其中必有無窮之損。是以成亦敗。生亦死也。格致之功。日新而不息。則天理之眞樂。常

子曰下眞蹟作學而云々君子乎七字。

大虛全書一本作太虛。

而已下全書一本無矣字。

坦蕩々而順境逆境無入而不自得。故子曰。學而時習之。不亦說乎。有朋自遠方來。不亦樂乎。人不知而不慍。不亦君子乎。晩作。

明明德。此特單引魯論。不著一語。蓋欲使人讀之有立明々德之志弗已也。

譬如平地。雖覆一簣。進吾往也。

明德。

本與大虛同體。故天地萬物盡包在明德裏面。聖人明德明。故與天地合其德。與日月合其明。與鬼神合其吉凶。學問之道無他。明明德而已矣。

明德。

无咎三本並無。

應接下三本並無物字。似可從。〔香渡家藏眞蹟本有附點。今改從。〕

坎離交泰心之本體也。故命之曰明德。明字從日從月。月爲坎日爲離。縣象著明。莫大乎日月。明德之義。眞哉。至哉。大哉。

艮其背。不獲其身。行其庭。不見其人。无咎。凡三首。亦非一時作也。

艮者居其所而不遷之意。背者中和不倚不易〔見(戶)〕之象。易草果作見。不獲其身者。謂不顧厥身利害存亡。如遺失然也。庭者接物應事之地。行其庭者。謂對應接〔物〕之境也。物上恐脫事字。全書無物字。不見其人者。謂不見人之不是。而盡吾可行之道也。蓋凡夫之溺於財色也。不顧其身利害存亡。如遺失然也。君子之於中和。猶小人之於財色。故全體精神內守。而無一毫滲漏。而艮其背。是

源・其三本皆同。不作原・厥。

是以下三本皆無聖人以三字。

艮背心法、載在性理會通。

以於其身利害存亡如遺失然也。所謂逐獸者不見山。攫金，而不見市人，此厥心專在獸金上。故於山與人也。見而不見。君子之心。亦專在中和。故於人之不是也。見而不見。必盡其道。夫財與色。雖禍機之所伏。而見其可欲。則如彼。況中和之爲德也。有無上大樂。而百福之源乎。源全書作原。福與樂。小人之所甚希也。若見其可欲。其全書作厥。不獲其身。不見其人，雖小人豈難乎哉只昏迷而不見其可欲之實，而已。是以聖人以德與色對算。一無聖人二字。非是。草果無與字。而常提撕警覺。其意可知矣。

艮其背。不獲其身。行其庭。不見其人。无咎。

右千聖心法之秘妙。林子發明未得其眞，林兆恩著艮背心法。林子以背

全書一本無一體二字。

爲洗心之水。水有凝氷之變。與火有炎焦之變相對。是以其說未瑩。背止之象也。神水神火交泰。既濟之妙竅。所謂背也。是以艮其背。則得無我之本然。而無焦火凝氷之變。未知是也否。

艮其背。不獲其身。行其庭。不見其人。无咎。藤樹文集注丁亥作。

背者中之象。止之義。不睹之地。故以爲天性之象。兼山爲艮。不遷不變。莫止於山。而兼之。故以爲工夫之準則。蓋人之昏迷顚倒。生于形氣之私。故以不獲其身。示艮背之效。且以明萬物一體之本心。一無一體二字。非是。庭者人倫交會之地。故以行其庭爲應接之象。無事靜坐。雖惺々而存養不固。則不能對境而

者三本並無。底本亦係追記插入。

不墮落也。其墮落必在由人。一無其字。非是。故揭不見其人一句以示時習喫緊之工程。

艮背敵應。

艮山也。山不動不變。而隨時而見其色。故以爲執中之象。背不見未發之所。故以爲中之象。存天性之靈明。而不爲境遇所遷。不爲情欲所汚。不爲才識所昏。此之謂艮背。以陽應陽以陰應陰爲敵應。應事接物。無意必固我之私。以物應物。中節不與。此之謂敵應。艮背敵應。中庸所謂致中和。天地位焉。萬物育焉者。是也。

人心惟危。道心惟微。惟精惟一。允執厥中。

之字三本並在功字下。

底本標目曰。論養氣。題注曰。按此篇語多不可曉。但以有質問字攷之。是必答門人問目者。亦少作也。諸本皆無篇名。今且著以論養氣三字云。正文曰。原質問。注曰。按

人心道心二句。所以開示所用精一之功、實地也。之字全書在功字下。也作一。非是。惟精者、所謂博學・審問・愼思・明辨、所以辨意欲之惑、而求本體之精實也。一無所以辨三字。非是。惟一者、所謂篤行。所以克去適莫之私、而立不倚之大本也。精一則允執厥中矣。精一而后又非有執中。一層工夫。執中一言簡奧。故揭精一之功程、以便學者之擇執而已。精一亦是一箇工程。非兩般工夫。所謂惟一是惟精主意。惟精是惟一工夫也。

公孫丑問曰。何謂浩然之氣。曰。難言也。其爲氣也。至大至剛。以直養而無害。則塞于天地之閒。其爲氣也配義與道。無是餒也。

拾遺有此三字。今從之。然恐理倘有脱誤等字。正文曰。孟子曰。注曰。今書又無此三字。正文公孫丑問曰。何謂浩然之氣云々。

性也間一本無有字。今書及別本亦係追記挿入。

合同上一本無出入二字。

位苦今書一本及別本作泣若。自筆今書初

按素問曰。（此以下係先生說。拾遺無按字。非是。）恬澹虛無。眞氣從之。靈樞曰。眞氣者。所受于天。與穀氣并而充身者也。以此考之。浩然之氣。指靈素所謂眞氣而言。穀氣者。宗榮衞之氣。人身知覺運用之機也。知愚賢不肖所同有也。眞氣者。唯君子之所能。而小人之所不能有也。（子下一無之字。非是。）無是之是。（上是字一作之。非是。）指浩然之眞氣而言也。餒言穀氣無精神而不能立也。蓋浩然之眞氣。在大虛則配天道。在人身則配仁義。本乘呼吸氣機而出入合同無閒者也。然人欲熾而天理滅。則義氣共如亡。故與大虛之道氣隔絶而不能相通。（一無氣字。）而榮衞饑乏而不能立。疑懼畏縮。而位苦轉深。（位苦一作泣若。皆不可曉。必有訛誤。後同。）此之謂鄙夫。以直養而恬澹虛無。

作位若。後傍記泣字。並無作苦者。後同。通融三本並作過融。詩篇送熊澤子。亦有心々相通融語。

則義氣相通融合同。而塞乎天地之閒。故榮衞有精神。而心不動。一無心字。非是。位苦盡滅而得天理之眞樂。此之謂大人也。

保合大和。乃利貞。

學而入。得這裡。則體大造。而超小刼。超一作起。非是。故不以天地之成毀。而成毀。獲大身。而忘小形。故不以軀殼之存亡。而存亡。此中大有眞樂。盎然春融。熙然宇泰。既利且貞。活潑潑地。即易之黃中通理。正位居體。美在其中。暢于四肢。發于事業。美之至也。此乃儒教中不死之神方。乃一作則。非是。長生之正術。不可與守空寂而坐枯禪。弄精魂而希升擧者。同日而語也。是以子曰。朝聞道。夕死可矣。按自體大造至同日而語也。乃翁問答所引性理會通中語。但有小異爾。

違失也。

曰衍文。

格下藤原氏本有思字。

子曰。人之生也直。罔之生也幸而免。

體認這聖謨。吾儕皆是如中風不語癱瘓之症。雖未到死。而無人底樣子。則與死相違。豈遠乎哉。

子曰。天下有道。丘不與易也。

此則孔門之家法。（則一作是。）有志者。宜知所法也。

子曰。毋意。毋必。毋固。毋我。

這箇即明德之本然。人々固有。豈素王之所獨得乎。

神之格。不可度思。矧可射思。

右能體認。可知所畏。悟則左右逢鬼神。

子曰。六十而耳順。

只上全書及別本有二者字一。

第二第三下三本並無二言字一。

以可全書及別本顛倒。可レ從。全書一本無二可字一。

順者無所違逆之謂。耳順只擧一端而已。聖賢人心悉化合道心。是以遍體無所違逆可體認。

大學之道。在明明德、在親民、在止於至善。

明德也親民也至善也。一體而異名。何爲而有三言之條分乎。覺后覺之言。不如此。不足以發其蒙。譬如相師之道也第一言擧天人合一之靈樞所與物異之名。以示敎學之不可無。而不可不勉也第二言擧人性感通精實處。以示初學見性之標的也第三言擧純粹自然一貫之名。以示親民之本眞精髓、而明德愛欲愛之辨。而又爲好新奇玄妙者下鍼砭也能得此意。則志立而以可入德。此或作其。非是。

三本所載亦止此。

致中和。係早藤貞卿家藏眞蹟。

吾人之心。於天下無適無莫時。則中和之本體也。此本體。譬如明鏡止水。適莫意念。譬如鏡裡塵水上波。是以克去意念塵波。（念下草果有之字。）則當下致中和矣。（全書草果所載止此。）中和者。靜不倚。不偏無黨。無有作好。無有作惡。毋意毋必毋固毋我。則安身立命之地。心有所倚。或將或迎。或逐或願乎外。則邪火漫焰。爲病狂喪心之徒。而爲之失父子君臣夫婦長幼朋友之道。違溫良恭儉讓。至其大者。則可作亂。歟能致中和無間斷。則可至道千乘之國。敬事而信。節用而愛人。使民以時。歟不可不察焉。

允執厥中。

天行健。中庸無息無倚之本體。而吾心之固有也。允者不貳而無間斷之意。執者不失本然之義也。如有一毫之意必固我。則必於境遇之順逆。有所滯礙。而失中庸無息無倚之本心。造次顚沛。須戒愼恐懼。

愼獨。

這箇是入聖之正路。出入之活機。換骨靈方。顚神妙術也。若不於此下手。則高者入狂。卑者入凡。學者宜體察。

愼獨。

此是入聖通神之大竅。換骨顚神之妙法也。法一作方。如不依著。

顚神下全書一本無之字。

靈符疑解在本全集則後出。

東京安井小太郎氏所藏藤樹先生心學錄作與淺野子。

不違下三本並無之字。底本亦係追記插入。眞蹟有。

妙用神通全書一本作妙用神通。後朱書倒之。眞蹟全書及別本並作神通妙用。

這箇心法。則或入霸。入俗學。或歸仙。歸佛。八景用此克去（八景）既見靈符疑解後。而一貫之室自此入。宜體察。（察一作認。）

愼獨。

此是格物致知之靈樞。化凡入聖之脈路也。愼者敬而不違之意。獨者一念獨知之靈明。天性之殊稱。孝經所謂膝下愛嚴。孟子所謂良知是也。厥爲神也。於大虛廖廓之中唯有一箇。而無對待。其實體具于方寸。而塞于天地。無所不通。無所不利。千變萬化。無非此獨之妙用神通。（妙用神通一作神通妙用。）是以學者克敬此而不違。則富貴不能淫。貧賤不能移。威武不能屈。猛火不能焚。洪水不能溺。暴君汙吏不能奪志。天災地妖不能

神道三本並作神通。眞蹟作神道。

謂下聖全書一本及別本作性。

殺兒無所投其角，虎無所措其爪，兵無所容其刄，此之謂神道。（道當作通。）

愼獨。

古曰，仰走者蹎。心願外，徒以足走。而不以愼獨走，故也。奔走如此。況與世交關務生業乎。如不愼獨以與世交關則與仰走者同顚倒蹎。而其害十倍于仰走。可戒。

愼獨。

大陽一出。魍魎自消。

愼獨。（四字爲句，而非韻語。）

心之良知。斯之謂聖。（聖一作性。非是。）當下自在。聖凡一性。（性拾遺作人）

昏昧三本並作昏迷

大虛全書及別本作太虛。眞蹟亦同。人生三本皆作人心。眞蹟作人生。

消全書及別本作融。

生非是。微有動氣。依愼獨名。提撕警覺。警拾遺作驚。非是。大陽已出。昏昧自明。昧全書作迷。雲行雨施。天日自若。自拾遺作首。非是。

愼獨。

大虛廖廓之皇上帝。太一元神之一。厥靈光稟受人生之月窟。生或作心。今從小川氏所藏眞蹟。而妙用一貫。無所倚。無所待。無思無爲。活潑々地。獨往獨來者。謂之獨。所謂惟一・一德・一貫・獨樂。皆是也。

自反。

焦火卽滅。凝氷倏消。

自反。或韻或否。蓋修辭未竟者。

僅願乎外。邪火妄動。胸中焦熱。煩燥不恬。一念自

兩樂集註竝五敎反。

王三本皆作主。

全書一本頭注曰。錦繡段開仲見詩語。

反。水升火降。焦熱倏消。清涼滿腔。大本時立。達道溥通。大上眞樂。自在此中。

仁者樂山智者樂水。樂音洛。

這箇樂。便是孔顏至樂。而無上無對。人々倶足。不以聖凡加損。是以入得這裏。則自天子以至庶人。壹是皆有南面王樂。世人捨此。求浮雲之俗樂。惑之甚也。學者宜知所戒也。

愛敬。

春到人間無棄物。宋開靖春日詩無名。野艸依人緑。有種山花稱意紅。春到人間無弃物。人心安得似東風。按先生摘録是詩。而題云愛敬者。蓋使人深思而得之也。

愛敬。五字爲句。絶無押韻。亦晩作。

一貫、全書作一實。恐誤。
全書一本及別本每句空白一字。

不顯、參看詩篇送中川子頭注。
立志、全書作立心。
方、全書作法。

性譬如飴餹。愛敬厥滋味。泥名義所異。勿迷一貫理。貫一作當空。非是。下自在心。温々而惺々。純一而無雜。愛敬眞實性。克存養不失。見入井赤子。惻隱自發見。於此示仁義。孟子活手段。毋認發動氣。宜知寂然止。知止而有定。靜安而能慮。自得本來性。

按、自知止至此三句。諸本竝作神動而無動。靜時亦無靜二句。今從全書。

執此謂執中。躋此謂躋聖。

至善。

道之素位趣時者。曰至善。子曰。邦有道。危言危行。邦無道。危行言孫。此亦至善之意耶。

衣錦尚絅。

此是不顯惟德之象。初學立志之要方。方藤樹文集淵氏本作法。依著此法。

光上三本並無之字。底本亦係追記挿入。

己之三本並無。

全書一本頭注曰。人心異本作身。但別人之筆。

索三本並作察。

緡底本作緡。眞蹟畫贊同。

云々以下畫贊作於止知其所止。可以人而不如鳥乎。

安心全書畫贊並作安身。

則驕吝之邪滿日消。謙德（此下藤樹文集淵氏本有心字。）之光輝日新。而高明中庸之神域。可企及也。

　爲己爲人。

大虚廖廓。吾人之本體也。故天地萬物無非己。是以爲己者。爲天地神明立心。脩萬物一貫之己（己之二字從藤樹文集補。）之謂也。爲人者。爲人間世立心。求人心之便利之謂也。（心藤樹文集作身。）約而言之。專畏天之謂爲己。專畏人之謂爲人。宜體認玩索。

　緡蠻黄鳥。止于丘隅。子曰云々。

止者吾人安心立命之靈樞也。大學傳引用之主意。宜體察焉。

主忠信。

方寸之中。此主人公不在則滿腔子爲狐狸妖魔之窠窟。（爲一作成。）視聽言動。顛倒錯亂。可笑可惡。（惡一作悲。）然世間病此狂者不尠。故人以爲常不怪。噫。一念自反自覺。當此時白日青天妖魅潛消。

知止。

止者未發之中。易所謂背是也。此止也。造化之樞紐。品彙之根柢。而雖萬欲紛擾之中。寂然而未嘗變動。故命之曰止。學問之道。以知止爲先。故大學示明明德之功程。揭此爲第一義。其意最喫緊矣。蓋止者。人々固有學問之眞種子也。雖下

凡廿字三本並有。

此全書作是。一本作之。

兩大虛全書及別本並作太虛。

自下三本皆有有字。

愚未嘗亡。只昏迷而不自知而已。不知則離。離則心氣紛擾。而無所定止也。一念自反。自不知則離至此凡廿字全書志郎氏本悉脫。今以別本補之。知止而不離。則心氣定。而日日極高明。所謂定・靜・安・慮・得此也。此一作之。今從別本。夫然故學者之知止也。猶耕者之藝苗也。學者之學習也。猶耕者之耘苗也。尊德性道問學斯之謂也。如不知止而文學。猶不藝苗而耘也。豈有自得之期乎哉。

一貫。

大虛三才總一貫。此中自大上眞樂教此之謂眞教。學此之謂眞學。或以有無立異見。或分大虛三才論眞假。此之謂異端。異端見識雖高而如卓越市井之俗腸。究竟來其違道也

々々三本並作云々恐非。

均焉。

　欽崇天道。

遠而天地之外。近而一身之中隱微幽獨之中。中上恐脫之字。細微之事。無不有天道。天道者造我形。與我性。與我衣食者也。民之父母也。君也。以事君親之道。事之。則此之謂欽崇。欽崇之道。無他。止於至善而已。欽崇則與五福。不欽崇則降六極。惟影響。可畏。々々。

　藏密。

上天之載。無聲無臭。

（附）附點孝弟論　解題並凡例

解題

委員小川氏白文孝弟論寫本壹冊を藏せり。同氏曰く、其の筆蹟稍、藤樹先生の筆に似たりと。大正十年の頃編者滋賀縣立今津中學校に在り。初めて此の書を讀むに文氣より言ふも日本人特に藤樹先生の文に似ず。且つ語錄體の文章にして古文と趣を異にす。必ず宋明人の作なるべきを思ひ之を人に質すに明示するものなし。後偶、東京の某書肆に托して明人顏茂猷の著廸吉錄一帙五本を獲たり。就いて之を覽るに豈に圖らんや、孝弟論が此の書中の一篇ならんとは。是に於て宿疑始めて解け、吾が先生が門人に有用の書の謄寫を勸めらるゝと共に、又自ら新渡の書（著者顏茂猷の友人林釬の敍に崇禎四年冬季十日とみゆ。即ち先生二十四歳の時にして余の藏せる廸吉錄重訂本の開板は先生三十二歳の時に當る。）につき之を實行せられたるを知るを得たり。内容を檢討するに孝弟論上に於ては此の身雙親より得來り、父母によつて始めて生長するを得、凡て渾然一體をなせり。成長するに及んで漸く親と隔離し來り、父母亦之を助長し加ふるに外誘之を惑はしめ、習心習氣遂に萬物一體の仁心を失はしむ。若しよく仁が人心にして孝弟が仁根第一欝勃の處なるを知つて此の根を養はゞ此の身能く長生を得、凡を脱して聖と成ること須臾の間に在りとなし、總論中に於ては人稍、長ずるに及んで抗拒傲慢的の根苗が挾持報仇をなすを述べ、所謂其の人と爲り孝弟にして上を犯すを好むものなし、上を犯すを好まずして亂を作すを好むもの未だこれ有らざるの意を詳說し、又幼時洒掃應對等に從事することによつて雄心猛氣を消除するを得るの效果を說き、總論下に入りて、我も父母も天地ももと皆

一團のものなり。若し唯形體情識のみを以て奉養するは孝子と謂ふべからず。よく靈明の上より親を認めて之に事ふべし。かくて天地同根萬物同體の眞原を把へて一體となるを得べしとす。此の下不孝不弟論あり。廸吉錄には不孝不弟之報と題せらるゝものにして、良知を充せば是れ大孝の基苗なれども、只習心習氣あつて自ら化する能はず。このゆゑに舊に依つて不孝となるを說き、次に大小不孝となる原因各四種を說く。其の內容に於て先生の愛讀に値したること知るべし。されど此の小川氏藏有寫本は內容より言ふも先生の著作に非ず。又筆蹟を熟察するも先生の眞筆と認むるを得ず。然るに愛媛縣大洲町に別に眞筆孝弟論あり。是は假名交り文にして所藏者近藤規矩丸氏は門外不出として愛玩せりと聞く。至孝天性に出づる先生が其の體驗によつて孝道を論述せらる。內容必ず見るべきものあらんを想ひ、切に一見せんことを望み居たり。編者は大正十一年秋十一月仲旬愛媛縣下に於ける先生の遺跡遺物を探訪せんと欲し、先づ松山市に入り、ついで喜多郡內子町・天神村・新谷町等を經て大洲町に入るや、同地の藤樹會長下井小太郎翁及び藏有者の親戚和田保氏を介して秘籍の拜觀を懇請したり。然るに故あつて原本を覽るを得ず。懇切なる和田氏の斡旋により漸く和田氏の宅に於て嚴正に校合せられたりと謂ふ實物同大の副本を覽るを得たり。襟を正して之に對すれば、胸臆自ら高鳴らざるを得ず。取る手も遲しと表紙一枚を開けば漢文體にして、豫て假名交り文なりと傳聞したるは訓點の附せらるゝを意味したるを知る。座に在るの人編者の顏を注視し、且つ言ふ書後に青野宜齋・川田爲谿兩儒の識語ありと。全體を通覽するに猶曩きの廸吉錄の文のみ。兩儒の鑒識亦言及する所あらず。されど之を熟覽するに諸種の點に於て注意すべきものあり。例へば

(一) 本文は古文に非ずして宋明語錄體の文なり。常の師あることなく一生獨學にて終始せられたる先生が、此の如き特異の文體のものを如何にして知解せられたるかを知るは興味ある問題なり。即ち俗語に近き措辭を含む語句、例へば甚麼根苗若くは煞甚鬬合の如きあり。之に對して甚麼にはイヅレノ煞甚にはハナハタの振假名を附せらる。又俗語に於て二字の間に不の字を介在せしめて以て上下兩字を否定とするものあり。之に對する附點として、例へば他人處ノ展ハ三不二出手ヲ一とせらるゝもの不孝不弟論の初の部分に見ゆ。此の如きは先生の時文を理解せられし程度をトすべき好資料なり。

(二) 開卷第一行に有子說ケ孝弟ハ爲二仁之本一トと見ゆ。程朱によれば、孝弟は仁を爲すの本と讀む。之に反し先生は此に見ゆる如く仁の本たりと讀下す。程朱の思想より言へば仁は本體にして孝弟は其の作用なり。從つて孝弟が仁の本たりと爲すを得ず。故に孝弟は仁を爲すの端緒となす。古義學者は古典に於て此の如き本體若くは作用と言ふが如き深遠なる考なしとして、亦仁の本たりと讀めども、其の意味する處は先生と同じからず。孝弟の德を以て宇宙の根本原理と爲す先生にありては孝弟を仁と異名同體のものと見る。否孝弟こそ實に仁の本質的なるものと見る。（孝弟論の本文にも孝弟は便ち是れ仁根の第一透露第一勃欝の處と言はる。）我が足利學校傳來の義疏本によれば爲の字無し。かくて有子の本義より言へば古義學者の讀み方並に其の解釋が最も妥當なりとなすべきも、思想上おのゝ區別する處あるを知るべきなり。

(三) 所以の二字は先生中年の作眞蹟五性圖說、晩年の作眞蹟格物致知解・孝經啓蒙初稿本に徵すれば何れも以テ――所と附點せらるゝもの多きこと著しく人目を牽く。之と同時に晩年の作大學蒙註の如きは明に所以をユヘ若くはユヱンと讀ましめたる確證あり。纔つて本書を見るに、開卷第一丁には

所以の字にユヘの振假名用ひらるゝあり。又以テ——所と讀ましめたる處數箇所あり。又孝弟總論中の部分には、此の二字にコノユヘニと振假名せらるゝあり。三樣の讀み方全備するを知る。

（四）假定若くは既定の條件を示す場合に用ひらるゝ則の字を先生にありては上に來る動詞と共にレバ則チと讀むの例無きに非ざれども スルトキハ則チと讀まるゝの例特に多し。本書も亦此の例に洩れず。擇ニ着スレバ孝弟ニ則チの例あると共に、對ニ兄弟ニ則チ又は進ニ食物ニ則チの如き例特に多きを見る。尚茲にトキの合字としてトキの字の用ひらるゝことも注意すべき點にして、此はすの字と共に先生にありては極めて罕に見る用例にして多くはトと＼との合字ㄊを用ひらる。

かくて副本のみにても啓發せらるゝ處多きを知り得たれば、原本を拜觀せんとする編者の憧憬抑ふべからず。本書を以て先生の作と爲すは當らざれども、若し原本にして猶先生の遺筆に相違無くば、注意すべき點多々あり。卽ち內容に於て先生晩年の思想との關係を知り、又語錄體の文章に對する先生の理解の程度をトし、且つ我が國に於ける漢文訓讀法沿革調査の一資料と爲すに足るべきを語り、且つ若し許さるべくば歸任の後書留小包郵送の方法にて借覽したき旨和田氏を通じて懇請し置きたり。歸任一兩日にして和田氏より謝絕の飛信あり、遂に許容せらるゝ處とならざりしを惜しむと同時に、竊に他日に期する處ありき。偶、委員小川氏古記錄調査の要あり。大正十二年秋十一月大洲町に出張せる時前記下井翁及び時の愛媛縣立大洲中學校長上田光曦氏大洲町長足達儀國氏等の盡力に依り漸く和田氏の宅にて原本の拜觀を許諾せられたり。然れども謄寫することは許されず。遺憾に堪へざりしが、後數日を經て近藤氏自ら右眞蹟本を携へて小川氏の宿處に來り快諾の旨を答へ且つ副本の貸與を

も許されたり。小川氏驚喜措く能はず、上田校長の援助を得て入念に對校し茲に漸く素願を遂ぐるを得たり。編者此の時職を奉じて高知高等學校にあり。小川氏歸途迂回し之を示さる。小川氏歸郷の後副本を底本として之を謄寫し且つ前記白文寫本及び明版の書と對校して之を余が許に送付せり。

是と前後して編者大洲町に講演の爲出張せること再度に及び、且つ前記下井上田兩氏及び同町醫師松井正作氏等の多大の盡力ありしにも拘らず、終に原本拜見の機會を得ず、物足らぬ感を以て空しく歸來するを常とせり。然るに全集發行の進捗するや、幸に祕藏者近藤氏は之を全集中に登載することを許諾せられたれば、乃ち原本の寫眞一葉の送附を請ひ、茲に初めて其の文字が先生の眞蹟に相違なきことを確むるを得たり。是に於て小川氏の筆寫本を底稿とし、更に昭和三年六月九日編者は近藤氏を其の宅に訪ひ眞蹟の拜觀と對校とを許され、翌十日全日を以て入念に校合して歸洛し、直に剞劂氏に附したるもの卽ち斯篇なり。

本年八十二歳の高齢者たる下井翁曰く、三輪執齋先生が王陽明の畫像と藤樹先生の眞筆とを川田雄琴先生に托して、大洲明倫堂の寶物となさしめたりと傳へらるゝ藤樹先生の眞筆とは蓋し斯篇の眞蹟を指すものゝ如し。而して現藏有者近藤規矩丸氏の實父が藩の句讀師たりし關係上廢藩の後明倫堂寶物の分與を得て今日に及びたるものならんと。尙近藤氏の言によれば、孝悌論函書の隸書は舊大洲藩の書家仁井泰藏氏の揮毫に係るものならんかと謂はる。

凡例

一、原本は一頁九行十八字詰の細書に係り、全體を通じて二十二枚卽ち四十四頁の眞蹟にして、後に

青野宜齋・川田爲谿兩氏の跋文各二頁と共に合計四十八頁のものなり。今全部を採入す。

一、本篇は前記解題に述べたる如く、漢文の附點法に於て特に注意すべきもの多ければ、全部をコロタイプ版に附して挿入したしと考へしも、愛藏者の容るゝ所とならず。止むなく活字を以て茲に之を轉載することゝなしたり。今藤樹先生が自ら命名せられたる書名孝弟論の上に附點の二字を冠して廸吉錄中の篇名と區別し、且つ此の書を本全集に採揖したる理由の說明に代ふ。

一、漢文の附點の方法に於て、

1　兩字の間に結合符―を附するに當つて、中央若くは向つて右方に附したるものは兩字を音讀するを表はし、向つて左方に附したるものは之を訓讀するを表はされたること古來一般の用例の如し。又兩字を結合するものに非ずして單に一字を音讀する時には其の文字の向つて右側に―の記號を附し、訓讀する時には其の文字の向つて左の肩若くは腰の部分に―の記號を附せらる。今何れも原本のまゝに從ふ。

2　反點・送假名の施し方極めて粗にして明かに誤記と目すべきもの稍〻多けれども、今は全部底本のまゝとし、敢て訂正の筆を加へず。但し特に甚しきものは頭註に之を示して、印刷の誤植に非ざるを示す。

一、對校の用に供したるものに小川氏所藏寫本と明版廸吉錄との兩書あり。前者は眞蹟本と內容同一にして、處々文字の出入あるのみ。固より先生の眞筆に非ず、又附點もなし。後者は五冊の大本にして、孝弟總論上孝弟論中孝弟總論下と不孝不弟論とは、各其の一篇たるに止り、且つ原書に在り

ては不孝不弟論は不孝不弟之報として孝弟論よりも前出せり。

一、前記兩書との對校の結果は正文の右側に傍記し、又小川氏本には(小)又版本には(版)の略符を用ひて其の異同を示す。なほ右側に△印を附したる文字は對校本に此等の文字無きを示す。

一、最初より入念に筆寫し又嚴重に原眞蹟本と對校したるも、自宅に在りて心静かに編纂したるものと異り、且つ內容頗る煩雜にして、印刷の技術の上に於ても或は一二の過誤無きを保せず。委しくは前記近藤氏藏有の眞蹟本に就いて精究せられたし。

一、最後に編者は近藤氏が貴重なる資料を提供し、以て本全集に一大光彩を添加せしめられたる厚意を深謝すると共に、前記數氏が不斷の努力を以て、終に此の事あるを得しめられたる盡力に對し滿腔の敬意を表す。

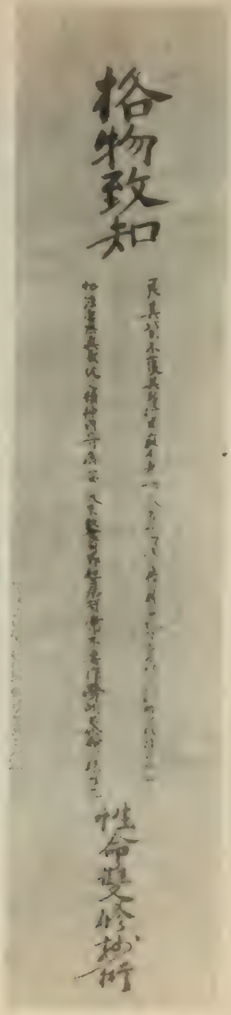
昭和三年戊辰六月十五日　　加藤盛一謹識

〔再刊補遺〕

湖東益田家傳來の書に「孝弟論、不孝弟論全」一冊の寫本あり。內容は近藤氏藏有の眞蹟と同一にして、小川本の白文なると異なり、全文に渉りて返點及び送假名附せらる。附點の方法眞蹟に酷似しつゝ多少異同ありて、參考と爲すに足る。今對校して特に注意すべき一二の例を頭注に追記す。尙小川氏は先生の手澤に係る「大學永正古鈔本」一冊を祕藏す。先生の附點が此の鈔本に本づくところ多きを知る。例へば所以の二字「以テ：：所」と附點するが如き其の一例なり。因みに前記大學永正古鈔本は國寶的價値あるものにて、其の手澤本たるを確認し得たる次

第は、藤樹研究第三卷第二號祖橋京都だよりに題簽の影印を添へて紹介しおきたり。因みに最近の發見に屬する門人戸田孫助傳來の藤樹先生眞筆附點「陽明要語」は近藤氏藏「孝弟論」と好一對のものなり。（藤陰）

格物致知

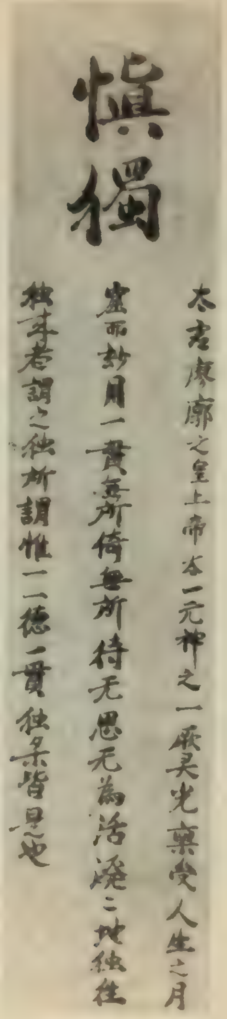


（藤樹先生贈位奉告祭記念帖所載）

卷之一・四頁參照

慎獨

（舊大洲藩主　子爵　加藤泰秋氏舊藏）

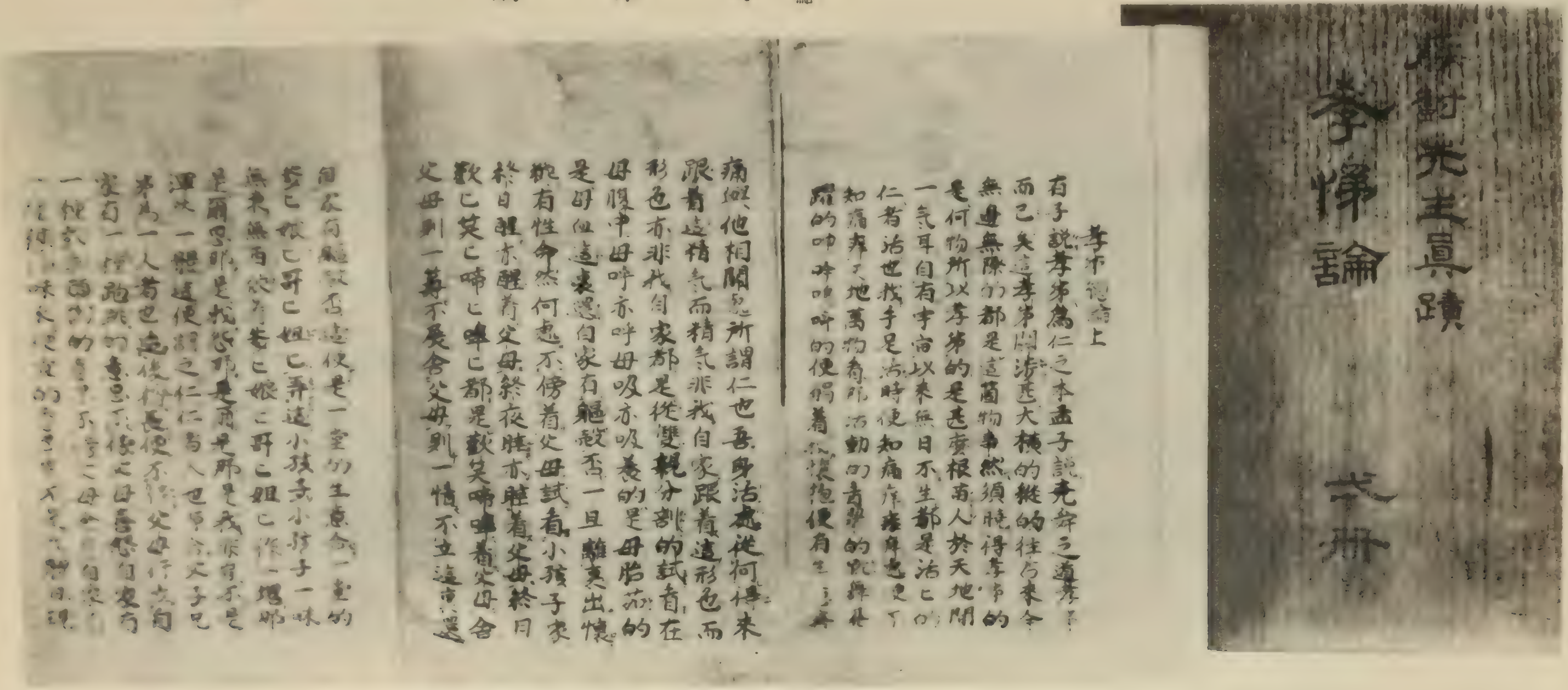


（滋賀縣滋賀郡伊香立村字途中　藤田信好氏藏）

同前二三頁參照

黃鳥畫贊　卷之一・二六頁參照

（愛媛縣喜多郡新谷町　河內字十郎氏藏）



（愛媛縣喜多郡大洲町　近藤規矩丸氏藏）

訓點唯底本所附。不敢加除。

分剖小川氏本誤作分部。以下準之。

(附)附點 孝弟論

孝弟總論(小) 上

有子說孝弟爲仁之本孟子說堯舜之道孝弟而已矣這孝弟關涉甚大橫的縱的往古來今無邊無際的都是這箇物事然須曉得孝弟的是何物所以孝弟的是甚麼根苗人於天地間一氣耳自有宇宙以來無日不生都是活匕的仁者活也我手足活時便知痛痒痿痺處便不知痛痒天地萬物看那活動的青翠的跳舞飛躍的呻吟嗚呌的便觸着我懷抱便有生意疼痛與他相關處所謂仁也吾身活處從何得來跟着這精氣而精氣非我自家跟着這形色而形色亦非我自家都是從雙親分剖(部(小))的試看在母腹

ヒ々同。他書眞蹟亦屢見此字。

一體及稍字訓讀姑從底本所附。

要版本及小川氏本並作耍。當從。佳味版本小川氏本並作佳味。蓋字誤耳。下文不誤。

中母呼亦呼母吸亦吸養的是母胎茹的是母血這裏還自家有軀殼否一旦離裏出懷纔有性命然何處不傍着父母試看小孩子家終日醒亦醒着父母終夜睡亦睡着父母終日歡ヒ笑ヒ啼ヒ嘷ヒ都是歡笑啼嘷着父母舍父母則一籌不展舍父母則一情不立這裏還自家有軀殼否這便是一堂的生意合一堂的爹ヒ娘ヒ哥ヒ姐ヒ弄這小孩子小孩子一味無東無西依着爹ヒ娘ヒ哥ヒ姐ヒ作一塊那是爾恩那是我怨那是爾是那是我非豈不是渾然一體這便謂之仁仁者人也原合父子兄弟爲一人者也迨後稍長便不傍父母行立自家有一種跑跳的意思不傍父母喜怒自家有一種戲耍（要(小・版)）頑抝的意思不傍父母食息自家有一種想佳味求便宜的意思豈不是我體日現漸ヒ與親隔了而

挑他下閩本並有惟恐他三字。當從。

作[illegible]從　度不所關

爲父母者復不鄙破此機挑他撥他不入了，世情不成了我相凡事則譽之曰我的乖匕我的乖匕此便引動他毀譽根務外根了，他日便成了伐善大勞矜名飾節的氣象，對兄弟則戲之曰這是正兒這是假兒這得我憐這不得我憐，便引動他妬忌根彼我根了，他日便成了妨賢娼嫉同胞不和睦的氣象，遇食物則戲之曰我的要多我的要多，便引動他饞口根貪婪根，了他日便成了爭田爭貨受賄納賕的氣象，遇少有得失哀啼則語之曰誰惹我兒子，我要打他，便引他根戾根恩怨根，了他日便成背公樹黨陰鷙鬪害的氣象，這等氣象漸開漸著，連父母亦不能有其子矣，何也，父母亦不能盡是好言，亦不能盡是憐惜物食，亦不能充量恩情，亦不能無得失也，於是向之所以教其子者皆爲還向父母之具

勘（小・版）

施（小・版）

狠（小・版）

家人父子間便有爾非我是的意思謀事而當而以之自多也一惹物議而曰吾父兄實然也房戶之間笑語之內恩々怨々贏々輸々不可勝道矣是牛季李(小·版)洛朔之黨卽家人而已怨然(小·版)而揖讓爭簒之局自一堂而遂分也而況乎外誘馳之婦言熒惑之子女及僕從慫慂之者哉若是而可爲仁否自家如此而能與他人忘物我一齊順逆否間有一二知義理有志氣的人硬着要孝硬着要弟然無始以來習心習氣難平難釋故百般冲下忽現傲惰根百般奉順忽現變构拘(小·版)根百般推讓忽現我能我會根此根不徹精神氣色倏忽流露出來父子兄弟必有默窺其微者便不能歡々喜々渾然無事也故孝弟是無皮殼的物有皮殼的終鼓舞不上此無皮殼的便會達之天下何也無我也忍辱也善下也不言而飲人以

戌閣本並作戍。當從。

邪閣本並作卯。當從。

和也此皆在一家則一家動在天下則天下動者是故東叫母西靠子一一撞着孝弟則必思所以撫兪之老無告幼顚連一一撞着孝弟則必思所以終養之行役之人邊戍之士不遑將父將母一一撞着孝弟則必思所以休恤之鯤鮞胎殀將雛翼邪草英木秀帶根靠芽一一撞着孝弟則必思所以濡沫之全護之如此種匕靈活眞个是叫天天靈叫地地應以至於蠻貊異類有血性者莫不在其聯絡中也何有不仁嘗觀古來孝子或至鷙鳥不攫鷙獸不搏景星慶雲祥徵瑞應非其順德致然哉天地以順動故日月不過而四時不忒聖人以順動則刑罸（罰(小・版)）清而民服一叚（段(小・版)）和豫氣象殷薦上帝而仁天地配祖考而孝父母者都在于此此外更有何事孟子云堯舜孝弟而已矣又說學問之道無他求其放心而

已矣兩而已矣煞甚關合若孝弟該不得求放心求放心該不得孝弟便非一了百當也緣心不是圓腔子原是藹然樂豫的原是惻然疼痛的原是油然潑活的天霽地朗心眼具開天昏地黑愁乱默々是天地一心也草夭木喬鳥濯麀伏無限欣喜顛崖墮闕凶創夭折無限悽惶是萬物一心也舍此而躭轂便宜利災幸禍便謂之放心卽不然而要譽惡聲的心該愽(博(疑))涉獵的心矜名飾節的心枯槁寂守的心亦謂之放心何也于吾心之生意不屬也故前面分明說仁人心也孝弟便是仁根之第一透露第一勃欝處此處養得根活便枝附葉貫千花萬朶一齊俱森發了如人一身耳聽目視手持足行何者不是一團生意而道家脩養只是神氣上鍊得純守得一自能長生輕擧蓋一處靈時連骨節都靈了孝

弟之於天地民物亦然是亦全身之神氣修養之丹頭也丹頭入手脫凡成聖在須臾間更無調理骨節工夫故嘗爲之轉一語曰學問之道仁而已仁之道孝弟而已此兩而已矣所以貼々合々而無痕迹者也

孝弟論　中

天下之所以紛擾而不靖者只是个強心猛氣勃而爲怒鬭而爲力奔突而爲攻戰爭逐涿鹿之兵七雄之虓闞潢池漁陽之鼙鼓看吹息其間而翻浪乾坤者是甚麼其初總是些々戾氣横在胸臆漸々相觸發起來咽吐不下於是抗拒父兄傲慢長上此抗拒傲慢的根苗便是會挾持官長的便是會椎埋報仇的便是會不△（小補）有逞嘯聚的故易傳曰訟必有衆起不止是訟於官長自家有逞是非爭勝負的心而蹶張横行之勢已見矣堯説丹朱曰嚚訟可乎而禹之戒曰無若丹朱傲究其訟字只一傲字也所以事親而傲必不能孝事長而傲必不能忠治民而傲必不能仁只一傲字

兩本俱作已、當作己

便做成齊惡不才之歸而莫能解救是故君子有大道必驕泰以失之驕泰的人亢高傲慢貴已而賤人是已而非人智已而愚人有甚麼心情計民利病念民疾苦大學一書自齊家以至平天下都不外孝弟慈則驕泰的人分明是不孝不弟不慈也然虽不孝不弟不慈終比別人不同故雖有至剛而不能不爲親者下雖有至戾而不能不爲長者屈此便是天性不可解的試觀不孝的人到人前亦自撿飾些々若使之已坐父立他決定不安又如道他孝則喜道他不孝則怒此亦是人根未斷處此未斷處便是血性所入便可容吾感化所以孝子悌弟于其間一撥即轉如鄭莊公把自家母娘休了穎考叔食肉遺母闕他甚事却便幡然悔悟又如子羔泣親三年未嘗見齒何與成宰政事堂然却成人之兄死

使（小・版）　者（小）

涕字訓讀姑從底本所附。

而子羔爲之衰也此其間不知所以感所以應無形相觸翻動肺腑，正是莫爲之天莫致之命在是前輩施佑兄弟爭田，因與嚴鳳舟次語及產事鳳揮涕不止佑大感悟此等事皆是不可曉的嚴公自家孝友何事管着施家，爲之涕淚縱橫且不知一滴々何以落向施佑（君（小版））肚裏去也大抵天地間有意氣有圭角有筭計的都會抵拒人，無根無蔕無奈何不自知的偏會感動人，任是闤闠間，至愚至賤的人有一个孝子出不大家揄揚他，則大家欽敬他，不則默地負愧他，此敬他，愧他時眞个是戾心平躁心釋一片可掬可憐境界此境界在一家則一家平在天下則天下平上而官長上而君相權力愈大噓吸愈衆又，豈有不盡天下，而孝子之悌弟之者哉故曰一家仁一國興仁，又曰堯舜帥天下以仁而民從之機

君在則禮然云々禮記文王世子文。參看文集三學舍坐右戒。

正在此天下風俗壞時大抵自其子弟時先做壞了人品心術壞時亦自其子弟時先做壞了少有拂戾便容受不下稍有才氣便收拾不入所以一到長成放出無狀來遂不可當古來洒掃應對奉几侍立都是要消除子弟的雄心猛氣使之鞭向入微又如天子之子齒胃（冑（小・版））鳴謙曰君在則禮然父在則禮然長在則禮然此是何等意思天下不患無才幹而患無眞性不患不能爲君父師而患不能爲佳子弟也以子之道君之在匕通是可奉侍可憐惜的意思以弟之道君之在匕通是耕讓畔行讓路的意思昔舜禹之有天下也天下方謳歌之訟獄朝覲之極其薰赫而舜自視不過有虞之窮人耳井廩猶存祗載莫見旻天父母方恨無所控訴而天下已治矣禹自視不過羽山之罪人子耳父痛莫贖洪波驚骨

丹下片字ノ姑從ニ底本所ヲ附。

路逢罪人不覺涙數行下而天下又治矣以至文武之孝莫不皆然彼猶然日朝于王季之寢門三也彼猶然事々關其愾僾僾（个・版）而在匕受其提命也故云事死如事生事亡如事存蓋文武不終於爲人君而終於爲人子也想其惠鮮鰥寡弔民伐暴獨有此前人之心事耿々胸臆間耳彼丹朱之啓明豈其無才然一傲字已結斷天下命根矣此五典百揆所以屬之有鰥氏也

孝弟總(小)論下

凡聖人言孝皆不是小可的事禮記云小孝用力中孝用勞大孝不匱夫子說舜之大孝便說德爲聖人大德受命分明是完天之所生以天事親了須曉得親是何物不是一團血肉之親我所生于親者是何物不是一團血肉之我原是圓陀々光亮々大家作一塊的親亦是這箇天地萬物亦是這箇父母生我一身便要把身所有者畢羅而獻之父母方是聚順若只去用力用勞地(把(小・版))那个粗形相服事而一點空靈眞骨血無邊寶貝却抛下不理可謂孝子乎我事父母又要將父母一肢一節一念一動下至涕唾几杖無不盡情承奉而父母一點空靈眞骨血無邊寶貝却抛下不理

可謂孝子乎故纔說大孝便，是順親養志，順親者順其靈妙之親
也，順其先天未分之親也其汨沒情識中者僞親也養志者養其
大公之志也養其徹地通天胞民，與物之志也其軀殼形骸中者
僞志也然要順親養志，又須誠身，守身守身者守其明善之身也
守其以達德行，達道之身也不然則竭力顧養柔顏侍養亦僞身，
也能認眞身，始能認得眞親故曰不誠乎身不順乎親矣曾子之
身與曾元之身便懸隔了，故所奉諸親者亦，自不同今且以舜孝
王祥觀之，王祥之孝至眞至懇不遺纖力，豈不幾於舜之不思不
勉者若道孝與舜一則王祥便是堯舜了，若道孝與舜一而品地
尙懸，心量尙未完滿又，難說堯舜之道孝弟而已也蓋大舜從靈
明上認親，王祥從郛廓上認親，大舜視瞽瞍便是至神至聖至仁

予(小・版)　殼(版)

〔益田本ハ、就做微有轉念ノ如キ附點アリ。〕

至慈的其要殺我要不使我娶之心都是後來習心其眞心原不
乃爾假饒從其亂命取快一時奉承他習心却把至神至聖至慈
至仁的眞父母結斷了種子於心何堪於性何忍故百般維持百
般挑動果現出眞父母來若王祥臥水（冰(小・版)）等項固是天性篤摯然其
所隨順者情識之父母也亦緣王祥之身未造虞舜地位故所認
亦止此此卽是善之不明也明乎善便完全那靈々活々的隨在
生出自有寸尺如小杖則受大杖則走不告而娶等項非有成法
可摸（模(版)）自家心靈必如是而始快耳自家如是所以服事父母者亦
如是故云事父母幾諫幾者動之微吉之先見者也父母元來只
有一善心則盡屬吉祥善事就做微（タトヒ(小)）有轉念而此善心亦隱々躍
々未肯澌沒向盡此亦是轉凶爲吉之幾事父母者正從此處宛

轉幾未動，挑動（而（版））他幾，甫動接引他，幾有失挽回他，是以心幹心，視無形聽無聲的工課，故不待行事，不從當見志，不從時孝子已費盡心幾矣，惟如是故能，心與之一而未始有違也，如此而誠如此而順，便把親與我聯屬一本之眞原，團々會在這裏，便把天地同根萬物同體之眞原，團々會在這裏，何性命之不周，何位育之不行，何天下事變經權，不在吾靈明斡運中，是謂集百順以貽之親，大舜之所以德爲聖人備福尊養者此也，武周之所以事死如生，事亡如存者，亦此也，此箇是常存的常活的，徹于重玄而貫于靈蠢的，故舜同天之命，而凝天之体（休（小版））以天，事親也，武祀乎其先，而達于郊廟以親，事天也，究竟是一生，字自有天地以來無日不生，親與我都是一，生々相續完着這个生，便把一世有生的物事，都相

觸相動了，方謂之，無忝（版）所生，張子西銘全是發明此意，如王祥之孝，不免是个死法，會不思不勉矣，而未可謂不思而得，不勉而中也，得與中是何物，是那天然活潑的，操無形之規矩，能盡天下之方圓，故云，規矩方圓之至也，聖人人倫之至也，從容中道，聖人也然，既不會得，不會中，則亦謂之，思勉何，也思勉者意也，識也，性眞不全盤捧出，則傍在意識上，用事若動着性諦，雖如舜之號泣怨慕（小・版）不可為人，不可為子，這樣困勉之極，依然不思不勉耳，吾人既不能生而渾全與堯舜一般，當思親所與我是何物，原不是目視耳聽的，空髑髏酒囊飯袋的，臭東西，何堪將此，抵塞糊塗過了，日子，且以此奉其親，也思及此，一躍々出，渾身作汗，便不肯把天下第一等，饒與別人做，自家做得一分，便是孝弟盡得一分，到完々

全々修德備福則舜武爲君之孝與周公爲相之孝孔子素王之孝莫不殊途同歸矣

版本作二不孝不弟之報一。而在二孝弟論前一。

不孝不弟論（小）

天下那有不孝的人，雖有不孝的人，而稱之孝，則喜，稱之不孝，則怒，且愧且人前矜名飾節，未敢如私居之放縱，是亦其良知不汨汨(版)沒處。充此良知，便是大孝基苗，只是習心習氣不能自化，所以依舊不孝也。須知其積習從何而成，毎々沿流不覺不治，剖得明白，則父識所以教子，子識所以自克，譬如攻賊，知賊所在平定有期矣

○小不孝之所以習成者有，四一曰驕寵，爲父母憐憫過甚，常順適他性子，驟而拂之，則便不堪，常讓他便宜，任他佚豫，令之執勞奉養，則便不習，人前出言，稍有過失，父不忍唐突於子，而子乃敢

唐突其父、文行蓺能父譽子、惟恐不在我上、而子必欲父之出我
下、積此驕縱、他人處展不出手、獨父母處展得出手、遂眞謂老成
人無聞知矣、二曰習慣語言粗率慣便敢衝突、動作簡易、慣便敢
放恣、父母分甘絕少、慣遂不復憶其甘旨、父母扶病任苦、慣遂不
復問其痛癢、三曰樂縱見同輩不勝意氣、對雙老而味薄、入私室
千般趣態、映高堂而機窒甚、且明以父子兄弟爲俗物、不樂相對
則豈有孝弟之念繫中而出耶、四曰忘恩記怨、夫恩習久愈忘、怨
習久愈積、人情然也、故一飯見德、習久則饜嗛起、一施感恩、常濟
則多寡生、一迎面見親、累日則猜嫌重、況父母兄弟、生而習之、以
親愛爲固常、且有憂我而獲拂者矣、以訓廸爲耳、且有譽我而
被厭者矣、以任勞庇護極念經營爲平等、且有强預吾事而怒耽

者上數字訓讀姑從ニ底本所ヲ附。

者矣眼前大恩恬然罔識況能推及胎養之勞襁哺之苦弱質驚魂之痛者哉故人情有至顚倒至古怪而不自覺者子之於父母是也不以恩獲怨者鮮矣此數者皆人之習情然亦未嘗無眞性但積久不知其誤耳是宜急々喚醒早々克治時々思量勿謂親心之慈我可自恕勿謂世道之薄我猶勝人小不孝之積漸即爲大不孝可不懼乎

大不孝之所以習成者有四一曰私財々入吾手便爲吾有而在父母手者又謂吾得有之也財足則忘親財乏則覬親求財不得則怨親々不能自養而寄食吾財則又怨親甚且以單父隻子而因財相夷者有矣少長互推而棄親不養者有矣不知身誰之身財誰之財我不帶一財來而襁哺無缺以至今日誰爲者乎乃多

〔⿱本山本誤ツテ妻能顧復得我生活耶ノ如ク附點ス。〕

營幾文財、便欲與吾親較算也二曰戀妻子、々々習狎而父母嚴重也有美味錢財欲以娛妻寵子、有佳會良辰欲以擁妻抱子而悅親之念遂微也不思子爲我子而我爲誰子親子我、而我不顧則我亦、何賴有子哉夫妻和好固是一家樂事然當呱々待哺便溺未分、時豈解戀妻、豈妻能顧復得我、生活耶父母看子、成人得有室家不勝終身之喜乃有婦而親反不得有子耶三曰嫖蕩欲火正熾客誘如狂、有倚廬傷心者不解也家業浪費婦姑勃谿有激聒誚讓者、不辨也懷子、不寐風雨凄長夜之魂垂白、無歡菽水冷半生、之奉、吁嗟狂與幾何忍令有此四曰爭妬天地之大也人猶有憾父母之子衆子、也情豈無偏乃攘臂、爭分側目、奪寵或兄弟、而觭舵不平或姊妹而計較纖悉、護短爭長分、曹伐異相讒蠱

有似孝上兩本並有圈子下準之。

而家道聧積、嗔喜、而孝情薄矣。此四者人之常情、恐孝子不免、而其流遂至于大不孝、吁可惕哉。

有似孝而非孝者。父有過、當幾諫。有愆、當克蓋。若但知順親於情、而不知順親於理。或任其偏僻、而致戾於一家。或聽其恣睢、而取憎於鄉里。或護其陰私、而得罪於天地。其根必起於利親之財、挾親之勢。故從親之欲、而忘親之身、遂成親之惡。孝經以父有爭子爲安身揚名(親(小・版))。不然、卽身膺貴顯、愈揚(揚(小・版))親不義之名。親得安乎。而可謂孝乎。有自謂孝而實非孝者。能服勞、能奉養、而有德色。此亦情之常也。在小姓人家、止此一室、父子朝夕團圞、卽有言語之傷、尋卽消釋、反得眞率盡情。乃士人知書者、其於父或嫌其老、而稱逸以安置之。或憚其腐、而托故以違離之。或見其卑、而借理以衡壓

之，遂致日遠，日疎相對話少意色冷淡而不親更有一種好遊，者捨堂上之樂結友朋之懽異鄕遠省累月窮年覬人膏潤名曰爲貧爲養實則畜子，奉妻，惡得爲孝又有人見爲孝而神見非孝者生亦盡養事亦承歡而備物鮮情絕無眞系〔樂(小・版)〕及死亡之日衾棺盡美，哭踊隨常亦無眞哀覓地安葬竭力費財又爲子孫謀蔭非爲父母求安此神目視之甚明也又有一時稱孝而不能高千古卽能千古傳孝而不能滿一心者其人於前弊一無所犯於孝行無一不周而不〔未(小・版)〕聞大道修身盡性之事尙有缺陷終是墮落遺體莫報親恩故德爲聖人孝斯稱大下此者皆謂不孝子可也爲人子者急須自省切毋自屓〔負(小・版)〕

乃父母之取厭于子孫者則亦有數種一曰迂濶衣冠禮數老人

家不合時宜當思斑白何以常在到有古趣令人愛惜二日惜財纚々持籌禁子孫濫用當思爲誰艱苦日所喫用者是誰所留三日尫弱起止不便扶持維艱當思欲報欨〔劬(小・版)〕勞養兒代老正在此時。四日昏耄言語牽纏重聽蹇澁當思己生之初無知無言爲誰歡弄五日愛憐內外少子推食讓腹偏護太〔大(小)〕甚當思愛及童僕尙應體心況我同氣倫于此處起一厭心暫入不孝而不自知急宣〔宜(小・版)〕回省。

又有前後之間嫡庶之際父母或有偏向而爲子者亦易生嫌怨此當委心付之期于必得歡心而後已韓魏公云父慈而子孝此常事不足道獨父母不慈而子不失孝此古今所以推大舜也大略銷化最急一身脣齒猶有齟齬父子兄弟豈盡如意獨親生兒

女雖有時呵讓有時忽略欠缺過則忘矣而異生者遂執以求備展轉不化我既不化則氣色間不覺拂怒縱百般調娛不能恬如無事時也卑幼尚不能化何況尊長交相責備只怪譴怒在人不知火性堆胸日甚一日事積一事左右近習又相煽蕩以搆鬬其間即欲消遣而不能矣暫時擺脫觸則復起矣猛力過住發乃愈甚矣此仁人于弟不敢曰無怒無怨而曰不藏怒不宿怨蓋無故一拳或能坐受客氣無根故也浸入半句消咽不下猜嫌有種故也乱臣賊子其始皆見君父有不是處微根不除遂至橫決耳豈惟怨怒不可使有宿物即要父母兄弟從天理上行要父母兄弟愛我親我此是好意亦不可肚腸太急着手太重々々則物而不轉矣新愛已生而舊惡猶存貌合可喜而神猜在念一善可揚（揚（小・版））而

以下版本隔數葉在後。

責備不改如此安能化人故化人者先化其心而已其于至親尤所重云

五刑三千而罪莫大不孝王法所誅便是冥律所禁其特甚者則有四等父母待孝尤切而不孝之罪特甚他人焉一曰老二曰病三曰鰥寡四曰貧乏父母當其少壯時食息起居猶能自理暫失顧養尚克安然乃至龍鍾鵠立扶杖易仆寒夜苦寂鐵骨難挨又如偏風久病坐臥不適遺溲叢穢蓆薦可憎子所難奉惟此時親所賴子亦惟此時又如老境失耦寒煖誰問形影相對心話莫提丈夫猶自可嫠婦且奈何就使兒孫滿前耦者耦稚者稚人々鼾睡去个々樂事歸漏聲長處不可問枕邊淚濕與誰同有孝兒孫頗能顧養猶將冷意暫托熱腸不幸而母我者乘慣潵潑姑我者

横面阻絶秖護牛點骨血空博一生凄楚又有撫字財匱婚娶力竭健少年經營肥烘老窮人搔首躊躇望一味以垂涎丐三飡而忍氣夜爨晨炊猶罵閑食紡績抱孫尚咒速死吁身從何來而長養若是童稚時能自拮据活耶此數等之老其寃氣猶足動天爲子孫者益當行孝倍於常兒勸化者亦於斯爲喫緊云

中江氏藤樹先生之所自筆書多矣所謂孝經持敬圖鄉約書簡等是也皆藏于予家各書一語於篇末以欲貽不朽者也于茲焉有書名孝悌論是焉先生用心之書而字法笔畫焉侶于　先師之筆與此於持敬孝經竝看則不可疑者明矣而出於其門生之家因茲彌尊信之而謹書後已嗚呼鄙辭以雖侶漫遺書但爲使來者知所　先生之所自書也旹寳永乙酉秋七月七日

後學

宜齋青埜英正謹題　印

書藤樹先生親寫孝悌論後

余嘗謂藤樹先生以敦厚之性絕倫之識夢寐於王陽明氏有年矣講明其學推衍其說乃竭才窮力同其心術之所至一二緒言以覺後學可謂其勤至矣若夫文字章句之細初不甚用心往々有出乎法度之外者是皆一片婆心也何傷乎故讀先生之書者要在知先生之道不可見其疵瑕此不可不知也中野氏某得先生所親寫孝悌論上下篇請余書其卷後蓋爲鑒證云於是記所嘗謂之意以與之

安永己亥夏六月望

爲谿川田哲謹識

印　印

詩 附贊聯句　解題並凡例

解題

一

本卷は主として先生の詩篇を錄し、附するに贊並に聯句を以てし、卷之十七倭歌が專ら先生の三十一文字を載するものと相對せり。抑も先生四十一年の生涯を通じて僅に一二禪師の指引を受けし外は、常の師あることなく、時亦文運未だ開けず、士として文を讀むは文弱を意味すといふ世の指彈を憚りて、弱年の頃晝は專ら武藝に勤め、夜陰に入りて初めて靜に讀書し修養せられたりと傳へらるゝ程なれば、文辭の如き何人に從つてか之を修むるを得んや。且つ先生の詩文に於ける深く其の意を用ふる處に非ず。詩法に泥まずして唯二十八字を用ふるのみとは、二十六歲の歲旦の詩序にも自ら之を語り給へり。されば特に雕琢を施さず、平仄及び押韻に於て詩法に適格せざるもの多きは寧ろ當然のみ。然れども是を以て直に先生が文藻に短なりとは謂ふべからず。詩はもと心の聲なり。正大の氣象と純潔なる情思とは自ら溢れて、先生の高風和氣を懷はしむるに足るものあり。特に透徹せる想もて道體の眞に味到せられ、發して金玉の聲を成せるものあり。亦以て吾人修德の資とすべきものならざるは莫し。尙本卷に在りて尤も人目を牽くは、先生二十六歲以後殆ど每歲歲旦の詩を見ることこれなり。歲改まり氣新にして靜に天地精微の理を諦觀せらるゝの雅懷は、彼の屠蘇陶醉の快に三元を空費するものと何ぞ霄壤の差あることの甚だしきや。

二

編中先生二十九歲丙子鷄旦の詩

格致誠脩貴日新。　易難先后不彬々。
料知聖學成功地。　氣朔今朝共是春。

を以て先生が此の前年に陽明全書を得て神交り心會すとなすの結果となす藤樹先生行狀の如き說あり。然るに岡田・中村兩年譜によれば、先生が陽明全書を購ひ得られたるは正保元年甲申卽ち先生三十七歲の時の事實となす。若し前說の如くんば、先生が王學に轉換せられたるは而立以前のことゝなる。然れども三十一二歲前後の多數の作に就いて之を檢するに王學思想を基調とするものは絕無にして其のこれあるは三十四五歲の頃よりのことに屬す。特に三十一歲の作原人に多くの先覺の師を擧げて周程張朱の名を示せるに王子の如き全く此の列に在らず。されば陽明全書を得られたるは、多くの傳記の一致して示す如く三十三歲の冬、王龍溪語錄を得て之を讀み、觸發せらるゝこと多きを喜ばれし後のことにして、岡田・中村兩年譜の記する所、恐らく事實の眞を傳ふるものならん。隨つて前記の格物誠脩の詩の如きは別に王學と關係せずして、たゞ學の日に新なるべきを詠ぜられたるものと見るべきか。〔禪寺某士曰く、先生の詩は禪家の偈の呼吸を知解したるものゝ作なりと。〕

先哲像傳によれば、門人熊澤蕃山の歲晚備前に還るを送れる詩として、

舊年無幾日。　何意上旗亭。　送汝雲霄器。　羞吾犬馬齡。
梅花鬢邊白。　楊柳眼中靑。　惆悵滄江上。　西風敎客醒。

を掲ぐ。傑作最も看る可し。然れども果して何に據れるかを審にせず。今採らざるは唯謹むのみ。

三

現存の眞蹟多くは各詩篇別葉に認めらるゝものなれども、時に辛巳之歳大神宮に參拜する詩以下三首列記せらるゝものゝ如きあり。（近江國高島郡水尾村萬木利一氏所藏眞蹟）而も此等の順序が岡田氏本記する所の順序と同一なり。此等の事實より考ふれば、詩篇の如きは季誠氏以前卽先生在世の時既に其の編次を整頓したるものありしやも測り難し。〔前記万木氏の詩篇には先生親ら二七、二八、二九の番號を附せらる。〕

凡例

一、本文及び排列の順序、一に全書岡田氏本に依る。本卷は篠原氏本に在りては第一卷に收錄せられたるものゝ如くなれども、佚して見るに由なし。唯本卷載する所にして、篠原氏本第二卷以後處々に散見するものあり。これらは凡て之を對校して、頭注其の旨を附載しおきたり。

一、他卷の例より推せば、篠原氏本の內容は或は岡田氏本よりも多く、且つ彼此對校研究の結果を註記せるものありしならん。今亡びて傳らず、殊に惜むべし。

一、卷末楊貴妃油銘全書岡田氏別本及び篠原氏本に見えて、岡田氏本に之なし。今篇末に附す。

一、最後の一篇、新に發見確認したる眞蹟によりて之を補ふ。舊標目なし。今某年元旦作の五字を加ふ。

一、前述の如く本卷は全書岡田氏本を底稿とし、更に左記の書を對校の用に供したり。（全書此の部分までは草稿本に比しては相當整理の手の届きたるものなれども、第三文及第四雜著の部分の完全に近きものに及ばざるものなり。）

1　岡田氏別本
2　岡田氏一本岡田之印の藏書印あるもの

一、岡田氏一本には欄外諸處に門人の郷貫並に仕官等を記載せるものあり。此等は本全集巻末門弟子傳を作製するに參考したるものなれば、悉く之を本編の頭注に記入しおきたり。

一、博く眞蹟の現存するものに就きて對校したること、他巻の例の如し。

一、底本は全部白文なり。題注は舊と之れ有りしも、句讀・訓點・頭註は編者の附するところなり。東匱問の通讀を經、叉指敎を得たるもの多けれども、編者の淺學、猶ほ原作の眞意を誤りしもの無きを保せず。讀者幸に之を諒せよ。

一、門弟子齋藤亥巳が作詩の斧正を乞ひ、先生が之を批正せられたるもの新に發見せられたり。門弟子詩文集中に採錄したれば就いて看らるべし。尙書簡等に含まるゝものは他巻に譲りて本巻に編入せず。〔第五（別）册末尾補遺並補正參照。〕

一、標目の上に見ゆる圏子は全書岡田氏本整理本の體裁を其の儘襲用したるに過ぎず。されば新に採入したるものゝ標目には此等の圏子を冠せず。

昭和二年丁卯十二月二十日　加藤盛一謹識

藤樹先生全集　卷之二

文集二　詩　附贊・聯句

○寄友。壬申之冬。

產業隨時必勿擇。伊耕莘野呂漁翁。

君看不有殷周遇。依舊釣磯畎畝中。

○癸酉之歲旦。

癸酉之元旦。參神事畢。而獨坐有鄉思。屈指羇旅既十有八年于此矣。偶然憶得皐魚之事。而讀其傳。至樹欲靜而風不止。子欲養而親不待。而三復之。而悔悟昨非焉。於是賦曹・鄶之一絕。以聊言志。杜非費精神於無用。所謂不得其平則鳴者也。故不泥詩法。而只用二十八字而已。

羇旅逢春遠耐哀。緡蠻黃鳥止斯梅。

伊尹耕於莘野。殷湯王以幣三聘之。遂幡然而起。相湯伐桀救民。以天下爲己任。呂尚東海人。四岳之裔。本姓姜氏。從其封姓。故曰呂尚。周文王將出獵。卜之曰。非龍非彲。非熊非羆。所獲者霸王之輔。果遇呂尚於渭水之陽。與語大悦曰。吾太公望子久矣。號曰太公望。立爲師。武王尊爲師尚父。佐武王滅紂。有天下。

皐魚之事在韓詩外傳。不待下今書別本無而字。

鄶通檜。詩有檜風。

杜非別本倒可從。

主靜參看雜著心條下
周之主靜。程之定性之
語。
沈波全書一本作波沈。

宦俗宦字。
以足當倒。

列子湯問篇曰。伯牙善
鼓琴。鍾子期善聽。呂

樹欲靜兮風不止。　來者可追歸去來。

○舟中見水月有感。甲戌之冬。

念慮一毫差。　應酬千里訛。
人心宜主靜。　明月不沈波。

○乙亥之歲旦。

遊宦在於他邦有年于此矣。歸逢鄉黨乙亥之春。而和樂且耽。以足知羇旅十有九年之非。是以綴側體一絕。以抒卑志云。

鄉黨元旦會九族。　和氣油然相親睦。
昔日雖知非眞知。　舟可行水車則陸。

○於洛偶成。乙亥之春。

吾孤鼓瑟世皆竽。　面友盡言可絕絃。

氏春秋曰。鍾子期死。伯牙破琴絶絃。終身不復鼓琴。以爲無足爲鼓者。
烏紗別本一本並誤作烏紗。
[illegible]全書一本傍記紙字。蓋後人筆。

今亦有期人不識。〔子期也(片)〕烏紗巾上是青天。〔指天道(片)〕

○寄友。

乙亥之秋。洛友來請益之次。筆白鹿洞規以示諭。楮國有餘地。故作一絶以書其端。

乃獸乃禽從小體。須求明德復其全。
請看此理甚分曉。鳶戾天兮魚躍淵。

○丙子之歲旦。

丙子之歲鷄旦。偶逢立春之節。因有感。賦小詩以庶幾工夫之一助云爾。

格致誠脩貴日新。易難先后不彬彬。
料知聖學成功地。氣朔今朝共是春。

○送信古。丙子之春。

不遠海陸百里之阻。而來訪我草庐。金蘭之交。骨肉之親。謝忱无詞。別後三年事。燈前一

模別本作謨。

歇冠子學問篇曰、中河失船、一壺千金。

底本無題注、據別本及一本所載補之。一本頭注曰、嶋川藤右衛門黒田甲斐守家士。

藤樹先生眞蹟熟語解ニ曰ク

弄丸　弄ハモテアソブトヨム。丸ハ大極ノ異名至善ノヿ之。至善ニ止ル工夫游泳明快ニシテ他念ナク滯リナキヲ弄トス。

夜話或辨致知之疑、或講克己之功、或論一心之妙、或明萬物之理、而惟日不足滯留數日、猶造次之頃、臨別不得已而賦小詩、以言志云。

晦盲否塞聖人模。　閲識窮經皆俗儒。
世道重任君勿讓。　惟時吾輩中流瓠。

○送藤田嶋川兩生、丙子之夏。

會藤田子於洛、而又邂逅初逢嶋川子、皆心友也。於是弄丸譚易、惟日不足、臨別不得已而賦一絶、以庶幾相責之一助云。

心友相逢堪弄丸。　波瀾雖起點無瀾。
父慈子孝畫前易。　須向韋編絶處看。

○丁丑鷄旦題草稿。

義畫昭昭無極眞。　彖爻十翼趣時陳。
發明有得莫言贅。　野草官梅同此春。

底本無題注。據別本及一本而補。一本頭注曰。池田子者播州人。

本無題注。據別本及一本而補。

是淡別本作惟淡。

○送池田子。丁丑之春。

池田子有故、以義赴於江戸。因訪陋巷。濡滯一二日。講論大學之心法、而有輔仁之益矣。愚雖不有朋自遠方來之德。尤足喜得莫逆之樂也。臨別賦一絶。以相勵切磋之功云爾。

滿襟義氣究精微。遠促旅裝行不違。
離別河邊相勵道。勿忘應接操舟機。

○戊寅之鷄旦讀孝經偶成。

心地收春當踐形。於人細柳眼先青。
元爲老和氣爲子。充塞兩間惟孝經。

○偶成。戊寅之春。

世味本是淡。甘辛由疾成。
正心無氣累。玉食是藜羹。

一本頭注曰。中川善兵衛貞良加藤出羽守家士。

大禹謨云、禹曰、惠迪吉、從逆凶、惟影響。響別本作嚮、可從。按洪範云嚮用五福、威用六極。集註云、五福曰嚮、所以勸也。六極曰威、所以懲也。先生所作原人云、人而有誠則維嚮用五福。傍註云、嚮猶進也。

○送中川子。貞良也。

中川氏遠訪于陋巷、而講論大學之心法。其情深、其志篤。臨別賦一絕、以庶幾體認自脩之一助云。

畏天尊性莫懷居。世事紛紛以已憂。
誠意工夫純不已。孔顏至樂自茲求。

○五福六極吟。

惠迪吉兮從逆凶。響威期福極毋評。
試舟盪陸車浮海。枉費衆功虛器成。

○論學。

事親盡孝父惟慈。地利天明民秉彝。
好惡麟經一王法。行藏犧易六爻時。

鞠三本並有。疑菊也乎倣韻。

一本頭注曰、吉田子伊豫大洲

及下別本一本俱有終字。

篁看經堂啓蒙冀傳。

觚三本皆同。或觚誤乎。

夏葛冬裘我不與。　春蘭秋鞠聖無爲。

舜何人也立其志。　誠意正心立德基。

〇送吉田子。

戊寅之秋。吉田子遠訪於予陋巷。可謂久要不忘平生之言。而其情深切矣。愚雖未習而說者似得朋自遠方來之樂。爲講論語。及鄉黨篇而歸。因臨別賦一絕。以爲切切偲偲之一事云爾。

一貫心法勿他求。　鄉黨全篇聖所裁。

動靜云爲宜止善。　山梁雌雉亦時哉。

〇己卯之歲旦。

小學之講未終篇。而偶逢己卯之鷄旦。因有感。賦一絕。以供試觚之事。而爲體認之一助云爾。

孝悌神明無兩事。　乾元聖德察人倫。

一本題注曰、重兵衛近江海津人。木村惣右衛門下吏。

本無題注。今據別本及一本而補。

一本題注曰、伊豫加藤出羽守家士。

莫言只是學之小。　一片彩霞千紫春。

○送中村子。

中村子志於道。而來求予於大學之講。既終篇。而其志彌篤。欲其愼終如始。故臨別賦一絕。爲誘掖之一助云爾。

八目工夫請勉諸。　浩然眞氣復其初。

死生貧富我何與。　一片浮氣過太虛。

○題竹生嶋　己卯之春。

艮上一陽從坎出。　卦神本是太明神。

浮屠謾做辨才號。　天運循還必復眞。

○送森村子。

森村子志於道。而好學。不得已而干貧仕。東奔西走。猶未有所得。而雖無閒暇。以其志篤。故來訪于予草廬。爲講原人持敬圖說。臨別賦拙詩一章。以爲成美之一事云爾。

玉成、愛而成就之也。西銘曰。貧賤憂戚。庸玉汝於成也。庸以也。庸今書一本讀爲常

觚三本皆洞。或觚字誤寫乎。

底本無題注。今據別本及一本補

七字斥天滿大自在天神。

〔元人薩天錫の妙選稿全集に天滿宮といへる題にて無常說法現神通、千里飛梅一夜松、萬事夢醒雲吐月、觀音寺裏一聲鐘と見ゆ。又天暦の頃比良の神官某の子に神託あり、吾やどる所には必ず松生ずべしと宣ひける。松がて一夜の中に北野に松と數千本生ひ出でけりと傳ふ。北野天滿宮由來記─顧問倶軒先生報〕

世閒富貴片雲輕。天爵常尊知足榮。
西走東奔還可喜。帝心庸玉女於成。

○庚辰之歲旦。

庚辰之鷄旦。將試觚。而心似有所得。因賦野詩一章。以爲將來躬行之戒云爾。

致知格物學雖新。十有八年意未眞。
天佑復陽令至泰。今朝心地似回春。

○題菅廟。庚辰之春。

七字靈光光日東。照臨赫赫在儒宗。
斯文興起冀神助。千里飛梅一夜松。

○辛巳之歲旦。

有朋自遠方來。而爲講四書。大學既終篇。而論講及學而篇。而逢辛巳之春。元旦試翰之

眞蹟詩序下有中江原拙菓五字。今據而補。蓋菓稿通。

中別本作仲。眞蹟俱同。

次。綴律詩絶句各一章、聊論學論之體要、以庶幾吾人躰認之一助云爾。

中江原拙菓

大學規模宇宙寛。　說而不慍深林蘭。
靈臺春到能弘道。　智水氷開或起瀾。
梅梢擁雪勵三省。　楊柳和風悟一貫。
自此雲霞千變裡。　鑑衡虛得泰山安。

○又。

異端索隱反中庸。　隨柳傍花見不同。
造化分明一貫道。　太虛廖廓總春風。

○參拜　太神宮準祝詞。

辛巳之歲夏之中。參拜　太神宮。以綴野詩、抒卑志。

以下三首眞蹟連記焉、乃知、底本作斯編、據先生自筆之次。

手是眞蹟作於此。

玄默三本皆同。當作玄黓。爾雅曰、太歲在壬曰玄黓、在午曰敦牂。

別本、自傍記潔字、紅傍記嬌字。或係篠原氏之筆乎。

一本題注曰。松平伊豫守家士谷川義左衞門。一條政所殿被附前之名者玄卜。

誠恐誠惶。謹述卑懷、以準祝詞云爾。

中江原再拜

光華孝德續無窮。　正與犧皇業亦同。

默禱聖人神道教。　照臨六合太神宮。

○壬午之歲旦。

愚竊有志于心學。於江西藤樹下之草廬、與同志相切磋琢磨者。有年于是。論講已迨先進首章。偶逢玄默敦牂之春。故聊賦大禮大樂之万乙。以供試翰之事。以庶幾吾人明辨之一助云爾。

徒從外勿認文章。　梅白桃紅（潔（戶））（嬌（戶））春色常。

非綠非靑禮葉盛。　不濃不淡樂花香。

○送谷川子。

仲由字子路。語見說苑建本篇、與家語致思篇文有少異。

在別本作有。且頭注曰。有一作在。一本亦作有。

底本無題注。今據別本及一本而補。

仲子曰。負重道遠。不擇地而休。家貧親老。不擇祿而仕。今谷川子之境。遇於斯焉。故離同志之群。而干貧仕於豫方。而其心患無學文之餘力。而入德之難。是以恐不得已。而賦側體一絕。使書諸紳。以餞其行云。

素位勿患離同學。　他山石可以攻玉。
入神心脈豈在文。　莫破至誠无息曲。

○送熊澤子。壬午之夏。

詩云。悠々昊天。曰父母且。由是觀之。火食而竪立者。四海之內。皆兄弟也。而其中或有以性命相友愛者。或有以面貌相友愛者。或有顚連而无告者。今吾於熊澤子。似以性命相友愛者。是以思雖无不孤之德。往年辛巳之秋。謬與有隣之訪。而推其所以相識之由。有同聲相應。同氣相求之機焉。人乎天也。故講習討論。心心相通融。而甚喜得輔仁之益。莫逆之寄趣。今逮中庸之講終篇而皈省。因賦中庸要旨。以竊比於送言之事云爾。

淵鑑惟幸。

動而無動靜無靜。　無倚圓神未發中。

是、眞蹟作玆。

署名五字、底本無之。依眞蹟補。

身、底本傍記厥字。別本頭注曰、身一作厥。眞蹟作厥字。

不顯、孝經啓蒙岡田氏本頭注、猶言豈不顯。詩大雅云、有周不顯。鄭注、周之德不光明乎。言光明矣。中庸續解以爲玄遠不測、不同。

愼獨玄機必於是。　上天之載自融通。

○送中川子。謙叔也。

中川子志學。翌年以父兄之命。遠來草廬。入心學之門。其志篤。其學强。孜孜以終日。焚膏油以繼晷。既四年於是矣。壬午之春末。孝經中庸之講終焉。於是夏之孟。歸省父母於豫方。臨別賦全孝心法。以望其聽於無聲。視於無形之愛敬云爾。

中江原拜書

躬行惟幸。

孝德以中爲身體。　无偏无倚至誠神。
一毫意必三千罪。　努力戒懼不顯眞。

○送横山子。

横山子志於學。有年于玆焉。壬午之夏初。因疾浴攝陽之溫泉焉。不佞之環堵僻壞。而往來之便利雖不宜。而以有如蘭之素。故來問愚夫之安否。於是互盡氣聲求應之情。而濡滯三旬。以講明孝經之心法。因撮其要。綴爲一絕。以聊抒臨別切偲之万乙云爾。

體察多幸。

愛敬順時百事公。　驕爭除后万殊通。
立身行道配天敬。　正與神明同此中。

○癸未之歲旦。

一貫之靈竅。字之曰良知。千古聖聖相傳之道。學者自鄉人所以可至於聖人之學脈。唯在于茲而已矣。孟子之一書始終。無不在發揮此靈竅焉。惟壬午之冬與二三同志講論孟子。未半而逢改歲。故試筆之次。賦其體要以爲吾人擴充之一助云爾。

無情無欲上天仁。　不學知能學脈眞。
吾儕弗須安自棄。　綿蠻黃鳥亦知春。

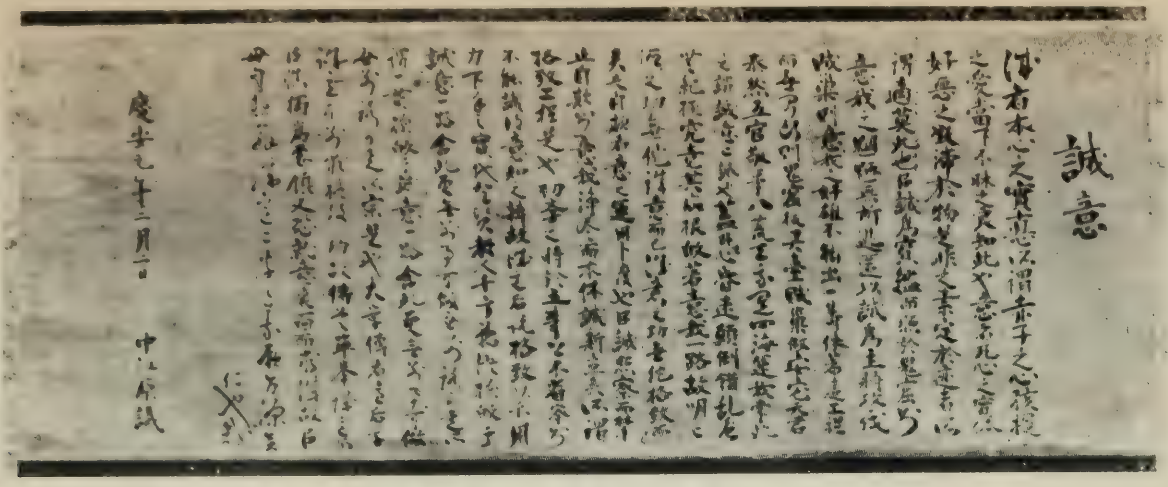
○酬友人嶋川子。癸未之秋。

靈明一點地雷陽。　无迎无將眞坐忘。

所以可三字當作學者下。【眞蹟同。】

早藤氏藏幅作和嶋川子詩無題注。

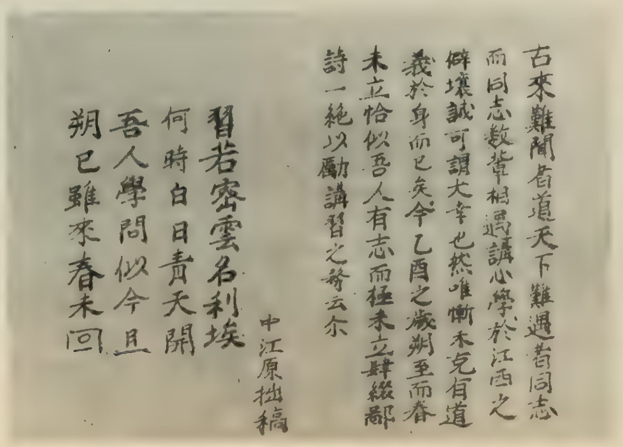
誠意



（東京廣瀬氏所藏品賣立目録所載）

第一冊五頁及び二十頁並藤樹先生遺墨帖附録「眞蹟攷」後文第三項參照

乙酉歲旦詩二種（其の一）


古來難聞者道天下難遇者同志
而同志數輩相遇講心學於江西之
僻壤誠可謂大幸也然唯慚未克有道
義於身而已矣今乙酉之歲朔至而春
未立恰似吾人有志而極未立肆綴鄙
詩一絶以勵講習之務云尒

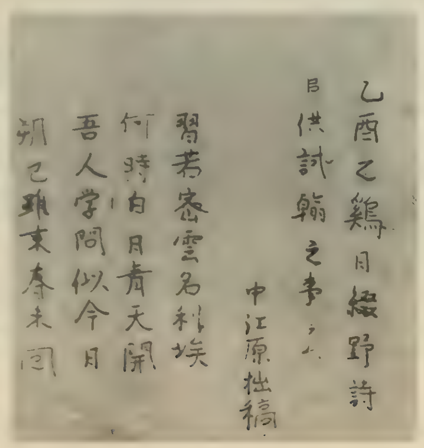
習若密雲名利埃
何時白日青天開
吾人學問似今旦
朔已雖來春未回

中江原拙稿

（大阪市北區旅籠町　田中宗一氏藏）

卷之二・一五頁並藤樹先生遺墨帖附録「眞蹟攷」後文第六項參照

同前（其の二）

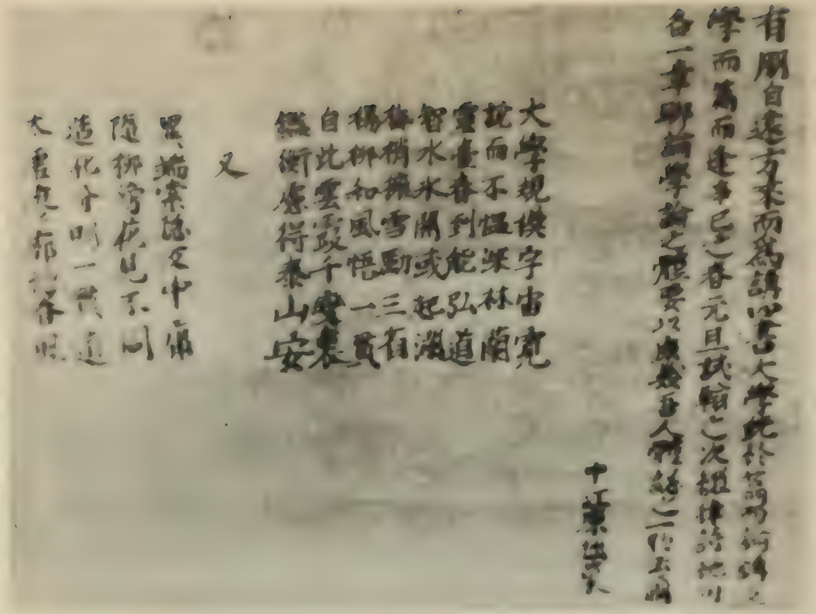

乙酉之鷄日綴鄙詩
供試翰之事云尒

中江原拙稿

習若密雲名利埃
何時白日青天開
吾人学問似今日
朔已雖来春未回

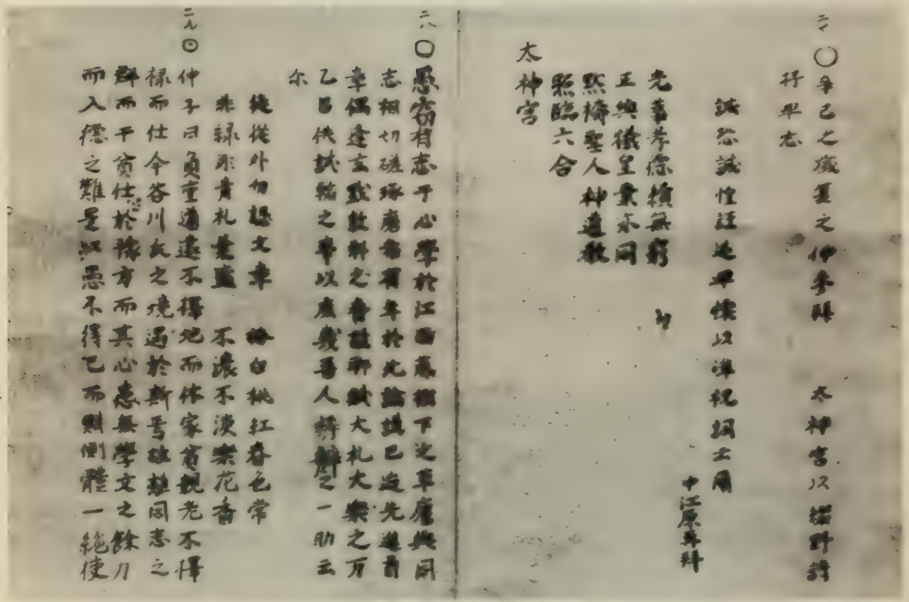
（滋賀縣蒲生郡桐原村　益田孝夫氏藏）

辛巳歳旦詩　巻之二自九至一〇頁參照



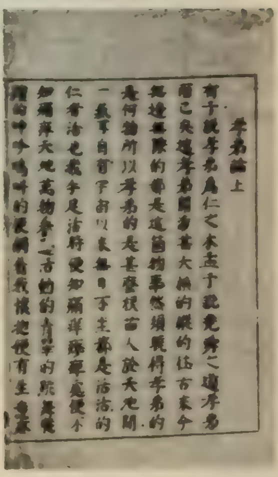
（大阪市北區旅籠町　田中宗一氏藏）

參拜　太神宮準祝詞其の他二　巻之二自一〇至一二頁參照



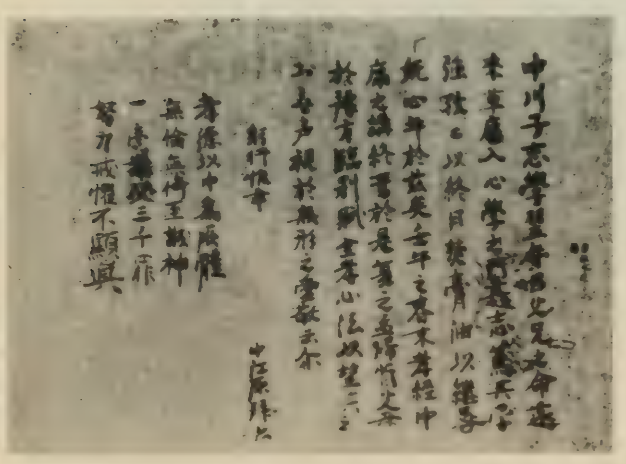
（滋賀縣高島郡水尾村　萬木利一氏藏）

孝弟論寫本　小川氏本　附點孝弟論解說並凡例參照



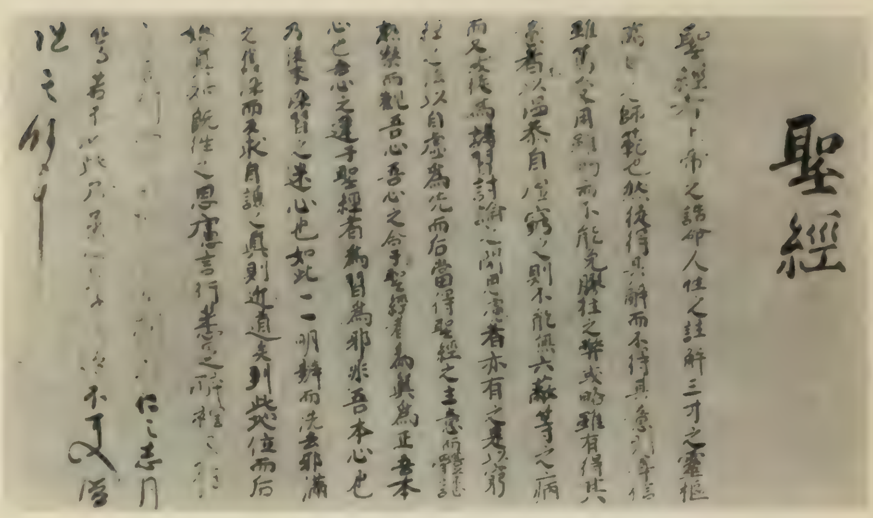
（委員　小川喜代藏氏藏）

送中川子　巻之二　一三頁參照



（京都市東三本木丸太町上ル　雨森民雄氏藏）

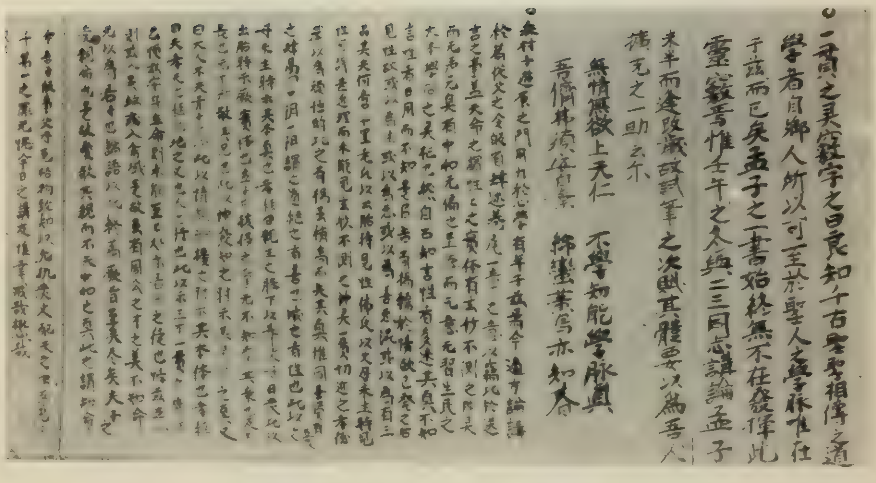
聖經



第二冊二一二頁及び二四一頁參照

（愛媛縣八幡濱市　得能喜信氏藏）

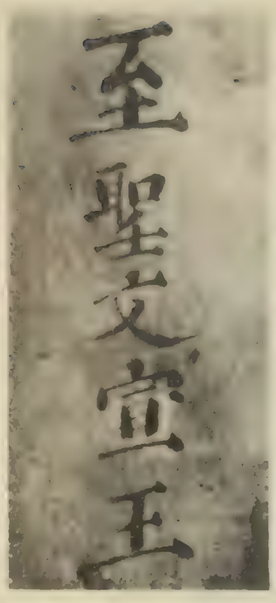
癸未之歲旦並送森村氏



第二冊九四頁並一七四頁以下參照

（滋賀縣立藤樹高等女學校藏）

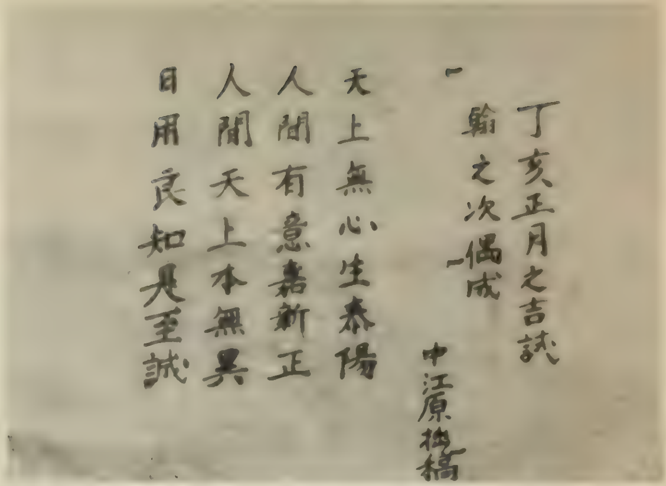
孔夫子尊號



(舊岡山藩主 池田侯爵家藏)

卷之二 二一頁參照

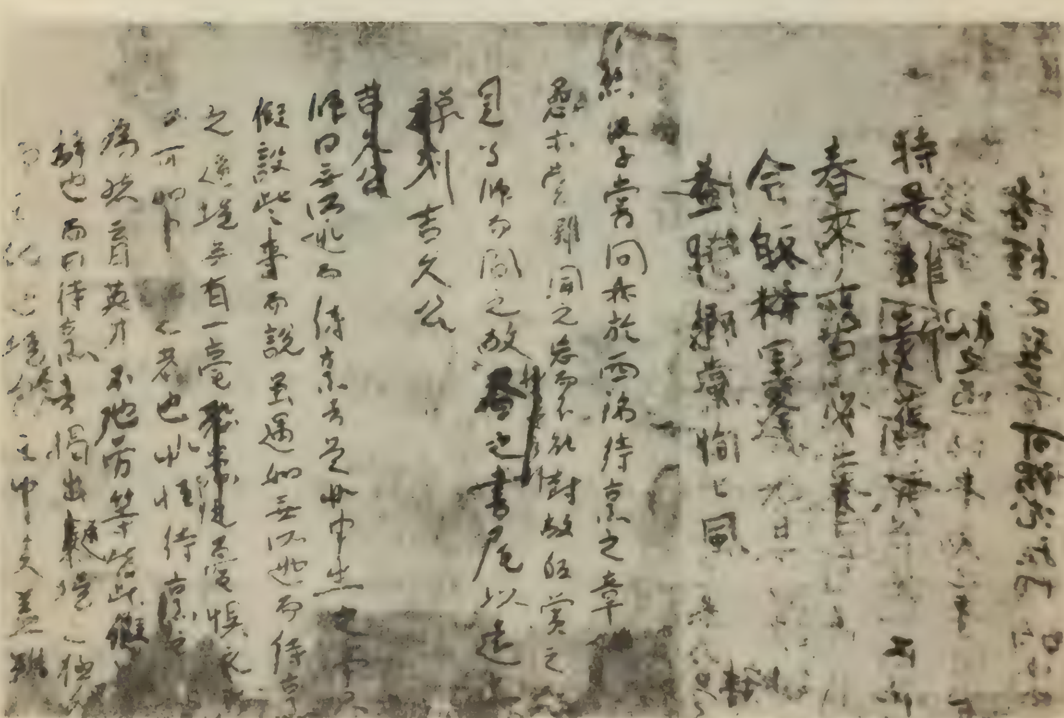
丁亥正月吉詩



卷之二 自一六至一七頁參照 (委員 小川喜代藏氏藏)

某年元旦作　　答西銘疑義

卷之二 二八頁參照



卷之四 自四六至四七頁參照

(滋賀縣高島郡青柳村大字上小川 淵田與惣吉氏藏)

別本篋頭附注曰。敬依尊韵。

熊澤侍講筵、經從此今卓然先覺稱大民。誰知格致詩二首、象得天山出世人。蓋經熊澤氏之筆乎。

明治二十年藤樹先生二百五十年祭之時、展覽熊澤氏自筆之書。舊係岡田季誠末裔元誠氏藏幅。今佚。當時小川氏之筆寫者現存焉。亦同。

豪傑早藤氏藏幅作杰傑。

得別本及一本俱作遇。

極上一本無而字。

〔益田家珍襲眞蹟詩序太略矣。曰、乙酉之鷄日綴野詩、目供試翰之事云爾。正文、今旦作今日。大阪田中氏藏有眞蹟、得作遇。參看拙稿藤樹研究之新資料。〕

此箇玄機君信否。通神孝德出人方。

○甲申之歲旦。

舊年之冬與同志講明二南。至臘之下浣終篇。是以賦厥體察之一得、以爲試毫之事云爾。

穆穆文王不顯春。梅花鶯語二南民。
何爲後學不興起。豪傑惟人予亦人。

○乙酉之歲旦。

古來難聞者道、天下難得者同志。而同志數輩相遇、講心學於江西之僻壤。誠可謂大幸也。然唯慚未克有道義於身而已矣。今乙酉之歲朔至、而春未立。恰似吾人有志而極未立。肆綴鄙詩一絕、以勵講習之務云爾。

習若密雲名利埃。何時白日青天開。
吾人學問似今旦。朔已雖來春未回。

○丙戌之歳旦。

二三同志賴天之靈幸，講習一貫之學術，而未能得仁，唯辨天下第一等事在於茲。而僅超脱世情之拘攣，而窃比於説之皮膚，以庶幾將來之眞樂而已。惟時丙戌之新正。同志相聚嘉三元，於是賦卽景卽事，以爲試翰之事云爾。

霞簇四山和氣新。梅花柳色僉成眞，
今朝堂上三行酒，同志唯喜春外春。

○偶成。丙戌之夏。

獄外有獄納世界，名利傲意其四壁。
哀哉世閒多少人，拘攣這裡長戚戚。

○丁亥正月之吉試翰之次偶成。

中江原拙稿

天上無心生泰陽，人閒有意喜新正。

嘉一本作喜。

於是別本作於玆。

〔先哲書影所載眞跡。二三同志賴天之靈。講習一貫之學術而粗知此是天下第一等事、人閒第一義。而無別路可走無別事可做。只而雖用全體精神。只管求仁。而未能得眞才超脱世情之拘攣。而窃比於説樂之皮膚。以庶幾將來之眞也。惟時以下與底本同。唯於是作因。無詩。〕

底本無中江原拙稿五字。依眞蹟而補。

喜別本及一本作嘉。與眞蹟合。

惟眞讀作是。

人閒天上本無異。　日用良知惟至誠。

又戲作。

靈府無塵物我融。　温光和氣四時同。
春來心上更無別。　堂有蓬萊門有松。

○送加世子歸鄉。丁亥之夏。

萬苦百殃克己獨。　五常十義致知全。
請君歸去事斯語。　安樂世間莫大焉。

○悼瞽友玉井子早世。丁亥之秋。

講論日日相師道。　不滅眼光由此明。
不幸今亡雖可戚。　孰與浪死與虛生。

題注底本無望字。據別本而補。

別本頭注曰。一作戊子夏与諸生見月偶成。蓋篠原氏之筆。

偶然別本作偶成。恐誤。

首尾吟多見邵子撃壌集。

摩島松南娯語曰。此篇或傳爲赤穗義士作者誤矣。

○戊子之歳旦。

戊子夏正之吉。綴鄙詩一章。以爲試翰之文字云爾。

教官讀法屬民晨。同志彌希勸戒眞。
怪且羞吾心不古。千山万木唐虞春。

○夏夜見月。戊子六月望。

淸風滿坐忘炎蒸。明月當天絕世塵。
同志偶然乘興處。不知不識唐虞民。

○明德首尾吟。此以下之詩年次不詳。

原是太虛月一團。怒雷陰雨甚無端。
陣々西風雲霽后。原是太虛月一團。

藤樹先生倭歌曰。
いさぎよき月にかゝれるむら雲もはるればもとのいさぎよき月。（死生首尾吟）
波たゝぬ水に氷のむすぼれてさくればもとの波たゝぬ水。（死生首尾吟）

三月晦日贈劉評事。　賈嶋。
三月正當三十日。風光別我苦吟身。共君今夜不須睡。未到曉鐘猶是春。

庸今書一本讀爲常。

○死生首尾吟。
湛然虛明一池水。　嚴凜寒氣堅氷至。
春來風光和煦時。　湛然虛明一池水。

○三月盡。
詩文成熟樂琴琶。　佳興與人不曾差。
賈嶋吟懷良有以。　風光遷易似雲霞。

○上巳對桃花有感。
危行言孫聖謨訓。　默々夭桃鳥見色。
不遇庸玉君於成。　上天眷命無姑息。

○和朋友問塞歌。

別本標目作送治之。

六言下別本及一本俱無詩字。

事別本作言。

碁別本作棊。

忘勢問塞歌。　譬如琥拾芥。

人患心知鮮。　面友奈不在。

○送崇保軒門弟治之。

崇保軒門弟治之夢得其時則不亂。因介崇保軒請以爲工夫之準的。故綴六言詩以成其志意之美云爾。

應接雖則古斷。　執中無權氷炭。

成敗毋以事論。　得其時則不亂。

○偶成。

無聲無臭是本來。　五情苦樂古今濟。

人閑萬事達觀看。　輪亦遊戲一局碁。

○偶成。

今書乙本雖著忍題注嶋本等、佃子、而正文末連、記此詩、蓋岡田氏割此詩、而移于茲乎

以下三首及達磨贊散見於篠原氏本第二卷中。

滿天滿地都是道。　人生譬如水中魚。
魚死與水通不得。　罔之生豈達太虛。
可悲可悲亦可惜。　黃金屋裏膈病主。
江海水中渴死魚。

○題忍字。

一忍七情皆中和。　再忍五福皆騈臻。
忍到百忍滿腔春。　熙々宇宙都眞境。

○乙亥之春二月十六日。謹贊文宣王之尊像。

明同日月。　德合乾坤。　人中太極。　宇內至尊。
觀感所得。　作耳聞論。　莫道圖畫。　不繪神言。

惑別本作戒。恐誤。篠原本題注曰。秋下一有玄之十三四字。遺稿止作襲贊文宣王尊像。爾雅九月爲玄。謹賛早藤氏藏幅作襲賛。無癸未以下八字。育篠原本作毓。脚注曰毓古育字。尊信篠原氏本作尊親。注曰。親一作信非是。早藤氏藏幅作親。與中庸合。神農下一本及篠原氏本無之字。篠原氏本曰生下脚注云。德一作直。卽古文悳訛。曰一作日。非是。翁下底本擠入之字。別本及一本俱無。今删。磨下底本擠入之字。別本及一本俱無。今删。

○癸未之秋。玄之十三。謹賛文宣王之尊像。
太虛廖廓。夫子至仁。兩儀化育。六經經綸。
普天之下。率土之濱。有血氣者。莫不尊信。
○丙子之冬。十一月念五日。謹賛神農之尊像。
開物成務。繼天立極。嘗草作醫。藝穀足食。
兩事不設。兆民豈息。大德曰生。巍々唯則。
○擔薪翁賛。
天運時正縛。候命擔頭力。
霄漢數點雲。濁水一團玉。
○達磨賛。

年譜元和七年辛酉先生十四歲條下曰、就曹溪院大梁和尚、習文字、文學、詩聯句、間有作。

洽別本及一本作知。

鑿或鑿誤。

叵音頗、不可也。

四勿、看論語顏淵篇。勿視勿聽勿言勿動。卽是也。

九思、看論語季氏篇。君子有九思云々是也。

九年模像、戕賊本心、棄絶人事、乃獸乃禽。

○儒聯句 族弟玄庵請示聯句之格、因與彼相對所作也。

春色取仁染。 天明居敬尊。玄庵

心清知月潔。玄 志立笑雲黐。

博洽奪霞杏。 至忠吟澤蓀。玄

德高千仭鳳。玄 知鑿万尋鯤。

山自靜專樂。 道從實學存。玄

見花無動意。玄 觀草叵爲言。

四勿終歸一。 九思欲復元。玄

死生冰兼水。玄 定省旦與昏。

伯夷餓死于首陽山。豫讓欲厚報智伯。

悳別本及一本倶作德。

君怠政刑廢。玄　民淳孝悌敦。

貪如蠅集器。　幸似鶴乘軒。

松不改今古。玄　竹雖經冷暄。

夷飢求飽義。　讓苦願酬恩。玄

塞馬烏焉誤。　壁蟬魚魯繁。玄

足容桃嘿嘿。玄　作僞葉反反。

安宅由程戸。　正途入孔門。玄

○漢倭聯句。

悳色成蹊李。　花のにほひにめでし鸎。玄菴

うらゝなる日影にこてうむらがりて。　舞袖和風奇。玄

達別本逆ニ作ル。

をく別本をまニ作リ後人くノ字ノ傍記ス。「知リ或ハちりト讀ムベキカ」

烏別本誤ッテ鳥ニ作ル。

雨脚達雲走，　玄　　天心由道移。

すむ水にやどるは　まこと秋の月。　玄　　殷鑑照安危。

斷髻制諸侯，　玄　　かしこきは先　身を治ぬる。

君が代はすなをに　なびく民なれや。　玄　　質直竹猗々。　玄

樂夢神仙枕。　玄　　顯忠將帥旗。

鴈がねに傳をし　たのむ旅の空。　　露もわすれず　しらべぬる絲。　玄

こぬ人をまつに　嵐のかよひ來て。　玄　　落葉わびしく　つもるほそ逹。

隱家をしめぬる　山のをくふかみ。　　樵自絕名癡。

飾口，俗儒學。　玄　　發聲孝子悲。　玄

鳳兮烏反哺。　　知り初にしを　いとふ高椅。　玄

謎濟サヽナミト讀ム。

清をもなをきよめぬる
　石井にて。
むかし憶志賀の都は　玄
　あれにけり。
豈忘鷃遮莫。玄

○倭漢聯句。

花の色に天の道　玄菴
　てる春日かな。
散霞山愈景。玄
常よりも立きそひぬる
　朝市に。
清心湖上月。
暮はつる秋の　玄
　野分の身にしみて。
雪深皆隱逸。

賤がつるべに　玄
　たつや漣漪。
ふるさと出し　玄
　ほどは幾朞。
寧與鵬曷爲。
得元楊柳風。
行かふ袖のかず
　多みなり。
浪のひまなく　玄
　こぐわたし舟。
見るがうちにし
　はるゝ雲霧。
かれなびきたる
　霜の草〳〵。
道至是天公。玄

着一本作レ看似レ可従

教博孔門學。玄　徳邵顏巷窮。

なにかせん玉の
　うてなもしばの庵。玄　夢もむすばぬ
　よがれかなしも。

さやかなる月も
　待には曇めり。　思ふにふかき
　我袖の露。玄

懶聽蛩促織。玄　與着鴈彰忠。

しら雲になびける
　旗も君がため。玄　おさまれる世の
　しるしなるらん。玄

○隔句。

磨去如氷釋。　靈臺鏡裏塵。
收來雖節異。　安宅戸中春。

又。

野生對花愧。　心地未春回。
明哲觀梅卜。　靈臺有道裁。

〔行政、志村全書行政ニ作ル。〕

別本標目誤脫ニ妃字一。

遮莫牡丹富。　躬安安宅春。

美哉羊柳舞。　心廣廣居晨。

又。

逢春轉知耻。　黃鳥止丘隅。

脩道以行政。　青龍在國都。

楊貴妃油之銘。見全書別本。

楊妃仙湯。偶落人閒。幸得一滴。雲鬟花顏。

某年元旦作。

時是雖新舊主翁。　春來千古必東風。

今皈□（紛歟松歟）里逢元旦。　益晞鄉黨恂々風。

文　解題並凡例

解　題

一

廣義に解すれば、經解も文なり。詩及び賛も文なり。書簡も文なり。雜著以下亦然らざるはなし。茲に題して文と言ふは、固より狹義に從ふものにして、文集中上述のものを除きたるもの、卽ち本巻の内容なり。而して詞章記誦の學を事とするを排せられたる先生にして、斯編の分量さまで多からざるは、寧ろ當然のことなれども、なほ文の作られたるあるは亦已むを得ざるに出でられしや疑なし。唯首記の二文、安昌弑㆓玄同㆒論と林氏剃髮受位辨とは、先生二十三四歳の作にして、氣鋭言厲、晩年に及んで之を言ふを欲せられざりしものゝ如くなれば、今茲に言はず。其の他の文章を熟玩すれば、其の内容の豐贍にして、先生の宗教觀・人生觀若くは教育主義等を考察するに必要不可缺の資料たるを知るべし。

二

先生によれば、宇宙の主宰者を皇上帝（上帝又は天とも稱せらる。）となす。無限なると同時に一切を包攝して其の中心となる性を有し、又眞實無妄のものにして、靈妙不可思議の作用を有せり。無限の理を其の心となし、陰陽五行の氣を其の形となす。今其の作用を見るに、此の神理と此の氣と自然にして息むなく、妙合して生々發展し、天地萬物の父母となる。卽ち其の形を分つて萬物の形を生み、其の心を分つて

萬物の性を命ず。形は既に分れて異同あれども、心に至りては分るゝも同一なり。而して吾人の住める境涯に官職あり、國家あり、天地あり、大君あり、百官あり、食貨あり、政敎あり、賞罰ある如く、上帝も亦此等の官事を設けて之が君となり師の役をつとめつゝ凡て天地を經營し、賞罰を司る。此等の事實を確認せんとすれば、宜しく人生を直視すべし。其處には大中至正の道卽ち人極あり。此の人極に於て最も明瞭に之を認知することを得べし。此等大中至正の道は、時として處として天命に非ざるはなし。人の心と言ひ、其の形と言ひ、又其の五倫と言ひ、皆純粹至善のものにして、此等は全く上帝の人に命ずる所にして、人の受けて人たる所以のものなり。既に人極を命ずれば、常に照臨して須臾も離れず、以て其の勤惰敬怠を試む。人たるもの宜しく此の天の明命を畏れ、己が德性を尊び以て其の使命を全うすべし。之を敎ふるを人の敎と謂ひ、之を學ぶを人の學と謂ふ（原人）。

以上は上帝を中心としての考察なれども、更に人を中心として之を見れば、明德（後には多く良知の語を用ひらる。）は人の本心にして、天が人に與へ、人が之を天に得て萬物の靈長となれるものなり。其の本體たるや至虚至神にして天地萬物の理を備へ、其の作用たるや至靈至妙にして天下の萬事に應じ得るものなり。蓋し上帝萬物を造化する所以のものは理と氣とのみ。氣は以て形を成し、理は以て性を命ず。性を以て言へば、人間と萬物と其の間貴賤の區別なし。然れども、氣質の稟受に於て正と偏、通と塞との異同無きこと能はず。萬物は氣の偏にして且つ塞なるを受けたるものなれば、既に偏氣に拘束せられて、其の本然の全體を發揮すること能はず。唯人の生は其の氣の正にして且つ通なるものを得たれば、其の性の本體全く明かにして、一身に主たりと雖も、其の實は天地有形の外にも通ずるを得。かくて人

開と禽獸との區別を生じ、又人間に在つても種々の程度の差を生ず。完全に形氣の束縛を脫し、天然自有の明德卽ち天性に合し得るものは聖人にして亦神人なり。（下篇明德圖說）

要するに上に人格的なる上帝ありて天道を規定し、下に明德を備へ、良知を有せる人有りて人道を步めり。此の明德良知は上帝の具體化なると共に、天道と人道とは同一規範の終始なり。故に上帝の命卽ち天命を畏れて之に從順なることは、卽ち己が德性を尊んで之を存養することゝ一致す。人は上帝の屬性なる理氣二元を享けて、此の身を成し、心を形づくれり。此は人と萬物と差異なけれども前に見えたる如く人は氣の正にして通なるを受け、萬物は其の偏にして塞なるものを受く。されば人のみは此の氣を制御しつゝ此の理を自覺し、且つ之に純なることを得る點に於て萬物の靈長と謂はるる資格あり。此の資格の洗練の程度に應じて夫々人間賢愚の差を生ず。而して此の資格の純熟したるものは卽ち聖人にして、やがて神明の境に到達せるものなり。此の如き考察が卽ち先生の宇宙觀又は人生觀乃至宗教觀の核心なるものゝ如し。而して此の宇宙論は、一般宋儒の汎神論的傾向の濃厚なると異り、何れかと謂へば、發生說 Emanationstheorie に近きものとなれりと思はる。これ或は上帝を人格的に考察せられたる結果、Plotinos（204—270 A.D.）が絕對者より神靈・精神・形氣の如き段階を經て萬物の溢れ出づとなせる思想に類するものの如し。

三

前陳の人生觀及び宗敎觀は以て先生の敎育理想を物語ると思はるゝものなるが、更に先生の敎育綱領を知るべきものとして、朱子學時代に藤樹規あり。王學時代に致良知あり。前者は朱子の白鹿洞書院

掲示を參酌し、更に先生獨創の意見を加へて大成せられたるもの、後者は王陽明の發明に係れる成句を其の儘借り來りて、自家教育の標語とせられたるものにして、語極めて簡なれども、精細に觀察すれば、藤樹規の內容は全部此の三字に包攝せらるゝものゝ如し。

朱子の白鹿洞規に於ける學問の目標は父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信と云ふ所謂五教にして、此の五教を學習する方法として窮理と篤行の二者を以てせり。卽ち博學・審問・愼思・明辨は物理を窮格する所以なり。既に物の道理を明にして初めて實行の域、朱子の所謂篤行の域に進むべし。朱子は此の實踐的方面として修身（對己道德）と處事（動機吟味）と接物（對他道德）の三者を擧ぐ。卽ち言行を愼み情意を規正し、日新の工夫を積むを以て己に對する道德の主要なるものとなし、又義利公私の辨を立て道功の別を明にするを以て事物を處理する場合に於ける動機吟味の中心となし、更に同情と自責とを以て他人に對する道德の樞軸とせり。以上は朱子が聖經賢傳中に見ゆる儒教教育の眼目を拉し來つて自家教育の綱要と成せるものにして、內容頗る豐富なるものなれども、先生は更に聖人立教の宗旨の未だ白鹿洞規に言ひ盡されざるを憾み、新に二つの項目を補足せられたるもの藤樹規なり。卽ち一は大學の三綱領が儒教に於ける教育・政治の根本方針なるに著眼し、一は學習上に存養の切要なるを自信せられたるに基く。詳言すれば前者に在りては、五教を以て教育の目的を內容的に考察したるものとし、別に三綱領を加へて五教の實施上潑溂たる教育の精神を鼓吹せんとしたるもの、後者に在りては白鹿洞規が窮理・篤行等專ら進修の方面に着眼して、自己本性の省察に意を致さゞるを物足らずとなし、特に宗教的情熱を以て持敬の要、進修の基本として畏天命、尊德性の一項を新に挿入せら

れたるものなり（藤樹規）。思ふに藤樹規は先生三十二歳の作にして、朱子學時代に屬すること內容一般より之を立證するを得べく、尙傍證としては、現存の眞蹟（愛媛縣喜多郡內子町曾根源三郎氏所藏）によれば、致知の文字に致ㇾ知の訓讀附せらるゝを擧ぐるを得。致の字をきはむと讀まれたる明證あり。晩作格物致知の經解に致は至と解せられしものと思想上大なる逕庭の存するを注意すべし。

偖第一卷經解の解題に於て略說したる如く、先生によれば致良知の意味は吾人の言動について其の不正を正して、心良知の狀態に至つて違はざるを謂へるものなるが、今此の致良知を以て藤樹規に於ける致知と比較せんに、藤樹規の致知は、朱子の窮理と同一にして學規全體より言へば其の一小部分に過ぎざりき。卽ち此の時の知とは普通の經驗的知識を意味するものなりしも、王氏良知の學に入りたまへる後の知とは卽ち良知の謂にして、純一無雜・眞實無妄・昭明靈覺の天理なりとせらるれば、致良知なる題目のみにて藤樹規全體の內容を蔽ふを得るに至られしものゝ如し。卽ち藤樹規最初の大學三綱領について言ふも大學解に見ゆる如く明德が良知の別名にして親民や至善は、其の用と體とを示すものなりとせらるゝ限り、三綱領は當然致良知と同一內容となり、又藤樹規の親・義・別・序・信の五敎も、孝が其の中核なりとする儒敎の思想、並に廣義の孝は良知と何等內容に異同なしとせらるゝ先生の說に從へば、是亦致良知に包攝せらるゝことゝなり、更に存養の方面について言へば、畏二天命一尊二德性一と云ふ、前には先生にとつて特別重大なる思想として、白鹿洞規の足らざるを補はれたるものも、今や良知なる天命を畏れ、良知なる德性を尊ぶことゝなり、又進修の方面に於ける致知は前述の如く致良知の一事となり、更に修身處事接物を包含する篤行も致の字が示す如く良知の工夫若くは作用に

歸することゝなるべく、要するに易簡直截を尙ぶ王學の特色を應用せられたるものなるを知るべし。

京都帝國大學名譽教授狩野博士還曆記念支那學論叢中の拙稿參照。

尙先生の宗敎觀を考察すべき資料としては上記の外大乙神經序及び靈符疑解等あり。今日の宗敎學上の問題に對する先生の見解を知るに足るものあれども、今は闕說せず。就いて熟看せらるべし。

凡　例

一、本卷も亦底本を篠原氏本に採りたれども、排列の順序は、他の多くの編の例に於けるが如く、全く全書岡田氏本に從ひたり。

一、原人（藤樹先生別集に人經と名づけらるゝものにして、原人とは先生が後に改められたる名なること其內容より推して之を知るを得。）は岡田氏本になし。篠原氏本は雜著の中に之を收む。內容より見て今之を本卷に移入す。

一、編中の靈符疑解は全書岡田氏本には雜著の中に收めらる。然れども此は內容より觀るに、本卷に收むるを適當とするものなり。されば此の文のみは篠原氏本に從ひて、本卷大上天尊大乙神經序の直後に移し置く。

一、知止章之辨篠原氏本にありては雜著の部に收めらる。今別本載するところの例に傚ひて本卷の最後に附す。

一、對校に用ひたる諸本左の加し。

（一）全書岡田氏本（此の部分、次の雜著と共に篠原氏の見たりと稱する全書岡田氏本に屬し、而して此の一册が現存の岡田氏本中最も完全に近きものなり。）

（二）全書別本（本載するところの內容本卷に止る。）

(三) 岡田氏一本

(四) 藤樹先生別集 書後に安原貞平伯亨輯以附諸本集之後。亨保十九甲寅正月仲昌謹寫之と
あり。此の書は滋賀縣高島郡大溝町原田知近氏の家に傳はりたるものなり。

目次左の如し

○人　經

○答小川子　甲戌春

○答友寄旅愁倭文書　甲戌冬

○癸酉之秋理話之次云々

○與小川子　癸酉秋

○乙亥之夏於故郷偶成以寄洛友。（以下和歌二十六首を載す。）

○會約。花園會約と名く

因に安原貞平森實及び志村治左衞門仲昌のことについては本全集第五册門弟子傳を參看すべし。

昭和三年戊辰二月二十五日　加藤盛一謹識

〔再刊補遺〕

湖東益田家傳來の書に原人論と題する一寫本あり。原人論と持敬圖説とを載す。原人には底本の如き傍記なし。今對校して、頭注に追記す。

藤樹先生全集　卷之三

文集三　文

安昌弒玄同論。

安上遺稿有讀字。蓋林敬吉已有此論。故妄加一讀字以別之。今謹仍舊。弒遺稿作殺。亦非是。○按

年譜原稿寛永庚午。春先生在大洲作之。時年廿三。後語人曰。當時吾圭角未渾化。故作論辨之。○先哲叢譚。菅玄同。字子德。號得庵。播磨人。師事藤惺窩。後家京師。寛永戊辰六月十四日。家人皆出觀祇園社會。得庵獨居讀書。方倦欲微睡。弟子安田安昌者。潛來伺之。即就刄得庵。未及轉身。胷洞吭絶。聞者識與不識。莫不嘆惋。官即捕安昌刑之。羅山作墓記惜之。噫。彼安昌從遊有年。嘗校刻羅山所旁譯五經。似好學之篤者。然一旦犯天地不容之罪。身陷大辟。雖有小善。亦何足稱。按此記載安昌殺子德事顚末。視墓誌爲略備。然不言其所以也。新著聞集又載之。但誤子德爲野子苞。且謂家人諱其死賊。陽言暴亡。竟不告官。亦誤。唯其言子苞以嫚罵故。獲酷禍。與先生所謂玄同待安昌如犬彘者合。是爲得其實矣。

氣質上別本及一本俱有有字。

善下別本有於字。仝書一本無。

于洛有舊友。（遺稿無于字。非是。）己巳之冬。寄書於潮信。於其書尾。筆林左門所作之安昌弑玄同論。（遺稿無於其二字及之字。弑作殺。皆非是。○林叔勝。字敬吉。稱左門。羅山長子。）因讀之。其論安昌之罪。則可也。論玄同。則不可也。其謂玄同稱醇儒也是則左門不智之甚者也。（不上草果有之字。無者字。）蓋格物致知。而誠意正心。以脩其身。無氣質物欲之累。而復得本體之全哉。（無下草果有有字。哉遺稿作矣。非是。）是以達則兼善於天下。（一無於字。）窮則獨善其身。此謂之儒者。（謂之遺稿作之謂。者下有焉字。）然倭國稱儒者者。（遺稿無然字。倭國作本朝。皆非是。又按者字疊用。非衍也。）徒知讀聖人之書而已矣。可與共學者。未之有也。而觀其躬行之實。所以惑世誣民。充塞仁義。有甚於異端者。而玄同其徒之尤者也。如之何而謂醇儒乎哉。吾恐學者之認左門之

玄同見弑者以下別本及一本提レ行。

見殺一本作レ見レ弑。下同。

民生二於三一。見二國語晉語一。

君雖不君云々 古文孝經孔安國序文。

言、以如玄同者爲醇儒而不察。不上遺稿有習字。故忘其固陋以作論、曰。玄同見弑者何也。弑遺稿作殺。盆成括仕於齊。孟子曰。死矣。盆成括。盆成括見殺。門人問曰。夫子何以知其將見殺。曰。其爲人也。小有才。未聞君子之大道也。則足以殺其軀而已矣。由是觀之。玄同之爲人也。玄上遺稿有則字。雖讀聖人之書。口耳訓詁之學。而不知德。耳或作手。或作甘。皆非是。今從全書。是以不能變化氣質。恃才妄作。所以殺其軀也。蓋玄同之待安昌。如犬彘。故安昌爲怒氣所動。而犯逆理亂常之罪。焉以常情見之。則師不師。安昌之所犯。可謂宜也。然先王之制。民生於三。事之如一。制一作則。而師居其一。傳曰。君雖不君。臣不可以不臣。父雖不父。子不可以不子。

不至下別本及一本無於字。別本則追記擠入之。蓋篠原氏之筆。

既一本亦無。

以一本、無。

由是推之、則師雖不師、弟子不可以不弟子。苟安昌之罪。不容誅矣。是豈遠於禽獸遠乎哉。玄同安昌共是人面獸心之俗也。何足論乎哉。或曰、若安昌以理御氣、則必不犯弑逆之罪。然則玄同得免。而子論所以殺其軀者何也。曰、人之有才。本不足以爲人害。惟無所本、而徒用其才。（本一作求、非是。）於是才始足以病己。甚至有取死之道。又不若魯鈍無才之愈也。吾但述其理之當然、而已。苟安昌使人心聽道心之命、則玄同得免。然如玄同者不至於顚覆不已。（一無於字。）假饒得免安昌之弑逆、必取其他死禍矣。（他下遺稿有之字。）曰、於玄同取死之道、既得聞命。（一無既字、非是。）敢問、左門謂玄同稱醇儒也。然子以謂之人面獸心者、

氣稟別本及一本俱作氣質。

異別本作殊。

誇一本作誘。妄作忘。

溺一本作滔。

別本及一本題注曰。辛未之春。

何也。一無以字。曰。其謂鄙夫爲人面獸心者。以爲氣稟所拘。人欲所蔽。而失本心之德。是以心之靈。其所知者。不過情欲利害之私而已。是則雖曰有人之形。而實不異於禽獸也。異一作殊。夫玄同之爲人也。徒事於博物洽聞。以狗外誇多爲務。而不覈表裏眞妄之實。誇一作誘。妄一作忘。皆非是。然是以識愈多。而心愈窒。故說儒飾口。遺稿無儒字。非是。既罔大學之明法。效佛剃髮。以侮孝經之聖謨。以陷溺形氣之私。而戕賊性命之正。溺一作滔。非是。是則非人面獸心之俗。而何也。而謂之醇儒者。妄人之私言也。

林氏剃髮受位辨。

受下遺稿有僧字。非是。○此篇諸本竝以爲辛未春作。据年譜。先生時年二十四。而遺稿以爲二十三。誤矣。○按羅山年譜。寬永六年己巳林文敏公與弟信澄同日敍爵。公爲民部卿法印。信澄爲刑部卿法印。公以其非儒官。故作

詩並序、解説之。故先生有是作。愚謂此與前篇俱是少作。氣鋭言厲頗似深文。攷先生年譜原稿、盡抹去叙作此及前篇二條。似不欲言者。則豈得非先生晩年。亦自不滿。而門人隨承其意。故邪。山崎闇齋嘗著世儒剃髮辨。亦似爲林公發。其命意與此略同。○附林公叙法印詩並序。

除夕蒙　台命。賜余兄弟法印位。何榮幸加之哉。雞日共服法服、執拜謁於　殿中。献雄劍龍蹄。而乃稽首趨進跪飲　觴灑。且受　御衣一襲。何意此身爲青雲之士也。原夫法印者沙門位也。而配僧正官。今余兄弟元是儒也。然祝髮者久隨國俗。與太伯之斷髮、孔子之郷服何以異哉。復何傷焉。有説于此。寺官舍也。借爲梵宇。精舍本黌也。亦借爲蘭若。名典常也。經亦常也。聖人之言。萬世宜常行之。故以爲其名。然浮屠假托之號。修多羅爲典經。則盡反其本哉。先王有法服。有法言。四書六經。有讀法。其皆見於筆墨。垂於不朽。故墨以傳萬古文章之印。是吾所取之法印也。謂之心印。亦可矣。是此授位非吾兄弟所曾期望也。而今自上裁之。則恩味不亦厚乎。所謂自天命之者乎。詩云。天上瑞雲春共來。吾儕法服拜三台。忽傳萬古文章印。試墨池中氷盡開。

林道春記性穎敏。而博物洽聞也。而説儒者之道。徒飾其口。效佛氏之法。妄剃其髮。曠安宅。而弗居。舍正路。而不由。朱子

所謂能言鸚鵡也。而自稱眞儒也。倭國聖人不作。（倭國遺稿作吾邦。非是。後此倭字易以他字者皆然。）而異端之教。日新月盛。邪誕妖妄之說競起。塗生民之耳目。溺天下於汙濁。是以知德者鮮矣。故推之以爲倭國之儒宗而信其言。效其行者多。（倭國遺稿作吾邦。）彼居之不疑。施々驕其門人出而仕於江戶。以其形類沙門也。已巳之除夕賜之以沙門之位。林氏兄弟者。受之以爲榮幸也。（氏一作子。）而慮世之毀笑也。作文以飾其非。而成其惡。聽者懵然不察。同然從之。故擧世以爲儒者之道。唯如彼而已。而不知有明德親民之實學。噫。後之人雖欲聞實學。其孰從而聽之。實正路之蓁蕪。聖門之蔽塞也。（遺稿無實字。非是。）其害有甚於異端者。故予不得已而

道春爲之辭曰以下別本及一本倶不提行。

髻底本作鬠。別本一本同。今改。

擧其言以爲辨如左。

道春爲之辭曰。遺稿無爲字。非是。吾兄弟祝髮者。從國俗與太伯之斷髮孔子之鄕服何以異哉。昔惺窩藤公髽髮著深衣。韓人詰之曰。公著深衣。甚善。不蓄髽髮何也。公對曰。此姑從俗耳。泰伯之亡荊蠻也斷髮文身。而聖人不許之至德乎。韓人領之。見林公所著惺窩答問。林公云々實祖此。受法印之位者。以經典本聖人之書名也。浮屠假爲脩多羅名之例。而名義所取。與彼不同也。梵修多羅。漢借翻曰經。蓋圓剃除顚髮。而以餘髮爲髻者倭之國俗也。倭遺稿作本邦二字。盡剃除其髮。而無髻者。佛者之頭容也。非國俗焉。倭俗恭沙門。倭遺稿作邦。故衆技之流。有假其形。而求人恭己者。太伯之斷髮。孔子之鄕服。其國俗而從之。豈別有異端之法而從之之謂乎哉。夫林氏之剃髮非佛者。則假形之徒也。

八

國俗別本同。一本作倭俗。

歟別本及一本俱作與。一本無處字。

氏一作子。非從國俗也。國全書作倭。今從草果。不言而可知矣。而自附於斷髮之權。鄕服之義。自欺而欺人。其所以惑世誣民充塞仁義。不可勝言。譬諸小人。其猶穿窬之盜也歟。蓋太伯之斷髮。權也。處父子兄弟之變。而用此。得中。一無處字。非是。所以爲至德也。孔子之鄕服。襲水土之事。而所以安土敦乎仁也。子曰。麻冕禮也。今也純儉。吾從衆。拜下。禮也。今拜乎上。泰也。雖違衆。吾從下。由是觀之。則君子之於國俗也。無適也。無莫也。義之與比。不有必於從俗。不遺稿作非。其國俗尚如此。而況佛氏不仁之形乎。倭俗治喪。用浮屠。倭遺稿作邦。道春葬其子。不用浮屠。遺稿道下有嘗字。無春字。而讀道字屬上句。皆非是。則非不知流俗之不可從。佛氏之可擯斥。只不能擧斯心加諸

彼而已。寛永己巳六月。林公長子敬吉亡。時年十七。遺囑葬不用浮屠。詳見墓誌。明年庚午春林公有詩云。去年今日此人在。今年今日此人無。今朝埀淚向神主。不用浮屠只用儒。我子早亡名久存。木牌獨對泣猶怨。題名攘斥異端了。喚作秀才林左門。義足以葬其子。而功不至其身者。獨何與私欲害之也。浮屠假經典。爲脩多羅名者。巫步多禹。毉多盧之類也。楊子法言。昔者姒氏治水土。而巫步多禹。扁鵲盧人也。而毉多盧。夫欲售僞者。必假眞。李軌注。姒氏禹也。治水土涉山川。病足。故行跛也。而俗巫多效禹步。己之道狂妄。而不足以動人。借此自衒。求人之信從也。以此爲例。則假沙門之位。以將有禆於斯道乎。未聞古昔之聖賢。假異端之位。以爲世敎之助。嗚呼。其亦誤矣。如曰名義相通者異其解。而可假用。張子曰。乾稱父。坤稱母。予茲藐焉。混然中處。如此則生民皆是天之子也。稱庶人曰天子可乎。不思之甚也。其曰盍反其本。由其言推之。經與典。反

自本由說末早藤氏藏有之。與此文全合。

一本無也字。眞蹟有。

藤樹先生別集絕無旁釋。

其本則聖人之書名也。浮屠之非所可假用剃髮與法印反其本則佛者之形位也。儒者之非所可假用也。明矣。一無也字。孟子曰。服堯之服。誦堯之言。行堯之行。是堯而已矣。服桀之服。誦桀之言。行桀之行。是桀而已矣。今肖佛者之形。居佛者之位。服佛者之服者。謂如之何。佛者而已矣。

之下或脫何字。非是。○或人問。此與前篇遺稿所載若絕無倭字類。視之全書・草果爲優。而子弗從者何也。曰。全書草果之文。必得先生手藁之眞。如遺稿。乃經後人刪潤。如他謂伊豫爲豫方。自是當時語。至於門人手筆。間亦有之。而遺稿改爲豫州是也。夫文品高下。定於未構思運筆之前。而非後來刪潤句字之所致。猶人身壯老肥瘠有時不同。至其神采言笑。未始有異也。若彼大家之文。一經前輩點化。便變簡妙。又自有說矣。蓋編遺稿者。未足知之。而反致失先生手藁之眞矣。此所以予固弗從也。

原尋也。本也。所以探尋推本其所以爲人者也。

原人。

草果集藤樹別集等本。竝作八經。恐舊名也。今從年譜及志郁仲昌手筆本。○此篇年譜爲戊寅夏作。按旁釋數字。亦係先生筆。見

底本欄外曰、大虛有上帝、猶國有帝王。故象之名。

底本欄外曰、厥字假說以明無言之端的、下皆傚此。

〔妙合而有生生。終始無時。益田本作妙合而有分。生生無終始。萬物父母下無也字。〕

於仲昌本。故併收焉。

惟皇（大也。無外之稱。）上帝（無上之稱。）。無極而太極（其大無外之言／屋脊中之棟也。又窮也。無過無不及。不偏不倚。猶梁棟。故曰太極。）。至誠（眞實無妄之言。）而至神（生々化々。靈妙不測。活潑々地之名。）。二五之氣惟厥形。無極之理惟厥心（神也）。其大無外。其小無內。厥理厥氣。自然而無息。妙（神）合而有生々（渾淪之合也。）。終始無時。惟萬物（包天地說）父母也。

妙不測一而二、二而一。故下妙字。

自然至此二十一字諸本作俱生而妙合。其生其合。終始惟無時。惟萬物父母之十九字。今從仲昌本。

分厥形。以生萬物之形。分厥心。以命萬物之性。形以分而有異。心雖分惟同。詩曰。悠々（遠大貌）昊天。曰父母且。小雅巧言之篇。

惟下民皇后。建官（以天地言。則主萬物之造化。）命職（天地日月星辰之官也。）。以降其祿。詩曰。蕩々（廣大貌）上帝。下民之辟。大雅蕩之篇。

大虛（西銘自天地上說來。）惟厥國家。乾坤惟厥公（三公也）。大君惟厥孤（小師小傅小保）。六卿

足下藤樹先生別集脫ニ容字一。

曰ニ三孤一。

諸侯大夫四民。惟厥百工。禽獸草木。惟其食政。（入政之一也。乳養之理。故殺レ之而仁）乃乳養之理也。（故非ニ其時一而殺レ之。非レ仁。）五金璧玉。惟厥貨政。日月星辰風雨雷霆春夏秋冬。惟厥政教。五福惟厥賞。六極惟厥刑。厥視不レ以レ目。故視ニ於無形一。厥聽不レ以レ耳。故聽ニ於無聲一。厥命令不レ以レ言。故無レ所レ不レ行。維天之命。於穆不レ已。（深遠貌）厥實唯在ニ人極一也。（猶レ言ニ仁之實義之實一。）記曰。人者天地之德。陰陽之交。鬼神之會。五行之秀氣也。（厥實至レ此二十九字。諸本作ニ厥所ニ以如レ此者唯爲レ立ニ此人極一也。故人者天之經也。地之義也。物之主也。記曰。人者天地之心也。五行之端也。食味別レ聲被レ色而生者也之五十二字。今從ニ仲呂本一。）惟厥人極。惟時。惟處。莫レ非レ命也。近而一身。（指レ體說。）心之虛而直。（以レ理說。）色之溫。貌之莊。視聽之聰明。頭容直。氣容肅。口容止。手容恭。足容重。親而五倫。父慈。子孝。君仁。臣忠。兄良。弟々。夫義。婦聽。長惠。幼順。朋友之信。切而產

一三

別集士作土。日作曰。
昭昭作照照。

業。自天子以至於庶人。皆有天事。惟天官。惟天職。純粹至善。惟帝之所以命人。而人之所受以爲人者也。既命人極。則常自是以下說不可不畏天命尊德性也。照臨而須臾不離。上帝無不在。故曰。以試其敬怠。詩曰。敬之々々。天維顯思。命皆假說以明無言之端的。不易哉。無曰高々在上。陟降厥士。日監在茲。日或作曰。非是。厥視厥聽。聽上或無厥字。非是。昭々不可欺。況可罔乎。曾子曰。十目所視。十手所指。其嚴乎。是故敬以脩天職。所其無逸。以勤勞天事。則纔是人。々而有誠。則維嚮用五福。嚮猶進也。々々之多少。敬勤惟則。怠以廢天職。逸以不勤勞天事。則惟人之禽獸。人而禽獸。則惟威用六極。々々之輕重。怠逸惟則。書曰。惠迪吉。從逆凶。惟影響。就下民之父母上說。下同。敬而無逸。惟孝惟忠。純而不已。則厥生厥死。克配上帝。合而有助之意。詩曰。文

昭別集作レ照。
〔益田本亦作レ照。〕

王子未レ在ニ於先覺之列一。亦足ニ以證一先生未レ主ニ王學一。

王陟降。在帝左右。怠而逸。惟無父無君。厥生厥死。乃禽乃獸。易曰。原始反終。故知死生之說。君親臨之。厚莫重焉。夫豈不孝乎不忠乎。其昭臨之嚴。有甚於君父者。夫豈不敬乎。不畏乎。教此是謂人之教。學此是謂人之學。或生而知之。或學而知之。或困而知之。及其知之一也。或安而行之。或利而行之。或勉強而行之。及其成功一也。三皇・二帝・禹・湯・文・武・周公・孔子・顏・曾・思・孟・周・程・張・朱。惟人之師也。易・書・詩・春秋・三禮・四書・孝經・小學。惟人之書也。盡親炙之誠。以隆事聖師。惟精惟一。讀聖經。以體吾身。顧諟天之明命。以致中和。則人極立。而天地位焉。萬物育焉。異端之虛無寂滅。俗儒之記誦詞章。管商

自レ上治レ下日レ臨

指ニ萬民一。

口耳之學也。

別集亦無與偏曲三字。

別集雖上無俗儒二字。

〔益田本。上記之外。與底本全合。唯無傍記。〕

之權謀功利。與夫支離偏曲之衆技。其指歸雖不同。其爲禽獸之敎。則一也。宜視之如犬馬。遠之如虎狼。或曰。老佛管商與偏曲之技。諸本無與偏曲三字。今從仲昌本。其爲禽敎。則吾不疑。其謂俗儒爲禽敎者。何也。曰。人與禽獸之辨。其機在一心之敬不敬。五倫之遜不遜。天事之脩不脩而已。俗儒雖曰讀人之書。然其所以求書者。不在書之所以爲書。而却以爲求温飽之術。是以其讀愈多。而其明德愈昏。其所存者。只是禽心。惟豈可不曰禽獸之敎乎。干將莫邪。天下之利兵也。如投之於火。鑠其及而用之。其豈曰干將莫邪乎。其豈有干將莫邪之利乎。惟鉛刀也。

規別本作レ規。

下文訓點多從二現存眞蹟一、所レ附。

別册補遺並補正參照。

術上別本多二一之字一。現存眞蹟亦脫。竊按他眞蹟有レ之。別本從レ之乎。是似レ可レ從。白鹿洞規亦作下所二以學一之之序上。

日新底本誤作二自新一。今依二眞蹟・別本・一本一訂。

文

一七

藤樹規。年譜寛永己卯春、作藤樹規並學舍坐右銘、以示諸生。卽此也。但据此云己卯四月二十一日、則年譜春字爲誤矣。

大學之道、在明明德、在親民、在止於至善。本注八條目包在此中矣。

朱子曰、堯舜使契爲司徒、敬敷五教。五教者、父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信是也。學者學此而已。愚按三綱領之宗旨、壹是皆以五教爲定本、而其所以學之術、存養以持敬爲主、進脩以致知力行、而日新。其別如左。

畏天命、尊德性。

右持敬之要、進脩之本也。

博學之、審問之、愼思之、明辨之、篤行之。

致知訓讀唯眞蹟所附。

于上一本脫至字。如左上現存眞蹟則誤脫別字。

眞蹟本頭注曰。利者非謂貨財而已。以私滅公適己自便凡可以害天理者。皆利也。蓋是基論語雍也篇集註謝氏語。

要別本誤作應。

右進脩之序。學問思辨四者所以致知也。若夫篤行之事。則自脩身以至于處事接物。亦各有要。其別如左。

言忠信行篤敬。懲忿窒慾。遷善改過。

右脩身之要。

正其義不謀其利。明其道不計其功。

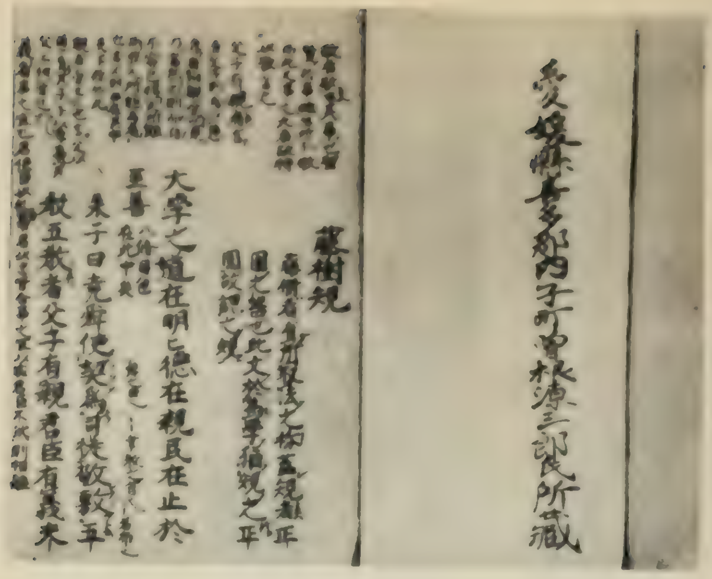
右處事之要。

己所不欲。勿施於人。行有不得。反求諸己。

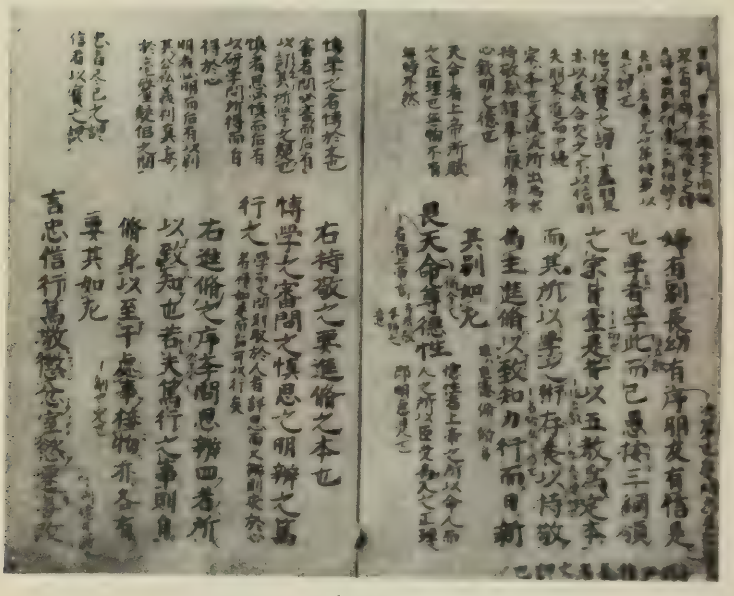
右接物之要。

原竊惟。今之人爲學者。惟記誦詞章而已。是以吾道之所寄。不越乎言語文字之間。愚嘗憂之也深。故推本聖人立

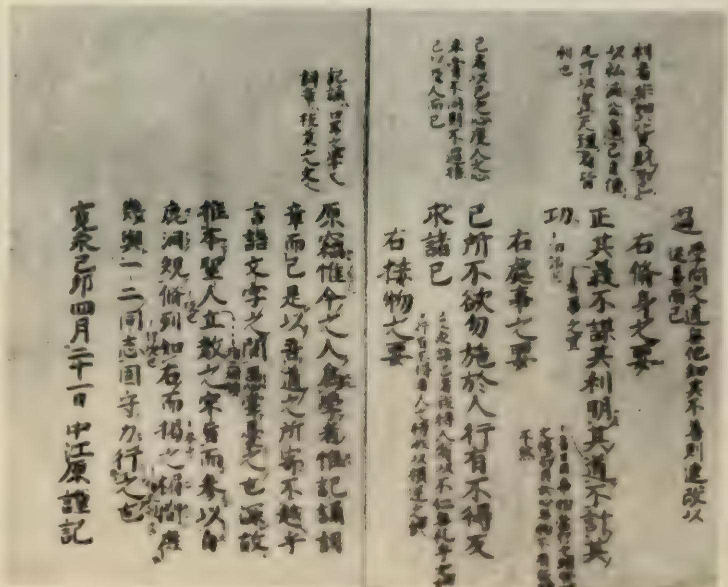
朱子學時代の教學綱領「藤樹規」



（一）



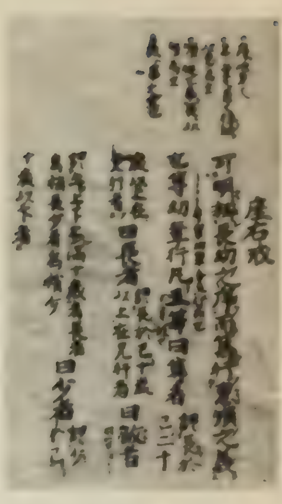
（二）



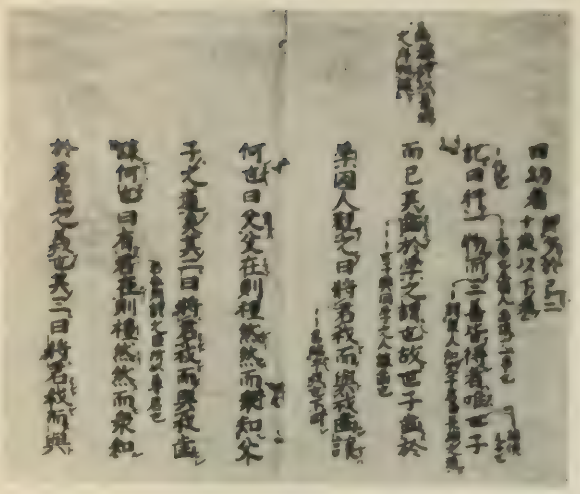
（三）

卷之三 自一七至一九頁及び卷之三解題並凡例參照

學舍座右戒

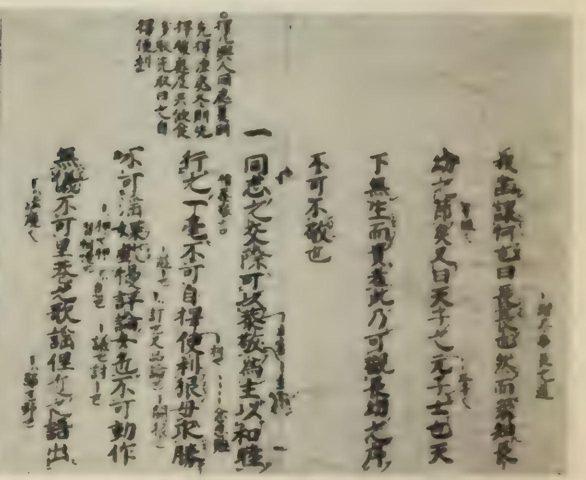


（一）

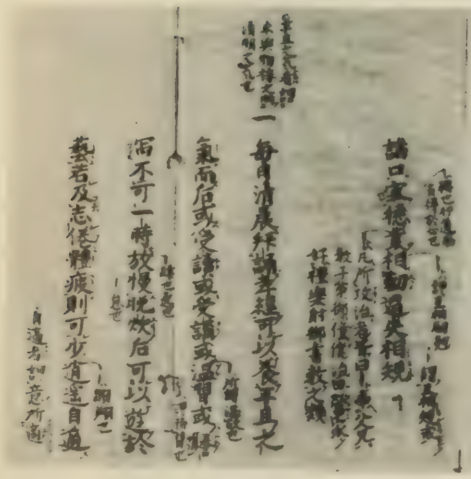


（二）

卷之三 自一九至二一頁參照



（三）



（四）

（愛媛縣伊豫郡中町　宮內禮氏藏）

現存眞蹟末尾有中江原謙記五字。

標目別本同、眞蹟無學舍二字、坐作座。

岡田氏一本無長敵少三字、眞蹟同。

教之宗旨而參以白鹿洞規條列如右。而揭之楣間。庶幾與一二同志固守力行之也。

寬永己卯四月二十一日

學舍坐右戒。戒年譜作銘。非是。

一可明辨長幼之序而篤行惠順之義也。尊長敵少幼輩行凡五等。一無長敵少三字。曰尊者。本注謂長於己二十歲以上在父行者。曰長者。本注謂長於己十歲以上在兄行者。曰敵者。本注謂年上下不滿十歲者。長者爲稍長。少者爲稍少。曰少者。本注謂少於己十歲以下者。曰幼者。本注謂少於己二十歲以下者。

記曰。文王世子。行一物而三善皆得者。唯世子而已。其齒於學之謂也。故世子齒於學。國人觀之曰。將君我。而與我

著別本一本及早藤氏藏幅同。眞蹟誤作知。

狠二本誤作狼。

齒讓何也曰。有父在則禮然。然而衆知父子之道矣。其二曰。將君我而與我齒讓。何也曰。有君在則禮然。然而衆著於君臣之義也。其三曰。將君我而與我齒讓。何也曰。長長也。然而衆知長幼之節矣。又曰。郊特牲 天子之元子士也。天下無生而貴者也。此乃可觀長幼之序不可不敬。

一同志之交際。可以恭敬爲主。以和睦行之。一毫不可自擇便利。狠毋求勝。不可淫媟戲慢評論女色。不可動作無儀不可里巷之歌謡俚近之語出諸口。宜德業相勸。過失相規。

謄寫、大之視寫之、詩、左氏傳、何陋軒記等有之。參看遺墨帖第五頁。

一本無於字。

大別本作太。書中或作大、或不然。後多作大乙。大乙別本初作太一、後改作太乙。

底本日月下、脫各字、據別本補。

一每日清晨拜誦孝經。可以養平旦之氣。而后或受讀。或受講。或温習。或謄寫。不可一時放慢。晩炊后。可以遊於藝。一無於字。非是。若及志倦體疲。則可少逍遙自適。一無若字。

大上天尊大乙神經序。

全書注庚辰歲作。按此及疑解。止見于全書。○年譜寛永庚辰先生時年三十三。讀性理會通有感。自是每月一日。必齋戒以祀大乙神。後遭儒人高橋氏喪。服闋。又會有疾。竟不復祀。又曰是歲夏草大乙神經。而卒不脫藁。按年譜所謂經者。今既不存。而其序及疑解。尚有傳焉。則庶幾足以知夫梗槩云爾。

大乙尊神者。書所謂皇上帝也。夫皇上帝者。大乙之神靈。天地萬物之君親。而六合微塵。千古瞬息。無所不照臨。蓋天地各稟一德。而不及上帝之備。日月各以時明。而不及上帝之恒。日月晦而明不虧。天地終而壽不竟。推之不見其起。引之

充下別本有塞字。

母下岡田氏一本揷入也字　蓋篠原氏之筆。

齊齋通。

不知其極。息之不滅其機。發之不留其迹。無一物不知。無一事不能。其體充太虛。而無聲。無臭其妙用流行太虛。而至神至靈到於無載。入於無破。其尊貴獨而無對。其德妙而不測。其本無名號聖人强字之號大上天尊大乙神。而使人知其生養之本。而敬以事之。夫以豺獺形雖受偏氣。而一點之靈明。猶不昧。而祭獸祭魚。而況人者萬物之靈貴乎。是以先聖脩報本之禮以教天下後世。按郊類天子之所獨。社宜天子而下皆得行之。天猶父也。父尊而不親。地猶母。（母下恐脫也字。）母親而不尊故也。雖不得行郊類。而至哉乾元。萬物資始。則不可無齊戒報本之事。故先聖作大乙尊神之靈像。以爲齊戒之

大乙別本作太一。下同。

本主擇每月聖降日以爲齊戒之期。定著祭文以爲洗心事天感通之助。而人々得遂報本之意而不借郊類之儀。至哉制作。仁哉聖謨。制作之聖。雖未聞其名。而靈像一以易象爲體要則始于伏羲。中于文周。而成于孔子。可推而知矣。其辨詳于疑解。社禮載于禮書。而粲然明于后世。靈像之祭禮以不載于禮書。故不明于后世。至漢自天使鬼神而授之劉氏名進平。弘農人。而傳于后世。然爲鎭宅之故唯號鎭宅靈符而世俗不知其眞。是以大乙神經湮晦千有餘年于此。儒者付之神仙術數。而不察。悲哉。靈像之奉祀。本主於報本之禮。而祈福在其中矣。凡祭祀皆然也。嘗考之。靈像之神造化天地萬

文

一本無徹字

而成毀下別本衍而成毀三字

祭祀別本作祭禮一本作祭祀

物主宰禍福充大虛徹萬徹一無徹字。非是。無所不知無不能不上恐脫所字。豈惟鎭宅一事而已誠敬以能事之而尊神感格則所謂與天地合其德與日月合其明與四時合其序與鬼神合其吉凶先天而天弗違後天而奉天時者也保合大和乃利貞是以不以天地之成毀而成毀不以軀殼之存亡而存亡是以避禍求福不足以道也實學者之先務初學之所由以貧持敬也全書別本無由字。愚嘗拜靈像而以爲易神之尊像而儒者之所敬事者也然宋儒排斥符章而無他左驗是以疑而不能決三年于此矣今讀唐氏禮元剩語而豁然得證悟靈像之眞而喜不寐命哉於是會衆說而析其衷斟酌祭祀之儀節而

岡田氏本載在雜著中。今依篠原氏本移于此。甲本乙本之別參看雜著解題及凡例。

文首起筆全書甲本墜一或字。今改從。下皆倣之。乙本則或字上有圈子。

羲全書作犧。

太極全書兩本作大極。

爲編。名曰大乙神經。與同志篤行。而庶幾不離尊神之左右云爾。寛永十七年八月十三日。江西中江原序。

靈符疑解。

凡九則。○按此篇全書以爲不審何時作。然据序云其辨詳于疑解則可以知其同時作也。故著于茲。

或問。以靈符爲易神之尊像。儒者之所敬事者。而又曰。其法章始于伏羲。中于文周。成于孔子。其何有所考據而云爾乎。曰。七十二道之符。即六十四卦也。正中之一規。先天圖也。其上後天卦圖也。規中之神象。易有太極之象也。悉是易卦之法象而無一毫之錯雜。而至理至教悉備。與筮占同其用。四聖之易象。皆具而無欠闕。故雖無左驗。始于伏羲。中于文周。成于孔子。觀靈像。則昭々有不可疑者。有字一在

大乙全書乙本作二太一一。其他大虛大極皆作二太虛太極一。

昭々二字上非是。　然則爲易神之靈像亦無可疑者。蓋儒者之道。以易爲主本。四書六經所說。諸儒發明之語錄。雖廣。皆本於易。於易理一毫有差。則異端也。以此可知儒者之所敬事者也。

或問。靈像之本旨可得而聞乎。曰。難言。靈像全體以象大虛正中之一規。則大虛之皇上帝。象像之本主也。規中神像。中卽大乙尊神。易所謂帝與大極是也。左卽示卦童郞。易所謂陽儀爻之九。大極圖陽動是也。右卽抱卦童子。易所謂陰儀爻之六。大極圖陰靜是也。統而該之。中皇上帝。左陽神。右陰鬼。大虛中無別物。只是皇上帝鬼神三靈而已

仝書乙本誤裝綴而前後本文一葉。

大乙仝書乙本作太乙。

仝書兩本其數傍俱附疑理乎之註而甲本則更抹殺之。

矣。規先天圖而象大虛。其中三神象大虛中之三靈者也。大乙尊神踐龜蛇者。龜蛇北方玄武之神象。故示尊神南面之意。而明青龍朱雀白虎勾陳諸神皆尊神之所使令也。上後天圖者。由先天而生天地之象。而象天地。故內圖七星。而示天之樞亦南面之意也。以七十二符圍繞者。以明造化千變萬化皆易卦神明之所經綸。而尊神之妙用也。變化爲符章者。神明其用也。八卦再變。而爲七十二道者。再變陰陽之象也。七十二者一歲七十二候。一氣七十二日之數也。此其粗略而已。待韋編三絕。而可開悟其數。異端不知此。而妄爲怪誕之名號。而爲其道之主宰者可

迂下一本無而字。

不篤信而不能敬中村伯常本作不能篤信而敬。全書甲本及一本改作亦同。似可從。

笑。

或問。詩曰。上天之載。無聲無臭。中庸曰。鬼神之爲德。其盛矣乎。視之而不見。聽之而不聞。體物不可遺。如此則上帝鬼神。可無形色。而圖畫其形者。不迂而誣乎。曰。上帝鬼神。本無形色之可言。以無形色。而神妙不測。通萬變。主萬化。昭々靈々。是以聖賢畏敬而不違。書曰。顧諟天之明命。此乃以明德昭視無形之神者也。昧者不能視無形之神。猶瞽者不能視有形之尊者。既不能視之。則雖敎之使畏敬。而不篤信。而不能敬。是以聖人不得已。而作爲靈像。瞭然於心目之間。而使有所畏敬。常々奉行。工夫熟則見其倚於

圖畫甲本作圖畵。

全書兩本俱脫於字。

衡也。見其參於前也。而無間斷。一旦豁然開悟。則以明德視無形之神。猶瞽者之昭明。而見有形之尊者。依有形之假象。而見得無形之眞體。則假眞一致。不見其別。是乃爲中人以下昧者而所制作也。經書亦猶瞽者之相。何以疑其誣也。或曰。假人形。而圖畫之者何也。曰。禮曰。人天地之德。鬼神之會。書曰。人萬物之靈。假人不爲神像。而又何假乎哉。異端竊此意。假人爲佛像者也。雖然似而非者也。

或人問。顏氏家訓曰。吾家巫覡符章絕於言議。舊脫於字。今謹補之。見。勿爲妖妄。見治家篇。言之尤詳。今所引者。止据朱子小學書爾。朱子小學用之編之嘉言篇。靈像非符章之類乎。曰。異端曲學權謀術數。悉皆無

疑下一本脫乎字。

不出於吾儒，雖出於吾儒而失其正，迷其眞。故或爲異端或爲曲學。或爲權謀。或爲術數。而斥其非，正其失，者也。故雖異端曲學權謀術數之言。以我，用彼，則猶有益。所謂以人，不廢言之意也。況本吾儒之言。而一旦彼竊之而爲己有者乎。小學引用顏氏家訓之主意。只矯時俗尙符章而不擇是非，之枉，而已矣。蓋宋儒於鬼神之事體認不熟。但欲矯時俗之蔽，而徒以口，取辨，而明儒悟其非，而辨其失，大有裨於后學。故愚不從宋儒而從明儒。加旃靈像全體易象則亦奚疑乎哉。如先天圖。邵子以前。在方士之手而見不爲我儒之用，可觀。

斯一本作レ此。

奉行下一本脱二報本二字一。

佗全書二本倶作レ他。

或問。靈符一祈福避禍之術也。雖全是皆爲易象。恐非修身俟命。不計功利之義。曰。以靈像爲祈福避禍之術者。后世傳者之誤而已矣。靈像奉行之本旨。以報本爲主。而受福從之。祭禮皆然也。亦奚疑。譬孝本報親之行也。何求靈感乎。然孝心有誠則古今靈應。歴々可見。凡祭祀之受福。如斯而已。故曰。淫祀無福。脩身俟命者。脩身之道。而俟天之命者也。靈像奉行。報本之禮。脩身之急務也。心一於報本。而無佗求。則所謂俟命者也。然則何計功利之有乎。陋儒泥宋儒之注解。而曰。一不計功利。不諂鬼神。其指趣不異於禪學儒教惡功利者。先有此心。則必不得功利。雖得不

悠久全書兩本俱作二攸久一。

旨上全書兩本及一本有二本字一。

貪全書兩本俱作レ貧非レ是。

全書兩本其德上有二則字一。

眞不久故而已本非惡功利惡功利者欲令得眞正悠久之功利者也堯舜之治。非功利乎筮占之旨。非吉凶悔吝之計乎。宜致思焉

或問劉氏傳授之事涉於怪誕如何。曰。不然。按孝順事實錄三綱行實此等事甚多。董永叔謙之事。其尤者也。（其一作甚。非是。）亦奚疑乎。曰。劉氏有何陰德。而有此靈感乎。曰。劉氏爲人雖不可考。而天與之像則其德可知矣。顧其性至孝而家貧。是以有此靈感乎。至孝之外。無別可感天心者其德可想矣。

或問。易神之靈像。而以神仙而題者。何也。曰。文帝好神仙。故

全書兩本俱有疑自傳授至則之間有錯誤乎之脚註。一本亦同。

加神仙字也。凡道家皆以易爲本。而以神仙而附會。本無而后加無疑。傳授之天使。不方士而書。則尤可証其後人之加號也。又以此可見吾儒之眞天心矣。

或問。靈像之祭祀似國家之郊類。非僭踰乎曰。社宜之祭。自天子以至庶人。得行之則祀上帝之禮。不可闕。然天尊獨而無對。故無郊類通行之法。而君親臨之。厚莫大於焉。是以雖豺獺之賤者。知祭魚獸。而況萬物之靈乎。此乃靈像祭祀之所由制作也。人々得行報本之禮。而不僭國家之郊類。制作之精義。可謂入神矣。顧三代之俗。雖通行之。至暴秦而不傳。是以漢儒不知。而不載于禮書。天憂此法之

術下全書三本俱有二而字一。但甲本及乙本抹二殺之一。
歎全書兩本俱作レ難。而甲本後人改レ歎。
然下一本脱二有正二字一。
始下脱二生字一。
生后之行乙本作二生行一。

泯沒、（一無二之字一。）而與二劉氏一而復、傳二于世一。然爲二鎭宅一而傳レ之、故世俗只爲二鎭宅靈符一、儒者泥二符章一而附レ之、神仙而不レ察。是以、靈像之眞術、晦盲否塞。而生二子之疑一。（術下一有二而字一。恐衍。）可レ勝レ歎哉。（一歎作レ難。非レ是。）

或人問。按二符章下細注一。悉皆消レ災、受レ福之事也。奉二事之一者。人々可二皆得一其應一乎。曰。禍福壽夭、皆有二一定之命一、而不レ可三以レ人變二。然有正有レ變、而又有下受二始生之初一者上。有下由二生后之行一而受者上。凡人隨二始生之命一、而不レ由二生后之行一而受レ命者鮮矣。若能以二誠敬一而奉祀、則無下由二生后之行一而受二禍命一者上。天定之禍福壽夭。不レ易レ免。然有二吳二免レ禍等之事一、則能盡二奉祀

勵勤乙本作勵勉。

本卷正文全書三本所載俱止于茲。

第三卷序篠原氏所修全集、在本今集則載在第一卷。

禮元剩語在性理會通中。

暗處來魔、復見佐簡補遺與中西氏文中。

之誠、無內外十六景之累。內外八景見後。則雖天定之禍災、亦可變消。若無變消、必有身后之幸。顧以七年之病、而求三年之艾、非百倍其功、不足以救之。其可不畏敬而勵勤乎。

附、內外八景。

按此數語止見全書岡田氏本。又書其首曰、丁卯夏於洛編文集成。偶得先生眞蹟、乃有此語。故嗣錄之。蓋古人有是言也。予謂靈符疑解有內外十六景之累。又第三卷所載愼獨解有八景、用此克去、即謂此也。但此數語未見出典。豈性理會通禮元剩語所載也耶。是二書予久欲觀、而未得也。特爲恨々爾。〇庚辰秋予囑津川仲通、就京師某家訪求先生遺書。以其先世小川人也。仲通乃訪其家、得觀所藏先生眞蹟者、亦此語也。因錄見示。予就讀之。有一二字不同。故採注之。但如其字畫、審聽之、頗可疑。意全書本所謂眞蹟者、必別有見云爾。

染根起欲。　暗處來魔。　滯藏不化。　意動有感。感疑惑誤。

厭妄沈息。　欣眞落法。　頑虛誤眞。　太詳廢學。廢一作疢。

此內八景有一、即離尊神。當時猛省之。一疊用時字。後同。

擅自揚已。易措品人。(措一作指。) 躁動罔益、闇闕可畏。施無含蓄。發不調停。臨交致爭。立業專殖。

此外八景有一即離尊神、當時猛戒之。

論坐禪 (全書注辛巳作。)

瞿曇迷而入山。又迷而出山。達磨惑而面壁。又惑而背壁。壁如蟻旋磨。后世佛者。以入山面壁為大覺了悟。此謂刻舟求劍。求名而坐枯禪。則市井之俗腸志道而守頑虛。則猶緣木而求魚也。(虛拾遺作空。) 靜室閑坐。雖如無心猿之跳弄意馬之奔馳。只是瘧疾之閑日而已。(疾拾遺作病。) 畢竟何足恃也。

知止章之辨。(此篇止見全書別本。)

所下別本亦空白一字

致別本作考。

學者問曰。先賢董公嘗以大學經中自知止而後有定。至則近道矣兩節。爲格物致知之傳。黃氏亦取之矣。是果能得朱子之所未得者歟。曰。愚嘗觀此。服其用意之深而所見之卓。服膺不忘。蓋亦有年。以今攷之。有未安者。夫所謂知止者。物格知至以後之效。而格物致知者。大學最初用力之地也。諸傳自誠意章而下。皆以工夫而言。不疑衍。不應於此遽先以效言之也。所謂能得者。明明德親民皆得所止之事。不應遽及於致知之傳也。且以此節爲致知之傳則聽訟章。又無所□矣。朱子於此豈不遽之審哉。不遽當作遽不。但所謂格物爲窮理之事。而非扞格外物者。則不必證以他書。而於此節文勢可尋而

知之。此是必初年奉朱說時作。

書　解題並凡例

解　題

一

本卷は先生の漢文書簡集にして、多くは門人の質疑に答へ、又別に臨みて切々の情を抒べられたるものなれども、又某子の卷に書せられたるものも一二にして止らず。而して倭文書簡が其の分量非常に夥しく且晩年のもの其の多きに居るに反し、漢文書簡は分量さまで多からず、且つ壯年の作をも含み、隨つて兩々相對して始めて先生の全面目を窺ふに足ると同時に、兩々相對して始めて先生學術の變遷を知るに便なるものなり。凡そ筆執ることを懶しとせられざりし先生が書簡によつて盛に通信教授を行はれたることは先生の敎育に於ける一の獨異の點にして必要に應じて時々の感想發明を書き表はされたるものなれば、心意緊張して一の空言無きは喜ぶべく、徒に文辭を弄する人の文に比して內容充實し、修養上觸發せらるゝ處頗る多きを覺ゆべし。

二

今姑く先生學術の變遷の上より斯篇の內容を觀るに、開卷第一に小川子の疑問に答へられたる文あり、明日又此の文の內容〻非なりとして、更に之を訂正せられたるを見る。病劇しく苦悶やる方なき間にありて、猶且つ孜々として研學に倦まれざりし態度を窺ふべし。此の如く其の學の日々に新なりしこと、實に先生の一生を通ずる一大事實にして、行年五十にして四十九年の非を知りし古人の例も

想ひ起さるゝなり。さてかゝる不斷の向上の間にありて特に其の著しきものをあぐれば、吾人は大凡そ之を四大時期に劃するを得。年譜によれば、年齢未だ二十に滿たざる時、四書大全を得て暗誦せらるゝまでに精讀せられたりと言ひ、又行狀其の他によれば、先生十六歳にして十三經を通誦せられたりと言はるれども、先生第一期の修養は、後者を主とするものに非ずして、我が國普通の儒者の例に於けるが如く、前者卽ち四書を主とせられたるものにて、それも專ら大全本を根柢とせられたること、本巻中小川子に答へられたる六七篇の答問が何れも大全中の何人かの説を引用せらるゝに徴して之を窺ふを得べし。第二期としては、三十一歳の頃を以て之を劃すべきものゝ如し。思ふに儒教全體としては、四書の如きは僅に其の一部分に過ぎざれども、之を修德上より見れば、其の要領は凡て四書の中に總括縮約せらる。是に於てか先生の修養は儒教全體の中に在りて既に其の大要を領得せられたりと謂ふべし。然れども先生は是を以て修養上極めて窮屈にして暢達を缺くとなし、遂に轉じて五經によつて、之が解決を得んとせられたるものゝ如し。年譜三十一年の條は、よく此の邊の事情を明かにせり。曰く「これより前專ら四書を讀んで堅く格法を守る。其の意專ら聖人の典要格式等逐一に受持せんと欲す。然れども間ゝ時に合はずして、滯碍行ひ難きを以て、疑つて以爲らく、聖人の道斯の如くならば、今の世に在りて吾等の及ぶ所に非ずと。是に於て五經を取つて熟讀するに觸發感得あり云々。」と。かくて修德上一大活路を開かれしものと見え、此年の作、持敬圖説及び原人、三十二歳の作、藤樹規等を繙けば、詩經書經易經等によつて廣濶なる別天地を發見せられたるを知るべく、特に人間生活の根本事實として、そこに儼たる天帝の支配あり、吾人の一言一動は吾人が法則に違ふまじと強ひて

努力するに非ず。所謂上天のことは聲もなく、臭もなく、吾人の一言一動は卽ち天の吾等をして易々として自然に行はしむる所に外ならずとの確信に達し、茲に始めて前の躊躇の地を去つて天空快濶の氣分に近づかれたるものと思はる。先生の得意蓋し想察するに堪へたり。然りと雖も、此等は何れも修德の標準を外に求むるものなり。換言すれば上述の二大時期は要するに未だ朱子の居敬窮理の境地を出でず。進んで止むことを知らざる先生の體驗生活は、こゝに第三期に轉換すべき內部的必然の要求あり。適〻三十三歲に至つて王龍溪語錄を得て之を讀み、宿疑大に氷釋せらるゝ處あるを喜ばれしも佛語を間雜し禪學に近きことを恐る、從つて尙疑ふべき點無きに非ず。されば王龍溪語錄は先生をして、一路の光明を確めしむる一大機緣となれるも、未だ其の全體を明示するに足らず。かくて修養上の朱子學を逸脫せんとし、且つ其の可能なるを知りつゝ、猶其の歸結すべき光源を確認せず、只模索の中に過ぎられたるものゝ如く、本卷は亦此等の事情を髣髴せしむるものに似たり。壬午三十五歲の夏、小川子に答ふる文中にも「未だ集註を以て主本となすの罔を免れず。」とも言ひ、又「文を抑へ行を揚げ以て諸賢の蒙を發す。無言の心學を指示するものなり。」とも言はる。卽ち前者が明に朱子のみに據るを非とせられしを示すと共に、後者が後に述ぶる王子の學に接近せられつゝあるを物語るものと謂ふべし。吾人は便宜の爲め、是を以て第三期とし、假りに王學模索時代と名づく。このことは三十二歲以後に成れる論語鄕黨啓蒙にも不時不食の節に集註が「時ならずとは五穀成らざるなり。果實未だ熟せざるの類なり。」となせるを排して、時ならずとは、かゝる狹義のものにあらず、食ふべからざる凡ての場合を意味す。卽此の句の前後食はざるものゝ總て此句にて代表せりとして、「五穀成らざるの類

は以て其の蘊を盡すに足らず。」と指摘し、又「廐焚けたり。人を傷けしか。馬を問はず。」の句に集註が「蓋し人を貴び畜を賤しむ。」と解せるを斥けて以爲らく人を貴び畜を賤しむとするは、只之れ皮膚の講のみ、先づ人を問ひ、未だ馬のことに及ばざりしに過ぎず。以て聖人先づ人類を愛し而して後動物に及ぼす心を見るべしとせらるによつても、當時先生の朱子學に對する態度の如何なるものなりしかを察するを得べし。人或は言はん。名づけて王學の模索時代と爲すもの丶中に、既に王學の中心思想を把握せられたるものあるに非ずや。現に三十五歳小川子の疑問に答ふる文にも「蓋し經に心あり迹あり訓詁あり。訓詁を學んで其迹を講明する者は初學未だ文字を知らざる者の務むる所なり。既に文義を曉れば則ち專ら正經の上に於て體察玩索して須く心々融會の妙を求むべし。」と述べらる丶に非ずやと。然り名づけて模索の時代となすと雖も、體得に敏なりし先生は王龍溪語錄等によつて既に早くも陽明學の要領を悟了せられしものなるべし。又此の時期の著作に屬する翁問答にも陽明を賢人の列に入れて特に尊崇の意をあらはされたるを見るも、（三十三四歳の作論語郷黨啓蒙翼傳によれば此の頃「性理會通中の陽明語錄を讀まれし證あり。」）未だ陽明學の全體を見ず、隨つて此等の心證が明かに陽明學の眞髓なるを自覺せられざりしのみ。斯の如くにして一縷の光明を辿りつ丶、只管其の大源を模索し且つ自ら心法の大要を案出したる時、恰もよし三十七歳にして王陽明全書を得たり。是に於て先生の修養は確たる第四期に入り、更に一段の進境を開拓せられたるものにして、朱子の如きは要するに外的知識に重きを置けども、かくては徒に法則を外に求むるのみにして、齷齪として日もこれ足らざるの恨無きこと能はず。凡そ善惡是非　標準の如きは、心の良知既によく之を知る。一念良知を離れざるは卽ち是れ善なり。形に泥み迹に滯りて、良知の明

萬古一日の心法を領得せざるは、やがて、修德の狹迫なるを免れざる所以なり。內自ら獨を愼み良知に至れば、自らにして惡を去り善に就く、これ最も易簡直截にして、亦最も確乎不拔のものに非ずや。本卷三十八歲國領子を送る文に「善く自反を用ふれば世間種々の苦楚煩熱忽ち消えて胸中清淨なることと蓮華の清漣に濯ぐに似たり。既に自反せり。而して苦楚煩熱除かれたるは、猶疾病始めて癒えて氣の餒え神爽やかならざるが如し。故に獨を愼みて大本を立つるは猶ほ病後に元氣を補養するが如し。」と言はれ、又四十歲春、土橋子の卷に書せる文には明瞭に運命の自然に定まれるを述べて死生窮達貧富貴賤得失禍福皆自ら一定のものあり、是を以て其の良知に至れば正命斯に立つ。命分の如き豈に論辯するに足らんやとも述べらるゝに至れり。是に由つて之を觀れば、第三期第四期の修養は專ら王子良知の學の心法を基調とせらるゝものにして、第三期は第四期に達する準備時代にして、三十七歲以後に至つて自覺融會の時期に達せられ、終身の憂是に於て大に醫せらるゝものありしものと謂ふべく第一期第二期が朱子居敬窮理の學に其の基礎をおかれしものと大なる相違の存するを發見するを得べし。〔先生學術の變遷については修正すべき點あり。又朱王兩學以外先生獨創の意見についても、尙記述すべきものの多し。委しくは岩波文庫本翁問答並鑑草解題及藤樹先生遺墨帖附錄藤樹先生眞蹟攷を參照せられたし。〕

以上先生の學術が、前二期にありては、四書に求むるか、五經に求むるかの相違ありとは言へ、要するに修養の標準を外に求むる朱子學にあり、後の二期にありては同じく四書五經を最後の標準とし、又模索と自覺との區別こそ存すれ、要するに修養の標準を吾人の心の內部に求むる王學的思想を自ら案出し、後之に轉換せられたるものなり。されど吾人は是を以て直に先生の學術は、後に至つて全然朱子學を無用視せられたりと言ふものに非ず。否先生の學術の特長は支那上下四千年中、學者としては

第一人者と目すべき朱子其の人の學を基礎とし、之を通じて心學の泰斗王陽明其の人の學に入りたまへる處に異彩あり、また光輝あるなり。王子自身は夙に外物に卽して內心の標準を定めざれば、其の虛無に陷るべきを喝破し、大學古本序にも其の事に卽して之を格すに非ざれば則ち亦以て其の知を致すなしとも言ひ、以て標準を內部にのみ求むるの弊を指摘せらるれども、其の末流に及んでは兎角此等の弊竇に陷り、甚だしきは經書の研究など全く之を捨てゝ顧みざるの樣なり。先生の學術は則ち然らず。徒に外物にのみ求むるの支離に陷らざると共に、內にのみ求めて外を忘るゝの固陋にも趨らず。善く中庸の道を得られたるものなり。されば晚作大學考にも、先生が程朱に背いて陽明に信從するかとの或人の質問に答へて、程朱陽明ともに同じく吾が道の先覺なれば經義說話に多少の異同ありとするも、畢竟其の道は同じ。故に吾等後學が此等先覺を宗師とするには、中庸の至道を尊信するを以て至極眞實の信從とすとし、こゝに同黨伐異の僻事を斥け、心廓然大公宜しく其の說の至當を主とすべきを力說し、更に程朱陽明皆先覺なり。吾何ぞ一方にのみ偏して左袒する處あらんやと、論理整然一絲亂れざるの論法を以て朱子學と王學に對する先生自身の態度を明快に論斷せらるゝを見るべし。

凡　例

一、本卷底本を篠原氏本に採りたれども、排列の順序は、他の多くの編の例に於けるが如く、全く全書岡田氏本に從ひたり。

一、對校に用ひたる岡田氏本に三種あり。其の一は篠原氏の見たりと稱する岡田氏本にして、內容の相當完全なるもの、其の二は岡田氏未整理本にして、內容不備の點尠からざるものなり。今前者を

全書甲本と名づけ、後者を全書乙本と呼ぶ。此の二者を併稱するに全書兩本若くは單に兩本と呼ぶ。其の三は岡田氏一本にして、未整理本に比しては、內容整へるものなり。既に編纂總則に於て述べたる如く、この一本は必ず岡氏以後の人の筆寫に係り、且つ後人之に岡田之印の藏書印を捺したるものなるを想像するを得べし。此の書は筆力極めて幼稚なれども、全書甲本と一致する部分頗る多き點より同書を底本となしたるものなるべきを知る。因つて甲本と一致する部分は甲本のみの名を示し別に此の名を擧げず。

一、全書岡田氏別本は前編卷末に終り、本卷以下之れ無し。

一、全書岡田氏本の所載は編中答書（不レ知レ爲二誰人一。且失二年紀一。）に止る。甲戌春答仙以下は篠原氏本によつて之を補ひたり。

一、篠原氏本によつて補ひたる部分に草果別本藤樹別集なるものあり。草果別本の如何なるものなるかは今佚して之を知るべからざるも、藤樹別集は常省・三輪執齋・伊藤東涯三先生の門人たる原田氏の家に傳來したる壹冊の筆寫本あり。此は安原貞平（伯亨霖寰）の輯めたるものにして、享保十九甲寅正月志村仲呂之を寫したるものなり。委しくは全集卷之三文の凡例について見らるべし。

昭和三年戊辰一月五日

加藤盛一謹識

今據頭注曰。壬申之夏。今謂岡田氏乙本脱此二文。唯卷頭有標目耳。而甲本則載二文。是以知甲本爲整理本、乙本爲未整理本也。

參看孟子梁惠王下篇滕小國也章。

若下以岡田氏一本傍記補義字哉四字。

藤樹先生全集　卷之四

文集四　書

答小川子疑問。

草果作寛永壬申之夏折衷于仙之疑問。○据年譜是歳先生尚在大洲。

所疑似無意義。以大王之事答之者。勉文公以仁者之事。待之至厚。孟子接人之仁也。然慮文公之不可能。故繼之以或說應變之義也。如此看。則無可疑者。若以爲以其人所可及者而已可答之。則於孟子之時。逢孰人說吾道乎。於此等處闕疑。只以一章之大意宜熟玩。

明日又與仙。

擧下客全書誤作ㇾ容。

於全書岡田氏甲本作ㇾ子

岡田氏一本日下無ニ之字一。

說下全書脫ニ末節二字一。

全書乙本作下答ニ小川仙一丙子夏上。

遺全書乙本作ㇾ者。

昨疑問來呈之時。病劇懊憹而坐客打話。爲所擾亂主翁不惺々不及讀本章。而妄答。雅素存養之粗淺。敗露於此。可耻之至也。然又噬臍之餘。喜來日之戒也。（日下一無之字。）今無問病之客。而病亦問也。（客一作容。非是。）於是有疑。（疑下一有問字。恐衍。）因取書讀之。吾子之所疑。無意義。昨吾所答亦不當。以初節大全許氏之說。末節集註圈外楊氏之說觀之。則無所可疑。義無所可答。（義一作又。）請熟讀二說。而以時勢攷之。

答小川子。（草果作丙子夏答小川仙。全書本注有丙子之夏四字。）

來諭所說得時措之宜。庶幾確定這箇志。（這一作者。義同。）而養以顧諟天之明命之敬。他日於觀其行之時。而敢以復其言。此事

篠原氏本本題上冠丁丑之夏四字。
今書甲本題注丁丑之夏孟子萬章篇問舜之不告而娶章之疑問。
乙本題注孟子萬章篇問舜之不告而娶章而冒頭注丁丑之夏四字。
右下底本提行、今改從今書。人下岡田氏一本無之字。
今書岡本論上俱有而字。

於吾道關係尤爲大焉。故以此勉之。此一作之。

中江原稽首。

析衷於小川子疑問。本註孟子萬章篇問舜之不告而娶章。

疑問所説。深爲有理。蒙引之説。不可曉。大抵蒙引此等説話。多皆不可用矣。愚有一得。其説如左。夫舜父母嘗欲害舜。而舜毫釐不有怨其父母之心。而況以不聽娶。懟父母乎。廢人之大倫。以懟父母二句以發明聖人處變之義也。就中以懟父母一句。專説天下公共之義心。必不可就大舜身心上論論上一有而字。言以不聽娶廢大倫。而使天下之人懟其父母之頑嚚也。孟子推明大舜處變之權。而曰。如告則廢人之大倫。而又以此使父母受天下之懟惡也。是以不行必告父母之經。而

岡田氏一本無爲字。

篠原氏本標題及題注作析衷於小川氏疑問。全書作答小川子質問。拾遺同。○本注云々。

全書兩本題注及頭注有丁丑二字。

看得全書甲本岡田氏一本俱作看讀。

事下全書甲本無而字。

行不告之權也。如此看。則尤爲切當親切乎。一無爲字。朱子不有明解不知如此看否。

答小川子質問。本注有孟子萬章篇一鄉之善士章九字。按此亦丁丑作。

疑問之說甚無意義。凡讀書之法。先看得主意。而后字々句々詳玩將去。則不失其本指。而得其竅。孟子曰。說詩者不以文害辭。不以辭害志。以意逆志。是爲得之。讀書之法。亦然也。講究以不依著此法。故有此疑惑而已。疑上一無此字。非是。此章主意。在以文會友。以友輔仁。的。一無以友二字。非是。蓋以頌詩讀書爲取友之一事。而以發明以友輔仁之道廣大而無窮也。之下拾遺無一字。事下或無而字。未始在讀書論人物的說。其意義詳于集註及大全。是以不贅

全書乙本只下無以字。
澤原氏本作答小川子書。
全書乙本缺以下一篇。
全書甲本無篇字。
事理甲本作□字理一

焉、未足二字。只以形容取友、進善之心廣大而無窮而已矣。大下或無而無窮三字。非是。

答小川子。據全書亦己卯作。

孟子梁惠王之下篇。王下一無之字。又無篇字。王之臣有託其妻子於其友。而之楚遊者章之疑問。乍讀如可喜者。而細以本文事理、求之。則失之遠焉。此章之主意。在論君臣上下各不勤其任、墮其職。則憂辱必及其身也。在一作有。墮一作隨。必一作心。皆非是。而孟子立言之本旨。則欲戒宣王之不君而災害將至也。蓋人君不止於仁。而爲天下僇。猶不止於信。而所棄於其友。不能治士、而所已於其君也。然暴君暗主常以亡身、之虐政。却以爲安身治國之

易乾卦云、閑邪存其誠。

計而不能察。虐一作虚、非是。是故先設易曉之二事、而啓其心。二或作三、非是。推類而匡救之其陳善閉邪之意切矣。閉一作閑、非是。夫以已之一句爲有官守者不得其職則去之義也。其鑿甚矣。所謂不得其職者。其君無道而不能用我職分之當爲之謂也。非其才德不足而不能守其職之謂也。不能守其職之小人而豈得行不得其職則去之義也。不曰去之。而曰已之。則君之所已。而臣之非所致其職於君。而去也明矣。此章三節一意自遠而輕者而歸著近而重者。猶詩之章次。宜熟玩。或又取集注憚於自責一句而遂傅會以爲此章之主意。其亦誤矣。憚於自責一句貶議王顧左右而言他之過失也。非論此章之主

旹時古文。

篠原氏本標目作壬午之夏析裒於仙疑問。

全書甲本題注壬午之夏。

全書甲本無上有則字。

也甲本作與。

甲本無學訓詁三字。

意焉。集注圈外趙氏之說。卽此章之主意也。這箇最宜明辨之也。原謹答小川子。旹五月初四日。遺稿删原謹以下十二字。非是。

答小川子疑問。全書作答小川子疑問。拾遺從全書。子作氏。皆以爲壬午作也。

論語述而篇。文莫吾猶人也章之疑問。諸本多脫也字。今從拾遺。雖於集註之評則得其當。而於正經之主意。無體認之質問。無上一有則字。是何言也。是何言也。二也字或作與字。如許之末務。素非吾之所以望於子。一無以字。子亦素非其所志。顧以未免專以集註爲主本之固。故有此皮膚之問而已。蓋經有心。有迹。有訓詁。學訓詁而講明其迹者。一無學訓詁三字。非是。初學未知文字者之所務也。已曉文義。則專於正經上體察玩索。須求心々融會之妙。而后當有吾所

詩書甲本作四書

望之疑。若不如此用工、則與俗學相違、不能以寸矣。愚嘗有一得。其述如左。

文者詩書六藝之文。（詩或作四。非是。）及文辭。凡斯道之發洩處。條理不紊。燦然成章者。皆是也。躬兼形色心性言。行者天理流行之意。包忠信言。君子謂中庸也。所謂君子中庸之君子是也。（中上謂字。所上也字。皆衍。）躬行君子。所謂允執厥中之意也。（一無厥字。非是。）未之有得者。非全未能行也。希天之至誠。孜々不足之聖心也。非徒自謙以勉人。蓋此章之主意。在抑文揚行以開示務本之實學也。按子以四教。文行忠信。而以無言為四教之脈神。（一無之字。）而孔門之諸賢大率以文為重。雖以子貢之賢。猶有子如不

仝書甲本因下有揚字。

爾猶人下仝書甲本無也字。

易甲本作能。末之有得仝書甲本誤倒之有二字。

言則小子何述焉之疑問。是以夫子因自道之論。因下一有揚字。恐衍。今從拾遺。抑文揚行，以發諸賢之蒙。諸一作彩。即諸古文。指示無言之心學者也。蓋文本非易能。然已有迹之可據。則雖未至君子中庸之地位者猶可及。而且對行而言。故曰。文莫吾猶人也。乃是自然抑文之辭氣也。然不正言猶人。而曰莫吾猶人也。莫者疑辭。又是希天之至誠。孜々不足之聖心也。躬行君子。本無難。然執中，無倚之經綸。無聲無臭。苟不固聰明聖知達天德者。不易能。易一作能。非是。故曰。躬行君子未之有得也。一乙之字。非是。躬行君子。便是吾夫子之事。而云爾者。希天，之謙德。而自然揚行之辭氣也。文曰人。行曰君子。所謂如有周公之才之美使驕且吝。其

全書甲本不書年紀。

視聽食下全書甲本無而字。

錯全書甲本誤措。

餘不足觀也已之微意躍如也。夫如此體察看得則庶幾有嘿識心融於正經之宗旨乎。原謹答小川子。

答族弟好古質問。全書註壬午作。○好古卽右門。

君子不離席。而登九天之上。入九地之下。

右體認之語。略有理。然不親切的當。蓋明德本然之量。通於天地有形之外。其大無外。其小無內。其妙用不疾而速。不行而至。故明明德。則欲升九天之上則升。欲入九地之下則入。自由自在。絕言議焉。明德昏昧。則視而不見。聽而不聞。食而不知其味。視聽食下一無而字非是。不異于桎梏而不能檢其身。而況上天入地乎。請熟玩體認。老佛於這箇說錯了。這一作者。原謹答質問。

全書不書年紀。眞蹟印本同。

亦上子眞蹟印本作氏。

官眞蹟印本作寛。

成德甲本作達德。

一無此五字。

原謹以邇言餞熊澤子之行。壬午作。下同。

不佞雖非温故知新者。二三同志謬推以爲句讀之師。不得已而竊依惟斅學半。念終始典于學之法。而常恐或有誤后學。若蹈虎尾涉于春氷。熊澤子亦有此招。今將趣豫方。臨別告曰。夫師範之官。立本於隱微。而生道於講論。或與其進也。不與其退也。與其潔也。不保其往也。而不爲已甚。或語上。或不語上。或擧一隅。以待其反。或憤悱而后啓發之。或進之。或退之。或如時雨化之。或成德。或達財。財與材通。或答問焉。敷之。如灌漑萌芽。拱把合抱。各隨其分。答之如鐘聲。音之大小。必

岡田氏一本無焉字。〔眞蹟有焉字。〕

事仝書甲本作言。〔眞蹟作事。〕

隨其扣育之如水潤物。遲速由物。而不至於浹洽不已。約之，在本于無言之宗而不失人。亦不失言。格物致知，教學相長。以與致中和，天地位焉。萬物育焉而已矣。原有志。未能得其，萬一。夙夜念茲在茲。子亦勉旃，欽哉。按伯繼之伊豫事止略見于此。檢事蹟考・實錄及傳・常山記譚泣不輒豈其欲往而卒不行者也歟。

送森村子。子下遺稿有序字。非是。

森村子遊原之門。用力於心學。有年于茲焉。一無焉字。今適方論講終篇，講遺稿作語。從父之令歸省。肆述卷尾一章之意，以竊比於送言之事。事一作言。蓋天命之謂性。性之實體。有玄妙不測之神靈而無聲無臭。有中和無偏之至德而無意無習。生民之大

〔一貫下一本有二而字一。〕

〔其眞蹟作レ厥。〕

本學問之靈樞也。然自レ古知レ言レ性者。多迷二其眞一。不レ知レ言レ性者。日用而不レ知。是以告荀楊韓於二情欲已發之後一見レ性。故或以爲レ生。或以爲レ惡。或以爲二善惡混一。或以爲レ有二三品一。其失何啻千里。〔里下遺稿有二乎字一。〕老氏以二出胎時一見レ性。佛氏以二父母未生時一見レ性。可レ謂二甚近一レ理。而未レ能レ見二玄妙不測之神靈一。一貫切近之孝德。〔貫下一有二而字一。非レ是。〕還以爲二頑極的一。比二之荀楊一。雖二稍高一。而失二其眞一惟同。聖賢有レ憂レ之。肆易曰。一陰一陽。謂二之道一。繼レ之者善也。成レ之者性也。此以二父母未生時一示二其本眞一也。孝經曰。親生二之膝下一以養。父母日嚴。此以二出胎時一示二其實體一也。〔其一作レ厥。〕孟子曰。孩提之童。無レ不レ知レ愛二其親一也。及二其長一也。無レ不レ知レ敬二其兄一也。此以二神發知之

〔眞下眞蹟無也字〕

〔眞蹟與底本合、遺稿非是。如篠原氏注記〕

愧岡田氏一本在講字上。今日下全書甲本無之字

時、示其靈照之眞、眞下恐脫也字。又曰、大人不失赤子之心、此以情欲紛擾之時、示其本體也。孝經曰、夫孝天之經也。地之義也。人之行也。此以示三才一貫之實體也。遺稿作此以三才一貫示其實體也。理當如此。然檢諸本、無一同遺稿者。是必後人删潤也。故不從。順茲安身、立命、則未能至至處、亦君子之徒也。能下遺稿有身立二字、非是。悖茲立心、則或入異端、或入禽域。是故雖有周公之才之美、不知命、無以爲君子也。論語以此終篇、厥旨至矣盡矣。厥一作其。夫子之愛親命也。是故愛敬其親、而不失中和之眞。此之謂知命。今吾子歸事父母、克格物致知、以允執嚴父配天之中、而免三千第一之罪、一下或無之字。無愧今日之講友、惟幸。愧字一在講字上、而無之字、非是。戒哉。懋哉。

篠原氏本標目作送森村子歸鄉。

今書甲本標目及題注中粉書抹殺歸鄉丙戌冬五字。蓋同編者之所爲乎。岡田氏一本亦作送森村子。乙本作丙戌。〔遺蹟作丙戌冬三字〕

岡田氏一本子下無之字。

今書乙本篤志下無好字。

話或當作語。

送森村子。歸上草果有與字。恐衍。不然子與即其字也。遺稿作送森村子序。非是。〇此首草果全書並以爲丙戌冬作。今從之。

親之愛其子。仁也。而俗尚名利之意。間雜於其中。則其仁所蔽而愚也。是以人有拒其子之爲學者。而其爲子者。誤謂父拒我學。而不知所以勸我學也。蓋父之拒子之爲學者。不知位祿功名本由學而得。卻患學問有害其子之位祿功名。而已。如識得其實理。則必不可不患其子之不好學也。患上或有有字。子下或無之字。非是。今從草果。然則所拒其學。非所以勸其學乎。爲子者。識得此機。而篤志好學。自反愼其獨。則必觸發父之靈明。而其愚亦可氷釋融通矣。森村子之境遇。有少似于茲者。故特擧以爲臨別之話。於是森村子問用力之實地。曰。吾子之不從父令

欄〈全書兩本作〉把。

逆下岡田氏一本脫之字。

全書兩本題注丙戌冬。全書乙本前文之後記標目而已。而本文在迄中西氏子文後。

而來。豈無父之心乎哉。善知來學之義。雖違父令而實爲嚴父配天之大順也。此知也。不學不慮。所謂良知也。能體察此知。而嘿偕嘿證。全無圭角。此乃入聖脈路。格致之工程也。於此得欄柄。則雖違父母之情識。而順乎親也。如一念墮落則雖從父母之情識。而爲悖逆之子也。吾子請勉旃。

書森村子卷

草果作同與森村子。心學文集佚亡篇名。今從全書。○按此亦丙戌冬作。

謙。

心之虛明。此之謂謙。心學文集無之謂二字。非是。惟虛也。故溫恭能容。惟明也。故稱物平施。反謙爲傲。傲者由意之滿溢。而火氣炎上者也。惟滿溢也。故不能容。惟炎上也。故不克屈下。蓋人心有傲。則

全書兩本用力下俱無者字。

全書兩本俱不載年紀。

底本每句不空白一字。今改從全書。

本體之虛明所蔽。而天君失位。而靈臺變做鬼窟。而魍魎用事。於是天下群魔以類聚于方寸。心學文集無于字。遂為病狂喪心之徒。噫。哀哉。心學文集無噫字。是故大學誠意傳。以自謙開示本體。謙者德之柄也。心學文集無者字。非是。克傲而火氣不淨盡。則雖用百倍之功。而不能入德。學者宜知所用力者也。一無力字。一無者字。皆非是。

送森村子。此篇見全書岡田氏本・藤樹文集。今以其眞蹟者正之。○此亦丙戌作。

森村子會同志于講論者。有年于茲矣。雖知止。未固。因父令而歸省。自患離索而墮落舊習窠窟而終不振也。僕亦有此慮。故揭擇善固執之要。以備提撕警覺之一助。如左。

知止。

玄全書兩本俱誤作去

問坐全書兩本俱作閑坐。

參看卷之十六知止歌小解。

祟岡田氏一本誤作崇。下文同。

萬欲紛擾中。止體常寂然。小人揜不善。良知不滅玄。玄全書作去非是。或問坐靜室。一作或問室靜坐。或對境接人。反求吾心裏。時常擇此眞。此一作其。如未有所得。先致其良知。良知發見時。愼思明辨之。氣機雖發動。仁郎定靜安。時習而不罷。遂必有所觀。見之常無離。此謂必有事。不用纖毫力。存養眞實義。學者之通病。氣象與意味。毫釐千里誤。其機全在此。欛柄已入手。須臾不可離。天君自茲立。意念不爲祟。爲一作作。識習漸消化。必復孩提誠。誠者聖人本。天地亦此貞。人皆可爲堯。學脈甚分明。聖神之教化。教一作功。悉由此止生。眞樂常惺々。萬

送篠原氏本作贈。

今書兩本俱無下配義與道四字。

境咸元亨。按通篇是韻語。或有不協者。豈以其歸期在旦夕。作此送之。故唯達意之主。而脩辭之不暇也邪。

送赤羽子。癸未春作。按全書注赤羽氏名道益。

赤羽子志於道。遊原之門。有年于茲。癸未之春。講明中庸。未半。而患不仁之疾。疾一作病。以愼疾求醫於攝陽。遺稿無於字。陽作州。皆非是。於是告吾所聞。蓋百病生於氣。氣之失其所。皆因願其外。是以不願其外。則厥志壹。志壹則氣不餒。而足以配義與道。諸本多脫志壹二字。非是。配義與道。一無此四字。非是。則其爲氣也。至大至剛。而塞乎天地之間。夫然。故雖形氣有不仁之症。而方寸之仁。豈不存。仁常存。則形氣之不仁。不足以爲憂。而疾亦可止矣。止上遺稿有以字。熟察子之病因。在由人而失己。比來所講。素其位而行。不願乎其外。

其全書乙本作厥。眞蹟同。

全書甲本不載年紀。乙本鼇頭注甲申二字。

屐全書丙本俱作屣。眞蹟同。

心法。講一作謂。乃對症之聖藥也。愚以短於醫。故唯以此餞其行。而已。其一作厥。夙夜服食。以治心病。而立治療之大本。惟所予望也。遺稿乙所字。因筆之。以庶幾厥不忘。欽哉。

送佃子。草果集註甲申春作。○按國字書簡有佃叔者。疑即此人也。

佃子遠辱心友之訪。而謬請聖室之指引。僕雖非得其門者。竊擧所聞。以抒倒屐之情。夫人心之病。莫大於滿。滿下一有心字。非是。今從眞蹟。人之浮氣躁念。千狀萬態。如狂如醉如病。悉是滿心爲祟。是以心術之要。莫先於除滿。致虛。弟子職曰。先生施敎。弟子是則。温恭自虛。所受是極。孝經曰。居上而驕則亡。爲下而亂則刑。在醜而爭則兵。三者不除。雖日用三牲之養。猶爲不孝

一本無而字。

全書甲本入下追記擠入而字。

與下眞蹟有此字。

也。書曰。滿招損謙受益。論語曰。如有周公之才之美。使驕且吝。其餘不足觀也已。此之謂也。既脩滿假之慝。而后當辨惑。人之惑。其大者四。一曰名。名有虛實。其實者高而久。久或作大。又無而字。皆非是。今從眞蹟。其虛者卑而不遠。二曰富貴。富貴有大小。其大者淸而有福。且延及子孫。小者濁而有禍。且不能傳。三曰便利。便利有義欲。其義者有節制而安。無入不自得。故常能樂。欲者放蕩而危。無不往而貪戾。故苦樂恒相因。四曰習。習有眞假。其眞者近道。假者違仁。蓋名好實而惡虛。富貴求大而避小。便利義之與而窒欲。習求眞而去假。此之謂辨惑。乃點銕成金之妙術也。致虛辨惑。而后宜知德。一無知德二字。非是。知德者知明德

全書乙本不利上逸所字。

有全書兩本俱作保

格下眞蹟格送片字シ文字今從。兩致知字眞蹟不重出。

切上岡田氏一本有而字。

之功化神妙廣大。無所不通。無所不利。延齡種子。享榮阜財。贊天地通于神明。光于四海之謂也。中庸曰舜其大孝也與。德爲聖人。尊爲天子。富有四海之內。有一作保。非是。宗廟饗之。子孫保之。故大德必得其位。必得其祿。必得其名。一無此句。非是。必得其壽。此明德之功化也。夫如此。致虛辨惑知德。而后立志可眞而篤。眞志既立。則格物致知。致知而聖賢可希焉。蓋志者成德之種子。一無之字。而獨者種子中之生性也。夫子之不踰矩。熟於十有五之志。孟子之知言養氣。成于學孔之願。學者宜知其所志矣。而今佃子將歸。略筆對譚之一二。以爲臨別切偲之一事。切上一有而字。且以望如始之成功。請勉旃。

全書甲本不載年紀。乙本鼇頭注甲申二字。且後人追記。沼嶋本秋三字。
岡田氏一本移用字在於上。
胥盱全書甲本作胥盱。乙本作胥盱。眞蹟同。恐當作脊盱。
萬一全書兩本俱作萬乙。眞蹟同。
竊按以下底本不提行。今改從眞蹟及全書。

送山田子（草果集注，甲申秋作。）

山田子遊於原之門。用其力於心學。胥盱孜々焉。（一移用字，在於上。非是。）今從父之令，將歸省。於是請以大學三綱之解，爲居學之一助。是故筆管見，以寄臨別切偲之萬一。

竊按大學發端之三言。曰明德。曰親民。曰至善。厥所指雖異。其實惟同。指天性光明正大之全體。號明德。指明德感通之大頭腦。謂親民。指至誠無息之良知。謂至善。蓋大學之道以復性，爲宗。故工程皆以性，爲準。（準下藤樹文集淵氏本有則字。）明明德者。學問之極功。自善信以至於聖神。唯在明明德而已矣。親民者明德感通之眞情。所謂赤子之心。大人之心。學問立脚之實地也。

人々具三字底本作人眞二字。岡田氏二本同。今改從眞蹟。

全書兩本俱無名字。眞蹟同。

聖心千變萬化。位育參贊。皆此心之裁成而已矣。至善者性命緝熙之天機。雖愚不肖。未嘗息者。易所謂繼之者善也。孟子所謂四端是也。學問之種子。功夫之天則也。蓋此三言。各有指歸。不可混看。第一言以示人々具此性。以聖凡不有加損學者宜以聖人期待也。第二言擧明德感通之實心。（草果無之字。）以示學者宜體認立脚之實地也。第三言擧純粹中正眞實無妄之天機。時々發洩。無所不通。無所不利者。以示學者宜以爲一心之主宰工夫之準則也。夫如此故止於至善者。心學始終之眼目也。蓋至善者良知之別名號。（一無名字。）誠於中。形於外者也。是故事善而心無善者。非至善。心雖不違善。事

是、全書乙本作此。眞蹟同。

全書丙本敬上俱有宜字。眞蹟同。

全書甲本無住字。

全書甲本無日日明三字。

牙、全書甲本誤作耳。

不中節者。亦非至善。（此數語後先生擧示門人曰。當時予所見比今殊覺支離。故謬說如此。）至善者一貫之靈樞。寂然不動。感而遂通。無將迎。無內外。無隱顯。無大小。無死生。無終始。以情言之。則至公無欲。眞實無妄之親愛是也。（是一作此。）此親愛之中。自有敬通之條理。而不紊焉。（敬上一有宜字。）止於至善者。貌言視聽思。常止住此天機而不離也。下文所謂格物致知。傳所謂愼獨。皆此工程也。學者克常止住於至善而不離。（一無住字。非是。）則貌言視聽思。無浮躁滿假私欲之累。（私一作和。非是。）而明德日明。（一無日字。）日日明。又日明。而聖賢可希。此是吾人講明日用之茶飯。已聞之熟矣。苟似不可言者。而此茶飯未能下吾咽喉。而徒爲口牙咀嚼之勞而已。顧吾弟亦未無此病。故

送篠原氏本作贈。全書甲本不載年紀。乙本鼇頭注乙酉二字。全書目錄亦然。與篠原氏所見異。或誤寫之者乎。

有請。是以諄々然言之而已。伏乞克喫此茶飯養厥性。而無愧今日之良知。惟自佗之多幸也。欽哉勉旃。

送國領子。子下遺稿有說字。非是。○此篇全書注以爲甲申作。今從之。按國字書簡有國領太者。或云太乃省太郎右衞門也。疑即此人矣。

古曰。大覺覺于小覺。小覺覺于無覺。僕非有小覺者。略知好聖人之學而已。然國領子謬以余爲先輩。而遠來訪學術。於是不得已而揭學脈。以講論之。既閱月。而歸。臨別筆自反愼獨之大意。以效成美之願。按此數語遺稿及心學文集竝不載。非是。遺稿疎漏大率如此。

竊按心學文集無此二字。非是。反顧乎外求於人之心光。乎一作于。光遺稿作先。屬下句讀。非是。將全體精神照察自己腔子裡。而無毫髮之滲漏。之謂自反。心學文集

(今書乙本乙ニ自反之心以下十九字-。而鼇頭有下後人追-記嶋本自反之心以下至ニ象也-廿一字上。)

(善下乙本無-用字-。)

(無精神二字。及滲上之字。非是。)蓋願外求人之心。專管外照。而裏面冥然。乃離火之象也。自反之心。專管內照。而外面闇然。(心學文集無之字。非是。)乃坎水之象也。所謂洗心者以自反之神水。消放心之焦火之義乎。(心學文集無以字。焦上遺稿無之字。皆非是。)是以善用自反。則世間種々苦楚·怨尤·煩熱倏消。而胷次清涼。似蓮華之濯清漣焉。既自反矣。而苦痛煩熱蠲矣。猶疾病始愈而氣餒神不爽。(神上一有而字。非是。)故愼獨而立大本。猶病後補養元氣焉。(後上遺稿有愈而二字。補一作神。非是。)蓋獨者良知之殊稱。千聖之學脈也。獨字之義有多端焉。萬物之一原。(遺稿無之字。)故謂之獨。其尊無對。故謂之獨。大虛廖廓。更無別物。而三才一貫故謂之獨。在我自己一人之所知。而人所不知。(在心學文集作有。自上遺稿有則字。)

全書兩本獨下俱有也字。
岡田氏一本無者字。
全書甲本無有字。

故謂之獨。貌言視聽思接物應事一於此。而無別路。無別事。故謂之獨。卓然獨立而無所倚。故謂之獨。由己而不由人。故謂之獨。自然而無所學習。（一無所字。）故謂之獨。純粹而無所雜。故謂之獨。眞實而不二不三。故謂之獨。以萬物爲一體。故謂之獨。不問物我。而無二心。故謂之獨。（一無此二句。非是。不上遺稿有愛敬二字。）動靜語默喜怒哀樂一樣。景象而無以異。故謂之獨。聖凡一體。生死不息。故謂之獨。貧富・貴賤・禍福・利害・毀譽・得喪。處之一。故謂之獨。處（一作所。獨下一有也字。今從心學文集。）愼者恭敬奉持之意也。（一無者字。非是。）愼獨者。尊德性。以爲身心之主宰之謂也。蓋自反也。愼獨也。相兼用工。皆所以明德。而非有兩般之功。（一無有字。非是。）以自收放心。而謂之自反。

全書乙本脱貧富貴賤以下十四字。而傍記嶋本有貧富貴賤云々十四字。

全書乙本作與清水子。

一無以字。非是。以立大本謂之慎獨。毋以條分而入支離也。毋上一有必字。又或無以字及而字。非是。是故自反而克己以獨字之義為筌蹄。而可求仁矣。克己則可以入德矣。得此意則以自反慎獨為事。而不可須臾離也。離藤樹文集淵氏本作忘。所謂必有事焉而勿正。心勿忘。勿助長也。此之謂也。是以未見獨則將慎以見獨為事。已見獨則以慎獨為事。夫然。故貌言視聽思必於是。接物應事必於是。貧富貴賤必於是。心學文集作貧賤富貴必於是。禍福利害必於是。心學文集無此句。非是。死生壽夭必於是。毀譽得喪必於是。造次必於是。顛沛必於是。故曰。無往而非學焉。一無焉字。非是。無入而不自得焉。

書清水子卷。遺稿作贈清水子說。非是。○按此篇全書以為乙酉春作。是也。又年譜寛永癸未冬。清水氏來受業。國字

全書兩本俱無蓋字。

受乙本誤作愛。皆上兩本無本字。但有後人追記之。

全書兩本俱無嚴父二字。

書簡有清水季格及清水十者。疑乃指斯人也。

孝。遺稿無此字。非是。

鈞是順親養親。或爲大孝。或爲小孝。何也。也一作哉。人之一身。有大體。有小體。以大體順親養親。爲大孝。以小體順親養親。爲小孝。蓋身體髮膚。此小體也。一無蓋字。仁義禮智。此大體也。身體德性皆受之父母。而非己所私有。本皆父母也。故以情愛。謹身。則順親亦以情愛。所謂順情識之父母者也。尊德性。脩身。則順親亦以德性。所謂順靈明之父母者也。是以孝經以嚴父配天。爲大孝。中庸以明善誠身。爲順親之道。曰。嚴父配天。嚴父二字從藤樹文集補。曰。明善誠身。只是在明明德而已矣。明德之愛敬。

全書乙本能通上有可字。

孝上乙本無大字。

全書甲本不載年紀。乙本鼇頭注乙酉之夏四字。

篠原氏本題注中粉書抹殺京師人後仕大溝侯八字。改伊勢人。恐志村讓氏筆。

靡全書甲本作磨。

寂然不動。感而遂通天下之故。無以聖凡餘欠。不以窮達加損。但爲氣習情欲所蔽。則不啻不通天下之故。於其親亦不能通。然幸其本體之明。有未嘗息者。學者必可知其止。遺稿無學者必三字。非是。而芟除舊習之葛藤。消化情欲之邪火。以復本體之明。此之謂大孝焉。此乃天下第一等事。學問第一義也。

送中西子。 草果集注乙酉夏作。全書同。○中西常慶稱孫右衛門。京師人。後仕大溝侯。

中西子謬不吾鄙。遠辱輔仁之訪。不佞雖不能成其美。而喜益友之奇遇。而相與講習討論。以得摩勵之助。摩一作磨。既五閱月。而今將歸。於是叙講論之要語。以聊抒臨別切偲之情如左。偲或作思。非是。

子曰上底本有圈子。今改從全書。下同。

岡田氏本無者字。

〔稱孝稱不孝云々。迪吉錄不孝不悌之報中語。六五頁既出。〕

岡田氏一本無又字。

子曰。人之生也直。罔之生也。幸而免。

直卽明德。明德者。人之性命也。（一無者字。非是。）人之有德也。猶草木有根柢也。故栽者培之。傾者覆之。蓋好生惡死。人情之常也。然人不知蹈仁。而終其天年。是以擧此。以發改過遷善之心。問。以今見之。幸而免者甚衆。答。不然。對今人而稱之孝則喜。稱之不孝則怒。且愧。此乃人根未斷處也。（處一作所。非是。）人根未斷。故猶未死而已。（草果無猶字。）此一點人根已滅而生者。吾未之見也。問。有仁而夭。不仁而壽者。如何。答。人之壽算其分數受有生之初。而固有於性分之中。此之謂天年。是以率性者。終其天年。德崇業廣者。又增益其天年。（一無又字。）不

不揣全書乙本作不一。

底本先大禹章、後學習章。今改從全書。〔香渡家藏眞蹟本、亦先大禹章〕

率性者、減其天年、其惡甚罪大者、不旋踵而死。蓋其天年短者、雖仁而有所增益、却不及中壽。其天年長者、雖不仁而有所減、還過中壽。而今取天年短而仁者與天年長而不仁者而比之、猶取一鈎金與一輿羽而比之、論其輕重也。孟子曰、不揣其本而齊其末、方寸之木可使高於岑樓。斯之謂也。福善禍淫之理、皆如此而已。

子曰、學而時習之、不亦說乎。遺稿止載此一條。

說者心之本體也。天理流行和暢明快之謂說。蓋人之患、莫甚於憂苦。然不知學以忘其憂苦也。故揭此說字、以興起天下萬世進學之機也。而弟子用此以冠二十篇之端。

太甚全書兩本俱作大甚。非是。

其意亦可知矣。問。雖初學困勉之資。亦有此說乎否。答。聖賢所開示。有本體。有工夫。說者是本體自然之德。學問之種子。無以聖凡加損。故雖困勉之資。不無此說。所謂困勉只言升堂入室之難而已。非謂得此說之難也。蓋人之千辛萬苦。皆出於凡情。凡情者氣習情欲三者相釀而成者也。三當作二。既學則知凡情之害。而欲復本心之說。是以初學之士。雖未有所得。而凡情之拘攣懊憹。大率獨其太甚者而無焦火凝氷之變。略似得說之皮殼也。一無也字。而時習則漸欛柄入手。而日々躋聖地。而其說與孔顏樂儔。由是觀之。自初學以至成德。皆有此說。故只曰學而時習之。而無

全書甲本庶下有幾字。至善上無於字。

初學成德之分辨。其立言之意亦可觀矣。

大禹曰。惠迪吉從逆凶。惟影響。按此條全書移在時習章解後。今從草果。

求福避禍。人情之常也。然人不辨迪吉逆凶惟影響底道理。是以安于暴棄。而不能改過遷善。故揭出感應之妙理，以作改過遷善之機。問。禍福之說。只非中人以下之勸戒乎。答。此乃上下通用之勸戒也。堯曰。咨。爾舜。天之曆數在爾躬。允執其中。四海困窮。天祿永終。舜亦以命禹。夫堯舜禹。天下之大聖也。而其告戒如此。而以只可爲中人以下之勸戒乎。問。求福爲善。究竟非利心乎。答。求福而襲善之迹。則庶乎利心也。庶下一有幾字。以禍福爲勸戒。而止於至善。一無於字。

忒舊誤作戎。今訂。下同。

此岡田氏一本作之。法全書乙本作去。

蟲全書兩本作虫。似可從。按虫音卉。虺古文。

則所謂利心己所懲之惡念也。何利心之有乎。問。以今見之。廸吉逆凶。似有差忒。一無有字。非是。答。福善禍淫者。天道自然之妙理。而無毫髮之差忒也。蓋善惡之報應。大率以五世爲大限。依此大限。此一作之。非是。以福極之法。察之。則洵無可疑者。一作灋即其古文。只以習心小知。見天道未定之時。而又不辨禍福之準則。是以有夏蟲疑於氷之惑耳。詩云。民今將殆。視天夢々既克有定。靡人弗勝。

右三章學者所以立志之蓍蔡也。吾人宜熟讀體認而篤立其志也。王子曰。志立而學半。

大學之道。在明明德。

岡田氏一本無此句

明德上乙本無一明字

孟子得大學之宗傳。故曰。學問之道無他。求其放心而已矣。聖門之學術。如此易簡明白也。而后世有他岐之惑者何也。認明德不眞。而又明之之功。不能無本末先后之差忒也。是以或有守枯寂爲學者。或有泥格法典要爲學者。一無此句。非是。或有依知識爲學者。或有任玄解爲學者。或有以訓詁詞章爲學者。此皆求明明德。却昧明德者也。問明德之眞。答。聖人之心。仁義禮智完具。無所不愛。無所不敬。以天下爲一家。以中國爲一人。此明德之全體也。聖人已下之資。不能無氣習情欲之累。是以其全體雖不可見。而本體之明。則不以聖凡加損。故有時而明。孝經所謂愛親敬親

全書乙本非上脫二無字一。

者。孟子所謂良知良能。明德之本眞也。問明之之功。答。尊德性。道問學。自反愼獨。此明之之工程也。問本末之先后。答。明德者天下之大本也。天下之萬事皆其末也。君子務本。本立而道生。此本末先后之義也。問守寂・格套・知識・立解・文學。皆全放下不講乎。（套藤樹文集淵氏本作法。）答。奚爲其全放下乎。此等事皆非明德之實體。故以此爲主則大本遂不立。以明德爲主。則此等事皆無非立大本之功。（草果無大字。）蓋寂者自然之生機。動而無動。靜而無靜。寂然不動。感而遂通天下之故之謂也。守此乃良背執中之功也。何爲不可乎哉。只認寂爲枯槁寂靜。而沈守於人倫日用之外。則爲守枯寂。

法全書乙本作レ灋。卽古文也。

益全書乙本俱誤レ盖。

全書甲本學文上無二而字一。乙本無二也字一。

也。格法典要者明德感通之迹也。由レ迹觀二其心一，資二其心一。以調二停其迹一則無三往而非二大本之流行一也。如徒襲二其迹一則爲レ泥二格法典要一也。知識者。人心感應聞見之影也。用レ此，祛二大本靈照之蔽一。以求二自然一則無三時而非二明々德之功一也。如用レ知，自私。則爲レ依二知識一也。玄解者。對算之精爽者也。用レ此，化二習心之固滯一而忘レ之。則於二明々德之功一。其益不レ尠矣。如喜二其精爽一而執滯。則爲レ住二玄解一也。文者孔門四教之一也。文，上

藤樹文集淵氏本有二學字一。

而學レ文有二三益一。皆所三以明二明々德一也。如徒用レ此飾二口耳一而不レ求二自得一。則爲二俗學一也。

右聖模換骨顯神之靈方也。是以比來講二習之一。而今亦筆レ

淵原氏本倒置以下二文。且缺標目又字。今改從全書。

三太極全書兩本俱作大極。

之似贅、（亦藤樹文集淵氏本作又。）然不善服食則與不知方者無以異。故勞管城子以望公之服食無間斷而已。

書土橋子卷。

（二首共丁亥春作。○按此二首草果佚其名。又不注何年作。故是編舊藁姑名以無題說。且注云。疑是答門人質問者。而味其語意。想幾晚年作矣。後得讀全書。乃知丁亥作也。蓋先生是時年四十。而明年戊子則夢奠云爾。）

太極動而生陽。靜而生陰。所謂命也。蓋太極不是陽而好。不非陰而惡。然人不能無意必之私。而於事有適莫也。（草果無也字。）於是聖人揭出賦命自然之理。而解其惑而已。夫生也。達也。富也。貴也。得也。福也。皆陽也。死也。窮也。貧也。賤也。失也。禍也。皆陰也。君子立太極。而不願乎外。於天下無適也。無莫也。是以死生・窮達・貧富・貴賤・得失・禍福。皆爲寒暑風雨之序。夫然。故

嶮今書甲本作險。乙本誤作倫。

入書甲本暇注丁亥之春。乙本暇作春。

君子唯致其良知而已矣。命分豈足論辨乎哉。

又。

大舜有天下，非堯與也。孟子不遇魯侯。豈臧倉乎。草木無情。有時飄零。盜賊無道。有時免難。免草果作逃。莫非命也。然有正。有變。居易以俟命。則死生・貧富・窮達・貴賤・禍福・得失。皆正命也。則草果作即。下同。行嶮以徼倖。則死生・貧富・窮達・貴賤・禍福・得失。皆非正命也。是以致其良知。則正命斯立矣。不知此理。而妄趨避計較。猶背日月而求明也。噫。草果無噫字。

書野尻一利卷。丁亥春作。○野尻一利稱藤兵衛。初仕會津侯。侍從加藤嘉明朝臣。後又仕佐賀侯。鍋島勝茂朝臣。島原之役。頻建殊勳。延寶八年八月廿三日歿于備前岡山。葬蕃山。乃熊澤伯繼之父也。伯繼幼爲外大父熊澤守久所養。故冒其姓。守久稱喜三郎。後改半右

衞門。仕福島正則。在安藝。正則國除。徙于信濃川中島。時其臣多逃去。從者不過六七人。守久亦在其中。正則稱嘆。恨知之晚而不及擢陞也。

守久後仕水戸威公。病沒。

知意。（草果無此二字。）

知者天性之靈覺。意者心之所倚也。蓋天性之本然。無將迎。不逐物。（逐一作遂。非是。）於天下之事毫無適莫也。（毫下草果有髮字。無也字。）方其靜也。廓然大公。猶鑑空衡平。方其動也。稱物平施。猶明鏡照妍媸。平衡之稱輕重也。（鏡下當有之字。一無鏡字。非是。）心有所倚。而始有適莫。（倚一作依。非是。）而或將或迎。或逐而心神擾亂。憧々往來。無所定。是以方其靜也。無記頑空。猶明鏡之斑垢駁蝕也。方其動也。顚倒錯亂。猶衡不平而所稱皆爽也。故大學之要。在誠意。誠意之功。

岡田氏一本倚誤作依。逐作遂。脫而字。鏡下亦脫之字。

篠原氏本作、答二人持敬說一書一。今改從全書一。全書甲本題注曰。不レ知レ爲二誰人一。且失二年紀一。全書乙本唯有二標目一而已。無二本文一。

在格物致知而已。

答書。少作。

來諭持敬之說。略得其理。然體認未親切。必無日新之功。新或作親。按拾遺本止載此廿字。餘皆脫落。但親作新。爲是。今從之。持敬者。畏天命尊德性之名也。心之寂感視聽言動。應事接物。事々物々。皆有至善。是乃上帝所降之衷。而我德性之所具應也。方其靜也。畏天之所命。而尊德性之本然。則本心惺々常存。方其動也。畏天之所命。而尊德性之大用。命上或脫所字。非是。則審幾愼獨。能慮以止於至善。工夫日新。日日新。又日新。則欽明安止。亦可得而希。安文集淵氏本作敬。其如此則天棐諶。棐訓匪。諶上疑脫難字。而五福惟影響。而其生其死。終始是人而

書

四三

今書岡田氏本所載止于此。以下依篠原氏本補。

參看卷之十七第二丁。

會得別集原田氏本誤作會待。

此歌二首別集原田氏本所載如左。

○世をわたるひさつのほしや時の中道のこゝろは身の舟のかぢ

○さきの中みほきにみなし世わたらん心の枕たゝさり〳〵のふれ

藤樹別集原田氏本作答小川子甲戌春。

對上帝不然則其生其死乃禽乃獸可畏々々愚意如此。請體認神會惟幸。原頓首。

與小川子。本注癸酉秋作。○此簡止見藤樹別集及草果別本。

從來語或人以時中之理。或人體認旬日后以歌請問會得之可否。以其語意未切。未上別本有體認二字。 予以歌答。兩首筆格尾請看得其當否而以書說來。

與遠和太留。比土津能保之也。〔星土屋〕(香渡家藏眞蹟)〔戸〕土幾能知宇美知能古古呂和。身能不爾能加知。土幾乃地宇。美保木仁見奈之與渡羅无。心能枕遠。土里土里乃舟。

甲戌春答仙。　按此首見草果及藤樹別集。後志郡氏姪某。得某家所藏先生眞蹟。因見錄示曰。其家相傳以爲先生答

題君志村氏姓某朱書傍記士儉二字。蓋係士儉志村讀自筆。〔香渡家祕藏眞蹟本、作甲戌春答中川貞良甫〕

宗藤樹別集作家。

藤樹別集無此二句。

中川貞良者。元博謂草果別集不必皆誤。疑某家所云者。却承誤相傳耳。故不從。○年譜是歲十月先生去豫矣。

疑問之書語不詳。而旨難辨。其中惟三四件有可推而知者。以愚按質之如左。

昏禮喪禮。見于三禮。大夫以下之制。詳于家禮。于眞蹟作於。廟制其大體。見于中庸或問·性理大全宗廟篇。宗草果別集作家。今從性理大全及眞蹟。大夫以下之制。詳于家禮。于眞蹟作於。河圖洛書·經緯表裏之說。見于易學啓蒙本圖書篇。卦運數運之牽合。見於易學啓蒙洪範皇極等書。易學啓蒙四字。眞蹟在洪範皇極字之下。

以上讀其書。則其事理無可疑者。故惟筆其書名而已。若疑不在此。更期示諭。此二句今從眞蹟補之。

記眞蹟作昏字。

以送以下眞蹟作以遠上豫州吉久公。又塗書抹殺豫州二字。

㊀此眞蹟作些。境下無必字。懼作惧。

㊁必上而字眞蹟磨滅。以下傍記□者準之。

小學·史記·文選詩類·詩經七月篇等之問。草果無等字。唯有其書名。而無質問之言。言眞蹟作語。其所疑不可知。故闕如也。草果無也字。非是。原頓首。

代門人答西銘疑義。此首乃先生里中人某所藏者。志郡世賴識其爲先生眞蹟。因錄見示。予得而讀之。恐先生代門人作者。而若其人及篇中所稱吉久者姓字履歷。皆不可攷也。故且著之如此云。

熊澤子嘗問我於西銘待烹之章如何。愚亦嘗雖聞之。忘而不能對。故歸釁之后。見尊師而問之。故記之書尾。以送之吾遠上豫州吉久公豫陽之吉久公。按先生父諱吉次。大父諱吉長。由是推之。此稱吉久者。疑先生族人中輩行稍尊者。

師曰。無所逃而待烹者。是非申生之事。只假設此㊀事。而說雖遇如無所逃而待烹之逆境。△必無有一毫憂懼之心。㊁□而必可

㊀皆此下。眞蹟作下假設辭也云々至尤親切的當上八十三字上。

㊁吾人下。眞蹟墨書抹殺之事以下二十数字。而改拂逆之事何足憂乎八字。

㊂全書目錄未整理本有標目。而岡田氏自筆抹殺之。整理本則不載之。

㊃此書係常省先生答原田知辰之文。而其筆現在于滋賀縣高島郡青柳村大字上小川志村清太郎氏之家。今移入卷末附錄常省先生文集中。故不復載正文於茲。

如申生之恭也。非惟待烹之事爲然。育英才不弛勞等。㊀皆此意也。假設辭也。而曰待烹者。揭出逆境之極處。而其他逆境盡包其中矣。蓋雖在恬地之境猶且如申生之恭。乃是事天之道。而㊁吾人拂逆之事。何足憂乎。西銘說事天之道。歸事親之事。自合孝經之聖旨。可謂尤親切的當。

（附）

㊂答中川貞良甫書。

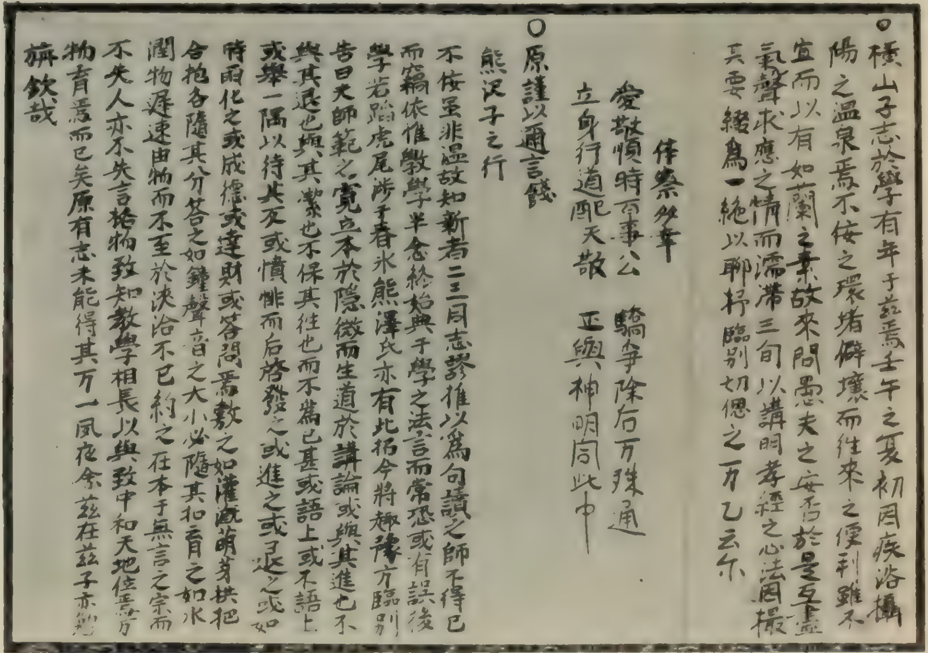
闕。○見全書目錄。諸本竝不載。按藤樹文集有甲戌春答中川貞良書。讀之乃第二卷所載甲戌春答仙書也。說與某氏家藏眞蹟者合。今不敢從者。唯謹爾。

㊃答原辰秀才書。

係湖西某氏家藏眞蹟。按原辰未詳何許人。

送横山子並餞熊澤子

卷之二自一三至一四頁並卷之四自一一至一二頁參照



○横山子志於學有年于茲焉壬午之夏初因疾浴攝
陽之温泉焉不安之環堵僻壤而往來之便利雖不
宜而以有如蘭之素故來問愚夫之安否於是互盡
氣聲求應之情而濡滞三旬以講明孝經之心法因撮
其要綴爲一絶以聊抒臨別切偲之万乙云尒

倂案另章

愛敬順時百事公　驕争除后万殊通
立身行道配天敬　正與神明同此中

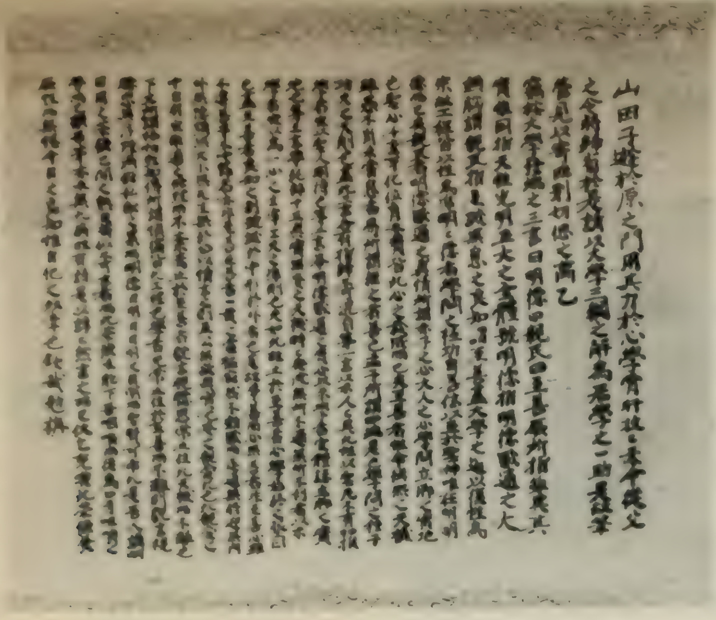
○原謹以通言餞
熊沢子之行

不佞至非温故知新者二三月志髪惟以爲句讀之師不得已
而竊依准數學半念終始典于學之法言而常恐或有誤後
學若蹈虎尾渉于春氷熊澤氏亦有此栝今將趨豫方臨別
告曰夫師範之寛立本於隱微而生道於講論或與其進也不
與其退也與其潔也不保其往也而不爲已甚或語上或不語上
或擧一隅以待其反或憤悱而后啓發之或進之或退之或如
時雨化之或成德或達財或答問焉數之如灌溉萌芽拱把
合抱各隨其分苔之如鐘聲音之大小必隨其扣盲之如水
潤物遅速由物而不至於浹洽不已約之在本乎無言之宗而
不失人亦不失言挌物致知教學相長以與致中和天地位焉万
物育焉而已矣原有志未能得其万一夙夜余茲在茲子亦勉
旃欽哉

（兵庫縣阪神六甲苦樂園　森下博氏藏）

送山田氏

卷之四自一三至一六頁參照



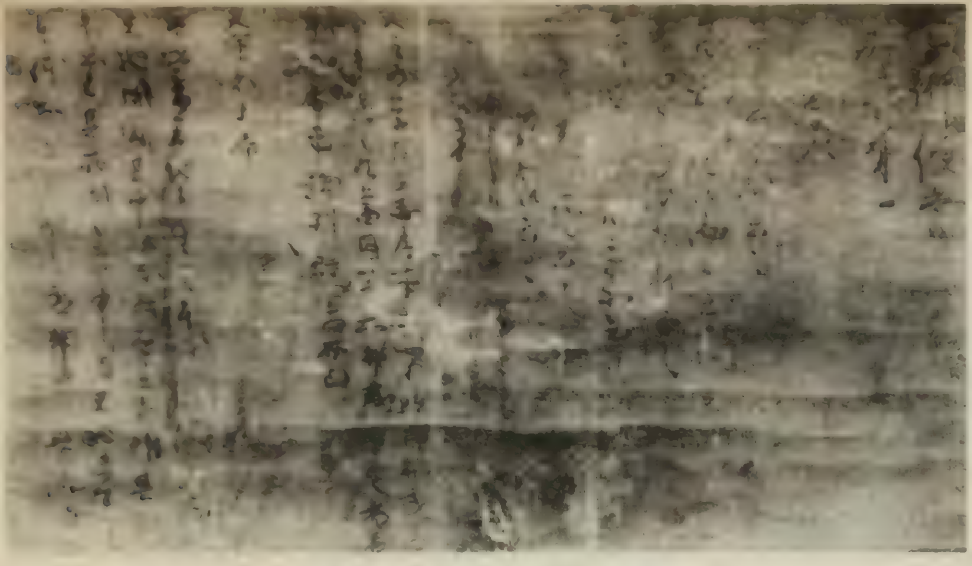
（愛媛縣西宇和郡八幡濱町　村田吉右衛門氏藏）

中

卷之五　七頁參照

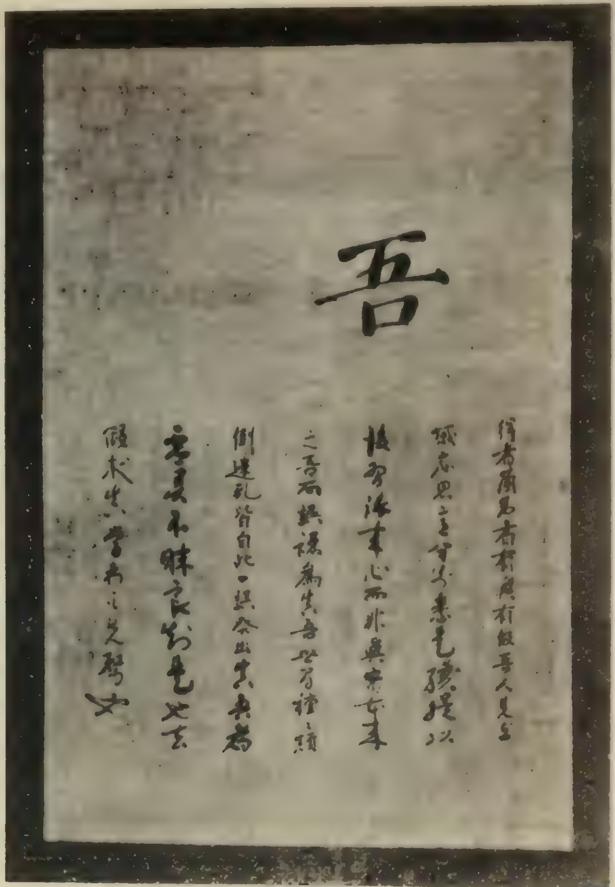
中

（大阪市住吉區平野流町　上橋保氏藏）



卷之五 一三六五頁參照

（委員　小川喜代藏氏藏）

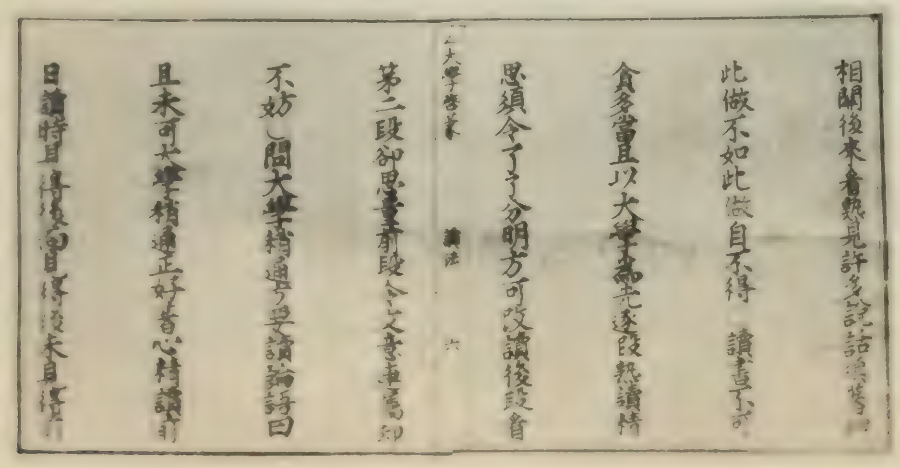


吾

卷之五 二五頁參照

（愛媛縣喜多郡大洲町　檜田虎雄氏藏）

大學啓蒙（斷片）



相關後來看熟見許多說話[illegible]
此做不如此做自不得　讀書不可
貪多當且以大學爲先逐段熟讀精
思須令了了分明方可改讀後段看
大學啓蒙　讀法　六
第二段卻思量前段令文意串屬却
不妨　問大學稍通方要讀論語曰
且未可大學稍通正好着心精讀前
日讀時見得前面見得後來自[illegible]

卷之六 大學啓蒙 一頁參照

（滋賀縣高島郡青柳村大字上小川　淵田岩次郎氏藏）

雜著　解題並凡例

解題

本卷は第一卷經解の解題に於て述べし如く、先生の日頃修德に就いて工夫發明したる要領を說述せられたるもの丶集錄にして、先生の體驗生活を知るに特に切要なるものなり。抑〻心學なるものは、支那に在りては陸象山王陽明之を首唱し、我が國に在りては、先生之を創說したるものなり。後に庶民階級に道話を讀み聞かせたる所謂石門心學と稍〻趣を異にすれども、凡そ我が國初期の心學の如何なるものなるかは、是に由つて略〻明にするを得。

先生によれば、凡そ心には二方面あり。一は所謂人心にして、一は道心これなり。前者は吾人孩提より以後に習染し來りたる心にして、眞實本來の心に非ず。後者は之に反して、人間の人間たる所以の本質的のものにして、形體によつて左右せられざるのみならず、是を主とすれば千過來らず、萬欲忽ち消ゆる底のものなり。而して二者は必ず兩立すること能はざるものにして、人心盛なれば道心明かなるを得ざると共に、道心明かなれば人心自から銷沮せざるを得ず。人の此の世に在つて道を離るゝこと能はざるは猶魚の水に於けるが如し。魚水に在れば悠然として樂しみ、水を離るれば則ち死す。人本性の道に率へば坦蕩々にして、常に樂しみ、道を離るれば則ち苦み、終には死に至る。所謂道なるものは須臾も離るべからず。離るべきは道に非ざるなり。道を念ふ心は人間固有のものにして、外に假るを要せず。虛靈不昧の良知是なり（吾・心・道）先生は此の心を定義して、天人合一の神明に

して長生不 の本體なりとも謂はるゝ忘。然らば此の心を求むる方法如何。思ふに世衰へ道微にして聖學傳らず。世人昏迷して此の心の靈域に進む能はず。是を以て道家禪家の如き或は其の眞に迷ひ、或は空寂に陷り、俗儒の如き或は形式に拘泥して本源に達するを得ず。共に道を失へり。道を求めんとすれば、直に入つて吾が心に之を求むべし。茲に心學の必要生ず。學とは覺なり。學ばざれば迷睡昏々たり。學べば明覺惺々たり。心は譬へば水の如し。水靜なれば則ち其の明吾人の鬚眉を照し、動けば吾人の面目をも照す能はず。易の艮背適應を開示し、周子の主靜、程子の定性を說く。皆此の心の學を示す。學者須らく此の心を標準として學ぶべし（道學）。卽ち外物の上に向つて其の理を窮めて之を明にするに非ず。自己心上に於て人欲の私を去り、天より得たる明德良知を明にするに在るのみ。

心學と經書硏究との關係如何。聖人の經書は、上帝の誥命にして、人性の註解なり。天地人三才の靈樞、萬世の師範なり。然れども徒に其の文辭を得て、しかも其の主意を得ずば、之を尊信し之を愛用すとも詮なし。當に聖經の主意を得て體認熟察して吾が心を觀るべし。吾が心の聖經に合するものを眞心となし正心となす。是れ卽ち吾が本心なり。吾が心の聖經に違ふ者を習心とし邪心とす。吾が本心に非ざるなり。卽ち後來習染の迷心なり。本心と迷心とを明辨し、邪滿の舊染を去つて、自ら反つて自謙の眞を求むれば、則ち道に近し。此の地位に至つて、然る後に始めて既往の思慮言行の狂言妄行なりしを知り、而して戒懼すべきの心日に新に、仁を求むる志月に篤し。若し此の如くならずば、心學の徒と雖も、德に入るべからず。況や其の餘のものをや（聖經）。

先生の心學即ち良知の學は、孝を其の中心とすること一の大なる特徴なり。本巻首章にも、孝は人の根本にして、若し此の心を滅却すれば、其の生は無根の草木の如く忽ち死せざるものは苟も幸に免るゝのみとも言はる。又孝が如何にして心學と一致するかを說いては、自己の德性は父母遺體の天眞なり。是を以て吾が性を養ふは、吾が親を養ふ所以にして、吾が性を尊ぶは吾が親を尊ぶ所以なり。此は大孝の精髓なりとも明辨せらる。更に孝德の廣大なるところより、是を以て宇宙唯一實在にして、萬物の根本原理なりとし、此の意味よりして、孝は是れ天地人三才の至極要道にして、天を生じ、地を生じ、人を生じ、萬物を生ずるは只是れ此の孝なり。學とは此を學ぶのみ。是れ儒家第一の心法なりとし、又三才一貫の端的只此の裡にあり。而して唯親に事ふるの一事となす。噫。とも謂はるゝを見る。

道心を求むるに許多の方法あり。力めて私意を去るにあり意。道を以て欲を制するに在り忍。惑を解くに在り惑悟。志を立つるにあり。克く志を立つれば、世間の外議、障碍をなすことなし。獨を愼むにあり。一念自反して能く其の獨を愼めば、舊習忽ち潜亡すべし習。止を知るに在り知止。章辨。之を要するに、日用應接視聽言動の中に於て、眞の良知を認めて主宰となすに在り。乃ち是れ眞の致知なり。此の知を以て日用應接の中に於て失却せざるを要す。若し一念失却すれば、良知復知り得て即ち過を改め貳びせず。方に是れ眞の格物なり。茲に良知自ら克ち、和樂光明あり依丸藥示工夫。茲に始めて道心自有の大安樂の光景に住するを得樂。

凡例

一、本卷底本を篠原氏本に採りたれども、排列の順序は、他の多くの卷の例に於けるが如く、全書岡田氏本に從ひたり。

一、對校に用ひたる岡田氏本に三種あること、前卷漢文書簡の凡例に述べたるものと同じ。但し漢文書簡の部分は、其の內容篠原氏の註記と一致するを以て、篠原氏の見たる岡田氏本と稱するを得べきも、本卷に於ては其の內容篠原氏本の註記と一致せざる部分ありて此の卷に限り他の全書を見たるかとも想像せらるれども、本卷中諸處に篠原氏の自筆書入れあるより察すれば同氏は必ず本卷を見たることと疑ふべからず。隨つて註記の全書と一致せざる部分は同氏の見誤りと斷ずべきものゝ如し。

一、全書岡田氏本には、もと本卷末尾に靈符疑解の一篇を置く。今本全集に於ては前述の如く此れを第三卷文集文の部分に移したり。

一、本卷四十二病以下は岡田氏本に無くして、篠原氏本にのみ存するものなり。されば此以下は篠原本載するところの順序に從つて之を補ひたり。

昭和三年戊辰一月十日　　加藤盛一謹識

者全書甲本作這。乙本作者。

身全書兩本皆作身。未見作自之全書者。苦亦作苦字。者及矣字皆有之。蓋篠原氏所誤記。

篠原氏本析當下良知以下文。反置諸前。而詳註其由來。如下文。竊思良知說弗必不相承孝說。且津川氏所觀眞蹟也者。其眞僞

藤樹先生全集 卷之五

文集五　雜著（年次不詳）

孝。

者箇是人根。者全書作這。若滅却此心則其生也如無根之草木。全書無也字。倏不死者苟幸免而已。當下良知便是吾人安身立命之地。離此則所遇皆爲苦境。身與世身全書作自。非是。凡爲幻爲夢。然厭苦避夢幻。苦全書作若。非是。求于他者惑矣。全書無者及矣字。非是。

當下良知。*

按此首全書在此下所載孝說後。合爲一首。固疑其義不相蒙。草果則析爲二首。却爲近是。然未見有明徵。故愚舊稿本姑從全書。且註數語以存疑。庚辰夏津川仲通遊京師。訪先生里中人某。觀淵氏所藏先生眞蹟。讀之卽此首也。而無孝說等字。因錄見

未可知。姑從全書本。以待知者。〔戶田氏傳來眞蹟亦一首並在孝題下〕

這全書乙本作者。

全書兩本不上有有字。

愼全書兩本俱作懼。

示。於是遂從草果以糾全書之謬。又取其首句而著之云。

孝。

這箇是人與禽獸所由分也。故人而不孝。天報之以六極。古昔不孝之人變狗頭者。變上恐脫有字。後見一本不上有有字。近是。其爲禽獸也明矣。可愼可戒。愼一作懼。

孝。按懶齋藤井氏作先生傳。乃引此爲之論誤矣。湖學紀聞詳論之。

孤子似無養親之事。曰。自己德性乃父母遺體之天眞也。是以養吾性所以養親也。親上恐脫吾字。尊吾性所以尊吾親也。此則大孝之精髓。不可論在膝下與否。況又喪則致其哀。祭則致其嚴。事死如事生。事亾如事存。嚴父配天。明善誠身。無往而非

此是。今書兩本俱無是字。

今書兩本行道上有立身二字。

聽。乙本作听。

今書甲本無唯字。
今書乙本爲上有以字。

事親無入而非孝。

孝。

此是三才之至德要道。生天，生地，生人，人上一無生字。非是。生萬物。只是此孝。學者學此而已。孝于何在。在吾此身。離身無孝。離孝無身。行道光於四海。通於神明。是故五六歲幼童行孝。得上帝之感應。載在方策。若人而不孝。明有人非。幽有鬼責。形貌雖爲人。其實猶有愧怍于烏鴉。無學凡愚。一無學字。非是。可知所省察。而況入儒門而聽聖學者乎。可戒。々々。

孝。

三才一貫之端的只在這裡。而唯爲事親一事。噫。

這全書乙本作者。
通下甲本無徹字。
緝熙參看古本大學全解誠意傳。
全書乙本題注嶋本与横山子。
文首岡田氏一本誤加這箇是三字。

孝。

這箇是儒家第一之心法也。其全體充塞於大虛通徹於無破守之於心道心緝熙。脩之於身身脩。用之於家家齊。行之國天下國天下治。智愚賢不肖。皆可受用。

孝。藤樹文集題注與横山子。

大虛之神明。是其本體。聖人之妙用。是其感通。嚴父配天。是其工程。中者中此者也。誠者誠此者也。教者教此者也。學者學此者也。如不以此爲主本則或爲異端或俗學。或鄙夫也。宜知所戒愼。

孝。

今書乙本此文在後文嘿識題下。

篠原氏本重題心字。

道乙本作者。

道全書乙本作者。

按神契曰。孝在混沌之中。大虛本體之神靈在方寸者爲孝。所謂未發之中是也。故曰。孝在混沌之中。按凡此論孝德數言。與翁問答同塗一轍。想必中年作。

心。坎離性中。神水神火。

凝氷之變。起于坎水。炎焦之變。起于離火。允執厥中。則靜虛動直。而無自溺自焚之患。克悟入這裡。則心法思過半矣。

心。

世衰道微。而聖學不傳。世人昏迷。不能悟入這裡之眞妙靈竅。是以異端求此而迷眞沈空。俗儒泥典要。而不能通變復初。其指歸雖異。而其失道也同。大舜曰。人心惟危。道心惟微。

篠原氏本重題心字。
炎焦之下全書乙本脱變字。
兩准全書甲本作準。
程之下全書乙本脱定字。
全書乙本題注嶋本与國領子。

惟精惟一而允執厥中。（而字衍。）至矣盡矣。

心（坎神水　離神火。）

炎焦之變。起於神火。甚則至于自焚。凝氷之變。起於神水。甚則至于自溺。允執厥中則無炎焦凝氷之變。而况自焚自溺乎。可體認。

心。

得此名者。譬如水。水靜則明燭鬚眉。平中准。動則不能燭面目。波瀾汎濫。不能中准。故大易開示艮背。周之主靜。程之定性。祖述于茲。學者自反愼獨之規矩。必於是矣。

天君。（藤樹文集題注與國領子。）

這今書乙本作者。

這今書乙本作者。

這眞蹟作此。今書乙本所謂下脫艮字。而背字傍註疑無此字。四字眞蹟亦脫艮字。者下眞蹟有也字。今書兩本及眞蹟俱有無所在三字。按鄉黨翼傳所引邵伯溫之語。亦有此三字。

吾人之靈臺如無此主人則終作虎狼·狗彘·蛇蝎·蜘蛛等之棲噫。

中。

天地萬物盡自這裏造化。

中。

這字訓解。古來不得其眞。以先天圖熟玩。可體認。

中。

這是神明不測之靈性。易（這一作此。）所謂艮背。寂然不動。感而遂通天下之故者。不偏不倚無過不及。只是厥景象而已。非本然之解。問。此是在何處乎。答。無所不在。無所在。（此三字衍。）大本在

大虛眞蹟作太虛。

如魚下全書兩本俱無也字。

大虛降在人心。

中。

至誠無息之殊稱。神明不測之總號。三才一貫。適當恰好之神理也。

道。

道非外。言非性外別有所謂道者也。率性之謂道。道譬如水也。一本脫此五字。非是。人譬如魚也。人一作道。非是。魚在水則悠然而樂。在一作有。離水則苦。離而久則死。離下一有水字。人率性則坦蕩々而常樂。子曰。知者樂。此之謂也。離道則滿腔子是倒縣之苦惱。離而久則死。子曰。人之生也直。罔之生也。幸而免。此之謂也。蓋學者洗濯氣習名利之舊染。

水得間疑脫魚字。

全書甲本無來字。

而克愼獨則貌言視聽思。每率性而無入而不自得而無倒縣之苦。若毫髮願外之念。舊染之心。未淨盡則長戚々之患。猶涸魚。噫。

道。

人之於道。猶魚之於水。得水而生且樂。水一作道。非是。人亦得道而生且樂。是故格物致知之外。無別路可走。無別事可做。故曰。道也者。不可須臾離也。可離非道也。

樂。

世界本來樂土也。草果無來字。有意必而始變爲苦境。草果無始字。人莫不願安樂。而却自入苦境。惑之甚也。是故大學工程。以誠意爲

底本每句不空白一字。今從全書。

逐、岡田氏一本誤作遂。

全書甲本不重苦惱二字。

全書乙本後出此文。

本領。

樂。

毋意毋必。毋固毋我。無將無迎。亦不逐物。

樂。

如好好色。如惡惡臭。毋意毋必。毋固毋我。萬物備于我。彌六合。藏於密。從所欲不踰矩。此中大上眞樂活潑々地。宜體認熟玩。（按此所引論孟等語。與本經不合者。蓋先生易字省文。非有闕誤也。）

樂。

心之本體。元有大安樂。因惑而日生種々苦惱。苦惱譬如眼裏塵。（一無苦惱二字非是。）辨惑。猶獨眼中塵。而明々快活。（此乃翁問答改本同意。亦晚作也。）

無往不在樂土。今書兩本俱作無不往在樂土。按先生匆忙下筆偶有此誤。恐當作無往而非樂土。

這今書乙本作者。

樂。按此當題曰獨樂。

此是道心自有之光景。有諸本作在。今從陽明學聞書。不在位。不在物。不在生。不在死。不求于人。常在不滅。故號之曰獨樂。

樂。

學者向樂中求樂。是以不知眞樂之端的。欲知眞樂。向樂外上達之。達陽明學聞書作、郎達古文。心地可看熟。世俗所謂樂。必變而作苦。故似樂而實非樂。吾所謂大上眞樂。常而不易。若能識得。則無往不在樂土。不一在往字上。非是。樂上陽明學聞書多一樂字。而樂土二字屬下句讀。學者之急務也。

獨樂。

學而不入得這裡。則不足以爲學也。

全書甲本脫躓字。

全書乙本題注嶋本与淺野子。

這乙本作者。

求仁兩本俱作來仁。甲本則改作求字。

獨樂。

道心本自有獨樂。（有一作在。非是。）是故格致誠正。修齊治平皆所以求之也。（之或作此。今從陽明學聞書。）子曰。學而時習之。不亦說乎。獨樂之說而已。

意。

此是憧々往來念。善惡之兩路。自茲分。若不誠則化而作奔馬。蹎躓邪徑。陷溺淤泥。不自覺其非。噫。

忍。（藤樹文集題注與淺野子。）

這箇是以道制欲之勇心。初學鍊形化氣之良方。入道積德之門也。故孔聖嘗揭此。以開示司馬子求仁之方。公藝服食

且字篠原氏本作旦。今改從仝書。

仝書乙本附記嶋本此下別作有艮其背不獲其身行其庭不見其人（中略）以立命也之字。

仝書乙本題注嶋本与個子。

這仝書乙本作者。又衆妙門下附一忍七情皆中和、再忍五福皆駢臻。忍到自忍滿腔春。熙々宇宙都眞境之詩。

査滓、猶且親睦九族、至於九世。況服食精英者乎。

忍。

善用此字、克私欲。則世間無窮之苦痛忽消。而心安氣和百福因此而已乎。

忍。

這字从及从心。以羞惡之心、爲截割人欲之利及。能用此忍。則四方八面來之名利之妖魔。情欲之盜賊。無一不斷盡者。故曰。忍字衆妙之門。

學。

學者覺也。不學則迷睡昏々。學則明覺惺々。若學而不悟。則

全書二本題注講論歌括。篠原氏本脱此文。恐編入詩篇。而今也佚之。可惜。乃据全書乙本録于茲。

知全書甲本傍記如字。近是。

掄甲本作擇。

此惑甲本作此迷。

全書甲本脱切磋無間斷五字。

與不學者何以異哉。

學。

在我無盡藏。自有無價珍。號之曰明德。通天地與神。
其爲至寶也。天下更無倫。學在明明德。天下第一事。
眞樂於此得。人間第一義。天下學多端。人不知此理。
至寶與眞樂。人之大欲存。知識得此意。必可學而掄。
擧世有此惑。辨之有師友。辨惑以立志。趣向必不謬。
切磋無間斷。下愚得大知。克積百倍功。不肖躋聖地。
況中人之資。奚爲暴棄安。

仁。

這、今書乙本作者。

仁之斷制、今書乙本作悳之斷制。按悳仁古文。

篠原氏本每句連字。不設空白。今改從全書。智、全書乙本作知。下文智名所以立亦同。

這是不死之靈樞長生之根柢也。學者宜知所求。

五常。

德愛、曰仁。仁之斷制、曰義。仁之恭敬、曰禮。仁之是非、曰智。仁之無妄曰信。

五常。

五字爲句、間雜韻語。蓋脩辭未畢者。

德性有五常。　如氣有五行。行讀如字。若作合浪切、與下句讓字協。而非其義矣。　德愛之謂仁。
宜義敬禮讓。讓字似合在禮字上。然諸本皆如此。今謹依之。　通智實是信。　天地德曰生。
德性之本源。　厥無日不生。　仁愛之根本。　性以本立名。
仁由用示本。　名義雖有異。　其實曾無別。　德之無不愛。
仁性之全體。　仁有時措宜。仁有一作義者。非是。　義名所以立。　所愛

以立全書兩本倶作不無。

全書乙本脱眞實以下二十字。而鼇頭記嶋本爲德之下有眞實而無妄至誠而無息信名以此稱名雖人所立之字。蓋後人加筆矣。

凡塵甲本作凡情。

切甲本作功。

毋乙本作勿。

必敬之。禮名所以露。仁愛之流行。無往而不通。靈照寂有常。智名所以立。（以立一作不無。非是。）仁愛之爲德。眞實而無妄。至誠而無息。信名以此稱。名雖人所立。實天然自在。包羅於六合。無始亦無終。不開亦不闔。（合與闔叶。）因生死不易。指此名五常。五性之條分。乃相師之道。（道字作大到切。得與奥字叶。是爲失韻。）爲萬世后學。立名示蘊奥。學不依五常。見性或不眞。若泥名生解。不能脱凡塵。（塵一作情。非是。）認在己學脉。切不攻異端。因名辨其實。必毋離一貫。（貫沾歡切。拾遺脱此句。非是。○晩作）敬。

手。篠原氏本作指。志村竹邇朱書傍記手字。今依大學及全書二本而改。

謙。全書乙本作此。

得。全書兩本作德。甲本則改作得。蓋篠原氏之誤。

蓋。岡田氏一本作盡。誤。下全書一本作地。他處多盡天下之用例。皆下甲本脫是字。這箇全書乙本作者ケ。

十目所視。十手所指。其嚴乎。顧諟天之明命。能如此。則其德日新。日々新。又日新。

謙。

天德由此明。五福由此得。得一作德。非是。子曰。如有周公之才之美。使驕且吝。其餘不足觀也已。學者克去滿心而不求謙德。不字當在克字上。則雖博學多才。未足爲出下愚之凡窟。可猛戒。

虛。

古來求道者。皆迷溺此字。靈故虛。虛故靈。可熟看。

夢。

蓋天下之人。皆是不離這箇。下諸本作地。今從藤樹文集淵氏本。間有窮經而自謂

仝書一本說下無夢字。

仝書乙本無能字。

透過夢覺之關者然亦夢中說夢者惟夥矣。有志者宜知所自戒焉。

惑悟。

學者解惑而入悟。不悟則非實學。按認制字之義。略可知惑悟之氣象。惑者疑而不決之意。不悟則人心勢盛。而道心不明。故見理不徹。徒有疑不能決。（一無能字。）甘溺於汙濁之中。故或之在心上爲惑。吾則吾道之吾。無我之公也。無我之公則道。而吾之所以爲吾。而不與形生化者也。解惑則人心疑惑悉消化。而無我之吾立。而道心常明。故吾與心合同。而爲悟。心卽道心也。

篠原氏本毎句連字。別不存空白。改從全書。

見聞記憶全書乙本傍記嶋本見聞攸入二字滯下總全書一本俱作此。

預全書一本作豫。

百憂全書一本作無患。殃全書一本作災。

均作心累全書一本作泥均作累。

習。據行狀此作習歌。極是然檢諸本皆單題習字。故不敢增加。○按此篇必是晩作。全然韻語。間有難曉者。讀者審之。

下胎已逞。卽古往字。見聞記憶。文質好醜。總之謂識。識之凝滯。總之謂習。按此五句或作見聞攸入。意識所染。總之謂習三句。極爲簡暢。蓋後刪改。今姑從全書。習心已成。是非預立。好惡私作。充塞仁義。萬苦時集。如病如醉。妄慮將來。百憂斷腸。百憂一作無患。非是。災害或至。再受其殃。殃一作災。非是。習有美惡。均作心累。一作泥均作累。未知孰是。譬如金砂。貴賤雖異。入眼疼痛。其苦不二。學有二魔。舊習外議。內外障碍。克立其志。外議魍魎。不能作祟。唯此習魔。伏藏方寸。降伏甚難。

太上眞樂　全書二本俱作太上至樂。而至傍記眞字。

曰全書二本俱作云。而下岡田氏一本脫有字。

一念自反。能愼其獨。無少間斷。天君泰然。習魔潛亡。心鏡虛明。好惡的當。是非得眞。遂至坐忘。至一作到。從前万苦。如惡夢醒。太上眞樂。自在惺々。據心學文集。此篇後有人心無事時有開有塞等語。太似跋文。無些和習。余固疑之。後檢王龍溪集。數語俱在焉。文集又載陽明四言教。而不著其出處。凡此等語卽先生所嘗誦而門人錄之。備遺忘者。但後人鹵莽以爲先生作爾。余致疑聖學圖說不載。正爲此也。

名。

古曰。曰草果作云。名者實之賓。故君子而無令聞廣譽。小人而有令聞廣譽者。古來未之有也。而人求名而不誠其意。猶緣木而求魚也。是以欲斷名根者。明辨所以得名之實。卽其凝滯。一脫滯字。非是。猶熱湯之沃雪。所謂點鐵成金工程也。

格或恰字誤。

欲。

欲明明德於天下者。性之欲也。名欲高。位欲貴。財欲積。色欲美。形氣欲便利。事欲通利。器欲好格者。格恐有誤。人之欲也。克去人欲而存性欲者。初學立志之要實。點鐵成金之妙術也。蓋性欲常存。則自反而愼獨。正己而不求於人。上不怨天。下不尤人。是以心廣體胖。而富貴利達。亦隨命分。而無所不通。子曰。學而時習之。不亦說乎。其斯之謂也。如人欲常存。則其未之得也。患得之。既得之。患失之。寤而如此。夢亦憂患之。所謂小人長戚々是也。

易簡。

全書甲本刑下脫於字。

篠原氏本連書日居月諸以下文於四海下。今改從全書。

全書二本俱不脫自字。

全書乙本易簡後。重出嚴密之一文。而脚注河嶋本此次有詩云緡蠻黃鳥止于丘隅云々之文。

德全書乙本作悳。

蛟龍全書甲本作虵龍。

非不勇上全書乙本脫懼字。

愛親者。不敢惡於人。敬親者。不敢慢於人。愛敬盡於事親。而德教加於百姓。刑於四海。

日居月諸照臨下土。日居月諸下土是冒。日居月諸。出自東方。出下舊脫自字。今謹補之。○按此篇引孝經北風。不加一辭。蓋以示此理流行如斯其至易至簡也。

大勇。

明德之發強剛毅。之謂大勇。是故自反愼獨。養大勇也。養上一有所以二字。其爲德也。至大至剛。而天下無敵。世間無懼。是以臨大難而不懼。視三軍猶褐夫。白及交於前。視死猶生。水行不避蛟龍。陸行不避兕虎。夫然。故猛火不能焚。洪水不能溺。北宮黝之必勝。孟施舍之無懼。非不勇而因敵立心。有欲心以雜

所洒間一本脫不字。

愼獨下今書二本俱無通字。徐原氏本亦係追記。

今書乙本脫此文。

之則自反而不縮。爲物所撓而常屈萬物之下。其勇之所不通。猶慉夫。是以不得爲大勇。子曰。棖也欲。焉得剛。曾子曰。自反而縮。雖千萬人吾往矣。此之謂也。黝舍猶不得爲大勇。况不及於黝舍者乎。

藥。

自反愼獨。通治萬病之聖藥。有換骨頤神之良能。湯·散·丸之所不治。鍼石·灸治之所不及。非此藥不能愈。雖然知而服食者尠。噫。

依丸藥示工夫。晩年作。

使門人丸藥。使上疑當有師字。草果集作先師使門人授藥丸之。近是。但先字乃後人所加也。丸了。問曰。諸君今

僉一本誤作愈。

全書甲本無宰字。

丸藥以何方乎。草果無丸字。非是。皆曰。以格物致知。師曰。如何。請審其狀。或曰。無正無忘。無助長。欲只專心于此。而不念他。念他草果作他念。或曰。只調停丸之大小如何。欲不起一毫厭怠之心。謂此是學。或曰。於是時。是一作此。要不失明融快活之心。師曰。諸君以此爲格致之本實乎。皆曰。僉亦無外此而已。師曰。未以爲不是。然未免影響氣象上認得定。而逐物馳外。非格致之端的實體。請問。如何是眞格物致知。師曰。諸君一念克自反。乃可知。更不待吾言。請問不已。師曰。諸君於日用應接視聽言動之中。認得眞良知。做得主宰。一無宰字。乃是眞致知。以此知。於日用應接之中。要不失却。若一念失却。則良知復知得。便卽改過。

全書乙本題注嶋本与長尾子。

道乙本作者、眞蹟同。〔參、存藤樹先生遺墨帖抽序二〕

不貳方是眞格物。良知自克。和樂光明。故不求明快。而自然明快。（一無而字。）良知之體。純一無雜。故不期專一。而自然專一。自然無正。無助長。又何可忘之有。若不見得認本體。只管要明快要專一。未免有捉影捕風認賊爲子之疾。不徒無益。却害本體而已。

吾。

得這箇名者。有眞有假。吾人見在感應思慮分別。悉是孩提以後習染來心。而非眞實本來之吾。而誤認爲眞吾。世間種々顚倒迷亂。皆自此一誤發出。眞吾者。虛靈不昧良知是也。去假求眞。學者之先務也。

世全書乙本作生。岡田氏一本倒世之二字。這箇全書乙本作者ケ。

全書乙本鈌此文。而後人之追記存焉。蓋篠原氏之筆。

全書甲本獨載此文。而保追記。徵諸全書序文及書院藏有實物函書。乃知季誠氏晩年之筆也。

忘。

這一字入禽之門。棄世之徑。（世一作生。）故字从亡从心。心者天人合一之神明長生不死之本體也。離這箇只在此一字。古人制字之微意。亦可知矣。（一無矣字。非是。）

立志。

志者致知之始。躋聖之基本也。故曰。志眞立。則驢鳴亦爲師。苟不立其志。則孔聖亦不爲師。故學問之道。無他在立。必爲聖人之志而已矣。（一無矣。）

志。（止見全書岡田氏本。）

志者氣之帥也。故克立其志。千過不來。萬欲忽消。人云雖立

性今書甲本作生。

岡田氏一本生惡間脫其所二字。

今書乙本題注嶋本乎國領子。

今書甲本作雖尊信篤受用勉。眞蹟同底本。

其志，未能克己。此未體察者也。子曰，三軍可奪帥，鄙夫不可奪志。宜自省。

志。

志有眞假。志名志利志色。種々願于外。皆滅性，入死之假志也。只志於道一念。養性出死之眞志也。性一作生。非是。人之所欲。無甚於生。其所惡。無甚於死。而安於假志。而不知眞志者。可憐々々。

聖經。

聖經者上帝之誥命。人性之注解。三才之靈樞。萬世之師範也。然徒得其辭。而不得其意。則尊信雖篤。受用雖勉。勉上諸本無雖字。非。

略雖二字當倒。

〔六弊、眞蹟作六蔽。可從。蓋本論語陽貨篇語。〕

間思慮乙本作閑思慮。

知此二眞蹟及乙本作知此一一。當從。

致眞蹟作到。

懼眞蹟作惧。

如此甲本作知此。

是。今從藤樹文集淵氏本。而不能免膠柱之弊。或略、雖有得其意者。不以溫恭自虛窮之。則不能無六弊等之病。而又或徒爲講習討論之間思慮者。亦有之。是以窮經之法。以自虛爲先。而后當得聖經之主意而體忍熟察。而觀吾心。吾心之合于聖經者。爲眞爲正。吾本心也。吾心之違于聖經者爲習爲邪。非吾本心也。乃後來染習之迷心也。知此二明辨。藤樹文集淵氏本作如此一一明辨。而洗去邪滿之舊染。而反求自謙之眞。則近道致此地位。而后始眞知既往之思慮言行。悉是醉裡之狂言妄行。裡一作裎。非是。而可戒懼之心日新。求仁之志月篤。若不如此。則雖心學之徒。不可入德。況其餘乎。

全書乙本此文在二聖經前一。
德全書乙本作レ悳。
解乙本傍ニ記脚字一。
注全書二本作二註字一。

在全書甲本始作レ在、後改レ有。
〔爲二其寶一當レ改二其爲一レ寶。經所愼獨作、厥爲レ神。不レ誤。香渡家藏眞蹟亦不レ誤。〕
道德仁義甲本作二道心仁義一。

經傳。

經傳是吾人明德之注解。明德是經傳之正經也。是故窮經之法。以收歛身心而立至德之大本爲主。而后講窮經傳則有觸發栽培印證等之益。而正經心性之本義。日有所自得。如不立正經之大本。而徒講窮經傳。卽雖訓詁爲口耳之飾。（卽一作則。）而於性命日有所昏蔽。譬如不知正經之句讀而講明注解焉。

寶。

金銀珠玉者。身外之寶。而其用在所不通。（在當作有。）是以爲其寶〔其爲寶（巨）〕〔其爲寶（巨）〕也賤。道德仁義。心裏之靈寶。而其用無所不通。故爲其寶也

全書乙本脫本文。

也上倚岡田氏一本誤作依。

篠原氏本連記孟子句。詩句不提行。食關間洲桃間俱空白一字。今從全書。

貴。不知心裏有箇無上之大寶而徒慕身外之小寶者。凡民也。能知心裏之靈寶而不惑身外之寶者。君子也。（惑一作感。非是。）世間知此靈寶者。尠矣。噫。

謙意。

謙者虛也。心虛則好惡出於自然。是非見于心體。廓然大公。而物來順應。意者心之所倚也。謙與意相對。心有所倚則好惡私作。是非逆措。萬欲千殃於是乎生。終喪其本心。故大學誠意之傳。以自謙揭示本心自然之好惡。以爲誠意之準的。旨哉。

嘿識。此止錄詩孟子句。不下一語。蓋必有說。

篠原氏本詩莊子兩句之間。別設題注。曰。題詩莊子語。舊無此字。今且著之。甲本亦無標目。今依全書目錄而補。

全書乙本標識下直有莊子語。缺詩孟子之句。且載援神契曰。孝在混沌之中。大虛本體之神靈在方寸者爲孝。所謂未發之中是也。故曰。孝在混沌之中之句。

全書乙本此下三文俱缺標目。

大虛大極全書二本俱作太虛太極。

夏葛冬裘。渇飲飢食。

闕々雎鳩。在河之洲。桃之夭夭。灼々其華。

莊子曰。顏淵曰云々。

莊子曰。顏淵曰。墮肢體。黜聰明。離形去知。同於大通。此謂坐忘。仲尼曰。同則無好也。化則無常也。而果其賢乎。丘也請從而後。大宗師語。肢作枝。

右原孔子殺身以成仁之語。而爲寓言乎。

易。

大虛廖廓。神化之全體也。本無名字。聖人字之曰易。易有大極。是生兩儀。兩儀生四象。四象生八卦。八卦生六十四卦。交

幹全書甲本作レ幹。乙本作レ榦。
花實甲本作二華實一。
甲本脫二天地榦也四字一。
不下一本脫二有字一。
岡田氏本此下有二鼇符疑解一。今移二入第三卷文集三文中一。

易絪縕化育之運。數足時至。而先生天。而后生地。而后生人。生萬物。而生々無窮。

天地。

天地者。神化之胞胎。萬物之父母也。人者。神化之本實。天地之德。萬物之靈也。萬物者。神化之枝葉。人之頤養也。

大虛·天地·人物。

大虛天地人物。一貫而分殊。譬如一樹之有根幹花實枝葉之分大虛根柢也。天地幹也。人花實也。萬物枝葉也。是故人之失其仁。而入禽獸。猶花之不結實。實之不有仁。而與枝葉同其枯落也。

以下至雜說、依篠原氏本而補。

四十二病。止見心學文集。

欲。傲。滿。勝心。尤。妬。放蕩。盡人歡忠。物我。私。意見。利害。得失。計較。助長。正。火氣。唐突。蛇蝎。强粱。怠。懶。怨。俗。樂戲。便利。毀譽。頑空。將迎。憚改。懦弱。悠々。諂諛。僞。欺。浮氣。沈氣。飲食。色欲。鑿知。伐善。間思。

經書摘語。全書大洲本・藤樹文集淵氏本下同。〇此及後二首、竝原無篇題。故姑名以此云。蓋此等語、偶爾下筆以爲工夫提要者。所以不故作題也。

用九。見群龍无首吉。爲天下谿。君子有大道。忠信以得之。驕泰以失之。如保赤子。

不誠其意則五志之火。妄焚其知。而損人。志字恐當爲官。或云。當爲事。其禍不可言。故以自反之神水。滅却求人之邪火。學者之急務。格致之要樞也。

又。見書土橋子卷後。

定。寂然不動。純一無雜。艮其背。不與。不見其人。素位而行。愼其獨。

又。見文集拾遺。

太極動而生陽。寂然不動。純一無雜。艮其背。不與。主靜。不見其人。素位而行。愼其獨。

雜說。按此藤樹文集淵氏本・藤樹遺稿竝載在送森村子序後。似意義不屬。且檢諸本。竝無之。故析爲一首。姑著以雜說云。

以下據眞蹟補，且附訓點，□傍姑記推定文字。

左揭顧問正堂翁舊作識語。按萬年即委員小川紫水別名也。此書與諸多遺筆。獲之於父祖。而其六代祖秀宗者親炙先生之人也。

(附)學術便蒙，予未嘗聞藤樹先生有是書也。然此或將著其書。而當時纔得一二葉而止者邪。而又或別有成書，而此特其斷片邪。今雖未可識焉。小川萬年偶獲之。什襲不啻。曰。此書實係藤樹先生眞筆者。而乞予一言。予謂萬年生藤樹先生

爲善，如耕耘。雖不得當下之穀，必得秋實。作惡如飮鴆酒。雖得即席之燕樂。必死期來。

(附) 學術便蒙。

辨惑第一。

苦樂。

子曰。學而時習云々。

子曰。君子坦蕩々云々。

孟□(子)曰。万物備於我云々。

孟子曰。□(君)□(子)有三樂云々。

□(子)□(曰)□(賢)哉回也云々。

之鄉。寓目先生之書久矣。其言固足以爲據焉耳矣。蓋如藤樹先生。雖片言半語。苟善讀者。可以終身誦之有餘。矧其眞筆。宜哉。萬年視之。猶神龍之遺爪也。

大正五年丙辰九月

正堂敬治識

印印

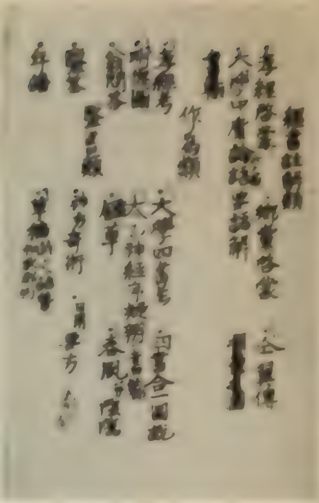
(子)(曰)(飯)□□□蔬食云々。

□利。

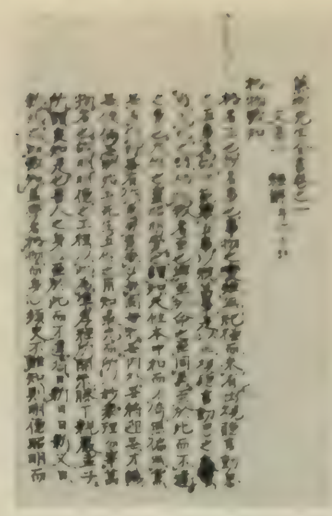
人之爲學。曰立志爲本。立志之始。曰弁惑爲要。弁惑之始。當因惑而弁惑。惑之大者。趨利避害而已。

○天命者上帝。

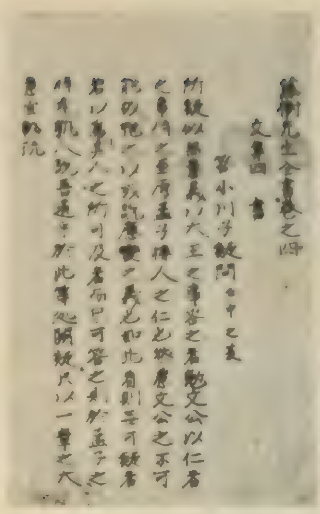
○太虛者天　未生之本體。混沌之全體也。天地開闢其中。而與太虛異者。唯其形象而已。其兩間之虛中。則天地未生之本體。而與天外之虛一貫而無別。(以下闕文。)



全書岡田氏本（一）（草稿本）



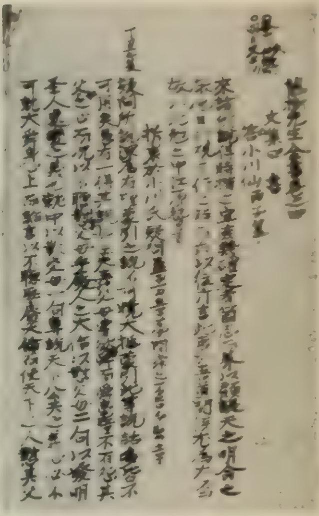
同　前（二）（整理本）



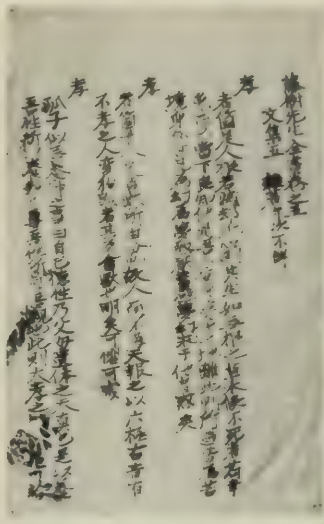
同　前（三）（甲本）

（二）の訓點は皆て編者の附したる所のものなり。

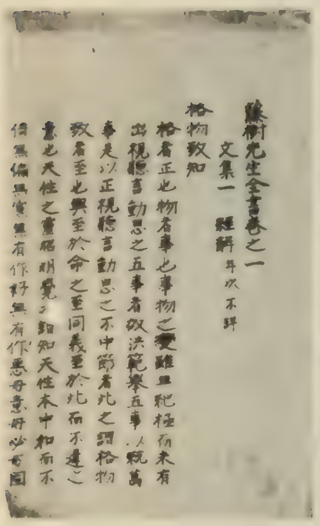
（藤　樹　書　院　藏）



同　前（四）（未整理乙本）

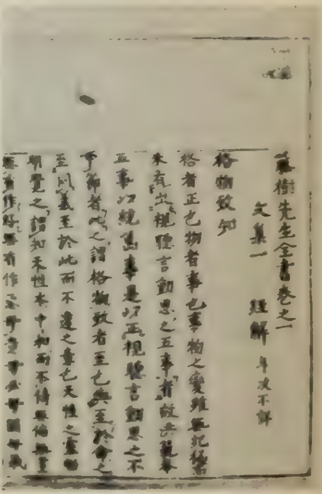


同　前（五）（同　前）



同　前（六）　別　本

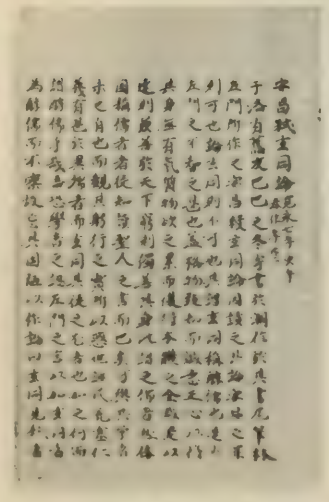
（藤　樹　書　院　藏）



全書岡田氏一本

（藤樹書院藏）

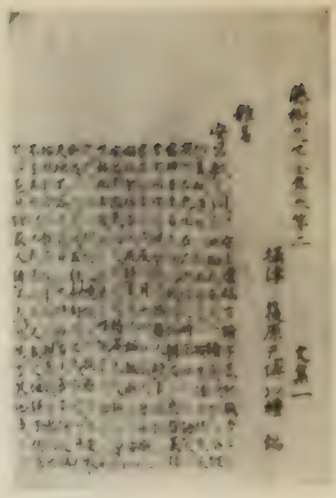
藤樹別集



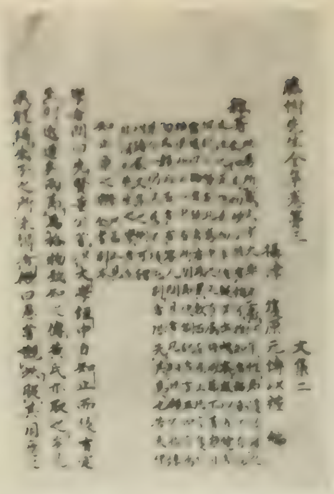
藤樹先生艸稿集

卷首編纂總則及自卷之一至卷之五解題並凡例參照

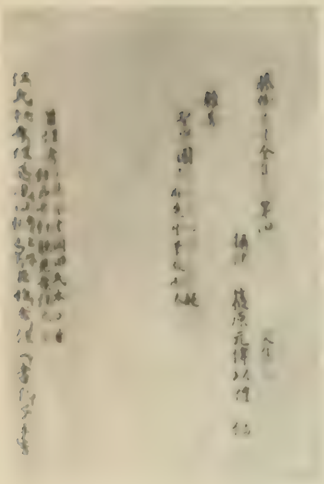
（滋賀縣高島郡大溝町　原田知近氏藏）



全集稿原氏本（一）

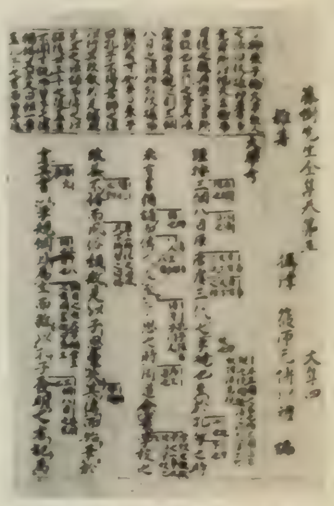


同 前（二）



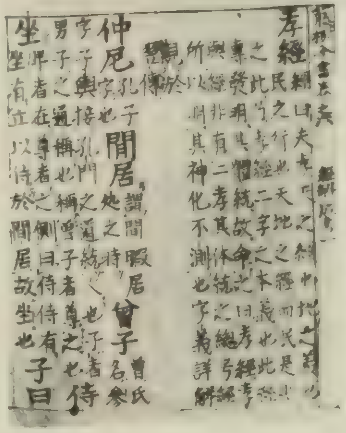
同 前（三）

（藤樹書院藏）

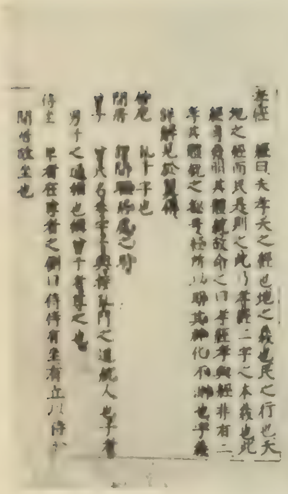


同 前（四）

（大津市 陣內政雄氏藏）

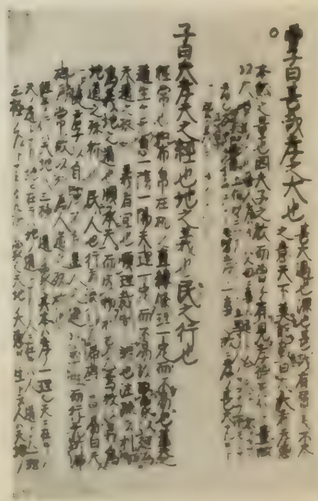


孝經啓蒙岡田氏本（初稿本）

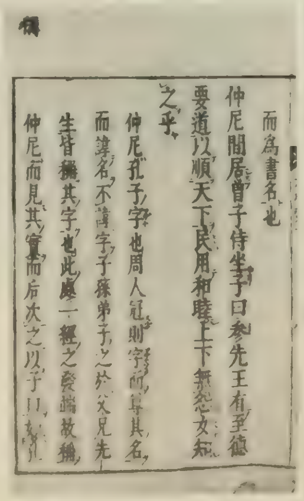


孝經啓蒙 書院寫本

（藤樹書院藏）



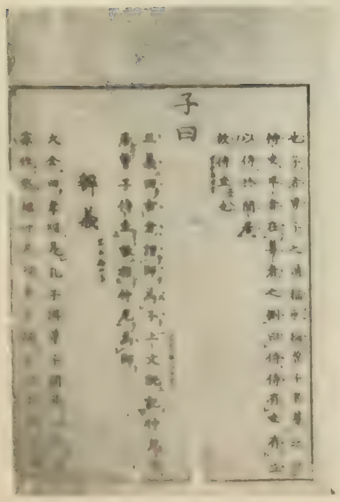
孝經啓蒙附俗本



而爲書名也
仲尼閒居曾子侍坐子曰參先王有至德要道以順天下民用和睦上下無怨女知之乎
仲尼孔子字也周人冠則字而尊其名而諱名不諱字子孫弟子之於父兄先生皆稱其字也此處一經之發端故稱仲尼而見其實而后次之以子曰

孝經啓蒙 舊本

（藤樹書院藏）



孝經啓蒙 新本

卷首編纂總則及自卷之一至卷之七解題並凡例參照

大學啓蒙(斷片) 解題並凡例

【解題】 藤樹先生年譜寛永五年先生二十一歳の條によれば、「是の年初學同志のために大學啓蒙を著す。其の書もつぱら四書大全に從ふ。后これを見ていまだ精しからずとして之を破す。」と見ゆ。然れども其の實物の果して如何なるものなるか、今より之を考ふべからず。唯藤樹書院隣家の淵田岩次郎氏は大學啓蒙斷片一葉を藏せり。此は先生の眞蹟本の片鱗にして、讀法と題して四書大全卷頭の「讀大學法」中の一節を謄寫せられたるものなり。今此の眞蹟紙片を檢するに、中央大學啓蒙讀法の下に紙數を示す「六」の字あり。而して起筆「相關」の文字より末尾「得前」の文字に至るまで、一行十四字詰全紙八行計一百十二字を一枚の紙に書寫せらる。若し前記の「讀大學法」中の「相關」(此紙片の最初に見ゆる)以前の文字全部を筆寫せられたりとして、此の字數の割合を以て計算すれば、正に紙數五葉を數へしこと明かにして、今中央に見ゆる「六」の字と相符合す。更に「得前」(此紙片の最後に見ゆる)以後の「讀大學法」全部を筆寫せられたりと假定すれば、前と同じ計算によつて約七葉を數へ、前後を通じて合計十三葉のものなりしを推知するを得べし。されど此は前述の如く四書大全中より一項を抽出して、謄寫せられたるものに過ぎざれば、大學啓蒙の正文に非ずして、其の序説とも見るべく、其の正文の如何なるものなりしかは全然之を知るに由なし。又志村仲昌著「藤樹先生行狀聞傳」によれば、「著す所の書」の第一項に大學補拙一卷宋本解豫州にて作ると見え、又後人の筆にて先生二十一歳の時の發明の書なりと註せらる。此等の材料を綜合して考ふるに、補拙と言ひ啓蒙と言ふは、同一著作の

異名なるべしと想像せられざるに非ざるも、茲に一の疑問あり。前に言へる讀法卽ち序說の部分が既に漢文體のものなれば、啓蒙正文の部分も亦同じく漢文體のものなるべきに拘らず、全書岡田氏本目錄によれば、卷之十一倭文經解一の最初に補拙（解朱本）と見ゆること是れなり。卽ち補拙の本文は今日傳らざれども、この目錄より見るに必ず倭文體のものなりしこと明瞭なり。從つて大學補拙と大學啓蒙とは猶別著なりと見ざるを得ず。されど此は唯推定たるに止れば、或は編者が補拙と啓蒙とは別著なりとなすことが抑〻誤れるか、卽ち啓蒙正文はもと倭文體のものにして、之に四書大全中の讀大學法を引用し來つて姑らく序說に代へられしものなるべきか、之を確言すべくもあらず。今は殘存眞蹟の部分が漢文體のものなれば、本卷卷頭に收めて、全書岡田氏本目錄中の補拙と區別す。此の點特に大方博雅の士の指敎を待つ。

〔凡例〕　底本としたる眞蹟斷片の性質並に編纂上の處理左の如し。

一、眞蹟は別葉コロタイプ版に見ゆるが如く、白文にして一葉の美濃紙に稍〻大書せらる。今普通の形に改めて轉載し、且つ句讀・訓點を施す。

一、終りに近き部分に見得の下偶〻「前未見得未」の五字を脫したり。今本文中に傍記し、且つ頭注此の旨を附記す。

一、吾等の知り得る範圍に於て本眞蹟は先生の最も弱年の頃の筆にして、先生の絶筆と目すべき中村重節宛の眞蹟書簡（本全集卷十八六〇頁參照。）と好一對をなすものなり。〔後に十五歲祖父宛書簡を發見す。（第二冊卷二十倭書三（補遺）參照。）〕

昭和三年戊辰六月一日　　加藤盛一謹識

經解成書一

大學啓蒙（斷片）

相關。後來看熟。見許多說話須著如此。做不如此。做自不得。○讀書不可貪多。當且以大學爲先。逐段熟讀精思。須令了了分明。方可改讀後段。看第二段。卻思量前段。令文意連屬却不妨。○問。大學稍通。方要讀論語。曰。且未可。大學稍通。正好著心。精讀。前日讀時。（見得前。未）見得後面。見得後。未見得前

時見那眞蹟脫見得前未四字。今據四書大全傍記。

孝經啓蒙(初稿本) 解題並凡例

解題

一

本卷孝經啓蒙は、先生の修養體察に於て重要なる役目を爲したる孝經に對する註解にして、先生の力作の一に屬す。されば各種版行本・寫本等其の數多けれども、今之を大別して二種となすことを得。其の一は初稿本にして、其の二は定稿本と目すべきものなり。而して全書　田氏本は其の一を傳へ、篠原氏本は其の二を傳ふ。岡田氏傳ふるところ概ね善本のみなれば、孝經啓蒙も亦必ず其の最も信ずべきものなるべしと豫想せられたるを以て、編者は初め岡田氏本を以て定稿本と見、岡田氏本よりも詳細に記述されたる篠原氏本は其の編次通俗を主としたる嫌あれば、是れ恐らくは後人の改修を經たるものなるべしと考へたることありき。その後、先生の卒去の慶安元年を距る僅に十年、即ち萬治三年に洛下眞祐が謹書したる京都帝國大學圖書館所藏寫本を見るを得たり。この本は岡田氏本が先生卒去の後約四十年頃に編纂せられたるに比して、其の年紀最も古く、而も他人によつて改修の筆を加へられしかと想像したる篠原氏本と相近きものあるを觀るに及んで、篠原氏本は定稿其の儘の體裁に非ずとするも、猶定稿本の系統に屬するものにして、岡田氏本は、却つて其の初稿本に屬すべきを知るに至れり。何となれば篠原氏本系統のものは内容詳細にして且つ整頓し、解説も要領を得たり。岡田氏本は之に反すればなり。但し岡田氏本は本全集卷頭編纂總則にも説明したる如く、原稿一たび火難

に遇ひたれば、かりに季誠氏が兩者の併存するを知悉し居たりとするも、編纂後定稿本を失ひ、爲に其の初稿本のみを傳へしものなるやも測り難し。

さて孝經啓蒙本は、前記京都帝國大學圖書館本が恐らく先生の定稿本の眞を傳へたるものなるべく、篠原氏の所謂新本なるものは比較的之に近し。而して此の兩書は孝經の本文をば殆ど一句毎に割斷して、註解即ち啓蒙を附したるに反し、篠原氏本及び篠原氏の所謂舊本は孝經の本文をば、一句毎に分割せず、思想の纏まり易きを謀らん爲め相當の程度迄之を連記し、此下に啓蒙をおきたるものなり。岡田氏本は、以上圖書館本・舊本・篠原氏本・新本と全然系統を異にしたるものにして、其の記述の内容（篠原氏本の系統に屬するものは、その内容詳述せられ且つ解説の方法要領を得たる點多し。されば先生が此等のものを省略して最後に本書を定稿させられたりとは想像するを得ず。篠原氏亦本書を呼びて藁本となしたること、氏の修したる孝經啓蒙中の註記によつて之を知る。）より推して、後に述ぶる書院寫本と共に其の初稿本に屬するを知る。されば初稿本定稿本の兩者を併觀して始めて孝經啓蒙の眞相を知ると共に、亦以て先生學術の推移日に新なるものありしを想像するに足る。仍て此等系統を異にする傳來本兩樣のものを本全集に併錄することとし、本卷には先づ初稿本を載す。〔第三册翁問答も、初稿本と定稿本とを對照併錄するの方法に從へり。〕

二

藤樹書院所藏の寫本にして、從來眞蹟本と稱せられたるものなり。編者は大正十年滋賀縣立今津中學校長在職中初めて此の書を一見して、既に先生の眞筆に非ざるを斷じたり。後大正十四年秋篠原氏本を底本として之を書寫し、更に岡田氏本及び此の寫本を對校するに及んで、此の寫本中に見ゆる追記の墨書就中處々に散見する送假名と、二種の朱書中（黒すみたる朱筆は明かに松下伯季の筆なり。）着色鮮紅なる傍記とが先生の

眞蹟に酷似するを觀て、よし本文が先生の眞蹟に非ずとすとも、尠くとも此等の墨書及び朱書は先生の眞筆にして、或は門弟の筆寫したるものをば、先生が更に加筆追記せられたるものなるべしと考ふるに至り、前の斷定の誤なりしかと疑ふに到れり。されど尙入念に精査を重ねつゝ編纂の步を進め、又別に初稿本に屬する岡田氏本を筆寫し、今一度此の寫本を對校して精攻したるに、再び此の加筆追記すら全然先生の眞筆に非ざるを確信するに至り、茲に初めて第一印象の猶ほ誤らざりしを悟るを得たり。其の重なる理由は左の如し。

(一)門弟子が筆寫したるものに對し、先生が墨書及び朱書にて追記したりとなすは、唯一片の想像たるに止り、何等根據なきことに屬す。（但し門人の敬寫したるものにつき脫誤を發見して先生躬づから墨書して之を追補せられたる例は眞蹟敬寫本大學朱子序圖說第四葉に其の例あれども、本書の如く註釋を加へしものと類を異にす。）

(二)追記の文字を注視し且つ諸多の眞蹟と對觀すれば、筆蹟は酷似すれども、その內にも猶筆致の疑ふべき點多々存す。特に或部分に存する訓點の方法は先生の附點法と全然趣を異にす。

(三)墨書加入の文字を精細に研究すれば、時に異本又は別本の名を示すことあり。卽ち先生自作の書に異本別本を對照引用せらるべき筈なかるべし。

(四)鮮紅なる朱書に屬するものは、之と同じ朱筆にて啓蒙の文に句讀點附せられたるものあり。何れも過誤錯亂多く到底先生の附加せられたるものとなすを得ず。

(五)書院所藏孝經啓蒙新本板本にして前に言へる松下伯季の朱記したるものに、此の啓蒙本のことを書院寫本と明記したるに徵すれば、此の書を眞蹟本と稱するに至りたるは、實に松下伯季以後のこ

とにして、是れ全く俗傳に過ぎず。又若し本書にして初より眞蹟として傳來したるものならば、後人が猥りに加筆すべき筈なきをや。

後に門人小川氏傳來の四書啓蒙の眞蹟を研究するに當りて、大學序說一葉・四書合一圖說一葉・大學朱子序圖說後一葉は眞蹟に酷似しつゝ、猶且つ先生の眞蹟に非ざるを確認し、後の研究者が故意に僞筆の擧に出でしに非ず、全く先生の著作を完全に後世に傳へんとの誠意より、よく先生の筆意を學び（或は先生に親炙したる門人か。）以て追加補綴の事に從ひたるものあるを知るに及んで、本書も亦斯の如き誠意を以て筆寫したるものなるべきを察するを得、爲に從來寶物として保存せられしものゝ價値を損傷することの決して輕擧に非ず。否事の眞相を明かにしたることなれば、寧ろ意を安んじて可なるを思ふに至れり。卷之一（附點）孝悌論の小川氏藏本亦同一人の筆蹟に係る。〔後に湖東に於て門人谷川義則の筆寫本多數を得、始めて此の寫本が同氏の敬寫に係るを證するを得たり。〕

因みに篠原氏の所謂書院本は此に云ふ書院本と一見相違したるが如くにも見ゆれども、此は氏が一通り編纂を終へたる後に書院に來りて此の本を觀、要點のみを欄外に追記し、其の他は省略に從ひし部分稍〻多かりしにより、或は別本なるかの如く思はるゝに至りしに過ぎずして、實は正に此の書院本を指せるものなるべし。

三

孝經に古文今文の別あること猶書經其の他に此等の區別あるに似たり。而して先生が初古文を斥けて、今文に左袒せられたることは其の著首經考及び孝經考に明記せらるゝ所なり。此の點は元明諸儒の孝經に關する意見と其の趣を一にするものなり。然れども篠原氏の既に指摘したるが如く、後に至

つて其の說變じたるものか、先生の取扱はれたる孝經の本文例へば本書啓蒙本・白文眞蹟折本・假名書き孝經等の如き、何れも皆古文に從はれたり。〔是れ朱子の孝經刊誤又は董鼎の孝經大義讀解の影響なるべし。委細は藤樹研究五卷八號拙稿京都だより參照。〕

越後の儒者鈴木柔嘉氏は其の著孝經疏證に於て、古文の採るべくして今文の信ずべからざるを力說し、且つ和漢數十百種の孝經の註釋書中本書が經義に於て稗益するところ多しとし、書中屢〻之を引用せるあり。亦以て先生が實踐體得能く經義を發明したること、一齋の所謂工夫を着け能く自得したるものあるを觀るべきなり。

四

對校に供したる諸本及び其の性質左の如し。

(一)書院寫本。全體白文なれども或る部分稀に訓點の附せらるゝあり。又書中諸處に墨書朱記兩樣の書入あり。最後に近き部分に二枚程の落丁あり。此の書眞蹟と稱せらるゝことの俗傳に過ぎざること解題既に詳述したる所の如し。甘雨亭叢書孝經啓蒙はもと本書を底稿としたるものなりと謂はるれども、筆寫の誤多く、特に脫字多きは遺憾なり。但し本書落丁の部分は筆寫當時尙儼存したるものと見えて、此の叢書に殘存するは喜ぶべし。

(二)白文眞蹟折本。厚表紙小折本にして、初に孝經大全中の全孝圖と全孝心法と誦經威儀とを載せ、次に孝經の本文を謹寫せられたるものなり。此の書と卷之十六所載假名書き孝經とは共に、もと直門伊豫大洲侯の臣瀧野藤右衞門の末裔の家に傳はりしを、故ありて伊藤博文公の手に傳はり、明治三十七年の頃伊藤公が藤樹書院に寄納せられたるものにして、此の二書を入れたるもの〻函

書には心書孝經と名づけたり。或は傳ふ同公爵は秘書官伊豫國の人政尾藤吉氏より得られたるものなりと。白文眞蹟折本の名は實物によりて、姑く編者之を命名したるのみ。（卷之十六假書き孝經の欄外に識せたるものは即ち本書より採りたるものなり。）

事狀によれば先生常に甚だ孝經を尊信し、嘗て諸生の爲に手書して小軸となし、各をして之を佩膺せしむと見えたり。第十六卷に掲ぐる假名書き孝經と共に、此の如き趣意を以て謹寫せられたるものなるべきか。

(三)孝經啓蒙附解本。本書は亦岡田季誠氏の筆寫に係り、啓蒙の後に句毎に熊澤蕃山の孝經小解の文を附したるものにして、孝經本文及び啓蒙の部分共に諸處訓點あり。且つ孝經本文の如きも、岡田氏本及び新本の如く句毎に分割せず、相當思想の纒まり得る處に至つて啓蒙の文字を附せらるゝこと篠原氏の所謂舊本の形式に近きものあり。又孝經小解板本の序文によれば、底稿僅に一本を存するのみにして轉寫の誤校讎するに由なしといへども、今本書によりて大に訂正せらるべき部分を發見すべし。惜むらくは前半散佚して、曾子曰甚哉孝之大也以下を存するのみ。惟ふに季誠氏は先生の門人仲實の子にして母は蕃山の妹たれば、小解の原本が或は夙に同家に傳はりしものなるべし。題簽もと孝經啓蒙とのみ記さるれども、今内容によりて附解本と名く。

凡例

一、本卷には孝經啓蒙本中先づ其の初稿本を採錄す。底本を全書岡田氏本に採りたり。

一、底本としたる岡田氏本の體裁及び本書編纂上の取捨大略左の如し。

(一)句讀點なし。今新に之を施す。
(二)反點送假名は全部に亙つて之れあり。孝經本文のみは舊き附點法を傳へん爲めに全部之に從ひ、時に誤りたるものあるも猶訂さず。啓蒙の部分亦多くは之に從ひたるも、まゝ其の足らざるを補ひ、且つ其の誤れるを訂す。啓蒙の部分の附點法は、底本のまゝに從へば印刷頗る煩雜なれば、今日普通の附點法に改めたるもの多し。
(三)諸處振假名あり。今之に從ふ。
(四)到る處頭注及び傍記あり。今悉く之を轉載す。唯頭注のみは之に〇印を附して、編者の新に加へたる部分との混同を避けたり。此の頭注は附解本の孝經小解の記述と一致するもの多し。
(五)△印は對校したる書院寫本に此等の文字無きことを示す。而して今傍記する記號と頭注とに其の旨を附して新に挿入したる文字此の場合此等の文字に〇印を附す。以外は、凡て前記底本に存するもののみにして編者の挿入したるものなし。
(六)底本に屢〻用ひらるゝ特殊の送假名左の如し。
ヒ　トと＼との合字なり。此の文字は本全集を通じて送假名以外にも其の用例多し。
寸　古くより行はるゝものにして、トキと讀む。
戈又は戈　本巻にのみ見ゆるセの假名なり。
以下毎巻一々說明を加へず。
一、別に孝經講釋聞書なる一書あり。先生の講義を門人が筆記したるものにして、先生の教育方法を研究する上に極めて貴重なる資料なれば、本全集に新に之を採錄したり。併せ看れば參考に資する

に足るもの多かるべし。

昭和三年戊辰五月十日　　加藤盛一謹識

〔再刊補遺〕

湖東益田家傳來の書に「孝經句解」なる寫本一冊あり。內容は初稿本と一致す。唯孝經の正文を語句毎に分たず、相當連記する點は定稿本に似たり。今對校するに書院寫本と合同する點頗る多し。又時に誤脱なきに非ざれども、一々注記せず。唯底稿となせる岡田氏本と書院寫本との異同について、本寫本の參考に資するに足るもの稍多きを喜ぶべし。對校の結果は頭注に追補す。後に香渡家藏眞蹟孝經啓蒙を得たり。益田氏本は此の眞蹟本と同一系統に屬するを知る。

㊀翌書院寫本作翼。
㊁世下書院寫本有而字。
㊂通下書院寫本脫之字。
㊃天上書院寫本有乎字。
㊄本實下書院寫本有也字。下不同。

經解成書二

孝經啓蒙（初稿本）

孝經。 經曰。夫孝天之經也。地之義也。民之行也。天地之經。而民是則之。此乃孝經二字之本義也。此經專發明其體統。故命之曰孝經。孝與經非有二。孝其體統之總號。經所以明其神化不測也。字義詳解見於翌㊀傳。

仲尼 孔子字也。 **閒居。** 謂閒暇居處之時。 **曾子** 曾氏名參。字子輿。接孔門之道統人也。子者男子之通稱也。稱曾子者。尊之也。 **侍坐。** 卑者在尊者之側曰侍。侍有坐有立。以侍於閒居。故坐也。 **子曰。參** 所金反。○正義曰。古者謂師爲子。 **先王** 先泛指古先盛世㊁言。董仲舒曰。古之造文者。三畫而連其中。謂之王。三者天地人也。而參通之者王也。孔子曰。一貫三爲王。愚按。有三才一貫之道德者。卽聖人也。古者在王位者。必有聖德。有聖德者。必登王位。王卽聖也。聖卽王也。故不謂先聖而謂先王。而聖在其中矣。

有至德要道。 至者極也。善也。大也。達也。極善大而无不通㊂之義也。德者天性之總號。善美・正大・光明・純懿之稱也。樂記曰。德者得也。言人之所得㊃天。而無入而不自得也。德本自極善大。而無所不通者也。而孝其全體本實㊄。故曰至德。正義曰。以一管衆爲要。易簡一貫之義也。率

書院寫本欄外ニ次ノ書入アリ。
易天道造化不凝滯ナ云簡地道無爲ノ萬物化生スルヲ云。
㊀故也間至書院寫本初誤作王。後人朱書改至。
㊁至德下書院寫本有也字。
㊂○之字指至德要道。
㊃是也下書院寫本有天包人。故不言尤。而尤在怨中矣十三字。無乎疑辭三字。
㊄○之字指至德要道。
㊅智書院寫本作知。
㊆義下書院寫本有也字。
㊇听書院寫本傍記聽字。

性之謂道。即德之感通也。道本易簡一貫者也。而孝其全體本實。故曰要道。至與要互相發明。至故要、㊀要故至也。**以順天下。**以用也。順從也。和也。從性而无所乖戾、无不通利之義。所謂仁者順之体也。至德要道之順、天下人心之所固有也。故先王用至德要道之順、以風化天下、而天下之人、各與至德要道之順、而无一夫之不獲。此之謂順天下。經所謂以順則記所謂大順是也。不曰治而曰順者、所以明德化之自然而无思不服也。**民用**民人也。指諸侯卿大夫士庶人天下之人而言。用謂心術躬行受用至德。㊁**和睦。**和順也。相應也。睦親也。敬和也。言五倫之交、順理相應、敬以相親、和而无所乖戾也。**上下無怨。女知之㊂乎。**女音汝。下同。知去聲。○中庸所謂在上位不陵下、在下位不援上、正己而不求於人、則無怨。上不怨天、下不尤人是也。㊃乎疑辭。**曾子避席曰。**辟毗義反。○席坐席也。禮師有問避席起對。曾子侍師而坐。故敬孔子之問、避席而起。**參不敏。何足以知之。**㊄敏速也。不敏猶言遲鈍。此辭讓而對也。

子曰。夫孝德之本也。夫音扶。下同。○夫者發語辭。亦指示語。本木之根。幹枝所由以生也。仁義禮㊅智根心。而孝又爲五性之本實。故曰德之本。以明至德二字之義。**教之所由生也。**中庸所謂率性之謂道、脩道之謂教。聖人一言一動以至禮樂刑政皆无非教。然其要在于五典。而孝又爲五典之樞要。人心本自由有固有之要道。而教化之神速。生生活潑、至於愛敬盡於事親。而德教加於百姓、刑於四海。故曰教之所由生也。生字謂生生活潑潑地。以明要道二字之義。㊆**復坐。吾語女。**語去聲。○復還也。夫子之言未竟、又將更端而語之。以曾子避席起立。故命之還坐而听㊇也。**身體髮**

膚受之父母。身總言其大体。謂四肢。髮毛髮。膚皮膚。此身體髮膚。不可認作血肉之身体髮膚看。蓋人之身体髮膚。本性命之凝聚。而无道器之分。道即器。器即道也。所謂仁者人也。形色天性也。惟聖人然後可以踐形是也。人失其本心。而后道與器分離。而初為身血肉之空殼子而已。

不敢毀傷。敢忍為也。不敢猶言不忍。毀謂虧辱。傷謂破損。所謂戒懼慎獨是也

孝之始也。言從孝德發見之最初。而明孝德之起頭處也。

立身。立成也。堅也。全其本然。而渾成貞固之意。身謂道器合一萬物一體的身。勿作血肉空殼身講。

行道。行去聲。〇道即要道也。行道者。即上文以順天下民用和睦是也。立身行道。非兩事。立身所以立行道之体也。行道所以達立身之用也。然体用一源。功夫无二致。只就己而言之。謂立身。就與人交而言之。謂行道而已。

揚名於後世。揚傳播也。名者實之賓也。謂揚后世者。所以明其名自然之公論而不朽也。此舉名之不朽。以明至德无終始而不朽。只勿泥揚名上而講。

以顯父母。以指所以立身行道揚名言。顯明也。著也。與宗廟致敬鬼神著矣之著同。意吾與父母本一體。而无間隔。故吾立身行道。則父母鬼神著而享之。吾名傳播。則父母之名。亦因以光顯也

孝之終也。終如終條理之終。謂孝行成功盡頭處。言孝行始興於不敢毀傷之戒懼。而終成於立身行道揚名顯親也。

夫孝始於事親。中於事君。此始中言行道之本末先后也。始於事親者。以示百行不原于不敢毀傷之孝心。則悖德悖禮。而雖得之不足貴者也。中於事君者。泛謂孝德之感通。君臣長幼夫婦朋友之交。君臣之義最重。故舉君臣以包其餘。

終於立身。終非始終之終。畢竟歸宿

(一)〇認識之・記之。
(二)傷眞實折本傷誤作復。
(三)忍毀間書院寫本有也字。
(四)〇渾音魂。圓兒。―然全之。
(五)用和睦上書院寫本初佚民字。後朱書擠入之。
〔立成也、堅也、〕益田本作〔立成也堅也〕。
(六)立間書院寫本朱書擠入能字。蓋松下伯季之筆。
(七)長幼夫婦書院寫本倒用。

㊀優書院寫本誤作援。
㊁〇聿以律反。
㊂太書院寫本作大。
㊃〇蘊委粉反、積之。
㊄倣書院寫本作放。下同。
㊅敢書院寫本作毀。底本敢下迄片字ヒ文字。
㊆〇而承上起下辭。
㊇兩齋書院寫本作齋。
㊈〇齋明之。戒潔之。又—之爲言。齊之、齊不齊以致齊之。與齊通。
㊉于書院寫本作於。
㊉一上文下書院寫本有所謂二字。

之意。此一句一截之結句也。不可對始于事親中於事君而看。言自不敢毀傷以至立身行道揚名顯親。五倫之交日用百行畢竟歸著于立身也。**大雅云。**詩大雅文王篇。凡此經引詩書者。有三義。一證之示言不虛發也。一用爲結前起後之語。一取咏嘆優遊有以感發人之善心也。**無念爾祖。聿脩厥德。**无念猶言豈得无念也。爾泛指人言。祖指生之本言。身之本父母也。父母之本推之至始祖。始祖之本天地也。天地之本大虛也。擧一祖而包父母先祖天地太虛。此一句咏嘆不敢毀傷之蘊。聿述也。厥其也。指祖而言。德卽至德也。此一句咏嘆立身行道揚名顯親等蘊。**愛親者。**愛者順德之愛發而中節之和。經所謂博愛也。親父母也。下敬親之親倣此。須包先祖天地大虛看。**不敢惡於人。**惡去聲。下同。〇不敢卽不敢毀傷之不敢也。不敢惡者卽親愛也。不曰愛而云爾者。以示不忍人之心不能已者也。人包天下之五倫言。下不敢慢於人之人倣此。**敬親者。**敬者順德之敬發而中節之和。經所謂敬一人而千萬人悅之敬也。**不敢慢於人。**不敢者亦不敢傷之條目也。不慢者敬也。不曰敬而曰不敢慢者。以示不忍人之心不能已也。**愛敬盡於事親。而**盡者極其全而无遺之意也。愛之極爲敬。敬之至爲齋。齋戒洗心到得浩然之氣塞乎兩間赫然之光照乎四表。方纔是謂愛敬盡于事親。堯克明峻德是也。**德教**德卽至德也。敎脩道之敎。存神過化自然之敎化也。大學所謂上老老而民興孝，上長長而民興弟。上恤孤而民不倍之意也。德敎卽上文愛敬盡于事親是也。**加於百姓。**加施也。著也。與君子之德風。小人之德草。草上之風必偃之上字同意也。疏曰。百姓謂天下之人。皆有族姓。言百擧其多也。尚書曰。平章百姓。則謂

(一)○九族、書註、高祖至玄孫之親。舉近以該遠、五服異姓之親亦在其中也。又曰、父族四、母族三、妻族二、是之。
(二)昭、書院寫本作照。是下無也字。
(三)刑于、書院寫本作刑於。注同。直讀折本亦作刑於。
(四)言上、書院寫本初脫爲字。後朱書挿入之。
(五)刑于、書院寫本作刑於。下文或作刑于。不必一概。
(六)于、書院寫本作於。下皆同。
(七)侯、書院寫本作俁。
(八)○陰・於禁反。草陰地之。又草所庇之。
(九)○隕・羽敏反。隊之。
(十)隊下也、底本作之。改從書院寫本。
(十一)○節卦象辭之。
(十二)○制數度議德行、傳以制立一一。凡物之大小高下、文質皆有一一所以爲節之。數多寡度法制。存諸中爲德、發外爲行。人之德行、當義則中節。議謂商度求中節之。
(十三)○不傷財不害民。節之卦象傳辭之。聖人立制度以爲節、故能一一一一一一。
(十四)法下、制、書院寫本初作則。後朱書改制。
(十五)所下、直讀折本脫以字。

百姓、爲百官。爲下有黎民之文、所以百姓非兆庶也。此經德敎加於百姓、則謂天下百姓、爲與刑于四海相對。四海既是四夷、則此百姓自然是天下兆庶也。堯之親九族。九族既睦、平章百姓。百姓昭明、協和萬邦。黎民於變時雍是也。

刑于四海。 刑法也。爾雅曰、九夷八狄七戎六蠻、謂之四海。疏云、海之爲言晦。晦闇于禮義也。刑于四海者。中庸所謂舟車所至、人力所通、天之所覆、地之所載、日月所照、霜露所隊、凡有血氣者、莫不尊親。故曰配天之義也。堯之光被四表、格于上下是也。

蓋 大凡也。言略舉其綱要也。

天子之孝也。 天子帝王之爵。表記云、惟天子受命于天。故曰天子。白虎通云、王者父天母地。亦曰天子。虞夏以上未有此名。殷周以來始謂王者爲天子也。

甫刑云。 即尚書呂刑也。尚書有呂刑而无甫刑。孔安國云、後爲甫侯。故稱甫刑。

一人 天子也。

有慶。 慶善也。福也。有慶言有以愛敬盡于事親之善、而受富保四海之福。

兆民 十萬爲億。十億爲兆。百姓言百。民稱兆。皆舉其多也。

賴之。 賴蒙也。之指有慶之慶。賴之言兆民蒙天子至德之福蔭。而家家和睦、人人無怨。所謂德敎加于百姓、刑于四海是也。

居上 居一國臣民之上也。

不驕。 驕矜肆也。不驕謂卑以自牧。稱物平施。

高而 謂諸侯貴爲一國之主。

不危。 危謂勢將隕墜也。

制節 制止也。節謂時措之天則也。制節、易所謂制數度。議德行。不傷財。不害民。

謹度。 度法制也。法之一定如度有分限也。謹度謂謹守諸侯可守之法度也。

滿而 謂諸侯之富有一國之財。

不溢。 音逸。○如水之溢出。

高而不危。所以長守貴也。 位尊曰貴。此謂諸侯之貴。

滿而不溢。所以

㊀社上底本佚其字。改從眞蹟折本。
㊁義書院寫本作儀。非是。色寫本同。俱當作邑。
㊂○其・子余反。藉之。包之。本蒯類之。
㊃○稷・五穀之長。秋種夏熟。歷四時備陰陽。穀之貴者。苗穗似蘆而未可食。
㊄戾下書院寫本有也字。
㊅言也間書院寫本有之字。
㊆德下青書院寫本傍記也字。以爲異本則如此。

長守富也。財足曰富。此謂一國之富。富貴不離其身。然後能保。謂不亡失。其社稷。正義曰。天子大社東方青。南方赤。西方白。北方黑。中央黃土。若封四方諸侯。各割其方色土。苴以白茅而與之。諸侯以此土封之爲社。明受於天子也。社土神。稷五穀之長。亦爲土神。按左傳云。共工氏之子曰勾龍。爲后土。后土爲社。有烈山氏之子曰柱。爲稷。自夏以上祀之。周棄亦爲稷。自商以來祀之。言勾龍柱棄配社稷而祭之。卽勾龍柱棄非社稷也。稷壇在社西。俱北鄕竝列。同營共門。而和。謂各率用孝德。相愛敬而无所乖戾。其民人。民是無位者。人是有位者。蓋諸侯之孝也。謂五等國君。公九命。侯伯七命。子男五命。詩云。小雅小旻之篇。戰戰。恐懼貌。兢兢。音矜。○戒謹貌。如臨深淵。如履薄冰。此二句以形容不敢毀傷之敬心。是乃全孝之心法。愼獨之要也。非先王。卽發端。先聖王也。之法服。法字必不可作制作定法看。可作中庸活法看。服者身之表也。上曰衣。下曰裳。通言之皆曰服。不敢服。卽不敢毀傷之不敢也。下放此。非先王之法言。此法亦中庸活法也。言言語也。集解曰。揆道而言。曰法言。不敢道。道言也。非先王之德行。行去聲。○德包性道而言。行躬行也。率德而行曰德行。不敢行。是故非法不言。非法謂不合中庸之活法也。非道。謂不率性道之德言。不行。口無擇音宅言。言自其口出。一皆心之中庸。則無可揀擇是非之言。身無擇行。去聲。○言其躬行。一皆率性道。則無

可揀擇是非之行也。言滿天下無口過。行滿天下無怨惡。口過謂言不合法出口有差。怨惡謂行不合道召怨取惡。卿大夫㊀立朝則接對賓客。出聘則將命他邦。故言行滿天下。三者服言行也。備矣。謂服言行全守中庸而無虧欠也。矣語已辭。然後能守其宗廟。廟音妙。下同。○宗尊也。廟皃也。言先祖之尊皃之所在也。爾雅室有東西廂㊁曰廟。蓋卿大夫㊂之孝也。說文云。卿章也。白虎通云卿之爲言章也。章善明理也。大夫之爲言大扶。扶進人者也。故傳云。進賢達能謂之卿大夫。此卿大夫謂王朝侯國之臣。按周禮王之卿六命。大夫四命。子男之卿再命。大夫一命。今連言者。以其行同也。詩云。大雅烝民之篇。夙夜匪懈。夙早也。匪猶不也。懈惰㊃也。匪懈謂敬勤。以事一人。以以夙夜匪懈之敬勤也。一人天子也。

資於事父資取也。與秉彝執中之秉執同。守而不失之意。事父謂一本之孝德。以明無非往而事父之孝也。以事母。以指資于事父。事母即一本感通㊄于事母之孝也。而愛同。謂愛母與愛父同一孝德之感通也。愛敬本相爲表裏。无敬之愛。非天性之愛。无愛之敬。非天性之敬。故言愛則敬在其中矣。言敬則愛在其中矣。事母之孝。愛㊅爲表。敬爲裏。故以愛爲事母之孝也。資於事父以事君。以指資于事父。事君即一本感通于事君之忠也。而敬同。謂敬君與敬父同一孝德之感通也。事君之忠。敬爲表。愛爲裏。故以敬爲事君之忠。故承上起下之辭。下效之。母取其愛。而君取其敬。「守而不失之意「與資同意「指至德 取即與上文資同意。兩其字指至德言。事母則不失至

㊀大夫底本多誤作太夫。改從書院寫本。下同。
㊁○廂・音相。序也。古曰正寢東西室皆曰廂。如箱篋之形。又廡之。
㊂大夫底本誤作太夫。眞蹟折本及書院寫本不誤。今改。下同。
㊃惰書院寫本誤作憧。
㊄于母間底本無事字。書院寫本朱書追記事字。今補。下文亦作感通于事君之忠也。
㊅爲表下書院寫本有事父之孝四字。恐衍。

㊀君下底本佚則字。改從書院寫本。
㊁○隆豐大之。多之。生而不已、益高大之。
㊂書院寫本頭注曰、三達者年德位也。
㊃者上己底本作巳。書院寫本同。今改。
㊄謂下書院寫本有也字。
㊅○鎭・安之。戍之。
㊆○逸・失之。
㊇○際・接之。相接續之。相會之捷之。
㊈○乾健之。陽之性之。
㊉○惕敬之。憂之。懼之。
(十一)太虛書院寫本作大虛。
(十二)○了・慧之。訖之。決之。

德之愛、事君則不失至德之敬也。**兼之者父也。**兼幷也。包括之意。之字指至德之感通。董子曰、人必有本。父者生之本也。愛與敬父兼之、所以致隆于一本也。**故以孝事君則忠。以敬事長則順。**長上聲。下同。○敬即事父之敬也。君曰孝。長曰敬。有輕重之微意。疏云、大夫以上皆是士之長。愚謂須包三達尊之長于己者看。**忠順不失以事其上。**馬氏曰、忠者中也。至公無私。一其心之謂。順亦悌也。記曰、長惠幼順。**然後能保其爵祿、而守其祭祀、**疏云、稱保者安鎭也。守者無逸也。爵謂爵位所居之官也。祿謂廩倉。疏云、祭者際也。人神相交際也。祀者似也。謂祀者似將見先人也。社稷祿位是公。故言保。宗廟祭祀是私。故言守也。**蓋士之孝也。**說文云、數始於一、終於十。孔子曰、推一答十爲士。白虎通曰、士者事也。任事之稱也。傳云、通古今、辨然不然、謂之士。此士謂王朝侯國之小臣及卿大夫之家臣。王之上士三命。中士再命。下士一命。公侯伯之士一命。子男之士不命。**詩云。**小雅小宛之篇。**夙興夜寐、**謂日乾夕惕无間斷也。**無忝爾所生。**忝音腆。○無與毋通。禁止辭。忝辱也。爾泛指人。所生謂我所生之本。即父母先祖天地太虛是也。虞氏曰、人生如蜾蠃。兩箇形体相負、乃得化生。父母生我、不必言了。凡全我化我的人、皆有生我之恩。當朝夕戰戰兢兢、无忝所生。方是孝子。無忝爾所生、猶言毋仰愧于天、俯怍于人。**用天之道、**謂天道流行、爲春生・夏長・秋收・冬藏四時之運、

書院寫本頭注曰。五土一曰山林。二曰川澤。三曰丘陵。四曰墳衍。五曰原隰。

（　）五土・疏曰。一曰山林。二曰川澤。三曰丘陵。四曰墳衍。五曰原隰之。隰澤之。

（　）衍・平曰ー。

（　）粱・米名之。米之善者。五穀之長之。稻粱一物。其内粱似粟而大。以損地力而收穫少。人種之少。

（　）府・治藏者。

（　）史・掌書者。

庶上爲書院寫本作謂。

至下眞蹟折本有於字。

（　）沌・水不通之。混ー元氣未判之。

若書院寫本同。當作善。

故上至書院寫本作及。

以上附解本凡佚之。

甚哉前書院寫本有甚哉草三字標目。自爲一行。

太書院寫本作大。

機本作机。附解本同。蓋當時通用略字。改從書院寫本。下文寫本亦機作机。

（　）縷・閭主反。

也。以春耕。以夏耘。以秋收。以冬藏。此之謂用天之道也。**因地之利。**利宜也。地之利謂五土之宜。因地之沃衍隰皐。而稻粱黍稷各隨所宜。此之謂因地之利也。**謹身。**謂小心敬謹以脩其身。不爲非僻。不犯刑戮也。**節用。**節謂量入爲出不妄費。用謂衣服飲食喪祭賓客之用也。**以養父母。**養去聲。○以以謹身節用也。養包養口體養志。言謹身所以養志也。節用所以養口體也。**此**自天子至士。孝行廣大。其章略述宏綱。所以言蓋也。庶人用天因地謹身節用。其孝行已盡。故曰此。**庶人之孝也。**正義曰。庶者衆也。謂天下衆人也。皇侃云。不言衆民者。兼包府史之屬。通謂之庶人也。嚴植之以爲士有員位。人无限極。故士以下皆爲庶人。**故**連上之辭。包上文六節。**自天子已下至庶人。**已下二字正指前所謂諸侯卿大夫士言。**孝無終始。**孝在混沌之中。而其生無始。推之后世而無朝夕。無時非孝也。無所不在。無所不通。生生無終。須臾不可離者也。**而患不及者。**患慮也。若也。如患得之之患。及至也。孝無所不至。故民用患不及者。未之有也。**未之有也。**反言以深警戒之。言自古及今未有此理也。蓋爲決言以勉人之力於行孝。

曾子曰。甚哉。甚太過也。深也。甚哉有贊美不盡之意。**孝之大也。**天下莫能載曰大。大者孝德本然之量也。因夫子之教。而曾子有見孝德无外之量。故以大嘆美之也。**子曰。夫孝天之經也。**經常也。如布帛在機之直縷條理一定而不易也。蓋天之道生生无息。一

○稱下書院寫本有也

(一)○字大極圖說小註曰、何謂一曰道、如一陰一陽謂之類、只是一陰了又一陽了、即是道。寒了又暑、暑了又寒、這道理循環不已。惟天之命於穆不已、萬古且如此。

(二)裁・制衣之、製之、度之、節之、

(三)○制之、裁之、造之、正之。御之、檢之、法禁之。止之。

(四)○利・易曰、義之和也。吉之、道之、宜之、財用之、功利之。

(五)○天行健、、、、、者易乾之象辭之。

(六)自賀書院寫本作自彊。可從。

(七)○天時・朱註曰。法其自然之運、當兼內外該本末而見。

(八)○乾以易知・繫辭之文。「古註曰、天道不爲而善始。

(九)○襲水土・朱註曰、因其一定之理。

(十)地道書院寫本作天道。

(十一)○八政・一曰食、二曰貨、三曰祀、四曰司空、五曰司徒、六曰司寇、七曰賓、八曰師。食貨所以養生之、祭祀所以報本之。司空掌土、所以安其居之。司徒掌教、所以成其性之。司寇掌禁、所以治其姦。賓禮諸侯遠人所往來交際之。師除殘禁暴。

陰一陽天理一定而不易。故取象以經爲天道之殊稱。

地之義也。 義者宜也、順理裁制之謂也。注疏云、利物爲義。地之道順承天而成物、利莫大焉。故以義爲地道之殊稱也。

民之行也。 行平聲。○民人也。行者流行无滯礙之意。易曰、天行健、君子以自強不息。蓋人之道以率性而行、无所滯礙爲常。故以行爲人道之殊稱也。

天地之經。 天包地、故舉經而義在其中矣。凡經者道之總號也。

而民是則之。 「一指人性言「一指天地之經 是指人性言、則猶準也。又效法也。資而不違之意。下則字同。之字指天地之經言。則之非意之。自然而則之也。人性資天地之經而不違。譬如月受日光而明不違。

則天之明。 則與中庸所謂律天時之律同意。明亦天德之別名也。易曰、乾以易知。正義云、光明四通、日月星辰布設張列、通精无門、藏神无穴、不煩不擾。此其易也。故以明爲天道之殊稱。「一坤彖之辭文

因地之利。 因與中庸所謂襲水土之襲同意。利亦地道之別名也。易曰、坤主利。又曰、利者義之和。言地之生物、順天理之宜而无所乖戾。是以无不利。故以利爲地道之殊稱。「乾之文言之文之

以順天下。是以其教 「一指則天明「一因地利 其指則天明因地利言。教即至德之至教也。

不肅而成。 肅音宿。○肅峻急也。成謂民則而象之。不肅而成言上行下効。甚易而捷也。

其政 「指則天之明「因地之利 其指則天之明因地之利言。政之爲言正也。設法制禁令、而所以正人之不正也。洪範八政是也。

不嚴而治。 去聲。○嚴教命急也。威也。治謂民恥格而不亂也。不嚴而治言上令下從。不用威猛而治也。

先王見。 先王謂、即發端所謂先王也。

見與易所謂聖人有以見天下之動而觀其會通以行其典（繫辭之文之）（非特陰陽之運動。凡人之動而行事與夫一念之動。皆是之。）（謂理之所聚而不可遺處）（謂理之可行而无所凝處）禮之觀見同意。敎卽上文其敎不肅而成之敎也。馴致於善（順之抑之。）（至之）

敎之可以化民也。（不肅而成之敎之）

謂之化。民人也。

是故先之（指敎）先事而爲曰先。之指敎而言。

以博愛。而 博大通也。愛至德之愛也。至德之愛。至大而无所不通。故曰博愛。所謂愛敬盡於事親。而德敎加於百姓。刑於四海。孝悌之至。通於神明。光於四海。無所不通是也。

民莫遺其親。 民人也。遺猶棄也。莫遺謂愛敬之也。其指民而言。親父母也。

陳之。（指敎）陳布也。之指敎而言。

以德義。 德者得也。行道而有得於心也。義者宜也。所以裁制事物使合宜也。德義猶言心法也。心法所以行道而有得於心之裁制。使合宜也。書所謂五典周禮所謂六德等是也。

而民興行。 去聲。○民人也。興謂有所感發而興起也。譬如寐者之有所驚而寤起也。行所謂民之行也。

先之以敬讓。 讓謙也。敬讓本一德。相爲表裏。卽上文所謂愛敬盡事於親而德敎加於百姓。刑於四海之敬也。

而民不爭。 民人也。不爭謂和睦而無怨也。

導之（指敎）導啓迪也。之指敎而言。

以禮樂。而民和睦。 禮謂制度品節。所以別嫌明微。儐鬼神考制度。治政安君也。樂有五聲十二律更唱迭和。以爲歌舞八音之節。所以平情導和。通神明。合天人。通倫理者也。（導賓之。又敬之。）

示之（指敎）說文

㊀昔下書院寫本不重者字。

㊁乾文書辭之。

㊂發端下書院寫本有之字。恐衍。

㊃忽・忘之・輕之。

㊄本有謂字上。

「疑役字乎字書示云。示天垂象見吉凶。所以示人也。从二。三垂日月星也。聖人垂教亦如此。故曰示之。之指教而言。**以好惡。**好惡並去聲。○謂好至德、惡悖德也。中心有好至德之實。則其所以加賞皆此受用至德之人也。中心有惡悖德之實。則其所以施刑者盡是悖德之人也。此之謂示之以好惡。**而民知禁。**民人也。禁止也。知禁謂民恥于不善而知禁止非心。**詩云。**小雅節南山篇。**赫々師尹。**赫赫明盛貌。師大師。官名。周三公之一也。尹其時居大師官人之氏也。**民具爾瞻。**民萬民也。具皆也。爾汝也。言在上者人所瞻仰。而上行下効甚易而速也。而又包垂戒之意。**昔者**指古先盛世而言。凡曰昔㊀者者。其意有二。一以爲証示可尊信之義。一以示戒懼而可知所取法也。**明王之**㊁易曰。大人與日月合其明。日月之容光照臨于六合。聖人之德輝亦光被于四表。故曰明。明王。即㊂發端先王也。以代言之謂之先王。以德言之則爲明王。不曰聖王而曰明王者所以示其聖神功化。光明四通。不可尚之本然也。經所謂孝弟之至通于神明光于四海无所不通者是也。**以孝治天下也。**經所謂愛敬盡于事親。而德教加于百姓。刑于四海者是也。只不曰治天下而曰以孝治天下者所以明非明王則不能以孝治。縱雖有幸致治者。不以孝則悖德悖禮而不足貴。而非王道也。**不敢遺**遺㊃忽忘也。不遺者愛也。不敢者。敬也。即上文所謂愛親者。不敢惡於人。敬親者。不敢慢於人。是也。**小國之臣。**謂附庸之國主也。土地褊小不能五十里附于諸侯。曰附庸。吳子曰。小國之臣。子男之卿大夫。子男五十里爲小國。伯七十里爲次國。公侯百里爲大國。愚按二說雖於理无害。而前說爲穩當也。**而況**譬擬也。**於公侯伯子男乎。**五㊄等之諸

侯也。孟子曰。公一位。侯一位。伯一位。子男同一位。公侯皆方百里。伯七十里。子男五十里。凡四等。不能五十里。不達於天子。附於諸侯。曰附庸。疏云。公者正也。言正行其事。侯者候也。言㊀斥㊁候而服事。伯者長也。爲一國之長也。子者字也。言㊂字愛於小人也。男者任也。言任王之職事也。**故得**保而不失之意。下倣㊃此。**萬國之**猶言萬方。是舉多而言之。不必數滿於萬也。**懽心**。懽與經所謂敬其父則子悅之悅同。孟子「指君」「天下之人子之」所謂以德服人者中心悅而誠服也。下放此。**以事其先**「以得萬國之懽心之」「指明王」**王**。以以得萬國之懽心也。其指明王而言。疏云。經先王有六焉。一曰先王有至德。二曰非先王之法服。三曰非先王之法言。四曰非先王之德行。五曰先王見㊄敎之以可化民。此皆指先代行孝之王。此章云以事其先王。則指行孝王之考祖。吳子曰。天子無生親可事。故曰以事其先王。**治國者不敢侮**侮謂慢忽之而「棄之」不矜恤。不侮㊅愛也。不敢敬也。上文所謂不驕制㊆節謹度是也。**於鰥寡**。老而无妻曰鰥。老而无夫曰寡。舉此二者以包无告窮民。「孤獨之類」**而況於士民乎**。一命以上爲士。民則庶人也。諸侯有卿大夫。只言士民亦舉小以見大耳。**故得百姓**通百官族姓士民鰥寡而言。**之懽心**。**以事其先君**。以以得百姓之懽心也其指治國者而言。吳子曰。諸侯亦无生親可事。故曰以事其先君。**治家者**謂卿大夫及士庶人。治家以孝治其家也。**不敢失**失謂不得其心也。不失者愛也。不敢失者敬也。上文所謂不敢毀傷。立身行道是也。疏云。明王言不敢遺小國之臣。諸侯言不敢侮

㊀〇斥·度之指之。
㊁〇候·視望之·伺望之。
㊂〇字·乳之·愛之·養之·舉之。
㊃做書院寫本作放。
㊄敎之下書院寫本朱書插入以可化民四字。
㊅愛上侮本誤作侮。改從書院寫本。附解本不誤。
㊆制節本作制度。傍記疑節乎三字。書院寫本初作制度。後度傍朱書節字。附解本作制節。今改從。

㊀敢遺本誤作敢侮。附解本同。改從書院寫本及疏文。

㊁貴者下書院寫本有也字。附解本同。

㊂○享・許兩反。

㊃則明間書院寫本有能字。即下有所字。道下有也字。附解與底本全合。

於鰥寡。大夫言不敢失於臣妾者。劉炫云。遺謂意不存錄。侮謂忽慢其人。失謂不得其意。小國之臣位卑。或簡其禮。故曰不敢遺也。鰥寡人中賤弱。或被人輕侮欺陵。故曰不敢侮也。臣妾營事產業。宜須得其心力。故曰不敢失也。

於臣妾。疏云。臣妾是奴婢。家之賤者也。

而況於妻子乎。妻子是家之貴者。㊁

故得人包妻子臣妾一家之人而言。

之懽心。以事其親。以以得人之懽心也。其指治家者而言。親父母。疏云。天子諸侯繼父而立。故言先王先君也。大夫唯賢是授。居位之時。或有俸祿以逮於親。故言其親也。

夫然。董氏曰。夫然猶言惟其如此也。

故生謂父母存時也。

則親安之。一指孝行 親謂生親。安謂其心无憂也。所謂舜盡事親之道。而瞽瞍底豫是也。之指子之孝行而言。

祭謂親沒后奉祀也。

則鬼人死曰鬼。

享之。一指祭禮誠敬 ㊂享饗通。謂其鬼神來格而歆饗其祭也。之字指祭禮之誠敬而言。

是以天下和平。舉天下則國家在其中。和平謂各得懽心而无乖戾偏頗也。

災害天災之甚者。爲災害。星變水旱蝗疫之類。

不生。災害自天降。故曰生。

禍亂人禍之甚者。爲禍亂。寇賊・奸・兵戈・弑父弑君之類。

不作。禍亂出于人爲。故曰作。

故連上之辭。

明王之以孝治天下也如此。總結上文。

詩云。大雅抑之篇。

有覺德行。注云。覺大也。虞氏曰。覺悟也。愚按悟而后能大。大則明悟。非有二義。覺德行卽謂至德要道。

四國謂四

㊀敢問前書院寫本有敢問章三字標目、自爲一行、底本亦提行。今誤。
㊁所下書院寫本有以字。附解本與底本同。
㊂○易文昔之文。
㊃天是大底聖人云々。參看論語啓蒙翼傳迅雷風烈條。
㊄猶可間寛文八年板本有不字。書院寫本附解本並無之。
㊅○廖・當作寥。空虛之。
㊆○廓・空大之。
㊇無下書院寫本初脫外字、後朱書攙入之、蓋後人筆。
㊈○擘・擘之。
㊉天極間書院寫本有之字。

方之國。**順之。**順與順天下之順同。之指覺德行而言。**曾子曰。敢問㊀。**敢進取而無所憚之意也。曾子因夫子之教而已、雖知孝德之全体至大而無外。而融化未盡。而不能無毫髮之凝滯。故所㊁敢問也。**聖人之德。**易曰㊂。大人與天地合其德。故曰天㊃是大底聖人、聖人是小底天。**其無以加於孝乎。**加增也。言聖人之德至大。而天下莫能載。則猶㊄可有增加於孝德之上也。**子曰。天地之性。人爲貴。**言天地之所性、乃是人也。故萬物之首靈。而爲至貴而無對也。禮運所謂人者其天地之德。唐氏所謂人者天地之心。天地有人。如人腹内有心是也。此人字指聖人而言、與所謂仁者人也之人同。**人之行。**人極也。即上文所謂人之行也。**莫大於孝。**孝德全体充塞于大虛。大虛廖㊅廓㊆而無㊇外。則莫大之義。不言而照然矣。**孝莫大於嚴父。**嚴尊也。孝之全体雖充塞于大虛、而其實体備于人、而感而遂通天下之故。其感通之本。在于嚴父。而嚴父之至。通于神明。光于四海。無所不通。所以復充塞于大虛之本体只在茲。故曰孝莫大于嚴父。**嚴父莫大於配天。**配合也。以所以事天之道。事其親。此之謂配天。孟子曰。存其心。養其性。所以事天也。即首章不敢毀傷。立身行道。全孝心法也。記曰。仁人之事親也。如事天。事天如事親。是故孝子成身。由是觀之。則雖行拜伏擘㊈跪之敬。以所以事天 不事其親。則非嚴父之至。故曰嚴父莫大于配天。必勿在郊祀宗祀上而講配天。郊祀宗祀只是配天㊉極其至之禮。而周公之所獨也。**則周公其人也。**周公文王之子。武王之弟。成王之叔父。名旦。采食于周。位居三公。故稱周公。其人猶言行嚴父配天之孝人也。得遂此心盡此禮而極其至者。惟周

㊀書下附解本乙者字。

㊁世室書院寫本作世堂。誤。

㊂太室太廟書院寫本作大室大廟。

㊃圜底本誤作國。附解本同。今訂。書院寫本不誤。

㊄犢書院寫本誤作性。

公而已。故曰周公其人。此章專發明孝德全体之廣大。是以擧嚴父配天之廣大至極處而證之。非謂郊祀宗祀而爲配天。學者勿以辭害志也。

昔者周公郊祀后稷，以配天。

后稷是周之始祖。郊謂冬至祀天於南郊之圜丘也。郊之祭也。必以后稷配之。故曰郊祀后稷以配天。不曰祭天而惟云附者此專以明配天之義也。程子曰。萬物本乎天。人本乎祖。故冬至祭天而以祖配之。以冬至氣之始也。朱子曰。周公以萬物本乎天。文武之功本乎后稷。爲始祖而配天祀于郊。冬至者一陽始生。萬物之始。尊后稷猶尊天也。公羊傳云。郊則曷爲必祭稷。王者必以其祖配。王者則曷爲必以其祖配。自內出者無主不行。自外至者無主不止。言祭天則天神爲客。是外至也。須人爲主。天神乃至。故尊始祖以配天神。侑坐而食之。

宗祀文王，於明堂以配上帝。

宗尊也。謂有功德可尊也。文王之功德至大而非他宗之所可比。故於明堂大享之祭配之。蓋此祭文王之所獨享。而爲百世不易之宗。是以曰宗祀。明堂者天子布政之宮也。蓋所以明天氣統萬物。動法于兩儀。德被于四海者也。夏曰世室㊁。殷曰重屋。姫曰明堂。此三代之名也。明堂天子大廟。所以宗祀其祖以配上帝。東曰青陽。南曰明堂。西曰總章。北曰玄堂。中曰太室㊂。雖有五名。而以明堂太廟爲主。取其宗祀則謂之淸廟。取其正室則謂之太室。取其向陽則謂之明堂。配上帝即配天也。以其徧覆無外謂之天。以主宰造化而尊无與並謂之上帝。其實一而已矣。陳氏曰。古者祭天於圜丘㊃。掃地而行事。器用陶匏。牲用犢㊄。其禮極簡。聖人之意以爲未足以盡其意之委曲。故於季秋之月。有大享之禮焉。天即帝

〇纖誤作稱。附解本同。今訂。書院寫本不誤。
㊀當上底本無所字。從上有爾所字。上改從書院寫本。下刪一所字。
㊂〇四方・諸侯各四分趣四時而來。
㊃〇六服・方幾千里、其外五百里侯服。歲一見。又其外五百里甸服。二歲一見。其外五百里男服。三歲一見。其外五百里采服。四歲一見。其外五百里衞服。五歲一見。其外五百里要服。六歲一見。（要紡之凡數之）
㊄脩書院寫本作修。下同。疏文作脩。
㊅〇大行人・掌大賓之禮及大客之儀之職。
㊆〇九儀・公侯伯子男之五等與孤卿大夫士之四等合九儀之。
㊇〇命・五等之命之。
㊈〇將幣・三享皆束帛加璧之。
㊉〇三享・三獻之。
⊕侯服書院寫本誤作諸服。祀物誤作禮物。

也。郊而曰天。所以尊之也。故以后稷配焉。后稷遠矣。配稷於郊。亦以尊稷也。明堂而曰帝。所以親之也。以文王配焉。文王親也。配文王於明堂。亦以親文王也。尊尊而親親。周道備矣。然則郊者古禮。而明堂者周制也。周公以義起之也。王氏曰。郊以祀天。廟以事祖禰。㊀三代之達禮也。明堂以享帝。則非郊。以享親。則非廟。夏商所未有也。而周始爲之。故夫子曰。昔者周公郊祀后稷以配天。宗祀文王於明堂以配上帝。武王之伐商而歸也。祀明堂以教民知孝。其禮行于朝覲耕籍養老之先。而嚴父配天之義。夫子不屬之武王。而屬之周公者。蓋明堂之禮。武王主其事而行之。其制度則周公明其義而爲之也。夫義者禮之質也。故禮雖先王未之有。而可以義起。周公達于義者也。其在周頌。思文后稷配天之樂章也。我將祀文王于明堂之樂章也。詩之國風始于關雎。小雅始于鹿鳴。大雅始于文王。頌始于清廟。皆文王之詩也。關雎有王者之化。鹿鳴有王者之政。大雅始于文王。則受命作周矣。頌始于清廟。則盛德有百世之祀矣。武王之伐商也。誓于孟津。誓于牧野。其伐商而歸也。告于群后。無不以文王爲言。則王業成于武王。而所以成之者文王也。配天于郊。則不可以二太祖之尊。蒸嘗㊁于廟。則不足以明文王之德。是故宗祀明堂以配上帝。此義之所當然。禮之所從起。而非厚于其禰也。

是以指其孝行之皆極其至而言。**四海之內**。謂㊂四方六㊃服諸侯也。**各以其職來助祭**。各指諸侯。其亦指諸侯而言。職謂其土物之貢及助祭之職分也。祭泛指祭祀。而重郊祀宗祀。疏云。各以其職來助祭者。四海之內。六服諸侯各脩㊄其職貢方物也。按周禮㊅大行人以九儀㊆辨諸侯之命㊇。廟中將㊈幣三㊉享。又曰。侯⊕服貢祀物。

(一)〇彝・尊之。
(二)〇纁・絳之。三染曰ー。又玄纁天地正色。
(三)〇絺・葛之。精者之。
(四)〇纊・綿之。
(五)〇八材・百工當飾。化之爲器之物之。
(六)〇駿・速之。
(七)〇籩・竹豆之。面徑尺。柄尺。其實容四升。
(八)〇豆・古食肉器之。木器之。
(九)下太虛書院寫本作二大虛一。
(十)〇峻・書作俊。大之。
(十一)〇之語助當於字看。
(十二)〇嚴・敬之。莊之。威之。尊之。
(十三)嚴書院寫本作レ尊。
(十四)親生書院寫本倒。非レ是。〃字朱書傍ニ記之字。
(十五)恃書院寫本誤作レ持。

鄭云。犧牲之屬。甸服貢嬪物。註云。絲帛也。男服貢器物。注云。尊彝之屬也。采服貢服物。注云。玄纁絺纊也。衛服貢材物。注云。八材也。要服貢貨物。注云。龜貝也。此是六服諸侯各脩其職。來助祭。又若尚書武成篇云。丁未祀於周廟。邦甸侯衛駿奔走執籩豆。亦是助祭之義也。

（六十四井曰ー。又治之。又服治田出穀稅之。）（紺之）（任之任事）（取之取其美物以當穀稅之）

夫聖人之德。又何以加於孝乎。孝德本充塞大虛。太虛廖廓而無外。故雖聖人之峻德。充孝德本然之量而已。故曰。聖人之德又何以加於孝乎。

故親生之膝下。親愛也。生謂生生活潑也。膝下謂下胎一聲啼叫時。言母子分娩。在膝下一聲啼叫時。而既至德之親愛感通而生生活潑潑地也。所謂赤子之心是也。

以養父母日嚴。以以至德感通生于膝下也。養育也。與萬物育之育字同意。謂因鞠畜而形神共生育而成長也。父母日嚴。謂心之所思一也。言以至德感通既生于膝下。隨形長神發。則敬親之良知日新。而其心之所思。父母日嚴也。

聖人疏云。聖人謂明王也。聖者通也。稱明王者。言在位無不照也。稱聖人者。言用心無不通也。

因嚴以教敬。因親以教愛。因者順其固有而開導之意也。嚴以養父母日嚴之嚴。親親生于膝下之親。人人固有之良知良能也。所教之敬愛。卽首章不敢毀傷。立身行道之愛敬也。嚴也。親也。敬也。愛也。非有二。但有大小精粗之異而已。人之常情挾恩恃愛。而易失于不敬。故先敬而后愛。因嚴以教敬。因親以教愛。猶因有穀種之生意而播種也。宜体認。

聖人之教。不肅而成。其政不嚴而治。其所

㊀所因間反點底本不附所字下。而在因字左上。今從。

㊁○家人卦象辭之。註家人之道必有所尊嚴。而君長者。謂父母之。

㊂迹書院寫本作跡。

㊀因者本也。其指政教而言。本謂三才一貫之大本。經所謂孝德之本。中庸所謂中也者。天下之大本也。是也。**父子之道。天性也。**父子之道。即孝也。父之愛子。本所以事其親也。故慈亦孝行之一端也。天性天命之眞性也。言父子之道生于膝下。而日嚴。乃是天之所以命人之眞性。而不可不畏敬而保合也。**君臣之義也。**君以仁使臣。臣以忠義事君。此之謂君臣之義。父尊子卑。有君臣之象也。父慈子孝。即仁忠之本也。易曰。㊁家人有嚴君焉。父母之謂也。大學曰。孝者所以事君也。慈者所以使衆也。此之謂也。言君臣之義所以行其孝也。天下之道不待他求也。舉君臣之義。包夫婦之別・長幼之序・朋友之信也。**父母生之續莫大焉。**生生育也。之指子而言。續連也。謂相連不絕也。言人之子資始于父。而資生于母。其心性形體。相連續而不絕。猶木之根幹枝葉一體。而不相離也。連續之至密。天下豈有加于此乎。故曰續莫大焉。**君親臨之。厚莫重焉。**親父母也。以尊適卑曰臨。覆育之意也。之指子而言。厚重也。廣也。謂仁愛重廣也。天下之至尊。無大乎君。天下之至親。無大乎父母。而兼之者。父母也。兼天下莫大之恩義。而覆育其子。仁愛之廣大。昊天罔極。天下豈能加于此乎。故曰君親臨之。厚莫重焉。**故不愛其親。而愛他人者。謂之悖德。不敬其親。而敬他人者。謂之悖禮。**悖音佩。○不愛敬其親者。言不受用嚴父配天之心法也。他人指君臣・夫婦・兄弟・子孫・朋友而言。愛敬他人者。言無嚴父配天之眞心。而假德禮之迹。而愛敬他人。如覇者假仁。是也。吳子曰。悖逆也。由本及末爲順。舍本趨末爲逆也。其愛敬雖合於德禮之迹㊂。而舍嚴父配天之本。

㊀句上書院寫本有一字。
㊁○陳布之。列之。
㊂自行謂盡父配十五字書院寫本佚之。
㊃而上說書院寫本作悅。
㊄成務書院寫本誤作作務。
㊅朱氏附解本同。書院寫本作朱子。

而從事於末故曰悖德悖禮。**以順則。**以用也。順謂由嚴父配天之本而愛敬天下之人倫也。則謂則而象之也。以順則經所謂愛敬盡於事親而德教加於百姓刑於四海是也。**逆民無則**逆即悖德悖禮也。民人也。無則謂人心無德義之則。所謂民免而無恥者也。**焉。**語終辭。**不在於善而皆在於凶德**疏云。在謂心之所在也。善即嚴父配天之至善也。皆謂無所不至也。凶不吉也。凶德即悖德悖禮也。**雖得之。**之指其所求而言。得之謂求民之所服從而得之也。如霸者之服人是也。**君子所不貴也。**君子謂聖賢。下同。不貴賤惡之也。董子曰。仲尼之門。五尺童子。羞稱五霸。正此意也。**君子則不然。**不然謂無一毫悖德悖禮之心也。此下將說嚴父配天之順德。故設此㊀句承上起下。**言斯可道。**言言語也。斯此也。語助辭。下同。道謂㊁陳說也。以嚴父配天之德。而時然后言。則民莫不信而爲可陳說之法言。**行斯可樂。**行去聲。樂音洛。○㊂行謂施行也。樂謂人說服也。以嚴父配天之德。而時出之。則行而民莫不說㊃而爲可悅服之德行也。經所謂敬一人而千萬人悅是也。**德義可尊。**尊謂敬信也。心法立嚴父配天之極。則不動而敬不言而信。見而民莫不敬信。而爲可敬信之德義也。**作事可法。**作創作也。事事業也。作事謂開物㊄成務也。法則效也。聖人以嚴父配天之德。制作得其宜。天下萬世所則效也。故曰作事可法。**容止可觀。**容止威儀也。謂禮容所止也。觀謂人觀望而畏之也。以嚴父配天之德。正其容止。尊其瞻視。儼然人望而畏之。故曰容止可觀。**進退可度。**㊅朱氏曰。進退謂行藏也。進謂達而行道也。退謂窮而藏也。在堯舜則陟位爲進讓位

寫本作載。

[下文致、谷田本皆イタルト讀メリ。]

⊖五致字底本皆致シ若クハ致スト送假名ヲ施ス。イタルト讀マズ。又目的格ノ語ニハ皆ヲノ字ヲ附シテニノ字ヲ送ラズ。附解本及ビ孝經講釋聞書亦然リ。篠原氏本皆イタルト讀ミ目的格ニニノ字ヲ送ル。「假名書キ孝經」同ジ。

⊜清底本誤作淸。附解本書院寫本並同。今訂。

爲退。度亦法也。聖人以嚴父配天之德。進退不失其時。其道光明。天下后世所法則也。故曰進退可度。**以臨其民**。以以可道等六事也。臨謂臨撫也。覆育之意也。其指天下國家而言。民人也。下同。**是以其民畏而愛之**。畏謂畏敬其神武也。愛謂愛戴其聖德也。之指君子而言。畏而愛之。如七十子之服孔子。畏敬之如神明。親愛之如父母。**則而象之**。則效法也。象摹倣也。之指君子德而言。則而象之。謂民日遷善。而不知也。所謂芝蘭之化也。**故能成其德教**。終其事曰成。其指君子而言。德教即其所躬行心得之上文六事是也。**而行其政令**。行謂施行也。其指君子而言。令命也。政令即以上文六事措天下之事業者也。**詩云**。曹風鳲鳩篇。**淑人君子**。淑音叔。○淑善也。淑人君子重言者。深贊美之也。**其儀不忒**。忒惕德反。○其指君子而言。儀度也。忒差也。上文六事君子之常度也。故曰其儀也。不忒謂保合而不違也。詩云。淑人君子。其儀不忒。其儀不忒。正是四國。只引上二句。以含下二句之意者。以引起下截也。**孝子之事親也**。孝子即上文君子也。以其德所可爲天下之君。稱之謂君子。以其德所盡嚴父配天之孝。稱之謂孝子。此截專開示孝行之本實親切處。故以孝子之事親起之。**居則致其敬**。居謂無養病喪祭之事。而離父母而居也。此截專說事親。故雖事君交友之時。而無致樂致憂致哀致嚴之事。則爲居。不可只作燕居無事看。致極其至之謂也。其指孝子之心而言。下四其字同。敬即不敢毀傷之敬。全孝心法也。**養**去聲**則致其樂**。樂音洛。○養包事親之常而言。自昏定晨省。冬溫夏凊。進飲食。以至抑搔扶持奉水授巾。無非養父母之事也。樂謂愛

〔記曰孝子云々、禮記祭義之語。〕

㊀事下底本無業字。附解本同。改從書院寫本。
㊁上疾痛書院寫本作病痛。下作疾痛。
㊂位下高附解本同。書院寫本作尊。
㊃位看間書院寫本有而字。

敬之眞樂也。記曰。孝子之有深愛者。必有和氣。有和氣者。必有愉色。有愉色者。必有婉容。（婉順之若之）孝子如執玉。如奉盈。洞洞屬屬然如弗勝。如將失之。嚴威儼恪。非所以事親也。又曰。下氣怡聲。問衣燠寒。又曰。問所欲而進之。柔色以溫之。（内則篇）皆是愛敬之眞樂。見於面。盎於背。施於四體。發于事業者也。㊀

病則致其憂。謂以父母之病患。爲己之疾痛苦楚也。吾身有疾痛㊁苦楚。則必求其治療。慮其死亡。甚切。故其心只在欲其病之速愈。而無一毫之他念也。〔銳毛之・十絲爲一・十一爲厘・〕移此心。而以養父母之病。則終是致其憂者也。

喪平聲下同則致其哀。喪謂不幸親死服其喪。哀謂哀戚痛切也。祭則致其嚴。祭謂親沒而祭祀之。嚴謂誠敬精明也。

五者備矣。五者謂居則致其敬。養則致其樂。病則致其憂。喪則致其哀。祭則致其嚴也。備謂全具而不闕也。然後能事親。然後指上文五備而言。能字有力。如有所未備。則非能事親也。事親者。即五者備而能事親者也。居上不驕。上謂位高㊂年老才德長也。不可只作天子諸侯之位而看。雖匹夫有居上之時。交妻子是也。最宜活看。驕字專可就心上看。有一毫自滿之心。即驕也。爲下不亂。下謂位卑年少才德短也。不可只作庶人之下位㊃看。雖天子有爲下之時。事父母是也。最宜活看。亂不理也。專可就心上看。有一毫不安分之心。即亂也。在醜不爭。醜平聲。○醜類也。謂位

(一)戕當作戕。以下準之。
(二)決上不當在愼字上。
(三)大於底本佚大字。後補之於字下。今訂。
(四)刻上墨書院寫本誤作黑。
(五)朱氏附解本同。書院寫本作朱子。
(六)要上笑反。欲之。
(七)侮底本誤作悔。志村竹洲朱書傍記侮字。書院寫本亦作侮。今改從。
(八)此語在論語季氏篇。孔子語之。
(九)加下書院寫本初脫故字。後朱書追記之。

年才德相類無高下也。爭謂好勝也。專可就心上看。有一毫好勝之心。即鬪爭也。

居上而驕則亡。爲下而亂則刑。在醜而爭則兵。

亡謂取滅亡也。刑謂遭刑戮也。兵謂相及戕(一)殺也。亡刑兵皆所以害仁殺身也。在上。故曰取滅亡。爲下。故曰遭刑戮。在醜。故曰相及。只因位立言而已。曰亡曰刑曰兵。假設其害之至而戒之。實專可就心上看。雖無亡刑兵之事。已有驕亂爭之凶德而害其仁。則與亡刑兵何以異乎。

三者不除。

三者謂驕亂爭。不除謂愼獨不決(二)去也。

雖日用三牲之養。

三牲謂牛羊豕。日用三牲之養。謂日日具盛饌。以養親之口体也。

猶爲不孝也。

猶字有深戒之意。以開示以不敢毀傷而養志爲主也。

五刑之屬三千。而罪莫大(三)於不孝。

五刑謂墨・劓・剕・宮・大辟也。墨刻(四)額而涅之也。劓割鼻也。剕刖足也。宮淫刑也。男子割勢。婦人幽閉。幽閉閉於宮使不得出也。大辟死刑也。朱氏(五)曰。屬者條目也。三千謂墨罪之屬千條。劓罪之屬千條。剕罪之屬五百條。宮罪之屬三百條。殺罪之屬二百條。凡有三千條也。

要(平聲)君

要要索也。要(六)君謂失忠敬之心。而有索己所欲於君也。

者無上。

無者心不知有君。有而若無也。上即君也。無上謂無君事之之心。而反其君。弑其君也。

非聖人者

非非毀也。非聖人謂不尊信聖人也。所謂侮(七)聖人之言(八)是也。

無法。

法謂聖人中庸之法也。無法謂無守法之心。而敗棄聖法也。

非孝者

謂無愛敬之眞心。而不篤信孝道也。

無親。

謂無父事之之心。而遺其親。弑其親也。

此大亂之道也。

窮人欲。滅天理之至。无所以加(九)。故謂大亂也。道

謂所由行也。**教民親愛**、教謂教化也。下同。民人也。親愛天性之親愛也。**莫善於孝**。莫善者極其至而無外之意。下同。孝謂躬行全五備之孝也。**教民礼順**、民人也。禮者恭敬之理也。順者循理无違之謂也。**莫善於弟**。善事兄長爲弟。謂躬行弟順之德也。**移風易俗**。君上所化謂之風。民下所習謂之俗。呉子曰。移謂遷就其善。易謂變去其惡。移風易俗。猶言移易風俗。只分其文而已。**莫善於樂**。**安上治民。莫善於礼。**安謂不危。上謂君。㊀治謂不亂。民人也。禮樂註見子前。此禮樂須就情文本末全備上而講。**礼者敬而已矣。**敬即因嚴教敬之敬也。而已矣者竭盡而无㊁餘之辭也。禮雖有情文本末之異其實唯一敬而已矣。如无敬心之眞。則假饒雖三千三百禮儀威儀全備只是非禮之禮也。故曰。禮者敬而已矣。**故敬其父**、其指君而言。下其兄其君其同。上老老而民興孝。故上敬其父所以敬天下之爲人父者也。无所不通之敬也。下文所謂教以孝所以敬天下之爲人父者也是也。**則子悅。**子指天下之爲人子者而言。悅謂愛敬之眞心通融明快而興孝也。與㊂學而時習之不亦說乎之說、理義之悅我心之悅同。下弟悅臣悅倣此。**敬其兄、**兄經曰。雖天子必有先也。言有兄也是也。上長長而民興弟。故上敬其兄。所以敬天下之爲人兄者也。无所不通之敬也。下文所謂教以弟所以敬天下之爲人兄者也是也。**則弟悅。敬其君、**易曰。家人有嚴君焉。父母之謂也。大學曰。孝者所以事君也。經曰。雖天子必有尊也。言有父也。嚴父配天。所以敬其君也。上事家人之嚴君而盡臣道而敬之。則下興其忠敬。故敬其嚴君。所以敬天下之爲人君者也。下文所謂教以

㊀治上、君、書院寫本初作民。後朱書傍記君字。

㊁餘、書院寫本誤作除。末並誤作未。雖下脫有字。

㊂學上、興、書院寫本初誤作興。後朱書傍記興字。

㊀敬一人書院寫本誤作敎一人。

㊁者下附解本脫而字。

㊂子親書院寫本初作親子。後朱書傍記下上二字。

㊃（一）不顯猶言豈不顯。

㊄人下書院寫本無皆字。

［益田本所以敬天下云々之句附見下文。］

㊅袒・牲書院寫本各誤作禰・性。

臣、所以敬天下之爲人君者也是也。△則△臣△悅。敬一人。一人指父而言。經曰、資於事父以事母而愛同。資於事父以事君。而敬同。故母取其愛。而君取其敬。兼之者父也。故以孝事君則忠。以敬事長則順。夫如此則曰敬其父。曰敬其兄。曰敬其君。畢竟總統於敬父一人而已矣。故結之以敬㊀一人。而示一本之蘊焉。妙哉。切哉。

△而△千万人悅。千萬人指天下之爲人子弟臣者而言。天下子弟臣、何啻千萬人。言千萬人者。擧其大數也。悅卽子悅之悅也。

△所△敬者寡。謂敬一人。△而悅者衆。謂千萬人悅。

△此之謂要道。此之指上文而言。此句結前生后之語也。

△君子之教以孝也。教謂教化也。孝以全體言。下孝弟臣。此孝中之一端而已。

△非家至㊁而日見之也。家指天下之家而言。至謂君子行到其家也。之指民而言。見之謂君子㊂親見其民。而耳提面命也。非家至而日見之。言非君子親徧到天下之人家。而日日見其民而教之也。此一句以開示教化之眞。專在於天載無聲無臭上。而不求于聲色之末也。

△教以孝。教以身教言。必可在愼獨上講。不可作聲色之教而講。下教弟教臣之教同。孝卽五備之孝也。

△所以敬天下之爲人父者也。言君子之身教由窮无言不顯㊃之神。而天下之人㊄皆化之而各無不敬其父兄與君。則是上之人所敬其父兄君者。乃所以敬天下之爲人父爲人兄爲人君者也。所謂愛敬盡於事親。而德教加於百姓。刑於四海。無所不通。一貫之神道也。

△教以弟。弟本孝中之一端。故事父之敬。所以教弟也。經所謂以敬事長則順。此意也。以事言之。則祭義曰、食三老五更於大學。天子袒㊅而割牲。執醬而饋。執爵而酳。冕而揔干。所以教弟

㊀辭書院寫本初誤作亂。後朱書傍記辭字。

㊁四通底本初作四海。更傍記通字。附解本同。書院寫本初作通。後粉書抹殺之。更書海字於其上。今從底本傍記。

㊂○子曰仁人之……禮記哀公問之語。

也。是也。所以敬天下之爲人兄者也。教以臣。臣謂臣道。即忠敬也。忠本孝中之一端。故所以事家人嚴君之敬。所以教臣也。經曰。以孝事君則忠。此意也。以事言之。則疏云。朝覲所以教臣。祭帝稱臣。亦以身率下也是也。所以敬天下之爲人君者也。詩云。大雅泂酌篇。愷悌君子。愷樂也。謂天理之眞樂也。悌易也。謂易簡之易也。樂易者君子之至德。上文所說是也。故以愷悌二字贊君子也。民之父母。擧民以包天下之人也。父母之於子。一体分形。身體髮膚。血脉貫通。無所間隔者也。君子愷悌之德。於天下之人。心心融和一貫而無所間隔。有切於父子一體之貫通者。故曰民之父母。非至德其孰能順民。如此其大者乎。其語辭㊀也。孰何也。順順天下之順也。指上文子弟臣之悅而言。民人也。指天下之人而言。如此指上文教化而言。大謂其德化彌六合而無外也。此一句反言。以明至德要道之廣大高明。無所不通而爲結前生后之語也。昔者明王解見于前。事父孝。故事天明。事母孝。故事地察。明察謂與天地合其德也。明者光明四通㊁無所不照之意。察著也。昭著不容掩之意。明察本一貫。只因天地分屬有異耳。㊂子曰。仁人之事親也。如事天。事天如事親。由是觀之。則聖人之一言一動皆事父母之孝。而事天地之明察也。故以明至德。而與父母相通融而無所間隔言之。謂孝。以與天地合其德。與日月合其明。而與天地明察之妙用相通融而無所間隔言之。謂明察。而明察與孝。本一貫而無二致。故曰事父孝。故事天明。事母孝。故事地察。長幼順。故上下

㊀卑書院寫本誤作畢。志村竹涯朱書傍記卑字。
㊁祇底本誤作祗。改從書院寫本。
㊂尊先下附解本各無也字。非是。
㊃此尊篠原氏本作比之尊。
〔致敬、益田本ハ敬ニイタルト讀マシム。〕
㊄經文脩身書院寫本同。脩理脩身之脩並作修。以下同。
㊅與字當在首章上。

治。長幼謂天子所長所幼也。長其長而幼其幼。能和睦无所乖戾。此之謂長幼順。上下泛指天下尊卑長幼而言。治謂安其分而不亂也。天地明察。神明彰矣。彰音章。○自一言一動以至于郊社之祭。誠敬與天地通。明察與日月合。而无一毫昏蔽。此之謂天地明察。神明謂天神地祇也。彰昭著分明可見之意也。言神明之妙用。因聖人德業而昭著分明可見也。故雖天子必有尊也。言有父也。必有先也。言有兄也。必字有力。尊敬也。先亦恭敬之意。此尊稍緩。此二句明所以長幼順也。注疏云。父謂諸父。兄謂諸兄。虞氏曰。雖天子必有當尊而敬之者。名曰父。必有當先而敬之者。名曰兄。二說可相兼看。宗廟致敬。謂祭致其嚴也。擧追遠之誠敬。以示大孝終身之精蘊也。不忘親也。親親愛。所謂親生之膝下之親也。不忘謂常存而不失也。脩身謹行。去聲。○脩理也。脩身謂一身之作用循天理而不亂也。所謂非禮勿視。非禮勿聽。非禮勿言。非禮勿動是也。謹愼也。重也。行謂接物應事之行。謹行謂愼重於接應之行。而不輕發。必中其道也。脩身謹行原一事而分言而已。首章與所謂立身行道同。恐辱先也。恐懼也。所謂戰戰兢兢。如臨深淵。如履薄氷是也。先謂父母先祖也。身体髮膚受之先。故人不脩身謹行。而辱其身。所以辱其父母先祖之身也。恐辱先以示不敢毀傷之敬也。宗廟致敬。上言承祭祀之心術。此又言其效。故擧此一句。鬼神著矣。鬼神父母先祖之鬼神也。著明也。謂鬼神來格享祭祀誠敬之孝。而合莫昭著。而不可掩也。所謂微之顯如在其上。如在其左右是也。孝弟之至。弟亦孝中之一件而已。上文孝弟相兼論。故又孝弟兼擧。

㈠至者下書院寫本作孝弟之至謂孝弟之心致中和而無所倚●所謂嚴父配天是也二十四字。絲欄外加書曰。別本作極其至而無加之意也。孝弟之至謂嚴父配天也。附解本與底本全合。
㈡無下書院寫本無所字。
㈢○擬・度之。像之。
㈣時所間寬文板本有無字。非是。
㈤機書院寫本作机。
㈥○理音吏。治玉之。

專可重孝上有。至㈠者極其至而無加之意也。孝弟之至。所謂嚴父配天也。**通於神明。**通謂合同而無㈡所間隔也。神明擧天地神明而包宗廟鬼神於其中矣。通于神明。即上文神明彰矣。鬼神著矣是也。**光於四海。**光者明之用也。謂照臨所及也。四海極其大而言。六合有形之處。盡在其中矣。**無所不通。**此一句說孝之全體。言不啻光於四海有形之中。雖天地有形之外大虛廖廓之至大。無所不通也。**詩云。**大雅文王有聲篇。**自西自東。自南自北。**此二句擧四方。以包六合之大。以形容無所不至之義也。**無思不服。**思謂心之感通擬㈢議也。嚴父配天之孝思是也。服從也。謂無所違逆也。無思不服。言嚴父配天之孝思。活潑流通。無處無時㈣所違逆。故其孝思之所及。亦尊信而無所違逆也。**君子之**此段承上文示上下通用之孝行。故以君子更端。**事親孝故忠可移於君。**移易也。謂變通也。下同。故承上起下辭。自此至可移于官。以事類明變通之機㈤。故下一故字以立內外遠近之辨也。事親孝故忠可移于君。言君子至德。無所不通。是故近而在家。則盡五備之孝。遠而在國。則將順其美。匡救其惡之忠。可變通于事君也。**事兄弟故順可移於長。**順亦悌也。悌順本孝中之一德也。事兄弟。故順可移於長。言有至德者。近而在家。則事兄能盡弟恭。遠而在國。則至德之順。可變通于事長也。**居家理故治可移於官。**理㈥謂物得其理而不亂也。治亦理也。官謂官政也。居家理謂齊家人而各得其理而不紊也。治謂官政得其理而不亂也。曰理曰治皆孝中之一德也。居家理。故治可移于官。言有至德者。近而齊家。則家人皆理。遠而服官政。則治可變

(一)名上底本佚而字。改從眞蹟折本及附解本。
(二)〇六官。一曰天官。冢宰掌邦治。惣御衆官。二曰地官。司徒掌邦教。安擾萬民。三曰春官。宗伯掌邦禮。禮事神。四曰夏官。司馬掌邦政。以平諸侯正天下。五曰秋官。司寇掌邦刑。驅恥惡納人於善道。六曰冬官。司空掌邦事。富立家使民無空者之。
(三)〇徭。余招反。役之。使之。
(四)宮書院寫本作官。
(五)〇宮伯掌王宮中諸吏之適子及其庶之在宿衞者。
(六)若尚書院寫本有若夫章三字。標目自爲一行。
若夫附解本ハ夫ノ……ノ若キハト讀ミ註ニハナホ若ハ順也トナセリ。今底本ノ訓點ノマヽトス。
若順也參看持敬圖說。

通于官也。**是以**指上文孝德無所不通也。**行成於內。**行謂率至德而行也。所謂天之經也。地之義也。人之行也是也。成畢也。善也。畢其事而無欠闕之意也。虞氏曰。內敬心之內也。**而名**(一)**立於後世矣。**後世謂時之無窮盡也。此一句以示無時不通也。**閨門之內。**閨音圭。〇閨門小門也。閨門之內猶言小家之中也。**具禮已乎。**具者該貯而無所不足之意也。禮者理也。謂治天下之禮也。已乎語詞也。**嚴父嚴兄。**嚴父孝也。孝者所以事君也。嚴兄弟也。弟者所以事長也。**妻子臣妾。猶百姓徒役也。**役音易。〇百姓謂百官也。按周禮六(二)官之屬。各有徒。註曰。民給(三)徭役者。疏云。徒食五人祿其官亞士。故號庶人在官者也。役使也。徒役謂庶人之役使於(四)宮者也。周禮(五)宮伯作其徒役之事之類是也。家之有妻子。猶國之有百官。家之有臣妾。猶國之有徒役也。徒役擧屬官最下者。以包其餘。帥妻之義。養子之慈。御臣妾之寬。所以治百姓徒役也。

曾子曰(六)若順也。**夫**有所指之辭。此指至德而言。**慈愛恭敬。**疏云。愛出于內。慈爲愛体。敬生于心。恭爲敬貌。江氏曰。此語甚粹也。**安親**安親謂安樂親心也。五備之孝行皆所以安親也。經所謂生則親安之。祭則鬼享之是也。**揚名。**名明王聖人君子孝子的顯名也。名者實之賓。名之於實。猶影響之於音形。故務實立本之外。別非有揚名之工夫也。**參**曾子名。**聞命矣。**聞謂嘿識心通。如朝聞道之聞。命敎也。**敢問。**

㊀於下書院寫本佚言字。
㊁故下有當作在。定稿本不誤。
㊂礼書院寫本初作亂。後朱書傍記礼字。
㊃諸書院寫本作言字。
㊄陰書院寫本作陰。附解本同。

疑思問、學之則也、所以敢問也。**從父之令**、令去聲。下同。〇令命也。舉受命之事、以例其餘言行。從父之令、謂一從順父令。而雖不義不諫止也。**可謂孝乎。**乎疑辭也。曾子已知陷父于不義之不孝、而又諫爭則却有傷愛敬之和、而又以順從本孝子之素志。故不曰非不孝乎、而曰可謂孝乎、而疑問之也。

子曰、是何言與。平聲。歟同。〇與疑辭。下同。何言㊀猶言以何心而爲如此言與、蓋言者心之聲也、故㊁有于心而發于言。因言而知其心。夫子嘗知曾子之心。是以將謂不爲如此言、而今曾子有此問、故謂以何心而爲此言與、而疑難戒之。重言者、所以深警戒之也。**是何言與。言之不通也。**言指曾子所問之言。不通謂固滯而不通達也。**昔者**疏云。夫子述孝經之時、當周㊂禮衰之代。無此諫爭之臣。故曰昔者也。**天子**不言先王而言天子者、㊃諸稱先王皆指聖王。此言無道、所以不稱先王也。**有爭臣七人。**爭去聲。亦作諍。下同。〇爭謂諫止其非、若爭然。爭臣謂有賢德而可匡救其過惡臣。非必極諫犯爭而后爲爭臣。又非有舊說、所謂司諫爭一件官也。七人非謂人數之定限。但姑約言之爾。所謂舜有臣五人、而天下治之類也。舜臣豈止五人。姑約言之也。舉七數者。七陽數也。陽剛明而能變化。諫爭以剛明變化爲主。故舉陽數也。九亦陽數而不舉者。九數之極、而陽變成陰之數也。才難。故不舉數極。且諫爭主剛明。故不取變㊄陰之數也。下五人三人亦陽數也。降殺以兩者。禮制之常也。不可必泥其數也。**雖無道。**此無道須輕看。非謂如桀紂暴惡。只謂心無道義之守也。所謂上無道揆是也。**不失其天下。諸侯有爭臣五人、雖無道不失其國。大夫有爭**

(一)不失六下國家者、書院寫本唯有標目、而無注文。後宋書傍註不失天下國家六字。
(二)失、附解本同。書院寫本作離。脩作修。
(三)兩弗、書院寫本作不。眞讀本同。
(四)矣、書院寫本作哉。

臣三人雖無道不失其家。(一)不失天下國家者。舉諫諍之功効以示不可以不爭也。士有爭友。則爭友謂益友也。士不能有爭臣。必藉益友之忠告而改過惡。遷善。故曰有爭友。身不離於令名。令善也。不(二)失於令名。舉効以見其進脩之成功。

父有爭子則爭子謂盛德子也。此一句包天子諸侯大夫士庶而言。此段主意在於此一句上。身不陷於不義。身指親身言。不義謂不合人義也。人之行不義。猶獸納于陷阱。故曰陷于不義。身不陷於不義。謂正心脩身。故當不義。謂君父行不義時也。則子不可以(三)弗爭於父。臣不可以(三)弗爭於君。經曰。夫孝始于事親。中於事君。且天子諸侯大夫士庶之子均爲子也。均愛父也。父若有過。子必幾諫。不可委之於爭臣爭友。故先父子而后君臣。其旨深矣。(四)此二句結上文。說不可不爭之理。以起下文。故當不義。

則爭之。故字承上二句。以起下句。之指不義。言此一句說孝子之所以受用也。從父之令。焉於虔反。得爲孝乎。焉得爲孝乎。反言以甚戒其爲不孝也。此二句總結上文。以與發端何言與言之不通相照應。

君子之事上也。此君子亦指聖賢而言。上謂君也。因上文論爭臣。而將說事君之忠。故用此一句承上起下。進思盡忠。進謂自私家而適公所進見于君也。思謂心在茲而精一也。下同。盡謂至其極而無遺也。中心爲忠。移嚴父配天之心。以事君之德是也。此一句此段綱領。下三句。此一句之條目也。退思補過。退謂不進見于君之時。對進而曰退

㊀○詩大雅烝民篇。

㊁心行間義書院寫本初作善。後朱書改作義字。無也字。

㊂君下書院寫本無而字。

㊃言下書院寫本初乙心字。後朱書擠入之。

㊄朱下氏書院寫本初作子。後粉書抹殺之。更墨書氏字於其上。

㊅○三曲・一擧聲而三折之。

㊆无下無書院寫本初作不。後朱書改作無字。

㊇脩書院寫本同。

㊈辭書院寫本作詞。類下有也字。

而已。補、裨也。塡也。裨塡其欠闕之意也。無心而達道、爲過補過、詩㊀所謂袞職有闕、維仲山甫補之、是也。

將順其美。將子兩反。奬省作將。○將勸也。助也。成也。順從也。和也。吳子曰、將謂助之於前、順謂導之於後。其指君㊂而言。美謂善心㊁義行也。

匡救其惡。匡音筐。○匡正也。救止也。吳子曰、匡謂正之於微、救謂止之於顯。其指君而言。惡謂惡心暴行也。

故上下能相親也。故承上文忠誠言。上謂君也。下謂臣也。能字有力。假令雖相親、不由道義、則不可謂能也。相親謂下以忠事君、上以禮接臣、能相親交泰而同心同德也。

詩云。小雅隰桑篇。

心乎愛矣。心謂心所存主也。愛至德之愛敬也。心乎愛矣、㊃言心融于至德之愛、而無一毫之間雜也。

遐不謂矣。遐音霞。○朱㊄氏曰、遐遠也。遐不謂、猶言不謂遐也。遐不謂矣、謂遠邇上下無所不通也。

中心藏之。中心謂事君之忠心也。藏守於密之意也。之指上文遐不謂之愛而言。下忘之之之同。

何日忘之。言無可忘之日也。

孝子之喪親也。喪去聲。此孝子亦指聖賢而言。下說居喪之孝。故以孝子更端也。持服曰喪、親父母也。父母死而居其喪、謂喪親。因上文何日忘之、而將說事死之道。故擧此一句、以承上起下。

哭不偯。偯音倚。○哭哀聲也。吳子曰、偯哭聲從容而有餘也。禮記間傳云、大功之喪、三㊅曲而偯。此父母之喪、哀痛之極。故其哭也、氣竭而息。无㊆復餘聲。

禮無容。禮謂居喪所行之禮法也。無容謂擧措進退。无脩㊇飾爲容儀也。

言不文。言言語也。不文、謂有事不得已、則直致其言、不治擇文飾成文辭㊈也。

服美不安。美謂美飾之衣服錦繡之類。不安謂哀戚不安。而不忍服美衣也。

聞樂不樂。樂音洛。○言平時聞樂、

㊀太甚書院寫本作大甚。非是。下文同。
㊁旨必間則底本係傍記。附片字イ文字。以示異本有之。今從書院寫本舊無。則字後朱書辨入之。
㊂食甘附解本同。書院寫本作食旨。
㊃何下書院寫本有也字。按疏文無。
㊄腎書院寫本誤作背。
㊅坏書院寫本作壞。
㊆衰書院寫本作哀。非是。
㊇此下書院寫本有一字。
㊈慕底本誤作纂。竹涯疊書傍記慕字。書院寫本同。竹涯復朱書傍記慕字。今改從。

則必樂。今因哀戚太㊀甚。聞樂却哀痛益深。不樂而耳不忍聞樂也。

食旨不甘。

旨味之美也。言平時食旨㊁則必甘美。今因哀戚太甚。食㊂甘却不甘美。而口不忍甘旨味也。

此哀戚之情也。

此指上文不偯等六句。言哀悲哀也。戚憂也。痛也。情眞心之發見。所謂人情也。此一句結上文。以起下文聖人之制也。

三日而食。

三日謂從親始死經三日也。食謂食粥也。吳子曰。親死水漿不入口。三日乃食粥。疏云。記聞傳稱斬衰三日不食。此云三日而食者何㊃。劉炫言三日之后乃食。皆謂滿三日則食也。此一句擧聖人所制之禮法。記問喪所謂親始死。惻怛之心痛疾之意。傷腎㊄乾肝。焦肺。水漿不入口。三日不擧火。故隣里爲之糜粥以飲食之是也。

教民無以死傷生。毀不滅性。

滅音蔑。○敎謂因本之敎民人也。死親之死也。生子之生也。傷害也。戕也。謂哀傷太甚而至死亡也。毀謂羸瘦而容色毀坏㊅也。滅火熄也。「滅火之　性天命之性也。滅性謂天性之明昏昧猶火熄也。蓋子之身與性。皆親之遺体也。故或哭死傷害遺体之生。或毀瘠骨露見。而情勝而滅天命之性。則却以爲不孝。曲禮所謂居喪之禮。毀瘠不形。視听不衰㊆。不勝喪。乃比于不孝是也。此一句以明聖人立法之蘊。

此聖人之政也。

此指上文禮法禮意而言。政因本之政也。與上文敎字相照應㊇。此句一以示喪禮者聖人中和之妙而他人之非所及也。一以爲承上起下之語。而明全段皆是聖法也。

喪不過三年。

不過謂哀痛未盡而俯從也。此一句亦擧聖人所制之禮法。記所謂三年之喪二十五月而畢。哀痛未盡。思慕㊈未忘。然而服以是斷之。是也。

㊀所必書院寫本作所以。而朱書傍記必字。蓋後人筆。

㊁自單被盡之指親言約二枚。書院寫本佚之。今依廿雨亭叢書本校合。單廿雨亭叢書誤作草。

㊂廿雨亭叢書欄外曰。棺上恐脫棺字。底本舊有。

㊃竊思廿雨亭叢書作竊覓。

㊄懣廿雨亭叢書誤作懣。

㊅城廿雨亭叢書作域。〔營域、益田本作塋域。〕

示民有終也。示開示也。民人也。有者天然自有之意也。終謂萬物生死始終之終。言有生必有死。有始必有終。天命之本然。有形之㊀所必有也。故雖孝子終身之憂無窮。而喪不可無終竟之期。是以聖人立中制。以開示民有天命必然之終期。而不可任私情也。卽不滅性之意。所以明喪禮之本也。爲之棺椁衣衾而擧之　棺音官。椁音郭。○爲造也。棺說文關也。所以掩尸也。椁外棺也。衣謂襲與大小斂之衣也。衾謂㊁單被覆尸薦尸所用也。擧謂擧尸內於棺也。之指親屍而言。吳子曰。尸之外衣。衣之外衾。以襲以斂。衾之外㊂棺。棺之外椁。以斂以殯。陳其簠簋而哀戚之　簠音甫。簋音詭。○陳列也。其指朝夕朔望之奠而言。簠簋祭器也。之指親之不在而言。吳子曰。此言朝夕朔望之奠。簠盛稻粱器。外方內圓。簋盛黍稷器。外圓內方。按士喪禮朝夕奠脯醢而已。盛以籩豆。朔月殷奠始有黍稷。盛以瓦敦。卿大夫祭禮少牢饋食亦止用敦盛黍稷。以公食大夫禮推之。㊃竊思天子諸侯之殷奠乃備黍稷稻粱。而器用簠簋。此經所云。蓋擧上而言之也。擗踊哭泣。哀以送之　擗音闢。踊音勇。○擗以手擊胸也。踊以足蹵地也。註曰。男踊女擗。疏云。按問喪云。在牀曰尸。在棺曰柩。動尸擧柩。哭踊無數。惻怛之心。痛疾之意。悲哀志㊄懣氣盛。故袒而踊之。婦人不宜袒。故發胸擊心爵踊。殷殷田田。如壞墻然。則是女質不宜極踊。故以擗言之。據此女既有踊。則男亦有擗。是互文也。哭者口有聲。泣者目有淚也。擗踊哭泣者。惻怛痛疾之情。發見于形体者也。哀謂哀其形不返也。之指柩而言。送之謂送形而往葬地也。卜其宅兆。而安措之。措音醋。○卜灼龜以視吉凶也。其指所葬而言。宅墓穴也。兆營㊅城也。措置也。安措謂無地風水泉樹根虫蟻等患。及爲人所發也。之指柩而言。吳子

㊀決下卄雨亭叢書無之字。

〔謀及乃心〕云々、尙書洪範語。

㊁作造卄雨亭叢書作造、作及作乃、祭下於作祀。

㊂兩柢書院寫本並誤作抵。

曰。將置柩于其處。必乘生氣無地風水泉沙礫樹根螻蟻之屬。及他日不爲城郭溝地道路。然後安。卜者決之於神也。不卜則擇之以人。葬書備言其術之理。可稽焉。中州土厚水深。不擇猶可。偏方土薄水淺。凡地不皆可葬。苟非其地。尸柩之朽腐敗壞至速。與擧而委之于壑同。孝子之心忍乎。先擇後卜。尤爲謹重。所謂謀及乃心。謀及士民。而後謀及卜筮也。按士喪禮。筮宅卜日。大夫以上則葬日與宅兆皆用龜卜。或亦用筮。此云卜蓋通言之。

爲之宗廟。以鬼享之。

享音響。○爲謂作造及脩飾也。按王制・祭法。官師已上皆立廟。庶士庶人無廟。祭於寢。此擧宗廟以包祭於寢者也。以鬼猶言以事鬼神之禮也。享者祭祀人鬼之名。之指親精神而言。吳子曰。初喪至葬。有奠無祭。蓋猶以人禮事之。既葬迎精而反。乃以虞祭易奠。卒哭而附于祖。喪畢而遷于廟。始純以鬼禮事之。

春秋祭祀。以時思之。

春秋謂四時。春陽之始。夏陽之終。秋陰之始。冬陰之終。擧其始則終在其中。故只擧春秋耳。時謂歲序流易之時也。思謂悽愴怵惕之心思。之指親言。

生事愛敬。

生事謂事生親及親生性鬼神也。所謂居則致其敬。養則致其樂。病則致其憂。祭則致其嚴。及至德敎加于百姓。刑于四海。都是愛敬之孝德也。故曰生事愛敬。

死事哀戚。

死事謂居親喪也。喪禮之儀節。自死至除喪。都是哀戚之情也。故曰死事哀戚。

生民之本盡矣。

△易曰。天地之大德曰生。民人也。經曰。天地之性。人爲貴。故曰生民。生民猶言生生活潑人也。本根柢㊂也。人之有孝德。猶木之有根柢㊂。故以孝爲生民之本。盡至其極而無遺之謂。與盡性之盡同。

㊀生下生書院寫本作性。後朱書傍記生字也上少一生字。〔益田本亦少一生字。〕

㊁子書院寫本作於。全篇多然。今不一々舉示。

死生之義備矣。死謂形骸死。生謂生生至誠無息也。義者理也。死生猶言形死神生生也。蓋雖形死而鬼神生生之理無息。故曰死生之義。備具也。足也。詳悉明細。而無遺之意也。

孝子之事親終矣。孝子卽先王・明王・聖人・君子是也。始以先王起之。終以孝子結之。其旨至矣。妙矣。事親卽孝行也。終盡也。言先王聖人孝子之孝行德業。盡于此而無遺也。自生事愛敬至于此五句。孝經一部之結語也。必勿作喪親一章結語講也。

孝經啓蒙(定稿本) 解題並凡例

〔解題〕 對校に供したる諸本及び其の性質を略述せんに、

(一)舊本。初に漢孔安國の孝經訓傳序文を載せ、次に明人江元祚の誦經威儀を載す。凡て四卷あり。卷末に出版の年紀を記して寛文八年戊申正月吉日と見えたり。此の書同一板行にして、一は中野氏道伴板行と記されたるものあり。(滋賀縣高島郡水尾村万木良知氏所藏本による。) 一は烏丸通下立賣下町野田庄右衞門板行と記されたるあり。(書院所藏本による。)

篠原氏本は舊本を底稿としたりとは斷ずべからざれども、孝經の本文を相當連續して書き、次に啓蒙をおける點等、舊本と體裁の似たる部分尠からず。

(二)新本。黄表紙壹冊の大本にして、序文も無く跋文も無く、又板元の記入もなし。但し書院所藏の本には卷末に、

本書は大正十二年十一月藤樹書院が京都寺町細川開益堂にて購入したり。書入の筆蹟は松下伯季の筆なることを知る。後大正十四年六月また同店に於て一本を見たり。同書の末尾に左の如く記せり。

寛政五癸丑年十一月於南都調之

相宗沙門慶雲僧正遺塵

觀壽院民部卿朝定

大正十四年十一月

小川喜代藏識

とあり。但し此は此の書の來歷を示すのみ。未だ板行の時處を知るに足らず。本書は孝經本文を

ば殆ど何毎に截斷して啓蒙を附したるものにして、此の點むしろ初稿本の體裁に近けれども、内容は舊本に比して却つて原作の眞に近かるべしと想像せらる。

今此等二書に對して舊本新本の名を冠したるは、篠原氏の註記に見ゆる名稱をそのまゝ襲用したるに過ぎず。

(三)京都帝國大學圖書館本。一冊の寫本にして、卷末に萬治三年晩秋洛下後生眞祐謹書なる奥書あり。今貴重書として館外帶出を許されず。萬治三年は慶安元年先生卒去の年を距る僅に十年のみなれば、最も信ずるに足るものなるべし。眞祐の如何なる人なるかを審にするを得ずと雖も、或は僧籍に在りし人なるべきか。新本の相宗沙門慶雲僧正などの記入と對比して、此の書が佛門の士にも喜ばれしものなるべし。

本書は後生眞祐謹書と見ゆれども、誤字衍文又は脱文頗る多くして通讀に困難を覺ゆるものなり。卽ち謹書とは藤樹先生の人格に敬意を拂ひて筆寫したりとの心持を表はせるに止り、書寫の方法に至りては、未だ盡さゞるものあり。然れども吾等が編纂上本書によりて啓發せられたるもの頗る多し。卽ち、

1　岡田氏本が初稿本を傳へ、篠原氏本が定稿本を傳ふることは、既に初稿本解題の部に陳べたることなるが、この事は全く本書を見るに及んで始めて決定するを得たるものなり。

2　舊本にのみ存する部分、又は新本にのみ存する部分にして此の書に無き部分あり。又舊本にのみ無き部分、又は新本にのみ無き部分にして、此の書に載するものあり。此の點より推せば

此の本は、時に明かに脱文と認めらるゝ部分もあれども、他本になき部分を存するを以て尚獨立の價値を有するものなるを知る。而して篠原氏本は孝經本文を相當取纏めて連記せるに反し、此の書は尙割り書きとなせる點あるなど、二本は體裁を異にすれども、啓蒙の部分の文字の出入に至つては其の相違極めて少し。編者は初め篠原氏本が新舊兩本の長所を取り蒐めて、一の啓蒙を新に構成したるかを疑ひたるに事實は然らず。本書によつて篠原氏の底本としたるものは、別に據る所ありしものの如く、且つそは比較的完本に近きものなりしを確むるを得たり。

(四)假名書き孝經。本全集卷之十六該書解題參照。

【凡例】 本書は孝經啓蒙定稿本にして、底本を篠原氏本に採りたり。

一、底本としたる篠原氏本の體裁及び本書編纂上の取捨左の如し。

(一)全部句讀點なし。今之を施す。

(二)反點・送假名は全部に亙つてこれあり。初稿本にありては古き訓讀法の一例を示さん爲、孝經本文のみは、底本のまゝに從ひたるも、本卷にありては然らず。其の足らざるを補ふと共に誤れるを訂す。啓蒙の部分も亦然り。特に底本にありては|の記號を文字の左傍に置くと右傍に置くとによつて訓讀と音讀とを區別する古き附點法を用ひたるも、今は全部今日普通の附點法に改め以て讀解に便す。

(三)書中到る處脚注あり。悉く之に從ふ。又篠原氏が書院本を見るに及んで、鼇頭に對校の結果を記入したるものあり。此は同氏が指示したるところに從つて悉く脚注の形式に改めたり。

一、舊本新本との對校の結果は此を傍記す。△印は其の書に此等の文字無きを示す。例へば△(舊)は舊本に之れ無きを示すが如し。又諸處(新)(舊)の符號を傍記して、該書に見ゆる處と一致するを示す。

一、頭注は前記大學圖書館本との對校の結果を載す。此の圖書館本を眞祐本と呼ぶは、唯筆寫者の名を冠したるのみ。

一、京都帝國大學附屬圖書館所藏の書籍、特に其の貴重書の閲覽に際して、司書官文學士山鹿誠之助氏は多繁の身を以て常に懇切に指導せられたり。茲に記して謝意を表す。

昭和三年戊寅五月十日　　加藤盛一謹識

孝者前新本眞祐本並標目有孝經二字。自爲一行。

藤樹先生全集　卷之七

經解成書　三

孝經啓蒙　（定稿本）

孝經啓蒙。年譜寬永辛巳秋、著孝經啓蒙。寢疾中輟。明年壬午遂脫藁。後謂其說不合經旨。有意刪正。而卒不果。然則此書刊行。固非先生意也。覽者審諸。〇行狀先生謂淵氏曰。啓蒙一書精義未盡。但敎初學由此略見大意可也。〇又按全書目錄啓蒙藁本有孝經翼傳。而未聞世有藏之者。據年譜二本及行狀。並不言有之。則是必有說焉。姑存疑以俟知者。

孝者天性之殊稱也。就德愛之至公無妄處之謂仁。就德愛之親切無欲處之謂孝。其實一而已。經者書也。常也。聖人之書。萬世不易之常道。故命之曰經。不名孝書。而名孝經者。陳氏曰。氏一作子。（新）（舊）經云。夫孝天之經也。地之義也。民之行也。擧大者言。故曰孝經。就本書、

用眞蹟本舊作以●如此者。後貼紙改用字。今乙

中自有孝經兩字。而爲書名也。按書院本及藁本題注與此大不同作經曰。夫孝天之經也。地之義也。民之行也。天地之經。而民是則之。此乃孝經二字之本義也。此經專發明其體統。故命之曰孝經。孝與經非有二。孝其體統之總號。經所以明其神化不測也。字義詳解見於翼傳之八十字。姑錄以備參攷。

仲尼閒居曾子侍坐。子曰。參。先王有至德要道。以順天下。民用和睦。上下無怨。女知之乎。

仲尼孔子字也。周人冠。則字而尊其名。而諱名。而（新）不諱字。子孫弟子之於父兄先生。皆稱其字也。此處一經之發端。故稱仲尼。而見其實。而后次之以子曰。（新）如稱孔子稱夫子稱子。此九字（脫）一作如孔子稱夫子。則皆通稱。而其人難知故也。子思中庸亦用此意。閒居謂閒暇燕居之時。書院藁本無燕字。非獨處。曾子名參。字子輿。按孔子弟子。接道統人也。

據日辨義新本・眞祐本並不在大全二字上。在爲師大全兩字之間。自爲一行。

本作接孔門之道統人也。無按孔子弟子五字。子者男子之通稱也。稱曾子者尊之也。侍坐卑者在尊者之側曰侍。有坐。有立。以侍於間居。故侍坐也。子曰。正義曰。古者謂師爲子。上文既記仲尼間居。曾子侍坐。故指仲尼爲師。辨義。大全曰。孝經是孔子與曾子問答之后。自家作。然稱仲尼。稱曾子。稱子曰者何也。曰。託言也。蓋託侍側弟子聞得孔曾之問答而記之。故其文法如此。參諸弟子在側。獨呼曾子者。以其素篤於孝而又明全孝而傳道也。正與告一貫之意同。先泛指古先盛世。言。説文曰。一貫三爲王。董子曰。三者天地人也。而參通之者王也。書院本及藁本作董仲舒曰。古之造文者三畫而連其中。謂之王。三者云々。比諸本加明暢焉。愚按有三才一貫之道德者。卽聖人也。古者在王位者。必有聖德。有聖德者。必登王位。王則聖也。聖則王也。二則字新本藁本共作卽。今從舊本。故不謂先聖而謂先王。書院本及藁本作故不謂先聖而謂

王而聖在其中矣。

蓋以德位不兼備、則功化之全難明也。有生知之固有也至者極也。善也。大也。達也。極善大而無所不通達之意也。德者天性之總號。善美・正大・光明・純懿之稱也。樂記曰。德者得也。言人之所得乎天。而無入而不自得也。德本自極善大。而無所不通達者也。而孝德之本也。書院本作而孝其全體本實也。故曰至德。要道。正義曰。以一管衆、爲要。易簡一貫之意也。率性之謂道。卽德之感通也。道本易簡一貫者也。而孝道之所由生也。書院本作而孝其全體本實。故曰要道。蓋德體也。道用也。體用一源。而無彼此故至與要互相發明。△(衍)至故要。要故至也。猶言至要之道德。以用也。自然之發見也。順從也。和也。從和而無所乖戾之意。至德要道無處而所乖戾。無時而所違逆。所謂順也。先王以此風化天下之人心。而天下之人各與其順。而五倫之交

和睦。而無所乖戾。此之謂順天下。不曰治。而曰順者。所以明德化之自然。因其所固有。而不假强爲也。順從也至此。書院本作順從也。和也。從性而無所乖戾。無不通利之義。所謂仁者順之體也。至德要道之順。天下人心之所固有也。故先王用至德要道之順。以風化天下。而天下之人各與至德要道之順。而無一夫之不獲。此之謂順天下。經所謂以順則記所謂大順是也。不曰治而曰順者。所以明德化之自然而無思不服也之百十六字。民人也。凡指天下之人言。用謂心術躬行受用至德。和順也。睦親也。言心氣相和順。而五倫皆相親睦也。書院本作和順也。相應也。睦親也。敬和也。言五倫之交順理相應。敬以相親和而無所乖戾也。上下可包貴賤天人看。無怨謂一毫無不慊於心也。中庸所謂在上位不陵下。在下位不援上。正己而不求於人。則無怨。上不怨天。下不尤人。是也。此下書院本有天包人。故不言尤而尤在怨中矣之十三字。女指曾子。之指至德要道。乎疑辭。

曾子避席曰。參不敏。何足以知之。

㊀生下眞祐本脫二也字一。

㊁曾子曰云々　眞祐本與二底本一全合。

㊂孟子曰云々眞祐本與二舊本一同無二仁之實云々二句一。

㊃敎敎活也　眞祐本作二生生活也一。似レ可レ從。

席坐席也。禮師有レ問避レ席，起對。曾子侍レ師而坐。故敬二孔子之問一，避レ席，而起。敏速也。不敏猶レ言二遲鈍一也。此辭讓而對也。之指二至德要道一。

子曰。夫孝德之本也。教之所二由生一也。㊀

夫發語辭。亦指示語。本木根也。（舊）舊作二本根本一。謂下德之所二以爲一德之實上也。仁義禮智根二於心一。皆德也。而仁包二義禮智一，而孝又爲二仁之實一。㊁曾子曰。仁者仁レ此者也。義者宜レ此者也。禮者履レ此者也。信者信レ此者也。智者知レ此者也。（新）義者宜レ此者也（新）一在二禮者履レ此者也之下一。據二戴記一爲レ是。智者知レ此者也。按大小戴記竝作二強者強レ此者也一。㊂孟子曰。仁之實事レ親是也。義之實從レ兄是也。知之實知二斯二者一弗レ去是也。皆此意也。故曰。孝德之本也。此句明二至德二字之義一。（新）本木根也至レ此。書院本作二本木之根。幹枝所二由以生一也。仁義禮知根二於心一。而孝又爲二五性之本實一。故曰。德之本。以明二至德二字之義一之四十字一。

㊃敎敎活也。謂二活潑流行

汝眞跡本作女。

無息也。書院本無此十二字。脩道之謂教。聖人一言一動以至禮樂刑政皆無非教也。蓋天地之大德曰生。人受此以爲孝德。故天地之化育。聖人之教化。無不由孝生。生所謂愛敬盡於事親。而德教加於百姓。刑於四海。曾子曰。夫孝置之而塞乎天地。溥之而横乎四海。溥本（新疏）皆作博。今從戴記正之。施諸後世而無朝夕。皆此意也。故曰。教之所由生也。此一句明要道二字之義。不曰道。而曰教者。所以明成己成物合外内之道也。蓋天地云々至此。書院本作地然其要在于五典。而孝又爲五典之樞要。人心本自由有固有之要道。而教化之神速。生々活潑。至於愛敬盡於事親。而德教加於百姓。刑於四海。故曰。教之所由生也。生字謂天生生活潑潑地。以明要道二字之義也之八十二字。

復坐。吾語汝。女（舊）（新）身體髮膚受之父母。不敢毀傷。孝之始也。立身行道。揚名於後世。以顯父母。孝之終也。夫孝始於事親。中於

事君。終於立身。

復還也。孝之義甚大。而其爲說甚長。非立談可盡。故使復位而坐。詳以告之。吾孔子自稱。女指曾子。復還也至此。書院本作復還也。夫子之言未竟。又將更端而語之。以曾子避席起立。故命之還坐而聽也之三十一字。

身謂全體。體謂四肢。髮毛髮。膚皮膚。言擧其大而言之。則一身四肢。擧其細而言之。則毛髮肌膚。皆父母之遺體。而非己之所私有也。此二句明親子一體。而無物我之間之理。以觸發愛親敬親之良知也。楊子慈湖所謂人咸以身體髮膚爲己。不知受之于父母。(新)(舊)本脫于字。今補之。於(舊)(新)孔子於是破其私有之窟宅。而復其本心之大公。人莫切于己。莫愛于己。於(舊)(新)因其愛己而啓之。以受之父母。舊本作以之愛父母。非是。則愛出于公是也。言擧其大至此。書院本作此身體髮膚不可認作血肉之身體髮膚。可作道器合一之身體髮膚看。蓋人之身

體髮膚。本性命之凝聚。而無道器之分。道卽器。器卽道也。所謂仁者人也。形色天性也。惟聖人然後可以踐形是也。人失其本心而后道與器分離。而初爲身血肉之空殼子而已之。一百字。不敢。猶言不忍。吳子曰。（子舊本作氏。○吳指臨川。後皆同。）毀謂虧辱。傷謂破損。

愚按毀傷二字。宜相連看。蓋不毀其行。不辱其身。則雖破損其形（骸〈新〉）體。孝也。（體新本作骸。）非不孝也。虧其行。辱其身。則雖不破損其形體。不孝也。非孝也。是以虧辱而破損者。爲不孝也。故孝子之所不敢者。虧辱而破損也。徒非恐破損貪生怕死也。陳氏曰。若有曾子之心。則龍比之身首分裂。與啓手啓足一般。（則新本作卽。非是。）不然則老死牖下。亦與刀鋸僇辱何異。此句以心說。勿就事上講。蓋毀傷雖屬事。而不敢者心也。只因事以明其心而已。（傷謂破損以下至此一百五十八字。書院本悉刪去。止作所謂戒懼愼獨是也之八字。）始謂孝之在于心而未見於事也。以心事雖一貫。而行事之（新）始發于心。而心之發見終于事業故也。與所謂始條理終條理同

意也。蓋不敢毀傷者愛也。愛因親而發。則至公無欲而爲德愛。則新本作卽。非是。此乃行孝之始。所謂若火之始然、泉之始達也。而爲學者之功、亦以此爲基本。故曰、孝之始也。始謂孝之云々至此一百八字、書院本悉刪去、止作孝之始言從孝德發見之最初而明孝德之起頭處也之二十一字。立身、謂建五官之極、而不廢其職分也。書院本作立成也堅也。全其本然、而渾成貞固之意。身謂道器合一萬物一體的身。勿作血肉空殼身講。行道、謂接物應事每脩道、而須臾不離也。大學所謂格物致知是也。書院本作道卽要道也。行道者卽上文以順天下民用和睦是也。立身行道非兩事。立身所以立行道之體也。行道所以達立身之用也。然體用一源、功夫無二致。只就己而言之、謂立身。就與人交而言之、謂行道而已。揚、傳播也。名者實之賓也。有立身行道之實、則必有聖賢君子之名譽。故言揚名、以明立身行道而全歸之實。言後世者、以非身后則全歸之實不可知。而又其名或不出于公論也。實之賓也以下書院本作謂揚後世者。所以明其名自然之公論而

不朽也。此舉名之不朽、以明至德無窮終始而不朽。只勿泥揚名上而講。矣(衍)(新)以指立身行道揚名言。顯著也。顯下書院本有明也二字。與宗廟致敬鬼神著之著字同意也。吾與父母本一體。而無間隔。故吾能立身行道。則父母鬼神著。而享之。吾名傳播。則父母之名亦因以光顯也。終者始之歸宿。又盡也。孝德之感通始于心。而歸宿于立身行道之事。而又揚名於後世者。全而歸之之后。則人生行孝之事已盡而無餘日也。后上新本無之字。非是。故曰。孝之終也。非謂孝德有所始。有所終盡也。終者始之云々至此。書院本作終。如終條理之終。謂孝行成功盡頭處。言孝行始與不敢毀傷之戒懼而終成於立身行道揚名顯親也。事親謂不敢毀傷之孝心也。始於事親者。言親切無欲之德愛常存。而爲接物應事之本始也。中者對揚名之終而言。舊本無者字。言事君者。舉行道之事。以明孝德之感通無所不通也。君臣夫婦長幼朋友四倫之中。君臣之義最重。故舉事君以包其餘。

㊀通、誠貼本作感字。似可從。

㊁書院貼本作如。注曰。如有已下十九字異本無之。

㊂書院貼本作巳。

楊子慈湖所謂言事君所以明此心之通㊀是也。事親云々至此。書院本作此始中言行道之本末先後也。始於事親者。以示百行不原于不敢毀傷之孝心。則悖德悖禮。而雖得之。不足貴者也。中於事君者。泛謂孝德之感通。君臣夫婦長幼朋友之交。君臣之義最重。故擧君臣以包其餘。△△△△(新)

終於立身。上文所謂始與中皆歸宿於立身。而爲全孝。終非始終之終。畢竟歸宿之意。此一句一截之結句也。不可對始于事親。中于事君而看。言自不敢毀傷以至立身。行道揚名。顯親。五倫之交。日用百行。畢竟歸宿於立身也。書院本及舊本止此。㊁若有孝心而不立身。則雖欲盡於孝。不能全孝也。新本更多此十九字。

大雅云㊂無念爾祖。聿脩厥德。

詩大雅文王篇。凡此經引詩書者。有三義。一證之。示言不虚發也。一用爲結前起后之語。一取詠嘆優游(遊(貼)(新))有以感發人之善心也。無

㊀大虛 諸本作レ太。下皆同。

㊁而 上諸本無ニ而字一

念猶言豈得無念也。爾泛指人言。祖指生之本。言身之本父母也。父母之本。推之至始祖。始祖之本天地也。天地之本大虛(太(舊)(新))也。擧一祖。而包父母先祖天地大虛(太(新))。此一句咏嘆不敢毀傷之蘊。聿述也。厥其也。指祖而言。德即至德也。此一句咏嘆立身行道揚名顯親等之蘊也。 新本無之字。

愛親者不敢惡於人。敬親者不敢慢於人。愛敬盡於事親。㊁而德敎加於百姓。刑於四海。蓋天子之孝也。

愛者順德之愛。發而中節之和。經所謂博愛也。親父母也。下敬親之親效(放(舊))此。須包先祖天地大虛(太(新))看。不敢即不敢毀傷之不敢也。不敢惡(者(新))即親愛也。不曰(日(新))愛而云爾者。以示不忍人之心不能已者也。人包天下之五倫言。下不慢於人之人亦效(放(舊))此。敬順德之敬。 順上新本

有者字。　發而中節之和。經所謂敬一人而千萬人悅之敬也。不敢不（者亦(新)）敢毀傷之條目也。不敢慢者敬也。不曰敬。而曰不敢慢者。以示不忍人之心不能已也。盡極其至而無遺之意也。（極上新本有者字。）愛之極爲敬。敬之至。爲齋齋戒洗心。到得浩然之氣塞乎兩間赫然之光照乎四表。方纔是謂愛敬盡于（於(新)）事親。堯克明峻德。是也。德即至德也。（即舊本作則非是。）教脩道之教。存神過化自然之教化也。大學所謂上老老。而民興孝。上長長。而民興弟。上恤孤。而民不倍之意也。德教即上文所謂愛敬盡于（於(新)）事親是也。加施也。著也。與君子之德風。小人之德草。草上之風必偃之上字同意也。疏曰。百姓謂天下之人皆有族姓言。百擧其多也。尚書云。（云新本作曰。據疏非是。）平章百姓。則謂百姓爲百（入(脫)）官爲下有黎民之文所以百姓非兆庶也。此經德教加于（於(新)）百姓。則

謂天下百姓。爲與刑于（新）於四海相對。四海既是四夷。則此百姓自然是天下兆庶也。疏文止此。堯之親九族。九族既睦。平章百姓。百姓昭明。協和萬邦。黎民於變時雍是也。刑法也。爾雅云（新）曰。九夷八狄七戎六蠻謂之四海。疏曰。海之言晦。晦闇於禮義也。（舊）（新）之下諸本有爲字。於作于。今從疏文。刑于（新）於四海者。舊本無者字。中庸所謂舟車所至。人力所通。天之所覆。地之所載。日月所照。霜露所隊。凡有血氣者。莫不尊親。故曰配天之義也。堯之光被四表。格于（新）於上下是也。蓋大凡也。言略擧其綱要也。天子帝王之爵。表記曰。惟天子受命於天。（舊）於諸本作于。今正之。故曰天子。白虎通云（新）曰。王者父天母地。亦曰天子。（舊）（新）亦諸本作故。非是。虞夏以上未有此名。殷周以來始謂王者爲天子也。表記至此。即正義文。

舊鈔本作曰。以下傚之。

甫刑云。一人有慶。兆民賴之。

甫刑尚書呂刑也。尚書有呂刑。而無甫刑。孔安國云。後爲甫侯故稱甫刑。一人天子也。慶善也。福也。有慶言有以愛敬盡於事親之善。而受富保四海之福。兆民十萬爲億。十億爲兆。姓曰百。民言兆。皆擧其多也。賴蒙也。之指有慶之慶。賴之言兆民蒙天子至德之福蔭。而家々和睦。人々無怨。所謂德教加於百姓。刑於四海是也。

云新本作曰。

居上不驕。高而不危。制節謹度。滿而不溢。高而不危。所以長守貴也。滿而不溢。所以長守富也。富貴不離其身。然後能保其社稷。而和其民人。蓋諸侯之孝也。

居上居一國臣民之上也。驕矜肆也。不驕謂卑以自牧。稱物平施。

高謂諸侯之貴爲一國之主（侯下新本無之字。）其位之崇如自高臨下。危謂（不（舊））
勢將隕墜也。制止也。節謂時措之天則也。制節易所謂制數度。議
德行，不傷財，不害民。度法制也。（（新）制一作則。）法之一定。如度有分限也謹
度，謂謹守諸侯可守之法度也。滿謂諸侯之富有一國之財。其祿
之豐。如水滿器中。溢如水之溢出。貴位尊也。此謂諸侯之貴。富財
足也。此謂一國之富。保（舊）（新）謂不亡失。社稷者。（（舊）一有稷字而無者字。（新）一有者字而無稷字。皆非是。今正之。）
正義曰。韓詩外傳云。（此五字今補之。）天子大社東方青。南方赤。西方白。北
方黑。中央黃土。若封四方諸侯，各割其方色土苴以白茅，而與之。
諸侯以此土，封之，爲社。明受於天子也。社即土神也。（△（舊）（新）即字今補之。）稷五
穀之長。（五上新本有者字。非是。）亦爲土神。（按韓詩至此。引皇侃說。）按左傳云（曰（新））共工氏之子曰
勾龍。爲后土。后土，爲社。有烈山氏之子曰柱。爲稷。自夏以上祀之。

㊀商底本及新舊兩本並誤作レ商。今訂。

㊁如上眞祐本脫ニ戰々兢々四字一。

周棄亦爲稷。自商㊀以來祀之。言勾龍柱棄配社稷而祭之。㊂祭下諸本有祀字。非是。卽勾龍柱棄非社稷也。稷壇在社西。俱北鄉（嚮）㊃並列。同營共門。㊄營一作宮。非是。○正義文止此。和謂各率用孝德。相愛敬而無所乖戾也。民是無位者。人是有位者。諸侯謂五等國君。公九命。侯伯七命。子男五命。

詩云。戰々兢々。如㊁臨深淵。如履薄氷。

詩小雅小旻之篇。戰々恐懼貌。兢々戒愼貌。此二句以形容不敢毀傷之敬心。是乃全孝之心法。愼獨之要也。

非先王之法服不敢服。非先王之法言不敢道。非先王之德行不敢行。是故非法不言。非道不行。口無擇言。身無擇行。言滿天下無口過。行滿天下無怨惡。三者備矣。然後能守其宗

廟。蓋卿大夫之孝也。

先王卽發端先聖王也。法字必不可作制作定法看。可作中庸活法看。服者身之表也。新本無者字。上曰衣。下曰裳。通言之皆曰服。不敢卽不敢毀傷之不敢也。下效此。法言。此法亦中庸活法也。言言語也。集解曰舊本作集註曰三字。揆道而言曰法言。道言也。德包性道而言。行躬行也。率性而行曰德行。非法謂不合中庸之活法也。非道謂不率性之道德也。口無擇言。言自其口出。一皆心之中庸。則無可揀擇是非之言也。身無擇行。言其躬行一皆率性之道。則無可揀擇是非之行也。言行滿天下。卿大夫立朝。則接對賓客。出聘則將命他邦、故言行滿天下。口過謂言不合法出口有差。怨惡謂行不合道。召怨取惡。三者服言行也。備謂服言行全守中庸。而無虧欠也。宗尊

也。廟貌也。言先祖之尊貌之所在也。爾雅室有東西廂曰廟。卿說文云。云新本作曰下同。卿章也。白虎通云。卿之爲言章也。章善明理也。大夫之爲言大扶也。扶進人者也。故傳云。進賢達能謂之卿大夫。此卿大夫謂王朝侯國之臣。按周禮王之卿六命。大夫四命。公侯伯之卿三命。大夫再命。舊本脫此二句。非是。子男之卿再命。大夫一命。今連言者。以其行同也。

詩云。夙夜匪懈。以事一人。

詩大雅蒸民之篇。夙早也。匪猶不也。懈惰也。匪懈謂敬勤也。勤之新本作謹。下同。以以夙夜匪懈之敬勤也。一人天子也。

資於事父以事母而愛同。資於事父以事君而敬同。故母取其愛而君取其敬。兼之者父也。故以孝事君則忠。以敬事長。

則順。忠順不失以事其上。然後能保其爵祿。而守其祭祀。蓋士之孝也。

資取也。與秉彝執中之秉執同。守而不失之意。事父謂一本之孝德。以明無非往而事父之孝也。以指資於事父。事母卽一本感通于（于一作於。）（新）事母之孝也。愛同者。謂愛母與愛父同一孝德之感通也。愛敬本相爲表裏。（裡（舊））無敬之愛。非天性之愛。無愛之敬。非天性之敬。故言愛。則敬在其中矣。言敬。則愛在其中矣。事母之孝。愛爲表。敬爲裏。（裡（舊））故以愛爲事母之孝也。以指資於事父。事君卽一本感通于（于一作於。）（新）事君之忠也。敬同謂敬君與敬父同一孝德之感通也。事君之忠。敬爲表。愛爲裏。（裡（舊）（新））故以敬爲事君之忠也。故承上起下之辭。下（△（新））效此。母取其愛。而君取其敬。取卽與上文之資同意。兩其字指至（故（舊）△△△△△△△△△（新））

德，言。事母則，不失至德之愛，事君則，不失至德之敬也。兼并也。包括之意。之字△(舊)指至德之感通。董氏子(舊)曰。人必有本。父者生之本也。愛與敬父兼之，所以致隆於父。一本故也。此句(舊)(新)諸本作所以致隆于一本也。今從董本。敬即事父之敬也。即(舊)(新)諸本作則。非是。今從書院本。君曰孝，長曰敬。有輕重之微意。疏曰。大夫以上皆是士之長。愚謂須包三達尊之長于己者看。△忠順。馬氏△(新)曰。忠者中也，至公無私一其心之謂也。舊本無也字。順亦悌也。記曰。長惠幼順。爵謂爵位，所居之官也。祿謂廩食，△祭祀。△(新)疏曰。祭者際也。人神相接。故曰祭也。(舊)(新)本作人神相交際也。今從疏本。祀者似也。謂祀者似將見先人也。保守。疏曰。稱保者安鎮也。守者無逸也。(舊)本脫者字。今從疏本。社稷祿位是公。故言保。宗廟祭祀是私。故言守也皇侃說。士說文云。云(新)一作曰。下同。數始於一。終於

十。孔子曰。惟一答十爲士。惟諸本作推。非是。白虎通云。士者事也。任事之稱也。傳云。通古今。辯然與不然。謂之士。此士謂王朝侯國之小臣。及卿大夫之家臣。王之上士三命。中士再命。下士一命。公侯伯之士一命。子男之士不命。

詩云。夙興夜寐。無忝爾所生。

詩小雅小宛之篇。夙興夜寐。謂曰乾夕惕無閒斷也。無與毋通。禁止之辭。忝辱也。所生謂我所生之本。卽父母先祖天地大虛是也。虞氏曰。人生如螺兩箇形體相負。乃得化生。父母生我。不必言了。凡全我。化我。的人。皆有生我之恩。當朝夕戰々兢々無忝所生。方是孝子。無忝爾所生。猶言毋仰愧于天。俯怍于人。

用天之道。因地之利。謹身節用。以養父母。此庶人之孝也。

△△△(新)天之道謂天道流行爲春生，夏長，秋收，冬藏四時之運，也。秋收冬藏舊本作秋斂冬閉。以春耕。以夏，耘。以秋，收。以冬，藏。此之謂用天之道，也。利宜也。地之利謂五土之宜。因地之沃衍隰皐。而稻粱黍稷各隨所宜。此之謂因地之利也。△△(新)謹身，謂小心敬謹以脩其身。不爲非僻。不犯刑戮也。節謂量入爲出。不妄費也。用謂衣服飲食喪祭賓客之用，也。以謹身節用，也。養包養口體，養志而言。謹身所以養志也。節用，所以養口體也。自天子至士。孝行廣大。其章略述宏綱。所以言蓋也。庶人用天因地謹身，節用。其孝行已盡。故曰(新)此。庶人正義曰。庶者衆也。謂天下之衆人，也。皇侃云。不言衆民者。兼包府吏之屬，通謂之，庶人也。嚴植之以爲士有員位。人無限極。故士以下皆爲庶人。竝正義所引文。

皆下爲眞祐本作謂。書院寫本同。

◎不至、眞福本作「不及」、書院寫本同。

曾子曰、前眞福本有「標目甚哉章三字」、自爲一行。書院寫本同。

◎大達、眞福本作「大過」。

故自天子已下至於庶人孝無終始。而患不及者。未之有也。

故連上之辭。包上文六節。已下二字正指前所謂諸侯卿大夫士。言孝無終始。孝在混沌之中。而其生無始。推之后世而無朝夕。無時非孝也。無所不在。無所不通。生々無終。須臾不可離者也。患慮也。苦也。如患得之之患。舊本少之一字。非是。及至也。孝無所不至。故民用患不及者。未之有也。未之有也者。反言以深警戒之。言自古及今。未有此理也。蓋爲決言以勉人之力於行孝。按此注本於御注。而無終始義差別。

曾子曰。甚哉孝之大也。子曰。夫孝天之經也。地之義也。民之行也。天地之經。而民是則之。則天之明。因地之利。以順天下。是以其教不肅而成。其政不嚴而治。

甚大達也。達書院本及藁本作過。深也。甚哉有贊美不盡之意。孝之大。天下莫

㊀自强眞祐本作自彊。

㊁自然而下眞祐本乙則之以下二十一字。

能載曰大。大者孝德本然之量也。因夫子之教。而曾子有見孝德無外之量。故以大歎美之也。經常也。如布帛在機之直縷條理一定而不易也。蓋天之道。生々無息。藁本無之字。一陰一陽天理一定而不易。故取象。以經。爲天道之殊稱也。義者宜也。順理裁制之謂也。註疏云。云新本作曰。利物。爲義。地之道順承天而成物。利莫大焉。故以義。爲地道之殊稱也。民人也。行者流行無滯碍之意。易曰。天行健。君子以自强㊀不息。蓋人之道以率性而行。無所滯碍爲常。故以行。爲人道之殊稱也。天地之經。天包地。故擧經。而義在其中矣。凡經者道之總號也。民是則之。是指人性言。則猶準也。又效法也。資而不違之意。下則字同。之字指天地之經言。則之非意之。自然㊁而則之也。人性資天地之經而不違。譬如月之受日光。而明不違。則天

△之明。△(新)則與中庸所謂律天時之律同意。明亦天德之別名也。易曰、乾以易知。正義云。光明四通。日月星辰。布設張列。通精無門。藏神無穴。不煩不擾。此其易也。故以明爲天道之殊稱也。(舊)道上或脫天字。(新)道下或脫之字。竝非是。(舊)又無也字。△因地之利。△(新)因與中庸所謂襲水土之襲同意。利亦地道之別名也。藁本作利亦天道別名也。易曰。坤主利。又曰。利者義之和。言地之生物。順天理之宜。而無所乖戾。是以無不利。故以利爲地道之殊稱也。△(舊)△其教。△(新)其指則天明因地利言。教卽至德之至教也。肅峻急也。成謂民則而象之。不肅而成言上行下效。甚易而捷也。△其政。△(新)其指則天之明因地之利而言。稿本無而字。政之爲言正也。設法制禁令而所以正人之不正也。洪範八政是也。嚴教命急也。威也。治謂民恥格而不亂也。不嚴而治。言上令下從。不用威猛而治也。

○觀下眞跡本無見之二字。

○民上眞跡本有民莫遺其親五字。

先王見教之可以化民也。是故先之以博愛，而民莫遺其親。陳之以德義，而民興行。先之以敬讓，而民不爭。導之以禮樂，而民和睦。示之以好惡，而民知禁。

先王卽發端所謂先王也。見與易所謂聖人有以見天下之動，而觀其會通，以行其典禮，之觀見之二字同意。○二上新本無之字。教卽上文其教不肅而成之教也。化馴致于善謂之化。民人也。先之先事而爲曰。先之指教而言。博大通也。愛至德之愛也。至德之愛至大而無所不通。故曰博愛。所謂愛敬盡於（于(舊)(新)）事親。而德教加於（于(舊)(新)）百姓。刑於（于(舊)(新)）四海。孝悌之至。通於（于(新)）神明。光於（于(舊)(新)）四海。無所不通是也。民人也。遺猶棄也。莫遺謂愛敬之也。其指民而言。親父母也。陳布也。之指教而言。德者得也。行道而有得于心也。義者宜也。所以裁制事物使合宜

㊀也下舊藁本有民人也三字。

㊁也下舊藁本有而民和睦見上五字。

也。德義猶言心法也。心法所以行道，而有得于心之裁制。使合宜也。舊本無此十八字。書所謂五典。周禮所謂六德等是也。民人也。與謂有所感發而興起也。譬如寐者之有所驚而寤起也。行所謂民之行也。謙讓也。敬讓本一德。相爲表裏。卽上文所謂愛敬盡於事親。而德教加於百姓。刑於四海之敬也。不爭謂和睦而無怨也。導啓迪也之指教而言。禮謂制度品節。所以別嫌明微。儐鬼神。考制度。治政。安君也。樂有五聲十二律。更唱迭和。以爲歌舞八音之節。所以平情導和。通神明。合天人。通倫理者也。示之說文云。云藁本補。字從示天垂象見吉凶。所以示人也。从二。三垂日月星也。聖人垂敎。亦如此。故曰示之。之指敎而言。藁本無而字。好惡謂好至德。惡悖德也。中心有好至德之賞。則其所以加賞者。皆是受用至德之人也。中心有惡

藁下眞蹟本無民知禁三字、有民人也三字。

悖德之實、則其所以施刑者、盡是悖德之人也。此之謂示之以好惡。民知禁。（民人也）禁止也。知禁、謂民恥于不善、而知禁止非心。藁本無止字、非是。

詩云。赫々師尹。民具爾瞻。

詩小雅節南山之篇。赫々明盛貌。師大師。官名。周三公之一也。尹其時居大師官人之氏也。民萬民也。具皆也。爾汝也。言在上者。人所瞻仰。而上行下效。甚易而速也。而又包垂戒之意。

昔者明王之以孝治天下也、不敢遺小國之臣、而況於公侯伯子男乎。故得萬國之懽心、以事其先王。

昔者指古先盛世而言。凡曰昔者者。其意有二。一以爲證。示可尊信之義。一以示戒懼而可知所取法也。明王易曰。大人與日月合其明。日月之容光。照臨于六合。聖人之德輝、亦光被于四表。故曰

明。明王卽發端之先王也。以代言之。謂之先王。以德言之。則爲明王。不曰聖王。而曰明王者。所以示其聖神功化。光明四通。不可尙之本然也。經所謂孝悌之至。通於神明。光於四海。無所不通者是也。以孝治天下。經所謂愛敬盡於事親。而德敎加於百姓。刑於四海者是也。只不曰治天下。而曰以孝治天下者。所以明非明王則不能以孝治。縱雖有幸致治者。不以孝。則悖德悖禮。而不足貴。而非王道也。不敢遺。遺忽忘也。不遺者愛也。不敢者敬也。卽上文所謂愛親者。不敢惡於人。敬親者。不敢慢於人。是也。小國之臣。謂附庸之國主也。土地褊小。不能五十里。附于諸侯。曰附庸。董鼎說。吳子曰。小國之臣。謂子男之卿大夫。子男五十里爲小國。伯七十里爲次國。公侯百里爲大國。按吳說本正義。愚按二說雖於理無害。而前說爲

穩當也。況譬擬也。公侯伯子男。五等之諸侯也。孟子曰。公一位。侯一位。伯一位。子男同一位。公侯皆方百里。伯七十里。子男五十里。凡四等。不能五十里。不達於天子。附於諸侯。曰附庸。疏曰。公者正也。言正行其事。侯者候也。言斥候而服事。伯者長也。爲一國之長也。子者字也。言字愛於小人也。男者任也。言任王之職事也。得保而不失之意。下效此。萬國猶言萬方。是擧多而言之。不必數滿於萬也。懽與經所謂敬其父則子悅之悅同。孟子所謂以德服人者。中心悅而誠服也。下傚此。以事其先王。以以得萬國之懽心也。懽舊本作歡。恐先生易之也。其指明王而言。疏云。云新本作曰。經先王有六焉。一曰。先王有至德。二曰。非先王之法服。三曰。非先王之法言。四曰。非先王之德行。五曰。先王見教之。本脫之字。今從疏文。此皆指先代行孝之王。此章云以

諸侯有卿大夫。眞祐本與舊本同作有諸侯卿大夫。非是。

事其先王。云一作曰。非是。則指行孝王之考祖。呉子曰。天子無生親可事。

故曰以事其先王。按呉本作故以事其先王爲孝。

治國者不敢侮於鰥寡。而況於士民乎。故得百姓之懽心。以事其先君。

侮謂慢忽之。而不矜恤。不侮愛也。不敢敬也。上文所謂不驕制節謹度是也。鰥寡。老而無妻曰鰥。老而無夫曰寡。擧此二者。以包無告之窮民。士民一命以上爲士。民則庶人也。諸侯有卿大夫。只言士民。亦擧小以見大耳。百姓通百官族姓士民鰥寡而言。以以得百姓之懽心也。其指治國者而言。呉子曰。諸侯亦無生親可事。故曰以事其先君。按呉本作故以事其先君爲孝。

治家者不敢失於臣妾。而況於妻子乎。故得人之懽心。以事

其親。

治家者、謂卿大夫及士庶人。治家、以孝治其家也。也上新本有者字。得其心也。不失者愛也。不敢失者敬也。上文所謂不敢毀傷。立身、行道、是也。疏云。云新本作曰。明王言不敢遺小國之臣。諸侯言不敢侮於鰥寡。大夫言不敢失於臣妾者。劉炫云。云新本作曰。非是。遺謂意不存錄。侮謂忽慢其人。失謂不得其意。小國之臣位卑。或簡其禮。故曰不敢遺也。鰥寡人中賤弱。或被人輕侮欺陵。故曰不敢侮也。臣妾營事產業。宜須得其心力。故曰不敢失也。以上疏文。臣妾疏云。云新本作曰。臣妾是奴婢。家之賤者也。新本無之字。非是。妻子是家之貴者也。按二句節取疏文也。人包妻子臣妾一家之人而言。以事其親。以以得人之懽心也。其指治家、者而言。親父母也。疏云。云新本作曰。天子諸侯繼父而立。故言先王先

君也。大夫唯賢是授。居位之時。或有俸祿以逮於親。故言其親也。言新本作曰。非是。○以上疏文。

夫然。故生則親安之。祭則鬼享之。是以天下和平。災害不生。禍亂不作。故明王之以孝治天下也。如此。

夫然董氏曰。夫然猶言惟其如此也。本脫也字。今從董本補之。生謂父母存時也。親謂生親。安謂其心無憂也。所謂舜盡事親之道。而瞽瞍底豫是也。豫之指子孝行而言。祭謂親沒后奉祀也。鬼人死曰鬼。享之享與饗通。謂其鬼神來格而歆饗其祭也。之字指祭祀之誠敬而言。天下和平。擧天下則國家在其中。和平謂各得懽心。而無乖戾偏頗也。災害天災之甚者。爲災害。星變水旱蝗疫之類也。生災害自天降。故曰生。禍亂人禍之甚者。爲禍亂。寇賊奸宄兵戈弑父弑君之

曾子曰前眞祐本標目有敢問章三字。自爲一行。書院寫本同。

屬也。作禍亂出于人爲。故曰作。故連上之辭明王之以孝治天下也如此。總結上文。

詩云。有覺德行四國順之。

詩大雅抑之篇。註曰。覺大也。舊本無曰字。○註指御注。虞氏曰。覺悟也　藁本無也字。○虞淳熙曰。哲人有覺悟處。德行從覺悟處或就他的靈覺之心。就是四方臣民的靈覺之心。心々相通有何隔碍。因此四國順之也。　愚按。悟而后能大也。大則能明悟。非有二義。覺德行。卽所謂至德要道也。四國謂四方之國。順之。順與順天下之順同。之指覺德行而言。

曾子曰。敢問聖人之德。其無以加於孝乎

敢進取而無所憚之意也。曾子因夫子之敎而已雖知孝德之全體。至大而無外。而融和未盡。不能無毫髮之凝滯。不上新本有而字。故所以敢問也。聖人之德。易曰。大人與天地合其德。故曰。天是大底。聖人。

㊀可上眞祐本無二不字一。與二新本一同。

㊁虞氏眞祐本亦作二唐氏一。

聖人是小底天。無以加於孝乎。加增也。言聖人之德至大而天下莫能載。則猶可有增加於孝德之上也。㊀可上舊本有不字。疑衍。今從新本及稾本。

子曰。天地之性。人爲貴。人之行。莫大於孝。

天地之性。人爲貴。言天地之所性。乃是人也。故萬物之首靈。而爲至貴而無對也。禮運所謂人者其天地之德。虞氏所謂人者天地之心。天地有人。如人腹內有心是也。此人字指聖人而言。與所謂仁者人也之人同。人之行。人極也。卽上文所謂民之行也。莫大於孝。孝德全體充塞于大虛。廓而無外。則莫大之義。不言而照然矣。

孝莫大於嚴父。嚴父莫大於配天。則周公其人也。

嚴尊也。孝之全體雖充塞於大虛。而其實體備于人。而感而遂通

事上不當レ在二以字上一。

天下之故一其感通之本。在二于嚴父一。而嚴父之至。通二於（于（舊））神明一。光二於（于（舊）（新））四海一。無レ所レ不レ通。所下以復中充二塞于大（太（舊）（新））虛一之本體上。只在レ茲。故曰。孝莫レ大二于（於（舊））嚴父一。配合也。以下所二以事一レ天之道上。事二其親一。此之謂レ配レ天。孟子曰。存二其心一。養二其性一。所二以事一レ天也。卽首章不二敢毀傷一。立レ身行レ道。全孝心法也。記曰。仁人之事レ親也。如レ事レ天。事レ天如レ事レ親。是故孝子成レ身。由レ是觀レ之。則雖レ行二拜伏擎跪之敬一。以レ所二以事一レ天。不レ事二其親一。則非二嚴父之至一。故曰。嚴父莫レ大二于（於（新））配一レ天。必勿下在二郊祀宗祀上一。而講中配天上。郊祀宗祀。只是配レ天之至極。而周公之所レ獨也。周公文王之子。武王之弟。成王之叔父。名旦。釆二食于（於（新））周一。位居二三公一。故稱二周公一。其人猶レ言レ行二嚴父配天之孝一人上也。（人上舊本有二之字一。）得下遂二此心一。盡二此禮一。而極中其至上者。惟周公而已。故曰。周公其人也。此章專發二明孝德全體之廣大一。是以擧二嚴父

眞福本亦無二此六字一。

配天之廣大至極處。而證之。非謂郊祀宗祀而爲配天學者勿以辭害志也。

昔者周公郊祀后稷，以配天。宗祀文王，於明堂以配上帝。是，以四海之內。各以其職來助祭。夫聖人之德。又何以加於孝乎。

后稷是周之始祖。郊謂冬至祀天於南郊之圜丘也。郊之祭也。必以后稷配之。故曰。郊祀后稷以配天。不曰祭天。而惟曰爾者。此專以明配天之義也。程子曰。萬物本乎天。人本乎祖。故冬至祭天，而以祖，配之。以冬至氣之始也。朱鴻曰。（鴻舊本作子。非是。）周公以萬物本乎天。文武之功本（於（新））乎后稷。故冬至以后稷爲始祖。（按故冬至以后稷六字諸本竝闕。今補之。）而配天祀于郊。冬至者一陽始生。萬物之始。尊后稷。猶尊天也。公羊傳

云、云新本作曰。郊則曷爲必祭稷。王者必以其祖配。王者則曷爲必以其祖、配。自內出者。無主不行。自外至者。無主不止。言祭天、則天神爲客。是外至也。須人爲主天神乃至。故尊始祖、以配天神。侑坐、而食之。宗尊也。謂有功德可尊也。文王之功德至大。而非他宗之所可比。故於明堂大享之祭配之、蓋此祭文王之所獨享。而爲百世不易之宗。是以曰宗祀。明堂者天子布政之宮也。蓋所以明天氣、統萬物、動法于兩儀。德被于四海△(舊)者也。夏曰世堂。殷曰重屋。姬曰明堂。此三代之名也。明堂天子之大廟。所以宗祀其祖、以配上帝。東、曰青陽。南、曰明堂。西、曰總揔(舊)章。北、曰玄堂。中央、曰大太(舊)室。雖有五名。而以明堂大廟爲主。取其宗祀。則謂之淸廟。取其正室。則謂之大室。取其向陽。則謂之明堂。配上帝即配天也。以其偏覆無外。謂之、

天。以主宰造化、而尊無與並。謂之上帝。其實一而已矣。陳氏曰。古者祭天、於圜丘。掃地而行事。器用陶匏。牲用犢。其禮極簡。聖人之意。以爲未足以盡其意之委曲。故於季秋之月。有大享之禮焉。天卽帝也。郊而曰天所以尊之也。故以后稷配焉。后稷遠矣。配稷於郊。亦以尊稷也。明堂而曰帝。所以親之也。以文王配焉。文王親也。配文王於明堂。亦以親文王也。尊尊而親親。周道備矣。然則郊者古禮。而明堂者周制也。周公以義起之也。王氏曰。郊以祀天。廟以事祖禰。三代之達禮也。明堂以享帝則非。郊以享親則非。廟夏商所未有也。而周始爲之。故夫子曰。昔者周公郊祀后稷。以配天。宗祀文王於明堂。以配上帝。武王之伐商。而歸也。祀明堂以教民知孝。其禮行于朝覲耕籍養老之先。而嚴父配天之義。夫子不屬之、

於（新）　者（舊）

武王。而屬之周公者。蓋明堂之禮。武王主其事而行之。其制度則周公明其義而爲之也。夫義者禮之質也。故禮雖先王未之有而可以義起。周公達于義者也。其在周頌。思文后稷配天之樂章也。我將祀文王于明堂之樂章也。詩之國風。始於關雎。於新本作于。下同。小雅始於鹿鳴。大雅始於文王。頌始於淸廟。皆文王之詩也。關雎有王者之德化。鹿鳴有王者之政。大雅始於文王。則受命作周矣。頌始於淸廟。則盛德有百世之祀矣。武王之伐商也。誓于孟津。誓于牧野。其伐商而歸也。告于群后。無不以文王爲言。則王業成于武王。而所以成之者文王也。配天於郊。則不可以二太祖之尊。烝嘗于廟。則不足以明文王之德。是故宗祀明堂以配上帝。此義之所當然。禮之所從起。而非厚于其禰也。是以指其孝行之皆極其至而

㊀又曰下、眞祐本作諸服貢禮物。

㊁廖廓上、眞祐本重出太虛二字。

言。四海之內。謂四方六服諸侯也。各以其職來助祭。各指諸侯。其亦指諸侯而言。職謂其土物之貢及助祭之職分也。祭泛指祭祀。而重郊祀宗祀。疏云。各以其職來助祭也者。謂四海之內六服諸侯各脩其職貢方物也。按周禮大行人以九儀辨諸侯之命。廟中將幣三享。又曰。㊀侯服貢祀物。祀(舊)本作方。非是。鄭云。犧牲之屬。甸服貢嬪物。註云(曰(新))。絲帛也。男服貢器物。註云(曰(新))。尊(章(舊))彝之屬也。采服貢服物。註云(曰(新))。玄纁絺纊也。衞服貢材物。註云(曰(新))。八材也。要服貢貨物。註云(曰(新))。龜貝也。此是(之謂(舊)(新))六服諸侯各脩其職來助祭。又若尚書武成篇云(曰(新))。丁未祀於周廟。邦甸侯衞。駿奔走執籩豆。亦是助祭之義也。以上疏文。按諸本所引誤訛太多。今皆正之。

夫聖人之德。又何以加於孝乎。孝德本充塞大(太(舊)(新))虛。㊁廖廓而無外。故雖聖人之峻德。充孝德本然之量而已。故曰。聖人之德。又何以加

于（於（新））孝乎。

故親生之膝下。以養父母日嚴。聖人因嚴以教敬。因親以教愛。聖人之教不肅而成。其政不嚴而治。其所因者本也。

親愛也。生謂生々活潑也。膝下謂下胎一聲啼叫時。言母子分娩。在膝下一聲啼叫時。而既至德之親愛感通而生々活潑々地也。所謂赤子之心是也。以養父母日嚴。（意（新））以以至德感通生于（於（新））膝下也。養育也。與萬物育之育同。謂因鞠畜而形神共生育而成長也。父母日嚴。謂心之所思也。言以至德感通既生於（于（新））膝下。隨形長神發。則敬親之良知（智（新））日新。而其心之所思。父母日尊也。聖人疏云。（云新本作曰。）聖人謂明王也。聖者通也。稱明王者。言在位無不照也。稱聖人者。言用心無不通也。（用新本作周。非是。今從疏本。舊本則改作用心無不通之謂也。亦非是。）

因嚴以教敬。因

㊀生下於、眞祐本與二新本一同作二之字一。下文則愛敬亦同二新本一。

㊁君親下、眞祐本衍二而字一。

親以教愛。因者順其固有。而開導之意也。嚴者父母日嚴之嚴也。父（新本有以養二字。）親者親生於膝下之親也。人々固有之良知良能也。所教之敬愛。卽首章不敢毀傷。立身。行道之敬愛也。（卽新本作則。敬愛又作愛敬。非是。）嚴也。親也。敬也。愛也。非有二。但有大小精粗之異而已。人之常情。挾恩恃愛。而易失于不敬。故先敬而后愛。因嚴以教敬。因親以教愛。猶因有穀種之生意。而播種也。宜體認。其所因者本也。其指政教而言。本謂三才一貫之大本也。經所謂孝德之本也。中庸所謂中也者。天下之大本也是也。

父子之道。天性也。君臣之義也。父母生之。續莫大焉。君親臨之。厚莫重焉。故不愛其親。而愛他人者。謂之悖德。不敬其親。而敬他人者。謂之悖禮。

父子之道。卽孝也。卽新本作則。非是。父之愛子。本所以事其親也。舊本無本字。故慈亦孝行之一端也。天性天命之眞性也。言父子之道。生之膝下。而日嚴。乃是天之所以命人之眞性。而不可不畏敬而保合也。君臣之義。君以仁使臣。臣以忠義事君。此之謂君臣之義。父尊子卑。有君臣之象也。父慈子孝。卽仁忠之本也。易曰。家人有嚴君焉。父母之謂也。大學曰。孝者所以事君也。慈者所以使衆也。此之謂也。言君臣之義。所以行其孝也。天下之道。不待他求也。舉君臣之義。包夫婦之別・長幼之序・朋友之信也。父母生之。續莫大焉。生生育也。之指子。而言續連也。謂相連續不絶也。言人之子資始于父。而資生于母。其心性形體。相連續而不絶。猶木之根幹枝葉。一體而不相離也。連續之至密。天下豈有加于此乎。故曰。續莫大焉。君親

無則下眞稿本脫焉字。在下脫於字。

臨之厚莫重焉。親父母也。以尊適卑曰臨。覆育之意也。之指子而言。厚重也。廣也。謂仁愛重廣也。天下之至尊。無大乎君。天下之至親。無大乎父母。而兼之者父母也。兼天下莫大焉之恩義。而覆育其子。仁愛之廣大。昊天罔極。天下豈能加于此乎。故曰。君親臨之。厚莫重焉。不愛其親。而愛他人者。謂之悖德。不敬其親。而敬他人者。謂之悖禮。不愛敬其親者。言不受用嚴父配天之心法也。他人指君臣夫婦兄弟子孫朋友而言。愛敬他人者。言無嚴父配天之眞心。而假德禮之迹。而愛敬他人。如覇者假仁是也。吳子曰。悖逆也。由本及末爲順。舍本趣末爲逆。（逆下本有也字。今從吳本。）其愛敬雖合於德禮之迹。而舍嚴父配天之本。而從事於末。故曰悖德悖禮。

以順則逆。民無則焉。不在於善。而皆在於凶德。雖得之君子

所不貴也。君子則不然。

以用也。順謂由嚴父配天之本。而愛敬天下之人倫也。則謂則而象之也。以順則。經所謂愛敬盡於事親。而德教加於百姓。刑於四海是也。逆民無則。逆卽悖德悖禮也。民人也。無則謂人心無德義之則。所謂民免而無恥者也。不在於善。而皆在於凶德。疏云。在謂心之所在也。善卽嚴父配天之至善也。皆謂無所不至也。凶不吉也。凶德卽悖德悖禮也。雖得之。之指其所求而言。得之謂求民之所服從而得之也。如霸者之服人是也。君子謂聖賢。下亦同。不貴賤惡之也。董子曰。仲尼之門。五尺童子。羞稱五霸。正此意也。不然謂無一毫悖德悖禮之心也。此下將說嚴父配天之順德。故設此一句。承上起下。

言斯可道。行斯可樂。德義可尊。作事可法。容止可觀。進退可度。以臨其民。是以其民畏而愛之。則而象之。故能成其德教。而行其政令。

言言語也。斯此也。語助辭。下同。道謂陳說也。以嚴父配天之德。而時然后言。則民莫不信。而爲可陳說之法言也。行斯可樂。行謂施行也。樂謂人悅服也。以嚴父配天之德。而時出之。則行而民莫不悅。而爲可說服之德行也。經所謂敬一人。而千萬人悅是也。德義可尊。尊謂敬信也。心法立嚴父配天之極。則不動而敬。不言而信。見而民莫不敬信。而爲可敬信之德義也。作事可法。作創作也。事事業也。作事謂開物作務也。法則効也。聖人以嚴父配天之德。制作得其宜。天下萬世所則効也。故曰。作事可法。容止威儀也。謂禮

容所止也。觀謂人觀望而畏之也。以嚴父配天之德。正其衣冠。衣冠舊本作容止。尊其瞻視。儼然人望而畏之。故曰。容止可觀。朱氏曰。進退謂行藏也。進謂達而行道也。退謂窮而藏也。在堯舜則陟位爲進。讓位爲退。度亦法也。聖人以嚴父配天之德。進退不失其時。其道光明。天下後世所法則也。故曰。進退可度。以臨其民。以以可道等六事也。臨謂臨撫也。覆育之意也。其指天下國家而言。民人也。下同。畏而愛之。畏謂畏敬其神武也。愛謂愛戴其聖德也。之指君子而言。畏而愛之。如七十子之服孔子。畏敬之。如神明。親愛之。如父母也。則而象之。則效法也。象摸倣也。之指君子德而言。則而象之。謂民日遷善而自不知也。所謂芝蘭之化也。成其德教。成曰終其事。新本作終其事曰成。其指君子而言。德教即其所躬行心得之也。即新本作則。非。

(一)六事下眞祐本作「措天下之事業」者也。

(二)其儀不忒眞祐本重出此句。

(三)五致字底本悉訓「至」。新本亦同。

是下同。上文六事是也。行其政令。行謂施行也。其指君子而言。令命也。政令即（則（新））以上文六事而措天下之民之事業也。

詩云。淑人君子。其儀不忒。

詩曹風鳲鳩篇。淑善也。淑人君子。重言者。深贊美之也。其指君子而言。儀度也。忒差也。上文六事。君子之常度也。故曰其儀也。不忒謂保合而不違也。詩云。淑人君子。其儀不忒。其儀不忒。諸本脫此一句。今補之。正是四國。然只引上二句。以含下二句之意者。以引起下截也。

孝子之事親也。居則致其敬。養則致其樂。病則致其憂。喪則致其哀。祭則致其嚴。五者備矣。然後能事親。

孝子即上文君子也。即新本作則。非是。以其德所可爲天下之君。稱之謂君子。以其德所盡嚴父配天之孝。稱之謂孝子。此截專開示孝行之

本實親切處功(舊)。故以孝子之事親起之。居謂無養病喪祭之事。而離父母而居也。此截專說事親。故雖事君交友之時。而無致樂致憂致哀致嚴之事。則爲居不可。只作燕居無事看。致極其至之謂也。其指孝子之心而言。下四其字同。敬即不敢毀傷之敬。即新本作全則非是。

孝心法也。養包事親之常而言。自昏定晨省冬温夏凊清(舊)(新)進飲食。以至抑搔扶持奉水授巾。無非養父母之事也。樂謂愛敬之眞樂也。記曰。孝子之有深愛者。必有和氣。有和氣者。必有愉色。有愉色者。必有婉容。孝子如執玉。如奉盈。洞洞屬々然。如弗勝。如將失矣(舊)之。嚴威儼恪。非所以事親也。又曰。下氣怡聲。問衣于(新)燠寒。又曰。問所欲而于(新)敬△(舊)進之。而敬(新)本作敬而。非是。今從戴記。柔色以温之。皆是愛敬之眞樂。見於于(新)面盎於于(新)背。施於四體。發於事者也。病疾也。憂謂以父母之病患爲己之疾

五者下眞語本與新本所載全合。

痛苦楚也。吾身有疾痛苦楚。則必求其治療。慮其死亾。甚切也。故其心只在欲其病之速愈。而無一毫之他念也。移此心。而以養父母之病。則纔是致其憂者也。纔舊本作終。非是。喪謂不幸親死。服其喪。哀謂哀戚痛切也。祭謂親沒而祭祀之。嚴謂誠敬精明也。五者敬樂憂哀嚴也。敬樂憂哀嚴也。新本作謂居則止致其嚴也二十七字。備謂全具而不闕也。然後指上文五備而言。能字有力。如有所未備。則非能事親也。

△（舊）

事親者。居上不驕。爲下不亂。在醜不爭。居上而驕則亾。爲下而亂則刑。在醜而爭則兵。三者不除。雖日用三牲之養。猶爲不孝也。

△（新）事親。即五者備而能事親者也。居上。新本無居字。謂位高年老才德長也。不可只作天子諸侯之位而看。雖匹夫。有居上之時。交妻子是

決上不當レ在二愼字上一。

也。最宜二活看一。驕字專可下就二心上一看上。有二一毫自滿之心一。則驕也。爲レ下。新本無二爲字一。　謂二位卑、年少、才德短一也。不レ可下只作二庶人之下位一而看上。雖二天子一有、爲レ下之時一。事二父母一是也。最宜二活看一。亂不レ理也。專可下就二心上一看上。有二一毫不レ安レ分之心一。則亂也。醜類也。謂二位年才德相類一、無二高下一也。爭謂レ好レ勝也。專可下就二心上一看上。有二一毫好レ勝之心一。則鬪爭也。亾謂レ取二滅亡一也。刑謂レ遭二刑戮一也。兵謂二相刄戕殺一也。亾刑兵。皆所二以害レ仁殺一身也。居レ上。故曰レ取二滅亡一。爲レ下。故曰レ遭二刑戮一。在レ醜。故曰二相刄一。只因レ位立レ言而已。曰亡。曰刑。曰兵。假二設其害之至一而戒レ之。實專可下就二心上一看上。雖レ無二亾刑兵之事一。已有二驕亂爭之凶德一。而害二其仁一。則與二亡刑兵一。何以異乎。三者謂二驕亂爭一也。不レ除謂三愼獨不二決去一也。三牲牛羊豕也。新本作二三牲一。謂二牛羊豕一。　日用二三牲之養一。謂下日具二盛饌一以養中親之口體上也。日下新本

殺罪舊稿本作大辟。

多一曰字。猶字有深戒之意。以開示以不敢毀傷而養志為主也。

五刑之屬三千。而罪莫大於不孝。

五刑謂墨・劓・剕・宮・大辟也。墨刻額而涅之也。劓割鼻也。剕刖足也。宮淫刑也。男子割勢。婦人幽閉。幽閉閉於宮使不得出也。大辟死刑也。朱鴻曰。鴻舊本作子。非是。屬者條目也。朱說止此。三千謂墨罪之屬千條。劓罪之屬千條。剕罪之屬五百條。宮罪之屬三百條。殺罪之屬二百條。凡有三千條也。

要君者無上。非聖人者無法。非孝者無親。此大亂之道也。

要要索也。要君謂失忠敬之心。而有索己所欲於君也。無者心不知有君。有而若無也。上卽君也。無上謂無君事之之心。而反其君弑其君也。弑舊本作殺。非是。非毀也。毀上新本多一非字。非聖人謂不尊信聖人也。所

謂侮聖人之言是也。法謂聖人中庸之法也。無法謂無守法之心。而敗棄聖法也。非孝謂無愛敬之眞心。而不篤信孝道也。無親謂無父事之之心。而遺其親。弑其親也。大亂窮人欲滅天理之至。無所以加。故謂大亂也。道謂所由行也。

教民親愛。莫善於孝。教民禮順。莫善於弟。移風易俗。莫善於樂。安上治民。莫善於禮。禮者敬而已矣。

教謂教化也。下同。民人也。親愛天性之親愛也。莫善者。極其至而無外之意。下同。孝謂躬行全五備之孝（民人也（新））也。禮者恭敬之理也。順者循理無違之謂也。弟謂善事兄長也。長下新本有爲弟二字。而無也字。謂躬行弟順之德也。君上所化。謂之風。民下所習。謂之俗。吳子曰。移謂遷就其善也。易謂變去其惡也。移風易俗。猶言移易風俗。只分其文而已。

◎雖下十二字、讀祐本作三千三百禮儀威儀全備。

敬上、讀祐本脫故字。

安謂不危也。上謂君。治謂不亂。民人也。禮樂註見于前。此禮樂須就情文本末全備上而講。敬卽因嚴敎敬之敬也。卽新本作則。非是。而已矣者竭盡而無餘之辭也。禮雖有情文本末之異。而其實唯一敬而已。如無敬心之眞。則假饒雖三千之威儀。三百之禮儀全備。而只是非禮之禮也。故曰。禮者敬而已矣。

故敬其父則子悅。敬其兄則弟悅。敬其君則臣悅。敬一人而千萬人悅。所敬者寡而悅者衆。此之謂要道。

其指君而言。下二其字同。新本作下其兄其君其同。上老老。而民興孝。故上敬其父。所以敬天下之爲人父者也。無所不通之敬也。下文所謂敎以孝。所以敬天下之爲人父者也。是也。子指天下之爲人子者而言。悅謂愛敬之眞心。通融明快。而興孝也。與學而時習之。不亦說乎

之說。理義之悅我心、之悅同。下二悅字倣此。新本作下弟悅臣悅倣之兄。經曰。雖天子。必有先也。言有兄也。是也。上長長。而民興弟。故上敬其兄所以敬天下之爲人兄者也。無所不通之敬也。下文所謂敎以弟。所以敬天下之爲人兄者也。是也。敬其君。易曰。家人有嚴君焉。父母之謂也。大學曰。孝者所以事君也。經曰。雖天子。必有尊也。言有父也。嚴父配天。所以敬其君也。上事家人之嚴君。而盡臣道。而敬之。則下興其忠敬。故敬其嚴君。所以敬天下之爲人君者也。下文所謂敎以臣。所以敬天下之爲人君者也。是也。一人指其父而言。經曰。資於事父。以事母。而愛同。資於事父。以事君。而敬同。故母取其愛。而君取其敬。兼之者父也。故以孝事君則忠。以敬事長則順。夫如此。則曰敬其父。曰敬其兄。曰敬其君。畢竟總統於敬父一人而

人父間人兄間眞祐本皆衍二之字一

已矣。故結之以敬一人。而示一本之蘊焉。妙哉。切哉。千萬人。指天下之爲人子弟臣者而言。天下之子弟臣。何啻千萬人乎。是只舉其大數而言。（新本作言千萬人者。舉其大數也。）悅卽（則（新））子悅之悅也。所敬者寡。謂敬一人。悅者衆。謂千萬人悅。此之指上文而言。此句結前生後之語也。

君子之教以孝也。非家至而日見之也。教以孝。所以敬天下之爲人父者也。教以弟。所以敬天下之爲人兄者也。教以臣。所以敬天下之爲人君者也。

教謂教化也。孝以全體言也。下孝弟臣。此孝中之一端而已。家指天下之家而言。至謂君子行至其家也。（新本至作到。）之指民而言。見之謂君子親見其民。而耳提面命也。非家至而日見之。言非君子親徧到天下之人家。而日日見其民。而教之也。此一句以開示教化

之員。專在於上天之載。無聲無臭上。而不求于聲色之末也。教以身教。言。必可在愼獨上講。不可作聲色之教而講。下二教字同。新本作下教弟教臣之教同。孝即五備之孝也。弟本孝中之一端。故事父之敬。所以教弟也。經所謂以敬事長。則順。此意也。以事言之。則祭義曰。食三老五更於大學。天子袒而割牲。執醬而饋。執爵而酳。冕而揔干。所以教諸侯之弟也。本脫諸侯之三字。今補之。是也。臣謂臣道。即忠敬也。忠本孝中之一端。故所以事家人嚴君之敬。所以教臣也。經曰。以孝事君則忠。此意也。以事言之。則疏曰。朝覲所以教臣。祭帝稱臣。亦以身率下也。是也。所以敬天下之爲人父爲人兄爲人君者也。言君子之身教。由窮無言不顯之神。而天下之人。皆化之。而各無不敬其父兄與君。則是上之人所敬其父兄君者。乃所以敬天下之爲人父

爲人兄爲人君者也。所謂愛敬盡於事親。而德教加於百姓。刑於四海。無所不通。一貫之神道也。

詩云。愷悌君子。民之父母。非至德。其孰能順民如此其大者乎。

詩大雅洞酌篇。愷樂也。謂天理之眞樂也。悌易也。謂易簡之易也。樂易者君子之至德。上文所說是也。故以愷悌二字。贊君子也。擧民。以包天下之人也。父母之於子。一體分形。身體髮膚。血脈貫通。無所間隔者也。君子愷悌之德。於天下之人。心々融和一貫。而無所間隔。有切於父子一體之貫通者。故曰。民之父母。其語辭也。孰何也。順順天下之順也。指上文子弟臣之悅而言。民人也。指天下之人而言。如此指上文教化而言。大謂其德化彌六合而無外也。

此一句反言以明至德要道之廣大高明無所不通。而爲結前生後之語也。

昔者明王事父孝。故事天明。事母孝。故事地察。長幼順。故上下治。天地明察。神明彰矣。故雖天子必有尊也。言有父也。必有先也。言有兄也。宗廟致敬。不忘親也。脩身謹行。恐辱先也。宗廟致敬。鬼神著矣。孝弟之至。通於神明。光於四海。無所不通。詩云。自西自東。自南自北。無思不服。

昔者明王。解見于前。明察謂與天地合其德也。明者光明四通。無所不照之意。察者著也。昭著不可掩之意。可新本作容。明察本一貫。只因天地。分屬有異耳。子曰。仁人之事親也。如事天。事天如事親。由是

觀之則聖人之一言一動。皆事父母之孝。而事天地之明察也。故以明至德。而與父母相通融。而無所間隔。言之謂孝。以與天地合其德。與日月合其明。而與天地明察之妙用相通融。而無所間隔言之。謂明察。而明察與孝本一貫。而無二致。故曰。事父孝。故事天明。事母孝。故事地察。長幼謂天子所長所幼也。長其長。而幼其幼。能和睦無所乖戾。此之謂長幼順。上下泛指天下尊卑長幼而言。治謂安其分而不亂也天地明察。自一言一動。以至于郊社之祭。誠敬與天地通。明察與日月合。而無一毫昏蔽。此之謂天地明察。神明謂天神地祇也。彰昭著分明可見之意也。言神明之妙用。因聖人德業。而昭著分明可見也。必字有力。尊敬也。先亦恭敬之意。比之尊稍緩。此二句明所以長幼順也。父兄舊本作言有父。註疏云。云新本作曰。

立身上與當在首章二字上。

父謂諸父，兄謂諸兄。虞氏曰。雖天子必有當尊而敬之者，名曰父。必有當先而敬之者。名曰兄，二說可相兼看。宗廟致敬，謂祭致其嚴也。舉追遠之誠敬，以示大學終身之精蘊也。不忘親，親親愛。所謂親生之膝下之親也。不忘，謂常存而不失也。脩身，謹行。脩理也。脩身謂一身之作用循天理而不亂也。所謂非禮勿視。非禮勿聽。非禮勿言。非禮勿動。是也。謹愼也。重也。行謂接物應事之行。謹行，謂愼重於接應之行。而不輕發。必中其道也。脩身與謹行。原一事而分言，而已。首章所謂與立身行道同意也。恐辱先。恐懼也。所謂戰々兢々。如臨深淵。如履薄氷，是也。先謂父母先祖也。身體髮膚，受之先。故人不脩身，謹行。而辱其身。所以辱其父母先祖之身也。恐辱先。以示不敢毀傷之敬也。鬼神著。上言承祭祀之心術。此又

言其效也。又舊本作亦。新本無也字。故擧此一句。而示者也。鬼神父母先祖之鬼神也。著明也。謂鬼神來格。享祭祀誠敬之孝。而合莫照著。而不可掩也。所謂微之顯。如在其上。如在其左右。是也。孝弟之至。弟亦孝中之一件而已。上文孝弟相兼論。故又孝弟兼擧也。專可重孝上。看。至者極其至。而無加之意也。孝弟之至。謂孝弟之心致中和。而無所倚。所謂嚴父配天是也。通謂合同而無間隔也。神明擧天地之神明。而包宗廟鬼神於其中矣。通於神明。卽上文神明彰矣。鬼神著矣。是也。光者明之用也。謂照臨所及也。四海極其大而言。六合有形之　盡在其中矣。無所不通。此一句說孝之全體。言不啻光于四海有形之中。雖天地有形之外。大虛廖廓之至大。無所不通也。詩大雅文王有聲篇。自西自東。自南自北。此二句擧四方。以

包六合之大。以形容無所不至之義也。思謂心之感通無擬議也。嚴父配天之孝思是也。服從也。謂無所違逆也。無思不服。言嚴父配天之孝思、活潑流通。無處無時。無所違逆。故其孝思之所及。亦孚信而無所違逆也。

君子之事親孝。故忠可移於君。事兄弟。故順可移於長。居家理。故治可移於官。是以行成於內。而名立於後世矣。

此段承上文。示上下通用之孝行。故以君子。更端。故承上。起下。之辭。自此至可移于官。以事類。明變通之機。故下一故字。以立內外遠近之辨也。移易也。謂變通也。下同。言君子至德。無所不通。是故近而在家。則盡五備之孝。遠而在國。則將順其美。匡救其惡之忠。可變通于事君也。順亦弟也。弟順本孝中之一德也。事兄弟。故順

禮下眞祐本脫已字。

可移于長。言有至德者。近而在家。則事兄能盡弟恭。遠而在國。則至德之順。可變通于事長也。理謂物得其理而不亂也。治亦理也。官謂官政也。居家理。謂齊家人而各得其理而不紊也。治可移于官。謂官政得其理而不亂。亂新本作紊。曰理。曰治。皆孝中之一德也。言有至德者。近而齊家。則家人皆理。遠而服官政。則治可變通于官也。是以指上文孝德無所不通也。行謂率至德而行也。所謂天之經也。地之義也。民之行也。是也。成畢也。善畢其事。而無欠闕之意也。虞氏曰。內敬心之內也。虞淳熙云。是行成于一念敬心之內。聲名自遠播矣。後世謂時之無窮盡也。此一句以示無時不通也。

閨門之內。具禮已乎。嚴父。嚴兄。妻子臣妾。猶百姓徒役也。

閨門小門也。閨門之內。猶言小家之中也。具者該貯而無所不足

之意也。禮者理也。謂治天下之禮也。已乎語辭也。嚴父孝也。孝者所以事君也。嚴兄弟也。弟者所以事長也。猶百姓徒役也。百姓謂百官也。按周禮六官之屬。各有徒。註云。民給徭役者。疏云。徒食五人。祿其官。亞士。故號庶人在官者也。役使也。徒役謂庶人之役使於官者也。周禮官伯作其徒役之事之類是也。家之有妻子。猶國之有百官。家之有臣妾。猶國之有徒役也。徒役擧屬官。最下者。以包其餘。師妻之義。養子之慈。御臣妾之寛。所以治百姓徒役也。

㊀曾子曰。若夫慈愛恭敬安親揚名。參聞命矣。敢問從父之令可謂孝乎。

㊁若如也。夫有所指之辭。此指至德而言。慈愛恭敬。疏云。愛出於內。慈爲愛體。敬生於心。恭爲敬貌。江氏云。此語甚粹。粹下新本有也字。安親

㊀曾子曰前眞祐本標目有若夫章三字。自爲一行。書院寫本同。

㊁若如也眞祐本作若順也。書院寫本同。

謂安樂親心也。五備之孝行。皆所以安親也。經所謂生則親安之。祭則鬼享之。是也。名明王聖人君子孝子的顯名也。名者實之賓。名之於實。猶影響之於音形。故務實立本。之外。別非有揚名之工夫也。參曾子之名。聞命。聞謂嘿識心通。如朝聞道之聞。命教也。敢問。疑思問。學之則也。所以敢問也。從父之令。令命也。舉受命之事。以例其餘言行。從父之令。謂一從順父令。而雖不義。不敢諫止也。可謂孝乎。乎疑辭也。曾子已知陷父于不義之不孝。而又諫爭則却有傷愛敬之和。而又以順從本孝子之素志。故不曰非不孝乎。而曰可謂孝乎。而疑問之也。

子曰。是何言與。是何言與。言之不通也。昔者天子有爭臣七人。雖無道。不失其天下。諸侯有爭臣五人。雖無道。不失其國。

令下眞蹟本無二又字一

大夫有爭臣三人。雖無道不失其家。士有爭友則身不離於令名。父有爭子則身不陷於不義。故當不義則子不可以不爭於父。臣不可以不爭於君。故當不義則爭之。從父之令。又焉得爲孝乎。

與疑辭。下同。何言。猶以何心而爲如此言也。也新本作與。　蓋言者心之聲也。故在於心而發於言。因言而知其心。夫子嘗知曾子之心。是以將謂不爲如此之言。而今曾子有此問。故謂以何心而爲此言與。而疑難戒之。何言與。何言與。重言者。所以深警戒之也。言指曾子之所問之言。不通謂固滯而不通達也。昔者疏云。云新本作曰。　夫子述孝經之時。當周亂衰之代。無此諫爭之臣。故曰昔者也。不言先王。而言天子者。諸稱先王。皆指聖德之主。聖德之主。舊本作聖王。非是。　此言無道。

是故（舊）

所以不稱先王也。以上疏皇侃說。 爭謂諫止其非。若爭然。爭臣謂有賢德。而可匡救其過惡之臣。非必極諫犯爭。而后爲爭臣。又非有舊說所謂司諫爭一件官也。舊說疑指孔傳。 七人非謂人數之定限。但姑約言之也。也新本作爾。 所謂舜有臣五人。而天下治之類也。舜臣豈止五人。姑約言之也。擧七數者。七陽數也。陽剛明而能變化。諫爭以剛明變化爲主。故擧陽數也。九亦陽數。而不擧者。九數之極。而陽變化陰之數也。才難。故不擧數極。且諫爭主剛明。故不取變陰晦之數也。下五三亦陽數也。降殺以兩者。禮制之常也。不可必泥其數也。

△ △（新）無道。此無道。須輕看。非謂如桀紂暴惡。只謂心無道義之守。所謂上無道揆是也。△△△△△△△（新）不失天下國家。擧諫諍之功効。以示不可以不爭也。

△（舊）爭友謂益友也。士不能有爭臣。必藉益友之忠告。而改過惡。遷

善。故曰有爭友也。令善也。不離令名。擧效以見其進脩之成功。爭子謂成德子也。成舊本作盛。　此一句包天子諸侯大夫士庶人而言。此段主意。在于此一句。身不陷於不義。身指親身而言。不義謂不合人義也。人之行不義。猶獸納于陷阱。故曰陷於不義。身不陷於不義。謂正心脩身也。當不義。謂君父行不義時也。子不可以不爭於父。經曰夫孝始于事親。中于事君。且天子諸侯大夫士庶人之子。均爲子也。均愛父也。父若有過。子必幾諫。不可諉之於爭臣爭友。故先父子。而后君臣。其旨深矣。矣新本作哉。　此二句結上文。說不可不爭之理。以起下文。故字承上二句。以起下句。之指不義而言。此一句說孝子之所以受用也。焉得爲孝乎。反言以甚戒其爲不孝也。此二句總結上文。以與發端何言與言之不通相照應。

前後二字、眞福本與舊本所載同。

君子之事上也、進思盡忠、退思補過、將順其美、匡救其惡、故上下能相親也。

此君子亦指聖賢而言。上謂君也。因上文論爭臣、而將說事君之〔于（舊）〕忠。故用此一句、承上起下。進謂自私家而適公所、進見於君也。思謂心在茲而精一也。〔乀（舊）〕下同。盡謂至其極而無遺也。中心爲忠。移嚴父配天之心、以事君之德。是也。〔新本無德二字。〕〔於（新）〕之此一句。此段綱領、下三句。此一句之條目也。退謂不進見于君之時、對進而曰退而已。補裨也。塡也。裨塡其欠闕之意也。無心而違道爲過。補過、詩所謂袞職有闕、維仲山甫補之、是也。將勸也。助也。成也。順從也。和也。吳子曰、將謂助之於後〔前（舊）〕。順謂導之於前〔後（舊）〕。〔吳說止此。〕其指君而言。美謂善心善行、也。匡正也。救止也。吳子曰、匡謂正之於微、救謂止之於顯。〔吳說止此。〕其

指君而言。惡謂惡心暴行也。故承上文忠誠而言。上謂君也。下謂臣也。能字有力。假令雖相親不由道義則不可謂能也。相親謂下以忠事君。上以禮接臣。能相親交泰而同心同德也。

詩云。心乎愛矣。遐不謂矣。中心藏之。何日忘之。

△(新)詩小雅隰桑篇。心謂心所存主也。愛至德之愛敬也。心乎愛矣。言心融于至德之愛。而無一毫之間雜也。遐。△(新)朱氏曰。朱謂鴻也。氏本作子。今正之。遐遠也。遐不謂。猶言不謂遐也。謂遠近上下無所不通也。中心謂事君之忠心也。藏之。守於密之意也。之指上文遐不謂之愛而言。下忘之之之同。△△△(新)何日忘之。言無可忘之日也。

孝子之喪親也。哭不偯。禮不容。言不文。服美不安。聞樂不樂。食旨不甘。此哀戚之情也。

吳子曰下眞福本作偯哭聲從容而有餘也。

此孝子亦指聖賢而言。下說居喪之孝。故以孝子更端也。持服曰喪。親父母也。父母死。而居其喪。謂喪親。因上文何日忘之。而將說事死之道。故擧此一句。以承上起下。哭哀聲也。吳子曰。偯聲春容。而有餘也。春本作從、今從吳本。禮記間傳云。大功之喪。三曲而偯。此父母之喪。哀痛之極。故其哭也。氣竭而息。無復餘聲。聲下新本有也字。非是。○以上吳說。禮謂居喪所行之禮法也。不容。謂擧措進退。無脩飾爲容儀也。言言語也。不文。謂有事不得已。則直致其言。不治擇文飾成文辭也。服美。新本無服字。謂美飾之衣服。錦繡之類也。不安。謂哀戚不安。而不忍服美衣也。聞樂不樂。言平時聞樂。則必樂。今因哀戚太甚。聞樂却哀痛益深。不樂而耳不忍聞樂也。食旨不甘。旨謂味之美也。言平時食旨則必甘美。今因哀戚太甚。食旨却不甘美。而口不忍甘旨味也。

戕新舊兩本亦同。當作戕。

旨味之美也（舊）

此哀戚之情。此指上文不懐等六句而言。哀悲哀也。戚憂也。痛也情。貞心之發見。所謂人情也。此一句結上文。以起下文聖人之制也。

三日而食。教民無以死傷生。毀不滅性。此聖人之政也

三日謂從親始死經三日也。食謂食粥也。呉子曰。親死水漿不入口。三日乃食粥。（乃本作而。今從呉本。）疏云。（云新本作曰。）記問傳稱。斬衰三日不食。此云三日而食者何。（何下新本有也字。非是。）劉炫言。（言本作云。今從正義。）三日之後乃食。皆謂滿三日則食也。（疏文止此。）此一句擧聖人所制之禮法。記問喪所謂親始死。惻怛之心。痛疾之意。傷腎乾肝焦肺。水漿不入口。三日不擧火。故隣里爲之糜粥以飲食之。是也。教謂因本之教。（舊本脫此一句。）民人也。死親之死也。生子之生也。傷害也。戕也。謂哀傷太甚。而至死

亡也。毀謂羸瘦而容色毀壞也。滅火熄也。性天命之性也。滅性謂天性之明昏昧猶火熄也。蓋子之身與性。皆親之遺體也。故或哭死。傷害遺體之生。或毀瘠骨露見。而情勝而滅天命之性。則却以爲不孝。曲禮所謂居喪之禮。毀瘠不形。視聽不衰。不勝喪。乃比于不孝。是也。以上節採曲禮文。此一句以明聖人立法之蘊。此聖人。此指上文禮法禮意而言。政因本之政也。與上文教字相照應。此一句。一以示喪禮者。聖人中和之妙。而他人之非所及也。一以爲承上起下之語。而明全段皆是聖法也。

喪不過三年。示民有終也。爲之棺槨衣衾。而擧之。陳其簠簋。而哀戚之。擗踊哭泣。哀以送之。卜其宅兆。而安措之。爲之宗廟。以鬼享之。春秋祭祀。以時思之。

喪不過。謂哀痛未盡而俯從也。此一句亦舉聖人所制之禮法。記所謂三年之喪。二十五月而畢。哀痛未盡。思慕未忘。然而服以是斷之。是也。禮三年問之文。示開示也。民人也。有者。天然自有之意也。終謂萬物生死始終之終也。言有生必有死。有始必有終。天命之本然。有形之所必有也。故雖孝子終身之憂無窮。而喪不可無終竟之期。是以聖人立中制。以開示民有天命必然之終期。而不可任私情也。即不滅性之意。即新本作則。非是。所以明喪禮之本也。爲造也。棺說文關也。所以掩屍也。槨外棺也。衣謂襲與大小斂之衣也。衾謂單被。覆尸。荐尸所用也。舉謂舉屍。內於棺也。之指親屍而言。親下新本有之字。子曰。尸之外衣。衣之外衾。以襲以斂。衾之外棺。棺之外椁。以斂以殯。呉說止此。陳列也。其指朝夕朔望之奠而言。簠簋祭器也。之指親之

梁當作粱。下同。

不在而言。吳子曰。此言朝夕朔望之奠。簠盛稻梁器。外方內圓。簋盛黍稷器。外圓內方。內圓內方下新本有也字。非是。按士喪禮朝夕奠脯醢而已。盛以籩豆。朔月殷奠。月舊本作望。非是。始有黍稷。盛以瓦敦。卿大夫祭禮。少牢饋食。亦止用敦盛黍稷。以公食大夫禮推之。竊意。天子諸侯之殷奠。乃備黍稷稻梁。而器用簠簋。此經所云。蓋舉上而言之也。經吳本作傳。而今作經者。先生不肯朱吳分經傳說故也。云新本作曰。非是。擗以手擊胸也。踊以足頓地也。吳說止此。注曰。御注。男踊女擗。疏云。云新本作曰。按問喪云。在牀曰尸。在棺曰柩。動尸舉柩。哭踊無數。惻怛之心。痛疾之意。悲哀志懣氣盛。故袒而踊之。婦人不宜袒。故發胸擊心。爵踊殷々田々。如壞牆然。則是女質不宜極踊。故以擗言之。據此女既有踊。則男亦有擗。是互文也。疏文止此。哭者。口有聲也。泣者目有涙也。擗踊哭泣者。惻怛痛疾之情。發見

譬眞蹟本作學。

于形體者也。哀謂哀其形不返反(新)也。之指柩而言。送之謂送形而往。葬地也。卜灼龜以視吉凶也。其指所葬而言。宅墓穴也。兆營域也。措置也。安措謂無地風水泉樹根蟲蟻等患。及爲人所發也。之指垂(舊)柩而言。吳子曰。將置柩于其處。必視生氣無地風水泉沙礫樹根螻蟻之屬。及他日不爲城郭溝池道路。然後安。卜者決之於神也。也(舊)(新)不卜則擇之以人。葬書備言其術之理。可稽焉。中州土厚水深。不擇猶可。可下新本有也字。非是。偏方土薄水淺。凡地不皆可葬。苟非其地尸柩之朽腐敗壞至速。速下新本有也字。非是。與擧而委之于壑同。于新本作於。非是。孝子之心忍乎。先擇後卜。尤爲謹重。所謂謀及乃心。謀及士民。而後謀及卜筮也。按士喪禮筮宅卜日。大夫以上。則葬日與宅兆皆用龜卜。或亦用筮。此云卜。蓋通言之。吳説止此。爲謂作造及△(舊)脩飾(新)飾也。按王制。

祭法。官師已上。皆立廟。庶士庶人無廟。祭於寢。此擧宗廟。以包祭於寢者也。于（新）以鬼猶言以事鬼神之禮也。享者祭祀人鬼之名。之指親精神而言。吳子曰。初喪至葬。有奠無祭。蓋猶以人禮事之。既葬於（新）迎精而反。精下舊本有神字。非是。乃以虞祭易奠。卒哭而祔祔（舊）于祖。喪畢而遷于廟。始純以鬼禮事之。純舊本作終。非是。○吳說止此。春秋謂四時。春陽之始。夏陽之終。秋陰之始。冬陰之終。擧其始。則終在其中。故止只（舊）（新）擧春秋耳。時謂歲序流易之時也。思謂悽愴怵惕之心。思之指親而言。

生事愛敬。死事哀戚。生民之本盡矣。死生之義備矣。孝子之事親終矣。

生事謂事生親及親生性鬼神也。所謂居則致于（舊）其敬。養則致于（舊）其樂。病則致其憂。祭則致其嚴。及至德敎加於百姓。刑於四海。都是愛

敬之孝德也。故曰生事愛敬。死事謂居親喪也。喪禮之儀節。自始至除喪。都是哀戚之情也。故曰死事哀戚。生民之本。易曰。天地之大德曰生。民人也。經曰。天地之性。人爲貴。故曰生民。生民猶言生生活潑人也。本根柢也。人之有孝德。猶木之有根柢。故以孝爲生民之本。盡至其極而無遺之謂也。與盡性之盡同。死生。死謂形體骸(新)(舊)。生謂生性至誠無息也。義者理也。死生猶言形死而神生也。蓋也(舊)雖形死。而鬼神生々之理無息。故曰死生之義。備具也。足也。詳悉明細而無遺之意也。孝子者。卽明王先王聖人君子是也。明王先王新本作先王明王。始以先王起之。終以孝子結之。其旨至矣。妙矣。事親卽孝子也。卽新本作則非是。終盡也。言先王聖人君子孝子之孝行德業盡于此於(新)而無遺也。自生事愛敬。至于此於(新)五句。孝經一部之結語也。必勿作

一　底本曰、舊本云、孝經啓蒙者、摘諸說而明親死之書也。因刻三長之諸、聊加訓點云。

二　孟村默叟雖底本所附、舍啓後之十六倭文經和漢書五。

三　何如舊本並作如何。

喪親一章、結語講也。

孝經啓蒙。(一)畢

誦經威儀。(二)　此篇乃明江元祚著。見於孝經大全。按啓蒙舊本載此洎孔傳序。而新本則不載焉。蓋先生尊信孝經。嘗訓學者。每晨拜誦遵守此法。見學舍坐右戒・集義和書。是舊本載之之所由也。故附卷末焉。

每日淸晨。盥櫛盛服上香。北向禮拜。面北默坐。閉目存想。從自身見今年歲、逆想回孩提愛親時光景何如。(三)又逆想回下胎一聲啼叫時光景何如。(三)又逆想回在母胎中。母呼亦呼。母吸亦吸時光景何如。(三)到此情識俱忘。只有綿々一氣。忽然自生歡喜。然將身想作箇行孝的曾子侍立。在孔子之側。無限恭敬無限愛樂。然後開目舉手稱讚曰。曾子行孝。孔聖說

舊本循作修。英作莫。庇作疵。

經。經于何在。在吾此身。手圓足方耳聰目明。人々俱足物々完成。離身無孝。離孝無身。立身行道。身立道行光于四海通于神明。至德要道。地義天經。我今持誦。不得循聲願明實義。廣育群英。上尊主德。下庇此民。庶幾夙夜無忝所生。按舊本所載。譌訛頗多。今悉正之。

論語郷黨啓蒙翼傳　解題並凡例

解題

一

本卷はもと論語郷黨翼傳上中下三卷として、寛保二年秋九月洛下石川惟元によりて印行せらる。然るに全書岡田氏本目錄によれば、論語郷黨篇には翼傳・啓蒙兩樣の注解あるを知る。篠原氏は唯印本の名を踏襲して翼傳のみとなし、且つ氏の修したる全集中本篇の開卷の處に郷黨啓蒙は諸處を歷訪して竟に之を覩るを得ず。或は小字考註證が卽ち啓蒙なるべきかを想像せり。果して然らば啓蒙は旣に散佚に歸して終に今日に傳らざるか。按ずるに全書岡田氏本は此の書の卷頭に書名を冠せず。唯郷黨第十の四字を示すのみなれども、卷尾に至りて、篠原氏等の翼傳と名づくるものと同一內容のものに對して、四書啓蒙論語翼傳五終の十字を附し、明かに啓蒙の二字を著はせり。これによつて啓蒙の亡びず、現存せるを知るを得べし。是れ形式上着眼すべき一の要點なり。更に之を內容上より精査するに、開卷の首（第三頁）の小字考註證の部に「予嘗欲レ啓二童稚之蒙一。故分二別心迹一說。」と記せらるゝは、明かに開卷第一の大字本文に於て聖心と其の迹とを區別したることの說明に屬す。其の他篇中到る處思想上、心と迹或は道と禮或は道と事とを相對比して解說したるものあり。而して此等、思想上の說明は小字考註證等語句の注解釋義と何等交涉なく全く別物にして、たゞ童稚の蒙を啓かん爲に言をなしたるを以て啓蒙と名づけられたることを知るべし。以上本書其の物の形式及び內容上より、本文卽ち大文字の

部分が啓蒙なることを立證したり。更に他の書によつて、啓蒙は思想的解說にして、翼傳と謂はるゝものが、其の小字卽ち註證若くは考註證と名づけらるゝ部分を指すことを明かにせんとす。卽ち先生の他の著孝經啓蒙初稿本によれば、卷頭首章宗意の部分に、「字義詳解見於翼傳」と明記せらる。（全書岡田氏本目錄も亦孝經に啓蒙と翼傳兩樣の註解の書あるを語る。）而して孝經にありても啓蒙は思想卽ち內容上の解說にして、翼傳とは今日其の書傳はらざれども、上に引用したる首章宗意中の八字に由りて正文中に見ゆる語句の註記に外ならざることを確むるを得べし。此の如く一は岡田氏本の卷尾の標題卽ち本書の形式と、一は本書の內容と、一は孝經啓蒙との對比の上より推論して、論語にありても啓蒙とは本文卽ち大字を指し、翼傳は其の註證等の小字の部分を斥すこと明かなり。されば從來散佚したりと思惟せられたる鄕黨啓蒙は其の翼傳と共に、今日猶儼として兩存するを知る。これ本全集に於て篠原氏本を底稿としつゝ猶玆に岡田氏本全書目錄によりて名を改めて論語鄕黨啓蒙翼傳と稱する所以なり。

二

先生によれば、論語上篇に於て學而第一の學んで而して時に習ふに始り、鄕黨第十が時哉時哉の句にて終るは、學者が常に聖人時中の德を標準として學習すべきを示すものなりとなし、特に鄕黨篇は孔子時中の德を印象的（景象の文字を用ひらる。）に記述したるものなれば、篇中見ゆるところの孔子の事迹に拘泥せず、宜しく其の內に存する聖人の心を味讀すべしとなすものなり。此の着眼既に凡ならざるものあるを知ると共に、中庸思想其の物についても、極めて深淵なる思索の存するを見る。

抑も中庸と言へば、一見平凡の德の如く見做さる。然り、最も偉大なるものは、あまりに平凡にして

却つて常に吾等の意識の外に在り。太陽の光と熱とに對して何人も其の鴻恩を意識せざるが如く、可も無く不可も無き處が孔子時中の大德の存する所以なり。此の意味に於て中庸の德は庸の字が示す如く平凡庸常の意あり。然りと雖も過不及なきを中と謂ふよりして若し數學的の折中といふが如きものを以て、中を考ふるものありとすれば、抑、當らず。皮相的に見れば、三は不足、五は過、四が此時の中なりと見、從つて五は四よりも、より大なりとも考へらる。されど之を人生の內面的生活より考ふれば時として四が五よりも、より偉大なる價値を有することあり。今之を金錢に譬ふるに、拾圓を使ふべき場合に拾圓を使ふは勿論道に適ふべけれども、又時として五圓を使ふべき場合には五圓を使ふことが此の時拾圓を行使するよりも金額は少けれども、用途の價値の上より言へば、却つて偉大なる效果を發揮することあるべし。かくて金錢財寶の人生に於ける價値を認め、其の時の意義に適中する樣に行使することが中庸の道にして、必ずしも常に最高の額を支出するに限らず。否時として最低の額を支出することが、最も其の道に適中することあるべし。されば中庸の思想に於て過不及なしと謂ふは、外的に規定せらるゝ事に非ずして、所詮內部的の適中（フィットネス）を外にして其の正當なる概念を把握する能はず。英のクラークが凡ての德は其の物の意義に適中する樣に行動するに在りとなせるもの亦同一の價値生活を指すものにして、先生が書中「時ならざれば食はざる」の一句を以て愼節の活法、飮食の眼目にして、此の時の字は樂記に「其の可に當るを時といふ。」といへるもの是れなりと斷じたるが如き、凡そ古今東西思想の歸一する所を知るべきなり。孝經啓蒙の「先王の法服に非ざれば敢て服せず」の處に於て法の字必ず制作定法となして看るべからず、中庸の活法となして看るべしとも言はれ

たるもこれなり。蓋し制度の如きは其の時代各別定式のものあり。此に拘泥しては時代を異にしたるとき行はれざることあり。宜しく時處位に應じて其の精神を活用すべしとの意ならん。

今此の如く事毎に其の事をして意義あり價値あらしむる樣に行動すること、換言すれば中庸の書に所謂時に措くの宜しきを得んとするには、人生の一部に跼蹐しては不可なり。宜しく大局高所に立ち常に人生を俯瞰し得るの明智あるを要す。吾人凡俗に在りては、或は利欲の念に昏まされ、或は大小の取捨に於て其の當を得ずして、中道に違背すること多きに反し、孔子の如きは明智達識により一動容周旋禮に中らざるはなく、心の欲する所常に矩を踰えざるものあり。藤樹先生茲に見る所あり。鄕黨篇に見ゆる孔子の一言一動が律動的にして恰も交響樂を奏するが如く、圓通自在の境地に安住せらるゝの態度を形容して、譬へば造物者が萬物の形と生とを賦與して蠛蠓を遺さゝるが如しと謂ひ、或は水の流行が地に隨つて形を成すが如しと謂ひ、或は敬すべきに敬し和すべきに和すること、譬へば權衡の輕重に於けるが如し、輕重は物によつて變ずれども、衡平は易らずして物の輕重も亦其の平を得ると謂ひ、或は終始一貫なること譬へば盤針の子午に於けるが如しと謂ひ、若くは時俗の風を正すの宜しきを得たること準繩の不平不直に於けるが如しと評せらるゝなど、孔子の一事として粗漏なく、一物として所を得ざることなきを筆を極めて賞讃し、遂に中庸の德を以て全體大用の神理なりと斷せらるゝあたり、聖人にして始めて聖人を知り得るものあるを知るべく、其の思想に於て本篇中、中庸を得るに權の必要なることを高調せらるゝ點等と共に正に吾人の玩索に値するものと謂ふべきなり。三輪執齋全集第十一編附錄講演集拙稿執中の意義參照。

三

藤樹先生年譜寛永十六年己卯三十二歳の條によれば、秋論語を講す。鄉黨の篇に至つて大に感得觸發あり。是に於て論語の解を作らんと欲す。先づ鄉黨の篇より起つて先進の二三章に至る。病苦にさへられて果さず云々と見ゆ。蓋し鄉黨篇は論語に於ては難解の部分にして何人も手を染むるを好まざるものなり。然るに先生に在りては、平日聖人を目標として修養し來れり。今や孔夫子の人格を具體的に表現したる斯篇の精究に入るに及びて特別の感興を覺えられしこと故なきに非ず。

斯篇の研究に際して先生が參考せられたる書目は當時新渡の書を始として、經史子集及び其の註釋書等頗る廣汎の範圍に涉れり。卽ち十三經註疏本の外、易經にありては朱子の本義、詩經書經にありては集傳、禮記にありては陳澔の集說、四書にありては集註及び大全・四書蒙引・四書翼考・四書節解圖考・四書翼經圖解・四書說叢、字書にありては說文・埤雅・六書精蘊、其の他諸子百家にありては老莊を始として、孔子家語・呂氏春秋・尉繚子・淮南子・論衡・武書大全・黃帝內經靈樞・本草・邵氏聞見錄・皇極經世書・朱子小學・文公家禮・王龍溪語錄・白虎通等あり。但し此の中には他書に引用せられたるものによつて讀解せられたるものも三四にして止らざれども、此の時は必ず原本のある限り今一度之を參照して、そこより證據を引かるゝもの多し。就中明人吳繼仕の四書圖考と余應虬の四書圖解此の書の書名は一見俗本の如く見ゆれども、事實に立脚して經義を發明したる點と孔子の人格を具象的に表現せんとしたる努力とは俱に觀るべきものあり。の如きは、先生の鄉黨篇の解說に多大の貢獻をなしたるのみならず、思想の上にも種々影響を及ぼしたるを知り得れども、茲に吾人の特筆すべきは、先生が十三經註疏本を精讀して多くの資材を其の內より援引せられつゝ、孔夫子の人格の背景となれる當時の社會

的生活を理解するに努められたること是れなり。思ふに人を知らんと欲すれば必ず其の時代を知らざるべからず。時代は人によつて作らるゝと共に、人は到底時代の兒に外ならざればなり。

鄉黨篇に見ゆる社會的生活の實際を知らんとすれば、必ず三禮の研究に俟たざるべからず。是に於て先生は三禮中鄉黨篇と關係深き部分については一々註疏本について精詳なる考覈を遂げられたり。周禮然り。禮記亦然り。今韓退之をして其の讀み難きに苦しむの歎聲を發せしめたる儀禮に例を取らんに、先生は鄉飲酒禮と聘禮とについて註疏本を讀破し以て其の大要を摘錄せらる。或は儀禮の本文をそのまゝ引用すると共に、思ひ切つて或部分を省略するあり。或は一節の意義を僅々三四字の內に約說するあり。或は必要に應じては、鄭註及び賈疏の文を引用するあり。而して此等の取舍省約其の要を得たるもの甚だ多く、其の成績たるや實に驚歎に堪へざるものあり。編者は嘗て京都帝國大學文科大學に學び、「周人の家族的並に社會的生活」と題する卒業論文を草するに際し、儀禮の註疏を讀みて十七篇全文の內容を知解せんことを力めたることあり。註疏本は賈疏の初に某字より某字に盡くまで某々の事を論ずとして本經の文段と其の內容とを說示すれども全く之を缺きたる部分も亦多し。盧文弨の儀禮註疏詳校は此等の部分を追加補入すれども、猶不十分なるを免れず。三禮義疏亦同じく要項を示せども、項目の立て方煩瑣細密に過ぎて其の要を把捉し難し。胡培翬の儀禮正義に至りては此の點極めて明快に說示せらるれども、是れは大略簡素に過ぎて細目を辨じ難し。故に正義を綱とし義疏を目としつゝ精細に註疏を研究し行けば、其の細と其の要と兩つながら之を知り得べきを覺えたり。されど此の時は鄭註は相當の程度迄讀解したれども、賈疏に至つては之を精讀し盡したるに非ずして儀禮

正文の讀解を主としたるのみ。其の後大學院に在りて儀禮註疏の演習に陪し、學友の多大の提撕と狩野教授の懇切なる指導とにより、且つ楊復及び張惠言の儀禮圖等諸多の參考書の助によつて漸く其の意を領解するを得たり。翻つて考ふるに藤樹先生の時代は明末に屬す。勿論義疏本もなく盧氏の詳校もなく又胡培翬の正義もなく張惠言の圖もなし。此等の多くは淸朝考據の學の所産なり。或は先生が朱子の儀禮經傳通解によつて知解せられたるかを疑ひ、就いて對照したるに其の痕迹絶無にして、確に註疏本（先生の讀まれたる註疏本は閩本なり。考證は後出。）によつて之を讀破せられたるを知る。眼光紙背に徹する讀書力を有し給へる先生に在りては、既に第一卷（附點）孝弟論の解題に於て述べたるが如く、廸吉錄の如き當時の俗文を交へて書かれたる書籍を讀みても正當に讀解せられたると等しく（廸吉錄の抄譯より成れる鑑草を見るに全く譯文の臭味を存せず、其の行文の極めて平明にして且つ流暢なるを知る。眞によく原文を領得したるものに非ずんば到底不可なり。）註疏本の中にありても、最も難解とせらるる儀禮の註疏を讀むに多くの參考書を援引することなくして正解せられたるのみならず、前述の如く其の取材上の省約極めて適切なるものあり。全文を明解したるものに非ざれば、到底此の如くなる能はず。既に本全集卷頭編纂總則に於て述べたるが如く、先生の全集を修したる篠原元博氏は當時に在りては相當の學識を有したる人にして、氏によつて先生の學術の闡明せられたるもの頗る多けれども、儀禮の學に至りては、研究未だ盡さゞりしものの如く、此の點先生の眞意を發揮するに足らざるもの存せり。例へば聘禮の中牢の部分に於て既覿而出の四字について（本卷二六頁參照。）氏が「既覿而出四字。按本經無。」の十字の頭註を附し、且つ其の次に擯者入告出許の六字を置きたるが如きは大なる見當違ひなり。儀禮正文を精細に研究し前記の如く明瞭に文の大段小段を區別し解剖すれば、（今編者が聘禮及び鄕飮酒禮、共に上欄に數字を附して要項を記入したるは、其の内容を示して先生の取舍の如何なるものなり）

しかを一目瞭然たらしめんとしたるものなり。　此の條は介の私覿に該當するを知る。先生の引用文を檢するに此の四字の上には擯者出請。上介奉二束錦一。士介四人皆奉二玉錦束一。請レ覿の二十字あり。之を儀禮正經に徴するに此の間既覿而出の四字無きことは篠原氏の指摘したる通りなり。然れども此の四字は實は擯者入告出許（汲古閣本巻八五十四丁初行）より後文の執レ幣者序從レ之（同五十七丁裏四行）に至る儀禮正文二百有餘字を此の四字に約說せられたるものなり。隨つて篠原氏の擧げたる前記六字は今は無用の文字なり。果せる哉岡田氏本に據れば、既覿而出の下は、擯者出請の四字となれり。按ずるに此の點は岡田氏本其の眞を傳ふ。卽ち此は次項賓禮畢つて出づる文段の首句に見ゆる文字にして、次句賓告二事畢一（巻八、五十七丁裏五行）と正しく相連屬す。これ編者が底本として篠原氏本を採りながら此等の部分は特に頭註に其の理由を附して改訂を施したる所以なり。同様の例は饔餼をおくる禮畢つて大夫の退出するところの數十字を大夫出の三字にて示されたるものに於ても之を見るを得。（二十七頁參照。）

此の如きは先生の讀書の極めて緊密にして、且つ其の取捨極めて剴切なるもののあるの一端を示すに過ぎず。其の他儀禮正經の末に附せらるゝ「記」の文をも引用せらるゝものあると同時に、悉く註疏本によつて研究せられたることは、書中屢〻「疏曰」の文字を冠して表はさるゝ部分によつて之を知るべし。更に先生が一の書籍に引用せられたる部分によつて暗示を得たる時、原本の存する限り忠實に其の原本について精緻なる研究を遂げられたる一例を擧げんに、「膾」の考證に於て四書圖解によつて禮記少儀に膾と菹（酢漬の蔬菜果實若くは麋鹿を材料としたる酢漬のもの。）と軒（大きく切りたる肉若くは野豕を料理したる肉。）との區別を示すものあるを知り得たる時（四四頁參照。）別に陳氏集說の註を參照して其の委曲を研究し、更に陳註によつて禮記內則に參考とすべき資

料存するを知るや直に其の部分につきて內則の本文及び註を參照し、以て全體を明瞭ならしめたるを見る。卽ち少儀によれば牛と羊魚との生肉を聶して之を切るを膾と名づけ、麋鹿を材料としたるものを菹と名づけ、野豕を材料としたるものを軒と名づく。後の二者は聶するだけにて切らずと見えたり。陳註に曰く、聶して之を切るとは、薄く肉を切るを聶といふ。薄く肉をそいで大きなる切身となし、後に之を合せて細く切り以て膾となす、禮記內則には更に之を區別して細き者を膾となし、大なるものを軒となすと示されたりと。是に於て先生は陳註の示すところによつて更に內則及び其處の陳註を探つて細き筋目に切るものを膾となし、大片に切るを軒となすを確め得られたるもの丶如し。とにかく先生が一事の研究に當つては、飽く迄徹底して眞に自己の血となし肉となさずば已まず、換言すれば學は及ばざるが如くするも、猶之を失はんことを恐るゝの態度を持せられたるを見るべし。

次に先生が如何なる種類の註疏本を用ひられたるかを見るは興味ある問題なり。今日藤樹書院其の他に於て一として先生の手澤本と斷ずべき書籍を藏するものなし。此は嗣子常省先生が江戶に在りて火災に遭はれたる事あれば、或は其の時燒失したるものなるべし。初め編者は先生が難解の儀禮註疏を讀解抄錄せらるゝに於て極めて要領宜しきものの存する點より推して、或は先生が內容の比較的明瞭に示されたる朱子の經傳通解に據られたるに非ざるかを疑ひたり。然れども先生が主考の終の部分聘禮記中の疏の文を引用せられたる處に（二八頁參照。）

繅者皆蒙。水草之文。天子五采。公侯伯三采。子男二采。皆是雜采也。

と見ゆるに、（岡田氏本篠原氏本皆然り。）通解にありては、蒙は象となり、采は色となりて、先生の用ひられたる本

と一致せず。又

木版大小。一如玉制。然後以韋衣包之。

と見ゆるもの、通解にありては包の字を缺けり。これ先生が通解を底本とせられざりしを知るに足る。其の他儀禮正經の取捨の方法特に文段の分ち方等に於て通解本を利用し若くは參考せられたりと思はるゝ節一として之れ無し。特に疏の文に鄭注を引いて説明を加へたる部分、例へば

云以韋衣木版飾以三色再就者。依漢禮器制度而知也。

云繫無事則以繫玉。因以爲飾者云々

の如き部分、通解には全然之れ無きに拘らず、先生の引用文には此等の文字全部記入せらるゝ點より考ふれば、直接註疏本より引用し來りしことを知り得べし。

然らば先生の用ひられたる註疏本は果して何本なりしか。編者の見る處をして誤なからしむれば、此は明の御史李元陽刊行の註疏本卽ち閩本なりしものなるべし。今鄉黨啓蒙翼傳に引用せらるゝ聘禮及び鄉飮酒禮の文を精査するに、第一に注意すべきは、前掲疏の文の末尾の部分に「繅耤」の文字見ゆること是れなり。岡田氏本も篠原氏本も倶に繅耤に作り、汲古閣毛氏本が褋耤に作れると同じからず。今阮元の校勘記に據れば、毛本に見ゆる褋耤の二字を前記の繅耤に作れるものは單疏本と陳本と閩本と要義本との四種なり。されば先生の用ひられたる註疏本は此の四種の内の何れかならざるべからず。然るに同じ疏の文中別に「繅者皆蒙水草之文」と見ゆ。（此點岡田氏本篠原氏本皆同じ。）校勘記によれば、此の中の蒙の字の使用は諸本異なり。而して前記四本の中單疏と要義とは倶に蒙の字を象の字に作れるより見れば、

先生の用ひられたるは此の二書を除きたる陳　閩二本の中の何れか其の一ならざるべからず。因みに阮元は此の部分は象に作るを正しとすれば、先生が特に象の字を蒙の字に改められたりとも想像するを得ざれば、何れより言ふも先生の據られたる原本が既に象の字に作られたるものなりしを想像するに足る。次に問題となり得るは此の文字と前後して以章衣木版の句中の版の字の吟味是れなり。但し此の字は底本に採りたる篠原氏本は版に作り、岡田氏本は板に作れり。今之を校勘記に徴するに版に作れるは陳本のみなれば、篠原氏本を據として考ふれば先生の用ひられたる書は陳本となり、岡田氏本を據として考ふれば前記二者の中の殘れる閩本となつて、何れが正しとも今は決定するを得ず。轉じて鄕飮酒禮の部分を檢するに第二大段旅酬に先だつて歌樂作るの條下、升つて歌ひ三終し及び工に獻ずる處に、(六三頁六四頁參照。)遂授瑟の文及び辨有誧醢の文見ゆ。篠原氏本も岡田氏本も此の點一致すれども、毛本等諸多の書が遂を送に辨を辯に作れると同じからず。而して先生が此の兩字遂と辨とを用ひられたると一致せるは、唯閩本のみにして、陳本の載する所は毛本と一致す。特に辯の字を辨に作れるは唯閩本あるのみなる上に、同文中辨の字は數ヶ所に亙りて此の字のみ用ひらるれば偶然の誤寫なりと見るを得ず。是れ編者が先生の用ひられたる註疏本は必ず閩本たりしに相違なしと斷ずる所以なり。更に前掲篠原氏本と岡田氏本とによつて其の載する所異れる版及び板の文字は、先生の用ひられたる閩本が板に作れる點より推して、岡田氏本を以て原作の眞を傳ふとなさゞるべからず。

四

委員小川氏の藏有に係り表紙に藤樹先生著鄕黨翼傳、筆者未詳と書かれたる寫本一冊あり。題簽な

けれども、前に述べたる考證の結果より推して、此は鄕黨啓蒙なるを知ると共に、筆寫内容たる本文を見、特に該書の末尾に見ゆる朱書に係れる四書啓蒙論語翼傳五終の十字を見れば、岡田氏本の啓蒙の部分を筆寫しつゝ猶翼傳の二字を削除するを忘れたるを知る。（但し最後の紙の裏に翼傳の部分一頁附せられば、つゞいて翼傳をも筆寫せんとしたるものなるやも測り難し。）

對校に供したる材料としては全書岡田氏本一冊と前記小川氏藏有の寫本一冊あるのみ。前に述べたる寛保の印本あれども參考とするに足らず。且つ既に篠原氏によりて對照註記せられたれば、今重ねて校合するの要なし。但し此の印本と篠原氏本とは體裁大に異なり。兩者共に翼傳のみとなす點一致すれども、印本は啓蒙に當る部分を上卷とし、翼傳に當る部分を下卷本末に分冊すれども、篠原氏本は啓蒙に當る部分の下に翼傳に當る部分を割り書きせり。更に岡田氏本は此等二本とも亦其の體裁を異にすること後に述ぶる所の如し。何れが先生の手稿に近きものなるかを審にするを得ず。而して岡田氏本にあつては此の書中に追記を豫想して未だ完了せざるものあり。特に挿圖に於て然りとす。されば、此を底本とするを得ざれども、岡田氏本を參照して始めて其の眞意を明にするを得たる部分極めて多ければ、一々之を頭注に附記しおきたり。今岡田氏本の概要を記すれば左の如し。

(一) 卷首題簽なし。唯鄕黨第十の四字標記せらるゝのみ。

(二) 鄕黨本文と啓蒙の部分は大字にして下欄にあり。句讀點あり。訓點あり。

(三) 註證・考註證及び時處位考は共に小字にして上欄にあり。句讀點あれども訓點なし。

(四) 挿圖（題字の下の空は追記を豫想して未だ圖の記入を了せざるもの、×印は篠原氏本に無きところなり。この圖は明人吳繼仕編四書節解圖考若くは同余應虬編四書翼經圖解に見ゆる如きものならんか。）

×1 朝 (空)(題字なし。篠原氏本此の圖の存すべきことすら示さず。下×印の處も亦同じ。)
2 爲君擯相圖
3 周官九命圖
4 公門
×5 在朝之容 (篠原氏本此の圖を缺く。但し志村竹涯之を追記せるものあり。)
×6 棖闑之圖 (空)
×7 ? (空)(題字もなし。按ずるに圖考・圖解並に次扆制圖あり。皆補はんとして未だ果さゞりしか。)
×8 ? (空)(圭考の文中空白あり、題字もなし。或は六瑞の圖をおかんとしたるものか。)
×9 ? (空)(衣裘考の文中空白あり。題字もなし。)
×10 羔裘・褐裘・狐裘・表裘・褻裘 (空)
×11 奉佩圖・佩玉之圖 (空)
×12 帷裳之圖・常服・帷裳圖・裁腰齊法 (空)
13 朝服圖 (空)
14 朝紳圖 (空)
15 斬衰冠經之圖 (空)
16 ? (空)(底本齊衰冠經之圖の位置に相當す。)
17 斬衰要經・絞帶之圖 (空)
18 斬衰苴杖菅屨之圖・齊衰杖履(屨の誤)圖 (空)
19 衰衣前圖・衰衣後圖 (空)
20 小功要經・緦麻要經 (空)

(五) 卷尾の標目に四書啓蒙論語翼傳五終の十字あり。

(六)　岡田氏本に在りては鄕黨篇の正文を掲げずして正文の章と條とを區別して其の標目のみを載す。此鄕黨篇を大觀するに便利なると共に、又以て先生の讀書法を見るに參考となるべきを以て茲に表記す。先生の讀書法については卷之十四中庸續解解題六項參照。

鄕黨第十

孔子於鄕黨節

其在宗廟朝廷條

朝與下大夫章（章は節の字の誤、小川氏本同じ、小川氏本大夫の下言の字あり。）

君在條

君召使擯章（章は節の字の誤、小川氏本同じ。）

揖所與立條

趨進翼如也（全文を掲げたる時は條の字を附せられず。下同じ。）

賓退條

入公門節

過位條

攝齊升堂條

出降一等條

執圭節

享禮條

私覿條

君子不以紺緅飾節

　褻裘條

　去喪條

　羔裘條

齊必有明衣節

食不厭精節

　食饐條

　肉雖多條

　沽酒條

　不撤薑條

　不多食條

　祭於公條

　食不語條

　雖疏食菜羹瓜條

席不正節

鄉人飲酒節

　鄉人儺條

問人於他邦節（他小川氏本佗の字に作る。）

　康子饋藥條

廐焚節

君賜食節

侍食於君條

疾君視之條

君召條

入太廟條（太小川氏本大の字に作る。此の條朱子は重出さのみ註記したるに止れども、先生は孔子事君のことに特に意味ありさし其の意義を詳述せらる。）

朋友死節

朋友之饋條

寢不尸節

見齊衰條

凶服者式之條

有盛饌條

迅雷條

升車條（此の點朱子の分節法を改められたるを知る。爲に朱子分節法の全體十七節は先生に在りては十六節さなれり。）

色斯擧矣節

曰山梁雌雉條

子路共之條

四書啓蒙論語翼傳五終（岡田氏本は初め四書啓蒙翼傳圖考卷之六終に作り、後啓蒙の下に論語の二字を挿入し、圖考卷之六を抹殺し六の上に五の字を改書したる形迹あり。何れも季誠氏の自筆なり。）

凡例

一、本卷は底本を篠原氏本に採りたり。

一、底本としたる篠原氏本の性質は解題に述べたる所の如し。又底本の註記に見ゆる原本及び北小路本二書の如何なるものなるか。今日之を知るに由なし。唯志村竹涯が篠原氏本に朱書追記したる本巻の部分に書院本の名を示すものあり。今日に傳はらざれども、篠原氏は或は本巻の編纂に際して、當時現存したる書院の藏書を底本となしたるものなるべきか。今編纂上の處理を略述すれば、

(一) 正文啓蒙と小字註證又は考註證との排列は全部原形に從ふ。これ岡田氏本は前述の如く不備の處多く、且つ上下兩段に分つことは印刷上の不便尠からざればなり。

(二) 底本句讀なし。今悉く之を附す。訓點あれども、極めて不備なるを免れず。今その足らざるを補ひ、且つ其の誤れるを訂す。

(三) 翼傳中文段を示す爲に「」を施したるは理解を助くる爲に編者の新に加へたるものなり。儀禮より引用したる部分の如き、之によつて底本の不備を批正し得たるもの多し。

(四) 諸處に頭注あり。悉く採入す。但し此等には凡て〇印を附して編者の新に加へたる註記と區別す。

(五) 本巻中の小字考註證等は凡て藤樹先生躬づから本書啓蒙正文の語句の解釋又は出典を示されたるものなり。今新に正文中の文字に星印を附して後に此等に對する註記の存することを示す。

一、本巻の編纂上、明人余應虬編四書翼經圖解を參照する必要の生じたる時、畏友京都大谷大學教授青木晦藏君は東京大東文化學院教授內田遠湖氏所藏本の借覽方斡旋の勞を執り、且つ本巻を通讀して種々有益なる忠言を與へられたり。記して謝意を表す。

昭和三年戊辰五月二十五日　加藤盛一謹識

〔再刊補遺〕

一、湖東岡田家傳來の書に「四書啓蒙論語郷黨翼傳全」一冊あり。體裁岡田氏本と全然一致す。對校するに岡田氏本と出入するものなし。唯題簽一紙儼として存するあり。初版の時、編者が苦心考證して書名を改めたるもの、今之に徴して、其の謬らざりしを立證するを得て愉快に堪へず。

二、先生の讀まれたる十三經注疏本が閩刻なるの結論は確乎不動なれども、論證の方法、初版解題の記述を改むべきものあり。委細は拙稿「中江藤樹と十三經注疏」を參照せられたし。

三、先生の手澤本に就いて、全集發行以後二種現存するを知り得たり。一は毛詩注疏十冊にして一は小川家傳來永正古鈔に係る大學の一書是なり。前者については前記「中江藤樹と十三經注疏」、後者については藤樹研究第四卷第二號京都だよりを參看あれ。（藤陰）

藤樹先生全集 卷之八

經解成書 四

論語鄉黨啓蒙翼傳

○年譜、寬永己卯秋。先生講論語。至鄉黨篇。有所發明。欲爲之解。遂起草。自鄉黨篇至先進首。寢疾卽止。後自以爲多不愜心。卽此書也。按全書目錄。又有鄉黨啓蒙。余歷訪之。竟不得覩。或云。啓蒙疑乃考註證也。未知是否。

此書舊名論語鄉黨翼傳。岡田氏本則卷首不著舊名。但末尾有四書啓蒙論語翼傳終十字。按下文考註證予嘗欲啓童稚之蒙、故分別心迹說。乃斥是書本文。非關小書考註證與註證也。又先生所著孝經啓蒙云、字義詳解見於翼傳。可知此書亦有啓蒙及翼傳、與孝經同。但孝經啓蒙與翼傳分而爲二。此書則啓蒙爲本文。翼傳則爲考註證及註證。故今改曰論語鄉黨啓蒙翼傳。
〔益田本題簽有四書啓蒙論語鄉黨翼傳十字。是以宜知岡田氏本之殘闕題簽一紙。〕

鄉黨第十

鄉黨一篇、畫出夫子德光之影迹、以開示所以后學求得聖心之筌蹄。蓋明德本無方無體。無聲無臭。是以極高明。道中庸之聖心。不能布之方策。故唯描畫影迹、以寓聖心於其中。學者宜期至善而不襲其迹、得聖心以

爲師範矣。【註證】莊子曰、荃者所以在魚、得魚而忘荃、蹄者所以在兎、得兎而忘蹄、言者所以在意、得意而忘言、吾安得夫忘言之人、與之言哉。○易曰、神无方而易无體。○詩曰、上天之載、無聲無臭。○中庸曰、極高明而道中庸。註曰、自其不屈于物欲、而無所汙雜者言曰高明。自其不涉于詭異、而爲衆人所同得者言曰中庸。極即用極之極。道即率由之道。【訓詁】方木版、策竹簡。古者書記削木編竹也。○描負鑣切。畫也。○首記在鄉黨宗廟朝廷言貌之不同、而爲時中之凡例。中記威儀衣服飲食之節、皆是時措之宜也。終以時哉時哉一句、結之。愼思而體認則聖之時。宛然如在目也。君子時中。學者時習之微旨。躍如於章句之外。宜潛玩。【註證】孟子曰、孔子聖之時者也。○中庸曰、君子之中庸也、君子而時中。註曰、君子戒愼恐懼、即不睹不聞。莫見莫顯。無須臾之不中。未發已發、總只是中。時々而中。不著擬議。○孟子曰、君子引而不發。躍如也。註、躍如猶踊躍而出也。【訓詁】凡例。左傳序、其發凡、而起例。○宛然猶彷彿也。○聖經悉是無言之敎也。鄉黨一篇其景象最爲分曉。夫子嘗曰、吾無行而

㊀【註證】岡田氏本於作（疏）中作【註證】以後同。又皆在鼇頭。

㊁【訓詁】岡田氏本初無此二字。凡在（疏）中。中葉有此二字。而在（疏）又【註證】後皆在鼇頭。

㊂負鑣切岡田氏本作音苗。

㊃【註證】孔子上岡田氏本有伯夷聖之淸者也。伊尹聖之任者也。柳下惠聖之和者也二十二字。

㊄○按而起當作以言例三字。

㊅起下底本無例字。據岡田氏本補。

、【考註證】岡田氏本始終不見此二字。而多在疏・註譜前。皆在鼇頭。
㊁事下有字底本作者。改從岡田氏本。
㊂遠近岡田氏本皆作遠邇。
㊃()昏甲本作皆。非是。
㊄四書翼釋圖解。明余應虬編十九卷。
㊅孔子於鄉黨以下本文岡田氏本作孔子於鄉黨節。不揭全文。下同。

不與二三子者是丘也。是以孔門諸子謹書而備錄之。可謂善學者也。

【註證】子曰。予欲無言。子貢曰。子如不言。則小子何述焉。子曰。天何言哉。四時行焉。百物生焉。天何言哉。愚按無言者無聲無臭之道眞。不涉言詮之意。纔涉言詮。則非聖道之本眞。○子曰。二三子以我爲隱乎。吾無隱乎爾。吾無行而不與二三子者。是丘也。

○㊀【考註證】集註曰。聖人之所謂道者。不離乎日用之間也。故夫子之平日。一動一靜。門人皆審視而詳記之。大全曰。聖人之道無精粗。無本末。大至于平天下治國家。立經陳紀。制禮作樂。小至于容貌辭色。一動一靜。皆自此廣大心中流出。但愈細則愈密。愈近則愈實。故鄉黨一篇記聖人之容貌辭色。如是之詳且悉者。正所以示聖學之正傳。以垂教于後世。愚按事㊁有遠㊂近高卑。而道無遠近高卑。故道中庸。則遠近高卑。事都高明。所謂不離日用常行內。直造先天未畫前。不道中庸。則遠近高卑。事都㊃昏迷庸劣。鄉黨所記便是堯舜事業也。必不可以近邇看焉。○程子曰。鄉黨分明畫出一箇聖人。㊄圖解曰。鄉黨一篇天然一幅聖象。皆渾淪說。無心迹之辨。予嘗欲啓童稚之蒙。故分別心迹說。

孔㊅子於鄉黨。恂々如也。似不能言者。

鄉黨生於斯。長於斯。父兄宗族聚於斯之地也。聖人於此

㊀倣岡田氏本作做。下皆同。
㊁註謂圖解也。
㊂岡田氏本絲欄外注曰。集覽曰。〔膠柱鼓瑟〕按史記趙王以趙括代廉頗云々。〔刻舟記劍〕列子說特篇、古人墜劍水中。刻舟求之。
㊃標目岡田氏本作其在宗廟朝廷條。以下倣之。

*至德全體已發露。猶草木之萌芽於春。是以威儀辭氣朴茂無華。擬其狀。恂々如也。謙卑遜順。不以賢知先人。有似於不能言者。此乃所謂德光之影迹也。學者宜於此嘿識無言之端的。而體認之於吾心。是乃務本。本立而道生之大義也。若徒依倣景象。而不能嘿識聖心之本眞。心印本作人。則豈免膠柱*之固乎哉。下皆倣㊀此。

【註證】孝經曰。先王有至德要道。以順天下。民用和睦。上下無怨。○辭言語。氣聲氣。不專指言語。乃發言時之氣象。○子曰。默而識之。㊁註。默識是從睹聞不交之地。聲臭俱泯之中。嘿證嘿悟者也。○邵伯溫曰。天下之理。一涉于事物。則必有迹。有迹則有方所。若聖人之心。則無所在。亦無所不在。無方所者也。徒狥聖人迹。而不達聖人之心。是皆膠柱鼓瑟。㊂刻舟記劍者也。

㊃其在宗廟朝廷。便々言。唯謹爾。

宗廟禮法之所在。朝廷政事之所出。言不可以不明辨之

㊀○大全印本作二胡氏一。

㊁無上岡田氏本有二又字一。

地也。【考證】㊀大全曰、在宗廟而明辨、則可以識制度文物之精微、升降揖遜之委折、在朝廷而明辨、則上之所布者、不悖于理、下之所受者、不被其害。聖人於此至德既暢達、猶草木之暢茂於夏、是以恂々如也。似不能言者之詞氣暢達、而纖*悉是非、必極其明、且盡然愛敬之至德、渾*然而在、故擬其狀、便々言、唯謹爾。便々與唯謹非兩截、唯謹在便々之中、恐人不識得透、而下添此一句、耳言辭雖暢達明盡、而不離于似不能言者之至敬也。【訓詁】纖、思廉切、細微㊁也。悉詳盡也。○渾然全也。無圭角貌。

鄉黨全篇明聖之時、故首一節、發夫子時中之妙、以爲義例、玩味於字其在字、而可以見時中之義。蓋中者全體大用之神*理也、隨時而感通、與先*天未畫之前合。此之謂時

中凡經濟之所遇。謂之時。有天地人之三境。曰時。曰處。曰位也。天包得地與人。故擧時以包處與位也。曰鄕黨。曰朝廷。曰宗廟。擧處而時與位在其中矣。曰恂々。曰便々。卽是明德之感通。發見于言貌之中庸也【註證】陳白砂㊀曰。神理爲天地萬物主本。長在不滅。人不知此虛生浪死。與草木一耳。〇先天未畫之前。指天地未分㊁之先。大虛元神。及明德未感之前。寂然不動之神明而言。鄕黨非家庭。於鄕黨恂々。家庭之五備。不言而可知矣。孝經曰。夫孝德之本也。敎之所由生也。又曰。夫孝始於事親。中於事君。終於立身。此篇先擧鄕黨。次擧朝廷宗廟。次及威儀衣服飮食。是乃境遇之序。倣孝經者也。愛之極爲敬。恂々如也。便是至敬無文之意。篇中便々言。唯謹爾。侃々誾々踧踖㊂等。踖下

㊀〇砂當作沙。岡田氏本作沙。

㊁〇分下印本誤脫之字。

㊂踏下岡田氏本亦有如字。

㊀圖解上岡田氏本有二「鄕黨全旨節」五字一。

㊁註謂二陳澔集說一也。下倣レ之。

㊂旋岡田氏本誤作レ裘。

原本有二如字一。皆恂々如至敬之感通經濟也。是乃孝者德之本。敎之所由生也。【考註證】圖解曰。常人於二父兄宗族前一誇二逞才辨一。而一遇二當場大禮大功所一レ在。一籌不レ能レ展。聖人則恂二嘿于鄕黨一。而大能發二抒于宗廟朝廷一。可レ見。語嘿無レ非二天則一。【註證】五備、孝經曰。孝子之事レ親也。居則致二其敬一。養則致二其樂一。病則致二其憂一。喪則致二其哀一。祭則致二其嚴一。五者備矣。然後能事レ親。○記禮器曰。至敬無レ文。父黨無レ容。註曰。敬之至者。不三以レ文爲二美。如三祭レ天而服二黑羔裘一。亦是尚二質素一之意。折旋揖讓之禮容。所三以施二於外賓一見二父之族黨一。自當下以二質素一爲上禮不レ爲レ容也。

孟子曰。君子所性。仁義禮智根二於心一。其生レ色也。睟然*見二於面一。盎二於背一。施二於四體一。四體不レ言而喩。言聖人之威儀衣服飮食之天則。不レ思而得。不レ勉而中。非レ出二于擬議度量一也。【註證】孟子註曰。睟然者清和潤澤之貌。卽所レ謂德容自清溫也。盎者豐厚盈溢之意。豐厚寬大而厚重也。盈溢從容有二餘裕一也。施二於四體一者。著二于動作威儀之間一。四體不レ言而喩者。無レ所二安排一。動中二天則一。*所レ謂嘿而成レ之者也。詩曰。不レ識不レ知。順二帝之則一。【註證】詩大雅皇矣之篇。按鄕黨父兄宗族之所レ在。故如レ此。宗廟禮法之所レ在。朝廷政事之

所出。故如此等說。只是後儒推說其所以合于天則之義而已。夫子非謂有此心而爲此威儀也。下皆倣此。

○朝與下大夫言。侃々如也。與上大夫言。誾々如也。

此節以明在朝之敬。首著一朝字。頗重。明非私家之交會。吾夫子當君未視朝。諸大夫皆在之時。與下大夫言則其辭氣直遂而和樂。侃々如也。所謂威而不猛之一端也。下大夫位不尊。故應接之德光。自然如此。與上大夫言。則其辭氣和悅。而雖不直遂。而不至於曲從。必盡其道。而誾々如也。所謂溫而厲之一端也。上大夫分尊于己。故其事長之德輝。自然如此。以上君未視朝之時也。

㊀以下時處位考岡田氏本皆在章頭。而多在統・註證前・考註證後。

㊁【註證】以下十三字底本無。據岡田氏本補之。

㊂鄭氏說見周禮秋官朝士註。

朝擧處而包時㊀與位。章中時之綱也。下大夫君在擧位而包時與處。侃々剛而帶和。誾々和而帶剛。踧踖與々。恭而安。不偏剛。亦不倚和。恭不過其則。所謂中也。於下大夫則藏和于剛。於上大夫則藏剛于和。聖神自然之感通。無一毫之差忒。止於至善之妙。最可熟玩。㊁【註證】子溫而厲。威而不猛。恭而安。

【朝考】天子四朝。一爲外朝。在皐門內。有三槐九棘之位。進爲庫門。有三府九寺。左宗廟。右社稷。廟社之間。有詢事之朝。又進爲雉門。有百官宿衞之廨。又進爲應門。是爲中朝。東有九卿之臺。又進爲路門。爲內朝。卽路寢之朝。本四朝而恒曰三朝者。詢事之朝。非常朝也。諸侯無皐門應門。其庫門卽大門。其雉門卽中門。其路門卽內門也。內門三與天子同。㊂鄭康成之說如此。

【大夫考】王制天子三公・九卿・二十七大夫。大國諸侯與次國皆三卿・下大夫五人。小國二卿・下大夫亦五人。天子之卿爲上大夫。惟天子之大夫有中。周禮六卿之副皆中

大夫也。侯國之卿。亦是中大夫。其餘大夫比卿爲降。皆稱下。故諸侯之大夫無稱中者。卿對下大夫稱上耳。左傳㊀荀庚聘衛。衛人欲尊之曰。次國上卿當大國之中。中當其下。下當其上大夫。小國上卿當大國下卿。中當其上大夫。下當其下大夫。此媚晉人之權詞耳。大國三卿。司徒兼冢宰。司㊁馬兼宗伯。司空兼司寇。左傳曰。㊂季孫爲司徒。叔孫爲司馬。孟孫爲司空。

君在踧踖如也。與與如也。【考註證】大全曰。此君在位之時。在朝在廟。燕見皆然也。君在則天威*儼然。聖人於此愛敬之至德。睟然見於面。盎於背。施於四體。而威儀中適。不過其則。*從容*自得。不出於勉强。故踧踖如也。與與如也。踧踖之外。非有與與。所謂恭而安之一端也。【註證】君者臣之天也。而其勢嚴威。故曰天威㊃。〇從容和緩貌。〇自得是心與道爲體。道與身安。自然得其自天自性之謂。

〇君召使擯。*色勃如也。足躩如也。躩印本作躍。誤。

這章㊄君召兩字。是一篇之綱領也。賓主交際。內而國*體係。

㊀按左氏傳成公三年荀庚・良夫來聘。荀庚聘衛恐誤。
㊁〇馬下兼字、印本作當。非是。
㊂季孫云々左氏傳昭公四年文。後司馬岡田氏本誤作司寇。
㊃天威下岡田氏本作〇儼然儼亦作嚴。有威重之見十一字。
㊄章岡田氏本同。恐當作節。

輕重外而隣君視敬忽。此重事也。故孔子一承君命。即儼如對君。恐已失禮于吾君。即吾君失禮于隣國之君也。是以變其夭々如。而勃如也。改其常步。而足躩如也。皆是移恂々而所以事君至敬存於中。而容色變於外者也。印本無而字。非是。

勃如躩如。承命之初。禮未行。而敬已至矣。下文襜如翼如。節々皆自此至敬之中。而造化出來。【註證】國體者。禮樂刑政之於國。猶人之有四體。故曰國體。又曰朝廷統體。○子之燕居。申々如也。夭々如也。註曰。夭々其色愉也。【訓詁】儼恭莊貌。

君召使擯。擧位而包時與處。揖所與立。趨進。賓退。擧時而包處與位。曰勃如。曰躩如。曰襜如。曰翼如。曰復命。便是時措之宜。所謂中也。按自始至終。動容周旋。無不中

禮所謂四體不言而喩。造次顚沛。必於是。譬如化工之賦形與生不遺螻蟻。於是聖人與天地合其德。亦可觀

揖所與立。左右手。衣前後襜如也。

此條及賓至而君迎行禮之時也。爲擯傳命之際。手雖動。而身容肅。衣服整齊而襜如也。

趨進。翼如也。

這條賓主相見之后。主君迎賓而入之時也。此時趨進以執役。足容雖疾。手容自恭而翼如也。

賓退。必復命曰。賓不顧矣。

此條賓退而就館。主猶佇立以待賓顧之時也。此時恐君

○印本無其字。非是。
㊁○大門下原本有之字。印本有也字。皆非是。
㊂○丈印本作尺。非是。
㊃後闑西汪份以爲當作闑東。
㊄○二賓字印本作擯。非是。
㊅四書節解圖考十七卷序目一卷。明吳繼仕編。

致望之久。故必復命曰。賓不顧矣。所以抒其敬也。愛敬君之至。終始如一。*詩曰。心乎愛矣。遐不謂矣。中心藏之。何日忘之。【註證】詩小雅隰桑篇。孝經事君節。引此詩而結之。可以見敬忠之眞也。

【擯考】大全曰。周禮行人。上公九介。侯伯七介。子男五介。各隨其命數。賓次於大門之外。主人使擯者出而請事。卿爲上擯。大夫爲承擯。士爲紹擯。主國之君。公則擯者五人。侯伯四人。子男三人。各用㊀其命數之强半。下於賓以示謙也。若其傳命之制。賓立於庫門之外。卽大門㊁。直闑西北面。介者以次立於西北東面。每介相去三丈㊂六尺。主君出接立於庫門之外。直闑㊃西南面。擯者以次立於君之東南西面。每擯相去亦三丈六尺。末擯與末介相對。東西亦相去三丈六尺。主君命上擯請問來故。蓋雖知其來朝。不敢自許其朝己。恐其或爲他事而來。所以示謙也。上擯受君命而傳之承擯。迤邐傳至末擯。末擯傳至末介。末介以次繼傳上至于賓㊄。賓㊄命上介復命。復以次傳之擯。而達於主君。然後主君進而迎賓以入。○蔡氏模曰。賓主各有副。賓副曰介。主副曰擯。○圖考㊅曰。夫子當時爲次擯。末擯在其左。上擯在其右。揖左左其手。傳命出也。揖右右其手。傳命入也。

【九命考】周禮大宗伯。以九儀之命。正邦國之位。壹命受職。註曰。始見命爲正吏。謂列國之士。於子男爲大夫。王之下士亦一命。鄭司農曰。受職治職事。再命受服。註曰。此受

㊀非字岡田氏本同。周禮作亦字。

㊁○地上印本無則字。非是。

㊂於下岡田氏本脫諸侯二字。

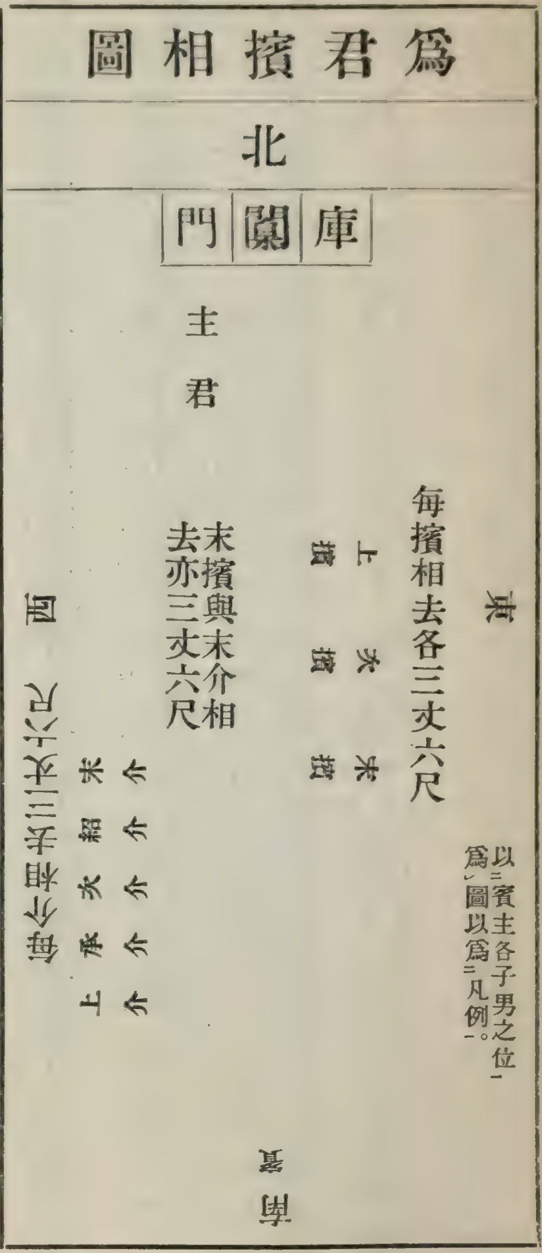
㊃○史印本作士。非是。

玄冕之服。列國之大夫再命。於子男爲卿。卿大夫自玄冕而下如孤之服。王之中士。非㊀再命。則爵弁服。三命受位。註曰。此列國之卿始有列位於王。爲王之臣也。王之上士亦三命。四命受器。註曰。此公之孤始得有祭器者也。王之下大夫亦四命。五命賜則。註曰。㊁則地未成國之名。王之下大夫四命出封加一等。五命賜之以方百里・二百里之地者。方三百里以上爲成國。六命賜官。註曰。此王六命之卿。賜官者。使得自置其臣治家邑。如諸侯。七命賜國。註曰。王之卿六命出封加一等者。出就侯伯之國。八命作牧。註曰。謂侯伯有功德者。加命得專征伐於㊂諸侯。一州二百一十國之諸侯。所謂列伯也。九命作伯。註曰。上公有功德者。加命爲二伯。得征五侯九伯者。○典命曰。上公九命。侯伯七命。子男五命。王之三公八命。其卿六命。其大夫四命。及其出封。皆加一等。公之孤四命。其卿三命。其大夫再命。其士一命。侯伯之卿大夫士亦如之。子男之卿再命。其大夫一命。其士不命。其國家宮室車旗衣服禮儀。皆各以命數爲節。○疏曰。王之府史㊃胥徒。皆官長所自辟除。未得王之命。○王介甫曰。公侯伯子男之命。以九以七以五。皆陽數。人君故也。公卿大夫之命。以八以六以四。皆陰數。人臣故也。自三命以上則已卑。故雖陽數。亦以命人臣。

此圖主君當₂闑西₁南面。岡田氏本同。與₂圖考圖解₁並作₂主君西南面₁者異。南上庑本脫₂賓字₁。而志村氏補。岡田氏本亦有。今從補。

此圖本多₂誤脫₁。×部据₂岡田氏本₁補。與₂圖考圖解₁異者。亦不ㇾ尠。四命上中下大夫。恐上字衍。○加印本作ㇾ如。非ㇾ是。

爲君擯相圖



周官九命圖

九儀	王×		
九命	上公		上公×一方之長 謂王之三公有功德者加命爲二伯。二王之後亦爲上公。
八命	三公×牧 一州之長		
七命	侯伯		
六命	卿	公侯伯× 卿出封	
五命	子男		
四命	上中下大夫	孤	子男
三命	上士	卿 卽上大夫	大夫出封
再命	中士	下大夫	卿 卽上大夫
壹命	下士	上士	下大夫
不命	府史胥徒	中下士	士

○入公門鞠躬如也。如不容立不中門、行不履閾。

此章㊀記在朝之容。故入公門。在朝之始。一章之綱領也。鞠躬如也。如不容者。至敬之施身體。身體不言而喩之景象。立則不敢中于門者。恐當尊而褻朝廷㊁之體統也。行則不敢履其閾者。恐不恪而踰朝廷之矩度也。已上皆是入公門之事也。去君雖遠。猶如見君。化工賦予不遺螻蟻之意。而動容周旋無不中禮。造次必於是。顚沛必於是者也。【考證】㊂蒙引曰。此節歷々有次序。始於入門。纔則及所立所履。進此則過虛位矣。又進則升堂矣。已則降堂以至復位矣。蓋自始至終。各中其節也。使擯執圭升車之類皆然。

曰入公門。曰過位。曰升堂。曰下階。曰復位。皆擧處包位。與時。曰鞠躬如。如不容。不中門。不履閾。曰色勃如。足躩

㊀章岡田氏本同。按當作節。

㊁○廷下恐脫之字。「之」底本無。今據岡田氏本補。

㊂四書蒙引十五卷。明蔡清撰。

㊀圖解岡田氏本誤作二大全一。

㊁於大全・岡田氏本並作レ如。

如其言似不足者。曰。鞠躬如屏氣似不息者。曰。逞顏色。怡々如。趨翼如。曰。踧踖如也。所謂中也。皆是一敬之流行時出之景象。譬如水之流行隨地而成形。敬本于愛。愛之極爲敬。一敬立而萬善從之。宜玩味。○㊀圖解曰。自入公門至復位。令他人處此。亦不得不敬。但不如夫子之從容。夫子看得門位堂階實是天顏霽臨。不問君在君不在君遠君近。認眞只是一敬。○大全曰。立不中門。避所尊也。行不履閾。行以度也。非獨入公門爲然。特㊁於此記之耳。

過位。*色勃如也。足躩如也。其言似不足者。

位是人君聽治之所。所謂外朝也。故君雖不在。而其敬如在。是以過之。則形于面者。勃如變其常。見于步趨者。躩如不敢寧。於議政之際。則敬有餘。而言如不足者。

攝齊升堂鞠躬如也。屏氣似不息者。

堂是人君臨莅之堂也。升堂圖解以爲想是朝儀已畢。命夫子升堂議事。或其然也。攝齊者。升堂威儀之則也。鞠躬如也。屏氣似不息者。誠敬之純至發于身體氣容之景象也。入門之地。雖遠君。而鞠躬如也。如不容也。近至尊之德光。誠可想矣。【考註證】大全曰。升則肅。降則舒。氣之有張弛也。○古者諸侯之堂七尺。尺一級。使裳之齊去地尺。則升階不躡之也。○攝齊者是畏謹。恐上階時蹈著裳有顚仆之患。

出降一等、逞顏色怡々如也。沒階趨翼如也。復其位踧踖如也。

這條及其見君成禮。而出下階。而復位之時也。出遠至尊。降一等則所屏之氣略舒。勃如戰色稍解。怡々如也。此謂比上文似不息者之至敬則有從容和氣之景象而已。非謂逞顏色而一於和悅也。沒階趨翼如也。行容之敬也。君在而就位。則常踧踖如。與々如。趨復其位。則敬亦復故。而踧踖如也。可包與々於踧踖之中而看。○圖解曰、自入公門至此。周旋中禮。變動不測。所謂順帝之則。從心之矩也。常人在朝。未嘗不敬。而從容中道。自然應節。惟聖人能之。

㊀踰矩下岡田氏本有○猶水之就下也六字。而無注解文。

㊁介岡田氏本作个。按儀禮鄉射記亦作个。釋文曰。个音幹。

㊂禮上岡田氏本脫圖解二字。

㊃斂。底本作飲。改從圖解。岡田氏本誤作飲。

愚謂常人之敬有始。而無終。故末稍便撒了。聖人則終始一於敬。猶水之就下也。【註證】從心之矩、子曰七十而從心之所欲。不踰矩。㊀

【公門考】門兩旁植木曰棖。兩扉相合處置橛、室扉曰闑。闑居中、往來出入由左右棖闑之間。君出入由左。出則闑東爲左。入則闑西爲左。蓋君自內南面出。以東爲左。反以西爲左也。臣民出入由右。出則闑西爲右。入則闑東爲右。蓋臣民自外北面入。以東爲右、退則以西爲右。儀禮設侯以東方爲右介㊁升堂北面亦然。出入不敢當棖闑中央。立則必傍棖闑。避君出入之道也。〇國有朝會、則君立于門屏之間、而卿大夫士之朝位。各列于門外之東西。故夫子入門之時、須過門屏之間、以就朝位。君猶未視朝、故曰虛位。

【升堂考】圖解㊂禮臣見君拜堂下。君命升乃升。如燕飲之類、卿大夫席皆在堂上。諸侯堂高七尺。每尺一等。升則以手收攝裳下邊、避足升也。既登堂則釋齊曲身而行。迫近君。則藏氣、斂㊃息。

㊀徹諸筆蹟。乃知此加書係士倫志村禎追記。西扉闑右底本作闑左。改從岡田氏本。上圖界線底本多誤。印本同。改從岡田氏本及圖解。下圖與圖解小異。

「扉右」從田本亦同。當改扉左。

岡田氏本別有空欄。題偏闕之圖。而無圖。又別有空欄。無題字。亦無圖。按考解並有次席制圖。皆欲補未果耶。

㊁○狀上印本無依字。非是。

㊂日上底本無亦字。據岡田氏本補。圖考有亦字。

公門

棖　東扉中君由此出爲扉左　闑東士大夫入爲闑右　立不中門	闑	闑西士大夫出爲闑右　西扉中君由此入爲扉右　立不中門　棖
行不履閾	閾	行不履閾

在朝之容

以入公門言鞠躬如也	敬之初
以過位言色勃如也	敬之至
以升堂言鞠躬如也	敬愈至
以降階言出降一等怡々如也趨翼如也	敬略舒
以復位言踧踖如也	敬復故

㊀書院本岡田氏本並有此圖。故加書此。

【位考】位。君之虛位。在門之內・屛之外。故謂門屛之間。入公門之門。是第一重大門。立不中門之門。是第二重大門。門屛間之門。是第三重門之內。所謂外朝。君宁立之處也。古者人君立而受朝。故曰宁立之處。曲禮下。天子當依而立。諸侯北面而見天子曰覲。天子當宁而立。諸公東面。諸侯西面曰朝。屛卽依也。依狀如屛風。以絳爲質。高八尺。東西當戶牖之間。繡爲斧文。亦曰黼依。

○執圭。鞠躬如也。如不勝。上如揖。下如授。勃如戰色。足蹜々

如有循。

儀禮聘禮曰。賓襲執圭，致命。公側襲受玉。蓋聘禮代君脩和。實盛禮也。故夫子一受君命，捧著命圭，則自頂至踵。手足頭面。都是君用。而都是至敬。故其敬形于躬。則鞠躬如也。如不勝。形于執圭之手容。則上如揖。下如授。形于顏色。則勃如戰色。形于足容。則蹜々如有循。○按聘禮之宗旨。全在脩和上。而以敬爲大本。蓋和者敬所溢也。樂者禮所生也。和不出于敬。則非眞實之和。始雖如和。而終必乖戾。下二節和睦而通情之景象。此條之至敬溢。而爲大和者也。

㈠輕重底本不重出而下無物之二字。今並據岡田氏本而補。

〔體、岡田本作時。〕

㈡兩所以訓點從岡田氏本所附。下倣之。

曰執圭、曰享禮、曰私覿、皆擧時而包位與處。鞠躬如不勝之敬溢。而爲容色愉々之和。譬如權衡之於輕重。輕重㈠因物而變。衡平不易。而物之輕重亦得其平。實體中之神妙。有不可言者也。體印本作時。

享禮有容色。

享禮所㈡以通君之情、也。私覿所㈡以通己之情、也。共是和以通聘問之情之時也。故上截之至敬溢。而爲發氣盈容之和而有容色矣。

私覿愉々如也。

既享而以私禮覿。則容色之和漸洋溢。而至敬融。而爲大

和和中有敬而愉々如也。○圖解曰、敬以盡禮、和以通情。四方無辱。其惟、吾㊀夫子獨能有是也乎。○集註圈外晁*氏之說、信史而疑經、不可用。大全馮*氏之辨、最爲穩當也。【考註證】問。私觀見于聘禮、孔子行之、而記禮者以爲非禮、何也。朱子曰、胡氏以爲若聘禮所記孔子所行者正也。當時大夫僭于邦君㊁。於是乎有庭實旅百如享禮。然則非正矣㊂。故記曰、庭實旅百何爲乎諸侯之庭。此說是也。【註證】集註晁氏曰、孔子定公九年仕魯、至十三年適齊。其間絕無朝聘往來之事。疑使擯執圭兩條、但孔子嘗言其禮當如此爾。大全厚齋馮氏曰、據左氏史遷所載、恐不無軼事。是書出于門人之親記。焉得而疑之。

【聘禮考】儀㊃禮曰、聘禮。君與卿圖事、遂命使者。使者再拜稽首辭。君不許。乃退。既圖事、戒上介亦如之。宰命司馬戒衆介。衆介皆逆命不辭。宰書幣。命宰夫官具。及期夕幣。使者朝服。帥衆介夕。管㊄人布幕于寢門外。官陳幣。皮北首西上。加其奉于左皮上。馬則北面奠幣于其前。使者北面。衆介立于其左東上。卿大夫在幕東西面北上。宰入告具于君。君朝服出門左南鄉。史讀書展幣。宰執書告備具于君。授使者。使者受書授上介。公揖入。官載其幣、舍于朝。上介視載者所受書以行。厥明賓朝服釋幣于禰。又釋幣于行。遂受命。上介釋幣亦如之。上介及衆介俟于使者之門外。使者載旜、帥以受命于朝。君朝服南鄉。卿大夫西面北上。君使卿進使者。使者入。及衆介隨入。北面東上。君揖使者、

㊀吾圖解作我。

㊁○君原本作國。非是。岡田氏本亦作國。

㊂○矣印本作乎。非是。

一、命使。

㊃○按此考即儀禮聘禮文。其間似有連數句脫落者。乃先生有意刪之。非有誤也。」

二、授幣。

㊄○管舘同。外上印本有之字。非是。

三、將行。釋幣告禰與行。

四、受命遂行。

五、過邦假道（略）
㊀（ ）切中本作始、非是。
六、肄習威儀。
七、至竟迎入。
㊁○問上關人二字。今補足。
關人岡田氏本重出。
八、入竟展幣。
㊂○斂上入竟二字。今補足。
入竟二字岡田氏本亦重出。
九、郊勞。
㊃（ ）展幣間原本有馬字。非是。
㊄上介出請入告六字岡田氏本無。
㊅（ ）二于字作於。皆非是。今從本經。岡田氏本亦作於。
十、致館設飧。
㊆○左字今補足。岡田氏本有。
十一、聘享。
㊇大夫帥至于館六字岡田氏本無。
（一）賓至朝。
（二）迎賓。
（三）行聘禮。
㊈○几筵既設一句。今補足。
岡田氏本亦無此一句。
㊉擯者入告出辭玉。納賓、賓十字岡田氏本無。
（四）享禮。
⑪○擯者退中庭五字、及擯者進公四字。今補足。

進之、上介立于其左。接聞命。賈人西面。坐啓櫝取圭、垂繅。不起而授宰。宰執圭屈繅。自公左授使者。使者受圭同面、垂繅以受命。既述命。同面授上介。上介受圭屈繅。出授賈人。衆介不從。受享束帛加璧。受夫人之聘璋。享玄纁束帛加琮。皆如初。㊀遂行舍于郊。斂旝。禾入竟。壹肆為壝壝。畫階帷其北。無宮。朝服。無主無執也。介皆與。北面西上。習享。士執庭實。習夫人之聘享亦如之。習公事。不習私事。及竟張旝誓。乃謁關人。關人問㊁從者幾人。以介對。君使士請事。遂以入竟。入竟斂㊂旝乃展。布幕。賓朝服立于幕東西面。介皆北面東上。賈人北面坐拭圭。遂執展之。上介北面視之。退復位。退圭。陳皮北首西上。又拭璧展之。會諸其幣加于左皮上。上介視之。退。馬則幕南北面。奠幣于其前。展夫人之聘享。亦如之。賈人告于上介。上介告于賓。有司展群幣以告。及郊又展如初。及館㊃展幣於賈人之館如初。賓至於近郊張旝。君使下大夫請行。反。君使卿朝服用束帛勞。㊄上介出請入告。賓禮辭迎㊅于舍門之外。再拜。勞者不答拜。賓揖先入。受㊅于舍門內。勞者奉幣入。東面致命。賓北面聽命。還少退。再拜稽首受幣。勞者出。賓用束錦儐勞者。夫人使下大夫勞。賓之受如初禮。儐之如初。下大夫勞者遂以賓入。至于朝。主人曰。不腆先君之祧。既拚以俟矣。㊆賓曰。俟間。㊇大夫帥至于館。卿致館。賓迎再拜。卿致命。賓再拜稽首。卿退。賓送再拜。宰夫朝服設飧。厥明訝賓于館。賓皮弁聘。至于朝。賓入于次。乃陳幣。擯者出請事。公皮弁迎賓于大門內。大夫納賓。賓入門左。公再拜。賓辟不答拜。公揖入。及廟門。公揖入。立于中庭。賓立接西塾。㊈几筵既設。擯者出請命。賈人東面。坐啓櫝取圭垂繅。不起而授上介。上介不襲。執圭屈繅授賓。賓襲執圭。㊉擯者入告出辭玉。納賓。賓入門左。介皆入門左。北面西上。三揖至于階。三讓公升二等。賓升。西楹西東面。⑪擯者退中庭。賓致命。公左還北鄉。擯者進。公當楣再拜。賓三退負序。公側襲受玉于中堂與東楹之間。賓

岡田氏本亦無兩句。進下無公字。蓋先生有意刪之。
(一)○內攝之入設也六字。今補足。岡田氏本亦無。
(二)請事下當有賓告事畢四字。
十二、主禮賓。
(三)○印本三作二。擸作徹。非是。
(四)降拜公辭四字岡田氏本無。
十三、私覿。
一、賓私覿。
(五)稽首下岡田氏本無擯者辭賓出五字。今據岡田氏本補之。
二、介私覿。
(六)○西原本作而。非是。
○岡田氏本作西。
(七)○既覿而出四字按本經無。岡田氏本有之。蓋先生有意約言耳。
(八)既覿而出下岡田氏本作擯者入告出許。今據本經及岡田氏本改作擯者出請。
十四、賓禮畢。出。公送賓。
十五、賓就館。
十六、歸饔餼於賓介。
(九)兩大夫間岡田氏本有賓之二字。明日賓下有拜于朝三字。按本經無儐之二字。

出公側授宰玉、裼降立。擯者出請。賓裼奉束帛加璧享。擯者入告。出許。庭實皮則攝之、毛在內。(一)內攝之。入設也。賓入門左、揖讓如初升、致命張皮。公再拜受幣。士受皮者自後右客。賓出。公側授宰幣皮。聘于夫人用璋。享用琮。如初禮。擯者出請事。(二)賓奉束錦以請覿。擯者入告。出辭。請禮賓。賓禮辭聽命。擯者入告。公出迎賓以入。揖讓如初。公升側受几于序端。公東南鄉。賓進訝受几于筵前。東面俟。公壹拜送。賓以几辟。北面設几。不降階上答再拜稽首。宰夫實觶以醴。加柶于觶。面枋。公側受醴。賓不降壹拜進筵前受醴、復位。公拜送醴。宰夫薦籩豆脯醢。賓升筵。賓祭脯醢。以柶祭醴三。(三)庭實設。降筵北面以柶兼諸觶。尚擸。坐啐醴。公用束帛。建柶北面奠于薦東。賓降辭幣。公降一等辭。栗階升聽命。(四)降拜。公辭。升再拜稽首。受幣當東楹北面。退東面俟。公壹拜。賓降也。公再拜。賓執左馬以出。上介受賓幣。從者訝受馬。賓覿奉束錦、總乘馬。二人贊入門右、北面奠幣。再拜稽首。(五)擯者辭。賓出。擯者坐取幣出。有司二人牽馬以從。出門西面于東塾南。擯者請受。賓禮辭聽命。牽馬右之、入設。賓奉幣入門左。介皆入門左西上。公揖讓如初升。公北面再拜。賓三退。反還負序。振幣進授。當東楹北面。士受馬者自前還牽者後、適其右受。牽馬者自前西(六)乃出。賓降階東拜送。君辭。拜也君降一等辭。栗階升。公西鄉。賓階上再拜稽首。公少退。賓降出。公降立。擯者出請。上介奉束錦、士介四人皆奉玉錦束、請覿。既(七)覿而出。(八)擯者出請。賓告事畢。擯者入告。公出送賓。及大門內、公問君。賓對。公再拜。公問大夫。賓對。公勞賓、賓再拜稽首。公答拜。公勞介。介皆再拜稽首。公答拜。賓出。公再拜送。賓不顧。賓卽館。君使卿韋弁歸饔餼五牢。上介請事。賓朝服禮辭。有司入陳。賓皮弁迎大夫于外門外。再拜。大夫不答拜。揖入。及廟門、賓揖入。大夫奉束帛入。三揖皆行。至于階讓。大夫先升一等。賓從升堂。北面聽命。大夫東面致命。賓降階西再拜稽首。拜餼亦

(一)○儐之二字恐欲删偶遺者。」
按本經有之。此下當作公於賓壹食再饗。
(二)○鉤一作鈎。非是。
十七、賓問卿、面卿。
十八、介面卿。（略）
十九、問下大夫。
二十、夫人歸禮賓介。
二十一、大夫餼賓介。（略）
二十二、主國君臣饗食賓介。
二十三、還玉及賄禮。
二十四、公館賓。賓請命。
(三)賓退下補賓字。本經岡田氏本並有之。
二十五、賓行。主國贈送。
二十六、使者反命。（略）
二十七、使還。禮門。奠幣。（略）
(四)之下岡田氏本無去字。
(五)○又曰以下記文。
(六)○公字今補足。岡田氏本亦有。

如之。大夫辭。升成拜。受幣堂中西北面。大夫降出。賓降授老幣。出迎大夫。大夫出。賓送于外門外再拜。明日賓拜饗與餼。皆再拜稽首。」賓朝服問卿。」下大夫嘗使至者幣及之。」夕夫人使下大夫韋弁歸禮。賓如受饔之禮。儐之。」賓介皆明日拜于朝。」君使卿皮弁還玉于館。賓皮弁襲迎于外門外。不拜。帥大夫以入。大夫升自西階鉤楹。賓自碑內聽命。升自西階。自左南面受圭。退負右房而立。大夫降中庭。賓降自碑內東面授上介于阼階東。上介出請賓迎。大夫還璋如初入。賓裼迎大夫。賄用束紡。禮玉束帛乘皮。皆如還玉禮。大夫出。賓送不拜。」公館賓。賓辟。上介聽命。聘享夫人之聘享問大夫。送賓。公皆再拜。公退。賓從請命於朝。公辭。賓退。」賓三拜乘禽于朝。訝聽之。遂行舍于郊。公使卿贈如覿幣。受于舍門外。如受勞禮。無儐。使下大夫贈上介亦如之。使士贈衆介。如其覿幣。大夫親贈。如其面幣。無儐。贈上介亦如之。使人贈衆介。如其面幣。士送至于竟。」又曰。上介執圭如重。授賓。賓入門皇。升堂讓。將授志趨。授如爭承。下如送。君還而后退。下階發氣怡焉。再三擧足。又趨。及門正焉。執圭入門鞠躬焉。如恐失之。及享發氣焉盈容。衆介北面蹌焉。私覿愉々焉。出如舒鴈。」

【主考】周禮大宗伯。以玉作六瑞。以等邦國。王執鎭圭。公執桓圭。侯執信圭。伯執躬圭。子執穀璧。男執蒲璧。又典瑞掌玉瑞玉器之藏。辨其名物與其用事。設其服飾。王晉大圭。執鎭圭。繅藉五采五就。以朝日。公執桓圭。侯執信圭。伯執躬圭。繅皆三采三就。子執穀璧。男執蒲璧。繅皆二采再就。以朝覲宗遇會同于王。諸侯相見亦如之。又大行人上公之禮執桓圭九寸。繅藉九寸。介九人。禮九牢。擯者五人。諸侯之禮執信圭七寸。繅藉七寸。介七人。禮七牢。擯者四人。諸伯執躬圭。其他皆如諸侯之禮。諸子執穀璧五寸。繅

藉五寸。介五人。禮五牢。擯者三人。諸男執蒲璧。其他皆如諸子之禮。又考工記鎭圭尺有二寸。天子守之。命圭七寸。謂之躬圭。伯守之。㊀【註】圖考曰。鎭安也。蓋以四鎭之山爲瑑飾。取其鎭安四方也。凡圭廣三寸。厚半寸。蒲璧五寸。繅藉㊁準璧。天子鎭圭其冒頭與公侯伯子男廣狹如一。天子執鎭圭。以見諸侯。諸㊂侯各執五等之圭。以合符於天子。其冒處有不同者。則辨其僞也。凡圭冒頭皆圓。下底皆方。天地之象也。桓圭之形空其中。雙峙而立。雙植曰桓。取其強直自立而不撓也。公在天子之下侯伯之上。以安上爲任。故圭形如之。信圭之形。實而不虛。體直而不曲。故兼信伸二義。在公之下伯之上。取其尊而不屈也。躬圭其形曲。故取鞠躬之義。故曰躬圭。取其愼行以保身之義。穀璧其形圓。刻稻㊃穀之形於上。取其養人之義也。蒲璧形與穀璧同。以蒲爲瑑飾。取安人之義。蓋蒲作席。而安人也。言其質曰玉。言其符合曰瑞。言其器曰圭。子男不用圭。而用璧者。以其未成國。猶璧之不成器也。孔子所執之圭。卽魯公九寸之命圭。以通信於隣國者也。因本文有圭字。故併著之。

○聘㊄禮所以朝天子。繅三采六等。朱㊅白蒼。問諸侯。朱綠。繅八寸。皆玄纁。繫長尺。絇組。注雜采曰繅。以韋衣木版。飾以三色再就。所以薦玉。重愼也。采成文曰絇。繫無事則以繫玉。因以爲飾。皆用五采組。上以玄。下以絳爲地。疏繅者皆蒙水草之文。天子五采。公侯伯三采。子男二采皆是雜采也。云以韋衣木版飾以三色再就者。依漢禮器制度而知也。但木版大小一如玉制。然後以韋衣包之。大小一如其版。繫無事則以繫玉。因以爲飾者。無事謂在櫝之時。亦以繫玉。因以爲飾。此組繫亦名繅㊆藉。卽上文反命之時。使者執圭垂繅。上介執璋屈繅是也。

㊀註舊無界線。今施之。
㊁藉底本誤作蒲。據岡田氏本改之。
㊂諸侯底本不重出。改從圖考及岡田氏本。
㊃稻底本誤作穗。改從圖考及岡田氏本。圭考緣以下岡田氏本有界線之別空白。而無順字。無圖。按考解並有圭璧之圖。欲補而未果耶。」
㊄聘禮下岡田氏本有曰字。
㊅岡田氏本無朱白蒼三字及綠字。雜采曰繅以下十九字作繅以五采章衣板。若奠玉則以藉之十四字。版岡田氏本皆作板。
㊆繅藉岡田氏本同。不作襍藉。乃知先生不據毛本。反誤作及。

○君子不以紺緅飾。紅紫不以爲褻服。當暑袗絺綌。必表而出之。緇衣羔裘。素衣麑裘。黃衣狐裘。

此一節記孔子衣服之制。蓋衣服身之文章。根於性命。而其裁制。上律天時。下襲水土。是以所記節々。皆有精義入神之妙。此一節分四條。自君子不以紺緅飾。至于黃衣狐裘。爲一條。記服色之精義。蓋夫子之時禮壞服色混亂。世人或有以紺緅爲常服之領緣。或以紅紫爲服。或當暑則求涼體之便。而不著裏衣。或當冬月則衣裘異色者。（印本無或字。）后世戎服之變。其幾蓋萌芽于茲。然夫子非先王之法服不敢服。故紺緅與紅紫二段。記人用而夫子不用。當暑緇

㊀黹裘上衄字當在緇衣上。

㊁或問上岡田氏本有圏子。今從補。

㊂○註謂圖解也。

㊃虵俗蛇字。岡田氏本作蛇。

㊄拜上岡田氏本佚今字。

衣與黹裘二段記人不用而夫子用之所謂從下之精義所以風世人也服制之初記之實有深意存矣。○或問當署一段無服色之可言。曰。衣裘同色。蓋取其色之相稱也。其制詳于裘。葛之制亦如此。表出與色稱互相發。不言色。而色在其中矣

【註證】中庸曰。仲尼祖述堯舜。憲章文武。上律天時。下襲水土。註。律如法律之律。无分毫之差忒。上律者先天而天弗違。後天而奉天時是也。如元氣渾淪與時合序。水土流行坎止。其理一定。水流土止。塞兼二義。重衣曰襲。服而不違。亦是妙理自相符合。非有心如此。○易曰。屈信相感而利生焉。尺蠖之屈以求信也。龍虵之蟄以存身也。精義入神以致用也。利用安身以崇德也。○孝經曰。非先王之法服不敢服。非先王之法言不敢道。非先王之德行不敢行。○子曰。麻冕禮也。今也純儉。吾從衆。拜下禮也。今拜乎上。泰也。雖違衆。吾從下。

服制皆位也。一節皆舉位。包時與處。節々精義。衡平輕重之施。所謂中也。圖解曰。文章根於性命。經緯妙于心

○具下岡田氏本佚見字。

○褻裘底本印本俱作褻衣今從岡田氏本改之。

裁。因制以別邪正。而不失寒暑之宜。因制以別公私。而又不失常變之用。正大之情。忠孝之節。天時人事之宜。具見于此。○大全曰。自隋煬帝令百官以戎服從一品賜紫。次朱。次青。後世遂爲朝服。然唐人朝服猶著禮服。京師士人。行道間。猶著衫帽。南渡後變爲白衫。後來變爲紫衫。皆戎服也。

褻裘長。短右袂。必有寢衣。長一身有半。狐貉之厚以居。

這條記私居之服制。蓋公服主時王之制。褻服主便利之制。故褻裘寢衣之制皆如此。所謂流水因地爲象之神感自得也。

去喪無所不佩。非帷裳必殺之。

這條記公私通用之服制。玉藻曰。君子無故。玉不去身。君子於玉比德焉。內則曰。左右佩用。以適父母舅姑之所。此乃公私皆無所不佩者也。非帷裳必殺之。朝祭之服不殺。常服必殺之。本是周公所制之法。而夫子率由舊章。此亦非先王之法服不敢服。而自然所以風世人者。見于語外焉。

【註證】詩曰。不愆不忘。率由舊章。詩大雅假樂篇。率循也。舊章典法也。

羔裘玄冠不以弔。吉月必朝服而朝。

這條記用服之制。蓋喪主素。吉主玄。吉凶異服。先王之禮也。夫子非先王之法服不敢服。故自然率先王之禮。而羔

㊀特羊岡田氏本誤作時羊。

㊁孝經上岡田氏本有圈子。今從補。

㊂相親下岡田氏本有也字。是。

裘玄冠不以弔喪。此亦自有所以風世人者矣。疏曰。朝服皮弁服也。弁印本作辨。非是。臣與君視朔之服也。魯自文公不行視朔之禮。孔子恐其禮之廢。故每月朔必衣此視朔之服。而朝於君。所謂我愛其禮也。此說有意味。思補過。匡救其惡之微意。諷諫之類。愛敬之至也。圖解曰。一衣服之閒。而燮理天時。經理人事之妙用如此。夫子誠彬々君子哉。【註證】春秋曰。文公六年閏月不告朔。猶朝于廟。左傳曰。閏月不告朔。非禮也。閏以正時。時以作事。事以厚生。生民之道。於是乎在矣。不告閏朔。棄時政也。何以爲民。朱子曰。告朔之禮。古者天子常以季冬。頒來歲十二月之朔于諸侯。諸侯受而藏之祖廟。月朔則以特㊀羊告廟。請而行之。○子貢欲去告朔之餼羊。子曰。賜也爾愛其羊。我愛其禮。圖考曰。文公猶朝於廟。蓋不以羊而行告朔之禮。止朝於廟而已。自文公後歷宣公·成公·襄公·昭公·定公·哀公。皆不告朔。而有司猶供此羊。故子貢惜其無實而妄費也。夫子豈區々惜一羊哉。尊天王。敬祖宗。維周室之綱常。振魯邦之名敎。倶在此一愛中。○㊁孝經曰。君子之事上也。進思盡忠。退思補過。將順其美。匡救其惡。故上下能相親。㊂○家語孔子曰。忠臣之諫

君有五義焉。一曰譎諫。二曰戇諫。三曰降諫。四曰直諫。五曰諷諫。註諷諫、借他事引援而諫。○子曰。文質彬々然後君子。註彬々猶斑々。物相雜㈠而適均貌【訓詁】彣悉協切

和

也。

【色考】圖考曰。紺深青揚赤色。謂既染眞青、復用赤以蓋之㈡。使有光彩以爲祭服。蓋以潔而致其敬也。緅絳色㈢。三年之喪以飾練服。按喪禮三年之喪期年之內服極粗麻布。期而小祥。變而服練熟稍粗麻布。而以淡紅色之布爲領緣。㈣再期而大祥。又變而服練熟略細麻布。而以絳色之布爲領緣。所謂練冠縓㈤緣。縓即緅也。至於三年然後服采色。蓋以漸而解其甚也。故註曰。三年之喪以飾練服。者總言之也。蓋紺以爲祭服。不以飾常服者所以重祭。緅㈥以飾練服。不以飾常服者所以重喪。不敢以喪祭之服飾而瀆於常服之飾也。圖解曰。按諸書言染色。一入曰縓。再入曰赬。三入曰纁。四入曰朱。五入曰緅。六入曰玄。玄即紺也。七入曰緇。玄緇相類也。古者朝享禮服多紺緅等。黑赤色水火之交。南北之正。天地之中也。周人尚之㈦。○紅紫非正色。東方屬木青。南方屬火赤。西方屬金白。北方屬水黑。中央屬土黃。圖解曰。青赤黃白黑五方正色也。綠紅碧紫騮㈧五方間色也。五行之理有相生者相尅者。相生爲正色。相尅爲間色。故以木之青尅土之黃。合青黃而成綠。爲東方之間色。以金之白尅木之青。合青白而成碧。爲西方之間色。以火之赤尅金之白。合赤白而成紅。爲南方之間色。以水之黑尅火之赤。合赤黑而成紫。爲北方之間色。以土之黃尅水之黑。合黑㈨黃而成騮。爲中央之間色。丈夫服正色。不服間色。別嫌疑也。女子

服間色。兼服正色。

㈠雜岡田氏本誤作離。
㈡之上蓋底本誤作益。據圖考及岡田氏本改之。
㈢○色原本作也。非是。
㈣再期下圖考及岡田氏本有而字。今從補。
㈤○縓七絹反。見檀弓。
㈥緅下岡田氏本佚以飾練服四字。
㈦後圖解當作圖考。
㈧○騮原本作緇。非是。岡田氏本亦作緇。下同。圖考作騮。
㈨黑黃岡田氏本誤作黑白。

（イ）衣裘考下岡田氏本有界線之別。空白無圖。唯有羔裘、褐裘、狐裘、長裘、裘等題字。按考解並有此圖。欲補而未果耶。如此之類。以下頭注不一一舉示。卷首凡例明之。

（ロ）裘上底本空白一字。士倫志村氏補悅字。且注曰、悅一作恍。非。岡田氏本作恍。按圖解作悅。恐誤。

（ハ）謂玉藻也。

（ニ）疏謂論語疏也。

（ホ）後下岡田氏本脫始字。

（ヘ）終下底本有也字。据岡田氏本及疏文刪。殺岡田氏本誤作服。

【衣裘考】（イ）圖考曰、緇衣羔裘、是諸侯君臣日視朝之服。素衣麑裘、君臣視朔之服。黃衣狐裘、蜡祭息民之服。裘之皮爲衣、冬服也。凡服、內有袍襗之屬。然後加衣、以裼。以單衣加裘上、而現其美、曰裼。裼之色、必與裘之色類。圖解曰、冬而裘常也。裘必有裼。朝覲用緇衣、以裼羔裘。天顏咫尺。用羔以垂善群之鑒。而緇裼之、亦昭北面之誼。且緇衣以爲好也。恍覩泰交之象矣。聘享用素衣、以裼麑裘。講信修睦。用麑以彰善接之風。而素裼之、亦昭在中之潔。且白賁可無咎也。恍寄受采之思矣。蜡祭用黃衣、以裼狐裘。社稷所憑。用狐以隆反本之義。而黃裼之、亦因物土之宜。且黃裳固元吉也。恍表介福之悅矣。（ロ）裘必昭其辨。非徒取相稱。寔謹其在公也。○埤雅曰、羔性群而不黨。禮書曰、鹿之爲物。善接其類。而麑亦出乎天性。白虎通曰、狐死首丘。不忘本也。○記（ハ）曰、表裘不入公門。襲裘不入公門。表裘是無裼衣、而裘在外也。襲裘謂掩其襲衣、而不露裼衣也。表與襲皆不爲敬。故不入公門。陳氏曰、裘之上加單衣、以袒裼見裘之美、曰裼。加全衣、重襲于裼衣上、以充蔽其美、曰襲。故玉藻曰、裘之裼也、見美也。弔則襲。不盡飾也。服之襲也。充美也。○疏（ニ）曰、黃衣狐裘、謂大蜡息民之祭服也。人君以歲事成熟、搜索群神、而報祭之、謂之大蜡。又臘祭先祖五祀。因令民得大飲。農事休息。謂之息民。於大蜡之後、作息民之祭。其時則有黃衣狐裘也。大蜡之祭與息民異也。息民用黃衣狐裘。大蜡則皮弁素服。二者不同矣。以其大蜡之後（ホ）、始作息民之祭。息民大蜡同月。其事相次。故連言之耳。知者、郊特牲曰、蜡也者索也。十二月合聚萬物、而索饗之也。皮弁素服而祭。素服以送終（ヘ）。葛帶榛杖。喪殺也。是大蜡之祭用素服也。郊特牲既說蜡祭。其下又曰、黃衣黃冠而祭。息田夫也。注曰、祭謂既蜡臘先祖五祀也。於是勞農以休息之。是息民之祭用黃衣也。

㊀○綦印本作朱。非是。
㊁○註以下八節竝玉藻集說文。
㊂物下岡田氏本脫道字。
㊃○謙印本作嫌。非是。一岡田氏本亦誤作嫌。

【佩考】凡佩有德佩。有事佩。無所不佩者。包德佩事佩公私而言。【德佩】玉藻曰。古之
君子必佩玉。右徵角。左宮羽。趨以采齊。行以肆夏。周還中規。折還中矩。進則揖之。退則
揚之。然後玉鏘鳴也。故君子在車。則聞鸞和之聲。行則鳴佩玉。是以非辟之心無自入
也。君在不佩玉。左結佩。右設佩。居則設佩。朝則結佩。齊則綪結佩。而爵韠。凡帶必有佩
玉。唯喪否。佩玉有衝牙。君子無故玉不去身。君子於玉比德焉。天子佩白玉。而玄組綬。
公侯佩山玄玉。而朱組綬。大夫佩水蒼玉。而純組綬。世子佩瑜玉。而綦組綬。士佩瓀玟。
而縕組綬。孔子佩象環五寸。而綦組綬㊀。註㊁徵角宮羽以玉聲所中言也。徵為事。角為民。
故在右。右為動作之方也。宮為君。羽為物。君道宜靜。物㊂道宜積。故在左。左乃無事之方
也。不言商者。或以西方肅殺之音。故遺之歟。○徵角為陽。宮羽為陰。陽主動。陰主靜。右
佩陰也。而聲中徵角之動。左佩陽也。而聲中宮羽之靜。何哉。蓋佩所以為行止之節。時
止則止。時行則行。此設佩之意也。○路寢門外至應門。謂之趨。於此趨時。歌采齊之詩。
以為節。路寢門內至堂。謂之行。於行之時。則歌肆夏之詩。以為節。○君在謂世子在君
所也。不佩玉。非去之也。但結其左佩之綬。不使玉之有聲。右設佩者。佩謂事佩觿燧
之屬。設之於右。示有服役以奉事於上也。居則設佩。謂退而燕居則佩玉如常也。朝則
結佩。申言上意。此皆謂世子也。○綪音爭。凡佩玉者遇齊時。則綪結其佩。綪屈也。謂結
其綬。而又屈上之也。爵韠爵色之韋為韠也。士之服。但齊則雖諸侯大夫亦服之也。○
綬所以貫佩之珠玉。而相承受者。玄組綬謂以玄色之組為綬也。○純音緇。瓀乳兗反。
玟音民。山玄水蒼。如山之玄。如水之蒼也。瑜美玉也。綦雜文也。瓀玟石之次玉者。緼赤
黃色。○象環象牙之環也。其廣五寸。孔子㊃謙不佩玉。故燕居佩之。非謂禮服之正佩也。
圖解曰。其制上折衡。下有雙璜。中有琚瑀。下有衝牙。貫之以組綬。納之以蠙珠。而其色

（⊖）日中下。岡田氏本有之鏡二字。無者字。

（⊜）後上底本有帷字。據圖考及岡田氏本刪。

（⊜）積圖考・岡田氏本並作稽。

（⊖）【深衣考】底本無考字。從岡田氏本補之。

（⊜）中本制上多深衣二字。又無而字。非是。今從集說本。岡田氏本亦多深衣二字。

有白蒼赤之辨。其聲有宮商角徵羽之應。其行有采齊肆夏之節。其象有仁智禮樂之備。【事佩】內則曰。子事父母。鷄初鳴。咸盥漱。櫛縰。笄總。拂髦。冠緌纓。端韠紳。搢笏。左右佩用。左佩紛帨・刀礪・小觿・金燧。右佩玦・捍・管遰・大觿・木燧。註。所佩之物。皆是備尊者使令之用。紛以拭器。帨以拭手。皆巾也。刀礪小刀與礪石也。觿狀如錐。象骨爲之。小觿所以解小結者。金燧用以取火於日（⊖）中者。玦射者著於右手大指。所以鉤弦而開弓體也。捍拾也。韜左臂而收拾衣袖以利弦也。管舊註曰。筆彄其形制未聞。遰刀室也。大觿所以解大結。木燧鑽火之器。晴則用金燧以取火。陰則用木燧以鑽火也。

【帷裳考】圖考曰。帷裳用正幅如帷。卽今之朝裙也。凡裳前三幅。後（⊜）四幅。象陰陽也。帷裳禮服。取其方正。故正幅如帷。帷者帳也。卽今之腰裙是也。襞是衣（⊜）襵積疊也。謂之襵成疊。卽今所謂簡也。言腰有襞積者。蓋帷裳既用正幅。則布廣而腰狹。必促之以就腰。故腰之兩旁則有襞積矣。曰無殺縫者。對非帷裳而云耳。註曰其餘若深衣。夫曰其餘者。言非朝祭之服皆是也。曰腰半下。齊倍腰。此二句上一句是深衣文。下一句是玉藻文。兩引相證以足意義也。蓋腰卽上。齊卽下。腰半下者。蓋腰圍狹半於下齊也。齊倍腰。謂下齊濶倍於上腰也。如此則在兩旁有殺縫而無襞積矣。曰無襞積。亦對帷裳而言。深衣之裳以布六幅。斜裁爲十二幅。三分之一皆在上。三分之二皆在下。腰狹齊濶腰不用襞積。而旁有斜裁之殺縫。唯朝祭之服。帷裳用正幅者。不殺之。非帷裳而如深衣者。必殺之。殺謂腰殺於齊者一半也。

（⊖）【深衣考】記深衣篇註曰。朝服祭服喪服皆衣與裳殊。惟深衣不殊。則其被於體也深邃。故名深衣。（⊜）制同而名異者。有四焉。純之以采曰深衣。純之以素曰長衣。純之以布曰

○弁印本作辨。非是。

○也下圈子印本移在檀字上。非是。

下文底本無。界線依岡田氏本及家禮補。

兩留下二。岡田氏本作一。家禮亦同。

兩葉下岡田氏本無每葉二字。

岡田氏本及文公家禮裳下並有之字。齊下並注曰音咨。

兩皁絹底本誤作皂絹。改從岡田氏本及家禮。

○以下圖解。

詩小雅都人士篇。

麻衣。著在朝服祭服之內曰中衣。但大夫以上助祭用冕服。自祭用爵弁服。則以素爲中衣。士祭用朝服。則以布爲中衣也。皆謂天子之大夫與士也。喪服亦有中衣。檀弓曰練衣黃裏縓緣是也。○家禮儀節曰。裁衣法。用布二幅。布幅廣狹以一尺八寸爲則中摺前後爲四葉。其在前兩葉。每葉長二尺六寸。裁時從一邊修起除去四寸。留二尺二寸。漸々修至將近邊處不動。比修起處留長四寸。其在後兩葉每葉長二尺三寸。亦從一邊修起除去一寸。留二尺二寸。漸々斜修至將近邊處不動。比修起處留長一寸。○下裳用布六幅。每幅斜裁分爲兩幅。一頭寬。一頭窄。寬頭比窄頭加一倍。窄頭六寸則寬頭一尺二寸。裁訖俱將窄頭向上寬頭向下。連綴作一處。○【袂】用布二幅。各長四尺四寸。每幅中摺爲前後兩葉。每葉長二尺二寸。縫連衣身。却從腋下漸々修成圓樣。袖口留一尺二寸。縫合其下以爲袂。○【領】用布一條闊二寸爲領。如常衣法。然後加緣其上。○合衣裳法。衣之前後四葉。每葉屬裳三幅。窄頭向上。四葉共十二幅。衣裳相接處爲腰。腰圍約七尺二寸。裳下邊爲齊。齊圍約一丈四尺四寸。衣左右加兩袖。衣上加領。凡領及裳邊袂口俱用皁絹緣之。○【緣】用皁絹爲之。領及袂口裳邊表裏皆用寸半。領及裳邊內外則夾縫在本布上。袂口則綴連布之外。卽所謂袂口。布外別。此緣之廣也。

【玄冠考】蓋裝緇衣則玄冠。以玄繒爲冠也。玄亦緇類。卽今黑色之微赤者。天色玄。故古今衣冠通尙之。○冠與弁異。弁大圍額。古冠僅撮髮。以絺布爲之。加于頂。詩曰。緇撮。

○毋音牟。
○下文括弧庶本無之。今補。岡田氏本則以小字書。

卽玄冠也。夏曰毋追。小貌。殷曰章甫。甫斧通。小而方。周曰委貌。制始大委下冒貌也。)〇冠弁異。而色同玄。

〇齊必有明衣布。齊必變食。居必遷坐。

此一節記夫子愼齊之事。以明合莫之道。祭統曰。及時將祭。君子乃齊。齊之爲言齊也。齊不齊以致齊者也。是故君子非有大事也。非有恭敬也。則不齊。不齊則於物無防也。耆欲無止也。及其將齊也。防其邪物。訖其耆欲。耳不聽樂。故記曰。齊者不樂。言不敢散其志也。心不苟慮。必依于道。手足不苟動。必依于禮。是故君子之齊也。專致其精明之德也。故散齊七日以定之。致齊三日以齊之。定之之謂齊。齊者精明之至也。然後可以交於神明也。所謂道與禮。非

泛説指致精明之德而所以聽於無聲視於無形者言。祭義所謂齊之日。思其居處。思其笑語。思其志意。思其所樂。思其所耆。齊三日乃見其所爲齊者是也此條所謂齊必有明衣布齊必變食。居必遷坐。此皆依于禮之目。舉三件以包不弔喪。不聽樂。凡凶穢之事皆不得預等之事蓋所依之道無言之端的而不可見。可見而可言者。所依之禮而已愛敬之至德。無內外。無精粗。故舉禮。而道在其中矣。此章之精神在必字上。有火就燥。水流濕之意。凡齊之禮皆如此而衆人勉強依之。故不能無欠闕聖人安而依之。猶水火之潤下炎上。可熟玩

【註證】㊁禮運曰。君與夫人交獻以嘉魂魄。是謂合莫。○大事指喪祭言。○有恭敬謂

㊀齊岡田氏本作齋。
㊁禮運鄭註曰。嘉樂也。莫虛無也。孝經説曰。上通無莫。陳註以爲。皆所以嘉善於死者之魂魄而求以契合於冥漠之中也。

㊀○原本無不字。恐非是。岡田氏本亦佚不字。

㊁長下原本無也字。今從岡田氏本及圖解補之。

大戴禮所謂王齊三日受師尙父丹書之戒。玉藻所謂將適公所宿齊戒居外寢之類。○者欲謂人心之㊀不中節者也。○邪物謂齊之所愼避也。○曲禮曰。聽於無聲。視於無形。○易曰。同聲相應。同氣相求。水流濕。火就燥。○洪範曰。水曰潤下。火曰炎上。木曰曲直。金曰從革。土爰稼穡。潤下作鹹。炎上作苦。曲直作酸。從革作辛。稼穡作甘。【訓詁】訖激質切。止也。○散其志之散上聲。不檢束之意。散齊之散去聲。布也。○勉強力行也。

【明衣考】士喪禮陳襲事于房中。明衣裳用布。禮書云。明衣之袂屬幅。而不削。明衣之裳前三後四。而不襞積。衣之長㊁也及足跗。與無見膚者異矣。

齊擧時而包位與處。節々所愼之禮。便是中也。圖解曰。齊固以心言。然又曰。齊之爲言齊也。必身心合一而後可以言齊。必有明衣。必變食。必遷坐。正是外體從心處。方見子之愼齊處。

○食不厭精。膾不厭細。

夫形者生之舍也。氣者生之充也。神者生之主本也。三者

營衛岡田氏本作榮衛。

皆有所養苟得其養無物不長。苟失其養無物不消。頤不死之元神以貞養浩然之氣以直養營衛之氣血肉之形以飲食蓋貞直者頤之本而飲食頤之末也而本末相依而乃遂其生猶培養其本而灌漑其末則根固而枝葉暢達（猶下恐有闕文。）若徒灌其末而傷其本則枝亦從亡。君子務本。本立而道生本末之先后有權存焉大易頤象曰。山下有雷頤君子以愼言語節飲食愼與節其頤養之權衡歟。此一節記孔子頤貞之迹以示愼節之筌蹄實吾人之急務也。分九條看。食不厭精膾不厭細此二句爲第一條一節之綱領也不厭二字爲親切玄妙包不嫌不貪之二義所謂

(一)其清者爲衛。濁者爲榮。々在脈中。岡田氏本及靈樞作其清者爲營。濁者爲衛。營在脈中。然靈樞存疑引康熙說以爲清濁疑誤寫。併錄俟知者。
(二)而下復作後。今據岡田氏本及靈樞改之。
(三)象下底本無口字。據岡田氏本及程傳補之。
(四)觀田本作頤。非是。

無適也無莫也義之與比之意也以明頤貞之本然。已下條々皆頤貞隨時而爲愼爲節者也食精與膾假設以包夫子雅所食之物下皆倣此。

【註證】淮南子曰。夫形者生之舍也。氣者生之充也。神者生之制也。○孟子曰。故苟得其養無物不長。苟失其養無物不消。○易曰。大哉乾元。萬物資始。此乃所謂人身之元神也。家語曰。不食者。不死而神。易曰。頤貞吉。養正則吉也。○孟子曰。敢問夫子惡乎長。曰。我知言。我善養吾浩然之氣。敢問。何謂浩然之氣。曰。難言也。其爲氣也。至大至剛。以直養而無害。則塞乎天地之間。其爲氣也。配義與道。無是餒也。○靈樞曰。眞氣者。所受㊀于天與穀氣併而充身者也。又曰。人受氣于穀。穀入于胃以傳與肺。五臟六腑皆以受氣。其清者爲衛。濁者爲榮。々在脈中。衛在脈外。營周不休。五十而㊁復大會。陰陽相貫如環無端。衛氣行于陰二十五度。行于陽二十五度。分爲晝夜。○頤象曰。山下有雷頤。君子以愼言語。節飮食。傳曰。以二體言之。山下有雷。雷震於山下。山之生物。皆動其根荄。發其萌芽。爲養之象。以上下之義言之。艮止而震動。上止下動。頤頷之象。以卦形言之。上下二陽。中含四陰。外實中虛。頤口之象㊂。口所以養身也。故君子㊃觀其象。以養其身。愼言語以養其德。節飮食以養其體。不唯就口取養義。事之至近而所係至大者。莫過於言語飮食也。在身爲言語。於天下則凡命令政教出於身者皆是。愼之則必當而無失。在身爲飮食。於天下則凡貨資財用養於人者皆是。節之則適宜而無傷。推養之道。養德養天下。莫不然也。○子曰。君子之於天下也無適也。無莫也。義之與比。

(一)爲下毇底本誤作穀。改從圖解及岡田氏本。
(二)六書精蘊　六卷、明魏校撰。
(三)糳上毇・兩末・玉下粹岡田氏本・圖解並同。按精蘊作毇・兩末・粒、可從。糳上糳圖解・岡田氏本俱作糳。按糳字推當作糳。
(四)後報二字原本作移復。非是。報岡田氏本作復。
(五)始底本作初。改從圖解及岡田氏本。

【精考】圖解曰、儒書以精糳喩學。精糳皆言米也。穀一石得米六斗爲糲。一石得五斗爲(一)毇。得四斗爲糳。得三斗爲精。飯之美者。玄山之禾。不周之粟。陽山之穄。南海之秬。◯(二)六書精蘊曰、精粹字皆從米。精者何也。米之脫粟也。色微黃赤。人皆知其粗也。糠去而白。毇矣。(三)末也。糳矣。末也。舂而近心矣。色微若青。此生意所函也。粹者何也。始而糳米、去殼也。中而舂米、去膜也。卒而玊音展米、去翳也。乃後瑩然玉粹。【膾考】少儀曰、牛與羊魚之腥、聶而切之爲膾。麋鹿爲菹。野豕爲軒。皆聶而不切。註聶而切之者、謂先聶爲大臠、而後(四)報切之爲膾也。聶本作牒。直涉切。說文曰、薄切肉。內則曰、肉腥細者爲膾。大者爲軒。註細縷切者爲膾、大片切者爲軒。

飮食物而屬處。而包時與位節々愼與節。所謂中也。圖解曰、聖人飮食之節。以衞生爲重。故其食常擇而不苟。節而不過。抑于飮食中寄仁人孝子之意。報本反(五)始之誠。數不字必字。都是無心合節處。

食饐而餲。魚餒而肉敗不食。色惡不食。臭惡不食。失飪不食。不時不食。割不正不食。不得其*醬不食。

五穀不成朱熹集註說。

此條舉不食者以爲愼之筌蹄。一步深一步語。食饐而餲。魚餒而肉敗不食之一段。假設必不可食者。而推起愼之精義。色惡臭惡。比饐餲餒敗深一步。失飪又深一步。此三者饑渴者所不擇。而皆不食。所以無口腹之害也。不時不食。此一句愼節活法。飲食之眼目也。蓋*當其可之謂時。五穀不成之類。不足以盡其蘊。*夫時之一字。愼節之權衡乎。雖不食者。若當其可何泥于不食。雖食者。若不當其可。何必終于食。此乃絕*四之妙。聖之時也。此一句措上下不食兩段之間者。甚有微旨焉。此條之精義。不時不食一句。說得明白詳盡也。然*相師之道。不可不明指言。故先舉人之

所易曉。而喚醒愼節之主人公。而指示飮食之眼目。而后舉割不正不食不得其醬不食二句。以明聖人頤養之正。割不正與不得其醬。雖無害於形氣。而有害於仁。猶拔草木之根而灌漑其枝葉。豈其可乎哉。是以不食之所謂雖食者。何必終于食之義也。聖人頤神與養氣體先后之精義。於此可觀焉。

【考註證】圖解曰。食饐而下一步深一步語。但自必不可食者推起耳。不然饐餲餒敗。常人亦能辭之。何待聖人。食之精膾之細㊀膏粱者所深嗜。而特不厭。無口腹之欲也。食之餲魚之餒。饑渴者所不擇。而皆不食。無口腹之害也。又曰。先王庖割之正。一準諸禮。割肉不方正者。即異其心之所存。故不食。醬爲食味之主。不得其物所宜之醬。亦不食。皆食之不苟也。又曰。禮始諸飲食。先王制爲割之正。醬之宜。非以恣口腹。以明禮也。故二者皆在所不食。㊁【註證】學記曰。當其可之謂時。○子絕四。毋意。毋必。毋固。毋我。○南遊會紀曰。友人述上蔡誦一部論語。證以師冕一章之義。請問先生曰。㊂一部論語爲未悟者說。所謂相師之道也。故曰及階。及席。某在斯。某在斯。一々指向他說。若爲明眼人說。即成剩語。非立教之旨矣。【訓詁】縕中所蓄之名也。主人公指道心言。【醬考】圖解曰。說文曰。醬醢也。內則曰。濡雞醢

㊀膏粱唐書郡姓者。以中國士人差第閥閱爲之制。凡三世有三公者曰膏粱。有令僕者曰華腴。

㊁【註證】岡田氏本初作【疏】至此始用此一字。以下同。

㊂○先生謂王龍溪也

粟岡田氏本作羹。

醬實蓼。濡魚卵醬實蓼。濡鱉醢醬實蓼。魚膾芥醬。麋腥醢醬。古人和醬。必辨百物之性。今不可考。

肉雖多。不使勝食氣。惟酒無量。不及亂。

此條開示節飲食之筌蹄。蓋無過不及之謂節。人之元氣。因飲食之過與不及。而或滯積。或耗散。而百病自此作。而德亦因此而戕賊。故至于可食者必以節爲主。肉雖多不使勝食氣。此一句最善摸寫聖人節的景象。蓋食以穀*爲主。肉與菜果皆以爲輔。而各有天然自有之分數。增分數*毫釐。則謂之過。減分數毫釐。則謂之不及。無過亦無不及。適天然自有之分數。此之謂節。食氣與肉氣。素自各有分數。若肉氣勝食氣。則肉氣過于分數。而食氣不及于分數。

㊀○唯下北小路本有二謂字一。岡田氏本亦有レ之。今補。

㊁豫字當レ在二定字上一。

㊂節不間岡田氏本有二而字一。

皆不能中節，是以肉雖多。不使勝，食氣記者以此一句，例其餘。唯酒無量不及亂。此一句因酒。而足上文之意，蓋無量者非唯㊀謂酒而已。凡飲食人々不齊。時々不同。豫不可定其限量。雖然於其無量之中。有天然不易之分數存焉。不及亂者。言止其無量而有分數之節㊂。不至於迷亂也。亂字本是過字上病痛。而包不及，於其中者蓋過與不及常相因且飲食之不節。多在過字上故也。必不可泥著酒一端而看聖人於飲食之愼節。猶*水之就下。所謂不識，不知。順帝之則。記者用此二句，*括盡節飲食，之妙理，誠可謂摸畫妙手矣。或問。無量之分數何，以知之，乎哉。曰。人々固有

㊀中下底本無命字。依岡田氏本及靈樞補之。

㊁者上我底本作吾。改從岡田氏本及本經。

之良知能知之。非思慮擬議之所及。雖愚不肖所與知也。但私欲蔽之而不能擴充之而已。【註證】靈樞曰。黃帝曰。營衞之行奈何。伯高曰。穀始入于胃。其精微者。先出于胃之兩焦。以漑五藏。別出兩行營衞之道。其大氣之搏而不行者。積于胸中。㊀命曰氣海。出于肺。循喉咽。故呼則出。吸則入。天地之精氣。其大數常出三入一。故穀不入半日則氣衰。一日則氣少矣。黃帝曰。穀之五味可得聞乎。伯高曰。請盡言之。五穀。秔米甘。麻酸。大豆鹹。麥苦。黃黍辛。五果。棗甘。李酸。栗鹹。杏苦。桃辛。五畜。牛甘。犬酸。猪鹹。羊苦。鷄辛。五菜。葵甘。韭酸。藿鹹。薤苦。葱辛。○孟子曰。人性善也。猶水之就下也。○中庸曰。君子之道。費而隱。夫婦之愚。可以與知焉。【訓詁】毫釐。十絲曰毫。十毫曰釐。○括結也。包括也。○節。中庸曰。喜怒哀樂之未發。謂之中。發而皆中節。謂之和。此節字便是天然自有之中也。○擴充。孟子曰。凡有四端於我者。㊁知皆擴而充之矣。若火之始然。泉之始達。註。擴推廣之意。充滿也。

沽酒。市脯。不食。

此條因上文記飲酒之節。而擧酒脯二物。而申明愼之精義。蓋沽酒市脯。因有疑而不食之。誠愼之至也。記者擧此

視岡田氏本作親。

以開示雖可食者。有疑者。必不可食之愼也。以沽市二字。市下印本有之字。非是。摸寫有疑之義。可謂親切至妙矣。必不可泥沽市酒脯上而看。【考註證】圖解曰。樂府歌曰。市肉取肥。沽酒取醇。交觴接杯。以致殷勤。思所謂不可泥沽市上之義。於此可見焉。

不撤薑食。

此條擧薑例諸菜。不撤即不厭之義也。始先擧食者。而后記不食者。終先擧不食者。而后記食者。更互演繹。以明愼中有節。節中有愼。而愼節相爲表裏之義。宜潛玩。【訓詁】更互演繹。更平聲。代也。互交互。演以淺切。廣也長也。繹音亦。引其端緒。而視歷檢察也。【薑考】本草曰。薑味辛。微溫。久服去臭氣。通神明。

不多食。

此條因上文記食者。而申明節之端的。蓋飲食之不節。常

●以下比底本作此。蓋形近而譌。據岡田氏本訂。

●而下岡田氏本無以字。

在多字上。多卽過也。過則必又有不及者。所謂過與不及。常相因者也。故此一句形容不厭不撤之節。以戒嗜味之貪。蓋玩味不厭不撤之義。則不多食之義。躍如也。然猶恐后學之不曉。而舉不多食一句結之。所謂其*慮之也遠。故其說之也詳者也。【註證】中庸序曰。蓋其憂之也深。故其言之也切。其慮之也遠。故其說之也詳。【訓詁】端的。端首也。正也。的射侯之中也。以比要處。

祭於公。不宿肉。*祭肉不出三日。出三日。不食之矣。

此條因上文記飲食之節。而以明用祭肉之義。乃愼中之一事也。不宿與不出三日。皆是誠敬之感通。而公私緩急之等。*有不可損益一毫者。所謂衡*平之施。神通妙用也。【註證】

臟岡田氏本作藏。

朱子曰、人之一心、湛然虛明、如鑑之空、如衡之平、以爲一身之主者、固其眞體之本然、而喜怒憂懼、隨感而應、妍媸俯仰、因物賦形者、亦其用之所不能無者也。【訓詁】等等級猶言差別也。【祭肉考】圖解曰、說文曰、胙祭福肉也。穀梁曰、胙致福肉也。周禮凡祭祀之致福者、受而膳之。註曰、致福謂祭祀之餘肉。故左傳謂申生致胙于公。而國語則謂之福于公。是福即胙也。

食不語。寢不言。

此條記飲食威儀之則、以明愼言語、節飲食、原只一件。此亦愼中之一事也。蓋飲食自口入、言語自口出、出入不同時、故不語。言乃心之聲也。方於夜寐、則衞氣行陰經、而神明入水臟、言則氣升神發、而失其常、是以不言。寢不言一句因不語之愼、而幷言之。言語飲食、共是口舌出入之事、而愼與節皆是口容之止也。是以愼言語者、必能節飲食、

●隱下底本無矣字。據岡田氏本補之。

●熟寐岡田氏本誤作熟寐。

●止止間岡田氏本有此字。

●蔬岡田氏本作蔬。下同。

●又岡田氏本作亦。

節飲食者。必能愼言語。愼節常相因者也。記者擧此二句。以開示頤象之宗旨。甚有意味。宜體認矣。【註證】易頤象曰。愼言語。節飲食。○大全曰。雲峰胡氏曰。言心聲也。○靈樞曰。衞氣之行。一日一夜五十周于身。晝日行于陽二十五周。夜行于陰二十五周。周于五臟。是故平旦陰盡。陽氣出于目。○皇極經世書曰。神者人之主。將寐則在脾。熟寐在腎。將寤在肝。正寤在心。【訓詁】口容之止。止字指天理言。與大學知止之止同意。○頤象之宗旨。指愼言語節飲食二句言。

雖蔬食菜羹瓜祭。必齊如也。

此條因上文記飲食威儀之則。而擧祭飲食之事。以明聖人報本之誠敬。此又愼中之一事也。蓋古者人人皆祭飲食。而蔬食菜羹瓜之類。以爲薄物。而或有不祭者。物雖有厚薄美惡。報本之誠敬。豈有精粗哉。故聖人常祭之。衆人雖祭。其誠敬有不足者。而夫子必齊如也。雖薄物祭之與

●日下府本無記曰二字。依岡田氏本補之。

●不上岡田氏本佚則字。

必齊如也。唯聖人能之。又是流水潤下之神感自得也。記者舉此二句。以示每食必當盡報本之敬。思稼穡之艱難。或問時俗雖不祭。可祭否。曰。記曰。禮從宜使從俗。故從俗雖不祭。盡心之齊如。則有報本之誠者也。假饒雖祭之。無心之齊如。則徒然而已。○按以報本之至敬。終此節之義。便是易象先愼而後節之意。究竟來節字素在愼字之中矣。○圖解曰。聖人日用飲食莫非運用天理。粗言之則不過日用之常。精言之則可通神明之德。天下知味之妙。孰有如吾夫子哉。

【註證】月令曰。孟春之月。魚上氷。獺祭魚。又曰。季秋之月。豺乃祭獸。郁離子微曰。祭祀之非虛文。吾於豺獺見之。○曲禮曰。禮從宜。使從俗。註曰。事不可常也。○敬者禮之常。禮時爲大。時者禮之變。體常盡變。則達之天下。周旋無窮。○大而百王百世。質文損益之時。小而一事一物。泛應酬酢之

(一)而字今補之。
(二)不下底本無但字、從岡田氏本及圖解補。
(三)禎圖解及岡田氏本同、當作楨。
(四)豉音示。
(五)其中岡田氏本誤作其巾。
(六)席上底本無圈子、今補。岡田氏本亦作席不正節、不作席不正條。

節。又曰、五方皆有性。千里不同風。所以入國而(一)必問俗也。○中庸曰、人莫不飲食也。鮮能知味也。【訓詁】稼穡。種之曰稼、斂之曰穡。【釋疏食】圖解曰、疏食乃乏米。以蔬充食。不(二)但無肉耳。【釋菜羹】說文曰、羹五味和也。○劉禎(三)毛詩義問曰、鉶羹有菜。鹽豉(四)其(五)中。菜爲其形象可食。因以鉶爲名。【釋祭瓜】玉藻曰、瓜祭上環。食中棄所操。疏曰、瓜祭上環者、食瓜亦祭先也。環者橫斷形如環也。斷則有上下環也。上環是壺間。下環是脫華處也。祭時取上環祭之也。食中者。用上環將祭而食中也。棄所操者。操謂手所持者。棄之、不食。

○席(六)不正不坐。

此節明聖心安于正之至誠、蓋事雖有大小精粗之萬殊。而道無大小精粗之異、所謂君子語大。天下莫能載焉。語小天下莫能破焉者也。夫聖人者。自頂至踵。全體都是至道之凝聚。而有形之神理也。是以一心唯在道義之正。而不知有事之大小精粗。一味安于至正。而不居於不正。猶

㊀不レ做二劫盜的事一。岡田氏本傍註曰。本二王陽明之語一。蓋傳習錄中答二陸元靜一之語。〔此語載在二性理會通陽明語錄一。蓋此時先生據二會通一讀レ之。〕
㊁聖誠而已矣。濂溪周子通書中語。
㊂等間岡田氏本作二等閑一。
㊃〇之字今補足

水之避高就下也。席不正者事之粗而小者也。而聖人造次不坐。猶士之不做劫盜的事。常人於昭々之地事之大者信其節。於冥々之地事之小者。不信其節。此皆至誠之明德昏昧而自欺者也。聖誠而已矣。至誠無息。故無內外。無隱顯。無精粗。無大小。無終始。無遠近。堯舜之於禪授。湯武之於放伐。孔子之席不正不坐。都是一般意思。這箇當體認熟玩。記者擧事之小而常人之所忽。以明聖心貫于隱顯。徹于巨細之至誠。其意至爲簡奧親切也。此節往々等間講論將去。故學者梢柮看得。甚不可也。【註證】中庸曰。君子之道。費而隱。夫婦之愚。可以與知焉。及其至也。雖聖人亦有所不知焉。夫婦之不肖可以能行焉。及其至也。雖聖人亦有所不能焉。天地之大也。人猶有所憾。故君子語大。天下莫能載焉。語

知下岡田氏本佚矣字。圖解有。

小天下莫能彼焉。○小學曰。夫忠臣與孝子不爲昭々信節。不爲冥々惰行。【訓詁】堯舜之禪授。謂堯禪舜。舜授禹也。湯武之放伐。謂湯放桀。武伐紂也。○往々猶言常々也。○簡奥謂其言辭要略。其意義深奥也。○榾柮不活潑之意。【釋席】圖解曰。古者坐席織蒲或竹或葦爲之。天子諸侯席縁以文繡。士席無縁。皆長七尺。廣三尺三寸。爲度。凡布席。天子五重。諸侯三重大夫再重。席南郷北郷。以西方爲上。東郷西郷。以南方爲上。群居一席坐四人。若五人。則長者異席。賓主燕會。則人皆專席。衆賓席皆不屬。饌陳席前。不于席上。正饌在左。庶饌在右。間可容人。謂之長筵。凡坐不中席。有憂者側席。有喪者專席。坐曰席。燕曰筵。臥曰衽。

此節擧位。而包時與處。不坐者。乃是時出之中庸也。圖解曰。聖人心存於正。故即一席而不正。則不坐。其無往而不正。可知矣。須從題外想見至正之心爲妙。須活看。勿泥坐位一件。

○郷人飲酒。杖者出。斯出矣。

此節以明夫子孝悌之至誠。分二條看。郷人飲酒。杖者出。

斯出矣以爲一條鄕飮酒義。曰。鄕飮酒之禮。六十者坐五十者立侍以聽政役。所以明尊長也。六十者三豆。七十者四豆。八十者五豆。九十者六豆所以明養老也。民知尊長養老而后乃能入孝弟。民入孝弟。㊀出尊長養老。而后成教。成教。而后國可安也。君子之所謂孝者。非家至而日見之也。合諸鄕射。教之鄕飮酒之禮。而孝弟之行立矣。蓋鄕飮酒之禮。以孝弟爲主本。夫子之應事接物。左右逢原。是以於鄕飮酒。則自然聖心與鄕飮酒禮合其本。而盡尙齒之至誠。而杖者出。斯出矣。夫常人之於禮。㊁靡不有初。鮮克有終。是故及其禮將畢之際。或有怠于禮者。況於其出之先

㊀出下尊　岡田氏本誤作レ事。

㊁詩大雅蕩篇。

㊀酒義下岡田氏本有曰字。
㊁○印本興作典。飮作禮。非是。
㊂祭義上岡田氏本有記字。無尙齒二字。
㊃孟子曰下岡田氏本有天下二字。
㊄子曰上岡田氏本無一貫二字。

后乎、而夫子尙齒之至誠終始一貫。*譬如盤針之於子午。記者擧其出覗老者、以爲節之一件、以明行禮之際、自始至終、節々盡尙齒之至誠、又是簡奧親切者也。

【註證】禮記鄕飮酒義。㊀鄕飮酒之禮、六十者坐之節、註曰、坐者坐于堂上、立者立于堂下、豆當從偶數。此但十年而加一豆。非正禮也。舊說此是黨正屬民飮酒正齒位之禮。非賓㊁興賢能之飮也。孝者之孝。當作敎。孝經曰、君子之敎以孝也。非家至而日見之也。記射義曰、古者諸侯之射也、必先行燕禮。卿大夫士之射也、必先行鄕飮酒之禮。故燕禮者、所以明君臣之義也。鄕飮酒之禮者、所以明長幼之序也。故射者進退周還必中禮。內志正、外體直。然後持弓矢審固。持弓矢審固、然後可以言中。此可以觀德行矣。○孟子曰、君子深造之以道、欲其自得之也。自得之、則居之安。居之安、則資之深。資之深、則取之左右逢其原。故君子欲其自得之也。○中庸曰、喜怒哀樂之未發、謂之中。發而皆中節、謂之和。中也者、天下之大本也。和也者、天下之達道也。○尙齒。㊂祭義曰、昔者有虞氏貴德而尙齒、夏后氏貴爵而尙齒、殷人貴富而尙齒、周人貴親而尙齒。虞夏殷周天下之盛王也。未有遺年者。年之貴乎天下久矣。次乎事親也。㊃孟子曰、有達尊三。爵一、齒一、德一。朝廷莫如爵。鄕黨莫如齒。輔世長民莫如德。○一貫。㊄子曰、參乎吾道一以貫之。曾子曰、唯。

曰鄕飮酒。曰儺。擧時、包處與位。孝弟之至。中庸之端的也。至誠無息。人鬼一貫之理。昭々在于言外。學者當嘿識神融也。

鄕人儺。朝服而立於阼階。

這條以明夫子事親之至誠。(一)誠一作孝。蓋聖心貫乎幽明、徹乎人鬼。事死如事生。事亡如事存。合莫之至誠。常有與祖宗相流通者。是以鄕人儺。朝服而立於阼階。其如在之至誠一貫之神通妙用於此可視。(二)所謂孝悌之至。通於神明。光於四海。無所不通者也。常人於祭祀。或有不能盡如在之誠、者況於此時乎。而夫子事鬼之誠。猶孩提之愛親。記者

(一)誠岡田氏本亦作孝。

(二)視岡田氏本作觀。

㊀此條上底本有二本末二字。據岡田氏本刪。文理當然。註倒一作例。四字贅言。

㊁孝悌之至云々。岡田氏本無此六字。以下準之。

●照明底本作昭明。今從岡田氏本改之。

【一】準備興飲酒。
一、謀賓介。
二、戒賓介。
三、陳設。
四、速賓介。迎賓介。拜至。

擧常人之所忽。而以明至孝之端的。又以明鬼*神之情狀及祭祀之本意。宜體認玩味。○上一條以明孝及人*之老之至誠。此條以明老吾老之至誠。本末倒出。以明聖人之至德本來一貫。而本末內外之無所可言。㊀倒一作例。此乃寫*照之妙。記者之深意也。【註證】八佾曰。祭如在。祭神如神在。○㊁孝悌之至云々。孝經曰。孝悌之至。通於神明。光於四海。○孩提之愛親。孟子曰。人之所不學而能者。其良能也。所不慮而知者。其良知也。孩提之童。無不知愛其親也。及其長也。無不知敬其兄也。親親仁也。敬長義也。無他。達之天下也。○鬼神之情狀。易曰。精氣爲物。游魂爲變。是故知鬼神之情狀。○及人之老。孟子曰。老吾老以及人之老。幼吾幼以及人之幼。天下可運於掌。【訓詁】寫照。是謂模寫聖人之德行以㊂照明后學之昏迷也。

【鄉飲酒考】儀禮曰。鄉飲酒之禮。主人就先生而謀賓介。主人戒賓。賓拜辱。主人答拜。乃請賓。賓禮辭許。主人再拜。賓答拜。主人退。賓拜辱。介亦如之。乃席賓主人介。衆賓之席皆不屬焉。尊兩壺于房戶間。斯禁。有玄酒在西。設篚于禁南。東肆。加二勺于兩壺。設洗于阼階東南。南北以堂深。東西當東榮。水在洗東。篚在洗西。南肆。羹定。主人速賓。賓

㊀答拜下岡田氏本無還賓拜辱四字。

㊁入門左下岡田氏本無介厭衆賓入衆賓皆入門左十一字。

五、主人獻賓。

㊂興下岡田氏本脫對字。

●賓上岡田氏本佚爵字。

六、賓酢主人。

●○序原本作席、非是、

七、主人酬賓。

拜辱，主人答拜。㊀還賓拜辱，介亦如之，賓及衆賓皆從之。主人一相迎于門外，再拜賓，賓答拜。拜介，介答拜。揖衆賓。主人揖先入，賓厭介入門左，介厭衆賓入，衆賓皆入門左，北上。主人與賓三揖至于階，三讓，主人升，賓升。主人阼階上當楣北面再拜，賓西階上當楣北面答拜。主人坐取爵于篚降洗，賓降。主人坐奠爵于階前辭，賓對。主人坐取爵興，適洗南面坐奠爵于篚下，盥洗。賓進東北面辭洗，主人坐奠爵于篚，㊂興對，賓復位當西序東面。主人坐取爵，沃洗者西北面。卒洗，主人壹揖壹讓升，賓拜洗。主人坐奠爵，遂拜，降盥。賓降，主人辭，賓對，復位當西序。卒盥，揖讓升，賓西階上疑立。主人坐取爵實之，賓之席前西北面獻賓。賓西階上拜，主人少退。賓進受爵以復位。主人阼階上拜送爵，賓少退。薦脯醢，賓升席自西方。乃設折俎，主人阼階東疑立。賓坐左執爵，祭脯醢，奠爵于薦西興。右手取肺，卻左手執本，坐弗繚，右絕末以祭，尚左手嚌之，興加于俎，坐捝手，遂祭酒。興席末坐啐酒，降席坐奠爵，拜告旨，執爵興。主人阼階上答拜。賓西階上北面坐卒爵，興坐奠爵，遂拜，執爵興。主人阼階上答拜。賓降洗，主人降。賓坐奠爵興辭，主人對。賓坐取爵，適洗南，北面。主人阼階東南面辭洗，賓坐奠爵于篚，興對。主人復阼階東西面，賓東北面盥，坐取爵卒洗，揖讓如初升。主人拜洗，賓答拜，興降盥，如主人禮。賓實爵，主人之席前東南面酢主人。主人阼階上拜，賓少退。主人進受爵，復位，賓西階上拜送爵，薦脯醢。主人升席自北方，設折俎，祭如賓禮，不告旨。自席前適阼階上北面坐卒爵，興，坐奠爵，遂拜，執爵興。賓西階上答拜。主人坐奠爵于序端，阼階上北面再拜崇酒，賓西階上答拜。主人坐取觶于篚降洗，賓降，主人辭降，賓不辭洗，立當西序東面。卒洗揖讓升，賓西階上疑立。主人實觶酬賓，阼階上北面坐奠觶，遂拜，執觶興，賓西階上答拜。坐祭，遂飲，卒觶，興坐奠觶，遂拜，執觶興，賓西階上答拜。主人降洗，賓降辭，如獻禮。升不

八、主人獻介。

九、介酢主人。

㊀自主人爵盡以俟速賓岡田氏本佚之。

●〇印本脫于字。非是。

十、主人獻衆賓。

●〇辨今文作徧。下同。」辨當作辯。下同。乃知先生之据閩本。

【二】先旅酬歌樂作。

一、一人擧觶。

二、遵者人之禮。（略）

三、樂賓。

(1)升歌三終及獻工。

拜洗。賓西階上立。主人實觶。賓之席前北面。賓西階上拜。主人少退。卒拜。進坐奠觶于薦西。賓辭。坐取觶。復位。主人阼階上拜送。賓北面。坐奠觶于薦東。復位。」主人揖降。賓降立于階西。當序東面。主人以介揖讓升。拜如賓禮。主人坐取爵于東序端。降洗。介降。主人辭降。介辭洗。如賓禮。升不拜洗。介西階上立。主人實爵。介之席前西南面獻介。介西階上北面拜。主人少退。介進北面受爵。復位。主人介右北面。拜送爵。介少退。主人立于西階東。薦脯醢。介升席自北方。設折俎。祭如賓禮。不嚌肺。不啐酒。不告旨。自南方降席。北面。坐卒爵。興。坐奠爵。遂拜。執爵興。主人介右答拜。」介降洗。主人復阼階。降辭如初。卒洗。主人盥。介揖讓升。授㊀主人爵于兩楹之間。介西階上立。主人實爵酢于西階上介右。坐奠爵。遂拜。執爵興。介答拜。主人坐祭。遂飮。卒爵興。坐奠爵。遂拜。執爵興。介答拜。主人坐奠爵于㊀西楹南。介右再拜崇酒。介答拜。主人復阼階揖降。介降立于賓南。」主人西南面三拜衆賓。衆賓皆答壹拜。主人揖升。坐取爵于西楹下。降洗升實爵于西階上。獻衆賓。衆賓之長升。拜受者三人。主人拜送。坐祭立飮。不拜既爵。授主人爵。降復位。衆賓獻則不拜。受爵坐祭立飮。每一人獻則薦諸其席。衆賓㊂辨有脯醢。』主人以爵降。奠于篚。揖讓升。賓厭介升。介厭衆賓升。衆賓序升即席。一人洗升。擧觶于賓。實觶西階上。坐奠觶。遂拜。執觶興。賓席末答拜。坐祭遂飮。卒觶興。坐奠觶。遂拜。執觶興。賓答拜。降洗。升實觶。立于西階上。賓拜。進坐奠觶于薦西。賓辭。坐受以興。擧觶者西階上拜送。賓坐奠觶于其所。擧觶者降。」設席于堂廉東上。工四人二瑟。瑟先。相者二人皆左何瑟。後首挎越內弦。右手相。樂正先升。立于西階東。工入。升自西階。北面坐。相者東面坐。遂授瑟。乃降。工歌鹿鳴・四牡・皇々者華。卒歌。主人獻工。工左瑟。一人拜。不興受爵。主人阼階上拜送爵。薦脯醢。使人相祭。工飮。不拜既爵。授主人爵。衆工則不拜受爵。祭飮。辨有脯醢。不祭。

(2)奏笙三終及獻笙。
(3)間歌三終。
(4)合樂及告樂備。

【三】旅酬。
一、司正安賓。
二、司正表位。
三、旅酬
(1)賓酬主人。
(2)主人酬介。
(3)介酬衆賓、衆賓旅酬。

【四】燕飲燕樂。
一、二人擧觶。(略)
二、徹俎。
三、坐燕
⊖端上席校勘記曰　唐石經楊氏敖氏俱作序。

【五】後事。
一、賓出。
二、拜賜。拜辱。息司正。(略)

大師則爲之洗。賓介降。主人辭降。工不辭洗。笙入。堂下磬南北面立。樂南陔·白華·華黍。主人獻之于西階上。一人拜。盡階不升堂受爵。主人拜送爵。階前坐祭立飲。不拜既爵。升授主人爵。衆笙則不拜受爵。坐祭立飲。辨有脯醢。不祭。乃間歌魚麗。笙由庚。歌南有嘉魚。笙崇丘。歌南山有臺。笙由儀。乃合樂周南關雎·葛覃·卷耳。召南鵲巢·采蘩·采蘋。工告于樂正曰。正歌備。樂正告于賓。乃降。』主人降席自南方。側降。作相爲司正。司正禮辭許諾。主人拜。司正答拜。主人升復席。司正洗觶。升自西階。阼階上北面受命于主人。主人曰。請安于賓。司正告于賓。賓禮辭許。司正告于主人。主人阼階上再拜。賓西階上答拜。司正立于楹間以相拜。皆揖復席。司正實觶。降自西階。階間北面坐奠觶。退共少立。坐取觶。不祭遂飲。卒觶興。坐奠觶。遂拜。執觶興洗。北面坐奠觶于其所。退立于觶南。賓北面坐取俎西之觶。阼階上北面酬主人。主人降席。立于賓東。賓坐奠觶。遂拜。執觶興。主人答拜。不祭立飲。不拜卒觶。不洗實觶。東南面授主人。主人阼階上拜。賓少退。主人受觶。賓拜送于主人之西。賓揖復席。主人西階上酬介。介降席自南方。立于主人之西。如賓酬主人之禮。主人揖復席。司正升相旅曰。某子受酬。受酬者降席。司正退立于席端東面。受酬者自介右。衆受酬者受自左。拜興飲。皆如賓酬主人之禮。辨。卒受者以觶降。坐奠于篚。司正降復位。』司正升自西階受命于主人。主人曰。請坐于賓。賓辭以俎。主人請徹俎。賓許。司正降階前命弟子俟徹俎。司正升立于席端。賓降席北面。主人降席阼階上北面。介降席西階上北面。說屨揖讓如初升坐。乃羞。無算爵。無算樂。』賓出。奏陔。主人送於門外再拜。』○鄕飲酒義曰。鄕飲酒之義。主人拜迎賓于庠門之外。入三揖而后至階。三讓而后升。所以致尊讓也。盥洗揚觶。所以致絜也。拜至拜洗拜受拜送拜既。所以致敬也。尊讓絜敬也者。君子之所以相接也。君子尊讓則不爭。絜敬

則不慢。不慢不爭則遠於鬪辨矣。不鬪辨則無暴亂之禍矣。斯君子所以免於人禍也。故聖人制之以道。鄉人・士・君子尊於房戶之間。賓主共之也。尊有玄酒。貴其質也。羞出自東房。主人共之也。洗當東榮。主人之所以自絜而以事賓也。賓主象天地也。介僎象陰陽也。三賓象三光也。讓之三也。象月之三日而成魄也。四面之坐。象四時也。天地嚴凝之氣。始於西南。而盛(一)於西北。此天地之尊嚴氣也。此天地之義氣也。天地溫厚之氣。始於東北。而盛於東南。此天地之盛德氣也。此天地之仁氣也。主人者尊賓。故坐賓於西北。(二)而坐介於西南。以輔賓。賓者接人以義者也。故坐於西北。主人者接人以仁。以德厚者也。故坐于東南。而坐僎於東北。以輔主人也。仁義接賓主有事。俎豆有數曰聖。聖立而將之以敬曰禮。禮以體長幼曰德。德也者。得於身也。故曰。古之學術道者。將以得身也。是故聖人務焉。○圖考曰。鄉飲酒序。主(三)(州以郡守。縣以丞令。)位於東南。賓(擇鄉里寄居年德高及致仕者。)位於西北。僎(州以通判。縣以丞或簿屬。)位於東北。介(以次長。)位於西南。三賓(以賓之次者爲之。)位於賓主介僎之後。又設郡(四)僚之位。東(五)南相向。其餘仕與未仕者。以齒序位於西(六)廊。司正以衆推服者爲之。相及贊以士之熟於儀者爲之。○先一日設罇・彝・爵・洗。各如奠謁之儀。又於庠序之廊。設賓主介僎三賓之次。又設席於堂下。凡鄉之仕與未仕者。以齒序立。又設席於庫門之外。自堂下各以序行。立於庫門外之席。質明主人率賓以下先釋菜於先聖先師。退各就次。以俟速賓。

【杖考】王制曰。五十杖于家。六十杖于鄉。七十杖于國。八十杖于朝。九十者。天子欲有問焉。則就(七)其室以珍從。○秋官伊祁氏掌供王之齒杖。古者一命齒于鄉里。再命齒于族。三命不齒族。有七十者。不敢先。魏文帝詔曰。先王制几杖之錫。所以賓禮黃耇褒崇元老也。○曲禮曰。大夫七十而致事。若不得謝則必賜之几杖。○續漢書禮義志曰。仲

(一) 盛下印本無於字。非是。
(二) ○印本無而字。非是。
(三) 按括弧(　)內圖考小字兩行。今下無一字。
(四) ○郡當作群。按圖解作群。
(五) 東南圖解作東西。
(六) 西廊圖解作兩廊。
(七) 就・秋岡田氏本及圖解並作造・夏。

[1] 儺考以下當提行。姑從印刷之便。

[2] 戈底本作斧。非是。改從圖解及岡田氏本。

[3] ○帥印本作師。非是

[4] 圖解岡田氏本作圖考。按解考並有此說。朝以間服底本誤作食。從岡田氏本訂之。

秋按戶比民年七十者。授之玉杖。杖端以鳩爲飾。鳩鳥不噎。欲老人不噎。[1]【儺考】圖解曰。按儺作難。古者一歲三儺。季春命國人儺。以畢春氣。仲秋天子儺。以達秋氣。季冬天子命有司令鄉人大儺。以逐疫。以達陽氣。周禮方相氏狂夫四人蒙熊皮。黃金四目。玄衣朱裳。執戈[2]揚盾。帥[3]百隸毆疫鬼。祖裼叫號。比戶蒐索。事近于亂。古人因民俗而爲此禮。以王命事鬼神。故聖人禮以行之。靜以鎮之。莊以蒞之。所以防其狂逞。節其悖亂之道也。

朝服圖

[4] 圖解曰。天子燕服爲諸侯朝服。玉藻曰。朝服以日視朝於內朝。○朝服○天子以田。以燕群臣。○以養老。○天子之卿服以從燕諸侯。○朝服以食○諸侯不限畿內畿外。視朝行道。皆服之。○諸侯之孤·卿·大夫服以朝君。○諸侯之臣與其君日視朝之服。○皮弁重於視朝。○朝服重於玄端。○朝服緇帶。朝服素韠。○朝服白屨。

○問人於他邦。再拜而送之。

這節以明夫子與人交之誠敬。分二條看。問人於他邦。再

㊀不下岡田氏本無相字。

㊁遺岡田氏本誤作遣。下同。

拜而送之、以爲一條。朱子曰。古人有此禮。蓋聖心一貫之至誠。無遠近。無面背。是以雖遠而與親見其人。一味依其禮而致其敬。常人於相見之時。未有致其敬者。況於其遠而不相見者乎。而夫子與人交。止於信。猶水之就下不舍晝夜。

【註證】大全朱子曰。古人有此禮。遺使問人於他邦。則主人從背後拜而送之。○大學曰。詩曰。穆穆文王。於緝熙敬止。爲人君止於仁。爲人臣止於敬。爲人子止於孝。爲人父止於慈。與國人交。止於信。

遺人與受饋。舉位而包時與處。節々至誠。中庸之端的也。學者宜因其迹而求其心也。

康子饋藥。拜而受之。曰。丘未達。不敢嘗。

此條因上文記遺人之誠敬。而舉夫子受饋之事。以明其

㊀疏當作註。

㊁浜岡田氏本作遺。恐非。

㊂至妙二字岡田氏本重出。

誠敬。疏㊀曰。未知其故。故不敢嘗禮也。蓋嘗而拜之者禮之常也。未達而不敢嘗者禮之變也。平常之飲食皆知其故而無疑。故嘗有疑。則雖常飲食。不可敢輕嘗。況於藥餌不中其病。則禍不旋踵者乎。然夫子慮人皆知禮之常。而不知禮之變。而其有不敬之疑。是以曰丘未達。不敢嘗。蓋待使者。猶對季康子。又是上文拜而送㊁之至誠也。不曰未達不敢嘗禮也者。謙德之光景。見于辭氣者也。○此節亦擧常人之所忽。而夫子盡其道。以明至誠無息之流行。又以明止於信之本然。至㊂妙者也

【藥考】周禮曰。醫師掌醫之政令。聚毒藥。以共醫事。凡邦之有疾病者・疕瘍者造焉。則使醫分而治之。歲終則稽其醫事。以制其食。十全爲上。十失一次之。十失二次之。十失三次之。十失四爲下。疾醫掌養萬民之疾病。以五味・五穀・五藥。養其病。以五氣・五聲・

㊀〇常字今補之。」岡田氏本亦無之。

五色，眡其死生，兩之以九竅之變，參之以九臟之動。曲禮曰。君有疾飲藥，臣先嘗之。親有疾飲藥，子先嘗之。醫不三世，不服其藥。按病有表裏·寒熱·虛實·邪正。診有望·聞·問·切。藥有寒熱·溫涼·升降·浮沈·酸苦甘辛鹹·有毒·無毒。治有汗·吐·下·溫·補·滲·解。是以其故難知。治療鮮十全。班固有言。曰。有病不治。常㊀得中醫。誠一藥之誤。悔噬臍。

〇廐*焚。子退朝曰。傷人乎。不問馬。

此節以描畫夫子仁民之至德。按孝經曰。天地之性。人爲貴。人之行。莫大於孝。又曰。愛親者。不敢惡於人。敬親者。不敢侮於人。大學曰。孝者所以事君也。弟者所以事長也。慈者所以使衆也。康誥曰。如保赤子。蓋聖人之德。無以加於孝。孝通於神明。光於四海。無所不通。而其本*實親切者。仁民是也。是以聖人之於民。猶父母之於赤子。假令赤子在火所。其父母豈有異問乎。夫子問人。而不問馬之神通妙

㊀貴人賤畜朱熹集註說。
㊁而下岡田氏本無不能字。
㊂之下岡田氏本佚傷字。不作否。
㊃遽底本作處。今据岡田氏本訂。
㊄仁下底本多一之字。依岡田氏本刪。

用可想觀焉。此乃造*次顛沛之頃。最足默識一貫之至德。所謂貴㊀人賤畜。只是皮膚之講而已。宜理會無言之骨髓。者箇是記者寫照之妙處也。【訓詁】本實。本如根本之本。實如果實之實。○造次猶言草次。倉卒至前急也。對從容言。○顛沛顛如物之仆倒。而㊁不能站立。沛如水之滂沛而不能安流。猶言傾危也。對安常言。

此節之義。以事情推之。夫子問人之后。必當問馬。然答者因答傷人乎之問。而及馬之㊂傷不故不及再問馬而已。記者直因其言而添不問馬一句。以明仁民愛物之先后。

此節擧處而包時與位。問人而不問馬之仁。即中也。蓋記者之主意在由所問與急遽㊃而明仁之㊄至誠焉。他節寫照之妙處。當推類而看。

㊀四書說叢。十七卷。明沈守正撰。
㊁僖公二十九年左氏傳疏。
㊂也至以下十六字底本佚之。據岡田氏本補。孝經啓蒙士之孝條下亦載之。

【廐考】說叢曰。廐養馬之閑也。左傳疏㊁曰。凡馬春分百草始繁。則牧于坰野。秋分農功始藏。水寒草枯。則皆還廐。此周典之制也。

○君賜食。必正席先嘗之。君賜腥。必熟而薦之。君賜生。必畜之。

這節以明夫子事君之至誠。分五條看。自君賜食至於必畜之。爲第一條。必正席嘗。必薦。必畜。節々忠誠鑑照之神感。曲盡其至妙。天理之節文以意起。有一段深情在。記者用必字。畫出君前與在家一貫之誠敬。此條以明退而不忘君之忠貞。【訓詁】忠貞。馬融曰。忠者中也。㊂至公無私一其心之謂矣。貞正而固也。

此節每條舉時。而包處與位。條々忠敬。卽中庸也。

侍*食於君。君祭先飯。

此條以明進而事君之忠誠。蓋夫子之時君弱臣泰而拜乎上。故或無盡先飯之禮者。而聖人必致其誠敬。所謂從下之精義。而自然風人臣。猶準*繩之於不平不直。記者用此。以明進而盡其忠之全體大用。

【註評】孝經事君之節曰。君子之事上也。進思盡忠。退思補過。將順其美。匡救其惡。【訓詁】準繩準所以爲平。繩墨線取直之器。【侍食考】玉藻曰。若賜之食而君客之。則命之祭。然後祭。先飯辯嘗羞。飲而俟。若有嘗羞者。則俟君之食。然後食。飯飲而俟。君命之羞。羞近者。命之品嘗之。然後唯所欲。凡嘗遠食。必順近食。君未覆手。不敢飧。君既食。又飯飧。飯飧者三飯也。君既徹。執飯與醬。乃出授從者。凡侑食不盡食。食於人不飽。唯水漿不祭。若祭爲已傺卑。

疾。君視之。東首加朝服。拖紳*。

這條記答君顧之禮。蓋其疾病。而雖不能致容貌之敬。然心之至敬。與不疾之時一貫。是以加朝服。拖紳。以見至敬

㊀當陳註作讀。

㊁〇甲本無惟字。非是。

㊂〇繒原本作絹。非是。岡田氏本亦作絹。

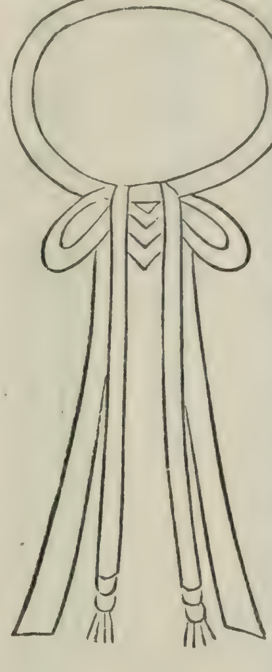
㊃〇緶音辮。

㊄〇弟子縞帶四字今補足。岡田氏本有此四字。

之不易。記者擧此。以明常變無二一心。治亂一貫之敬忠。【朝紳考】

玉藻曰。天子素帶朱裏終辟。註曰。此辟字當㊀如前章縞冠素紕之紕。縁也。天子以素爲帶。素熟絹也。用朱爲裏。終。竟也。終辟。終竟此帶盡縁之也。而素帶終辟。註曰。而下缺諸侯字。諸侯亦素帶終辟。而不朱裡。大夫素帶辟垂。註曰。大夫之素帶。則㊁惟縁其兩耳及垂下之紳。腰後不縁。士練帶率。下辟。註曰。率音律。練繒㊂也。士以練爲帶。單用之。而㊃緶緝其兩邊。故謂之繂。腰及兩耳皆不縁。惟縁其紳。故曰下辟。居士錦帶。㊄弟子縞帶。註曰。以錦爲帶。示文也。弟子用生絹。示質也。居士道藝處士也。

朝紳圖



君命召。不俟駕行矣。

此條以明夫子全體都是敬忠。都是君用之誠。孝經曰。君子之事親孝。故忠可移於君。禮記曰。父命呼唯而不諾。手

⊖○卽印本作則。

⊜大岡田氏本作太。下同。

⊜集註曰重出。而不附一語。先生則有此解。宜活看。

執業則投之。食在口則吐之。走而不趨乃至孝之光景也。君命召。不俟駕行矣乃是至孝移于君。而爲忠貞之光景也而其孝其忠不識不知順帝之則者也。如有毫釐之按排則非至德矣

【考註證】圖解曰。在官而承君命召也。倉皇被命。⊖卽急遽以趨。不待駕車而行。不晏安而稽戻也此皆禮之以意起者。而遂爲萬世事君之則也。

入⊜大廟。每事問。●

此條以明夫子事君盡禮之極。蓋夫子入公門鞠躬如也。如不容過位。色勃如也足躩如也。升堂鞠躬如也。屛氣似不息者事君之嚴敬。極其至可知。而大廟助祭又是嚴敬甚極其至之時而初仕入大廟助祭。又是一段深致嚴敬

之時也。方此時、則雖知亦問。至禮之感通而不易之禮也。記者舉此以明夫子事君盡禮之至誠。以終此節之義。爲親切至妙。學者宜嘿識夫子德光之蘊奧。及記者之宗旨也。○夫子嘗曰。事君盡禮。人以爲諂也。此節善寫得盡禮之妙用。其寫照之妙處。宜嘿識心通。

○朋友死。無所歸。曰於我殯。

此節以明夫子交友之至誠。分二條看。朋友死。無所歸。曰。於我殯。以爲一條。蓋視朋友之憂。如己有之。無一毫計較利害之私。故朋友死無所歸。則與骨肉之親一味殯之。記者舉此。以明夫子朋友之交同憂患。而無物我之信。

此節皆擧時而包處與位。曰殯曰拜曰不拜時出中庸之景象也。

朋友之饋。雖車馬非祭肉不拜。

這條以明夫子貴禮而賤財之精義。蓋聖人之與人交止於信而不識有物我。是以老吾老而及人之老敬其祖考同於已親所以拜祭肉也。於財用則有無相通。而取予互不以爲惠所以由通財之義而不拜也。拜與不拜所謂衡平之施也○上條與朋友同憂患之誠。此條朋友之交貴禮通財之誠也。擧二條以明物我一貫之信。【註證】貴禮通財。鄕飲酒義曰。祭薦祭酒敬禮也。嚌肺嘗禮也。啐酒成禮也。於席末言是席之正非專爲飲食也爲行禮也。此所以貴禮而賤財也。卒觶致實於西階上。言是席之上非專爲飲食也。此先禮而後

席之上、疏曰。前文方論設席之禮。故言是席之正。此覆說前席。故變文言是席上。上亦正也。

節底本誤作條。據岡田氏本訂。

財之義也。先禮而後財。則民作敬讓而不爭矣。

○寢不尸。居不容。

此節以泛明威儀之天則。分六條看。寢不尸居不容。以爲第一條。蓋常人終日擾*々。全賴後*天査滓厚味培養。方穀*一日之用。夜間全賴一覺熟睡。方能休息。方此時。陽光盡爲陰濁所陷。如死人一般。而聖人終*日乾々。不爲后天之昏氣所梏*。是以嚮*晦入宴息。而元神與*先天清氣相依相息。故曰。寢不尸。常人於公謁等衆人屬目之時。其莊敬出于强爲。是以於燕居之時。則不怠惰放肆。或太嚴厲。而聖人之至敬。自然而發見之景象。猶水之因地爲象。是以雖

不爲*見大賓承大祭之禮容、而隋慢邪僻之氣、一毫不設於身體。所謂申々如也夭々如者也。聖人一團至敬。故謂不容。以包和中之敬、故曰居不容。記者擧此二句、以明夫子威儀神通妙用之自得、而獨*往獨來無所假於外也【訓詁】擾煩也。亂也○后天査滓。指口鼻耳目四肢之欲言。○轂弓滿也○秳亂也○先天清氣指浩然之氣言。○見大賓爲君擯之類。承大祭入大廟助祭之類。【註證】終日云々。易曰、君子終日乾乾、夕惕若。厲无咎。註曰、乾々勤也○嚮晦云々、易隨象曰、澤中有雷隨、君子以嚮晦入宴息。本義曰、雷藏澤中、隨時休息。○獨往獨來。大公曰、一者能獨往獨來。【尸考】圖解曰、人身中有三尸。上尸名彭倨。中尸名彭質。下尸名彭矯。爲人大害。惟于庚申日夜守之不臥。則三尸絕矣。

見齊衰者、雖狎。必變。見冕者與瞽者。雖褻。必以貌。

此條以明接物之威儀毋*不敬。蓋夫子之明德、猶明鏡之照物。見齊衰者與瞽者、則好*生哀矜之仁。便感通。見冕者、

(一)神通鑑照之不在所與九字當作非神通鑑照之所與八字。
(二)者上底本多一容字。依岡田氏本删。
(三)視岡田氏本作覩。
(四)嚴岡田氏本作儼。
(五)「禮者仁云々五字恐衍。」五字岡田氏本作禮者仁之著。今改從。按佚典據之記載。卷之十一五性圖說注朱子語中亦有此語。

則尊爵之禮。便感通。狎與不狎。褻與不褻。皆是境遇之異。而神通(一)鑑照之不在所與。是以一味變常容以禮容。禮者(二)仁之著也。故感通之本。雖有仁禮之異。見於面施於四體。則相同。冕者與瞽者相連說意。亦可視(三)焉。

【註證】曲禮曰。毋不敬。嚴(四)若思。安定辭。安民哉。○好生。書曰。罪疑惟輕。功疑惟重。與其殺不辜。寧失不經。好生之德。洽于民心。○(五)禮者仁之著。

凶服者。式之。式負版者。

這條記車上之威儀。以申明毋所不敬之極。厩焚。子退朝。曰。傷人乎。不問馬。況於負版者乎。聖人滿腔子是貴人好生之仁。故式負版者。此條記車上之威儀。故申舉凶服者。以明好生之心益親切也。

【訓詁】滿腔子。腔子猶言軀殼耳。滿腔子只是言充塞周徧。

○絰印本誤作經。今皆改之。

【服考】家禮曰。其服之制。一曰。斬衰三年。註曰。斬不緝也。衣裳皆用極麤生布。旁及下際。皆不緝也。衣縫向外。裳前三幅。後四幅。縫內向。前後不連。每幅作三輒。輒謂屈其兩邊相着而空其中也。衣長過腰。足以掩裳上際。縫外向。背有負版。用布方尺八寸。綴於領下垂之。前當心有衰。用布長六寸廣四寸。綴於左衿之前。左右有辟領。各用布方八寸。屈其兩頭相著。爲廣四寸。綴於領下。在負版兩旁。各攙負版一寸。兩腋之下有衽。各用布三尺五寸。上下各留一尺。正方一尺之外。上於左旁裁入六寸。下於右旁裁入六寸。便於盡處相望斜裁。却以兩方左右相沓。綴於衣兩旁垂之向下。狀如燕尾。以掩裳旁際也。冠比衣裳用布稍細。紙糊爲材。廣三寸。長足跨頂。前後裹以布。爲三輒。皆向右。縱縫之。用麻繩一條。從額上約之。至項後交過前。各至耳結之。以爲武。屈冠兩頭入武。內向外反屈之。縫於武。武之餘繩垂下。爲纓。結於頤下。首絰以有子麻爲之。其圍九寸。麻本在左。從額前向右圍之。從項過後。以其末加於本上。又以繩爲纓。以固之。如冠之制。腰絰大七寸有餘。兩股相交。兩頭結之。各存麻本。散垂三尺。其交結處。兩旁各綴細繩繫之。絞帶用有子麻繩一條。大半腰絰。中屈之。爲兩股。各一尺餘。乃合之。其大如絰。圍腰。從左過後。至前乃以其右端穿兩股間。而反插於右。在絰之下。苴杖用竹。高齊心。本在下。屨亦粗麻爲之。婦人則用極粗生布爲大袖長裙蓋頭。皆不緝。布頭𢄙竹釵。麻屨。衆妾則以背子代大袖。凡婦人皆不杖。二曰。齊衰三年。註曰。齊緝也。其衣裳冠制並如斬衰。但用次等麤生布。緝其旁及下際。冠以布爲武及纓。首絰以無子麻爲之。大七寸餘。本在右。末繫本下。布纓。腰絰大五寸餘。絞帶以布爲之。而屈其右端尺餘。杖以桐爲之。上圓下方。婦人服同斬衰。但布用次等。爲異。後皆倣此。三曰。大功九月。註曰。服制同上。但用稍粗、熟布。無負版衰辟領。首絰五寸餘。腰絰四寸餘。四曰。小功五月。註曰。服

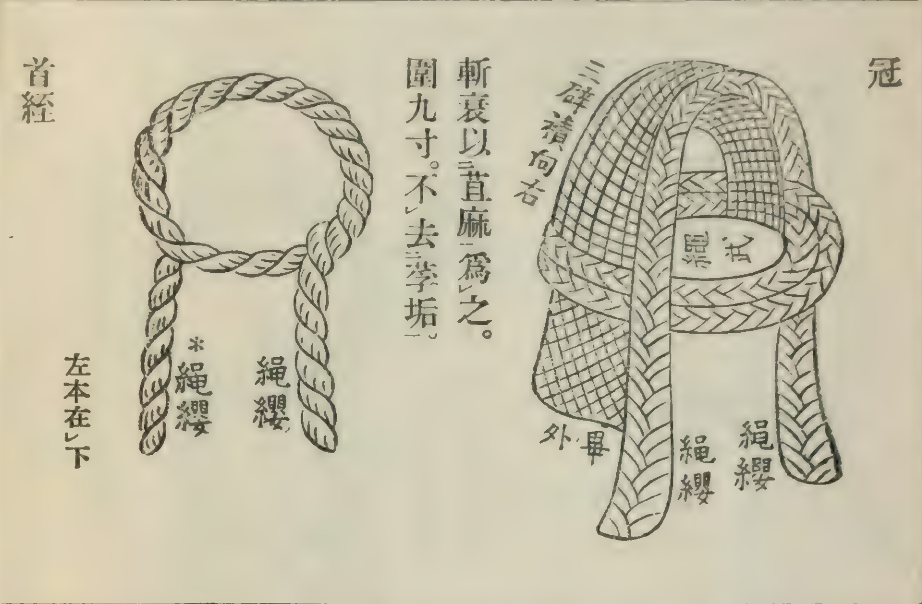
底本無二界線一。岡田氏本有二界線一。而無レ圖。今從補。

*布武、*三辟積向右、*縄纓、底本並佚、今據二圖考一補レ之。

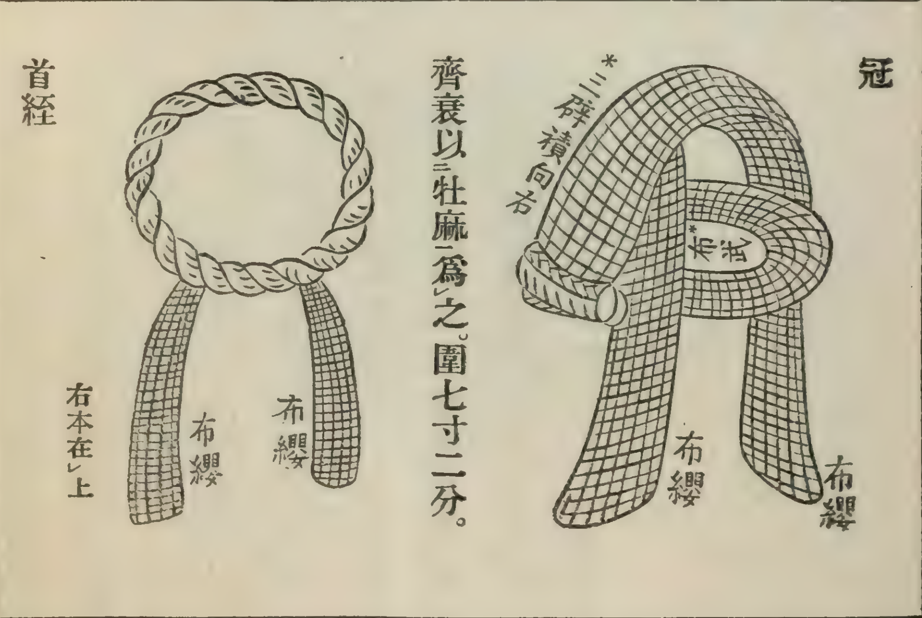
底本圖中無二句讀及返點一。今施レ之。下倣レ之。

制同レ上。但用二稍熟細布一。冠左縫。首経四寸餘。腰経三寸餘。」五曰。緦麻三月。
註曰。服制同レ上。但用二極細熟布一。首経三寸。腰経二寸。並用二熟麻一。纓亦如レ之。」

斬衰冠経之圖



齊衰冠経之圖



首絰上底本多二一於字一。下佚二斬字一。岡田氏本佚二全文一。今依二圖考一訂。

岡田氏本有二界線及題字一。而無レ圖。下同。

斬衰要絰絞帶之圖

要絰

斬衰至二大功一。初皆散垂。至二成服一乃絞。○五十不二散垂一。

以二苴麻一爲レ之。圍七寸二分。散垂至二三日一絞レ之。婦人同。

絞帶

斬衰用レ麻

象二革帶一者。苴麻爲レ之。

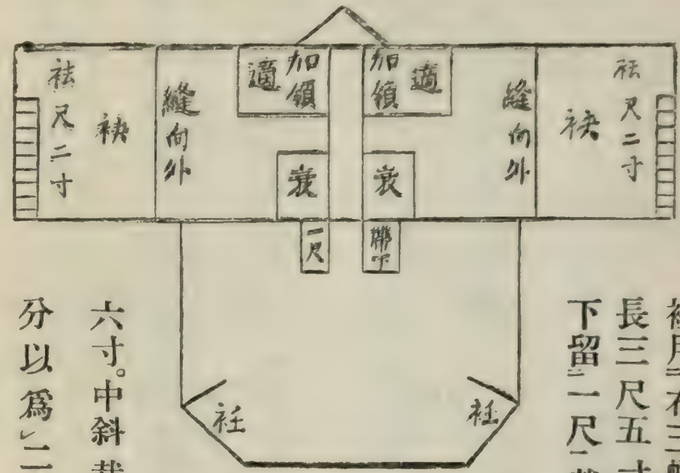
腰絰。其大七寸。圍小二於首絰一。斬衰至二大功一。初皆散垂。至二成服一乃絞二其交結處一。兩旁各綴二細繩一繫レ之。束在二絞帶之下一。小功以下。結レ本不二散垂一。

絞帶用レ麻。一頭有二彄子一。以二一頭一穿二於彄子中一。而反插二於右一。繫在二腰絰之下一。既束二腰絰一。又束二絞帶一。唯斬衰凡束二二條一。齊衰以下不レ用レ麻。但用二布帶一。亦束在二腰絰之下一。不二絞爲一レ繩。

圖考布下三幅作二幅。後圖帶下一尺作帶下二尺。外獨作內圖。子上無帆字。圖解同。

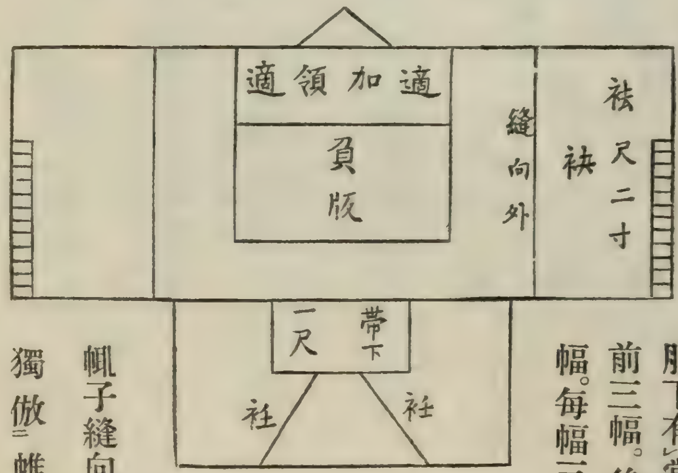
按。圖考。衰衣後圖左袂與右袂同有縫向外袂。袪尺二寸八字。蓋底本脫之。

衰衣前圖



衽用布三幅。各長三尺五寸。上下留一尺。裁入六寸。中斜裁之。分以爲二。

衰衣後圖



服下有裳。裳前三幅。後四幅。每幅三輒。帆子縫向外。獨倣帷裳。

此與圖考所載全合。×元博按云々蓋贅言耳。

兩種岡田氏本皆誤作屨好圖考作奸

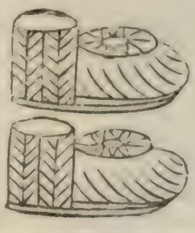
斬衰苴杖

苴杖用竹。高齊心。本在下。苴惡貌。取黎黑。

至痛色慘。竹圓象天。內外有節象子也。

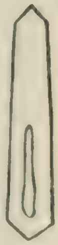
菅屨之圖

菅者好草也。以爲鞋。言其惡貌。



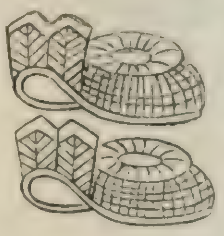
齊衰杖

削杖用桐木。上圓下削之使方。高齊心。



本在下。取悲痛。下方取母。象於地也。

屨圖



蔬草也。小功以下不杖桐繩屨。

大功冠

竝同齊衰

小功冠

三辟積向左。用熟細布。廣三寸餘。與齊衰同。

緦麻冠

布澡纓辟積同小功。餘與齊衰同。布澡乃治熟布也。

小功腰經

小功以下結本不散垂。齊衰同。

牡圍二寸熟麻。×元博按。此注恐有誤。

緦麻要經

此要經五分去一。婦人同齊衰以下布

用熟麻。

横上又字圖解作文。岡田氏本作又。按先生有意而訂之。非有誤。

【負版考】周禮秋官司民掌登萬民之數。自生齒以上皆書于版。辨其國中與其都鄙及其郊野。異其男女。歳登下其死生。及三年大比。以萬民之數詔司寇。司寇及孟冬祀司民之日。獻其數于王。王拜受之。登于天府。內史司會冢宰貳之以贊王治。【式考】圖解曰。式軾同。古者乘車立。惟老人婦人坐。馬駭車疾。輿前横木高五尺五寸曰較。使乘者憑以立。較下又横一木。高三尺三寸曰軾。詩所謂重較也。乘者遇有所敬。則下其手俯躬曰式。

有盛饌。必變色而作。

此條記賓主相交之威儀。以明夫子先禮而后財之義。蓋賓主之禮。非專爲飲食也。主人敬至。而行之以盛饌。夫子之於人。雖狎。必變。雖褻。必以貌。況於敬至而設盛饌者乎。故變色而作。所以答主人之敬也。此條與上二條以明夫子接物之德光。專在德義上。而不由於外物也。

迅雷風烈必變。

此條記夫子敬天之威儀。以明天是大底聖人。聖人是小底天之至妙。蓋夫子與天地合其德。與鬼神合其吉凶。迅雷風烈天地鬼神之妙用。而大虛〔一〕之〔二〕氣象變。是以同體之聖人、不識不知。順帝之則。容貌自然與大虛氣象之變相合而變。此變字與上文必變・變色之變同。謂恭敬之見於容貌。非恐懼之變色。＊大舜納于大麓。烈風雷雨弗迷者。以心言。此條之變。以貌之敬言。蓋大舜夫子均是其心不迷。而其貌敬者也。記者擧此以明夫子之威儀。都是動以天、之義也。【註證】天大底云々。與天地合云々。〔三〕易曰、夫大人者、與天地合其德。與日月合其明。與四時合其序。與鬼神合其吉凶。先天而天弗違。後天而奉天時。天且不違。而況於人。況於鬼神乎。○大舜云々。舜典曰、曰若稽古帝舜。曰重華協于帝。濬哲文明。溫恭允塞。玄德升聞。乃命以位。愼徽五典。五典克從。納于百揆。百揆時敘。

〔一〕虛上大字岡田氏本作太。下同。
〔二〕大虛下之字疑當在氣象下。
〔三〕按、孝經啓蒙、聖人之德下曰、易曰。大人與天地合其德。故曰、天是大底聖人。聖人是小底天。（初稿本第十五丁。）

㊀隱公九年穀梁傳曰。震雷也。電霆也。淮南子天文訓曰。陰陽相薄。感而爲雷。激而爲霆。

㊁閶底本作闓。今從岡田氏本。改之。

㊂巨底本誤作臣。改從呂覽及岡田氏本。

㊃風烈岡田氏本同。圖解作凡風。

㊄物下底本有而字。從圖解及岡田氏本。刪。

㊅節岡田氏本同。圖解作章。蓋先生有意改之。下同。

賓于四門。四門穆々。納于大麓。烈風雷雨弗迷。【雷考】春秋穀㊀梁傳曰。陰陽相感。薄而爲雷。激而爲霆。王充曰。雷者太陽之激氣。正月陽動始雷。五月陽盛雷迅。秋冬陽衰雷潛。盛夏太陽用事。陰氣乘之。陽陰分爭。則相校軫。校軫則激射。激射爲毒。中人輙死。中木木折。中屋屋壞。易曰。動萬物者。莫疾乎雷。又曰。雷以動之。【風考】說文風从蟲凡聲。風動蟲生。故蟲八日而化。故八風也。易緯八節之風。爲八風。立春條風。春分明庶風。立夏清明風。夏至景風。立秋涼風。秋分閶㊁闔風。立冬不周風。冬至廣莫風。又呂氏春秋八風東北炎。東滔。東南薰。南巨㊂。西南涼。西飂。西北厲。北寒。又爾雅東谷風。西秦風。南凱風。北涼風。易曰。撓萬物者。莫疾乎風。又曰。風以散之。河圖通紀曰。風者天地之使也。陰陽管見曰。乾變其初九。爲初六。則爲巽。故謂風爲天之變。蓋天下交於陰也。黃帝㊂風經曰。調暢祥和。天之喜氣也。折傷奔厲。天之怒氣也。圖解曰。風㊃烈者。陰陽之亂氣。激發而起。飛沙揚礫。發屋拔樹。太平之世。風不搖條。順物㊄布氣。開甲破萌而已。

此節擧時而包處與位。條々威儀之天則。卽中也。圖解曰。這節㊅書。都就意想所不著處言。衆人屬目。或出矜持。大賓公謁時。由作意。其他或朝廷交際。不得不嚴。乃曰寢。曰居。曰狎。曰褻。曰盛饌。曰風雷。雖尋常日用。妙合自

㊀以諸例推之。時處位考常在每節首條直後。當從印本之次。圖解說亦屬居不容頭注。

㊁升車上底本有圈子。今删。按岡田氏本標目作升車條。下文起筆亦作這條。而不作這節。蓋先生不從朱子之分節者。蓋別有意矣。

然豈非盛德之至。㊀按此注印本在居不容注後。今從原本。

升㊁車。必正立執綏。車中不內顧。不疾言。不親指。

這條又記車中威儀之則。蓋車中是燕居之類。是以常人之所忽也。而夫子至敬之感通無間。至誠無息者也。故升車必正立執綏。車中不內顧。不疾言。不親指。節々皆盡其天則。記者舉此以明夫子威儀之天則。流水因地爲象之神通妙用。而無公私隱顯之異。而終此節之義。甚爲簡奥親切也。

○色斯舉矣。翔而後集。

此節以明聖之時。而爲一篇之標*的歸*宿之地。分三條看。

要上比字底本作此。從岡田氏本改之。○者下印本無之字。辟世下底本無其次辟地四字。據岡田氏本補。

色斯擧矣。翔而後集。以爲第一條。色指幾而言。繫辭曰。知幾其神乎。君子上交不諂。下交不瀆。其知幾乎。幾者動之微。吉之先見者也。色斯擧矣一句。所謂君子見幾而作。不俟終日之象也。凡應事接物之義。皆在其中矣。勿只在辟色辟地等一件上看。翔字有惟精惟一。巽以行權之意。集字有止於至善。執厥中之意。翔而後集。所謂艮其背。不獲其身之象也。記者擧此二句。以明明德全體大用之至妙。首不說出山梁雌雉一句。其意可觀焉。【註證】標的。標標幟也。表章之意。的射侯之中也。以比要處。○歸宿宗旨之下落。猶行者之於家。故曰歸宿也。○繫辭曰。易曰。介于石。不終日。貞吉。介如石焉。寧用終日。斷可識矣。君子知微知彰。知柔知剛。萬夫之望。○辟色。子曰。賢者辟世。其次辟地。其次辟色。其次辟言。○惟精惟一。尚書帝曰。來禹。洚水儆予。成允成功。惟汝賢。克勤于邦。克儉于家。不自滿假。惟汝賢。汝惟不矜。天下莫與汝爭能。

㊀不績岡田氏本作二不續一

㊁節下岡田氏本佚二書字一。

●婉當レ作レ宛，

汝惟不伐，天下莫與汝爭功。予懋乃德，嘉乃丕績㊀。天之曆數在汝躬。汝終陟元后。人心惟危，道心惟微。惟精惟一，允執厥中。無稽之言勿聽，弗詢之謀勿庸。可愛非君，可畏非民。衆非元后何戴，后非衆罔與守邦。欽哉。愼乃有位，敬脩其可願。四海困窮，天祿永終。○巽以行權。易曰，履德之基也。謙德之柄也。復德之本也。恒德之固也。損德之脩也。益德之裕也。困德之辨也。井德之地也。巽德之制也。履和而至。謙尊而光。復小而辨於物。恒雜而不厭。損先難而後易。益長裕而不設。困窮而通。井居其所而遷。巽稱而隱。履以和行。謙以制禮。復以自知。恒以一德。損以遠害。益以興利。困以寡怨。井以辨義。巽以行權。○至善。大學曰，大學之道，在明明德，在親民，在止於至善。○艮其背。易曰，艮其背，不獲其身。行其庭，不見其人，无咎。○全體大用。明德與太虛廖廓同其量。故以太虛無載之神體，爲其全。以太虛無外之妙用，爲之感通。故曰全體大用。

此節擧位而包時與處。條々聖之時。卽中庸之道眞也。

圖解曰，這節書拈出一時字，覺鄉黨一篇都活色。擧翔集，立時之案，時哉一嘆，恍惚自道。子路兩句形容，雉之時，婉寫出合着聖心處。曰，山梁雌雉，時哉時哉。

這條以明此節之端的。山字有仁者樂山之意。梁字有濟不通之意。山梁二字。仁者博施濟衆之象。而見非廟堂也。雌伏也。雉華蟲。書衣裳之十二章取其文也。有文而伏。乃君子之道。衣錦尙絅之義。而所謂龍德而隱之象也。以見非帝王也。時哉時哉一句。贊美聖德之語。而贊美語中。聖之時之光景。自躍如也。蓋雌雉之擧集。不待按排。不假於外。天機自然發見。活潑潑地者也。用冠時哉時哉一句上。者所以明聖之時獨往獨來。而不識不知。順帝之則之妙也。

【註證】仁者樂山。子曰。知者樂水。仁者樂山。知者動。仁者靜。知者樂。仁者壽。○濟不通。易曰。刳木爲舟。剡木爲楫。舟楫之利。以濟不通。致遠以利天下。蓋取諸渙。○仁者博施。子貢曰。如有博施於民而能濟衆。何如。可謂仁乎。子曰。何事於仁。必也聖乎。堯舜其猶病諸。○衣裳十二章。書曰。予欲觀古人之象。日·月·星辰·山·龍·華蟲作會。宗彝·

○印本脫白米二字。非是。

藻・火・粉米・黼・黻・絺繡、以五采彰施于五色、作服。汝明。註曰。象像也。日月以下物象是也。易曰。黄帝堯舜垂衣裳而天下治。蓋取諸乾坤。則上衣下裳之制。創自黄帝而成於堯舜也。日月星辰取其照臨也。山取其鎭也。龍取其變也。華蟲雉取其文也。會繪也。宗彝虎蜼。取其孝也。藻水草取其潔也。火取其明也。粉米白米取其養也。黼若斧形。取其斷也。黻爲兩已相背。取其辨也。絺鄭氏讀爲黹。紩也。紩以爲繡也。日也・月也・星辰也・山也・龍也・華蟲也。六者繪之於衣。宗彝也・藻也・火也・粉米也・黼也・黻也。六者繡之於裳。所謂十二章也。衣之六章。其序自上而下。裳之六章。其序自下而上。采者青・黄・赤・白・黑也。色者言施之於繒帛也。繪於衣。繡於裳。皆雜施五采以爲五色也。汝明者。汝當明其小大尊卑之差等也。○衣錦尚絅。中庸曰。詩曰。衣錦尚絅。惡其文之著也。故君子之道。闇然日章。小人之道。的然日亡。○龍德而隱。易曰。龍德而隱者也。不易乎世。不成乎名。遯世无悶。不見是而无悶。樂則行之。憂則違之。確乎其不可拔。潛龍也。○非廟堂。非帝王。圖解曰。論語評曰。色斯擧矣。可以速而速也。翔而後集。可久而久也。曰山梁。見非廟堂也。曰雌雉。見非帝王也。曰子路共之。反照用則行。舍則藏也。的是宣尼寔譜。

子路共之。三嗅而作。

此條以明師資教學之義。蓋子路共之者。知敬事夫子。而*未曉夫子立言之本意。以爲學者未能襲*其爲。而期至善。

之象也。三嗅而作者。不言而開示其本旨。以爲夫子無言之至教。㊀吾無行而不與二三子之象也。○此一節與易象同意義。㊁記者寫照之至妙。至爲精密也。或問。夫子於此時有取象之意而如此乎。曰。否。有取象之意而言。則已涉按排擬議。而非用雌雉冠時哉之義。蓋天工無意。而造化萬物。就其物而觀之。則形象萬端。有非人巧之所及者。聖人之言行。亦如此。聖人無意而言。無意而行。就其言行而考之。則理義萬端。㊂有非按排擬議之所及者。今吾所論者。聖人無意之化工。自然之象。記者之宗旨也。聖人本以無此意。而不取其義。猶化工本以無其意而疑萬物之形象。豈

㊀教底本作敬、今從岡田氏本改之。
㊁義底本作氣、今從岡田氏本改之。
㊂理下義字底本作氣、從岡田氏本改之。

㊀○婦下印本有之字。非是。」岡田氏本亦有之字。
㊁○間印本作同。非是。又敢字無。今補。
㊂○逮印本作違。又無國人不稱亂五字。非是。
●以上二項岡田氏本與印本全合。但逮作建爲異。

其不固乎哉。○此篇首題孔子、以爲道統之素王。一篇之眼目末添子路爲侍者有二義。一以示後學必有子路有聞未之能行惟恐有聞及從乘桴之勇。而可至于聖之時也。一以示仁者必有勇。而文武合一之端的也。蓋周末道不明而觭文武爲兩之蔽已萌芽故也。記者之遠慮誠可想矣。○上論始于時習。而終于聖之時者。以示學者之始當以聖時爲標的。而時習之。及其成功也與聖之時合同。之義也。

【註證】師資。老子曰。善人不善人之師。不善人善人之資。不貴其師。不愛其資。雖智大迷。○襲其爲云云。家語曰。魯人有獨處室者。隣之釐婦亦獨處一室。夜暴風雨至。釐婦室壞。趨而託焉。魯人閉戸而不納。釐婦自牖與之言。子何不仁而不納我乎。魯人曰。吾聞男女不六十不間居。今子幼。吾亦幼。是以不敢納爾也。婦人曰。子何不如柳下惠然。嫗不逮門之女。國人不稱亂。魯人曰。柳下惠則可。吾固不可。吾將以吾之不可學柳下惠之可。孔子聞之曰。善哉。欲學柳下惠者。未有似於此者。期

㊀武書大全明尹子皐纂。
㊁將・書・本・攻・干庶本誤作時・詩・裏・功・矛。又途下佚之字。今從岡田氏本及大全訂。
㊂○國原本作圀。非是。
㊃仰下岡田氏本有也字。
㊄裏岡田氏本作裏。豈作緣。
㊅○青印本作素。非是。岡田氏本作綵。
㊆四書翼考十卷。明鍾惺撰。
㊇○士印本作曰。非是。

於至善而不襲其爲可謂智乎。○書曰。天工人其代之。註曰。天工天之工也。○素王。無飾曰素。夫位者人之飾也。孔子有王德王業。而無王位之飾。故號素王。○從乘桴。子曰。道不行。乘桴浮于海。從我者。其由與。子路聞之喜。子曰。由也好勇過我。無所取材。○仁者必有勇。子曰。有德者。有言。有言者。不必有德。仁者。必有勇。勇者。不必有仁。○文武合一。㊀武書大全金氏曰。自古論將㊁者。不致疑於文武分途之㊁難合。但致慨於將相調和之難得也。夫文武之說。何昉乎。書稱文武吉甫。萬邦爲憲。文武遂爲將家嚆矢矣。嗣後孫子有令文齊武之稱。吳子有脩文治武之敎。而武植文種。武表文本。㊁則尉繚子言之。文以附衆。武以威敵。則考亭氏言之。㊁合數子所曰。乃知文非博輕裘緩帶投壺雅歌之名也。必合於武。而後爲實文。武非誇攻殺擊刺被堅執銳之名也。必合於文。而後爲實武。舍武言文。是欲賦詩以退虜。舞干㊁以解圍㊂。名爲文。而實非文矣。舍文言武。是扛鼎以稱雄。橫槊以著勇。名爲武。而實非武矣。毋乃與總文武之言相刺謬。而國容入軍。軍容入國。如司馬法所戒。以虛聲受而敗耶。○觭文武。觭音起。一俯一仰。㊃尉繚子曰。官分文武。惟王之二術也。註雲卿曰。此用令文齊武脩文治武植文裏㊄立論。稽古盛時同體㊃共貫塤唱篪和相須。而非相軋者。後世觭輕重。是以基白馬清流之禍歟。釋義白馬清流。朱全忠聚朝士於白馬驛。盡殺之。李振深嫉縉紳。曰。此輩常自謂清流。㊄宜投黃河使爲濁流。【雉考】爾雅雉六種。伊雒而南。㊅青質五彩皆備。曰翬。江淮而南。青質五彩。曰鷂。南方曰翯音儔。東方曰鶅。北方曰鵗。西方曰鷷。雉一名翟。狄通。翟羽可飾車旌。○埤雅曰。其交有時。別有倫。而其羽可用爲儀。故古者后服三翟。雉死耿介。妒龍護疆。善鬭。雖飛不越界。一界之內。一雉爲長。餘者雖衆。莫敢鳴雊。故以耿介鳴。㊆翼考曰。山雉不入鬱林。恐傷其尾。雨則避巖下。恐濡濕也。周禮㊇士執雉。尚書一名華蟲。

底本卷尾作論語鄕黨翼傳畢七字。
岡田氏本作四書啓蒙論語翼傳五終十字。

〔龍溪南遊會記・三山麗澤錄俱載在性理會通。〕

元博按年譜、寛永庚辰冬。先生得王龍溪語錄、大喜讀之。今攷翼傳。食饐而餲節注所云相師之道。則原乎龍溪南遊會記說。寢不尸節注。方殼一日之用數句。則亦全用龍溪三山麗澤錄語。由是推之。此傳之作。蓋始自己卯秋。而成於庚辰以後歲明矣。因特詳之於此云。

古本大學全解　解題並凡例

【解題】此の書が藤樹先生の註せられたるものなることは、顧問惺軒先生の序及び顧問正堂翁の書後に指示せられたるものに詳かなれば、こゝに再び細說せず。初め編者は岡田氏本、篠原氏本、志村氏本等共に全く本書の名を示さゞるを以て此の如き書の存することすら之を知らざりしに、大正十五年夏正堂翁一本を寄せ、勸むるに全集中に採錄すべきを以てせられたり。就いて觀るに、先生の著大學考及び大學解とその所說殆ど一致し、忠信の說の如き論語解と全然同一なるものあり。且つ先生が王學に轉ぜられたる後、卽ち先生晩年の作に係るを知り、直に之が編纂に從事したり。

本書の原本はもと滋賀縣高島郡安曇村中村治助氏の所藏に係りしこと、正堂翁の奥書に見ゆ。治助氏は先生の門人中村所左衞門の後裔にして、現に本全集中の孝經講釋聞書も同氏の筐底に之を得たるものにして、共に從來世に發表せられたることなき資料に屬す。聞書が孝經啓蒙と並行して、先生の孝經に關する說を知るに便利なるが如く、本書も亦大學考及び解と羽翼して、先生の性格及び其の學說と密接の關係ある大學に關する先生の說明を知るに切要なり。特に大學解は其の說明正心の傳に止りて、全體を載せざるに反し、本書は全篇完結するを以て讀者を利すること更に大なるものあり。されば原寫本を得て審に之を對校せんとし、現戸主中村喜六氏に質したるに、終に該寫本の所在を知るを得ず。よつて正堂翁の寄せられたる寫本を底稿とするに留めたり。

本書は頭注に記したるが如く、行文中措辭の方法を誤りたるものまゝあり。思ふに當時は文運未

だ開けざれば、諸儒の遺筆に此の類少なからず、又先生が病間忽忙筆を下され、十分之が推敲を爲すに遑あらせられざりし爲なるべきか。況や門人傳寫の際、更に誤に陷りしものも、尠からざるべきをや。されば此の徵瑕を以て此の書の價値を上下するに足らざるべし。却つて簡單なる註解の中、猶能く本經の要旨を闡明して剴切精當なるものの存するは、慧敏なる讀者の必ず看過せざるべきを信ず。

〔凡例〕　本書は誠意の傳末二個處僅かに返點を附せられたる外、全く白文にして、現に本書に見ゆる句讀點の多くは、正堂翁の朱記せられし處なれども、送假名及び頭注の如きは、編者之を附す。

一、本書もと題簽なし。今此の書の內容と先生の著大學解との關係より假に題して古本大學全解と名づく。卷首に此の名を冠せしむるも皆編者の私意に出づ。

昭和二年丁卯二月一日　　　加藤盛一謹識

序

謹みて案ずるに此の古本大學全解は近江聖人が陽明學者として大學の精蘊を發揮せられたるものなり。夫れ大學の一書の解釋は朱子學と陽明學との分岐點を爲す。而して格物致知は特に其の焦點たり。此の書の解を見るに曰く、致は至るなり。命に至るの至と同じ。此に至つて違らざるの意なり。知は良知なり。天性の靈明、所謂親民の心、孟子の所謂四端是なり。此に至つて違らざる、此を其の知に致ると謂ふと言ひ、また格は正なり。其の不正を正して其の正に歸するの義なり。物は事なり、貌言視聽思の五事を指して言ふ。良知を以て其意念の攙雜を接物應事の間に照察して其の節に中らざる者を正して其の良知に致る。此を格物と謂ふと。何等の明快ぞ。何等の剴切ぞ。眞に能く陽明學の正宗を得たるものなり。古來古本大學を解釋せるもの其の數少からざれども、此の書の如きは蓋し其の上乘なる者にして、最も推重すべき遺著なり。余今此の書を閲讀するに際して聊か所感を記すと云爾。

昭和二年一月二十四日

後學　文學博士　高瀬武次郎識

藤樹先生全集　卷之九

經解成書　五

古本大學全解

大學。

大學之道。

大學者。明至大至廣之德。而至大人之學也。道卽千聖相傳之道。所謂率性之道也。非方法。

在明明德。

在無他之意。下同。上明字以工夫言。克己復本體之明之謂也。明德者。人性之總號。德得也。所得于天。而虛靈洞徹。其光明正大。無不照。無不自得。雖下愚不滅不昧。故號明德。

在親民。

㊀所以明三字當在學者之工夫上。此例亦在卷之一經解明明德條下。

㊁吾當在達字下。

親愛也。民人也。包五倫可講。親民者。親愛人之眞情。一體不可息之良知是也。

在止於至善。

止至於是而不遷之意。至極也。至善者。純一無所倚。至誠無息本心也。蓋明德者。天命之性。雖具于方寸。充塞于大虛。是以光於四海。通於神明。千變萬化。無非此德之神通妙用。故唯名人性曰明德。萬物之性。不能得此名。人之所以異於禽獸者。正在于此。人皆所以可爲堯舜者。亦正在于此。但爲氣稟所拘。人欲所蔽。不能有全其本然。學之道。無他。在克去人欲之己以復明德之本然而已矣。故掲在明明德之一句。以示主意頭腦。學者之工夫。全所㊀以明在此一路也。親民者。明德之感通也。雖愚不肖。未嘗息。發見日用五倫之間。是以卽萬欲紛擾之凡心。指點其不滅不昧之良知之靈照。以示萬物一體之妙用。且所以開示學問之種子修行之田地也。至治國平天下。亦只擴充親愛之良知耳。所謂有不忍人之心。行不忍人之政。是至善者。明德之實體。純粹精一之本心。所謂仁是也。親民之心。卽良知之靈照。所謂善也。然不能無意欲之攙雜。非純粹精一之至善。故學者當認此良知之靈照。而爲工夫之種子。克去其攙雜之意欲。則復純粹精一之本心。是以明明德之工夫極則。在止至善矣。○第一句。修己。所以立吾萬物一體之體。渾淪之工夫也。第二句。成己成物。所以吾㊁達萬物一體之用。下手之工夫也。第三句。示工夫之極則。學者工夫歸著于止至善之一句而已矣。下文所謂格物致知。傳所謂愼獨。皆此工程也。

○知止而后有定。

㊀下同恐下同字誤寫。

㊀隨或衍。

知乃眞知灼見。非聞見之知也。止卽至善。不曰至善而曰止。正示至善乃歸宿之處也。知卽是止。非知了而后止也。而后字當卽字看。下同。㊀定是心純一。而不亂之謂也。在一念入微上講。下靜安同。

定而后能靜。

能者。天能不假勉强。下同。靜謂無意念之妄動。

靜而后能安。

安謂㊀隨處常處變。而胸中安閑自適。

安而后能慮。

慮謂處事精詳也。

慮而后能得。

得謂得至善而止之。上文止至善一句。雖說盡工夫之端的。而無餘蘊。然猶恐后學信不及。申示學者用力之要。蓋知止。則眞志斯立。此心純一。不爲他岐所惑。故曰有定。心純一則無以妄動其心。而能靜。心能靜。則順境逆境。無入而不自得。而能安。到能安。則虛明愈顯。良知四溢。隨感而應。觸機而發。處事無不得精當。而后得止純粹精一之至善也。定靜安慮得五字。是功效次第。不是工夫節目。纔知止。自然相因之妙如此。知止上有許多之工夫在。卽格致是也。

○物有本末。

物指形體。本形之本。所謂天下之大本。指明德而言。末指形體。

事有終始。

事卽物中之事。指作爲而言。知止能得。有工夫。故曰事。知止爲始。能得爲終。

知所先後。則近道矣。

知乃眞知灼見。非聞見之知也。近道。謂不遠于大學之道。上文知止一節。止於至善工程。明且盡。然學者不知有用功之序。則不能知止。故此段說先後次第。以示用功之序。知所先後。謂明辨於本末終始。而知得於工夫用力之地專在大本上。世人大抵知有身。而不知身之有本。事皆不辨始于本而終于末。專用力於作爲上。不知得事之精當。在立於大本。故此條擧自然之本末終始。而結上文兩節。亦起下文兩節先後的意思。所以明務本之精義。以示工夫用力之本領。既知所先後而能務本。則大學之道。日活潑流行。故曰近道矣。君子務本。本立而道生之義也。知所先後。須照下兩節看。

○古之欲明明德於天下者。

此段詳說工夫前後之條件。古泛指古人。言古者。明今之不然。勸戒之義也。明明德於天下者。自明其明德。以及天下。使人人各得所也。卽是一體不容已之生機。明明德分內事也。故不曰平天下。而曰明明德於天下。

先治其國。

先上文與先後之先同。下倣此。治其國者、明明德於國也。

欲治其國者。先齊其家。

齊其家者。正倫理。篤恩義。使尊卑長幼盡道、而無參差之謂也。明明德於家也。

欲齊其家者。先修其身。

修身者。言五事皆率明德也。非禮勿視聽言動之謂也。

欲修其身者。先正其心。

心之本體。如鑑空衡平。所謂明德是也。毫髮有所攙雜。卽爲不正。正其不正。復本体之正。此謂正其心。

欲正其心者。先誠其意。

誠純一無雜・眞實無妄之謂也。意者心之所倚。好惡之執滯。是非之素定。一切將迎。及一毫適莫。皆是也。省察克治其意念之所倚所雜。復本來純一無雜之眞心。此謂誠意。

○誠意之意。與子絕四意同。聖人所爲聖無他。毋意而明德明而已。學者所學亦無他。絕意而復明德本然而已。然初學人遽欲絕意。則不能無弊。故不曰絕意。曰誠意。立言甚精妙哉。

欲誠其意者。先致其知。

致㊀至也。與至於命之至同。至於此而不違之意也。知良知也。天性之靈明。所謂親民之心。孟子所謂四端是也。至于此而不違。此謂致其知。能致其知。則好善去惡。無有不誠矣。誠意工夫下手處。正在此也。

致知在格物。

格正也。正其不正。而歸其正之義也。物事也。指貌言視聽思之五事而言。以良知照察其意念之攙雜。於接物應事之間。而正其不中節者。致其良知。此謂格物。致知格物。只是一事。致知之功。在格物耳。此節自平天下。而約之以至于致知格物。開示大學工夫用力之處全在于致知格物也。見六箇欲字・先字・一箇在字。可見。天下第一等事。人間第一義。無別事可做。無別路可走。古人用功之實地。化凡入聖之脈路也。

○物格而后知至。

知至謂良知明而無私意障蔽也。致知致字。是下工夫字眼。致之卽至矣。故此段卽換箇至字。物格卽知至也。后字上文與㊂先后之后同。下倣此。

知至而后意誠。意誠而后心正。心正而后身修。身修而后家齊。家齊而后國治。國治而后天下平。

上文先字。知所先此節后字知所後。知所先。而實用其功。則知至意誠心正身修家齊

㊀致至也、卷之一繹解格物致知條下亦出、聘禮致館鄭注曰、致至也、論語致遠恐泥、皇疏致至也、王陽明大學問亦云。致者至也、可知訓解之所由來也、

㊂與、當在上字上。

㊀不辨二字當在工夫上。

㊁不知二字當在然字下。

國治天下平。非逐節別有工夫也。上文之發明。雖明且盡。然學者猶恐工夫總括㊀不辨在格物。故申說此一條。示聖學下手用力之實地在于此一事也。

○自天子以至於庶人。

以至二字。包公卿大夫士在內。庶人指農工商。

壹是皆以修身爲本。

壹是一切也。修身包正心誠意致知格物而言。本物有本末之本字。知止知先。皆知此本也。非爲齊治平之本。而齊治平亦擧之而措此耳。此段揭修身之二字。以示大學歸宿處。

○其本亂。而末治者。否矣。

本亂。身不修也。謂明德不明也。末治。謂家齊國治天下平也。否。是無是理也。反言謂其必無。蓋人間世無不有天下國家之事。然其本不㊁知在于修身。故本末相對而言不可有不務本。

其所厚者薄。而其所薄者厚。

所厚者。指本而言。所薄者。指末而言。

未之有也。

反言謂其必無情之厚莫大於身。知愛身，而不能修其身，則其所厚者薄，厚者薄。無所不薄也。不能修身以齊家。而欲國與天下皆治平。是又所厚者薄所薄者厚也。豈有是理乎。故此段即厚薄之至情。而示不可不務本。正敎人知所先後。

○此謂知本。

此總指上文。知本識得大本也。

此謂知之至也。

此指知本。知之至。大知之至極也學者知工夫之本領。而用力於大本上。則入德速。故始揭知止一句。以示入德之道。終又揭知本一句。以示工夫之端的。提撕警覺之意。至深切矣。○右經一章。孔子筆聖學之準則。以詔後世。其傳則曾門之諸賢。取曾子發明聖經之意。以記之。自堯舜以來。聖々相傳之學脈。此書盡之。

○所謂誠其意毋自欺也。

毋禁止之辭。自欺者。謂欺其本心良知。

如惡惡臭。如好好色。

人於尋常好惡。大率起於意念上。是以有不眞切處。惟是惡惡臭，好好色，即發於眞心。不假安排，不落擬議。故假此以發明本体無意自然之好惡。

此之謂自謙。

○獨下脫二也字一。

◎萬欲生二於意一。大學解亦有二此語一。

◎無二格致之傳一。朱子以爲格物致知之傳、今亡矣。竊取二程子之意一以補レ之云々，

◎擧二兩件一斥下擧二修身与二正心一之兩件上等ヤ。

◎擧二一件一斥レ擧二誠意一件一，釋解誠意條下亦有二此語一。

謙讀爲慊。苦劫切。○慊快也。足也。惡惡臭。好好色。皆發於眞心。自是快足。發明人能克去意念之己。毋自欺。則是非之眞心呈露。而好善惡惡之誠亦當如是也。戒自欺。求自謙。出乎此。則入乎彼。

故君子必愼其獨。

君子指學者。君子小人之界分。在學道與否。故謂學者爲君子。勸戒之義也。必者示無別事。無別路意。愼者敬而不違之意。獨者良知之別名。其靈照自是純一無雜。且人所不知而己所獨知之地也。故名曰獨。愼獨者。審一念之幾。而不違良知之靈照之謂也。卽毋自欺之下手用力處也。從此以下所謂傳也。故每章之始擧經語。而以所謂二字發端。學問之功。莫先於辨惑。惑之本根。在意之一病。好惡之凝滯。是非之素定。凡功名利害・毀譽得喪・死生禍福・一切外魔。皆起於意念。所謂萬欲生於意之義也。是以。明明德之工夫。全在誠意。而格致卽誠意之工程也。故以誠意爲傳之始。而無格致之傳。非闕文。見正心以下之傳。兼擧兩件。誠意之傳單擧一件。可知矣。愼獨。又格致之工夫也。言格物致知則語勢似有兩般之工夫。故傳以愼獨一句示格物致知之工程。大抵人所以不能入德者。以信意念信得不及良知也。故始揭毋自欺一句。示良知不可不信也。如惡二句。指點本體之好惡。戒意念之好惡。終揭愼獨一句。開示工夫之本領。

○小人閒居。

小人凡夫也。閒居猶燕居。

爲不善。

自欺處。

無所不至。

形容擧々縱欲念頭。不泥定行事上。

見君子。而後厭然

君子包有德有位而言。厭然消沮閉藏之貌

揜其不善。而著其善。

揜蓋藏也。著粧飾也。此卽不自謙處。

人之視己。

不待君子。故下一人字。

如見其肺肝。然則何益矣。

小人閒居之時。無所忌憚。故恣意逞欲。無所不至。及見君子。則有所忌憚。是以不滅不昧之良知呈露。而愧恥之心切實也。於是欲揜著而無及。其情狀。人之視己。如見其肺肝。莫見乎隱。莫顯乎微。故人之視己。亦如見其肺肝。閒居不善。有欺無謙而苦于揜著。則何益矣。欲揜著而終無及則。亦何益矣。

㊀雖下見恐其字誤寫。

㊁所謂二字當在開示下。

此謂誠於中形於外。

引古語以證上文。誠字即誠意之誠字。指眞實無妄良知而言。良知雖見㊀于方寸。與天地鬼神同体。故良知之所知。通天通地通神通人。知謀機巧。不能掩。莫見乎隱。莫顯乎微㊁所謂開示微之顯。誠之不可掩實理也。

故君子必愼其獨也。

小人自欺之流弊如此。故君子愼其獨。以無自欺。非以小人爲戒始去愼獨。

○曾子曰。十目所視。十手所指。其嚴乎。

承上節中發明於誠之不可掩之義。示獨之當愼。言獨知之嚴。有甚於十目十手所指視者。不可不畏也。用曾子曰三字更端。警覺之意。益深切也。

○富潤屋。

富家屋宇。自有光潤氣象。

德潤身。

誠之必形也。

心廣體胖。

錫或當レ作レ鍚。

心廣意見淨盡。廓然大公處。正指自謙之心。坦蕩無累者而言。胖安舒也。體胖從心廣來。發於四體者。從容舒泰。有睟面盎背光景。心廣体胖。即潤身之實也。

故君子必誠其意。

潤身之妙處。皆誠意之妙處。故君子必愼獨。以誠其意。凡情之常。不見利。不勸。不見害。不懲。故上文詳形容自欺之情狀。以示其害。此節明形容自謙之功驗。以示其利。勸戒之意。至詳密也。○誠意之傳。結語之後。雜引經傳者。示聖人之能事。平治之大業。全出于誠意中。宜熟讀詳味。

○詩云。瞻彼淇澳。

詩衞風淇澳之篇。淇水名。澳隈也。

菉竹猗猗。

菉青也。猗々美盛皃。以菉竹美盛。興起君子文釆。

有斐君子。

斐文皃。君子指衞武公。

如切如磋。

四如字言學之工程如此。切治骨角者。以刀鋸切成形質。磋加鑢鍚。使潤澤。

如琢如磨。
琢治玉石者。以椎鑿琢成形質。磨以沙石使他光滑。

瑟兮僩兮。
瑟嚴密之貌。僩武毅之皃。

赫兮喧兮。
赫喧宣著盛大之皃。

有斐君子。終不可諠兮。
此衛人美武公之德。而作是詩。

如切如磋者。道學也。
道言也。學精一之學。指誠意而言。

如琢如磨者。自修也。
自修謂誠意之功。自勉而不已更求微妙至當處也。切磋琢磨。總是已精益精之意也。

瑟兮僩者。恂慄也。
恂慄戰懼也。只是一箇敬畏。欲念掃除而中心全是天理惺々。敬畏自存。

愛下恐佚其字。

赫兮喧兮者。威儀也。

威者。有威可畏。如望之儼然聽其言也厲。儀者。可象。如行爲世法言爲世則。

有斐君子。終不可諠兮者。道盛德至善民之不能忘也。

盛德至善。無兩意。謂盛德而至善也。此引詩而釋之。明盛德至善工夫只在學修也。學即格致之學。指誠意而言。學修既至。方寸中純是恂慄。一私不容。一意不間。德全于己也。威儀是德之潤身處。正是說他斐處。盛德至善。人心所同然者。故民皆仰之而不能忘也。未說到德澤及人處。

○詩云於戲前王不忘。

詩周頌烈文之篇。於戲嘆美詞。前王指文武。不忘。是民思慕之。

君子賢其賢。

君子謂其後賢後王。其賢指前王。前王明德以貽道統。是其賢之所在也。後賢則從而賢之。崇其德也。

而親其親。

其親指前王。親其親者。敬其所尊。愛所親。象其賢也。

小人樂其樂。

指上利恐衍。

小人謂其後民。其樂指前王。樂其樂者。風淸俗美。上安下順。樂其道化也。

而利其利。

其利指前王。利其利者。分井受廛。安居樂業。沐其餘澤也。

此以沒世不忘也。

前王盛德至善之餘澤如此。是以旣沒世。而人思慕之。愈久而不忘也。此節承上節末句。說終不能忘。實以發明誠意之効驗至大也。親賢樂利。皆盛德至善之所致也。

○康誥曰。克明德。

康誥周書。克字有力。明德人所同有。獨文王緝熙之工程。孳々不已。能明其德。故曰克。

○大甲曰。顧諟天之明命。

大甲商書。顧謂常目在之也。諟猶此。天之明命。卽明德之本体。自我得乎天者言。曰明德。自天之與我者言。曰明命。日用動靜語默之閒。孰非明德之發見。亦孰非明命之流行。常目在之。而眞若見其參於前。倚於衡。則無時不明矣。此伊尹頌湯之德。以訓大甲也。顧明命。而不違於其靈照者。致良知之學。而愼獨之謂也。

○帝典曰。克明峻德。

帝典堯典。虞書也。峻大也。明德以此德本体之明言。峻德以此德全体之大言。一也。峻

亦字恐當在頭腦下。

詩大雅文王之篇。

德亦人所同有、獨堯克明之耳、三引書、言聖人之學皆在明明德、而以明經文發端之意。亦聖學之主意頭腦。在此一路矣。

皆自明也。

自明、明自欺、自謙。自證。自修。在一念入微、上用功也。此、節承上文烈文之詩、而言明明德於天下者。如文如湯如堯、只一自明。使都該盡了見自明之外無復有學術意。故以此、結上文。以起下文日新之意。

○湯之盤銘曰。苟日新。日日新。又日新。

盤、沐浴之盤也。銘、銘刻于盤上以自警之辭也。苟誠也。湯以人之洗濯其心、以去惡、如沐浴其身、以去垢。故銘其盤。言誠能一日有以滌其舊染之汚、而自新、則當因其既新者、而日日新之。又日新之、不可略、有間斷也。此段承上文、而示自明之工夫準則也。愼獨之工程。必如盤銘、而后爲至也。

○康誥曰。作新民。

鼓之、舞之之謂作。言振起其自新之民。此武王封康叔、於衞而誥之。曰。作新民。衞本殷之故墟。民染紂汚俗、而失其本心。然本體之明。未嘗息。有自新之機。故告之以作新民。作豈聲色號令之所及哉。亦自新而已矣。

○詩曰。周雖舊邦。其命維新。

雖舊爲諸侯之邦。至于文王。能新其德以及於民。而始受天命也。命新。亦從自新中來。不待求于外。

○是故君子無所不用其極。

君子。指學者。其極。工夫之極至也。指誠意而言。上文盤銘。乃自明愼獨之工夫極至之處也。新民命新。都從盤銘中得之。擧新民命新二節者。發明盤銘之効驗。而將使學者知工夫歸宿之地。故結之曰。無所不用其極。示不外於愼獨以自明而已矣。

○詩云。邦畿千里。惟民所止。

詩商頌玄鳥之篇。畿王者之都也。止居也。言物各有所當止之處也。

○詩云。緡蠻黃鳥。止于丘隅。

詩小雅緡蠻之篇。緡蠻鳥聲。丘隅岑蔚之處。

子曰。於止。

止指丘隅。

知其所止。可以人而不如鳥乎。

此孔子說詩之辭也。言人當知所當止之處也。激切口氣。宜熟玩。

事見孟子梁惠王下及離婁下章。

論語泰伯篇及周召鄭譜。

○詩云。穆々文王。

詩大雅文王之篇。穆々深遠之意。贊其德體深遠未易窺測。

於緝熙敬止。

於嘆美詞。緝繼續也。熙心之靈明也。緝續其心之靈明而不已之謂緝熙也。緝熙卽是敬。敬卽是止。緝續其純粹光明之心體。自无不敬。而安所止也。所謂止至善是也。

爲人君。止於仁。

指爲諸侯治岐周時。

如四民煢獨。各得其所。猶切如傷之視。是其止仁。

爲人臣。止於敬。

指事紂時。

如三分有二。猶率商之叛國以事紂。是其止敬。

爲人子。

禮記文王世子。詩大雅皇矣及文王有聲。下文訓點底本有レ之。今從。

詩大雅文王及下武。下文訓點底本有レ之。今從。

詩大雅文王、及緜毛傳。

指事王季時。

止於孝。

如盡問安視膳之節。且靡悔之德。通追來孝。是其止孝。

爲人父。

指訓武王。

止於慈。

如開本支百世業。且使武王之聖世德作求。是其止慈。

與國人交。

事上使下。有交道。國人、岐周之人民。

止於信。

如萬邦作孚。至于虞芮質成。相愧而反。是其止信。五者明德之感通。所謂親民之心也。止至善。則明德全于內。故隨處發見。而各止其所。非以仁敬孝慈信爲至善而止之。此條言文王所以自明而止至善者。爲學者之準則。

○子曰。聽訟吾猶人。必也使無訟乎。無情者。不得盡其辭。大

程子曰。身有之有當作心。

畏民志。

聽訟。剖斷曲直。猶人。不異于人也。情實也。引夫子之言。而言聖人能使無實之人不敢盡其虛誕之辭。蓋我之明德既明。自然有以畏服民之心志。故訟不待聽。而自無也。不求之天下國家。而求之明明德。知止而用力於自明也。示平治之大業。聖學之極功全出于誠意中耳。

○此謂知本。

此總指淇澳以下之上文。知本。識得大本也。謂知所先後而用力於誠意愼獨也。經文及此章。皆以知本一句結之。宜潛玩知所用力。

所謂修身在正其心者。身有所忿懥則不得其正。有所恐懼則不得其正。有所好樂則不得其正。有所憂患則不得其正。

身字不必作心解。忿懥等四者。皆從軀殼上起念。故曰身。忿怒也。懥怒皃。蓋四者乃心之用。但從虛中發出。則体用皆中正也。心體上纔著一分意思。便是有所。有所時。失其靜虛之本體。便是不得其正。非必發於外而後不正也。四者約而言之。喜怒之二也。喜怒卽好惡也。大學傳。好惡兩字盡之。自誠意至平天下。每章皆好惡之發明而已。一循乎好惡之自然。而毋自欺。則意誠心正。而身修矣。齊治平。亦擧之措之而已矣。

○心不在焉。視而不見。聽而不聞。食而不知其味。

遂或逐字誤寫。

願外，遂物而七情有所。便是失虛明之本體也。是卽不在處。雖在若不在矣。心不在焉。則雖視猶不見。雖聽猶不聞。雖食猶不食。心不在身卽不修如此。

此謂修身在正其心。

此章說因意念之執滯而爲有所不在之病。而不說其工程。見誠意外更無正心之工夫。

所謂齊其家在修其身者。人之其所親愛而辟焉。之其所賤惡而辟焉。之其所畏敬而辟焉。之其所哀矜而辟焉。之其所敖惰而辟焉。

人恒人也。之往也。辟猶偏。簡於爲禮謂敖。懶於爲禮謂惰。五者亦皆情之不能無者。但因意必之凝滯侵情之所之。不能無過則。

故好而知其惡。惡而知其美者。天下鮮矣。

親愛畏敬哀矜。是好之類。其人豈無惡處。賤惡敖惰。是惡之類。其人豈無美處。人只因辟了。見得這一邊。便不見得那一邊。故好知惡。惡知美者鮮。恒情之偏。滔々皆是也。故曰天下鮮。

○故諺有之曰。人莫知其子之惡。莫知其苗之碩。

諺俗語也。此節中明上節之意。溺愛者不明。貪得者無厭。人情之偏。一至于此。則身決不可得而修。尚何以齊家乎。

此謂身不修不可以齊其家。

反語口氣。尤爲喫緊。正與壹是皆以修身爲本相應。○此章亦說因意必之凝滯身不修而不說其工夫愼獨而已。

所謂治國。必先齊其家者。其家不可教。

身不修。無可以教家之具。

而能教人者。無之。

人國人也。

故君子不出家。

不出家。謂不外修身教家。

而成教於國。

成教。謂成就個教也。

孝者所以事君也。

者下脫也字。

非移孝作忠。言所以忠君之理。不外一孝心。

弟者。所以事長也。

善事兄爲弟。長謂國之官長。

慈者。所以使衆也。

撫愛卑幼謂慈。衆庶民也。修身以上。皆是學之事。齊家治國。方是敎之事也。其所以爲敎者。又只根身來。孝弟慈所以修身而敎于家者也。國之所以事君事長使衆者。亦不出此。

○康誥曰。如保赤子。

如是言保民如愛護兒童一般。

心誠求之。

誠即誠意誠字。指純一無雜之眞心而言。之字指赤子之所欲。

雖不中。不遠矣。

雖不中赤子之欲。相去亦不遠。

未有學養子而後嫁者。

不待學而自然能之。是卽不學不慮之良知良能也。此節引書而釋之。說保民如保赤子。可用吾眞心而已。孝弟慈三者。皆親民之眞心。不假强爲。見慈幼之一端而可見。人能識得此良知。而復其不學不慮之本体。則能公是非。同好惡。而萬物一体之仁。自不能息。此則身修家齊。所以成就敎於國也。

○一家仁。

仁卽孝弟慈藹然處。

一國興仁。

一國化之。皆仁的樣子。興謂有所感發而興起也。

一家讓。

讓卽仁中有禮文。秩然不亂處。

一國興讓。

一國化之。皆讓的樣子。

一人貪戾。

一人指君。貪戾是狥欲悖理。與仁讓相反。

一國作亂。

一國皆不仁不讓的。

其機如此。

機發動所由也。如此指上六句。

此謂一言僨事。一人定國。

僨覆敗也。此節言教成於國之効。此謂以下引古語以證上文。

○堯舜帥天下以仁。而民從之。

帥躬行以倡率也。以身作則之謂。仁包讓字。孝弟慈是也。從不但與。有與之爲一意。

桀紂帥天下以暴。而民從之。

暴貪戾也。與仁相反。從從其暴。

其所令。反其所好。而民不從。

所好在不仁。而所令在仁。便與所好相反。故民從所好。不從其令。

是故君子有諸己。

仁讓有諸己。

而後求諸人。

敎人爲善，

無諸己。

不仁不讓。無諸己。

而後非諸人。

敎人無爲惡。

所藏乎身不恕。

藏乎身。存諸心。如心爲恕。不恕。猶言無眞心不仁不讓之謂也。從施于人處言之。故曰不恕。

而能喩諸人者。未之有也。

豈有是理乎。敎國者。審其機而已矣。此節承上文機字。而推本于身而說。其實申上文之意也。益見不出家而成敎於國也。前後只是一意反復。

故治國在齊其家。

通結上文。

○詩云。桃之夭夭。

詩周南桃夭之篇。夭々少好之皃。

其葉蓁々。

蓁々美盛皃。以桃夭興起女子之賢德。

之子于歸。

之子指女子。于往也。婦人內夫家。故謂嫁曰歸。

宜其家人。

宜猶善也。相好意。家人一家之人也。

宜其家人。

此就治國者言。

而後可以教國人。

是我可去教國人。不作國人自化。

○詩云。宜兄宜弟。

詩小雅蓼蕭篇。咏國君能和合于兄弟。弟盡恭敬而善事兄。兄盡友愛而善撫弟。

宜兄宜弟。

此就治國者言。

而後可以敎國人。

宜兄宜弟。能修身以敎於家也。故可以敎國人。

○詩云。其儀不忒。

詩曹風鳲鳩篇。儀謂身法可儀象。忒差也。

正是四國。

正四方之國。

其爲父子兄弟足法。

盡父慈子孝兄友弟恭之道。足以取法於民。

而後民法之也。

前二詩就上之設施處說。故曰敎國人。此詩就下之應說。故曰民法之。

此謂治國在齊其家。

此只結三詩。不通結上文。三引詩。皆以詠歎上文之事。合此三詩而潛玩之。所謂治國在齊其家者。其理益躍然。

所謂平天下在治其國者。上老老而民興孝。

上字指治國君子。上老字是孝順。下老字指父母。興孝是觀感興起。亦如上之老老。

上長長而民興弟。

上長字是愛敬。下長字指兄。興弟亦如上之長長。

上恤孤而民不倍。

恤孤即慈幼也。倍與背同。不倍亦如上之慈意。

是以君子有絜矩之道。

君子有平天下之責者。絜度也。矩所以爲方也。匠欲爲方。必度之以矩。欲平天下者。度之以良知。良知即所謂矩也。人同此良知。故上盡孝弟慈之道。以帥其下。則下民化之。各興孝弟不倍之心。上行下效。捷於影響。此絜矩之道。所由起也。君子必當因其所同推以度物使彼我之間各得分願。則上下四方均齊方正。而天下平矣。

○所惡於上。

上是位尊於我者。君父是也。

毋以使下。

使下。役使在我之下者。

所惡於下。毋以事上。所惡於前。毋以先後。

先謂先加於人。

所惡於後。毋以從前。

從謂從其後而施之。

所惡於右。毋以交於左。所惡於左。毋以交於右。此之謂絜矩之道。

言如不欲上之無禮於我。則必以此度下之心。而亦不敢以此無禮使之。不欲下之不忠於我。則必以此度上之心。而亦不敢以此不忠事之。至於前後左右。無不皆然。則身之所處。上下四方。長短廣狹。彼此如一。而無不方矣。絜矩二字。解如此。有平天下之責者。所以處心制事者。一出于此。則天下豈有不平乎。所惡是良知也。毋以是格物致知也。格致之外。更無工夫之在也。

○詩云。樂只君子。民之父母。

詩小雅南山有臺之篇。樂是德可嘉樂。只是助語。君子指在位者。

民之所好。好之。

所好。如飽煖安樂之類。好之。即所欲與聚。必使之得所也。

孟子離婁章孟子曰。所欲與之聚之。所惡勿施爾也。

民之所惡惡之。
所惡。如飢寒勞苦之類。惡之。即所惡勿施。必爲之剔蠹除害也。

此之謂民之父母。
言能絜矩。而以民心爲心。所謂如保赤子。心誠求之者也。豈不是民之父母乎。

○詩云。節彼南山。
詩小雅節南山之篇。節截然高大皃。

維石巖々。
巖々。積石高峻。

赫々師尹。
赫々明盛皃。師尹周太師尹氏也。

民具爾瞻。
具皆也。瞻仰望意。

有國者。不可以不愼。
有國。指有天下言。愼謂好惡不可不愼。愼字從愼獨來。

辟則爲天下僇矣。

辟偏也。僇與戮同。引詩而言。在上者。人所瞻仰。父母于民而有國者。不可不愼。若不能絜矩而好惡狥於一己之偏則身弑國亡。爲天下之大戮矣。

○詩云。殷之未喪師。

詩大雅文王篇。殷商有天下之號。喪失也。師衆也。玩一未字。則今日已喪師可見。

克配上帝

配合也。上帝天之主宰也。其德能配合乎天心。

儀監于殷。

儀詩作宜。監有監戒意。

峻命不易

峻命。卽天命也。不易。言難保也。

道得衆則得國。

道言也。得衆。能絜矩而得民心。得國。卽得天下。

失衆則失國。

失衆。不能絜矩而失民心。失國卽失天下。引詩而言此。以結上文兩節之意。有天下者。能存此心而不失。則所以絜矩而與民同欲者。自不能已矣。

○是故君子先愼乎德。

愼德。卽愼獨也。

有德此有人。

有德。則能絜矩公好惡。故得衆。

有人此有土。

得衆。則得國。

有土此有財。

任土以作貢。便有財。

有財此有用。

量入以爲出。便有用。先愼乎德。承上文不可不愼而言。開示工夫歸宿之地者也。有德。則人土財用。皆不期然而然。

○德者本也。

本平治根本。勿說爲財本。

財者末也。

末平治末務。勿說爲德末。

○外本內末，

德在性分內。反外之。財身外物。常存在心裏。

爭民施奪，

言人君以德爲外。以財爲內。則是爭鬭其民。而施之以劫奪之敎也。蓋財者人之所同欲。不能絜矩而欲專之。則民亦起而爭奪矣。

○是故財聚則民散。

外本內末。故財聚。爭民施奪。故民心離散。

財散則民聚。

財散。不必散財於民。只是取民有制。散其利于天壤開也。民聚。民心歸服。不離散也。

○是故言悖而出者。亦悖而入。

悖逆理也。出乎爾者。反乎爾者也。

之下脫矣字。

貨悖而入者、亦悖而出。

此以言之出入明貨之出入也。自先愼乎德以下至此。又因財貨以明能絜矩與不能者之得失也。只是一意反覆。

○康誥曰、惟命不于常。

言天命予奪無常。

道善則得之、

道言也。善者、愼德能絜矩而散財也。得得天命也。之字指天命。下同。

不善則失之。

不善者、外本內末也。失失天命也。引書而示聚散出入之機、以甚儆惕人君也。

○楚書曰、楚國無以爲寶。惟善以爲寶。

楚書楚語。言不寶金玉而寶善人也。○楚王孫圉聘于晉。趙簡子問曰、楚之白珩猶在乎。其爲寶也幾何矣。曰、楚之所寶者、曰觀射父。作訓辭。寡君賴以不辱。左史倚相陳善政。先業藉以不亡。此楚國之寶也。若夫白珩。先王之玩也。何寶之焉。

○舅犯曰、亡人無以爲寶。仁親以爲寶。

舅犯晉文公舅狐偃。字子犯。文公時爲公子。出亡在外。故曰亡人。言無以得國爲寶。惟

事見禮記檀弓下。

仁愛其親、乃爲寶也。○晉獻公之喪、秦穆公使人弔公子重耳、且曰、寡人聞之、亡國恒于斯、得國恒于斯。雖吾子儼然在憂服之中、喪亦不可久也、時亦不可失也。孺子其圖之、以告舅犯。舅犯曰。孺子其辭焉。喪人無寶、仁親以爲寶。父死之謂何、又因以爲利、而天下其孰能說之。孺子其辭焉。

○秦誓曰。

秦誓周書。

若有一个臣。

一个臣。言相臣不用多、只一个臣、乃社稷安危、人才進退、所係。若有是冀望之詞。

斷々兮無他技。

斷々誠一之兒。猶云朴實。在貌上看。無他技。雖有才能而不露。若別無他長者。總見誠一之至。

其心休々焉、其如有容焉。

休々安閑寬綽意。如有容。正形容休々之意。有所容。而實無所有。故曰其如有容。見其休々之心空洞無外。

人之有技。

有才者。

若己有之。

視在人。猶在己。必欲盡顯其才。

人之彥聖。

彥聖美士有聖德者。

其心好之。不啻若自其口出。

言好之深。口之稱揚有限。而心之羡慕無極。

寔能容之。

寔作眞實看。

以能保我子孫黎民。尚亦有利哉。

尚庶幾也。有利。有益于國也。

人之有技。媢嫉以惡之。

與若己有之相反。

人之彥聖。而違之俾不通。

命下脫二也字一。

達者。不行其言、俾不通。則併其事而敗之。

寔不能容以不能保我子孫黎民亦曰殆哉。

殆危也。用人。是國家之大事。絜矩之先務也。故引秦誓之言。而擧可好可惡二等人。以警戒。且爲下文用人好惡之張本。

○唯仁人放流之。

絜矩乃行仁之術也。故謂仁人。卽愼獨君子也。放者置于此。使不得去。流者遣之。使去。如水之流而不返。之字指妨賢之人。

迸諸四夷。

迸逐也。

不與同中國。

不使爲善人之害。

此謂唯仁人爲能愛人能惡人。

言有此娼嫉之人。妨賢而病國。則仁人必深惡。而痛絕之。以其至公無私。故能得好惡之正。如此也。

○見賢而不能擧。擧而不能先命。

賢容賢利國人。先急速任之也。命當作慢。

見不善而不能退。退而不能遠。過也。

不善。妨賢病國人。遠迸諸四夷也。此粗雖知所愛惡。然未能盡愛惡之道。私意牽制。非仁人之所爲也。

○好人之所惡。惡人之所好。

妨賢病國。人所共惡。則喜其便己私。而好之。容賢利國。人所共好。則嫌其拂己欲。而惡之。

是謂拂人之性。

拂逆也。與好善惡惡之良知相違逆也。

菑必逮夫身。

所謂辟則爲天下之大僇矣。此兩節言用人。不能絜矩之失。上節不能先不能遠之念。勢必以惡爲無傷而反好之。以善爲不便。而反惡之。總是一箇不仁的之人。不可不愼。從楚書至此。又皆以申言好惡公私之極。以明上文所引南山有臺節南山之意。

○是故君子有大道。

忠信之說論語解亦同。而朱子學的解釋參看持敬圖說末項。

歛當作斂。下文正經亦同。

是故字。總承上文。大道即絜矩之道。好以天下。惡以天下。是範圍六合之道。至大者也。

必忠信以得之。

必者決詞。忠者。就靜時立名。中立不倚之本心也。信者就動時立名。純一無雜之實心也。總是一點眞心不滅不昧之良知是也。之字指大道。下同。蓋能致其良知而毋自欺。則好以天下。惡以天下。故得大道。

驕泰以失之。

驕者矜高。泰者侈肆。只管好惡狥一己之偏。安得不失大道乎。此因上所引文王康誥之意而言。章內三言得失。而語益加切。蓋至此而天理存亡之幾決矣。有天下國家者。可不知所務哉。

○生財有大道。

大是生々不竭的大道理。不比聚歛小術。生財。非生國家之財。生民間之財。與天下共生。不爲一人生。故曰大道。乃君子大道中之一事。

生之者衆。

國無遊民。則生者衆矣。

食之者寡。

朝無幸位。則食者寡矣。

爲之者疾。

不奪農時。則爲之疾矣。

用之者舒。

量入爲出。則用之舒矣。

則財恒足矣。

財恒足。通君民上下而言。上文既說財不可聚。然財用亦平天下之要務。只敎人不聚財。都無箇生財之術。如何可得。故又說此一條。明足國之道在乎務本而節用也。

○仁者以財發身。不仁者以身發財。

仁者。絜矩能生財之人。發猶起。言仁者。散財以得民。不仁者。忘身以殖貨。

○未有上好仁而下不好義者也。未有好義其事不終者也。未有府庫財非其財者也。

上好仁以愛其下。則下好義以忠其上。所以事必有終。而府庫之財。無悖出之患也。此乃以財發身之證也。

○孟獻子曰。

魯之賢大夫仲孫蔑也。

畜馬乘。

四匹曰乘。受君車。得駕四馬者。所謂士初試爲大夫者也。

不察於雞豚。

雞豚孳息之利。是小民之利。故不察。

伐冰之家。

卿大夫以上喪祭用冰者也。

不畜牛羊。

牛羊畜產之利。亦是民之利。故不畜。

百乘之家。

有采地。歲可出車百乘。采官也。因官食祿。曰采地。此其祿尤厚。非畜馬伐冰者之比。

不畜聚歛之臣。

額外剝削民財者。

與其有聚斂之臣、寧有盜臣。

此非取盜臣。甚言聚斂臣不可有。

此謂國不以利爲利。

以利之利。財利也。爲利之利。利益也。

以義爲利也。

不以聚斂之利爲利。而以公是非同好惡之義爲利也。此節引獻子之言。以爲人君專利之戒鑑矣。此謂以下又引古語以釋獻子之言也。

○長國家而務財用者。

長國家指君言。務是一心經營。

必自小人矣。

自由也。由聚斂之小人導之也。

彼爲善之。

彼字指君。善之以聚斂反爲長策也。

正經末尾爲利下脫也字。

底本末尾有正堂翁識語。今轉載於茲。

此書藤樹先生所註無疑。今質之大學考竝大學解二書。其義異者。唯誠意傳自欺自謙一處而已。大學解至正心傳而止。今此書則全篇完了。蓋先生先作此註。而更作和書。未了稿而歿也。

丙寅六月　正堂識

原本近江國高島郡安曇村中村治助所藏。明治四十三年三月命諸生寫之。

小人之使爲國家。菑害竝至。

菑天變。如水旱疾疫之類。害人變。如民心怨叛兵戈變亂之類。

雖有善者。

善者。愼德之君子。能絜矩之仁人也。

亦無如之何矣。

無如天命已去。人心已離何矣。

此謂國不以利爲利。以義爲利。

小人聚斂非利。絜矩而得民心合宜處。方是利。此節申明利國在義不在利之旨。其垂戒也。不亦嚴乎。人君以義爲利。則必能絜矩。而所以與民同好惡者。自不能已。求天下無治。不可得。進君子退小人。乃與民同好惡之大者。是又所以爲絜矩之要道也。故此章言絜矩之道。必以進君子退小人終焉。

古本大學旁訓　解題並凡例

【解題】　此の書の底本は明治三十四年の頃、滋賀縣高島郡大溝町笠井勗氏が、書後同氏自ら記するが如く同郡安曇村中村治助氏所藏寫本を借り來つて筆寫し、その後同氏が之を藤樹書院に寄納したるものなり。最初編者が之を通讀したる際には、其の行文が孝經啓蒙・鄕黨啓蒙等の簡潔にして且つ緊密なるに比すべくもあらず。內容亦大學考及び大學解に似ず。到底先生の遺著に非ざるべしと思ひしに、後古本大學全解が先生の遺著なることを確定するを得るに及んで、此の書がたとひ文體等に於ては、先生の他の著作と似ざるものあるにせよ、思想の傾向に於て大學全解に達する中間の作に係れりと斷定するを妨げざるを思ひ、一度は本全集中に採錄せんとしたり。然れども更に熟看するに、書中の括意若くは總註と名づくる部分に於て先生の文體と一致せざるもの頗る多ければ、此の書は門人が先生の說を受けて之を作爲したりと見るを妥當となすべきものゝ如し。或は旁訓の名に照し考へて旁訓の部分は先生の作となし、句解總註括意等を門人の追記となすべきか否か俄に決定すべからず。今疑はしきを闕き諸篇の列に置かず。茲に之を附載し以て大方識者の敎示を待つ。

此の書は孝經講義聞書・古本大學全解と共に藤樹先生門弟子の家に傳はり、且つ何れも未だ曾て世に公にせられざりし材料に屬す。而して孝經講義聞書寫本は現存するも、他の二本は既に散佚したるものゝ如く、從つて今之を見るを得ざるものなれども、幸にも全解は正堂翁により、旁訓は笠井氏及び正堂翁によつて之が內容を傳へられたるものなり。特に記して兩氏の篤學に敬意を表す。

〔凡例〕一、編纂に際し、原寫本を得て審に對校せんとし、現戸主中村喜六氏に質したるに、終に其の所在を知るを得ず。會、顧問東正堂翁が明治四十三年の頃、同書を底本として筆寫せられたるを聞き、書を致して之を恩借し、比較對照によつて玆に初めて原寫本の眞相を想像するを得たり。

一、此の書の底本卽笠井氏筆寫本にありては、句解は鼇頭に在り。正堂本にありては、之を本文と括意若くは總註との間に置く。底本の方原寫本に近かるべしと想像せらるれども、印刷の便宜上、姑らく正堂本の體裁に從ひたり。標目としたる句解の二字は全篇を通じて編者の附加したる處なり。

一、此の書もと全部白文にして、句讀訓點の如きは編者之を施したり。唯正堂本は本文を別にしては凡て句讀點を附せらる。今之に從ひしもの尠からず。又對校の結果正堂本に據つて改補したる部分は頭注に一本の名を以て之を明記し、又全體を通じて底本に存して正堂本に無き文字には、△印を傍記しおきたり。

一、頭注は編者の附する處なること前述の如し。但し正堂本に旣に之を注意したる部分、亦之を引用し冠するに〇印を以てし、因て編者の注記と區別したり。

一、底本としたる寫本の表紙には古本大學旁訓全の七字ありて卷首には此の七字無し。今卷首新に古本大學旁訓の六字を加ふ。

昭和二年丁卯二月一日

加藤盛一謹識

㈠兩意字一本並作謂字。
㈡爲物不妄動下一本有者字。
㈢隨而間舊脫機字。依一本補。
㈣安簡當作安閑。

(附) 古本大學旁訓

大學。書名也、此書以述於小人辨惑而至覺、復爲大人之事、且書之發端有此二字之故、名大學、

大學之道。在明明德。在親民。在止於至善。

○無上無外之謂、物我同体而無不該、与天地同其大、故曰大、即是自小人至大人之學也、（大）
○覺也、辨惑至覺之意㈠、（學）
○道猶路、當欲至於聖則所必可依踐者也、（道）
○無他之謂、（在）
○用力去人欲之昏蔽而復其本然之明也、（明）
○明字從日從月、能照物無私之象也、（明）
○得也、乃所得天而我之有也、（德）
○仁之發、即愛也、（親）
○人也、指五倫、（民）
○用力復其本然、至此不變動之意㈠、（止）
○性別稱、便寂然不動、而遂感通於天下之故也、無一毫之惡雜而純善也、故名至善也、（至善）

知止而后有定。定而后能靜。靜而后能安。安而后能慮。慮而后能得。

○眞知也、（知）
○性之別稱、以其寂然不動名之、即前之至善也、（止）
○天然自有之意、（有）
○私意一毫不萌、而有定見而不妄動也、（定）
○更爲物不妄動也㈡、但眞機之活動耳、（靜）
○無危機而安簡也㈣、（安）
○良知隨感而應、隨機而發也㈢、非臨事而經營商度矣、（慮）
○得復本然之德性也、（得）

物有本末。事有終始。

○凡形体皆謂之物、人亦一物也、（物）
○指明德、（本）
○指形氣、（末）
○指作業、即當於皃言聽動思之五事、如齊家治國平天下之事多端、畢竟無泄於五事矣、（事）
○指事跡、（終）
○指心、（始）

知所先后則近道矣。

○實知也、（知）
○指本始、（先）
○指末終、（后）
○附近之近、（近）
○率性之謂也、（道）

㊀端恐且字誤寫。
㊁○掩然宜ㇾ作ニ厭然一。
㊂本然明下恐脫ニ德字一。
㊃僻一本作ㇾ辟。
㊄在當ㇾ在ニ據字上一。
㊅○明德下明字恐衍。

【句解】

大學之道。人性善也、大也、覺也、然蔽ニ於人欲一之故、初昏迷而小窄也、故今欲ㇾ辨ㇾ惑去ニ人欲昏蔽之病一而至ニ於至大至覺之地一、卽是可ニ依踐而至一之道路也、

明ニ明德一。蓋人々本來所ㇾ受ニ於天一之德、聖凡無ㇾ隔、一是至明、与ニ日月一侔ㇾ明、然以ニ氣質之偏駁習染之汚一、而昏ニ蔽其明一、譬如ニ明鏡能照ㇾ物、然掩ニ於塵埃一、則其明所ㇾ障ニ塞之一、不ㇾ得ㇾ照ㇾ物、然本体之明無ニ増減一、是以一端㊀去ニ彼塵埃一、則忽復ニ本然之明一矣、雖ニ爲ㇾ惡無ㇾ不ㇾ至之小人、見ニ君子一、則掩然㊁掩ニ其不善一、是本然明㊂之發見也、最緊要之可ㇾ見處、依ニ四端之發一、可ㇾ證ニ見所ㇾ不ㇾ滅矣、依ニ其明處一去ニ一分之蔽一、則一分明也、明明德畢竟去ニ人欲之昏蔽一而復ニ其本体一也、是大學之体也、

親ㇾ民。夫人無ニ物我一而與ㇾ物交接、則自然仁心感發、而相親愛、一有ㇾ僻㊃則物我相間隔、仁心塞而不ㇾ通、明德明、則觸處交處得ニ其理一、無ニ物不ㇾ親愛一、而自然親民之義發露、然不ㇾ用ㇾ心、則明ニ明德一之功夫、徒馳ニ虛高一而無ㇾ實、親民畢竟據ニ仁心之發見一而交ニ接五倫一、在ㇾ親ニ愛之一也、是大學之用也、

止ニ於至善一。至善者明德之本体也、止ニ於至善一、卽明ニ々德一親ㇾ民之工夫極則也、將ㇾ明ニ明德一親ㇾ民、乃可ㇾ觀ニ察於天性之至善一焉、至ㇾ此立ニ定於脚跟一、須臾不ㇾ離矣、是無ㇾ他求ニ收其放心一而已、

知ㇾ止。眞知ニ於放心可ニ收求一、而眞知ニ其德性一也、上說ㇾ知ニ得德性落着之處一、故止ニ於至善一、是說ㇾ自ㇾ本進而至ニ德性之理一、故知ㇾ止、凡知行合一、然擧說便有ニ少始終一而已、

【括意】將ㇾ欲ㇾ爲ニ大人一而可ニ依踐而至一之道路、乃在ㇾ于去ニ於人々自ㇾ天所ㇾ得明德之昏蔽氣質習染之人欲一、而復ニ其本然之明覺一矣、是立ニ其体一也、其明德明㊅之感通則在ㇾ

相親愛於五倫矣、德明則自然親民、無親民之明德非實明德、自明德不㈠發來之親民、非實親民、畢竟無二致矣、明德親民之工夫極則、當止於吾心之本体寂然而物來感、而順應無窮、其應無不純善之体焉、止於至善之工夫、當於至善性中良知發見之處切用力而可致之矣、故止於至善、大學之要、明德親民之極則也、明明德不止於至善、或馳虛高、或陷卑近、而不得其本然、親民亦不止於至善、或流姑息、或陷形㈡制、而不得其道、雖然明々德親民・止於至善、畢竟是一事、依其所指、分体用工夫、而名稱之耳、蓋体用一原、顯微無閒、必勿泥名義認誤、令支離決㈢掣、右一節揭聖學之頭腦体用工夫爲學者之標的眼目、○自知止下至能得擧眞知於寂然不動之体之効、而示學者以修本則其効自然至之妙矣、是欲專用力於本也、凡㈣人之爲物變動、而私意交萌、而不定、乃是心不爲主、內而放也、今知寂然至善、則心爲主、內而無一物、故自然爲物不變動、而一毫無私意之萌而定、夫身心不閑靜、以妄念屢起而將迎也、今知寂然不動之体、無一毫之私意而定、是以自然妄念不起而身心閑靜也、夫身心不安、然而有危機、乃以爲物被動而發妄念之故、含畜不正、是以心失其体、被役氣而不安穩、身亦伏其㈤過機、而有危之機、今妄念不起而閑靜、則自無危機而安泰也、夫人之臨事苦難於經營商度。謀事而不中道、乃心不正而不寂然、爲物變動、妄念屢起害本心、不安泰也、今得上定靜㈥安、則卽無一物之害心者、自生靈慧、隨感而應、觸機而發、中其節、是非能慮乎、如此則得至善之本体、而感而遂通天下之故也、夫假令於自己謂知止而無定靜安慮之効、則非眞知焉、眞知則自然有定靜安慮之効、故工夫專在知止之上、不在定靜安慮之上、又是非知止之后經日涉時而次第得定靜安慮矣、只節次歷擧其効而說知止之妙、且示無定靜安慮之

㈠發來上不字當在自字上。如此之類不一々擧示。

㈡名稱下舊脫之字。依一本補。

㈢○掣恐裂誤。

㈣○人下恐脫心。

㈤過機一本作禍機。

㈥定靜安下或脫慮字。

㊀〇人下恐脫心。

㊁蒙朧當作朦朧。

㊂學者當在爲字下。

効則非眞知止而已、夫知止則如何有如此之効哉、凡人㊀之爲物變動而不定、妄念發而不閑靜、危殆而不安泰、涉於按排思索而應變不中節、是便人欲盛而天理不存、人心專用事也、今以寂然不動之性中靈明發見之良知鏡照之、則人欲去而天理存、道心專用事、人心常聽命矣、辟如雲霧蒙朧㊁之天忽晴、而萬里無雲、日正中之時、森羅万象不着力而自然照然、魑魅魍魎不得爲其妖矣、如此則如何無定靜安慮之効哉、能定靜安慮、則是復本然、而得至其德性也、○物者萬物也、有物必有本末、人亦物也、於人上論之、明德其本也、形体運用顯五事者其末也、事者作業也、即是指五事、五事必有終始、蓋五事皆發心而后顯事、是始心而終跡也、凡於形体運用五事有不正、是明德蔽塞而心不正之故也、今知所本始之可先末終之可后、則乃正其本始、而自然末終正、乃是表正則景正之謂、而本立而道生者也、故可近道矣、此一節學知於本始可先之理、則自是當近至於道之理、以㊂學者爲下手之基焉、

古之欲明明德於天下者。先治其國。欲治其國者。先齊其家、欲齊其家者、先修其身。欲修其身者。先

○泛指古昔之盛世、　○心實願求也、　○用力之字、

○交接於天下之事物、無不盡其道也、是明己之明德於天下也、天下化德而平、在其中矣、即親民也、明明德之外無親民也、

○交接於一國之人民、而不奪於人欲之私、專從明德之發見、國事作業盡其當然也、

○心之形骸運用之謂也、

○交接於一家之人、而不奪於人欲之私、專從明德之發見、家事作業盡其當然也、

○於其身決去於人欲之行、爲物不奪役也、

○銷滅舊作銷滅、據一本改。

正其心。欲正其心者。先誠其意。欲誠其意者。先致其

○身之靈明主宰之謂也、
○感物而動、謂之意、
○至也、猶致于哀之致、
○去邪僻之昏蔽、一物不有於心也、
○去意念之妄動、而復於本來之無為矣、誠者便心之本体也、

知。致知在格物。物格而后知至。知至而后

○良知也、不慮而自然知、不待學而能、故謂之良知、是乃天命之性、吾心之本体、自靈覺者也、孟子所謂是非之心、人皆有之者、是也、
○意所動、卽有物、物者五事也、
○五事盡適理、而一毫無不正也、
○正也、去其不正而歸正也、是依跡知心邪正、顧其本而正之也、
○安着良知上、而一毫無違逆也、

意誠。意誠而后心正。心正而后身修。身修而后家齊。家齊而

○意念妄動淨盡只性中之感通耳、
○心中之滓查盡銷滅、而得復本然也、
○明德明、而應事接物、盡自性中發見、而一毫無悖理之行也、
○家事作業、盡明德之發見、而家內化之、盡須整也、

后國治。國治而后天下平。自天子以至庶人。

○國事作業、盡明德之發見、而國民化之、各得其處、安其分、而一毫無悖逆之事也、
○己之明德明於天下之接物政事、而盡性中發見、故天下之人化之、而得其道、均平而無一毫危側之萌、安平也、
○指上一人、
○指農工商、
○卑者塡之、高者夷之、如水平、是規模更寬廣也、

壹是皆以修身為本。其本亂而末治者否矣。其

○無差別也、
○此修身兼格致誠正在其中、格致誠正、皆是修身之設而已、
○指身、是人欲專昏蔽天理、身心昏亂也、
○指家國天下、
○決無之辭、

所厚者薄。而其所薄者厚。未之有也。此謂知本。此謂

○指身、身者所當厚者、對家國天下、如草木之根、是可培養者也、
○愛之用心懇切也
○可愛而其心疎之謂也、
○指上文明明德於天下、至未之有、

㊀謂也下或當有然字。必依上者當有而身爲善去惡六字。

㊁○知下不字恐衍。

○知之至極也、知本則自然發達而無窮盡矣、他私智一偏不能通矣、然則非知之極乎、

知之至也。○無他之意、

【句解】

修身。爲善而去惡之謂也、身自不能爲善去惡、必依其靈明主宰者欲爲善去惡、而爲善去惡矣、故欲修其身者、必先正其心、

正心。蓋心本來無不正、自其意之發動而有不正、故欲正其心者、必就其意之所發而正之、凡其發而惡也便惡之如惡惡臭、則無意不誠、而復於本然之正、

誠意。是格物之主意、格物是誠意之工夫也、蓋自其意無不誠、而心可正矣、然意之所發有善惡、欲誠其意者、必在致知、○天理人欲界限最微、或足循理、纔作意氣、便是有意爲善、卽自私自利之心、却不是人欲、然此處不剖折毫厘、便是認賊爲子、

致知。凡意念之發、吾心之良知無有不自知者、其善歟、惟吾心之良知自知之、其不善歟、亦惟吾心之良知自知之矣、是皆無與於他人也、故雖小人爲不善無所不至、然見君子則必厭然掩其不善而著其善、是以見良知之不容自昧矣、故意之發動、必照諸良知而正之、而安着至其上、則意之妄動止、而心之發見而已、是卽復其本而誠也、

格物。以意之動而質良知、不依意之所有物而質之、則無下手之地、故於五事之上質知其安着其上、則意誠、誠意修身齊家治國平天下之功夫緊要之處、致知格物者、誠意之工夫極則也、

㊀事業舊作事事。依一本改。

㊁此一本作是。

㊂〔〕正一間脫無字。

㊃而一毫上舊無無字。俱據一本補。

【惣註】

夫上古盛世、欲明己明德於天下者、先用於交接于一國之事業利害、㊀而不被昏蔽其明德、能盡其道正改之工夫、欲若此者、先用於交接于一家之事業利害、而不被障蔽其明德、盡得處之之道之功夫、△夫欲若此者、先用於吾身決去人欲之行、應事接物、各盡天理之工夫、身者心之用也、故心不正、則不得修其身、是以欲修其身者、先用於吾心上邪僻之昏蔽、復其本然之功夫、心之發意也、然着意則氣專用事、而流私意、爲人欲、心爲意被蔽塞而不通、如何得心之正、故欲正其心者、先用於其意之動、必歸之無爲之　而無作爲涉私意之功夫、縱雖欲誠意、徒用功、則意与誠難弁、徒費心力、而益涉意而不誠、故先用依雖極惡之小人有自然知其惡之良知、而復其本來之無爲之工夫意之動必有物、卽五事也、故致知在切用力以依五事之顯易見跡、質其善惡於良知之明鏡、而去其邪、歸其正矣、此一節擧工夫之品序、而示學者工夫下手之條理、雖依其所指名義異、其實一事也、勿泥名稱、而爲別段之工夫、得致知格物、則誠意正心修身亦至、如此人而齊家則家齊、治國則國治、臨天下則天下平也、此一節詳言明明德親民止於至善之工夫也、蓋身心意知物者、是其工夫用力實地之條理、雖各有其所當、而其實只此一物、格致誠正修者、是其條理所用之工夫、雖亦各有其所當、而其實只此㊁一事、○於五事質其善惡於良知、而五事一毫無不善、則安着良知上、事正、安着㊂良知、則無意之妄動、而復本然之無爲誠、復誠則心中之滓查全銷滅、而無一毫不正、一毫不正則應事接物盡性中之發見、一毫無非理之行、若此人臨家則家事作業盡明德之發見而家內化之、各須整也、以齊家之道臨國、則國民化之、各得其處、安其分而無㊃一毫悖逆之事、以此臨天下、則己之明德明於天下之接物、而天下之人化之、而各得其道、均平而

㊀有滅字三字正堂本係朱書。按此上両字間蓋有數箇磨滅文字乎。

㊁尊重上恐脫可字。

無一毫危側之幾、而安平也、此一節轉說於前段之工夫所得之効、而示學者可必如此之意、〇天子位尊、其化所被廣大、庶人位卑、其業小、雖其所及之跡大小其異、然皆不過盡自己德性而已、故一切皆以格致誠正之工夫修一身爲根本、身修則隨其遇處、盡得其道、而無事不成矣、其所及之多少、在其所遇耳、若不修身而徒以威力知巧形名等之私知、欲齊家治國平天下者、決無得之之理也、譬如斷木根、而徒養枝葉、以邪曲之規矩、欲正方圓、有何益哉、惑之甚也、雖愚夫可知之理也、㊀此有滅字上且使學者知於大德之可尊重、修身爲萬事之本、而不務本、則無其効、本立則道生之理矣、且又解於世人見天下之大、則以爲別有大道處之、見一家之小、則以爲不足勤之、徒奪其形体事跡而忘其本、專馳外、不知天德之尊㊁重之惑矣、〇可愛而懇切者、無若身、愛之則當切用心去其惡有其善、然不如此、則是愛之薄、而用心之不切實也、今薄可厚之身、則決無厚於身外之家國天下之理矣、如何便其身不修、明德昏迷、則假令雖厚所薄、畢竟是私意之厚、而不盡其理、雖愛之、却貽害於其中矣、其跡於世欲之凡態而可見之、此節与上節意同、重說乃丁寧反復之意、〇此謂知本之節、統結上文、揭示如此則知本也、是則大知之至極、而非如私智小慧、知形跡之顯然、而不知本体隱微之理也、使學者切信而專務其本焉、

〇所謂（〇經所謂云之意、自是解經文、故以所謂二字發端、）誠其意者。毋（〇無也、）自欺（〇人所不知、而已獨知之也、卽獨之發也、）也。如（〇假彼明此之辭、）惡惡臭。如好好色。此（〇指上文、）

○、、、、、、於誠意之上、眞實無妄之譬也、

之謂自謙。故君子必愼其獨也。

○上与自同、　○謙讀爲慊、々快也、足也、　○指學者、聖人以下皆學者、志仁則無惡、故謂之君子、　○良知也、專一無偶者也、故謂獨、

○點檢關防之謂、全体精神悉在此、無一毫滲漏之意、正是所以誠其意也、　○承上起下之辭　○無別事、無別路之謂、　○泛指學者、

小人閒居爲不善。無所不至。見君子而后厭然揜其

○從小体人也、卽私智小慧之凡人也、○自是下說不愼獨之蔽也、　○猶燕居無可忌憚之時也、　○、、、人欲之私也　○、、、盡至不善之地也、　○指有德人、　○銷沮閉藏之皃、　○蓋藏也、

不善。而著其善。人之視己。如見其肺肝。然則何益矣。此謂

○飾著也、　○猶言見徹其胸中、是雖飾著其善、然心中之不善、顯然之意、　○指小人以下之文、

誠於中形於外。故君子必愼其獨也。

○指良知、是知其不善之謂、　○揜不善著善、是良知知善不善之形也、

【句解】

毋自欺。　是本心之明、便是致知也、其知之者自也、不欺背其所知者、復自之本体無爲、是意誠也、

自謙。　無自欺、其眞實如惡々臭好々色之自然發見無雜、吾心之体用無不盡、而常歸無爲、心中無一毫障碍、故快足也、

㊀自己作舊身己。據一本改。
㊁無他舊作無化。據一本改。

愼獨。毋自欺下手之工夫也、在欺謙未分之初、靈明發動、純是天理、是獨知處、是一本而無偶、故又謂獨、愼者收其放心、而全然精神在此也、

小人間居之時、所蔽私欲爲不善無不至、然見有德之人、則中心固有之良知誠忽發見、故蓋藏不善而著善、最又蓋藏與著

誠於中。形於外。

非良知、是其知善爲善不善爲不善、即良知也、蓋藏與著、是平生所醞釀凡心混雜發也、

【惣註】

此章述釋經文之意、故發端置所謂之二字、經文所謂誠其意者、即隨㊀自己本心發見之良知、而無敢欺背矣、其眞實如惡惡臭好好色之自無爲發而無作意雜錯也、如此即無入不自得、性分全然無欠闕、故自己心身自快足也、至此之術㊁無他、當用戒愼恐懼之功於其本心隱微而人之不能知眞實無妄專一處、而點檢防閑收其放心而已、故欲至聖人者、決定於自己獨知之上、無一毫蔑如、全然精神在茲矣、然小人之凡態、當無可忌憚之閒燕之時、從其私欲、爲惡無不至到、其所爲悉人欲之私也、乃及一旦見有德之人、則轉然心初驚覺、忽銷沮閉藏、揜其不善飾著於善人之模樣、縱雖閉藏飾著巧、自人見之、其不善之實著見、如見彼胸中肺肝也、見君子感動、而知自己之不善、是即良知之發見也、然平生所醞釀之凡情、忽混萌而爲閉藏飾著之凡態、其心以爲飾著其虛善、而閉藏平日之不善、則於己有利矣、然其惡著見如是、則何有益哉、是一節依凡心之所利而示之以其無益之意、且示其實心之發以救之也、縱雖爲極惡之小人、本心之誠明遂無亡矣、故見君子則其誠明發露如上文、是誠於中形於外也、是以君子知其性善、而必愼其天性獨知之處矣、此一節結上起下之辭、誠於中形於外之句、含蓄下文德潤身之意、

(一)○天德非屋解。

(二)○是便僞作是使。據一本改。

曾子曰、十目所視。十手所指。其嚴乎。富潤屋、德潤身。

○至顯著之謂、○与上同、○可畏敬也、、、反言之辭、○其富充溢、而其屋必有華澤光潤之氣象、○天德、是意誠心正身修也、(一)

○德美充溢、而其身必有安舒光輝之氣象、即下之心廣体胖也、是便(二)動靜雍容、望之可敬、就之可親、有威可畏、有儀可象、是光潤其身也、

心廣體胖。故君子必誠其意。詩云。瞻彼淇澳。菉竹猗猗。

○衛風淇澳篇、興也、○水名、○隈也、崖也、○詩作綠、色也、○美盛皃、○於宜反、又叶音阿、

○、、、意誠則中無愧怍、心自然寬廣也、心廣則体自胖也、音湯平木器也、

有斐君子。如切如磋。如琢如磨。瑟兮僩兮。赫兮喧兮。有斐

○以刀鋸也、○以鑢鐋也、○以錐鑿也、○以沙石也、○嚴密之皃、○武毅之皃、○、、、宣著盛大之皃、○況晚反、

君子。終不可諠兮。如切如磋者。道學也。如琢如磨者。自

○省察克治之謂也、○忘也、○自此已下解詩之辭、○言也、○謂講習討論之工夫、博學審問愼思明辨篤行在其中、

脩也。瑟兮僩兮者。恂慄也。赫兮喧兮者。威儀也。有斐君子

○、、、戰懼也、意誠而心正、其心体之常惺々者也、○可畏也、○可象也、○心正而身修矣、內恂慄而外威儀、自然之符也、

終不可諠兮者。道盛德至善。民之不能忘也。詩云。於戲前

○明德明則親民在其中矣、德既明則我所以爲親賢樂利者、各得其道、民有被之、故不能忘也、○周頌烈文之篇、○、、歎美之辭、○謂文武也、

㊀○統宜作說。

王不忘。君子賢其賢。而親其親。小人樂其樂。而

○謂後世在位之人、自是以下解詩之辭、
○前王明德之發五倫、其親愛之和德、後世感化其德而依之、是、、、、、也、
○前王敬止執競之心法身法、著爲謨訓、后人法之、是賢其賢也、
○指前王、
○指後民
○前王道化薫蒸來、使人得煦嫗鼓舞其中、是、、、、、也、

利其利。此以沒世不忘也。康誥曰。克明德。大甲曰。

○前王敬止發政事、分田制產、政令悉天理之至公、而民所利也、故后人利之也、
○心實慕之也、
○周書篇名、
○復其本也、
○明德也、
○商書篇名、
○謂明德是天之所以明命与我而我所以爲德也、

顧諟天之明命。帝典曰。克明峻德。皆自明也。湯之盤

○復其本也、精神止駐於此之謂、
○虞書堯典也、
○大也、、、謂明德、以無不包、故曰、、、
○是不求於外、即復自己之本然也、
○殷一王也、
○沐浴之盤也、
○非以心去、、、、纔省他時、自然不錯雜入來

銘曰。苟日新。日日新。又日新。康誥曰。作新民。

○銘其器以自警之辭、
○誠也、
○明也、明則新、昏則汚、而不新矣、心本明也、依氣質偏致舊習而汚、今去其汚、而復本、是新也、
○從進而不已之謂、
○感德而興起也、
○殷新附之民也、又一說、殷頑民化周德、變改爲新、

詩曰。周雖舊邦。其命維新。是故君子無所不用其極。詩曰。

○大雅文王篇、
○天一也、
○新受天命有天下也、
○有德之稱、
○、、、、、無時所不依之、
○標準之名、中立而四方之所取正焉者也、即皇建有極之極、乃至善之別名、

邦畿千里。惟民所止。詩云。緡蠻黃鳥。止丘隅。子曰。於止

○、、王者之都也、
○居也、
○小雅緡蠻之篇、
○詩作緜、、鳥聲、
○鶯也、
○、、岑蔚之處、
○自此下統詩之辭、㊀

知其所止、可以人而不如鳥乎。詩（○文王之篇、）云。穆穆（○深遠之意、此贊其德也、）文王。於（○歎美辭、）緝（○繼續也、即是無間斷之謂、）熙（○光明也、言其敬處惺惺不昧也、）敬（○衆斂此心、常純天理也、敬与止、本無二、是復其心之体也、）止。為（○自是以下、依詩辭、）人君（○無妄動、自然之流行、無雜事之意、心本來具仁愛也、敬孝慈信、故隨感而自然發、乃從心流出之故、）止仁（愛也、）、為人臣止於敬（○尊也、）、為人子止於孝（○兼愛敬、）、為人父止於慈（○惠也、）。（為物不變動也、即是純天理也、）（自然無混雜、故曰―、是非以仁敬孝慈信為至善而止之也、）與國人交止於信（○言与心無違別、言与行不違也、）。子曰。聽訟（○告曲直也、）吾猶人（○、、同於人也、）也。必也使無訟乎。無情者不得盡其辭。大畏（㊀○畏服也、）民志。此謂知本（○依事与詞之跡、而決曲直者末也、明吾德而臨之、則有上文之效、是本也、）。

【句解】

切琢。皆裁物、使成形質也、

磋磨。皆治物、使其滑澤也、

盤銘。以沐浴新潔身、譬去明德之昏蔽新之、而以為譬、

㊀畏服下舊無也字。據一本補。

㊁而以下四字恐衍。

作新民。　止於至善、明明德於天下之効也、

周雖舊邦、其命維新。　周雖爲舊國、至於文王、明明德、止於至善、其德與天心相通、新愛㊀大命王天下也、

【惣註】　曾子曰之節、此段引曾子之語、而覆說上文之意、曉示之矣、夫小人之情、暗爲不善、而顯飾著善、是私欲掩本然之明、而不知其本然之至善也、故以爲十目所視十手所指甚嚴然可畏矣、誠愚之至也、假令雖於十目十手之顯處飾著善、隱微獨知之處、有惡、則遂不得掩之、如見其肺肝矣、以此見則十目十手之顯然、則不足爲嚴、其隱微獨知之嚴至甚矣、其驗則如富人之家、不設華麗之潤飾、然其富饒之氣象、自然發其屋、有安富潤澤之氣象、又實德內積、而獨知隱微之處無塵汚、則自然其氣象顯形體、必有安舒光輝之氣象、故君子用克去意念妄動之病、養本然之誠明之功、○淇澳之節、詩人見衞國淇澳菉竹美盛、而興起於盛德君子之事、發言曰、有有文章之君子、其學術譬如治骨角者、既以刀鋸切之、截成其形質、又以鑢鍚使其滑澤矣、治玉者、既以錐鑿成其形質、又以砂石使其滑澤矣、其德行嚴密武毅而宣著盛大也、如此有文章之君子、終不可忘焉、今解之曰、詩人所詠之切磋、是道其工夫、博學審問審思明辨篤行之事、是其學術也、琢磨自修其德、去人欲存天理也、道學自修、是互文而已、切磋琢磨、學修非兩事矣、瑟兮僩兮者、形容其依切磋琢磨之功、其㊁所得嚴密武毅、而物不得投之、欲不能勝之、是戰懼慎獨之模樣也、赫兮喧兮者、形容依其切磋琢磨之功其所得宣著盛大、而有威可畏有儀可像矣之模樣、有斐君子終不可諠兮者、以切磋琢磨之功、至瑟兮僩兮赫兮喧兮之位、其德

㊀愛當作受。

㊁所得舊作可得。據一本改。

㊀所樂舊作可樂、據一本改、蓋形近而誤。
㊁後下舊脱世字、依一本補。
㊂下民樂其利、其字恐衍。
㊃逡一本作逐。
㊄愛當作受。

盛而純善也、故民感化其德而不能忘也、此段引詩以明大學之道不用千磨百煉之功容易不易至其極其所及廣大、以勸戒學者、且詠歎前段誠意之効也、○烈文之段、詩人見文武之德化之所及廣大而詠歎曰、前世文王武王不忘、今解之曰、其不忘故者、以文武之德行盡從道敬止之心法身法悉可法則、故後世在位之人感化其德而師法之、又文武交於五倫、相親愛、是明德之發見、而悉得其道、乃可法則、故後世在位之人感化其親愛之德而師法之、又文武得天理眞樂、故發事所㊀樂皆天理而無人欲之私、是以後世之下民、以文武之樂事、不爲己之煩、各悅樂其樂事、又文武之政令分田制產等之儀法、是上之所利、天理至公而無一毫之私、民亦悉所利也、是以後㊁世下民慕其政令、是利其利也、畢竟此段之意、君子賢親文武之賢親而敬慕之、下㊂民樂其利文武之樂利而敬慕之、是以沒世不能忘也、○康誥大甲帝典之段、夫康誥克明德、大甲顧諟天之明命、帝典克明峻德、皆不向外物上而窮其理而明之、但於自己心上、去人欲之私、而明自天所得之德而已、是卽經文明々德也、今引三書而先爲聖門之學脉正路之印證矣、其所引逡㊃溯由周而商而唐者、文王既本朝所見聞也、不獨文王爲然、等而上之、商又然、又不商爲然、等而上之、唐亦然、是万古此德、万古明此德也、○盤銘之段、湯王以人之沐浴而去其汚穢而潔淨其身、譬猶去於心上之汚而復其明矣、銘其沐浴之盤曰、眞實底用力而復其明、去舊爲新、其功夫所得無間斷、日日如此、又日新益進而不已、以爲警戒、康叔明其德而臨殷新附之民、殷頑民化周德、變爲新人、今又益感化康叔、興起振作其既新之心矣、○文王篇段、文王明其明德而其德与天心相通、愛㊄天命而周之舊邦新得天下、是皆誠意止於至善之効也、是以有德之人、必無時所不據用其至善矣、今引

○攷他例、乃知文王篇上當有圈子。

○專不間舊脫一字。從一本補。

三聖之事、而學止於至善之効、爲學者之勸戒、○邦畿之節、夫邦畿千里之內、王化之所厚及、文章禮義之地也、是當人之止而安處也、故天下之人民所止居也、又丘隅岑蔚之處、當鳥之止息也、故緡蠻黃鳥止之、夫子見詩人之詠曰、黃鳥微禽、猶於止知其所止、如何可以人而不如鳥乎、文王篇、稱文王之德穆々深遠、文王之德繼續無少間斷、有光熙、當惺々然不動、今解之、文王以此德爲人君、則仁發愛惠臣民、專一無變遷、爲人臣、則敬發尊敬其君、專一無變遷、爲人父、則慈發慈惠之、專一不變遷、爲人子、則孝發愛敬其父、專一不變遷、與國人交、則信發其政令與其心行無違變、一毫無變遷、是無他、有敬止之德也、夫子曰、聽訟依其言事之跡而決其曲直、夫子亦不異他人、吾德明則民大畏服其德、而不得盡無情之辭、如是必無訟乎、文王於父子君臣朋友之間、各得其道、是不求其理於所交接之物、而明其明德、則自然感發得其道、夫子臨訟亦不用費力於其言事之末、而其德明則民畏服、不得盡無情之辭、此皆知本也、學此以見知本之効、爲學者勸戒、

○所謂修身在正其心者。身有所忿懥、則不得其正、有所恐懼、則不得其正、有所好樂、則不得其正、有所憂患、則不得其正。心不在焉。視而不見。聽而不聞。食而不知其味。此謂脩身在正其心。

○指身、　○跬着也、　○怒見、不能忍而發出之謂、　○觸采也、　○失本性之正也、　○膣子喪也、

○其事舊作其家、放着作於着、俱從一本改之。
○偏斜上恐脫器字。
○釋文修身中間恐脫謂字。

【惣註】 此章述脩身在正心、經文所謂脩身在正其心者、其故何哉、常人之情、於其身有所當忿懥恐懼好樂憂患之事、則動着其㊀事、而失天理之正、而陷人欲之私、是無他、心不在腔子裏而㊀放着外也、是以視而不見、聽而不聞、食而不知其味、如此則如何得身修哉、譬心如燈、身如案架燈器、暗中挑案燈器、則無不照、是無他、以燈之在其中而泰然也、若以一物投在其燈火中、或案架燈㊁偏斜、則不能正照、而燈器之用不得其正理、若又一向放去燈火、是便無用之空器也、然常人之心、必着物而去腔子裏、放在外而不得正、故其身行亦不修㊂、欲其行事正修、則當求其放心而復其正、若向事物上用力、則何有益乎、此所以經文修身在正其心者也、

○所謂齊其家。在脩其身者。人之其所親愛而辟焉。之其所賤惡而辟焉。之其所畏敬而辟焉。之其所哀矜而辟焉。之其所敖惰而辟焉。故好而知其惡。惡而知其美者。天下鮮矣。故諺有之。曰。人莫知其子之惡。莫知其苗之碩。此謂身不脩不

○往也、如之楚之齊之之、是任其所向而不能察也、
○妻子嬖妾之類、
○偏駐也、
○孤寡之類、
○尊貴者之類、
○好頑者之類、
○鄙陋之人類、
○—爲凶德、—爲偸肆、雖亦出于人情而非天理之正、大學類而擧之、其病惣在辟之一字、古人立言在大旨重之、在文義小異、蓋不拘、
○俗語也、

⊖行、恐往字殘缺。

⊜其下舊脫家字。依一本補。

⊜德下舊無也字。不於間脫出字。俱從一本補。

可以齊其家。

【惣註】夫常人之情、於其所親愛賤惡畏敬哀矜敖惰等之事、一向行⊖著其事而偏辟、故有可惡之惡、我所好則不知之、有可好之美、我所惡則不知其美、是以俗語曰、人莫知其子之惡、莫知其苗之碩、是偏僻之病也、是便身不修也、如此則一家之應事接物皆己之私也、然則如何得齊其家⊜哉、此所以經文謂身不修不可以齊其家也、

○所謂治國必先齊其家者。其家不可教（○無可感化之德⊜也、）而能教人（○國人也、）者無之。故君子不出家（○於家內事而盡天理也、是⊜不出於家事之外也、）而成教於國。孝者（○事父母之道也、）所以事君也。弟者（○事兄長之道也、）所以事長（○德位齒長於我者也、）也。慈者（○養子弟之道也、）所以使衆（○國民也、）也。康誥（○周書篇名、）曰。如保（○保養也、）赤子。心誠求（○自是以下、解書之辭、○指子之所欲寒暖飢飽之類、）之。雖不（○一念無作意也、）中不遠矣。未有學養子而后嫁者也。（○假此明道本不假作爲、天然自有之意、）一家仁。（○有恩以相親愛也、）一國興仁。一家

○旁訓不下心當作必字。

●本文此一閒脫謂字。一本亦同。

●本文而可閒脫后字。一本亦同。

讓。一國興讓。一人貪戾。一國作亂。其機如此。此一言

○以禮相交接、遜順而無少乖戾也、

○忘己狥欲、好大喜功、皆是一、又凡有計利近名占便宜之心、皆一、

○自執己意、矯情干譽、不合人情、不宜土俗、皆一、

○暴亂也、

○弩上一也、在手至近、然由我一揆便發矢可至百步、不疾而速、不心親身往百步外、而百步外中的、今依一人言行達千里外、亦如此、

僨事。一人定國。堯舜帥天下以仁。而民從之。桀紂帥天下

○覆敗也、

○安定也、

○一人定國之驗也、

○不是驅率之帥、卽將帥之帥、

○以仁修身、作天下準則、是帥天下以仁也、

○感化其德也、

○一人貪戾、一國作亂之驗也、

以暴。而民從之。其所令反其所好。而民不從。是故君子有

○以暴逆處其身也、

○天下習染之也、

○命令也、

○有善也、

諸己。而后求諸人。無諸己而后非諸人。所藏乎身不恕。而能

○使作善也、

○無惡也、

○戒正之也、

○含畜也、

○如心謂之恕、卽上有諸己而求諸人、無諸己而非諸人也、

喩諸人者。未之有也。故治國在齊其家。詩云。桃之夭夭。

○聞其言、而能融通心也、

○周南桃夭篇、興也、周禮中春令、會男女、桃有花、正婚姻之時也、是以興起也、

○少好之皃、

其葉蓁蓁。之子于歸。宜其家人。宜其家人。而可以敎國人。

○美盛之皃、

○猶言是子、此指女子之嫁者而言也、婦人謂嫁曰歸、

○自此下、解詩之辭、

詩云、宜兄宜弟。宜兄宜弟、而后可以教國人。詩云、其儀不忒㊀。正是四國。其爲父子兄弟足法、而后民法之也。此謂治國在齊其家。

○小雅蓼蕭篇、諸侯朝天子、天子享之燕、以示慈惠之詩也、
○宜家人一般、蓋諸侯繼世而立、多疑忌其兄弟、故美之、又所以警戒之也、
○此以下解詩、
○曹風鳲鳩篇、
○法也、其德行可儀法、故曰一一、
○差也
○自是以下、解三詩之辭、
○其德行悉從天理而無差忒㊀也、

【句解】

如保赤子。是武王誥命弟康叔之辭也、本書曰、、、、惟民康人㊁、

心誠求之。雖不中不遠。是揭示心之本明本誠、而天然自有、不假外求、當見良知自具足矣、

學養子。世儒格物致知、乃是、、、之學也、

【惣註】夫不能教其家、而能教人者、決無之、故君子不出其門庭、而成教於國、如何便君子在家、愛敬其父母、盡孝道、是便國人所以事其君上之道也、在家尊敬其兄長、盡弟道、是便國人所以事其長上之道也、在家教育其子弟、盡慈惠之道、便所

㊀忒底本誤作式。今訂。
㊁人當作乂、

⊖也下舊脫此字。據一本補。

以使衆民之道也、且康誥曰、如保赤子、凡嫁者非學養育子之道而后嫁。然其所愛之眞實也、是以察求其子之所欲寒暖飢飽、假令雖不中然不至遠失之、以此見則雖治國之事廣遠、以誠臨之、則無不達其理而其教不成、凡一家有仁、則一國感化其德而興起仁、一家有讓、則一國感化其德而興起讓、上一人貪戾、則一國化其惡、而作暴亂、其應効之速、其所懸之重、譬如弩上之機、在其手至近、然一撥則忽至百步外、此依一言之惡、而僨事、以一人之善德定國之謂也、堯舜以仁德臨天下、則天下之人民從之、四方風動、遂致百姓平章之功矣、是一人之善德定國之効也、桀紂以暴逆臨天下、民從之、亦暴逆也、是以遂國亂身亡矣、是一人貪戾、一國起亂之効也、雖桀紂之所令、不至有使民暴逆之令、然其所自行皆暴逆、則是己所好暴逆、而与所施之令相反、是以民背其令從其所好、是故君子己有善、而后欲人之善而教導之、己無惡而后戒正人之惡、是以其効如堯舜帥天下、譬如以尺度量物、何有、其身無所藏之上所說之忠恕、而能使人聞其教而心融和哉、故治國在先齊其家、是以詩人見桃之夭夭其葉蓁々、而興感其少好美盛之氣、而詠曰、今是所于嫁之女子有德、而宜其家人、又詩蓼蕭稱諸侯之德、宜兄宜弟、鳲鳩篇美君子之德、曰其德儀不差忒、是以正其四國矣、桃夭以女子之賢于嫁而和順一家人也、有宜家人之德、而可以教國人、蓼蕭之宜兄弟、是即宜家人也、如此而后可以教國人、鳲鳩君子其身之德行有儀則、而從天理無差忒、是以正其四國也、是其爲父子兄弟者、先足爲法則、而其化所及、民法則之也、⊖此所以經文謂治國在齊其家也、前段已說盡了、而以治國在齊其家結之、然餘縕未盡、是以今擧三詩詠歎之而已、

㊀倍傍一本有物相二也又反也七字。今從補。

○所謂平天下在治其國者上老老而民興孝。上長長而民興弟。上恤孤而民不倍。是以君子有絜矩之道也。所惡於上。毋以使下。所惡於下。毋以事上。所惡於前。毋以先後。所惡於後。毋以從前。所惡於右。毋以交於左。所惡於左。毋以交於右。此之謂絜矩之道。詩云。樂只君子。民之父母。民之所好好之。民之所惡惡之。此之謂民之父母。詩云。節彼南山。維石巖巖。赫赫師尹。民具爾瞻。有國者不可以不愼。辟則爲天

○都從正心誠意致知格物上來、与后世以法制把持天下者、眞如霄壤不侔、

○長尊吾長、而盡其道也、

○尊敬吾老、而盡事之道、

○感發而興起也、

○良知也、是仁之体、孟子所謂權知輕重、度知長短、而心爲甚者也、夫人々本同心、同德也、故今以自己之心体具足之良知絜矩之、而尽其道、是以天下歸仁矣、自然之感通也、其效如上文、

○愛憐之也、

○幼而無父之稱、

○不倍違之也、㊀

○物相二也、又反也、

○度也、

○先爲惡也、

○從爲惡也、

○小雅南山有臺之篇、

○自此下解詩、

○小雅節南山之篇、興也、

○截然高大皃、

○自此下、解詩之辭、

○積石皃、

○顯盛皃、

○周大師、尹氏也、

○—讀爲僻、偏也、好惡狥於一己之偏、則身弑國亡、爲天下之大僇、

下僇(○与戮同、)矣。詩云(○文王篇、賦也、)。殷之未喪師(○衆也、)。克配(○對也、配上帝、与天理相配對也、是以不喪師、)上帝(○天之主宰也、)。儀監于殷。峻(○大也、)命不易(○言難保也、)。道(○以下解詩、)得衆則得國。失衆則失國。是故(○引三詩、而以結上文之意、示必可如此、)君子先愼乎德(○精神純在此也、)。有德此有人。有人此有土。有土此有財。有財此有用(○國用也、)。德者本也。財者末也。外本內末(○爲主也、)。爭民施奪(○謂爭民之財、而先施其奪于民、民豈不以奪報我乎、故下文曰貨悖而出云云、)(○導以外本內末、則民亦以利爲意、故相爭、是施之以劫奪之敎也、)。是故(○外本內末也)財聚則民散。財散(○外末內本也、)則民聚。是故言悖(○逆也、)而出者(○以言之出入、明貨之出入矣、)。亦悖而入。貨悖而入者。亦悖而出(○自先愼乎德以下到此、又因財貨、以明能絜矩与不能者之得失矣、)。康誥曰。惟命(○天命也、)不于常。道(○以下解書文、)善(○愼德得止於至善也、)則得之(○指天命、)。不善則失之矣(○因上文引文王詩之意、而申言之、其丁寧反覆之意、益深切也、)。楚書(○楚語也、楚昭王時書也、史官所記之策書也、在國語中、)曰。楚國無以爲寶(○無器物之爲寶也、)。惟善(○指善人、)以爲寶。舅犯(○晉文公舅狐偃、字子犯也、)曰。亾人(○指文公時爲公子出亡在外也、)無以爲寶(○同上、)。仁親(○事親盡天理也、)以爲寶。秦誓

㊀両寬太當作寬大。
㊁人我舊作人家。依一本改。
㊂書下舊無作字、依一本補。
㊃擧用下舊無也字。依一本補。
㊄今其舊抹殺二字、作貪一字。從一本。

曰。若有一个臣。斷斷兮無他技。其心休休焉。其如有容焉。
○誠一之皃、
○、、、是渾厚底之人、不露一些才能、是重厚之器也、
○易直子諒也、有安閑之意思、㊀寬太之意思、
○形容安閑寬太之氣象、㊀

人之有技。若己有之。人之彥聖。其心好之。不啻若自其口
○才藝也、
○形容於無人我之隔一毫媢疾之意、㊁
○美士也、
○通明也、

出。寔能容之。以能保我子孫黎民。尙亦有利哉。人之有技。
○庶幾也、書作亦職有利哉、㊂

媢疾以惡之。人之彥聖。而違之俾不通。寔不能容。以不能保
○忌也、書作冒、
○拂戾也、

我子孫黎民。亦曰殆哉。唯仁人放流之。迸諸四夷。不與同中
○危也、
○是仁之至也、若不忍放流之、而曲爲容、則殘害善民、流毒萬姓、其不仁幾何乎、

國。此謂唯仁人爲能愛人能惡人。見賢而不能擧。擧而不能
○至公至明也、
㊃○擧用也、

先。命也。見不善而不能退。退而不能遠。過也。好人之所惡。惡
○古註作慢、卽緊慢、、
○逆也、人性本來善也、㊄今其行實皆人欲之私、是逆性也、
○以位言也、

人之所好。是謂拂人之性。菑必逮夫身。是故君子有大道。必
○卽絜矩之道、是君人之道也、
○自秦誓至此、又皆以申言好惡公私之極、以明上文所引南山有臺節南山之意、

○民下舊無二也字一。從二一本一補。

㊁交舊作二文如一。依二一本一改。

㊂驗一本作レ效。

㊃斂當レ作レ歛。下同。

㊄本文謂不間脫二國字一。一本亦同。

忠（○盡心之謂）信（○言行無違逆也）以得之（○指君人矣、）。驕（○矜高、）泰（○侈肆、）以失之。生財有大道。生（○國無遊民也、㊀）之者（○指財、）衆。食（○朝無倖位也、）之者寡。爲之者疾（○不奪農時也、）。用（○隨理而無驕奢也、）之者舒。則財恒足矣。仁者以財發身（○猶起、散財以成身之德也、）。不仁者以身發財（○忘身以殖貨、）。未有上好義（○其心實好義、則其交下皆因義、㊁）而下不好義者也（○感化上德、而以忠其上也、是自然之驗也、㊂）。未有好義（○忠其上、則無事不終其功也、）其事不終者也。未有府庫財非其財者也（○下有義而守之、則如何有悖出劫奪之患哉、）。孟獻子（○魯大夫仲孫蔑也、）曰。畜馬乘（○初試爲大夫者也、）。不察於雞豚。伐冰之家（○卿大夫以上、喪祭用冰者也、）。不畜牛羊。百乘之家（○有采地者也、）。不畜聚斂之臣（○君子之心寧亡己之財、而不忍傷民之力、故寧有盜臣、、、、）。㊃與其有聚斂之臣。寧有盜臣。此（○此已下、釋孟獻子之言、）謂㊄不以利爲利。以義爲利也。長國家而務財用（○用也、）者。必自小人（○在下小人、）矣。彼爲善之（○自以爲於己善、）。小人（○指在上小人、）之使爲國家。菑（○天一也、）害（○人爲也、）並至。雖有善者。亦無如之何矣。此謂國不以利

爲レ利以レ義爲レ利也。此一節深明下以レ利爲レ利之害上、而重言以結レ之、甚丁寧之意切也、

【句解】

節南山之全文。爾瞻之次。有レ憂心如レ惔。燔也、不二敢戲談一。國既卒終也、斬絶也、何用不レ監、

楚書曰云々。國語楚語曰、王孫圉聘二於晉一、定公饗レ之、趙簡子鳴レ玉以相、問曰、楚之白珩猶在乎、其爲レ寶也幾何矣、曰楚之所レ寶者、曰觀射父、能作二訓辭一以行二事於諸侯一、使レ無下以二寡君一爲中口實上、又有二左史倚相一、能通二訓典一、以叙二百物一、以朝夕獻二善敗於寡君一、使レ無レ忘二先王之業一、若二諸侯之好一、幣具而道レ之以二訓辭一、寡君其可二以免一罪於諸侯一、而國民保焉、此楚國之寶也、若夫白珩、先王之玩也、何寶レ之焉、

舅犯曰云々。文公避二驪姬之讒一、亡在レ翟、而獻公薨、秦穆公使二子顯弔一、因勸二之復一國、舅犯爲レ之對之辭也、明レ不下因レ喪起上レ利也、

㊀甚一本作レ其。

㊁標目楚書曰云々五字今補。

㊂口舊作レ以。依二一本一改。

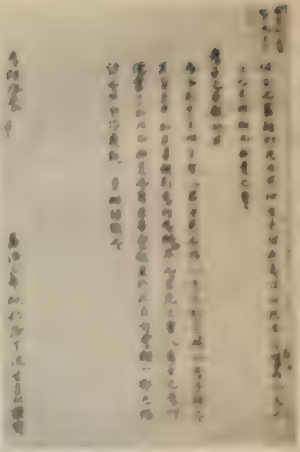
㊃標目舅犯曰云々五字今補。

㊄文見二大學鄭氏注一。

㊅底本末尾左ノ記入アリ。

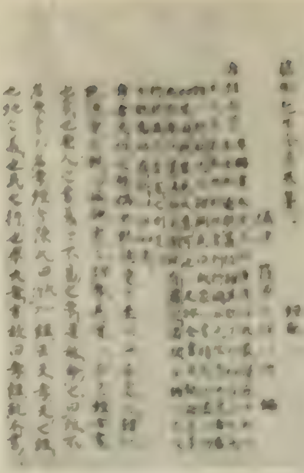
此書原本(寫本)中村治助氏ヨリ借リ來リテ寫ス

明治三十四年六月三十日　笠井劼



孝經啓蒙　眞福本

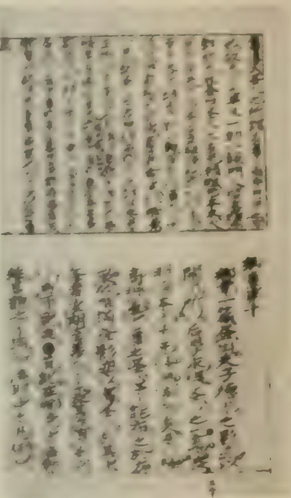
（京都帝國大學圖書館藏）



孝經啓蒙篠原氏本（定稿本）

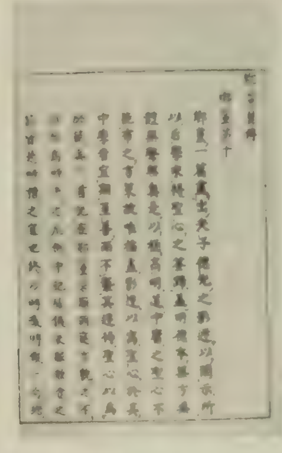
同前

藤樹書院藏



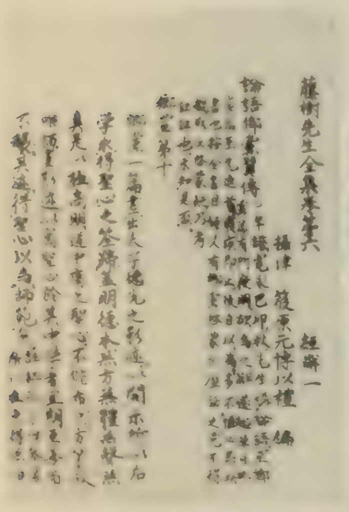
論語郷黨啓蒙翼傳　岡田氏本

（藤樹書院藏）



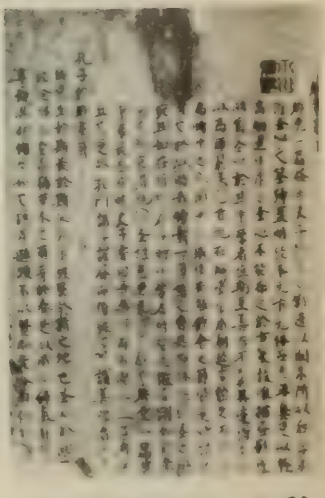
同前　印本

（京都帝國大學圖書館藏）



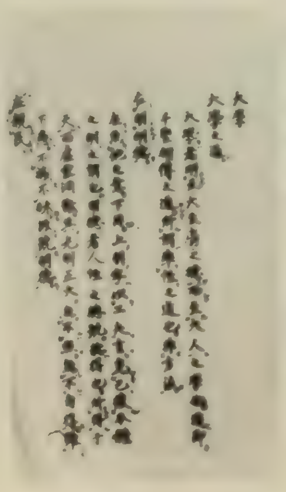
同前　篠原氏本（寫）

（藤樹書院藏）

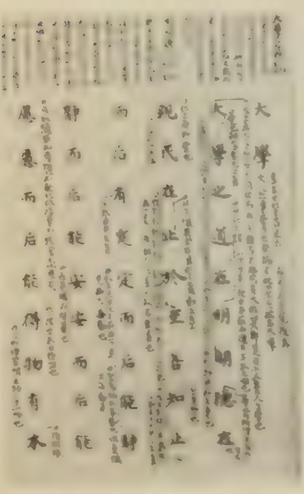


同前　小川氏本

（委員小川喜代藏氏藏）



古本大學全解　正堂本（寫）



古本大學旁訓　笠井氏本

（藤樹書院藏）

自卷之六至卷之九　解題並凡例參照

二個の寫本に底本のまゝに透寫したるものなり。

大學序說　敬寫本

卷之十 自三八 至四一 頁參照

（滋賀縣高島郡水尾村大字鴨　北川馬吉氏藏）

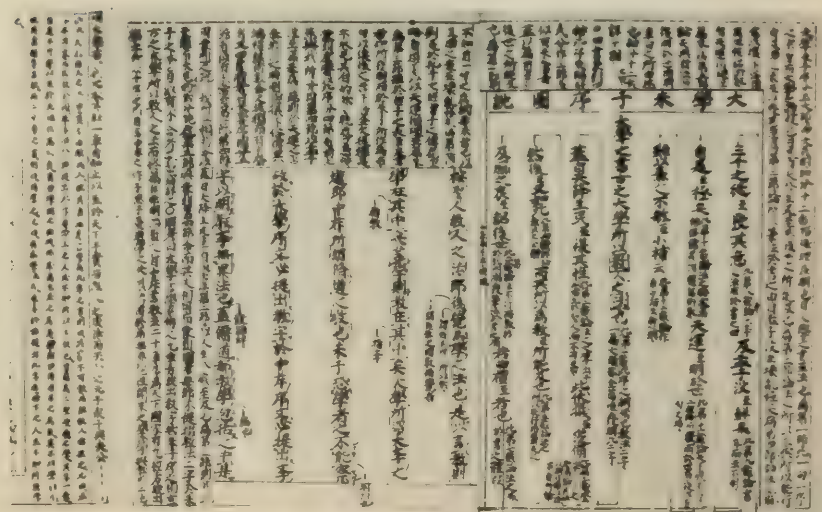
四書合一圖說　敬寫本

卷之十一 自一 至四 頁參照

（委員　小川喜代藏氏藏）

大學朱子序圖說 向つて左端が敬寫の一部分と眞蹟補筆となり。

卷之十一 自四 至八 頁及び同解題並凡例參照



（上　同）

首經考以下　解題並凡例

本卷收むる所の首經考・孝經考・大學考・四書考・讀四書法・大學序說は皆先生中年の作にして、何れも朱子學時代に屬し、王學思想の存在を認むる能はず。又學說日に新なりし先生にありては、朱子學時代と王學の自覺時代との中間に編者の所謂王學の模索時代とも稱すべき時期を劃すべきものあり。(卷四漢文書簡解題參照。) 本卷に收むる首經考・孝經考と王學の模索時代の作孝經啓蒙とを比すれば、其の間に孝經本文の取捨に差異あるによつても其の一端を知るべきなり。以下此等の要點を指摘し、且つ底本及び對照本の性質並に編纂上の處理法を記さんとす。(全體を通じて正文の傍に△印を附したるは、眞蹟其の他對校したる書に此等の文字無きを示すものとす。)

一、首經考

首經とは孝經及び小學を指す。篠原氏が孝經のみとなすは誤解なり。首經考は孝經と朱子の小學とが凡ての學問の基本なることを述べ、且つ孝經と小學との關係に說き及んで、孝經は綱領にして、小學は其の條目なることを解明したるものなり。(鄕黨啓蒙には鄕黨篇と孝經と合一すとなす說あり。) 篠原氏が首經考の次に孝經小學合一圖說を載せたるは上述首經の意義の誤解より來るものにして、後者は前者の內に包攝せらるべき性質のものなり。全書岡田氏本を吟味すれば首經考の內に孝經小學合一圖なるものありて、合一圖說となさず。今諸多の例に準じて篠原氏本を底本とし、岡田氏本によりて其の誤れるを訂しぬ。因みに岡田氏本目錄は未整理本に屬し、偶ゝ首經考の名を佚したれども、實物は次の孝經考と共に一冊として儼然今日に存せり。

(一)底本には句讀點なし。今之を施す。

(二)底本には訓點あり。概ね之に從ふ。時に私意を以て改めたるものあり。特に送假名の足らざるもの多ければ之を補ふ。

(三)頭注は全部編者の附する處なり。

(四)岡田氏本は全部白文なり。

二、孝經考

本篇は主として孝經が孔子の手著に係ることゝ、古文を斥けて今文に從ふべきを力說したるものにして、此の點上の首經考と一致するものあり。然れども先生三十四五歲の作孝經啓蒙を見れば僅少の文字の刪除の外、多くは古文に從はれたるを見る。これ先生學說の變化に伴ふ一の現象にして、先生にありては必ず說あらん。今之を知るに由なし。〔孝經啓蒙初稿本解題に追記したるが如く、これ朱子の孝經刊誤又は董鼎の孝經大義讀解の影響たるべし。〕

今篠原氏本を底本とし、岡田氏本を對校したることと並に兩本の性質編纂上の取扱方、上と異なることなし。唯茲に特記すべきは篠原氏が岡田氏本を底本としつゝ猶孝經大全等先生の引用せられたる原作を引いて一々對照注記し、且つ岡田氏本欄外の注記を引き下げて脚註の部に取り入れつゝ猶自己の注記との區別を明にするの用意を忘れざりしことにして、編者の深く敬意を表して之に學ぶ所尠からざりしこと是れなり。

三、大學考

大學考に二種あり。一は漢文體、一は和文體のものにして、本篇は前者に屬す。和文體の大學考に

ついては卷十二經解成書一の解題に詳記したれば玆に之を略す。本篇は大學本書の緣起及び其の傳來を說示したるものにして、和文の大學考が王學の自覺時代即ち晩年の作に係るに反し、本書は朱子學時代の著作に屬することと其の內容によりて直に決定し得。今兩者の內容につき主要なる點を比較すれば左の如し。

(一)此の書の緣起について、前者即ち漢文體のものにありては三綱領八條目を以て唐虞三代の學規となすに反し、後者即ち和文體のものにありては、伏犧之を創始すと爲す。

(二)經の作者について、前者にありては三綱八目は孔子曾子の時未だ書に筆せられず。子思に至りて三綱八目そのものゝ說明と孔子三綱八目を發明するの意とを雜へ記して經一章と爲すとなすに反し、後者にありては經一章を以て孔子始めて書に筆すと爲す。

(三)傳の作者について、前者にありては子思が曾子此の經を發明するの意を取つて傳十章を作爲せりと爲すに反し、後者にありては、曾門の諸賢(子思の名を明示せず。)が平日曾子經意を發明したる意を輯めて傳を作爲すとなす。

(四)其の傳來について、漢儒が聖門垂世立敎第一の大典たるを知らず誤つて禮記の中に編入し居たるも宋朝に至つて程子始めて之を尊信表章し更に四傳し朱子に至つて程子の意を取つて註解を作爲すとなすことは兩者一致すれども、其の後の傳來について前者は四書大全によつて敎法明かとなりたるも猶錯簡無き能はずと爲すに反し、後者に在りては、朱子の經傳に於ては聖人作經の主意頭腦と學者用工下手の實地猶未だ明白ならず。其の後陽明夫子に至つて格物致知の精薀開示せられて一經の

精義愈〻明かなりと爲す。

(五)大學本文の處理に關し、前者にありては、たとひ先生の計畫が實行せられざりしにせよ、方正學蔡虛齋の說により新に序次を更定せんとの考ありしに反し、後者に在りては、本文は陽明の說を奉じて古本大學を信じつゝ、經傳の區別を存することは、猶朱子の意見に贊同し、且つ其の理由として傳文が五つの所謂の字を用ひて說明したるは、明かに本書經文の解說に外ならざるを斷せらる。之を要するに先生が常に本文の批評を先にせらるゝの態度を見るべきと共に、孝經考と孝經啓蒙と前後先生の意見異なるものあるが如く、本書に在りても同樣に前後學說の改變ありしを見るに足るべし。

底本は篠原氏本に據る。岡田氏本に於て本篇は今書院に殘存せず。三枚物として滋賀縣長濱町河路豐吉氏の藏有に係る。就いて對校したるに、底本と一字の出入なけれども、一葉の中に入れられたる字數及び訓點の方法等に就て他篇の例より推して考ふるに、岡田氏本の方が眞蹟本の形を傳ふるもの多きが如し。因みに河路氏は次の四書考と共に滋賀縣大溝町故橫田耕次郎氏より藤樹先生の眞蹟として購入せられたるものなりと謂ふ。

本篇以下の體裁は底本・岡田氏本・眞蹟本は、本全集載する所と同じからず。印刷の都合上止むなく次の如き方法に從ひたり。卽ち、

(一)註記は舊傍釋に係る。今凡て脚註の方法に從ふ。

(二)鼇頭に考證鄕黨啓蒙に於ける註證とも謂ふべきものあり。今凡て本文の後に細字を以て之を連記す。

(三)編纂上傍釋を脚註の方法に改むるに際し、果して何處におくべきかについては種々苦心したり。卽ち傍釋の文字をそのまゝ本文の下におけば讀下に便ならず。又時として一文段全體を總括したる文字の如き該文段起筆の處に傍記せられれども、脚註の方法に改むるときは勢ひ其の文段の終りたる文字の下におかざるを得ず。此の如き場合は印刷の都合上、編者の意を以て便宜の方法に從ひたり。讀者之を諒とせよ。

(四)書中(一)(二)(三)等の文字は凡て編者の附したる所にして、本文と考證の文字との聯繫をして一目瞭然たらしめんとの婆心に外ならず。

委員小川氏四書啓蒙と題する前後の表紙を併せて現存十九枚(舊表紙共二十五枚なるべし。)の美濃大判の眞蹟及び敬寫せる補筆本を藏有す。其の表紙に眞蹟たること明かなる

四書啓蒙	
大學考	讀四書法
大學序說	四書合一圖說
大學朱子序圖說	
五性圖說	

の如き記入あり。中につき大學考と讀四書法と大學序說とは之を佚し、四書合一圖說(全二枚)と大學朱子序圖說二枚の內後一枚とは敬寫補筆に係り、五性圖說十三枚は全部眞蹟に係る。此の外滋賀縣高島郡水尾村大字鴨北川馬吉氏大學序說一枚(舊二枚なるべし。)を藏有すれども、四書合一圖說及び朱子序圖說後一葉と等しく同一人の補筆に係るものにて、小川氏藏有のものと同一人の傳へたるものなるべし。茲に特記

すべきは、

(一)此等の敬寫補筆が先生の眞蹟に酷似しつゝ猶仔細に之を吟味すれば、筆致自ら同じからず。墨色亦眞蹟に比して極めて淡く到底眞蹟と混同すべからざれども、

(二)大學朱子序圖說後一葉の補筆には絲欄の外第一行に眞蹟にて補筆本筆寫の足らざる文字を補はるゝこと、及び

(三)此等眞蹟に係る紙片には何れも先生の眞筆にて丁數記入せらるれども、補筆の紙片に限りて此等の文字無きこと、隨つて

(四)此の如き補寫は先生に親炙したる門人の筆寫に係り、全く先生の述作を完全に後世に傳へんとの誠意より出で且つ先生の校閲を經たるものなるを知ると共に、

(五)後人が僞筆せんとて態〻之を模造したるものに非ずして、門人は偉大なる感化によつて筆致迄もおのづから先生に近きものありたること、及び

(六)大學考・大學蒙註・大學解及び中庸解の眞筆本に丁數記入せらるゝものと對觀すれば或時代に於て先生自ら自己の述作を整理せられたることあるを知るに足ること（此の事卷之十四中庸續解の考證に引用したることゝ該書の解題に示したるが如きものあり。）

等是れなり。

四、四書考

本篇は先づ程朱の四書の性質と其の教育的價値とに關する意見を擧げ、次に之に關する先生自身の意見を加へられたるものにして、孔門教育の本質を論じ、更に漢儒以來其の本義を忘れたるを難じ、

宋明に至りて孔門博文約禮の正教に復したるを喜び以て初學四書の學を以て先務と爲さゞるべからざるを說けり。

前記眞蹟本四書啓蒙目錄には、本篇の名見えざれども、是れ亦同じく先生中年の作に係れること篠原氏が次の讀四書法の末尾に附記したる處の如し。

本篇は底本を篠原氏本に採れること前記大學考に同じ。岡田氏本は美濃紙大の四枚物として前と同じく河路豐吉氏の藏有に係れり。編纂上の處理はすべて大學考に同じ。

五、讀四書法

本篇は朱子が四書を讀む順序として、大學を先にし、次に論語孟子に及ぼし、而して後に中庸に及ぼすべしとなせる說を擧げ、終りに簡單に先生の意見を附せられたるものにして、是れ亦朱子學時代の作たること明かなり。

底本を篠原氏本に仰ぎたること上に同じ。但し全書岡田氏本は目錄に此の名を列擧せらるゝのみにして今何處に存するかを知らず。眞蹟本亦此の名目を示せども、今は佚して存せず。對校するに由なし。篠原氏が早く此等の材料を蒐輯しおきたる爲め今此の書を傳ふることを得たり。是に於て益〻篠原氏の勞を多とせざるを得ず。編纂上の處理亦大學考に準ず。

六、大學序說

本篇の本文は僅に朱子の大學章句序を引用し來りたるに止り、其後の部分亡佚して傳はらず。以て先生の意見を知るに由なきを憾む。鼇頭（本全集にありては後出の小文字）に註記せらるゝ處を見れば五性圖說と並んで、別

に氣質圖說なるものの存在したるを知るを得れども、後者も亦佚して今日に傳はらず。並びに惜しむべきことなり。

篠原氏本・岡田氏本倶に本篇を缺く。全書岡田氏本目錄にも亦此の名を列せず。唯前述の如く眞蹟補寫に此の一枚を存するのみ。今茲に採錄す。原本の體裁及び編纂上の處理左の如し。

(一)本文には朱書にて句讀點附せらる。今多くは之に從ひ、且つ其の足らざるを補ふ。

(二)本文には、反點・送假名附せらる。皆之に從ひ敢て自意を以て改むるをなさず。特に所以の二字の如き、晩年にはユヘ若くはユヱンと讀ましめられたること附點孝弟論及び大學蒙註等によつて之を知れども、本篇には下の五性圖說等と共に「以テ……所」と讀ましめられたるを知る。

(三)傍釋及び鼇頭の註記にも皆句讀點附せらる。皆之に從ふ。

(四)傍釋を變じて脚註となし、鼇頭の註證を變じて本文の下に細字にて連記するの方法に從ひしこと等は、上記大學考以下篠原氏本に對する處理と同じ。

昭和三年戊辰六月二十日　　加藤盛一謹識

首經不特稱孝經。並稱孝經及小學明於此文。

藤樹先生全集 卷之十

經解成書 六

首經考。

止見全書岡田氏本。○首經即孝經。說見孝經大全。

江氏旭奇孝經奏疏曰。孝上恐脫進字。臣惟孝經一書。孔子手著。其始成也。師與弟子祭告天地。見雲物垂星象。孔子曰。我行在孝經。漢孝宣時。疏廣疏受以之訓儲。孝章時。介冑皆通孝經。孝靈時向栩言。北向讀孝經。賊自消滅。隋蘇威言。舊脫隋字。今從大全補之。惟孝經一卷。足以立身治國。何用多爲。隋主納其言。以孝經賜鄭譯。孝經原有閨門一章。唐司馬貞譚之。遂爲馬嵬之兆。周賓

㊀太祖上　岡田氏本空白一字。

㊁於皇間　岡田氏本空白一字。

與六行曰孝友睦婣任恤齊內政公問卿子之鄉有孝於父母者。（舊脫子之鄉三字。今補之。）有則以告。有而不告。謂之蔽明。漢元朔間有司議不擧孝。以不敬論。唐制擧明經。孝經爲九經之首。宋詔察孝弟力田。而明經仍唐制。我㊀太祖高皇帝諭俗。首孝順父母。亦有孝弟力田通經孝廉等科。後來廣輯經書大全。命題試士。孝經偶遺。寔有待於㊁皇上也。（寔大全作實。後同。）臣幼時臣母猶能以孝經小學。口授於臣。謂臣曰。古人先通孝經。後及論語。汝將讀大學。則小學當先知也。小學乃宋朱熹所著。熹八歲通孝經大義。曰若不如此便不成人。元許衡敬小學。如神明。臣觀孝經。先至德要道。顯親揚名。而後廣之小學。先立教明倫

㊀底本所謂舊本作今書岡田氏本。下同。

㊁朱熹下底本或脫熹字。岡田氏本初作熹。後熹下傍朱擠入熹字。大全本亦作熹熹。

敬身而後亦廣之。是體裁一稟於孝經也。㊀舊本絲欄上載江氏曰。蓋人仁愛。無知孝經小學也。亦奏疏中語。今世儒童生員鮮讀二書者。臣以爲厚人心。淳風俗。寔爲王道。誠於考試間。以命題。則孔曾傳授之密旨與朱熹㊁惠後學之盛心。爲世誦法。自能培植根本。延綿命脈。臣所謂表章首經者。此也。

首者。元始統會之意也。按邵子曰。動物自首生。又曰。形統於首者。此也。舊本絲欄上。邵子曰。耳目鼻口共爲首。韻會云。人之胚胎。鼻先受形。然則首之受形。先於百骸可知。故鼻首共訓始也。孝經小學之於七經四書。舊本絲欄上曰。七經易書詩春秋周禮儀禮禮記也。猶首之於四體百骸。是以名首經。鄭氏曰。孔子恐道離散。後世莫知根源。故作孝經。以總會之。四書圖考曰。說大學。便用個小學做

張本不然。學者用功。只是個無基本的工夫。讀此大學。亦是個無頭的學問。的上恐脫腦字。皆是首經之義也。而世儒之弁髦不講此。而專以四書之學爲務。是以其學無頭腦。而不入於俗儒者鮮矣。學者必受用首經之說。則庶乎其不差矣。○㊀孝經小學。須合一看得。孝經綱領而小學條目也。綱目相因而首經之功。無欠闕。今作一圖。以爲講習之一助如左。

㊁

孝經綱領

小學條目

因嚴以敎敬因親以敎愛

廣至德章

立敎

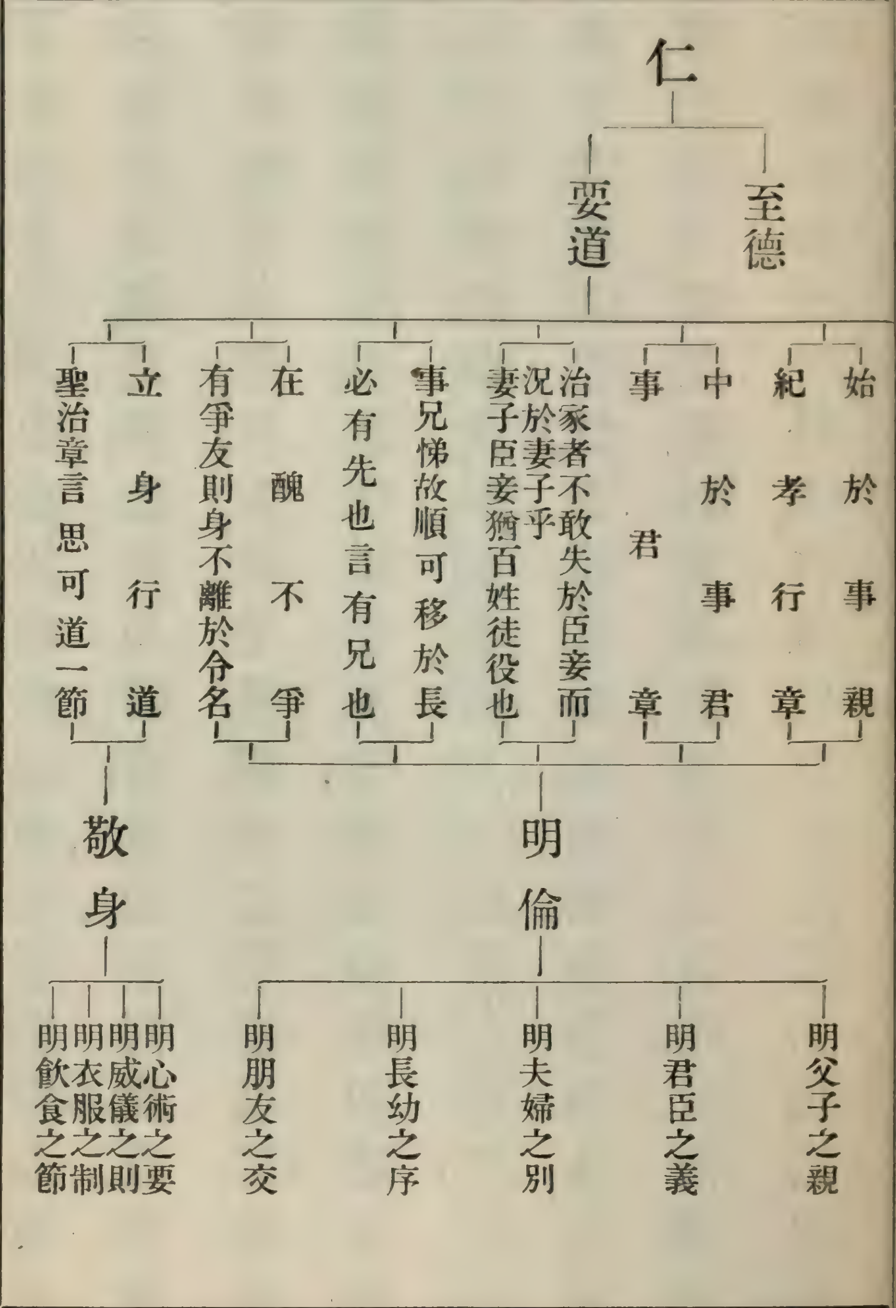
立敬身之敎

立五倫之敎

㊀底本則孝經小學以下提行。且標以孝經小學合一圖說止見今書岡田氏本十六字。按今書岡田氏本則不然。且絲欄內每行上空白一字以別於正文。今改從岡田氏本之體。

㊁底本無界線。據岡田氏本補之。

孝經小學合一圖



按孝五教之本也。義別序信。皆由親而推。故孝經非特開示孝道而已。通論五典。而歸著之於孝綱。小學體裁。一稟

於孝經而推衍之孝經曰。聖人因嚴以教敬。因親以教愛。又曰。君子之教以孝也。非家至而日見之也。教以孝所以敬天下之爲人父者也。教以悌。所以敬天下之爲人兄者。也。教以臣。所以敬天下之爲人君者也。朱子稟此。以衍述立教。孝經曰。夫孝始於事親。又曰。孝子之事親也。居則致其敬。養則致其樂。病則致其憂。喪則致其哀。祭則致其嚴。五者備矣。然後能事親。事親者。居上不驕。爲下不亂。在醜不爭。居上而驕則亡。爲下而亂則刑。在醜而爭則兵。三者不除。雖日用三牲之養。猶爲不孝也。朱子稟此。以衍述明父子之親。孝經曰。中於事君。又曰。君子之事上也。進思盡

忠，退思補過，將順其美，匡救其惡。故上下能相親也。朱子稟此，以衍述明君臣之義。孝經曰。治家者。不敢失於臣妾，而況於妻子乎。又曰。妻子臣妾。猶百姓徒役也。朱子稟此。以衍述明夫婦之別。孝經曰。事兄悌。故順可移於長。又曰。必有先也。言有兄也。朱子稟此。以衍述明長幼之序。孝經曰，在醜不爭。又曰。有爭友。則身不離於令名。朱子稟此。以衍述明朋友之交。孝經曰。立身，行道。又曰，言思可道。行思可，樂。德義可尊。作事可法。容止可觀。進退可度。以臨。朱子稟此。以衍述敬身。小學以孝經爲綱。孝經以小學，爲目。綱目相因。而首經之功全備。曰。立敎。曰。明倫。曰。敬身。條目雖

多其本至德要道而已。至德要道本仁而已。仁者人心之全德。其大無外。無不包。學者知此則圖體。思過半矣。

孝經考。

止見全書岡田氏本。

孔子曰。吾志在春秋。志者心之所之。未形於行者也。行在孝經。行者。日用躬行之實。志之已形者也。又曰。春秋屬商。孝經屬參。商孔子弟子。子夏名。姓卜。衞人。參孔子弟子。曾子名。字子輿。南武城人。○蔣氏孝經詳解備考曰。按作經，之年。先儒以爲魯哀公十四年。西狩獲麟。而作春秋。至十六年夏四月己丑。孔子卒爲證。則作在魯哀公十四年後十六年前。按鉤命訣云。孔子曰。吾志在春秋。行在孝經。據前後言之，明孝經之文同春秋作也。又鉤命訣云。孔子曰。春秋屬商。孝經屬參。則孝經之作。在春秋後也。愚按春秋孝經著作之年。指經成絕筆之年而言。非起筆之年。魯麟生。圖文著。皆天感經成而然也○春秋天子之事也。孔子不得位。故曰志。孝經日用躬行之實也。故曰行。以全體言之，則聖人之德。無以加於孝。堯舜之道。孝弟而已矣。春秋行孝於天下之事。孝經行孝於身之實也。而此以其所主而言之。所謂理一分殊也。○元博云。已上註語。悉係舊本絲欄上及界行側所載者。已下亦然。如夫一二出於區々之手者。則繫以賤名，別之，云。

孝經緯曰。孔子七十二歲。魯哀公十五年辛酉歲也。語曾子著孝經。因著作既成。乃齋戒向北斗告備。忽有赤虹自天而下。化爲黃玉刻文。先聖跪而受之。○江氏曰。元博按此所稱江氏者。乃元祚。非旭奇也。孝經是孔夫子與曾子問答之後。自家做的。陳曉曰。史記曾子傳曰。孔子以曾參通孝道。與之著孝經。此言尤其刻晝。○蔣氏曰。夫子以六經設教。隨事表名。雖道繇孝生。而孝綱未舉。將欲開明其道。垂之來裔。以曾子之孝先有重名。乃假因閒居爲之陳說。自標己字。稱仲尼居。呼參爲子。稱曾子侍。建此兩句。以起師弟問答之體。似別有所承受而記錄之。

以右五條之說考之。則孝經。明是爲孔子之手著矣。而

㊀岡田氏本傍註曰。江氏名旭奇。著孝經小學大全。

㊁孝道底本誤作孝經。今據岡田氏本頭注而訂之。

㊂岡田氏本傍註曰。蔣氏名方馨。著孝經詳解。

世儒泥孔曾問答之語。而誤以爲孔子爲曾子言孝道。門人錄之。江蔣之說。大有功於聖經。可謂其見超矣。

○蔣氏孝經詳解備考曰。曾子受孝經。事親孝。甞鋤瓜。三足烏萃其冠。母齧指。在楚心動。孔子聞之曰。參之至誠精感萬里。○又曰。明帝時令羽林之士。悉令習孝經章句。張角作亂。向栩上便宜。不欲國家興兵。但遣將於河上。北向讀孝經。則賊自消滅。○又曰。馮亮臨終遺戒。左手持板。右執孝經。去人居數里外。置尸磐石上。積十餘日。初無侵毀。後有素霧。蓊欝廻繞其旁。自地屬天。彌朝不絕。皇甫謐死。擧牀就坑。唯齎孝經一卷。曰。使魂爽與元氣合靈。○江氏曰。徐份讀孝經。而父病頓愈。鄭玄註孝經。玄病夢孔子告之

曰。起起今年歲在辰。明年歲在巳。既寤知命當終。既卒。自郡守以下受業者千餘。皆縗經赴會。孔融爲特立一鄉。曰鄭公鄉。

右四條（元博按竝見孝經集靈。）及孝經緯之說。不是恠誕。只是孝經通於神明。感於天心之事也。學者宜知所尊信而受用也。

○蔣氏孝經詳解備考曰。孔子九代孫鮒當秦焚書。藏孝經於祖堂舊壁中。後魯共王壞壁。以廣其居。於壁中得孝經。又升堂。聞金石絲竹之音。乃不壞宅。○又曰。顏芝河閒人。藏孝經。○宗傳圖考曰。顏氏父名芝。子名貞。始皇酖父。棄母之人。豈容經存。非芝父子以死衞之。萬古長夜矣。○江氏曰。顏貞所出者十八章。鄭玄註之。後人謂爲今文。孔壁

出者即以十八章。分爲二十二章。孔安國註之。後人謂爲古文也。唐劉子玄議遵安國註。司馬貞議遵鄭玄註。明皇從司馬議行十八章於世。惟除閨門章二十四字。餘倶相同。

○江氏孝經考曰。由魏文侯立傳。傳至嬴秦。與六籍同燬。漢興。惠帝除挾書律。孝經自顏貞氏出。乃隸書也故名今文。文帝爲置博士。陳曉曰。博士如今之主學敎授也。博學者爲之。自設官之後。有博士江翁・少府后蒼・諫大夫翼奉。各以孝經名家。司隸有專師。制使天下誦習焉。及涼州變。令家々習之。詔書詰責。武帝時孔壁出孝經。皆蝌蚪書也。故名古文。光武時令虎賁士習之。明帝時令羽林悉通孝經章句。是時不惟

○學宮。岡田氏本作二學官一。下不レ同。

○底本欄外註。在所疑乙四字。岡田氏本所レ載。與二底本註一同。

天下之經生學士而家誦戸習。遍武人矣。況廟號率用孝諡。元博云。諡舊作士誤。選士每先孝廉。世稱漢治近古。元博云。舊脫稱字。今補之。殆不誣哉。第歷代表章經籍。咸列學宮。直以此經明顯。未令諸儒會議。故經旨未能統一。悠々千載。可勝嘆哉。孝經詳解備考曰。平帝元始三年。令庠序置孝經師一人。五年令天下通知孝經教授者。在所以聞。遣詣京師。曹魏以後註者無慮百家。於是晉永和及孝武大元閒。再聚群臣。共論經義。東晉元帝大興初。置孝經博士一人。○東晉穆帝永和十二年二月。帝講孝經。升平元年三月。又講孝經。親釋奠于中堂。○後魏孝文皇帝命以夷言譯孝經之旨。教於國人。謂之國語孝經。迨梁武帝撰疏十八卷。簡文帝撰疏五卷。梁簡文帝名綱。武帝第三子。梁昭明。唐壽王及諸伉子。皆講於殿庭。唐太宗命孔穎達講於國學。是累朝之英君碩輔。靡不尊尙。而諸儒之註疏。多穿鑿

踳駁開元閒乃詔群臣集義。〈元博曰。集舊作業誤。〉至玄宗最爲好古篤信是經。剪繁蕪。撮樞要。重加注疏。更爲精密。書勒國學。仍敕家藏。學者至今稱石臺孝經云。〈元博云。臺舊作壹誤。〉宋太宗有御書孝經。仁宗有篆隷二體。〈仁宗命王洙書孝經四章。楊安國講書後屛。帝不欲背聖人之言。令列置左右。〉高宗有眞草二刻。復詔刑昺杜鎬爲置講義。是此經之流播宇內。如日中天。誠六經之總會。百王之衡鑑也。夫何王安石以偏拗之學。旣以斷爛視春秋。而此經亦以淺近見黜。夫昔之火於秦也。旋復於漢。今徒挾司馬公之隙。遂使〔一〕先王至德要道晦蝕者。餘五百年。其禍較之秦。尤烈矣。洪惟我〔二〕明尊號定諡。必加孝德於聖〔二〕母。以端孝之本。洪武初會孝

〔一〕使岡田氏本誤作便。

〔二〕明・聖・御・二・列・皇・親・經・今上岡田氏本各空白一字。

經大旨。纂爲御製六言。使遒人振鐸於路。以發孝之端。永樂閒命儒臣纂集孝順事實。以收孝之實。二祖之敎。以孝也何啻家至日見哉。列聖相承。率循是道。衜是嘉靖中興。尊崇至孝。超越千古。纂明倫一書。萬曆庚辰乙酉。咸以此經策士。用之掄材。今皇上益篤孝思。親御孝經注疏。留置扆前。蓋欲以風示天下。必且進之經筵。頒之學宮。使得與五經四書並列于世。以臻夫重熙累洽之盛者。端有竢於今日。元博云。舊脫端字。今補之。

右五條明傳經之始末。與世尊信此經之證。

○江氏曰。孝經傳與曾子。向後子夏的門人也傳着他。那魏

文侯也曾做傳過來。不幸秦始皇燒書。孔子的子孫孔鮒孔騰。趂他未燒。藏在屋壁裏。又有個顏芝。將此經學李斯的隸字寫著。把與兒子顏貞收藏。到惠帝時節。送上河閒獻王。其後（元博按大全作此時。）魯共王好造宮室。拆孔家壁子。見漆寫蝌蚪字的竹簡放在壁中。又聽得後堂樂音響。便不敢拆屋。送這竹簡（元博按這舊作至誤）還了孔家。他家子孫孔安國却不識得這字。取顏芝孝經。比同對看。彷彿字形。證出一本蝌蚪文字。叫做古文。那顏芝的雖在前邊出來。只因字畫時樣。反叫做今文孝經。昭帝時。魯國三老進孔家古文。當巫蠱之後。無暇流傳。竹簡因而散失。成帝時購求一次。張霸進

僞古文。驗其非。斥去。平帝時。又購求一次。無應詔者。未到東漢。古文便不傳世了。安有劉向比量今文古文。及古文亡于魏晋齊梁之說。若劉向眞得古文。（元博曰。舊脫劉向二字。今補之。）緣何不獻成帝。使他爲張覇所欺。若魏晋齊梁之前。古文尙在。成平二帝所購求的。更是何本。這話出隋朝經籍志。那時有王逸王邵劉炫三人。通同作僞。王逸假稱。在京市裏買得古文孝經一本。送與王邵。王邵又送與劉炫。劉炫就做稽疑。（元博云。舊脫劉炫二字。今補之。）傳播四方。以前更有荀昶范曄。妄說得授孔家經傳。因此上。隋志附會近儒轍。載劉向云々也。且古文二十二章之僞。了々易知。方牛弘請購遺書。劉炫造僞

自道不盡曰開二百三十九字及註記當載在全一葉中。岡田氏本佚之。

書百餘卷。題做連山易魯史記等。錄上送官取賞。被人告訐。經赦免死。他能僞造連山魯史。難道不能僞造孝經。況他增減文字。離合篇章。又多淺陋可笑。元博云。笑下舊有矣字。今刪去。按大全此下有更非桓譚許愼所見僞本矣十一字。意先生嘗刪。偶遺之耳。司馬溫公不勝好古之心。替他作爲指解。王安石元與溫公有隙。一見此擧。就故意不用孝經試士。朱文公深曉其非。作刊誤。備考曰。朱子年七歲嘗題孝經之上曰。不如是非人。因取古文孝經。更定爲經一章傳十四章。名曰刊誤。以行於世焉。元董鼎號深山先生者。用朱子刊誤本作大義。○江氏曰。刊誤以今文分仲尼居至孝無終始。而患不及者。未之有也。爲六章。古文分爲七章。皆非也。當合爲一章。內刪去子曰倂所引書詩六十一字。而以爲經。刪曾子曰。甚矣。孝之大也章六十九字。刪子曰。父子之道。天性章九十字。而以爲傳。臣疑非朱熹所著。儒臣自有公議也。又曰。臣與朱熹同鄕。幼之傳誦實惟今文。如熹果有刊誤。鄕人豈不知之。卽熹族孫吾弼表章熹生平著作。幾充棟。何亦未之及也。然他心下也不自安。但言悉數所疑。而爲質幸附汪程而

免罪。欲作外傳。而未敢耳曰疑。曰質。曰免罪。曰未敢。豈若四書集註自任。庶有小補耶。吳草廬篤信朱學。而終不以所定古文爲是。元博云。所上似欠其字。凡此等處。先生節取江語。偶有未當耳。至于今文。人々誦習。歷々感通。徐份讀之。而父病頓愈。馮亮執之。而素霧屬天。不是怪誕。只是天心聖心之感應。以今文之正眞故也。古文孝經。還有此感應麼。按荀昶集疏。明皇石刻。並無章名。備考曰。孝經分章。則漢儒爲之。非經本然也。惟皇侃題前五章之名。看來十八章。或是顏芝舊本曰開宗等。後人所增也。未可知。不必深論也。陳曉曰。十八章次序。天寶間所定。第逐章所引詩句。多與注文不合。恐是本經博士逐章附以詩句。有孔曾問答所引者。有後儒附益者。篇章之次。則天寶也。嗟呼。此經一厄于秦。再厄于隋。今日見存。生民大幸。學者莫

纂蓋篡字誤。

因文公之疑而疑今文。莫因温公之信而信古文。敬守舊章。以扶新運。則孝治將日光矣。

右一條。明不可不尊信今文而受用也。

○江氏曰。今文與古文大抵相同。卽纂去閨門一章。元博按纂字恐有誤。亦非今文之本來面目也。漢儒長孫氏・江翁・后蒼・翼奉・張禹・鄭玄等行義。向常無閨門章乎。○又曰。今文少閨門章。乃司馬貞爲唐所諱也。當補之。卽爲全經。元博按此稱江氏者。疑乃旭奇○備考曰。唐國子博士司馬貞議曰。閨門之義。近俗之語。必非宣尼正說。按其文云。閨門之內。具禮矣。嚴父。嚴兄。妻子臣妾。繇百姓徒役也。比妻子於徒役。文句凡鄙。不合經典。恐按。此議甚可笑。

右二條明今文之本然有閨門章而補闕略復孝經舊

本之全體。其功大矣。○愚按江氏謂。今文孝經。顏芝將嘗所講明之正本。學隸字。寫著與顏貞。則其眞正尤可信也。又謂古文孝經孔壁出者。散失而不傳。今所存者。安國比同今文。而證出。其後劉炫增減文字。離合篇章。則其僞而不足信用也明矣。假饒無劉炫之增減離合。而得安國眞本。原比同今文。而證出。則亦是今文孝經也。秦火以前決不可有孝經之異本。然則顏芝所講明之本與孔鮒所藏之本。原同一經也。但孔壁出者。字畫異耳。實可以無一毫之異也。朱子刊誤。尤不可信用。諸儒之論備矣。明是今文孝經。孔子手著之眞本。而可信

用者也。而司馬貞淺學陋識、而刪去閨門一章、而蠧害聖經、可謂夫子之罪人也。幸江氏深曉其非、（元博按此指旭奇。）而以閨門一章、附十八章之後。以補其闕略、然尚非經之本然。竊嘗考之。今所存古文、謂安國比同今文、而寫則古文本是今文之體段也。故以古文證之。閨門章次廣揚名章之後、而主意相同、以語勢文理考之、原當措之廣揚名章之首。合而爲一章。而司馬貞刪去之。劉炫分離而錯亂之也。愚深憂經之闕略、是以不自量。合之於廣揚名章、以俟後之君子云爾。

元博云。先生著孝經啓蒙、從古文本。而閨門章尚在廣揚名章後。唯其異者、特刪去數子曰字及章名耳。此乃云措之廣揚名章首、則知後著啓蒙時、亦自不以此爲是明矣。凡此卷所收者。率皆中年作也。

注記底本則係傍記。今從印刷之便、移入正文下。

大學考。

謹按三綱八目。(一)(三綱、三綱領也。八目、八條目也。)原唐・虞・三代之學規也。(唐、帝堯有天下之號。虞、帝舜有天下之號。學、學校也。規、本正圓之器也。物不圓匝者、規之使圓。教法之於氣質亦然。故謂法爲規。)(二)至於孔曾之時、未有書。(孔、孔子也。曾、曾子也。)猶誦而傳之、(誦、暗誦也。傳、傳門人。之指三綱八目。)及至子思之時、(子思、孔子孫。名伋。曾子門人。)周道愈衰、(周道、即王道也。)學校之政益不脩。(學校之教、政中之一事也。故曰學校之政。不脩、壞亂之謂。)而風俗頽敗。(君上所化之曰風。民下所習之曰俗。)是以子思憂失其傳、(其指學規。)而始筆於書。其書以學規綱目爲主。(其書指大學。綱、三綱也。目、八目也。綱目之在大學、猶君主之在國家。故曰爲主。)(三)而雜以孔子發明之言、(發明之言、發明三綱八目之言也。)記爲經一章。而又後世猶恐不曉其蘊奧。(其指三綱八目。蘊、中所畜之名也。奧、隱微之意。蘊奧指立教之本指。)是以取曾子發明之意、(四)(發明之意、發明正經之意也。以非曾子自言、故曰意。)記之爲傳十章、以詔後之學者。(之指曾子發明之意。)蓋其

存有也當作存在也。

憂之也深。蓋發語辭。其指子思。之指道否塞。故言之也切。之指道切言深要。其慮之也遠。之指所後世不曉。故說之也詳。之指道。詳言周備。朱子只爲曾子門人記之而雖不言其名。其指作者。而(五)貫逵以爲子思之作其說是也。曾門弟子。曾曾子也。非子思。不能如此詳悉明盡而無偏漏。此指大學所說悉盡也審也。偏不中也衺也漏不詳密之意。無偏漏。謂規模之正而詳也。而(六)與中庸脗合。凡事相同者。曰脗合。此可以爲證。及孟子沒而其傳泯焉。孟子名軻。字子車。受業子思之門人。鄒人也。沒與歿同。終也。其傳。道學之傳也。泯滅也。則其書雖存而知者鮮矣。其指大學。存有也。知謂知其書之有關世敎也。知字且淺說。言孟子沒傳其道者已絕。而知是書者。亦鮮也。而又經(七)秦火。而有錯簡。秦嬴氏篡天下之號。錯舛誤也。簡牒也。古者無紙。有事書之於簡。單執一札謂之簡。連編諸簡。乃名爲策。是以(八)漢儒不能知爲垂世立敎之大典。漢儒指傳經之諸儒。垂自上縋下也。聖王自上所敎下。故曰垂世。世猶言天下。立成也。建也。脩道之謂敎。典籍也。大學有極規模之大而無外。故曰大典。而以其簡帙輕小故編之於(九)禮記。而別不

爲一書。帖書卷編次也。大學舊在禮記四十二篇。(一〇)而千有餘年。學校之法不得其正。學校指自漢以來之學校。法卽學規也。其指法而言。而吾道之所寄。不越乎言語文字之間。而晦盲否塞極矣。寄寓也。所寄猶言所在。晦盲謂不明。否塞謂不行。吾道晦盲否塞也。(一一)天生周程。而興斯文。(一二)天指上帝。周子名敦頤。字茂叔。號濂溪先生。程程子也。斯文卽吾道也。道之顯者。謂之文。於是程子拔此篇於戴記之中。是指天命。此篇指大學。戴記卽禮記也。而尊信而表章之。(一三)表上衣也。章昭也。之指大學。而又整頓其錯簡。而發揮之。整正也。頓次也。發明也。揮指揮也。之指大學之宗旨。由此而程門諸賢多作矣。由此指由此大學之法。自此至作矣一句。言講大學之効。四傳至於朱子。益發明之。四傳謂自程子歷於楊中立・羅仲素・李愿中而至朱子。之指大學。(一四)因程子所定。所定指序次。而考定序次。而又作爲章句或問。而爲後學之衡鑑焉。衡稱輕重者也。鑑照妍媸者也。其後太宗文皇帝。命儒臣作大全。其指朱子。然後敎學之法明。如日中天。敎學之法。卽三代之學規。大學所載也。如日中天。言甚粲然明

先生所更定之序次。今不可知。蓋欲作而未果耶。

註證底本則在緑欄上。今從印刷之便。移置於正文末尾。

於世。然其書猶未能無錯簡。其書指朱子所定大學。今遵諸(一五)儒之說更定序次。如左。

(一)按朱子論大學教人之法曰。伏犧・神農・黃帝・堯・舜。所以繼天立極。而司徒之職・典樂之官。所由設也。三代之隆。其法寖備。由是觀之。則三綱八目之法。始於伏犧。而備於周。可知矣。

(二)朱子曰。孔子不得君師之位。以行其政教。於是獨取先王之法。誦而傳之。以詔後世。三千之徒。蓋莫不聞其說。而曾子之傳。獨得其宗。又曰。經一章。蓋孔子之言。而曾子述之。其傳十章。則曾子之意。而門人記之也。以此觀之。則孔曾之時。未有書也。○朱子大學序曰。大學古之大學。所以教人之法也。與經後所謂經一章。蓋孔子之言。而曾子述之之說。似相矛盾。按或問曰。正經辭約。而理備言近而指遠。非聖人不能及也。然以其無他左驗。且意其或出於古昔先民之言也。故疑之。而不敢質。以是考之。則序文發端一句。定論也。經後之說。正經之中。因有孔子發明之說。而言之而已。自言疑之而不敢質。則其非定論也明矣。

(三)東陽許氏曰。三綱八目。先王立學教人之法。餘皆孔子發明之言。看三在字及古之二

字可見。

(四)憂深。爲道之不明也。故言之深而要。慮遠。恐久而復失也。故說之周而備。

(五)四書翼考曰。賈逵曰。孔伋窮居於宋。懼家學不明。作大學以經之。作中庸以緯之。學庸皆子思所作。按漢書。賈逵字景伯。平陵人。父徽受左氏春秋。兼習國語・周官・尙書・毛詩。逵悉傳其業。尤倜儻有大節。明帝時。拜爲侍中。至和帝時。內備帷幄。兼領祕書。甚見信用。所著經傳儀詁。及論難百餘萬言。學者宗之。稱爲通儒。

(六)朱子曰。大學多與中庸孟子合者。則知其成於曾子門人之手。而子思以授孟子無疑也。○別有四書合一圖。宜熟玩。

(七)秦始皇三十四年。焚詩書百家語。餘煙三十餘日。此謂秦火。

(八)漢儒傳經者。禮有高堂生。詩有毛公。書有伏生。孝經有顏芝等是也。

(九)漢戴聖刪河閒獻王購集所得諸禮百三十篇中四十六爲小戴記。馬融傳小戴之學。足以明堂月令等篇。共爲四十九。是爲禮記。

(一〇)言語文字。經書之言語文字也。吾道之所寄。不越乎言語文字之閒者。言吾道不行於世。而唯寓在於經書言語文字之中而已。

(一一)大學之書。程子始表章之。而周子雖不與程子之學。出於周子。而周子之學則得乎不

傳之緒也。故以周程並稱。

(一二)不曰道。而言文者。因經書而言之也。

(一三)使人知此篇之不可不講。猶上衣之昭然。故曰表章之。

(一四)大學之於心法。猶權衡之於輕重。明鑑之於姸媸。故曰後學之衡鑑。

(一五)諸儒指方正學先生・虛齋先生等也。其說詳于大學。

四書考。

(一)程子曰。大學孔氏之遺書。大學指書而言。孔氏猶言孔家。遺猶與也。言遺與後世之書也。而(二)初學(三)入德之門也。初學初爲聖學者也。入人家必由門。大學之於德亦然。故比而言。學者必由是而學焉。則(四)庶乎其不差矣。是指大學之法而言。不差謂不溺於俗儒・異端・權謀・術數。○又曰。學者當以(五)論語孟子爲本。本功夫之根本也。論語孟子既治。治用力講習之意。則(六)六經可不治而明矣。言易入而工夫省力也。○又曰。學者先讀論語孟子。如(七)尺度權衡相似。尺度考定

長短之器也。權衡考定輕重之器也。皆法度之器也。以此去度量事物。此指論孟所說之理事作爲也。物人也。事物日所應之事所接之人物也。自然見得長短輕重。自然不用力之意。長短輕重。謂事物之萬殊。因上權度立言。故曰長短輕重。〇（八）又曰。中庸乃孔門傳授心法。心法。人心準則也。其書始言一理。始指第一章。一理指天命謂性。中散爲萬事。中謂自二章至三十二章。末復合爲一理。末指第三十三章。一理指上天之載。放之則彌六合。放指心用由体之用之意。之指心法。下卷之之同。六合天地四方也。彌六合感而遂通天下之故之意。卷之則退藏於密。卷指心体由用之体之謂。藏於密寂然不動無聲無臭之意。密無間之謂。其小無內之意。其味無窮。皆實學也。其指中庸。味理義之味也。實學實用之學也。排虛妄之學而言。俗儒虛學也。異端妄學也。善讀者玩索而有得焉。善讀。謂遵讀書法而用工。有得。謂悟得豁然貫通。則（九）終身用之有不能盡者矣。之指中庸。〇朱子曰。務講學者。固不可（一〇）不急於四書。朱子名熹。字仲晦。號晦庵先生。新安人。學指聖學言。下同。而讀四書者。又不可不先於大學。今之教者。乃或棄此不務。而今指朱子時。此指四書。務專力也。下同。反以

他說先焉其不溺於空虛空虛異端之教也。佛氏以空寂爲宗。老氏以虛無爲宗。流於功利（一）事成曰功。利謂財用及營私便宜。功利俗儒・權謀・術數之事也。而得罪於聖門者幾希矣異端俗儒・權謀・術數之徒皆聖人之罪人也。故指溺於此者而曰得罪於聖門者。賢哲詞不迫切。專曰幾希。則絕無可知。務讀四書者。或有他岐之惑。而況牽此而不務者乎。

右程子四條主意主意立言之本意也。在明論四書之功用功用功夫效也。而爲初學之急務。朱子一條主意在專論初學不可以四書不爲先務。以防他岐之惑。他岐指異端・俗儒・權謀・術數。其憂深。其指程朱。下其慮其同。憂憂道之不明不行也。其慮遠。慮謂思慮。學者之差忒也。○按三代之教。（二）按考也。三代夏殷周也。脩道之謂教。以德行爲本。德行率明德而見於事者也。本根本也。德行之於六藝文學。猶木之有根。是以爲本。至孔子。聖經雖寖備。聖經指易・書・詩・春秋・孝經・周禮・儀禮。而諸賢專以德行爲務。諸賢指七十二賢。而窮經次之。（三）窮經謂講窮聖經。之指德行。卜子在文學之科。卜子孔子弟子。名商。字子夏。衛人。科等也。而論學必首重德行。論議也。又倫也。各有倫而同歸於理也。學

學術也。首元始統會之意。重尊尚之意。卜子至首重德行。以貫孔門專以德行爲學。是故三代之學·洙泗之門。學學校也。洙泗皆水名。孔子敷教於魯之洙泗。故言孔門爲洙泗之門。成德易而諸賢多作。成德謂聖學之成功。是故至多作。言正教實學之効。自漢以來專以經義爲教。漢劉氏亡秦有天下之號。經義聖經之訓詁。卽窮經也。而學者以(一四)十三經隨意講習而無序次。講謂明其理。習學也。序次工夫之次第也。專用力於(一五)訓詁章句之末。訓詁通古今之言。而明其故。而不能以看得所以(一六)作經之本旨。看得開悟之意。本旨主意也。而又雜之以詩文之學。之指經學。詩文之學。作詩·作文之學也。徒有(一七)博文之勞。徒空也。博文博學於文也。卽窮經之學也。而無約禮之實。約禮約之以禮也。卽德行之謂也。實對華而言。是以識愈多而明德愈昏。識記也。俗儒之習。競起而成德不如古。競爭也。古指三代孔門。(一八)吾道晦塞矣。晦謂不明。塞謂不行。自漢至晦塞矣。論教學不正實之害。及(一九)天定。天定論天命之本然復定也。而程子出。而起俗儒之弊。起興也。發也。弊敗也。惡也。復聖學之眞。聖學之眞。博文約禮之實學也。其教以德行，

爲定本。其指程子。定本、不易之意。以德行爲定本與三代之教以德行爲本相應。而以學庸語孟爲博文之急務、而以餘力窮(二〇)他經。他經指七經。是乃孔門博文約禮之正教也。是故程門諸賢多作。至朱子定著四書集註、而其道愈明。其後大宗文皇帝命儒臣作大全。大宗大明第二主、大祖第四子。儒臣文學之臣。胡子・楊子等也。尤爲廣大悉備焉。自是以來教學復古。是指朱子定著四書集註時。古指三代孔門。而賢哲相繼作。哲智也。程朱之功可謂大矣。學者其可忽而不講習乎。自及天定至篇末。論程朱發明實學之功、與不可不講四書。

(一)新安陳氏曰。程子伯子諱顥。字伯淳。號明道先生。叔子諱頤。字正叔。號伊川先生。周子門人河南人也。朱子先以明道伊川爲別。次以伯子叔子爲別。後以其學同其說同、更不分別。總稱程子。

(二)聖學者。自卿人而至於聖人之學也。

(三)德即明德。入德猶言明明德及求仁得仁也。仁人之安宅也。而衆人曠而不居。學所以歸入本然之安宅也。故曰入德。

(四)不曰可不差。而曰庶乎者。言熟讀玩味。而不至書與我融會無間。則雖由是。亦可差也。

○陳氏曰。大學規模廣大。而本末不遺。節目詳明。而始終不紊。學者所當最先講明者。

(五)朱子曰。語孟工夫少。得効多。六經工夫多。得効少。

(六)六經易·書·詩·春秋·周禮·禮記也。○慶源輔氏曰。今之治二書。所患不精爾。果能熟讀精思。使其言皆出於吾之口。使其意皆出於吾之心。脉胳條理始終洞然。無纖芥隱昧不明之處。則六經之言同。可以類推而無不明也。○新安陳氏曰。語孟既治。學正識精。由是而治六經。根本正。而易爲力矣。非謂眞可不必治而自明也。

(七)熟讀二書而有得。則本心明。而能見得長短輕重。譬如鏡明而照妍媸也。既能見得長短輕重。則吾所以處之之理。昭然在其中矣。○慶源輔氏曰。尺度可以量長短。權衡可以稱輕重。理義可以別是非。能知道。則何書不可讀。何理不可究。何事不可處哉。

(八)朱子曰。中散爲萬事。便是中庸所說許多事。如知仁勇許多爲學底道理與爲天下國家有九經。及祭祀鬼神許多事。○法所以去邪曲而致正平也。人心惟危。道心惟微。所以使去惟危之邪曲而安。致惟微之正平而著者。曰心法。○中庸乃自上古聖神聖賢

處下或脫而字。盡下
脫者字。

傳授心法也。程子本成書而曰孔門傳授心法。○四書皆心法也。而獨以中庸爲心法者。以其提挈綱維開示蘊奧而極微妙。

（九）中庸之德。無時而不通。無處不宜。是以無窮盡。譬如水火之用。故曰。終身用之。有不能盡矣。

（一〇）朱子曰。玩味大學知得古人爲學所向。却讀語孟便易入。後面工夫雖多。而大體已立矣。○又曰。大學首尾貫通。都無所疑。然後可及語孟。又無所疑。然後可及中庸。○某要人先讀大學以定其規模。次讀論語以立其根本。次讀孟子以觀其發越。次讀中庸以求古人之微妙。

（一一）聖門非惡功利。但不可以功利爲心。一行仁義而功利隨之。權謀術數。一以功利爲心。而假仁義者也。是以其功利得而復失之。○或問。以俗儒爲功利之徒者。何也。曰。俗儒雖讀聖人之書。其心一以功利爲主。而其事業。不異於權謀術數故也。

（一二）三代之教。至周寖備。按周禮大司徒所以教萬民而賓興之者。始以六德。繼以六行。後及於六藝。可觀其教以德行爲本。

（一三）論語曰。文學子游子夏。○子夏曰。賢賢易色。事父母能竭其力。事君能致其身。與朋友交。言而有信。雖曰未學。吾必謂之學矣。此乃卜子論學之言也。

詩小雅正月篇、

(一四)十三經。易·書·詩·周禮·儀禮·左傳·公羊傳·穀梁傳·孝經·論語·孟子·禮記·爾雅。

(一五)訓通說文義也。詁者古今異言。通之使人知也。○章明也。總義包體所以明情也。句者局也。聯字分疆。所以局言者。又字積成句。句積成章。○章句之本。主意也。章句之末。即訓詁也。訓詁章句之末。當合同而看。

(一六)所以作經之本旨。乃知止之權衡也。世儒或飾口。而徒爲人者。捨魚取筌者也。或狥迹而不達心者。膠柱鼓瑟者也。是皆不看得所以作經之本旨之過也。雖多。亦奚以爲。

(一七)子曰。君子博學於文。約之以禮。亦可以弗畔矣夫。顏子曰。夫子循々然善誘人。博我以文。約我以禮。侯氏曰。博文致知格物也。約禮克己復禮也。此乃大學孔門教人之法也。而俗儒唯博文而已。噫。○博文之於約禮。猶華葉之於本實。故曰約禮之實。約禮即實也。

(一八)吾道者。儒道也。吾包人我而言。非一人之吾。萬人之吾也。儒道人我所共由之正路也。故曰吾道。

(一九)詩曰。民今方殆。視天夢々。既克有定。靡人弗勝。有皇上帝。伊誰云憎。申包胥曰。人衆則勝天。天定亦能勝人。疑出於此詩。

(二〇)俗儒窮經無序。而以訓詁爲主。是以文學長。而德行有闕。眞儒窮經有序。而以德行爲

○提擧或提挈誤寫。

主。是以博文約禮並進。而才德全成。此乃實學俗儒之所以分也。○七經、易・書・詩・春秋・周禮・儀禮・禮記也。

讀四書法。

朱子曰。務講學者。不先乎大學。無以提挈綱領。(㊀提擧也。攜也。挈懸持也。提擧謂心之所存主。綱領心法之綱領也。) 而盡論孟之精微。(精謂理之純至。微隱也。精微心法之精微也。) 不參之論孟。(之指大學之工夫。) 無以融貫會通。(融明也。鎔也。貫穿也。以繩穿錢曰貫。會聚也。通達也。徹也。會謂理之所聚而不可遺處。通謂理之可行而无所礙處。) 而極中庸之歸趣。(指趣曰歸。趣指意也。歸趣宗旨也。) 然不會其極於中庸。(其指工夫。) 則又何以建立大本。(大本德性也。) 經綸大經。(經者理其緒而分之也。綸者比其類而合之也。經綸皆治絲之事。大經五倫也。) 而讀天下之書。論天下之事哉。○又曰。某要人(一)先讀大學。以定其規模。(某朱子自稱。其指工夫。) 次讀論語。以定其根本。(其指工夫。) 次讀孟子。以觀其發越。(其指工夫。發明也。越發揚也。發越猶言發明。) 次讀中庸。以求古人之微妙。(古人指聖

賢。妙精微也。微妙心法之微妙也。

〇又曰。大學首尾貫通。都無所疑。然後可及語孟。又無所疑。然後可及中庸。又無所疑。謂語孟首尾貫通。

按首尾貫通。都無所疑者。謂理會其大義而已。其指所讀書。大義大体義理也。非謂讀(一)大學法所謂有一部大學在我。胸中而正經亦不用矣之時。這箇是通得四書之大義了。這箇指讀大學法之說。而後温故知新之功也。温尋繹也。故者舊所聞。新者今所得。功工夫也。

學者(二)勿以辭害志也。辭語也。志主意也。

(二)大學所說。其首尾該備。而綱領可尋。節目分明。而工夫有序。極其規模之大。而實群經之綱領也。故曰。讀大學。以定其規模。論語所說。大抵操存涵養之實也。故曰。讀論語。以立其根本。孟子所說。大抵體驗充擴之端也。而性善養氣之論。發明前聖所未發。故曰。讀孟子。以觀其發越。中庸是指本原極致處。而中間說鬼說神。初學者。未當理會。故曰。讀中庸。以求古人之微妙。

(一)讀大學法曰。大學一書有正經。有章句。有或問。看來看去。不用或問。只看章句。便了。久

之，又只看正經，便了。又久之自有一部大學在我胸中，而正經亦不用矣。然不用某許多工夫，亦看某底不出。不用聖賢許多工夫，亦看聖賢底不出。

(一)孟子萬章上曰。說詩者。不以文害辭，不以辭害志。以意逆志。是爲得之。

元博按右三篇竝見全書岡田氏本。俱是中年作。

大學序說(一)

論書之大綱始末者。謂之序。序說言大綱始末之解釋也。非一人之說。故添說字。說釋也。

朱子大學章句序曰(二)。凡書之科段。謂之章。章中詞止處曰句。章句即集註也。序緒也。擧其綱要。若繭之抽絲。

大學之書。大學指經傳。古之大學所以教人之法也。(三)古指三代。大學指學校。教即倣道之教也。人指十五以上入學者。法本作灋。平之如水。从水从廌去。所以觸不直者去之也。大學所以教人之法。即所謂大學之道也。

蓋自天降生民，(四)蓋發語之辭。天即皇上帝也。下同。則既莫不與之以仁義禮智之性矣。(五)則決辭。既已然之辭。之指生民。性。心之生理也。仁義禮智。即性也。性字合着上四者可看。然其氣質之稟或不能齊。(六)氣。體之充也。所以知覺運用也。質形體也。是以不能皆有以知其性之所有而全之也。其指生民。所有即仁義禮

專曾子唯庶本所レ見。

（七）

智是也。而承上起下之辭。之指性。知其性之所有屬知。全之屬行。

一有聰明睿智能盡其性者出於其閒。

聽無所壅曰聰。視無所蔽曰明。思之通徹曰睿。知之周徧曰智。其指人。盡其性知之到。行之極。所謂與天地合其德。其指億兆之民。

則天必命之以爲億兆之君師。

之指聰明睿智之聖。萬十曰億。億十曰兆。億兆猶言萬民。君師帝王之位也。君以治之。師以敎之。

使之治而敎之以復其性。

使天使之然也。之指爲君師人。治謂施政。敎謂敷五敎。之指億兆之民。復者如行者之歸家。其指人。

此伏羲·神農·黃帝·堯·舜所以繼天立極。

此指上文。聖人贊天地之化育。猶孝子善繼人之志。善述人之事。故曰繼天。又曰天子。極卽皇極之極。至善也。繼天立極。卽治敎是也。

而司徒之職·典樂之官所由設也。

司徒之職。統敎百姓。典樂之官。專冑子。

三代之隆。其法寖備。

三代夏殷周也。其指敎。

然後王宮國都以及閭巷。莫不有學。

王宮謂天子之都。國謂君所居曰國都。二十五家爲閭。學學校也。

人生八歲則自王公以下至於庶人之

王天子也。公三公。大師·大傅·大保曰三公。庶人謂農工商。

（一）蒙引曰。讀此序。見得敎法始於伏犧·神農·黃帝·堯·舜。備於三代。廢於周衰。傳於孔子曾

(一)書僞古文尚書湯誥。

子失其傳於孟子之後。而復得表章於程子。發明透徹於朱子。自三代而上其教行於天下。自孔曾而下其法僅傳於天下而已矣。○又曰。原聖賢之所以著是書者。以是敎法不行於天下。故爲此書以傳是法於後世也。夫法不行。則天下無善治。法不傳。則萬世終無善治矣。此聖賢之意。將以爲萬世開太平者也。○愚按此序分五大節而大義明。細分十二截。而條理益明也。首尾貫通。而後以圖說可熟玩。

(二)學庸註解曰章句者。謙辭也。言只是章句之註解而已。而不足以開示蘊奧也。語孟註解曰集註者。亦謙辭也。言集先儒之說而一不出於自爲說也。所謂述而不作之意也。而學庸曰章句。語孟曰集註者。何也。蓋大學與中庸。其言雖累千百。而意義相承。血脈貫通。元只是一篇文字。朱子則爲之區別其章句。今之右經某章。右第某章是也。言章則句在其中矣。而又大率朱子之說。而取於人者少。故曰章句。論孟二書。言者非一事。記者非一時。皆更端之辭。其章句蓋自定。而註解多是集先儒之說。故曰集註。

(三)韻會廌丈蟹切。說文解廌獸也。似山牛一角。古者決訟令觸不直。或作豸。王充論衡解豸者。一角羊性。知有罪。皐陶治獄。其罪疑者。令羊觸之。

(四)民人也。以其生生不絕。故曰生民。降化生之意也。天在上。生民在下。故取降義也。此本(一)書所謂惟皇上帝。降衷于下民。若有恒性。

（五）性之德。統而言之。則信而已矣。分而言之。則有仁義禮智四者之別。是以言仁義禮智。則信在其中矣。言信於四性之外者。所以開示四性之本然也。以四德不言誠。可觀焉。孟子論四端。不論信之端。朱子言仁義禮智之性。而不言信者。爲是也。五性之解。詳見于五性圖說。

（六）氣質之稟。或不能齊者。氣有清濁。稟清者。爲智者。稟濁者。爲愚者。質有純駁。稟純者爲賢。稟駁者爲不肖。氣質之不齊。雖多端。而大要不過智愚賢不肖四者而已。詳見于氣㊀質圖說。

（七）朱子曰。睿只訓通。對智而言。智是體。睿是深通處。聰明屬耳目。睿智全以心言。○東陽許氏曰。禮智之智。性之名。睿智之智。質之稱。愚按。雖有立言之異。只是一箇智而已。○聰明睿智能盡其性者。便是生知安行之聖人。氣極其清。質極其粹者也。○新安陳氏曰。聰明睿智能盡其性者。是就清濁粹駁不齊中。指出極清極粹者言之。聰明睿智。生知之聖也。與智其性相應。能盡其性。安行之聖也。與全之㊁

㊀氣質圖說今佚。

㊁以下佚亡。

圖說　解題並凡例

本卷收むる所の四書合一圖說・大學朱子序圖說・大學序宗旨圖・五性圖說・明德圖說・持敬圖說は皆先生中年の作にして、何れも朱子學時代に屬し、王學思想濃厚の跡を留めざること前卷に同じ。而して圖說の稱あるもの恐らくは邵子の先天圖・周子の太極圖等に啓發せらるゝ所ありしものなるべく、抽象的の叙述に屬するものを具體化し、且つ之を表解的に示す點に特長あり。其の苦心の程察するに餘あり。（全體を通じて正文の傍に△印を附したるは、眞蹟其の他對照したる書に此等の文字なきを示すものとす。）

一、四書合一圖說

本篇は大學論語中庸孟子の大旨の歸一するところあるを發明せられたるものにして、鄉黨啓蒙に於て鄉黨篇と孝經と合一する所あるを發明し、又首經考に於て孝經と小學と合一するを示されしと相並んで、先生の識大の方面を知るに足るものと謂ふべし。卽ち大學に於て其の敎育の目的とする處自己の本具せる明德を明かにするに在るが如く、論語に於ては其の目的とするところ仁を求むるにあり。中庸にありては中和を致すに在り。孟子にありては其の心を盡すに在り。仁と謂ひ中和と謂ひ其の心と謂ふも、要するに明德の殊稱なり。求むと言ひ、致すと言ひ、盡すと言ふも、本體の全に復歸するの工夫を指す。又大學に於て此の目的を達する工夫は民に親むに在るが如く、論語に在りては老幼若くは同年の人をして各其の處を得しむるにあり。中庸にありては、君臣・父子・夫婦・昆弟・朋友の五倫をして各其の性を全うせしむるにあり。孟子にありては庠序學校を設爲し以て之に敎ふ。皆人倫を明

かにする所以なり。卽ち人倫、上に明かにして小民下に親むべし。又大學に於て此等工夫の標準が至善に止るに在るが如く、論語に在りては、要するに義とともに之にしたがふにあり。中庸にありては、中庸に依遵して之に違はざるに在り。孟子にありては、時中の聖を期するにあり。かくて何れも思想の聯繫脈々見るべきものあるを知る。

本巻亦篠原氏本を底本とし、別に敬寫本によつて對校す。岡田氏本に至りては其の目錄に見えて實物現存せず。今編纂上の處理法を述ぶれば左の如し。

(一)底本句讀點なし。敬寫本之あり。主として之に從ひ、且つ其の足らざるを補ふ。
(二)底本訓點なし。敬寫本之あり。今多くは之に從ひ、且つ其の足らざるを補ふ。
(三)底本及び敬寫本倶に傍釋あり。今印刷の都合上全部脚註の方法に改む。
(四)底本及び敬寫本の鼇頭に註記あり。今本文の後に細字にて連記す。
(五)新に(一)(二)(三)の數字を附す。本文と註記との聯絡をして一目瞭然たらしめんとの編者の私意に出づ。委細は巻十解題の部を参照すべし。

二、大學朱子序圖說

本篇は朱子の大學章句序を精讀して、文の大段小段を區別し、以て文の綱領と條目とを明示せられたるものにして、先生の讀書法を觀るべき一資料なり。此の篇の內容に關しては便宜上巻十四經解成書三中庸續解の解題中に述ぶる所あれば、今之を略す。

篠原氏の既に示せるが如く、此の篇は全書岡田氏本に佚して傳はらず。但し全書目錄には斯の篇の

名見ゆ。委員小川氏斯篇の眞蹟に係る前一枚と敬寫補筆に係る後一枚とを藏す。而して後一枚欄外には一行眞蹟を以て補寫の脫したる部分を訂正せらるゝを見る。乃ち門人の敬寫したるものにつき、先生が自ら筆を執り更に之を訂正せられたるを知る。此等の部分につき、篠原氏は志村仲昌本（仲昌は常省先生の門人なり。）によりて材料を得たること同氏の註記によりて之を知る。別に同氏は小川の邑人某の所藏に係る眞蹟を底本として大學序宗旨圖を附せり。博引旁搜力めたりと謂ふべく、特に宗旨圖の如きは全書岡田氏本目錄にも見えざる資料にして篠原氏によつて始めて之を今日に傳ふるを得たるものなり。

今底本を篠原氏本に採り、眞蹟及び敬寫補筆によりて之を對校す。（宗旨圖のみは對校すべきものなし。）其の處理は四書合一圖說の場合に準ず。

三、五性圖說

先生によれば人の性は大學の所謂明德にして、其の妙用によりて、慈愛・果斷・恭敬・是非・忠信五者の情發現す。今此の五者の作用によつて其の本體に名づくれば、仁義禮智信の五者あり。之を五常と名づく。而して此の五常は各區別あれども、本と同一體の明德に歸すとの考なり。本篇は如上の考に基づき或は朱子の說を引き或は陳潛室及び陳北溪の說を引き或は蔡虛齋の蒙引の說を引き、之に自說を加へて仁義禮智信が人性に固有なることを明かにすると共に、詳に其の發現の有樣を考へ更に鼇頭に於て自說の由つて來れる根據を詳記したるものなり。

引用するところ上記數氏の說に止らず。經傳諸子は言ふに及ばず、或は邵子あり、或は周子あり、或は程子あり、或は勉齋黃氏あり、或は西山眞氏あり、或は雲峰胡氏あり、或は新安陳氏ありて他の

圖説と共に宋學の淵叢茲にありとも謂ふべきものにして、明かに朱子學時代の作たることを知るを得。若し先生の思想に於て先秦文學の綜會として鄉黨啓蒙翼傳を擧げ、王學の精髓として、大學考・大學解・中庸解・中庸續解等を擧ぐれば、此等宋學の淵叢たる圖説を加へて正に好三幅對をなすものとも名づくべきものならん。

本篇は篠原氏本を底本として眞蹟本を以て對校す。此の部分岡田氏本は京都市上京區車屋町二條下ル大屋督氏の所藏に係る。此は滋賀縣高島郡大溝町の人故横田耕次郎氏の手より出でゝ大屋氏の有に歸したるものなりと謂ふ。因みに横田氏の自筆附箋によれば、寛永十五年戊寅之夏御發明藤樹先生眞蹟一冊四書合一圖説二葉・大學朱子序圖説二葉・五性圖説・五性分釋説十二葉總葉計十六と表記せり。茲に見ゆる寛永戊寅云々が先生三十一歳の作なることを示す點注意すべきものあれども、岡田氏の筆と藤樹先生の筆とを混同したるは、甚だ惜しむべきことなり。

編纂上の處理は四書合一圖説に準ず。

四、明德圖説

五、持敬圖説〔益田本原人論と題する寫本中、持敬圖説の一篇をも含む。文字の出入並に訓點法に於て底本の誤を訂すに足るもの多し。今頭注之を記す。〕

兩者の內容は先生の宗敎觀・宇宙觀・人生觀を窺ふ上に於て無二の好資料なれども、既に本全集卷三文集三の解題に詳記したれば、今は重ねて言はず。先生以爲らく明德持敬の二圖は邵子の先天圖を祖述し、又周子の太極圖を憲章して心法を發明す、體認の餘に本づき自得の妙を述べ、以て初學德に入るの一助たらんことを庶幾ふと。以て兩説の本づく所と其の抱負とを知るべきなり。

兩圖說共に底本を篠原氏本に採る。岡田氏本に在りては前者は書院に在り。後者は前記大屋督氏之を藏するものの如し。（數年前委員小川氏之を筆寫したることあり。大屋氏舊の如く之を藏し百方搜索したれども、急に見るを得ず。筆蹟が同氏藏有の五性圖說と似たりと言へば、眞蹟本にはあらずして、猶岡田氏本なるべし。）眞蹟明德圖說には滋賀縣高島郡新儀村字太田足立平左衞門氏所藏のものあり。明治四十一年藤樹先生贈位奉告記念展覽會開催の時京都市東山高臺寺南桝屋町の假寓より出陳せられ今載せて記念帖にあり。又持敬圖說には京都市衣笠殿町七九岡田元誠氏（舊高島郡東萬木村岡田季誠氏末孫）所藏の眞蹟ありて圖と圖解とを載す。前者は初稿のものと見えて圖も底本載する所と異なり、圖解亦底本細字を以て書したる部分と一致するのみ。後者は起筆「敬者畏二天命一尊二德性一之謂也」より明德圖の前、「宜二熟玩一」の處に至るものなり。今小川氏筆寫本によりて對校す。篠原氏は志村仲昌本を以て底本としたる爲極めて詳審なること同氏の註記によりて明かなり。今仲昌本の片影をも見るべからず。惜しむべきなり。

今首經考以下圖說の部分に至る迄の資料の一覽表を茲に揭ぐ。（存は現存するもの、佚は岡田氏本目錄又は小川氏藏有本の表紙に於て舊これ有りしことを知りつゝ今日見るを得ざるもの、―はもと之れ有りしか否か不明なるものとす。）

篇名＼資料本	（篠原氏本）	（岡田氏本）	（眞蹟本）	（補寫本）
首經考	存 句讀點なし訓點あり	存 白文	―	―
孝經考	存 同前	存 同前	―	―

大學考	存 同前	存 句讀點あり 訓點あり	佚	—
四書考	存 同前	存 同前	—	—
讀四書法	存 同前	佚	佚	—
大學序說	—	—	佚	存 句讀點あり、訓點あり、鼇頭註記は句讀點のみ
四書合一圖說	存 句讀點なし 訓點なし	佚	佚	存 同前
大學朱子序圖說	存 同前	佚	存 前一枚、句讀點あり、訓點あり、鼇頭は句讀點のみ	存 後一枚、同上
大學序宗旨圖	存 同前	—	—	—
五性圖說	存 同前	存 句讀點あり 訓點あり	存 句讀點あり、訓點あり、鼇頭は句讀點のみ	—
明德圖說	存 句讀點なし 訓點あり	存 白文	存 白文	—
持敬圖說	存 句讀點なし 訓點なし（後の一部に志村士偂訓點を附するあり）	存 訓點あり	存 白文（初稿本）	—

昭和三年戊辰六月二十日　　加藤盛一謹識

〔志村全書を檢討して卷五の中に天命性道合一圖說一篇を得たり。今採錄す。委しくは第二册末尾「志村全書の檢討及び其の取舍」を參照せられたし。訓讀のみは編者適宜之を施す。〕

昭和十五年庚辰三月二十五日

加藤盛一謹識

正文及脚注訓點多從補寫本所附。
正圓下補寫本有故曰規三字。

藤樹先生全集　卷之十一

圖說

四書合一圖說。

大學	明明德	親民	止於至善
論語	求仁	孔子之志	義之與比
中庸	致中和	行達道	依乎中庸
孟子	盡其心	明人倫	聖之時

按大學之三綱領。乃三代孔門之學規也。語孟中庸。皆自此規模中說出來。（此指大學。規正圓之器也。指三綱而言。敎法之於學者。猶規之於正圓。模法也。）是以四書之功夫

（一）指意也下補寫本有₌通作一三字₋。

（二）不違之謂下補寫本有₌中者不偏不倚無過不及之名・庸平常也十六字₋。

（三）其道補寫本作₌人倫₋。下有₌也字₋。人倫旁₋記人倫五倫也五字₋。

（四）時下補寫本無₌卽字₋。

合一而無異指如右圖也。指意（一）也。論語所說頭緒雖多、緒絲端。頭緒猶言條件。要之盡夫子之志人倫應接之事而求仁之功也。要樞要也。之指論語所說。夫子之志。卽老者安之。朋友信之。少者懷之也。人倫五倫也。求謂求復其本然之全。仁心之德。愛之理。功工夫也。其功夫之準的則義之與比也。準揆平取正之器也。的正鵠也。本作的。工夫之於至善。猶揆平取正者之於準。射者之於的。故曰準的。義吾心所處之宜。所謂時中也。中庸所說雖多端、要之盡行達道之事而致中和之功也。達道五倫之道也。致推而極之也。中七情未發性之本體也。無所偏倚。故謂之中。和七情發而中節者也。得其正而無所乖戾。故謂之和。其功夫之準的則依乎中庸也。依不違（二）之謂。孟子所說雖廣、要之盡明人倫之事而盡心之功也。明謂講明其道（三）。盡極其全體而無遺之意。心人之神明。所以具衆理而應萬事者也。其功夫之準的則聖之時也。聖者不勉不思而至焉者也。時（四）卽中也。曰仁曰中和曰心。皆明德之殊稱。名雖異而其實則一也。其指明德・仁・中和・心。實本然也。曰明曰求曰致曰盡。皆復

㊀明明德以下補寫本作明明明德之明。求求仁之求。致致中和之致。盡盡心之盡。

㊁孔曾思孟補寫本別旁記孔孔子也。曾曾子也。思子思也。孟孟子也十六字。

㊂宋上補寫本有于字。是旁記是指三綱領五字。

㊃圈點唯底本所附。

得其本體之全之工也。㊀明明德。求仁。致中和。盡心。工功夫也。曰老者安之。朋友信之。少者懷之。老者養之以安。朋友與之以信。少者懷之以恩。曰行達道。曰明人倫。皆親民之義也。曰義之與比。曰依乎中庸。曰聖之時。皆止於至善之義也。由是觀之。是指四書合一處。之指工夫之旨趣。則㊁孔·曾·思·孟傳授之心法。一以三綱領爲定本可見矣。定不易之意。本謂主意也。而後生不由是而學。後生指㊂自漢至宋之諸儒而言。則有他岐之惑宜哉。他岐指異端·俗儒·權謀·術數。

(一)論語述而篇孔子論伯夷叔齊曰。求仁而得仁。又何怨。○論語公冶長篇子路曰。願聞子之志。子曰。老者安之。朋友信之。少者懷之。五倫之中。擧其三者而包其餘也。○論語里仁篇子曰。君子之於天下也。無適無莫也。義之與比。

(二)中庸首章曰。喜怒哀樂之未發。謂之中。發而皆中節。謂之和。中也者。天下之大本也。和也者。天下之達道也。致中和天地位焉。萬物育焉。○中庸二十章曰。天下之達道五。所以行之者三。曰君臣也。父子也。夫婦也。昆弟也。朋友之交也。五者。天下之達道也。知仁

躲補寫本作射。躲射同。

勇三者。天下之達德也。所以行之者一也。○中庸十一章曰。君子依乎中庸。遯世不見知而不悔。唯聖者能之。又十七章曰。極高明道中庸。

(三)孟子盡心篇孟子曰。盡其心者。知其性也。知其性。則知天矣。○孟子滕文公篇曰。設爲庠序學校以教之。庠者養也。校者敎也。序者躲也。夏曰校。殷曰序。周曰庠。學則三代共之。皆所以明人倫也。人倫明於上。小民親於下。○孟子萬章篇曰。孔子去齊。接淅而行。去魯曰。遲々吾行也。去父母之國之道也。可以速而速。可以久而久。可以處而處。可以仕而仕。孔子也。又曰。孔子聖之時者也。

○圖體橫交系者。所以明合一也。竪交系者。所以明綱領之指趣也。

元博按此篇全書諸本悉佚。今得志邨仲昌手筆本收焉。

大學朱子序圖說。按此篇全書諸本悉佚。今得志邨仲昌手筆本收焉。

「三千之徒至發其意。此第八截。專論大學之法成於書之由。及孟子沒至鮮矣。」

此第九截。論語存而法不明。

自是至極矣。此第十截。論法之晦塞而排俗儒異端權謀術數。

天運至明於

世。此第十一截。論天不喪斯法。故二程出而復明於世。而發作章句之端。雖以熹之不敏 至 小補云。此第十二截。論作章句而法愈明。

○大學之書。古大學。所以教人之法也。此第一截。此序之綱領也。教法二字一篇大頭腦。全篇唯發明此二字。蓋自天降生民 至 復其性。此第二截。論法之大原出于天。而立於聖人而不可易。此伏犧 至 寖備。此第三截。歷舉作法之聖而論其法以漸而備。以證前截所論。然後 至 又如此。此第四截。詳論教法之全體。而其所以爲教 至 所能及也。此第五截。論法之所以能行。而贊美之。及周之衰 至 詔後世。此第六截。論法不行而敎移於孔門。而發筆法於書之端。若曲禮 至 者也。此第七截。論法之成於書之體段。

㊀後學眞蹟本作後覺。學者亦作覺者。者下學亦作覺。

㊁所能間眞蹟本有以字。

按聖人敎人之法。卽後學爲學之法也。（後學謂後生之因敎而學者。學謂悟其理之所以然。）是以言敎則學在其中矣。（其指敎。）言學則敎在其中矣。（其指學。）大學所謂大學之道。卽中庸所謂修道之敎也。朱子恐學者之不能察。（察明辨也。）故於大學序文。必提出敎字。於中庸序文。必提出學字。以明敎學無異法也。蓋儒道都包括敎學之中。（蓋發語辭。括結也。）是故此序雖唯如論大學之始末。敎法之興廢。而其實則所以論吾道之興廢晦明也。宜熟玩焉。（實謂主意。）

○大學朱子序。分五大節。而大義明。細分十二截。而條理益明也。自大學之書至法也。爲第一節。此一句一序之宗旨。而大學之體段也。自蓋自天降生民至非後世之所能及也。爲第二節。論法之所以立。與所能㊁行。自及周之衰至以發其意。爲第三節。論所以筆法於書之由。自孟子沒至壞亂極矣。爲第四節。論法之晦塞。以攘斥俗儒異端權謀術

㊀一節下眞蹟本有則字。
㊁了以間眞蹟本多一以字。
㊂上四節下底本脫。看前三節與我所分同第四節十二字。今據眞蹟本補。

數。自天運循環至篇末。爲第五節。論天與斯法。而復明於世。而明章句之所由述也。細分十二截之說。詳于圖。

○四書蒙引曰。按此序東陽許氏分作三節看。似有未當者。蓋以篇首至非後世之所能及也爲第一㊀節。不知首一句之爲綱要。未當也。以及周之衰至壞亂極矣爲第二節。則是於孔子之經。曾子之傳處。忽略看過了㊁。以天運循環至篇末爲第三節。雖於程子之表章是書者。知所發明而於朱子所作爲章句以俟後之君子者。全欠提掇。是亦未見其的然分曉處。

○愚按蒙引虛齋以此序分四節㊂看。前三節與我所分同。第四節。以孟子沒至篇末爲一節。則於天運否泰敎法之晦明與攘斥俗儒異端權謀術數。全欠提掇。而有未瑩者。又四書圖考有大學序圖。分五節看。似有未當者。第一節第四節用蒙引之說。與我所分相脗合。以蓋自天降生民至有學。爲第二節。以人生八歲至及也爲第三節。則其說支離而未見其有的然分曉處。第五節。與蒙引第四節合。而其失相同。而蒙引圖考每節不提掇敎法二字。於朱子之本旨。似有不合者。故愚竊詳之。

○圖考曰。大學言學。至傳之九章方說出敎字。然朱子序之。則言古之大學所以敎人之法。而終篇無非明治敎之旨。中庸言敎。至二十章凡爲天下國家有九經。方說出學字。

㊀終下底本脱二篇字一。依二眞蹟一補。

㊁此篇眞蹟本補寫本並不レ載。岡田氏本亦所レ不レ言二其有一レ之。

然朱子序之則首言中庸之作子思子憂道學之失其傳。而終篇㊀無非繼往開來之學。學與教非二也。唯大學著四代之教。其經一章。自知止以至於天下平。實皆教人之成法。而天子之元子衆子與夫公卿大夫及庶人之子弟。莫不由教而入。故其書雖專言學。而九章之言。則曰。其家不可教而能教人者無之。又曰。君子不出家而成教於國。朱子必終始提出此字者。恐上之人或不知所以立教也。中庸爲三聖授受之學。其第一章自道不可離。以至於天地位萬物育。實皆學問之極功。而成湯文武之爲君。皐陶伊傅周召之爲臣。莫不以學相承。故其書雖專言教。而二十章之言。則曰。博學之。又曰。有弗學云云。朱子終始提出此字者。恐下之人或不知所強學也。

(附)　大學序宗旨圖。

按此篇係先生邑人小川某家藏眞蹟㊁者。較大學序圖說。有詳略不同。故載此。

此序大分四截。配四時。細分十二節。配十二月。自大學至法也。爲第一節。一篇綱領。大學之體段也。自蓋至及也。爲第二節。論法之所以立與法之所以行。自及周之衰至極矣。爲第三節。論法之否塞。自天運至補云。爲第四節。論天

疏當レ作レ義。

定亦勝人。有章句而法復明於世之意。細分十二節分圖如左。

按大學序圖說標注云。分五大節而大義明。此則云。大分四截配四時。是爲小異也。

明教學之法

- 蓋自天 至 復其性一節
  - 論法之大原出于天而立聖人而不可易也。
- 此伏羲 至 寖備一節
  - 歷擧作法之聖以證前一節。
- 然後 至 又如此一節
  - 詳論立法之全體。
- 而其所以 至 及也一節
  - 言法之能行而賛美之。
- 及周之衰 至 詔後世一節
  - 言人衆則勝天。而法不行。而教遷於孔門。而發筆書之端。

○大學之書古之大學所以教人之法也

- 貼學字
- 此一句序大頭腦。終篇只解此一句了。

是宗旨

若曲禮 至 者也一節　言法之成於書之體段。

三千之徒 至 發其意一節　專言大學之法成於書之由。

及孟子 至 鮮矣一節　言書存而法不明。

自是 至 極矣一節　言法之晦蝕而排異端俗儒。

天運 至 明於世一節　言天定亦勝人。不喪斯法而□□□而發作章句之端。

雖以 至 補云一節　論作章句發明法之意。

五性圖說。

性者。物之生理。朱子曰。生之理。謂性。又曰。性則純是善底。物包天地人物言。生者靈妙不測。活潑々地之意。理者太極分派之名也。太極之分派。猶物之有脈。故名。物之脈理。惟玉最密。故从玉。

心之主宰。道之形體。宰制也。主也。道者。物之所共由之正理也。邵子曰。性者云云。道妙而

○段眞蹟傍ニ記分段也三字。

○眞蹟本靈精明三字作神之精明稱靈六字。妙神化三字作妙神化不測也六字。

○人之下性眞蹟偶作生。

無形。性則仁義禮智具。而體著矣。形體者。實有總會之意。其體段無聲無臭。其指性。無聲無臭。言無形之極。而靈妙不測至誠無息。靈精明。妙神化。至乃極至之至。莫能加之意。誠者眞實無妄之謂。本人物之所同得以生者也。物指飛潛動植。中庸所謂天命之謂性是也。天上帝之別號也。命猶令也。此專發明人之性大學所謂明德是也。此指五性圖說。而就其統體之中。其指性。統體全體渾然之意。而推原其妙用之所由發見。其指性。用體之流行也。心之感應。神靈不測。故曰妙用。則其別有五。別指情。因五者之用。以名其體焉。曰。仁義禮智信。五者之用。即慈愛果斷恭敬是非忠信是也。其指情。體用之本源也。此五者。萬古不易之理也。萬古指自混沌至極天之後而言。故號曰五常五者其別雖異本同一體也。譬如人本一形而有四肢之別。四肢手足也。故性即五常也。五常即性也。朱子所謂仁義禮智之性。猶言手足之形也。

㊀期下各字眞蹟作二右字一。而此以下在二鳥獸前一。岡田氏本亦同。以下岡田氏本幾與二眞蹟一全合。

五性分釋圖

明德

性

仁	義	禮	智	信
木神也。得天命之元。在我謂之仁。	金神也。得天命之利。在我謂之義。	火神也。得天命之亨。在我謂之禮。	水神也。得天命之貞。在我謂之智。	土神也。得天命之誠。在我謂之信。
溫和慈愛之理也。	斷制裁割之理也。	恭敬撙節之理也。	分別是非之理也。	眞實无妄之理也。
如孺子將入於井之事感。則仁之性便應而惻隱之情形。	如嘑爾蹴爾之事感。則義之性便應而羞惡之情形。	如過朝廷過宗廟之事感。則禮之性便應而恭敬之情形。	如妍醜美惡之事感。則智之性便應而是非之情形。	四端非所以內交要譽惡聲而發。則信之性便應而眞實之情形其中。
父子有親	君臣有義	長幼有序	夫婦有別	朋友有信
是乃爲仁之本也。	是乃爲義之本也。	是乃爲禮之本也。	是乃爲智之本也。	是乃爲信之本也。
虎狼之父子	蜂蟻之君臣	豺獺之報本	雎鳩之有別	鳥獸皆成群。又燕鴻之去來有期。㊀各自然而有實。
以可證天命之本然也。	以可證天命之本然也。	以可證天命之本然也。	以可證天命之本然也。	以可證天命之本然也。

㊁四書圖考曰。太極動而生陽。爲二元亨一。太極天理之尊號也。太者大無三以加二之稱。極者至極之義。樞紐根柢之名。誠之通。靜而生陰。爲二利貞一。誠者命之德。至實而无妄之謂。通者方出而賦二於物一流行之意。誠之復。其理

易曰下元貞蹟傍記一者生理之始六字。

賦稟於人。復者。各得而藏於己歸宿之意。其指四德。稟受也。則元亨爲仁禮之性。利貞爲義智之性。不言信者。其誠通誠復之誠。而爲太極之實體者。卽信也。

易曰。元者善之長也。善吉也。天理之殊稱。長者首領之意。蓋元統四德。四德。元亨利貞也。於時爲春。萬物有發生之意。故屬木。春之生意。多發見於草木。可見於五行屬木。於人爲仁。而爲善之長。五常皆善也。而仁統之。故曰善之長。

亨者嘉之會也。亨者。生理之通。嘉善也。美也。會總也。聚也。謂嘉美之所會。故於時爲夏。蓋時至於夏。則萬物皆美盛而輳聚。有文明之象。於人則爲禮。而爲美之所會。

利者義之和也。利者。生理之遂。義理也。中庸謂之和。蓋萬物至秋。被肅殺之氣。肅峻急也。皆

㊀其分之下和眞蹟傍ニ記個也過也五字。

㊀斂當ㇾ作ㇾ歛。下同。

收成結實而各得其宜又不相妨害。其指萬物。宜當也。所安也。而得其㊀分之和。其指萬物。分分劑也。限量也。故屬金有斷制之意於人爲義之和必曰義之和者蓋不和則乖戾而非義矣。

貞者事之幹也。貞者生理之固。幹木身也。詩詁曰木旁生者爲枝。正生者爲幹。幹如木之幹而枝葉所依以立也貞者正也萬物各正性命以爲來年復生之端故於時爲冬而屬於水水所以生萬物猶智所以幹萬事蓋知正之所在而固守之故足以爲事之幹。貞者正而固也。自其生意之已定者而言。故謂之正。自其㊀斂藏者而言。故謂之固。

○中庸曰誠者天之道也。誠者至實無妄之理也。天之道即元亨利貞也。又曰誠者物之終始不誠無物。物包天地人物而言。下同。終始猶言死生。○通書曰誠者聖人之本。通書周子所作。

(一)萬物眞蹟傍記包天地人物五字。
(二)無外之量下眞蹟有自此至資始易文也八字。
(三)乾眞蹟傍記自此至性命易文也八字。
(四)各正以下眞蹟作正性命萬物賦命形性各正小大有定之意。
(五)一定上底本空一字置方形今據眞蹟補。
(六)通眞蹟傍記者方出而賦於物流行之意十二字。
(七)四德眞蹟傍記——卽元亨利貞七字。
(八)寄生眞蹟作寄王。而王字傍記立也二字。

也。聖人神明不測之號。本根柢也。大哉乾元萬物(一)資始誠之源也。大哉贊美無外之量。(二)乾者純陽之卦。其義爲健。乃天德之別名也。(三)元始也。水原曰源。乾道變化。各正性命。變化謂流行賦與也。各指萬物。(四)各正小大有定之意。物所受爲性。天所賦爲命。誠斯立焉。純粹至善者也。純不雜也。粹无疵也。故曰。一陰一陽之謂道。繼之者善也。成之者性也。一陰至性也易文。一陰一陽者。代換(五)一定而不易之謂。道理也。三才萬物之所共由。繼者。流行無息之謂。善者。吉也。成者。萬物之生成也。元亨誠之通。(六)利貞誠之復。復者。各得而藏於己歸宿之意。此二句發明誠爲四德之本體而揭出一章之宗旨。大哉易也。性命之源乎。○又曰。聖誠而已矣。誠五常之本百行之源也。五常。卽仁義禮智信。五行之性也。百行。孝弟忠信之屬。萬物之象也。靜無而動有。至正而明達也。靜謂未發。無謂無聲無臭。動謂已發。有謂妙用發露可見。靜無而動有。誠之體段也。至正。靜無之德也。明達。動有之德也。至正而明達。誠之本然也。蓋誠者天命之全體。(七)四德之本也。無所不通。而無專氣。專氣。謂溫熱寒凉之氣專一。而不雜。故於四時寄生(八)於四季。而屬乎土。寄寓也。四季謂四時之季月。土無定位。

是眞賢僞詣指十二字

無成名無專氣。定位東西南北之定位也。成名生長收藏之成名也。而水火金木無不待是以生者。故土於四行無不在。四行。卽木火金水也。萬物將生者出。將死者歸。猶未發之中由信而立。已發之和由信而行。而仁義禮智非信非也。未發之中。明德之體。已發之和。明德之用。故於人爲信。而爲五常百行之輗軏也。輗。大車轅端橫木。縛軛以駕牛者。軏。小車轅端上曲鉤衡以駕馬者。

○朱子曰。人稟五行之秀以生。秀美也。故木神曰仁。則愛之理也。木以氣言。下火金水土同。神。靈妙不測也。而其發爲惻隱。其指仁。發謂發見。下同。惻傷之切也。隱痛之深也。火神曰禮。則敬之理也。而其發爲恭遜。其指禮。遜辭避也。謙恭也。金神曰義。則宜之理也。而其發爲羞惡。宜適理也。其指義。羞恥己不善也。惡憎人不善也。水神曰智。則別之理也。而其發爲是非。別分別也。其指智。是知其善而以爲是也。非知其惡而以爲非也。土神曰信。則實有之

㊀心頭讀傍記。者人之神明。所以具衆理而應萬事者也十七字。

㊁四德頭讀傍記——即仁義禮智七字。

㊂渾頭讀傍記——未分之意又全也八字。

㊃專言頭讀傍記——全體之論也七字。

理也而其發爲忠信。其指信。盡己之謂忠。以實之謂信。是皆天理之固然。人心之所以爲妙也。天理。天命之本然也。固本然之辭。妙神化不測也。○朱子曰。仁者㊀心之德。愛之理也。李子曰。仁是天理之體統。德者得也。所以得於天之生理。理道也。情之本然。又曰。仁則箇溫和慈愛底道理。溫和厚也。和順也。慈愛也。江氏曰。愛出於內。慈爲愛體。底當也。又曰。仁者天地生物之心。而人之所得以爲心。未發之前。㊁四德具焉。未發之前。明德之體也。而惟仁則包乎四者。程子曰。義禮智信。皆仁也。四者。即義禮智信。四德也。是以涵育㊂渾全無所不統。涵沈浸也。育生也。涵育包含生活之意。渾全謂未發之時渾淪全備也。所謂生之性。愛之理。仁之體也。性即理也。已發之際。四端著焉。已發。明德之用。四端。惻隱羞惡辭讓是非。而惟惻隱則貫乎四端。貫通也。是以周流貫徹無所不通。周偏也。徹通也。所謂性之情。愛之發。仁之用也。情者。性之動也。㊃專言則未發是體。已發是用。未發

明德之體。已發明德之用。偏言則仁是體。惻隱是用。偏言其所主一偏之論也。○孟子曰。仁也者人也。合而言之道也。仁者。人之本然也。人之一體。便是天理。無所不備具。若合而言之。人與仁之名亡。則渾是道理也。又曰。仁天之尊爵也。人之安宅也。爵命秩。位也。人之居舍曰宅。又曰。仁人心也。人心謂人之所以爲人之本心。○中庸曰。仁者人也。親親爲大。㊀上親愛也。下親謂父母。○㊁潛室陳氏曰。如孺子將入於井之事感則仁之理便應而惻隱之心形。孺子乳子也。感觸也。動也。自外而觸動於內也。應答也。自內而答見於外也。○北溪陳氏曰。父子有親。便是仁。有天然自在㊂之意。以慈孝相親愛曰親。父子有親。五典之一也。以五典屬五常。以明內外一致。○蒙引曰。虎狼之父子仁也。虎狼之父子。以明仁之無不在也。

○朱子曰。義則是箇斷制裁割底道理。斷決也。制檢也。㊃裁裂也。割斷也。底當也。問孟子以惻隱爲仁之端。羞惡爲義之端。端端緒也。周子云。㊄周子周茂叔也。德愛。

㊀大眞蹟傍記一無外之意五字。
㊁潛室陳氏條眞蹟曰。此節以自然發見親切處明仁之本然。
㊂自在眞蹟作自有。可從。
㊃檢也下眞蹟有御也二字。
㊄周子下云眞蹟作曰。

㊀果眞蹟傍記一敢勇也四字。斷傍記一決也三字。

㊁義用間眞蹟有者字。

㊂的眞蹟傍記一明也三字。

曰仁宜、曰義、然以其存於心者而言。存在也。則惻隱與愛固爲仁心之發、然羞惡乃就恥不義上反說。而非直指義之端也。宜字乃是就事物上說。宜適宜也。不知義在心上。其體段如何。其指義、朱子曰。義之在心。乃是決裂果㊀斷者也。○中庸曰。義者宜也。尊賢爲大。宜者分別事理。各有所宜也。孟子曰。義人路也。路以人之本然言。朱子曰。義者心之制。事之宜也。制裁也。斷也。愚按以義配仁。則仁者體也。義㊁用也。單論義。則義自有體用。中庸以下三說皆是論配仁之義。三說中庸孟子朱子之說也。故只說用。而似於性上未親切也。親密至也。切近也。朱子所謂義則是箇斷制裁割底道理。於性上爲親切的㊂當也。○孟子曰。孩提之童。無不知愛其親也。孩者。小兒將學語時。能鼓頷也。集成曰。今俗謂頷下亦曰孩。孩提二三歲

其下長眞蹟傍記—謂成長也五字。

敬下長眞蹟傍記—謂兄三字。

慝眞蹟傍記—觸也。動也自外而觸動於內也十三字。應傍記—營也自內而著見於外也十一字。

君臣有義眞蹟傍記—五典之一也以五典屬五常以明內外一致二十一字。

辭眞蹟傍記—解便去己也六字。讓傍記—推以與人也六字。今傍記—指蔡子晫五字。

之間。知孩笑可提抱者也。十五以下謂之童子。其指孩提之童。此節擧良知良能以明仁義發見自然親切處。及其長無不知敬其兄也。其指孩提之童。親親仁也敬長義也無他達之天下也。上親愛也下親言父母達通也。

○潛室陳氏曰如噓爾蹴爾之事感則義之理便應而羞惡之心形。噓咄咋之貌。爾語辭。下同。蹴踐踏也。羞恥己之不善也。惡憎人之不善也此一節以自然發見親切者明義之本然。○北溪陳氏曰君臣有義便是義。有天然自有之意。君仁臣忠。各得其宜上下相親曰義。○蒙引曰蜂蟻之君臣義也。蜂蟻之君臣。以明義之無不在也。可以見天命之本然。

(六)○朱子曰禮則箇恭敬撙節底道理。恭爲敬貌。敬生於心。撙裁抑也。節檢也。止也。底當也。○孟子曰辭讓之心禮之端也。端緒也。○蒙引曰今之說者解禮字則述朱子解禮之用章。述傳舊也。禮之用章論語學而第十二章。曰天理之節文人事之儀則。事物當然之理皆上帝之所命也故曰天理節等級也。文理也儀法也。凡制度品式皆曰則。此解似於性字上爲

㊀儀　眞蹟傍記法也三字。

㊁分　眞蹟傍記別也二字。粲傍記明也三字。

㊂神祇　眞蹟同。當作神祇。

未切也。切親切也。愚按天理之節文。人事之儀則。蓋此解在事之禮。聖人之所制作也。制造也。所謂禮儀㊀三百。威儀三千是也。禮儀經禮也。如冠昏喪祭朝覲會同之類是也。威儀曲禮也。如進退升降俯仰揖遜之類是也。非解釋在心之禮也。釋註解也。而在事之禮。即在心之禮之節文。而本雖無間。而其分㊁亦自有粲然不可紊者。不可不察也。其指在心在事。察明辨也。○潛室陳氏曰。如過朝廷過宗廟之事感。則禮之理便應。而恭敬之心形。廷朝中也。朝廷天子所居也。人臣於此朝。故曰朝廷。宗廟神祇㊂所居也。感觸也。動也。自外而觸動於內也。應答也。自內而答見於外也。此節以自然發見親切者。明禮之本然。○愚按長幼有序。便是禮。序次第也。兄惠弟悌。自次第相和睦曰序。長幼有序。五典之一也。以五典屬五常。以明內外一致。○蒙引曰。豺獺之報本禮也。自此以下二節以明禮之無不在也。可以見天命之本然。○樂庵李氏曰。鴻雁有兄弟之序。

㊀心　眞蹟傍記蔡氏曰。一者人之知覺。主於中而應於外者也十八字。

㊁由下眞蹟有少字。

㊂矣眞蹟傍記決辭二字。

㊃列次眞蹟作行次。

㊄解下智眞蹟作知。

㊅兩沈氏詞眞蹟並作沈氏說。

○孟子曰。是非之心。智之端也。是知其善而以爲是也。非知其惡而以爲非也。端緒也。因其情之發而性之本然可得而見。猶有物在中而緒見於外也。又蔡季通說。端乃是尾也。朱子曰。智則是箇分別是非底道理。別異也。解也。底當也。○蒙引曰。雲峰胡氏乃自謂取朱子之意以補之。山陰括其說曰。意。補裨也。之指解釋之所闕。曰。智則心之神明。所以妙衆理而宰萬物者也。以妙用謂神。明是悉地光明。妙猶言能運用衆理也。運用字有病。故只下得妙字。衆多也。猶言萬也。理天理也。宰主也。制也。物猶事也。此則分明是明德之義矣。此指朱子知字解。義理也。豈可只用以解智字。而與仁義禮相爲列看乎。豈非然之辭。只專辭。解講也。釋也。列陳也。列次也。番易沈氏解智字之義則曰。涵天理動靜之機。具人事是非之鑑。涵沈浸也。天理天命本然之正理。動靜之對。作也。搖也。靜動之對。無爲也。寂也。機會也。要也。是亦用朱子解禮字之意而撰出此詞。此詞指沈氏詞。其事指作爲而言。解義亦似過於濶大。其指沈氏詞。解講也。釋也。義理也。終不可以仁義禮對看也。

○蓋 眞蹟傍ニ記ー發語辭四字。

○和字大學考曰。知字之解。朱子既解而爲德性之知。可以見其說之變遷。

○解 眞蹟傍ニ記ー釋也三字。

○有 眞蹟傍ニ記天然自有之意六字。

對配。蓋此智字是偏言之智。偏言其所主一偏之論也。仁字亦是偏言。不應解得太重也。愚按朱子所謂知則心之神明。妙衆理而宰萬物者也。蓋此解致知之知。此指朱子說。此知字是知識之知。而屬氣。氣體之充。理之配也。非解性中之智也。知覺之知與禮智之智自有分辨。覺曉也。辨別也。知是知覺其事。其泛指形體。智是就其中而分別是非之理也。其指知覺。蒙引以朱子知字之解爲明德之義。其說有未瑩者矣。義理也。未瑩謂不純粹明白也。○潛室陳氏曰。如妍醜美惡之事感則智之理便應。而是非之情形。感觸也。動也。自外而觸動於內也。應答也。自內而答於外也。此一節以自然發見親切者明智之本然。○愚按夫婦有別。便是智。厚男女之分辨。而以義順相交曰別。夫婦有別。五典之一也。以五典屬五常以明內外一致。○蒙引曰。雎鳩之有別智也。有天然自有之意。雎鳩之有別。以明智之無不在。可以見天命之本然。

（一）言命眞蹟作謂命。

（二）言上德　眞蹟傍記即性之德也六字。

（三）四端　眞蹟傍記惻隱羞惡恭敬是非也九字。四性傍記仁義禮智也五字。下同。

（八）

○朱子曰信者是箇眞實無妄底道理。眞僞之反。實虛之對。妄亂也。底當也。○北溪陳氏曰誠是以命言信是以性言。（一）天命之言命。誠是以道言信是以德言。（二）道即天道也。愚按誠者天德之本質也。天德即元亨利貞也。質主也。又地也。故信亦人性之本質也蓋四性未發則渾然在中。四性仁義禮智也。渾全也。中言身之中。未始有物以雜之也。物事物也。之指性。眞實無妄所謂不偏不倚之中信之體也。偏不正也。不不也。倚依也。不偏不倚。性之德。道之體。其已發則惻隱羞惡恭敬是非之心隨感而應。其指四性。感觸也。動也。自外而觸動也。應答也。自內而答見於外也。方其發時無人欲以雜之。人謂人之形氣。欲情所好也。人欲耳目口鼻四肢之所好不率性者也。之指四端。而有誠心而爲（三）四端是乃眞實無妄信之用也故擧四性則不言信而信在仁義禮智四者之中矣。孟子擧四性四端而不言信者爲是也。朱子亦法

(一)四德眞蹟傍記卽元亨利貞也六字。
(二)人性上底本誤重而字。今從眞蹟訂。
(三)至之下謂底本作言字。依眞蹟訂。下文自具之謂也謂同。
(四)錯眞蹟傍記雜也二字。
(五)四性眞蹟傍記卽仁義禮智五字。其傍記指四性三字。
(六)要譽下眞蹟有則有交友之私情七字。
(七)信眞蹟傍記卽信之用四字。蓋涉下文衍。

之也。法則效也。○按天之四德(一)不言誠。而人性(二)言信者。誠者四德之本也。天自至誠而無息。至者乃極至之至。至誠者。無一之不實。極其至之謂(三)。擧天下無以加。亘古今莫能及者也。人心眞妄錯雜(四)。而莫知其鄕。眞者。天理之公也。妄者。人欲之私也。雜參錯也。說文五綵相合也。其指人心。鄕民之所安定也。故鄕字定處之意。故添箇信字。以爲四性(五)之地盤。地猶言主本。盤盛器也。所以開示其本體也。○程子曰。有誠心爲四端。則信在其中矣。信指信之端。在不見其分而自具之謂也。愚按四端。非所以內交要譽惡聲而發。交朋友之交。譽仁者之譽。聲不仁之名。內交要譽(六)。好名之私也。則信之(七)性便應。而眞實無妄之情。形其中。情卽信之用。其指四端。此節以自然發見親切者。明信之本然也。○北溪陳氏曰。朋友有信。便是信。有天然自有之意。交際不相欺曰信。朋友有信。五典之一也。以五典屬五常。以明內外一致。○蒙引曰。虎狼之仁。蜂蟻之義。豺獺之禮。雎鳩之智。其性之出於實然者。信也。其指天命。出於實然。言無按排無强爲。出於自然而無妄。又如燕鴻之去

㊀一節眞蹟作此此一節。可以底本倒。今依眞蹟訂。

㊁通書理性命第二十二。

㊂圈點唯底本所附。下同。

㊃言上眞蹟有立字。

㊄性之用　眞蹟偶誤作人之用。

㊅職掌眞蹟作職事。

來有期。亦信也。期限也。信也。此㊀一節以明信之無不在也。可以見天命之本然。○樂庵李氏曰。鴿鷹有朋友之情。愚按鳥獸成群。亦朋友之交也。群聚也。隊也。

(一)生理之在心曰性。心之所以神靈生々不測者。以具此生理也。故字从生从心。○理本靈妙不測活潑々地。而萬物之所資生也。故曰生理。○㊁通書曰。厥彰厥微。匪靈弗瑩。朱子注曰。此言理也。○邵子曰。道爲天地之本。天地爲萬物之本。以天地觀萬物。則萬物爲物。以道觀天地。則天地亦爲萬物。○朱子曰。心者。身之所主也。又曰。敬者一心之主宰。㊂愚按敬所以立心之主宰也。心主宰性也。所謂敬者一心之主宰。㊃言未瑩也。○邵子曰。性者。道之形體也。心者。性之郛郭也。身者。心之區宇也。物者。身之舟車也。陳氏曰。道者。事物中所當然之理。人之所共由者也。性即在我之理。具於吾心。而道之所總會也。所謂形體正如此。○朱子太極解曰。上天之載。無聲無臭。而實造化之樞紐・品彙之根柢也。性即太極也。故用此意解性。○程子曰。在天曰命。在人曰性。循性曰道。性也。命也。道也。各有所當。○又曰。天之付與之謂命。稟之在我之謂性。見於事之謂理。理也。性也。命也。三者未嘗有異。○朱子曰。理者天之體。命者理之用。性是人之所受。情是性㊄之用。○命猶誥勑。性猶㊅職掌。情猶施設。心則其人也。○又曰。聖賢說性命。皆是就實事上說。

(一)使盡、眞蹟有是字。則作使。餘欠下有非虛語也四字。
(二)所以問、眞蹟有得字。其別誤作其則。
(三)公共之理下底本重出性是在我之理六字。今據眞蹟刪。
(四)曰上眞蹟有大字。
(五)朱子下眞蹟有曰字。蓋衍。
(六)得就氣上論上底本乙得就理上論也六字。今據眞蹟及性理字義補。
(七)就理上、底本作就利上。今據眞蹟及性理字義訂。

如言盡性、使(一)盡得此君臣父子三綱五常之道而無餘。言養性、則是養得此道而不害。至微之理。至著之事。一以貫之。略無餘欠。○問(二)天與命性與理四者之別。天則就其自然者言之。命則就其流行而賦於物者言之。性則就其全體而萬物所以爲生者言之。理則就其事々物々各有其別者言之。合而言之則天卽理也。命卽性也。性卽理也。是如此否。朱子曰。然。○北溪陳氏曰。性卽理也。何以不謂之理而謂之性。蓋理是汎言天地間人物公共之理。(三)性是在我之理。只這道理受於天而爲我所有。故謂之性。性字从生从心。是人生來具是理於心。方名之曰(四)性。其目只是仁義禮智四者而已。○又曰。二氣流行。萬古生々不息。不成只是空箇氣。必有主宰之者。曰。理是也。理在其中爲之樞紐。○五者之外。別非有性。性之體。自有五者之別也。

(二)朱子(五)太極解曰。上天之載。無聲無臭。而實造化之樞紐。品彙之根柢也。又曰。太極者。象數未形。而其理已具之稱。形器已具。而其理无眹之目。○邵子曰。道爲太極。又曰。心爲太極。○北溪陳氏曰。若就造化論。則天命之大目。只是元亨利貞。此四者就氣上論也得。(六)就理上論也得。就氣上論。則物之初生爲元。於時爲春。物之發達爲亨。於時爲夏。物之成就爲利。於時爲秋。物之斂藏爲貞。於時爲冬。貞者正而固也。自其生意之已定者言。故謂之正。自其斂藏者而言。故謂之固。(七)就理上論。則元者。生理之始。亨者。生理之通。

而已下眞蹟有矣字。可從。

利者生理之遂。貞者生理之固。人性之大目。只是仁義禮智四者而已。得天命之元在我。謂之仁。得天命之亨在我。謂之禮。得天命之利在我。謂之義。得天命之貞在我。謂之智。人性之有仁義禮智。只是天地元亨利貞之理。眞實一致。非引而譬之也。○周子曰。誠者。聖人之本。大哉乾元。萬物資始。誠之源也。乾道變化。各正性命。誠斯立焉。純粹至善者也。故曰。一陰一陽之謂道。繼之者善也。成之者性也。元亨誠之通。利貞誠之復。大哉易也。性命之源乎。又曰。聖誠而已。誠五常之本。百行之源也。靜無而動有。至正而明達也。○或問。仁義禮智。性之四德。又添箇信字。謂之五性。如何。朱子曰。信是誠。實此四者。實有是仁。實有是義。禮智皆然。如五行之有土。非土不足以載四者。○四德不言誠。而五性言信者何也。愚按天道自然而至實無妄。故不言誠也。人有人心道心之別。而眞僞混雜。是以老佛荀楊雖才辨有餘。皆不能見其眞。故添信字。以開示仁義禮智之本然也。○朱子曰。天地之間。一氣而已。分陰分陽。便是兩物。故陽爲仁。而陰爲義。然陰陽又各分而爲二。故陽之初爲木。爲春。爲仁。陽之盛爲火。爲夏。爲禮。陰之初爲金。爲秋。爲義。陰之極爲水。爲冬。爲智。蓋仁之惻隱。方自中出。而禮之恭敬。則已盡發於外。義之羞惡。方自外入。而智之是非。則已伏於中。故其象類如是。非是假合附會。若能默會於心。便自可見。元亨利貞。其理亦然。五行之中。四者既各有所屬。而土居中宮。爲四行之

○然下底本脫ニ後字一。大界下脫ニ限字一。並據ニ眞蹟一補。

○禮則下底本脫ニ仁之節文也智則七字一。今據ニ眞蹟一補。

地四時之土。在人則爲信。爲眞實之義。而爲四德之地衆善之主也。蓋天人一物。內外一理。流通貫徹。初無間隔。若不見得。則雖生於天地間。而不知所以爲天地之理。雖有人之形貌。而亦不知其所以爲人之理矣。○又曰。一心之中。仁義禮智。各有界限。而其性情體用。又自各有分別。須自見得分明。然後就此四者之中。又自見得仁義兩字是箇大界限。如天地造化四序流行。而其實不過於一陰一陽而已。於此見得分明。然後就此又自見得仁字是箇生底意思通貫周流於四者之中。仁固仁之本體也。義則仁之斷制也。禮則仁之節文也。智則仁之分別也。正如春之生氣貫徹四時。春則生之生也。夏則生之長也。秋則生之收也。冬則生之藏也。故程子謂。四德之元。猶五常之仁。偏言則一事。專言則包四者。正謂此也。○北溪陳氏曰。人性之有仁義禮智。只是天地元亨利貞之理。仁在天爲元。於時爲春。乃生物之始。萬物於此方萌芽發露。如仁之生々所以爲衆善之長也。禮在天爲亨。於時爲夏。萬物到此時。一齊盛長。衆美所會聚。如經禮三百曲禮三千。燦然文物之盛。亦衆美之所會聚也。義在天爲利。於時爲秋。萬物到此時皆成遂。各得其所。如義斷制萬事。亦各得其宜。秋有肅殺氣。義亦有嚴肅底意。智在天爲貞。於時爲冬。萬物到此時皆歸根復命收斂都定了。如智見得萬事是非。都一定確然不可易。便是貞固道理。貞後又生元。元又生亨。亨又生利。利又生貞。只管如此

(二)無下底本脫一字。錯下脫便字。竝據眞蹟補。

(三)圖底本作圓。依眞蹟及通書朱熹解訂。

(四)氣方間底本無之字。依眞蹟及通書朱子解補。

去循環無端。

(一)天之道。統而言之。則誠而已矣。分而言之。則有元亨利貞四者之別也。誠者造化之主宰。萬物之父母也。故曰。誠者物之終始。不誠無物。○陳氏曰。天道流行。自古及今。無一毫之妄。暑往則寒來。日往則月來。春生了。便夏長。秋殺了。便冬收。元亨利貞。終始循環。萬古常如此。皆是眞實道理爲之主宰。凡天下之物。洪纖高下。飛潛動植。青黃黑白。萬古皆常然不易。如以木葉觀之。缺者常缺。圓者常圓。脩者常脩。短者常短。(二)無一毫差錯。便待人力十分按排撰造來。終不相似。都是實理自然而然。○聖人與天合其德。故乾元以下。專論天道。以包含聖人之能事。○朱子曰。誠者。至實無妄之謂。天所賦。物所受。之正理也。人皆有之。而聖人之所以爲聖者。無他焉。以其獨能全此而已。又曰。大哉乾元。萬物資始。誠之源也者。言乾道之元。萬物所取以爲始者。乃實理流出以賦於人之本。如水之有源。卽(三)圖之陽動也。又曰。乾道變化。各正性命。誠斯立焉者。言乾道變化。而萬物各得受其所賦之正。則實理於是而各爲一物之主矣。卽圖之陰靜也。○朱子曰。陰陽氣也。所以一陰一陽者。理也。形而上者也。道卽理之謂也。繼之者。(四)氣之方出而未有所成之謂也。善卽理之方行。而未有所立之名也。陽之屬也。誠之源也。成則物之已成。性則理之已立者也。陰之屬也。誠之立也。○朱子曰。通者方出而賦於物。善之繼也。

㈠底本五方上無就字。西上無以字。以南上無可字。並據眞蹟補。

㈡皆下底本無不字。空白一字。今依眞蹟補。

㈢必分下底本脫也分二字。依眞蹟補。

㈣底本行下脫之字。哉字誤作也字。並據眞蹟訂。

復者各得而藏於己。性之成也。○朱子曰。方靜而陰。誠固未嘗無也。以其未形而謂之無耳。及動而陽。誠非至此而後有也。以其可見而謂之有耳。靜無則至正而已。動有然後明與達者可見也。○朱子曰。土於四時各寄王十八日。或謂王於戊己。然季夏乃土之本宮。故尤王於夏末。月令載中央土者以此。○潜室陳氏曰。五行無土位。位在四象之中。五常無信位。位在四性之中。○雲峯胡氏曰。按饒氏云。以四方論之。土無定位。無成名。無專氣。以五方論之。亦未嘗無定位成名專氣。不可執一看。愚見朱子之說。是就㈠五方看。方見得。試以河圖看之。五土居中。似有定位。然三八木位乎東。不可以西。一六水位乎北。不可以南。如中間五點。則自具五方。而東西南北。無所不該。似有定位。而實無定位也。一二三四各因五。而後成七八九六。故於四季各寄王十八日。木火金水。各專生長收藏之一氣。而各成生長收藏之一名。然無土皆㈡不可。是則土無專氣。而氣無所不貫。土無成名。而名無所不成。就四方看如此。就五方看亦如此。似不必㈢分也。分看則論土於四行之外。是猶論信於四性之外。合看則土實在四行之中。而信在四性之中也。○未發之時。不由信。則昏昧而至正之中不立。已發之時。不由信。則自欺誣人。而明達之和不行也。○論語爲政篇子曰。人而無信。不知其可也。大車無輗。小車無軏。其何以㈣行之哉。

(一)化醇底本作化育。今依眞蹟改。

(二)愛之理上底本情作性。據眞蹟改。

(三)陽氣下底本脫生乎曰陽氣五字。從眞蹟補。

(四)程子曰。天地之大德曰生。天地絪縕。萬物化(一)醇。生之謂性。萬物之生意最可觀。此元者
善之長也。斯所謂仁也。又曰。非仁則無以見天地。○朱子曰。仁者愛之理。是偏言則一
事。心之德。是專言則包四者。故合而言之。則四者心之德。而仁爲之主。分而言之。則仁
是愛之理。義是果斷之理。禮是恭敬辭讓之理。智是分別是非之理也。仁者愛之理。理
是根。愛是苗。仁之愛。猶糖之甜。醋之酸。愛是那滋味。愛雖是情。愛(二)之理是仁也。仁者愛
之理。愛者仁之事。仁者愛之體。愛者仁之用。愛是自仁出也。然亦不可離了愛去說仁。
昌黎博愛之謂仁。是指情爲性了。周子說德愛曰仁。猶說惻隱之心仁之端也。是就愛
處指出仁。若博愛之謂仁。便是把博愛做仁了。○愚按體用一源。則愛卽仁也。仁卽愛也。
泥朱子體用之辨。而不可必以仁與愛而爲二物也。○問仁是心何異。程子曰。於所主
曰心。名其德曰仁。曰謂仁者心之用乎。曰不可。曰然則猶五穀之種待陽(三)氣生乎。曰陽
氣所發猶之情也。心猶種焉。其生之性是謂仁也。○勉齋黃氏曰。義禮智信亦心之德。
而獨歸之仁何也。義禮智者。德之一端。而仁者。德之全體。以仁能包四者。故心德之名。
獨仁足以當之也。故仁之爲德。偏言之則與義禮智相對。而所主惟一事。專言之則不
及義禮智而四者無不包也。○孟子曰。無惻隱之心非人也。無羞惡之心非人也。無辭
讓之心非人也。無是非之心非人也。惻隱之心。仁之端也。羞惡之心。義之端也。辭讓之

惻隱之心下。底本脫非以下十二字。茲據眞蹟補

心禮之端也。是非之心智之端也。人之有是四端也。猶其有四體也。有是四端而自謂不能者。自賊者也。謂其君不能者。賊其君者也。凡有四端於我者。知皆擴而充之矣。若火之始然。泉之始達。苟能充之。足以保四海。苟不充之。不足以事父母。○朱子曰。仁者人之所以爲人之理也。然仁理也。人物也。以仁之理。合於人之身而言之。乃所謂道者也。○天之生物。自有大小尊卑之等。猶朝廷之有爵位之等。而人之所以萬物之靈而貴者。以稟受心之全德也。故曰尊爵也。人之托生理而有生。猶身之托於居舍而居之。則有天理自然之安。無人欲陷溺之危。人當常在其中而不可須臾離者也。故曰安宅。○西山眞氏曰。人之所以爲人。以其有此仁也。有此仁而後命之曰人。不然則非人矣。○親親爲大者。言仁之道雖博。而其實不出於親親之中也。○孟子曰。今人乍見孺子將入於井。皆有怵惕惻隱之心。非所以內交於孺子之父母也。非所以要譽於鄕黨朋友也。非惡其聲而然也。○莊子天運篇。商太宰蕩問仁於莊子。莊子曰。虎狼仁也。曰。何謂也。莊子曰。父子相親。何爲不仁。○程子曰。觀鷄雛。此可觀仁。朱子曰。爲是那嫩小底。便是仁底意志在。愚按程子之本旨。恐不然。指所以雛之慕母鷄之良知。而開示仁之無不在。卽虎狼之父子之意也。○西山眞氏曰。以體言之。則仁之道大。無所不包。發而爲用。則主乎愛。仁者愛之體也。愛者仁之用也。愛者如見赤子入井而惻然欲有以救

之。以至矜憐憫惜慈祥恩惠。愛之謂也。性中既有仁。發出來。便是愛。如根上發出苗。以苗，爲出於根則可。以苗便爲根則不可。以愛爲出於仁則可。以愛便作仁則不可。

(5)愚按斷制裁割便是果決之義也。斷制裁割是義之用。是情也。所以斷制裁割之理固在于人心。㊀是義之體。是性也。○㊀朱子曰。義如一利及相似。凡事物到前。便兩分去。胸中許多勞々攘々。到此一齊制斷了。○又曰。仁㊀義如陰陽。只是一氣。陽是正長底氣。陰是方消底氣。仁便是方生底義。義便是收回頭底仁。○又曰。義之嚴肅。卽是仁底收斂。○又曰。尋常人施恩惠底心。便發得易。當刑殺時。此心便疑。可見。仁屬陽。屬剛。義屬陰。屬柔。○中庸曰。仁者人也。親親爲大。義者宜也。尊賢爲大。㊁處物之要。莫大於尊賢。能尊賢。則無往不得其宜。故曰。義者宜也。尊賢爲大。○孟子曰。仁人心也。義人路也。○朱子曰。義者行事之宜。謂之人路。則可以見其爲出入往來必由之道。而不可須臾舍矣。○人之由義。猶行者之由路。故曰。義人路也。○雲峯胡氏以心之㊂制事之宜。爲義之正解。而大全收載之。恐未親切。愚按孟子曰。有仁義而已矣。朱子解之曰。仁者心之德。愛之理。義者心之制。事之宜。此解釋所謂配仁之義。非義之正解也明矣。朱子曰。心之制。是說義之體。此體字對事之宜而說。非論未發之體也。心之制。便是㊃已發者也。故對未發之義而言則心之制便是用也。然事之宜。由心之制而處置。則與事之宜又相爲體用。而

㊀心上底本無人字。朱子上無圏子。仁義下無如字。並從眞蹟補。

㊁處物上眞蹟有圏子。

㊂之制上底本乙心字。依眞蹟補。

㊃是下底本脫已發以下十八字。依眞蹟補。

(一)仁人心眞蹟偶誤作仁人仁。

(二)屨底本作屢。貿下少一貿字。其嗟下無也字。並據眞蹟補。

(三)造上必底本作心。依眞蹟訂。

心之制、體而事之宜用也。宜體認焉。○朱子曰。以仁存於心。而義形於外言之。則曰。仁(一)人心也。義人路也。而以仁義相爲體用。若以仁對惻隱。義對羞惡而言。則就其一理之中。又以未發已發相爲體用。又曰。仁固爲體。義固爲用。然仁義各有體用。各有動靜。○新安陳氏曰。孩提知愛親。敬兄。與能愛親敬兄。此蓋指良知良能之先見。而切近者。以曉人也。○朱子曰。無他達之天下。只說達之天下。無別道理。○問仁義不止於孝弟。而孟子以爲達之天下。還是推孝弟之心以友愛天下。卽是仁義否。潛室陳氏曰。此章無推此及彼之意。所謂達乃達道達德之達。言人心所同然也。親親仁之發。敬長義之發。仁義之道。無他。人心之所同然耳。○孟子曰。一簞食。一豆羹。得之則生。弗得則死。嘑爾而與之。行道之人弗受。蹴爾而與之。乞人不屑也。新安陳氏曰。不食非禮之食而死。如齊餓者不受嗟來之食之類。檀弓曰。齊大饑。黔敖爲食於路。以待餓者而食之。有餓者蒙袂輯屨(二)貿貿然來。黔敖左奉食右執飲曰。嗟來食。揚其目而視之曰。予唯不食嗟來之食。以至於斯也。從而謝焉。終不食而死。曾子聞之曰。微與。其嗟也可去。其謝也可食。

○化書曰。蜂有君臣之禮。王元之蜂記曰。蜂王無毒。窠之始營。必造(三)一臺。大如桃李。王居臺上。生子於中。王之子盡復爲王。歲分其族而去。其分也。或鋪如扇。或圓如罌。擁其王而去。王之所在。蜂不敢螫。若失其王。則衆潰而死。其釀蜜如脾。謂之蜜脾。凡取其蜜。

(一)長幼有序便是智眞蹟在朋友有信云々前。

(二)明上底本無則字。依眞蹟補。

(三)故下底本無字字。其形下是作見。並從眞蹟改補。

不可多。多則蜂饑而不蕃。又不可少。少則蜂惰而不作。嗚呼。王之無毒。似君德也。禁窠。如臺。似建國也。子復爲王。似分定也。擁王而行。似衛主也。王所不螫。似遵法也。王失則潰。守義節也。取惟得中。似什一而稅也。化書曰。螻蟻之有君也。一拳之宮。與衆處之。一塊之臺。與衆臨之。一粒之食。與衆蓄之。一蟲之肉。與衆咂之。一罪無疑。與衆戮之。

(一)朱子曰。節者等級也。文者不直截而回互之貌。是裝裏得好。如升降揖遜。天下有當然之理。但此理無形影。故作此禮文畫出一箇天理與人看。便有規矩可以憑據。故謂之天理之節文。○又曰。禮却是辭讓之理發出來方有辭遜。○北溪陳氏曰。父子有親便是仁。君臣有義便是義。夫婦有別便是禮。朋友有信。便是信。長幼有序便是智。○愚按以夫婦有別爲禮。以長幼有序爲智。此說未當矣。蓋夫婦之別。本乎分別是非之理。故其道以別立也。長幼之序。本乎恭敬撙節之理。恭敬撙節。只是一箇序。故其道以序立也。嘗考中庸或問朱子以睢鳩之有別爲智。則(二)明是夫婦有別便是智也。程子曰。禮只是一箇序。由是觀之。則長幼有序。便是禮也。是以禮智二節。不用陳氏之說。○記月令曰。季秋之月。豺乃祭獸戮禽。陳氏曰。祭獸者祭之於天。戮禽者殺之以食也。禽鳥獸之總名。鳥不可曰獸。獸亦可曰禽。時珍曰。按字說曰。豺能勝其類。又知祭獸。可謂才矣。故(三)字從才。豺處々山中有之。狼屬也。俗名豺狗。其形是狗而頰白。前矮後高而長尾。其體細

𥎞下用底本作目、從眞顯改。

瘦而健猛。其毛黄褐色而髩々。其牙如錐而噬物。羣行虎亦畏之。○記月令曰。孟春之月。魚上冰。獺祭魚。時珍曰。王氏字說云。正月十月獺兩祭魚。知報本反始。獸之多賴者。其形似狗。故字從犬從賴。弘景曰。獺多出溪岸邊。有兩種。入藥惟取以魚祭天者。一種獱獺。形大而頸如馬。身似蝙蝠。不入藥用。又桓譚鹽鐵論以獨爲猵。群爲獺。猵卽獱獺也。○時珍曰。按禽經云。鳱以水言。自北而南。鴈以山言。自南而北。張華註云。鳱鴈並音雁。冬則適南集水干。故字從干。春則嚮北集于山岸。故字從岸。小者曰雁。大者曰鴻。鴻大也。多集江渚。故從江。爾雅謂之鵱鷜也。雁有四德。寒則自北而南。止于衡陽。熱則自南而北。歸于雁門。其信也。飛則有序。而前鳴後和。其禮也。失偶不再配。其節也。夜則群宿而一奴巡警。晝則啣蘆以避繒繳。其智也。恭曰。雁爲陽鳥。與燕往來相反。冬南翔。夏北徂。慈育于北也。豈因北人不食之乎。

（七）大學或問朱子解致知之知字曰。若夫知則心之神明。妙衆理而宰萬物者也。大全註朱子曰。道理本有。用知方發得出來。所以謂之妙衆理。問。知如何宰物。朱子曰。無所知覺則不足以宰制萬物。○大學大全序文五性註始用朱子說。其說見于各條。次用雲峰胡氏說曰。朱子四書釋仁曰。心之德。愛之理。義曰。心之制。事之宜。禮曰。天理之節文。人事之儀則。皆兼體用。獨智字未有明釋。嘗竊取朱子之意以補之曰。智則心之神明。

次眞蹟作是。

㊀一下與眞蹟作似。

所以妙衆理而宰萬物者也。次用番易沈氏說云。智者涵天理動靜之機。具人事是非之鑑。愚按義禮智之解。皆未親切的當。其辨見于各條。蒙引之說。爲大有功于後學焉。

○黃直卿云。六經中專言仁者。包四端也。言仁義而不言禮智者。仁包禮。義包智。○朱子曰。生底意思是仁。殺底意思是義。發見會通是禮。收藏不測是智。○又曰。仁義是頭。禮智是尾。一與說春秋夏冬相似。仁禮是陽底一截。義智是陰底一截。○又曰。自陰陽上看下來。仁禮屬陽。義智屬陰。春夏是陽。秋冬是陰。只將仁義說。則春生夏長仁也。秋斂冬藏義也。若將仁義禮智說。則春仁也。夏禮也。秋義也。冬智也。仁禮是敷施出來底。義便是肅殺果斷底。智便是收藏底。正如易中道立天之道。曰陰與陽。立地之道。曰柔與剛。立人之道。曰仁與義。解者多以仁爲柔。以義爲剛。非也。却是以仁爲剛。以義爲柔。蓋仁是箇發出來了。便硬而強。義則是收斂向裏底。外面見之。便是柔。○又曰。仁禮屬陽。義智屬陰。袁機仲却說。義是剛底物。合屬陽。仁是柔底物。合屬陰。殊不知。舒暢發達。便是那剛底意思。收斂藏縮。便是那柔底意思。鄉飲酒義云。溫厚之氣。盛於東南。此天地之仁氣也。嚴凝之氣。盛於西北。此天地之義氣也。○又曰。仁禮屬陽。屬健。義智屬陰。屬順。問義則截然有定分。有收斂底意思。自是屬陰順。不知智如何解。曰。智更是截然。更是收斂。如知得是。知得非。知得便了。更無作用。不似仁義禮三者有作用。知只是知。

㈠嚮昔仁之者鄉黨翼傳所引用。下文潛室陳氏亦有此言。

㈡蜂蠆謂作害蝕。

得了。便交付惻隱羞惡辭遜三者。他那箇更收斂得快。○又曰。人只是此仁義禮智。四種心。如春夏秋冬。千頭萬緒。只是此四種心發出來。○又曰。仁義禮智。便是元亨利貞。若春間不曾發生。到得夏無緣得長。秋冬亦無可收藏。○問。仁是天地之生氣。義禮智又於其中分別。然其初只是生氣。故爲全體。朱子曰。然。問。肅殺之氣。亦只是生氣。曰。不是二物。只是斂些。春夏秋冬。亦只是一氣。○問。孟子說仁義禮智。義在第二。太極圖以義配利。則在第三。朱子曰。禮是陽。故曰亨。仁義禮智。猶東西南北。元亨利貞。猶東西南北。一箇是對說。一箇是從一邊說起。○又曰。㈠禮者仁之著。智者義之藏。且以人之資質言之。溫厚者多謙遜。通曉者多刻剝。○又曰。仁義禮智。孔門未嘗備言。至孟子而始備言之者。蓋孔子時性善之理素明。雖不詳著其條而說自具。至孟子時異端蜂㈡起。往々以性爲不善。孟子思有以明之。於是別而言之。蓋四端之未發也。雖寂然不動。而其中自有條理。自有間架。不是儱侗都無一物。所以外邊纔感。中間便應而爲四端。由其四端之發見。而在中之性。其條理之別。可知矣。○愚按朱子知字之解。說知覺一端。而蒙引以爲明德全體大用之義。是以爲未瑩焉。○詩傳云。雎鳩水鳥。一名王雎。狀類鳧鷖。今江淮間有之。生有定偶。而不相亂。偶常竝遊。而不相狎。故毛傳以爲摯而有別。列女傳以爲人未嘗見其乘居而匹處者。蓋其性然也。大全注朱子曰。嘗見淮人說。淮上有

㊀生下眞蹟有二色字一。盛下著作レ者。

㊁禮智下是也底本作二而言一據二眞蹟一改。

之。狀如レ鳩。差小而長。常是雌雄兩々相隨不二相失一。然亦不二曾相近一。立處須レ隔二丈來地一。所レ謂摯而有レ別是也。

○南軒張氏曰。四者具二於性一而根二於心一。猶二木之著一レ本。水之發レ源。由レ是而生㊀々不レ息也。仁義禮智根二於心一而生二於外一。充盛著見。自不レ可レ掩。故其睟然之和見二於面一。盎二於背一。施二於四體一。四體不レ言而喩。涵養擴充。積久而熟。天理融會。動容周旋。無レ非二此理一。○潛室陳氏曰。性是太極渾然之全體。本不レ可下以二名字一言上。但其中含二具萬理一。而綱領之大者有レ四。故命レ之曰二仁義禮智一。孔門未レ嘗二備言一。至二孟子一始備言レ之。苟但曰二渾然本體一。則恐爲二無星之秤・無寸之尺一。而終不レ足三以曉二天下一。於レ是別而言レ之。界爲二四破一。而四端之說於レ是乎立。孟子言亦遡二其情一而逆知レ之耳。仁義禮智既見得。他分界分明。又須レ知二四者之中。仁義是一箇對立底關鍵。蓋仁仁也。而禮者則仁之著。義義也。而智者則義之藏。猶二春夏秋冬一雖レ爲二四時一。然春夏皆陽之屬也。秋冬皆陰之屬也。故曰。立二天之道一。曰二陰與陽一。立二人之道一。曰二仁與レ義。○西山眞氏曰。人之爲レ人。所下以與二天地一並立而爲中三者上。蓋形有二大小之殊一。而理無二大小之閒一故也。理者何。仁義禮智㊁是也。人之有二是理一者。天與レ之也。自二天道一而言。則曰二元亨利貞一。自二人道一而言。則曰二仁義禮智一。其實一而已。人與二天地一本一無レ二。而其所二以異一者。天地無レ心而人有レ欲。天地惟無心也。是以於穆之命。終古常新。元而亨。亨而利。利而

（八）此下官諧本有二致字一。

貞。貞而又元。一通一復。循環而無閒。人之生也。初皆全具是理。惟其有形體之累。則不能無物欲之私。故當其惻隱之發。而有以撓之。則仁不能充矣。當其羞惡之發。而有以奪之。則義不能充矣。恭敬是非之發亦然。此孟子所以惓々於充之一言也。蓋善端之發。其始甚微。亦猶陰陽之氣兆於二至。初皆眇然而未著也。迨陽浸而長至于正月。則天地之氣和。而物皆發達矣。陰浸而長至于七月。則天地之氣肅。而物皆收斂矣。天地無心。其生成萬物之理。皆自微至著。無一歲不然者。人能體天地之心以爲心。因其善端之發保養扶持。去其所以害之者。若火之然因而噓之。若泉之達因而導之。則一念之惻隱。可以澤百世。一念之羞惡。可以正萬民。堯舜之仁·湯武之義。所以與天地同其大者。以其能充之也。○張子曰。仁不得義則不行。不得禮則不立。不得智則不知。不得信則不能守。此一之道也。

（八）朱子曰。信是義理之全體本質。不可得而分析者。故明道言四端而不言信。○又曰。只如四時。春爲仁。有箇生意。在夏則見其有箇亨通意。在秋則見其有箇成實意。在冬則見其有箇貞固意。在夏秋冬生意何嘗息。本雖凋零。生意則常存。大抵天地閒只一理。隨其到處分許多名字出來。四者於五行各有配。惟信配土。以見仁義禮智實有此理。不是虛說。○又曰。以陰陽五行而言。則木火皆陽。金水皆陰。而土無不在。以性而言。則禮

者仁之餘。智者義之歸。而信亦無不在也。○或(一)曰。仁義禮智信有本耶。孟(二)子曰。亦孝弟而已矣。但以愛親而言。則爲仁之本也。其順乎親。則爲義之本也。敬乎親。則爲禮之本也。其知此者。則爲智之本也。其誠此者。則爲信之本也。蓋人之所以爲五常百行之本無不在此。孟子之論仁義禮智樂之實者。正爲是爾。此其所以爲至德要道也與。○西山眞氏曰。仁義禮智信之性。古人謂之五常。君臣父子夫婦昆弟朋友之道。古人亦謂之五常。以性之體而言。則曰仁義禮智信。以性之用而言。則曰君臣之義・父子之親・夫婦之別・長幼之序・朋友之信。其實則一而已。天下豈有性外之理哉。○或人言。性之四端迭爲賓主。然(三)仁智其總統也。恭而無禮則勞。是以禮爲主也。君子義以爲質。是以義爲主也。蓋四德未嘗相離。遇事則迭見層出。要在人默而識之。朱子曰。說得是。○時珍曰。燕大如雀而身長岐尾。營巢避戊巳日。春社來。秋社去。其來也。啣泥巢於屋宇之下。其去也。伏氣蟄於窟穴之中。或謂其渡海者。謬誤也。恭曰。雁爲陽鳥。與燕往來相反。

元博按。此篇見藤樹文集及拾遺本者。俱太疎略。仲昌手筆本者。最爲完全。故今從之。

又按。卷中凡有標注旁釋者。亦係先生筆。故謹悉載此。

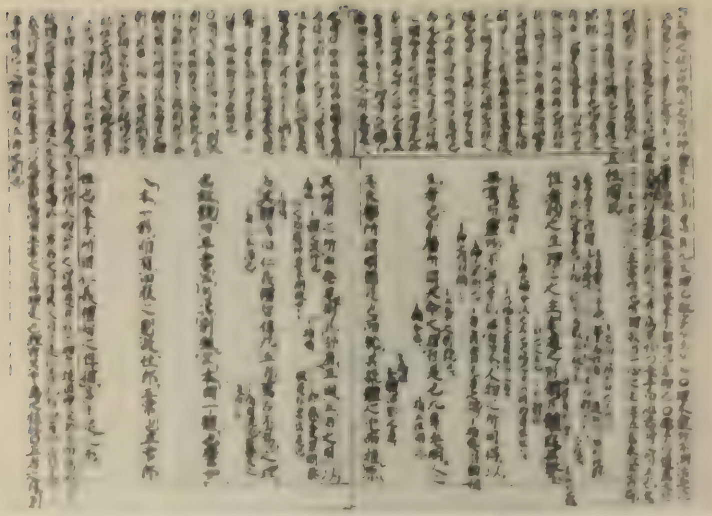
(一)或下曰眞蹟作問。

(二)孟子曰亦孝弟而已矣底本作朱子曰云々。今據眞蹟改。

(三)仁智眞蹟作仁義。

五性圖說

卷之十一 自一〇至一二 自二六七至二六八 頁參照

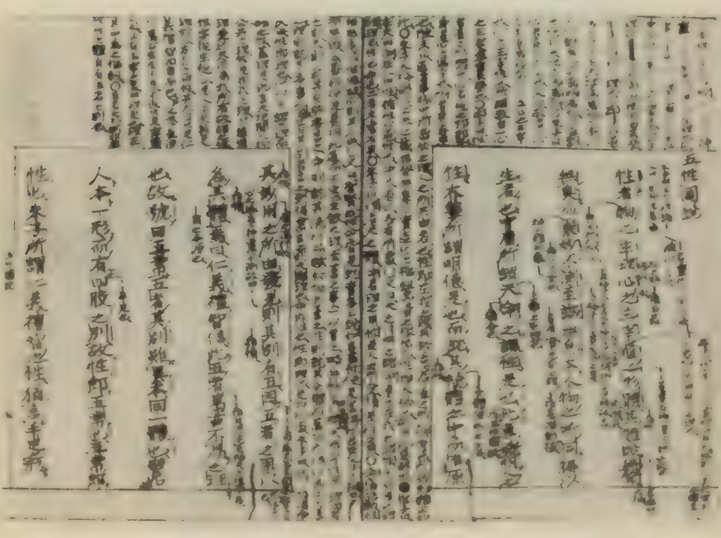


（委員 小川喜代藏氏藏）

（同 前）

五性圖說 全書岡田氏本

卷之十一解題並凡例參照



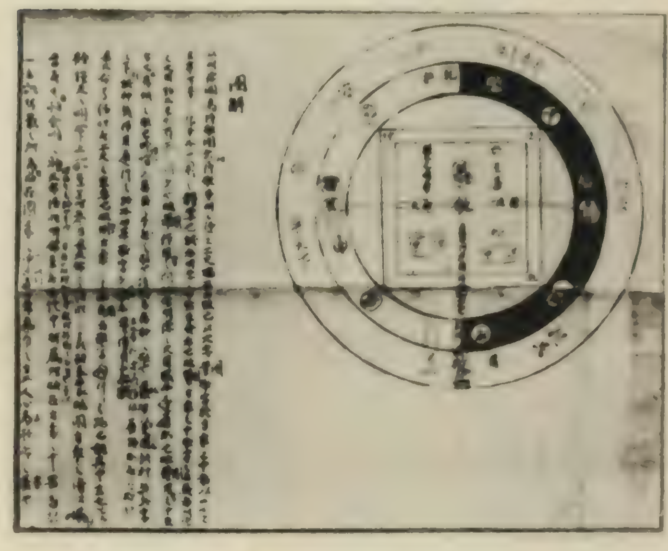
（京都市車屋町二條下ル 大屋督氏藏）

明徳圖說（藤樹先生贈位奉告祭記念帖所載）

卷之十一 自四三至四六 頁參照

（滋賀縣高島郡新儀村大字太田　足立平左衞門氏藏）

持敬圖說及び圖解（稿本）



卷之十一 自五四頁至五七頁及び解題並凡例 參照

（滋賀縣高島郡青柳村大字青柳 京都市衣笠殿町 岡田元誠氏藏）

先生自作の萩筮竹（長さ九寸五十本）と易卦圖片（算木函入）

（藤樹書院藏）

明德圖說。

幷序○此作按仲昌本及全書岡田氏本。並不著年月。然此與持敬圖說倶爲同時作。不俟攷明矣。故載焉。

明德者。人之本心。天之所以與人。而人之所得以靈於萬物者也。其體至虛至神。而具天地萬物之理。其用至靈至妙。而應天下之萬事。卽人性之別名也。明屬心。光明正大。無不燭之謂也。縣象著明。莫大乎日月。故明字从日从月。德屬性。至靈純懿之稱也。德古作悳。人心以得天理而直。故悳字从直从心。蓋上帝所以造化萬物者。理與氣而已。氣以成形。而理以命性焉。以性言之。則萬物一原。固無人物貴賤之殊。所謂天命之謂性是也。然氣質之稟。或不能無正通偏塞之異。是以得氣之偏且塞。而爲物者。既梏於形氣。而無以充其本體

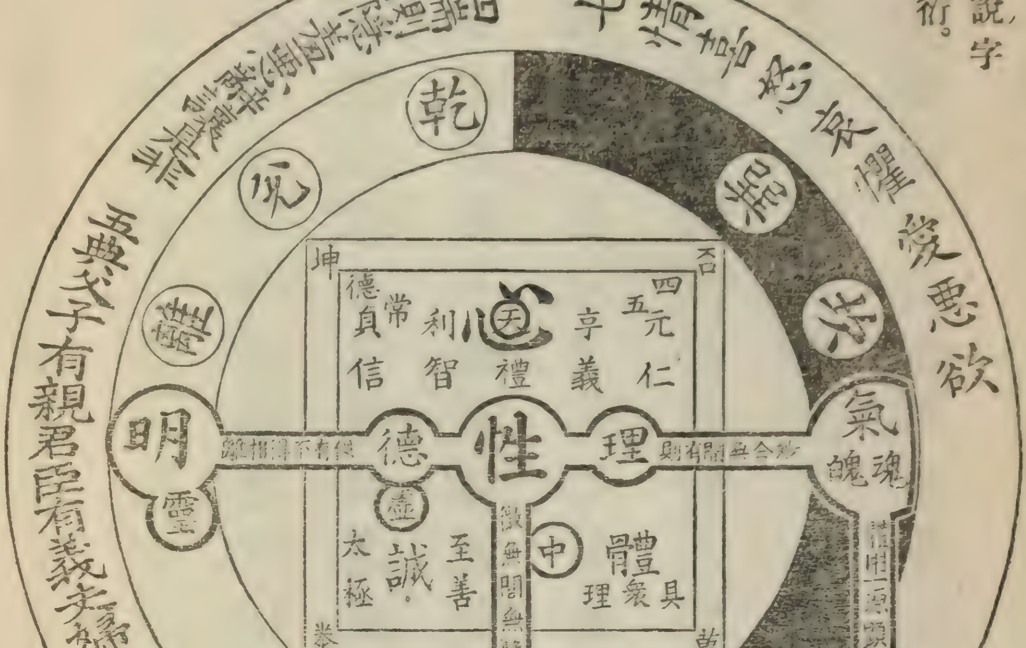
之全矣。故只曰心與性而已。唯人之生。乃得其氣之正且通者。而其性之本體全明。而五性具焉。雖主乎一身。而其實通天地有形之外。其大無外。其小無內。與天地合其德。與日月合其明。□獨命人之性。曰明德。聖人之心。其本然也。蓋其所以異於禽獸者。正在於此。而其所以可爲堯舜。而能參天地以贊化育者。亦不外焉。是以大學之道。在明々德而已矣。然心之爲物。出入無時。莫知其鄉。故其於理氣之辨善惡之原。而初學有難體認者。是以愚嘗竊祖述先天圖及太極圖。而作明德圖說。以爲心法之小補云爾。

□岡田氏本初作獨字。後粉書抹殺之。

三 亾岡田氏本皆作ㇾ亡。
四 幹岡田氏本作ㇾ榦。

明德圖說

按。說字恐衍。



形氣本雖ㇾ無ㇾ惡。而有ㇾ形象。則不ㇾ能ㇾ無ㇾ偏。形氣壹。則理或所ㇾ奪。而亾ㇾ其本然。是以發而不ㇾ中ㇾ節。爲ㇾ旁出寄生扰贅之惡。

形氣者。爲ㇾ理之配。本有ㇾ善而無ㇾ惡者也。是以不ㇾ亾ㇾ其本然。則發而中ㇾ節。爲ㇾ直出本幹之善。

○情意共是心之用。而本無ㇾ分別者也。不ㇾ可ㇾ謂ㇾ性發爲ㇾ情之時無ㇾ意。心發爲ㇾ意之時無ㇾ情。然原ㇾ理氣之辨。而明ㇾ心法之衡鑑。則不ㇾ可ㇾ無ㇾ分別ㇾ矣。蓋喜怒哀樂原ㇾ性發ㇾ於義理ㇾ者爲ㇾ情。卽道心之謂也。故有ㇾ善而無ㇾ惡。喜怒哀樂發ㇾ於形氣。而有ㇾ計較ㇾ者爲ㇾ意。卽人心之謂也。不ㇾ亾ㇾ其本然。則爲ㇾ發而中節之善。或一從ㇾ形氣之私。則爲ㇾ發而不ㇾ中ㇾ節之惡。所ㇾ以有ㇾ善又有ㇾ惡也。惡之根柢發生於意地上。是以大學之工夫。其要關在ㇾ於誠ㇾ其意ㇾ焉。蓋本ㇾ大禹謨人心惟危道心惟微。惟精惟一。允執ㇾ其中ㇾ之心法。與ㇾ意者人心之謂也。誠者精一執中之謂也。

明德者本心之殊稱也。心者統體之總號。太極之異名。合理氣統性情。雖主乎一身而其實通天地有形之外。其大無外其小無內。卽得造化之天在我者也。其體至神至虛而具天地萬物之理。其用至妙至靈而應天下之萬事。動而無動靜而無靜體用一源。顯微無間者也。曰太極曰誠曰四德曰五常曰性曰中曰至善。其名義之所指。雖不同皆所以名狀此心之妙也。四德者天德之稱。至善者事理之名。於明德雖如有異而四德者明德之在天者也至善者明德之在事者也。其實體皆一太極而初非有彼此內外之異矣。

○明德持敬二圖祖述先天圖憲章太極圖而發明心法本

體認之餘。而述自得之妙。以庶幾初學入德之一助焉。蓋先天之圖者。心法之淵源。儒學之鼻祖也。竊嘗釋圖體之大義。曰。中回者理也。外◎者氣也。蓋理者。氣之柁鞔。造化之主宰也。氣者理之舟車。造化之具也。理雖曰無體無方。而實則有定體止方。所謂無極而太極也。凡形之方者。止而不變動。有常。故以回形。而象無體無方而有定體止方之理也。氣惟流行發生。而無所定止。所謂陰靜陽動也。凡形之圓者。變動無常。而不止定。故以◎形。而象變動而不止之氣也。理尊而爲氣之帥。氣賤而爲理之卒徒。故回內而◎外也。回◎共以卦爲圖象者。以天地萬物之理。盡無不包括於六十四卦三百

八十四爻之中。而理氣妙合無間本非二物也□者爲◎之柁輗是故◎不由□以取準則不能以立其用譬如舟車無柁輗也。◎者爲□之舟車是故□無◎則不能以行其用譬如只有柁輗而無舟車也四時之溫熱涼寒者◎也其四氣齊分三月而爲生長收藏之止節者□也雖然其生也無始。故無先後之可言有則倶有本非二物故無合離之時也□◎妙合而造化發育。生々無窮至神至妙者也在造化謂之天。又謂之帝。造天地生萬物。福善禍惡昭々無毫釐之差遠而天地之外近而一身之中久而古今之閒暫而一息之頃。微而一塵之內。幽而隱獨之中。皆上帝之所在也是以一念

之善惡。天得而知之。一事之善惡。天得而勸懲之以福極。可尊可畏。而不可欺也。知止者。求知可尊可畏之本然者也。曰止於至善。曰顧諟天之明命。曰誠意。曰正心。曰脩身。曰齊治平。曰戒懼謹獨。皆所以恭敬奉持上帝之命也。此之謂持敬。持敬者。聖學之所以成始而成終者也。故別爲一圖。以庶幾初學著實下手之一助焉。據此數語。知持敬圖說亦同時作也。夫◎在造化則謂之天。在人則謂之明德。本一理也。故以先天圖發明心法。而作明德圖也。右圖中心字以大字筆圖之正中之上者。以發明爲總括之名號。其筆天字於心字之中者。以發明天與心本一理也。人之知覺。氣也。◎之象也。明靈魂魄。皆屬氣故在◎

之中也所以節知覺者理也□之象也。太極。四德五常性理
德。誠。中至善皆屬理故在□之中。明與德理與氣圖通行之
路者以明理氣妙合無間。有則俱有不得相離也以規圖用
之情意五典而性與情氣與意。圖通行之路者以明體用一
源。顯微無間。無將迎無內外也。省略卦者。以筆理氣明德等
字也蓋明德者。上帝之在人者。而純粹至善者也。堯舜孔子
之心。其本然也。人皆固有之。然氣稟所拘。人欲所蔽。則有時
而昏所以有教而有學也。是故於意上開示於惡之根柢其
善惡二字。於規外書之以善爲直出。以惡爲旁出者以開示
其本然有善而無惡也是乃心法之要關也。學者必以此圖

嘿識神會明德之本體心法之淵源。而以持敬圖。體認服膺心法之工夫。則庶乎其不差矣。或問。先天圖中方者。朱子以爲地之象。然子何所據而以爲理之象也。曰。天地萬物之理。盡具此圖。不可以一端概論。得其理則千變萬化。無不通矣。是故以爲地之象則爲地之象。以爲理之象則爲理之象。易曰。直方大不習无不利。文言曰。敬以直內義以方外。論語曰。不踰矩。大學曰。絜矩之道。曰直方。曰矩。此皆以理喩方。周孔已以方爲理之象。則又何疑乎哉。

下文底本無二訓點一。處々有二志村竹涯之附點一。敬者至レ宜二熟玩一。多從二土屋氏藏本所一レ附。且補二其不一レ足。

㊀羲底本作レ義。今訂。〔益田本作レ犧。〕

㊁法古　土屋氏藏本作二灋古一。

持敬圖說。

併序〇戊寅夏作。按此載二全書岡田氏本一者。其說簡疎。而見二於仲昌本一者。尤爲二完善一。故悉從レ之。旁釋數語。亦係二先生筆一。

敬者。畏二天命一（敬尊之意）。尊二德性一（明德也）之謂也。所以形二狀本心欽明（敬也）之德一也。堯之欽明。文王之敬止。其本然也。聖人之心。淸明純粹。自然而然也。學知以下之資。則操則存（猶守也）。舍則亡（去也）（失也）。故以二學者之工夫一言則此之謂二持敬一（守也）。持敬者。拳々（謂持奉持之貌）服二膺（猶著也）（胸也奉持而著之心胸之間言能守也）本心欽明之德一也。自二伏羲㊀一以來。聖賢傳授之心法（法古㊁）也。朱子曰。敬（言敬）者。聖學之所二以成一レ始（性也蓋敬所以立心之主宰乎）而成レ終者也。又曰。敬者。一心之主宰（一心之主宰）。而萬事之根本也。是以愚（指我云）嘗竊作二圖說一。以庶二幾體認（辨識也）之一助（指持敬工夫）一云爾。

〇或曰。程子嘗於レ此以二主一無適。整齊嚴肅一言レ之。謝氏又以

[□]土屋氏藏本作二曉字一。益田本同。

惺惺下益田本無二法字一。下文有。

常惺々法，言之。尹氏又以其心收斂，不容一物，言之。朱子亦以此，爲說。然子不取其說者，何也。曰，程子主一無適之說。最爲親切的當也。然其曰無適之謂一，則一之義。不親切，而有立言太簡奥。而意味不足者。是以初學不能□其精蘊。而往々苦著實下手之艱焉。蓋不知畏天命尊德性。而徒欲此心之一則無工夫之準的。而又恐或有他岐之惑。程門諸子淫老佛者多。蓋從此處差去。而入於彼與。差之毫釐。謬以千里。此之謂也。雖朱子於儒佛惺々之辨。則猶有未瑩者。所謂立言，太簡奥之弊乎。所謂整齊嚴肅。常惺々法。心收斂不容一物，者。皆唯形容持敬之氣象，而已。非工夫之骨子。如適從此

（惺：不昏昧之言）（親：近也）（的：正也明也）（其：指程子）

註記唯底本所レ附。

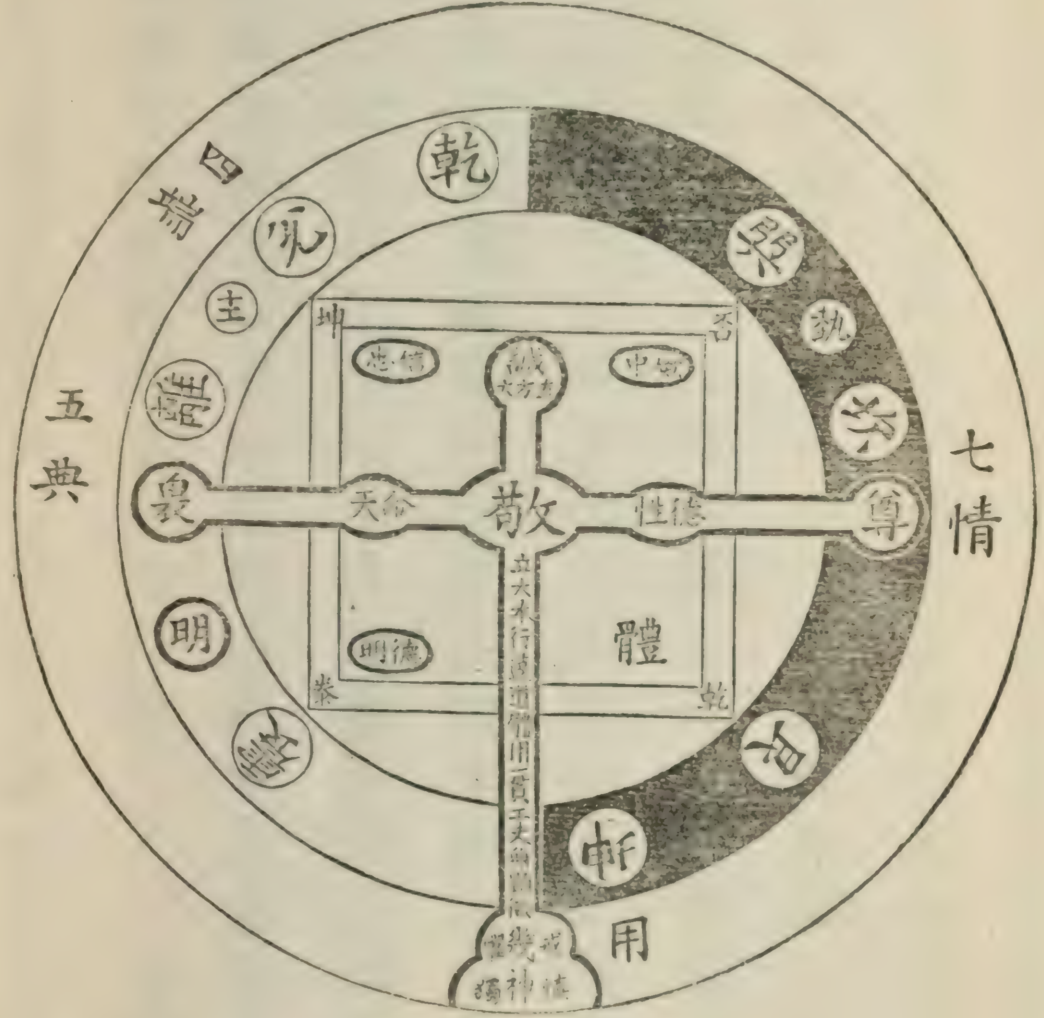
一益田本圖解與二底本一全合。無二註記一。

執厥中岡田氏本在二體字下一。

誠字右傍岡田氏本有二止於至善四字一。

誠字左傍岡田氏本有二顧諟天之明命一六字。

主忠信岡田氏本在二明々德之位一。



貫岡田氏本作レ敬。

岡田氏本無二明明德三字一。

所以二字訓點唯土屋氏本所附。

以下底本無訓點。今附之

【人心從田本作一心。】

說而徒欲把捉此心則其所存者。只是知覺之心。所應者。又是私欲之事。是則老佛小人之徒也。此愚所以不能信其說。而取證於聖經賢傳。而別作圖說也。蓋能畏天命。尊德性。則自然主一無適。自然整齊嚴肅。自然常惺々法。自然其心收斂。不容一物。此所謂本立而道生也。雖如不從其說。而實則不有不同也。唯有本末先後之異也已。宜熟玩。

○以明德圖。變爲持敬圖。持敬圖者。以持敬本明明德之工夫而無彼此也。以大字筆敬字於方象之正中者。以人心之主宰。萬事之根本。而一圖之體要也。（一趣完具於己之謂體　一衆體取會之謂要）誠者。明德之本體未發者也。故圖方象之中敬字之上。以明未發之德也。神者。明德之大用

已發者也。故圖用象之中、以明已發之德也。幾者未發已發之間者也。故圖體用象之間、以明動靜中間之德也。直方大者、存誠之敬也。戒愼恐懼者存幾之敬也。愼獨者存神之敬也。故圖誠神幾之下、以開示工夫之端的也。敬者立大本、行達道、體用一貫工夫無顯微者也。故圖誠神幾通行之路、而歸著敬字以明一以貫之之指趣也。畏天命尊德性者工夫之宗旨也。故圖與敬字通行之路、而明爲工夫之準的也。所謂執其中、明明德、主忠信者、皆持敬之要旨。而與畏天命尊德性之義相表裏。故圖敬字之傍、以爲學者參考。而互相發明之資也。理者氣之帥也。氣者理之卒徒也。持敬者、以理御

〔明明德、盆田本作止於至善。下文明德作至善。明作止。與其圖不合。〕

按上恐脫元博二字。

岡田氏所藏眞蹟與此解合。蓋先生初藁筆。如篠原氏之言。圖亦異。

氣者也。是以天命。德性。中。忠信。明德。皆屬理。故在方象之中。畏尊。執。主。明。皆氣所爲也。故在圓象之中。此則使道心常爲一身之主。而人心每聽命之象也。

按岡田氏本所載說。僅止此。而其句字與仲昌本迥異。殊覺簡疏。疑初藁本也。故別收於後。以俟知者云。

○以明德圖。爲持敬圖者。以持敬本明明德之工夫。而無二致也。以大字。筆敬字於方象之中者。以一心之主宰。萬事之根本。而一圖之體要也。誠者。明德之本然未發者也。故圖方象之中敬字之上。幾者。明德之大用。動而未形有無之間者也。故圖體用象之間。神者。明德之大用。感而遂通者也。故圖用象之中。直方大者。存誠之敬也。戒愼恐懼者。存幾之本然之敬也。謹獨者。存神之敬也。故皆以工夫之名。圖誠神幾各字之下。圖誠神幾體用通行之路。而歸著敬字者。蓋敬者立大本。行達道。體用一貫。顯微無間故也。畏天命。尊德性者。工夫之宗要也。故筆方象之中。而圖與敬字通行之路也。執其中。主忠信。顧諟天之明命。止於至善者。與畏天命。尊德性之義相表裏。故圖方象之傍。以爲學者互相發明之助。理者。氣之帥也。氣者。理之卒徒也。以理御氣。以氣從理。持敬之本旨也。是以天命。德性。明命。至善。忠信。中。皆屬理。故在方象之

中。長。尊。顧。止。主。執。皆氣之所爲也。故在卦象之中。此則道心常爲身之主。而人心每聽命之象也。

○乾九三曰。君子終日乾々。夕惕若。厲無咎。

乾易卦名也。九三人位之陽爻也。終日謂動時也。乾々勤也。夕謂靜時也。惕敬也。懼也。若順也。厲危厲。人心惟危之謂也。言方其終日之動也。乾々以敬勤天事。方其夕之靜也。惕若天之明命。則動靜一於敬。而人心惟雖危厲。而能聽道心之命。而不陷溺於形氣之私。而無咎也。乾々惕若互其文而言之。惕若天命則必能敬々勤天事。敬勤天事則必莫不惕若天命。不初有動靜之異也。曰終日。曰夕。兼晝夜而言。所以明一息不可有間斷也。蓋乾純陽之卦。天德之統體。萬化之主

敬々勤恐衍一敬字。〔益田本作敬勤二字。〕

〔直者名狀其大、名狀其量也。益田本作下直方名狀其德、大名狀其量上也、似可從。〕

宰也。而人者受天地之中以生。而爲上帝之子。繼其志。述其事。以勤動爲常者也。是以於乾之九三。人位之陽爻。而開示天之所以命人。而人之所以受爲人。而所以施教爲學之規矩也。其理至爲親切著明也。此兼動靜而言。持敬之統體也。

○坤六二曰。直方大。不習无不利。文言曰。直其正也。方其義也。君子敬以直內。義以方外。敬義立。而德不孤。直方大。不習无不利。則不疑其所行也。

坤易卦名也。六二地位之陰爻。至靜之時也。直方大所以形容明德之全體也。直者。无邪曲之名。方者。不易之矩。大者。無外之謂也。直者。名狀其大。名狀其量也。不習者。自然之意。所

〔釋直、益田本誤作直釋。〕

(一)宋邵雍從李之才。得陳希夷學。作伏羲先天卦位圖。即乾南。坤北。離東。坎西。震東北。兌東南。巽西南。艮西北者。是也。

〔其然、益田本作其本然。似可從。〕

謂不思而得。不勉而中者也。无不利者。全體大用。緝熙而無所不通達之意也。言聖人之心。精明純粹而不失直方大之本然。是以不待學習。而自然靜虛動直而无不明達通利也。文言。孔子十翼之一也。直其正也者。釋直所以名狀性之正。也。方其義也者。釋方所以名狀性之義也。其字指性而言也。内外非指體用而言。就明德之體段而言。(一)先天圖矩象規象之内外是也。敬則内矩。得其然而正直也。故曰敬以直内。以内矩之義。御外規之氣。則氣從理。而規亦矩也。故曰義以方外。正直方義一理。而皆内矩之德也。敬所以存主於内矩之德也。故於直内以敬言之。義内矩之德也。御規必以矩。故於

方外以義言之。各有攸當也。此所以發明以理御氣之功也。
德不孤者。謂其大無外之量也。言敬義立則明德之全體大
用。無不明而致其大無外之量。故必有鄰。而不孤也。直方大。
不習无不利。則不疑其所行也者。言敬義之功立而直方大
之本然常存。則不待學習而無不明達通利。是以感而遂通
之時。無所疑惑。以致神明之用。而其所行。自無災害之疑懼
也。所謂質諸鬼神而無疑。百世以俟聖人而不惑者也。蓋雖
寂然不動之時。感通之神。常昭々而直方大也。人皆固有之。
然氣稟所昏則或不能全其本然。是故周公於坤之六二地
位。陰爻至靜之時。揭本心之全體。以開示於至靜之中。宜存

〔後或間益田本有二學字。〕

㊀祇□者底本志村竹涯朱記祇抵也三字。〔益田本與朱記合。〕

〔幾善惡、益田本幾ハ善惡アリノ送假名ヲ附ス。〕

主於直方大之本然。常存而不失。則不待學習。自然无不明達通利也。所謂主靜之意也。於持敬之工夫至爲精密也。然孔子恐其言簡奧而後或不能曉其精蘊。故詳說其工程。以爲後學之著蔡焉。此靜時之敬也。

○復初九曰。不遠復。无祇悔。元吉。象曰。不遠之復。以脩身也。

復易卦名也。初九地位之陽爻。坤之初動而微者也。不遠者。動之微而去靜未遠。所謂幾也。復反本然之善也。祇㊀□者。元吉大善而吉也。所謂无不利者也。象孔子十翼之一也。言心已動而去靜不遠者。所謂幾也。幾善惡。故於此時戒懼謹獨。以克己復禮。則發而無不中節而行无至悔。大善而吉也。蓋

〔靈、益田本作虛。原人亦有心之虛而直語。似可從〕

心法之要。在審幾。而誠其意。是以周公於復之初九。坤靜初動而微之時。而開示研幾謹獨之功也。其說至爲親切著明也。然孔子猶恐不察爲心法之要。故曰不遠之復以脩身也。以明爲正心脩身之要法焉。

右乾坤復之爻辭。就先天圖以開示持敬之要術。乃心法之淵源也。是以擧其言詳釋之。使學者知圖說之所祖述也。

○子曰。君子畏天命。

畏者。嚴憚之意也。天者。上帝之別名也。命猶令也。天命者。上帝所賦之正理。無物不有。無時不然。近而一身。心之靈而直。

色之温貌之莊視聽之聽明頭容直氣容肅。口容止手容恭。
（一呼吸也）
足容重親而五倫。父慈。子孝。君仁。臣忠。夫義。婦順。兄友。弟悌。
朋友信。切而產業。自天子以至於庶人之天事是也。既命之。
則明々上帝常照臨而須臾不離。以試其敬怠。而用五福六
極以嚮威之。其聽明昭々。不可欺。況可罔乎可畏之甚者也。
蓋人在君父前則雖小人。其心愿愨。而不能爲不善。以其有
所畏敬也。學者能知天之聽明々畏。無幽獨顯明之異。而其
嚴有甚於君父者。而畏敬之。則雖幽獨之中。猶在君父之前。
而必欲止於天命之正理。則動靜云爲。自無不持敬也。方其
靜而無事之時。而畏天命。則本心常惺々而天下之大本立

也。方其動而應物之時。畏天命則謹獨能慮。而天下之達道行也。此乃持敬之宗旨也。朱子晩年言。敬字之義。惟畏字近之。其意精。愚嘗本於此。而得持敬之說。

○子思曰。君子尊德性。

尊者。恭敬奉持之意。德性者。上帝之所以命人。而人之所以受爲人之正理。卽明德是也。蓋學者能顧諟天之明命。而使德性爲一身之主。而恭敬奉持之。則動靜云爲。天君常泰然。而百體守職。無往而不持敬也。方其靜也。尊德性則明德常明。而天地之中存焉。方其動也。尊德性則人心每聽道心之命。而自無過不及之差焉。此亦持敬之宗旨也。

〔昭臨、岱田本並作照臨〕

右二章愚竊曾以爲持敬用力之方、未知其當否、姑記一得、以俟來哲。

○詩云、敬之敬之、天維顯思。命不易哉。無曰高々在上。陟降厥士、日監在茲。

詩周頌敬之篇賦也。敬之敬之者、重言所以明不可不敬也。之字指天命而言。此一句一章之綱領也。顯明也。思語辭也。天維顯思者、天之視聽、不以耳目。故視於無形、聽於無聲。雖幽獨之中、其昭臨之明、猶日中之天也。命不易哉者、天之昭臨甚明、而一毫無不察。禍福不爽。故予奪無常。其命難保也。士事也。陟降其士、猶言不離人之所爲也。蓋自天降生民、則

(一)〔□〕底本志村竹涯朱記具字。
(二)照底本作昭。竹涯追記火字。今從。〔一二項徳田本與竹涯所記合。〕〔鄉徳田本作嚮〕
(三)昭臨唯底本所見。〔昭徳田本作照。〕

既莫不命之以人極。人極者。五倫日用之道。明德之所以□(一)應者是也。既命人極。則明々上帝常照(二)臨。而須臾不離。以試其敬怠。敬以立人極。則惟鄉用五福。怠以廢人極。則惟威用六極。書曰。惠廸吉。從逆凶。惟影響。是故言敬之哉。々々々。其所以不可不敬者。天之昭(三)臨甚明。而福善禍淫。毫釐不差。是故予奪不于常。其命難保也。必毋謂天高遠而不吾察。當知其聰明々畏。常若陟降於吾之所爲。而無日不監于此者。〔一指人極〕不可以不敬也。是乃持敬之本旨。心法之體要也。

右詩朱子以爲成王之作。蓋成王受之於周公。可觀其有所自來焉。而又可觀持敬者。心法之體要。而其工夫之宗

旨。一以天命爲準的矣。故引以證畏天命尊德性之爲持敬用力之方也。

○周子曰、寂然不動者誠也。感而遂通者神也。動而未形有無之間者幾也。誠精故明。神應故妙。幾微故幽。誠神幾曰聖人。

寂然不動者。明德至靜之本體也。感而遂通者。明德至動之妙用也。動而未形。有無之間者。動而無動靜而無靜誠而神。々而誠有理而無迹之時也。誠者。眞實無妄之謂也。神者。至妙不測之謂也。幾者。動之微。吉之先見者也。精者。密察純至之謂。即直方大之工夫也。應者。致知之意。謹獨能慮而泛應

〔密――詳細也〕〔察――明辨也〕

〔底本舊作動而未形有無之間者。今從益田本所附之訓點訂。下同。〕

〔致知、益田本傍記和字。下文作致中和。〕

〔分時、益田本無分字。〕

曲當之工夫也。微者。不失精微之本然之意。卽戒愼恐懼之工夫也。明妙幽者。誠神幾之本然也。此章分三截（一切之意）。自寂然不動至幾也。爲第一截。蓋方明德未發之時也。寂然不動。無一毫之昏雜。眞實無妄也。而天下之大本立焉。故曰寂然不動者誠也。方明德已發之時也。感而遂通。泛應曲當。至妙不測也。而天下之達道行焉。故曰感而遂通者神也。方其誠神感通。有理無事之時也。繼之者善。而無寄生之萌蘖。精微也。而能成天下之務焉。故曰動而未形。有無之間者幾也。此發明々德之全體大用。本自有誠神幾之分時而以開示學者用力之地也。自誠精故明。至故幽。爲第二截。蓋寂然不動之時。

〔底本モト誠レ之明レ之、神レ之妙レ之、幾レ之幽レ之ノ附點アリ。今益田本ニ從ヒテ訓點ヲ改ム。〕

〔致二其知一、益田本作レ致二其和一。似レ可レ從。〕

底本頭注曰。說々一作二諸說一。蓋志村竹涯筆。〔益田本亦作二諸說一。〕

密察純至。所以求得誠之明之工夫也。故曰誠精故明。感而遂通之時。謹獨能慮。致其知。所以求得神之妙之工夫也。故曰神應故妙。動而未形。有無之間。戒愼恐懼。所以求得幾之幽之工夫也。故曰幾微故幽。此發明復初之方。而以開示學者之工程也。誠神幾曰聖人一句。爲三截。蓋聖人生而自不失誠神幾之本然者也。故曰誠神幾曰聖人。此發明聖人能全明德之全體大用。而以爲學者立志之標的也。

右周子之言。雖甚簡奧。而指歸至爲精密。而於持敬之功。大有所發明。故引以明說々用力之地也。

○子思曰。君子戒愼乎其所不睹。恐懼乎其所不聞。又曰。君

〔獨來者也下、益田本有愼亦尊敬之意也七字〕

子愼其獨。

所不睹所不聞者。指天命言。所謂上天之載。無聲無臭。鬼神之爲德。其盛矣乎。視之而弗見。聽之而弗聞。體物而不可遺是也。戒愼恐懼者。保合大和之功夫。即畏字意也。戒愼乎其所不睹。恐懼乎其所不聞。所謂畏天命也。獨者德性之靈明。無所待。無所倚。萬變一貫。獨往獨來者也。愼獨。所謂尊德性也。

○帝堯曰。允執其中。（指心）

允信也。篤信之意。執者持也。操也。人心恭敬道心而不違。如手秉執物不失也。中者。天地之中。未發之中。已發之和。天命

忠信王學的解釋參看古本大學全解卷尾必忠信以得之條下。及經解主忠信一條。
〔道心之實、益田本作道心之一貫。〕

徳性之別名。允執其中一句。已包括畏天命尊徳性之義。此堯舜禹授受之心法也。

○大學曰。大學之道。在明明徳。

明者。不失欽明之本然之工夫也。明徳者。人性之尊號。而包天命於其中。所謂天命之謂性是也。故明明徳一句。已包括畏天命尊徳性之義。此三代大學之心法也。

○子曰。主忠信。

主者。畏（恐懼也）敬（戒愼也）而不違之意也。中心爲忠。形狀道心之實之名也。人言爲信。形狀人心之實理之名也。忠屬天命。信屬徳性。故主忠信一句。已包畏天命尊徳性之義。此初學之尤所以易

〔志村巳之助編藤樹全書所載、今收載於此。須參照本全集第二冊該全書之檢討及取舍。〕

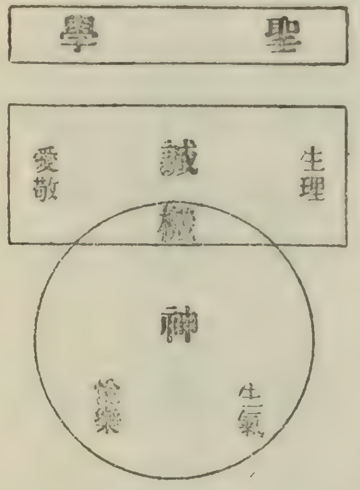
〔圖中悦樂、志村全書誤作悦氣。今訂。〕

赤井直採舊藏、春日潛菴寫書、藤樹先生遺文外五種中有藤樹先生聖學集、載此圖。小川委員既渉閲矣。今在書院心學文集亦載之。

下手也。宜體認熟玩。

右四章皆持敬之要旨也。而與畏天命尊德性之義相表裏。故詳記以爲學者之參考而互相發明之資云爾。

天命性道合一圖說



體用一源顯微無間。明德圖說既兩見。伊川先生易傳序中。亦有此語。

致良知、此是王子教學之標語。但先生曾讀性理會通。中有讀書錄・陽明語錄。此語散見焉。故未接王子全書之前。既熟之乎。

愛敬則生理也。悅樂則生氣也。生理生氣以天道而言之。愛敬悅樂以人道而言之。此天命性道合一之圖也。天人合一・理氣一合。謂之機。機者心之天理。而人間是非之鑑也。靜虛而動直。至誠而明達也。故機以誠爲背。以神爲耳目手足矣。體用一源・顯微無間。然則機良知乎。良知無心。以愛敬爲心。良知無體。以無欲爲體。良知無知。以無知爲知。愛敬者慈悲無我之眞也。無欲者圓神不倚之中也。無智者謙虛神明之靈也。嗚呼。愛敬無欲無知者。夫聖人乎。心之聖人。此之謂良知。故致其良知。則聖茲得焉。

卷之四十二藤樹先生年譜寛永十二年條參照

（自其一至其六）藤樹書院藏

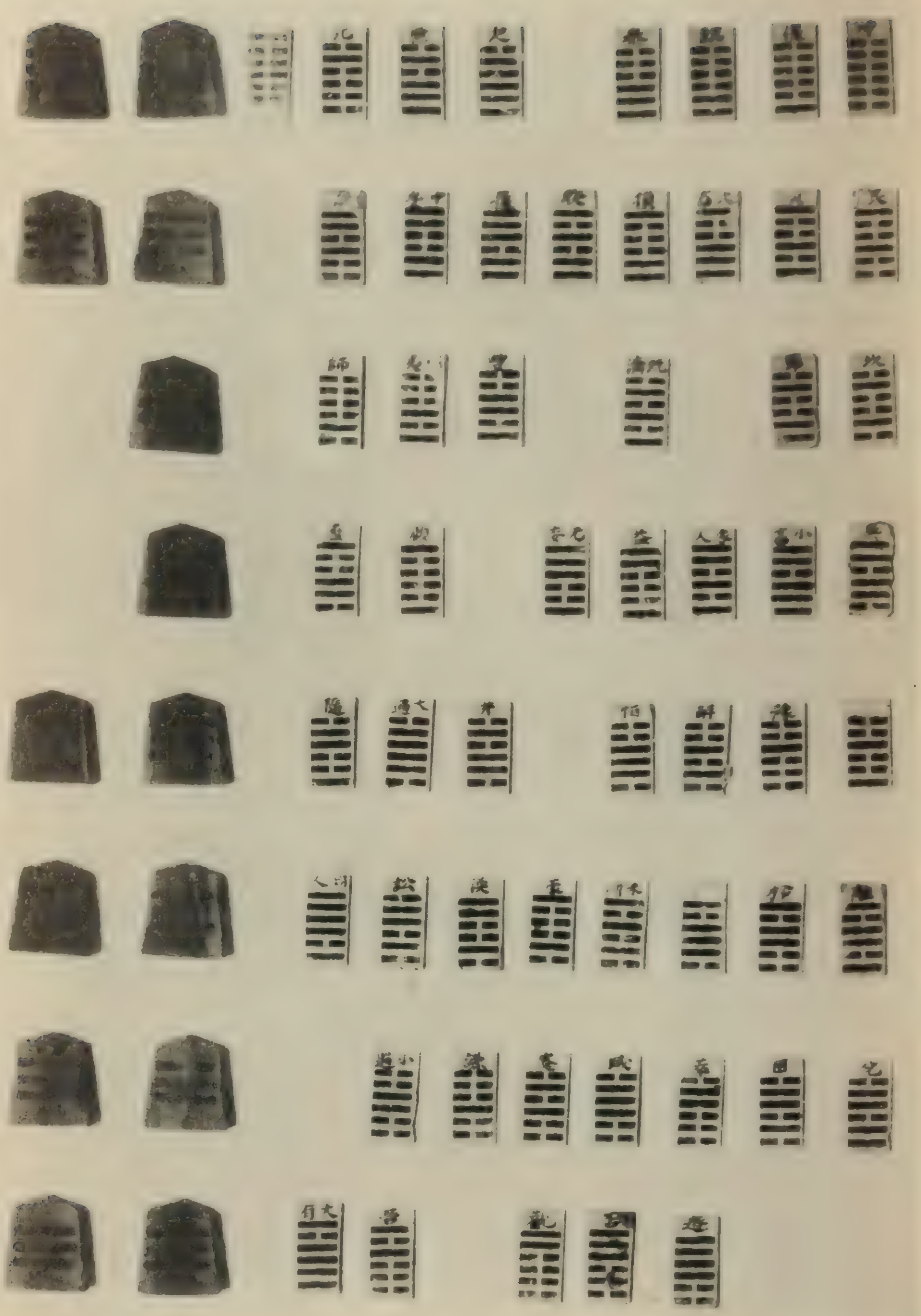
易卦圖（其一）

第一種（表）木にて作り紙を貼附せり（方一寸厚さ五厘）大有の卦を佚し六十三卦現存す
今伏義六十四卦方位圖中の方布の形に從ひて排列す。以下準之。

易卦圖（其二）

第一種（裏）

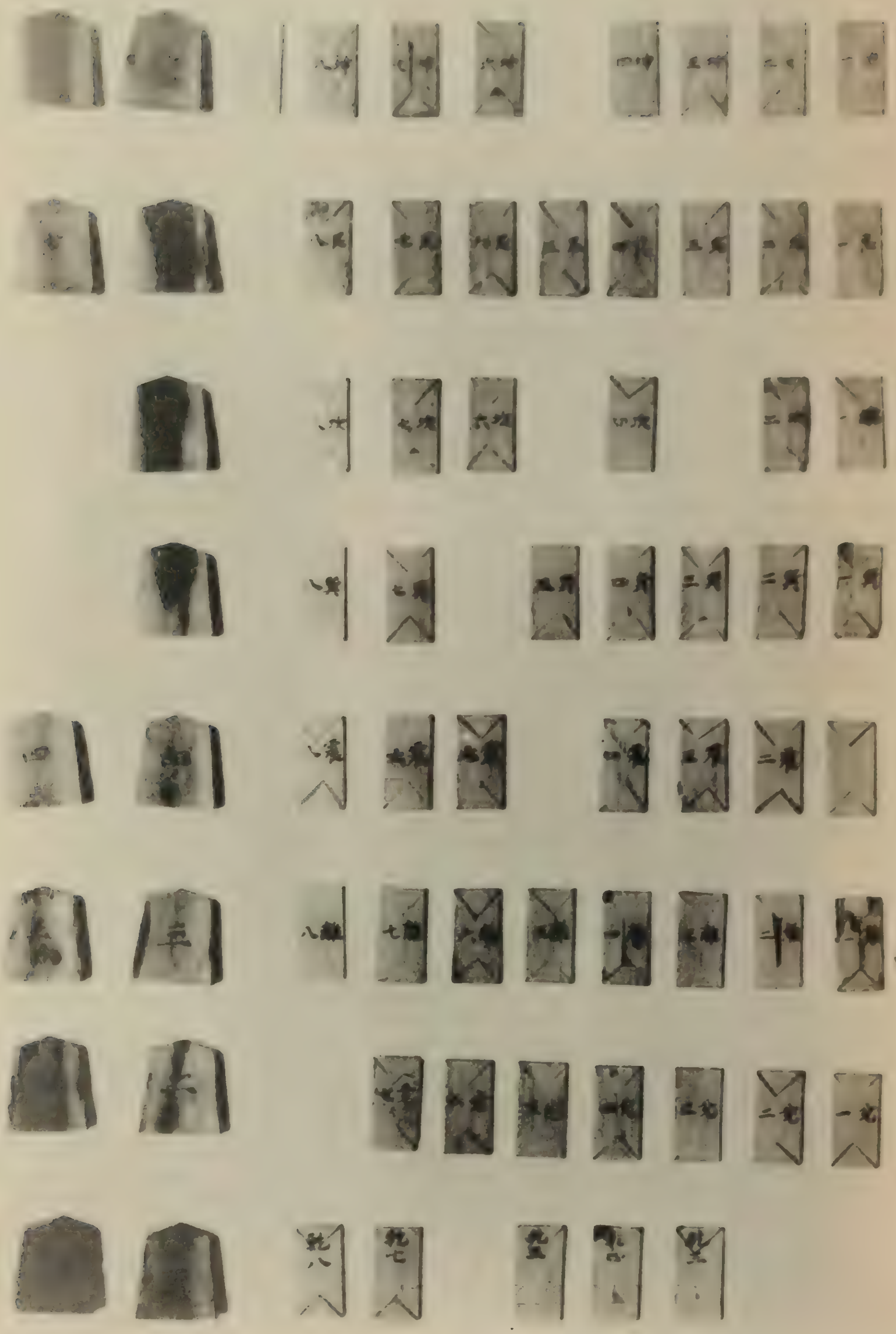
易卦圖（其三）



第二種（表）木にて作り紙を貼附せり（長さ九分 幅四分 厚さ五厘）剝・姤・升・噬嗑・屯・革・歸妹・乾・大壯を佚し又坤卦重出して合計五十六卦現存す。今下方より乾・兌・離・震・巽・坎・艮・坤の順序と裏面にある數字によりて之を排列す。

第三種（表）木にて將棋の駒の形に作れり（高さ八分五厘 底邊七分五厘 厚さ二分）乾・兌・離・震・巽・坎・艮・坤各二個ありしものなるべきも今巽・坎各一個を佚し合計十四個現存す。

易卦圖（其四）

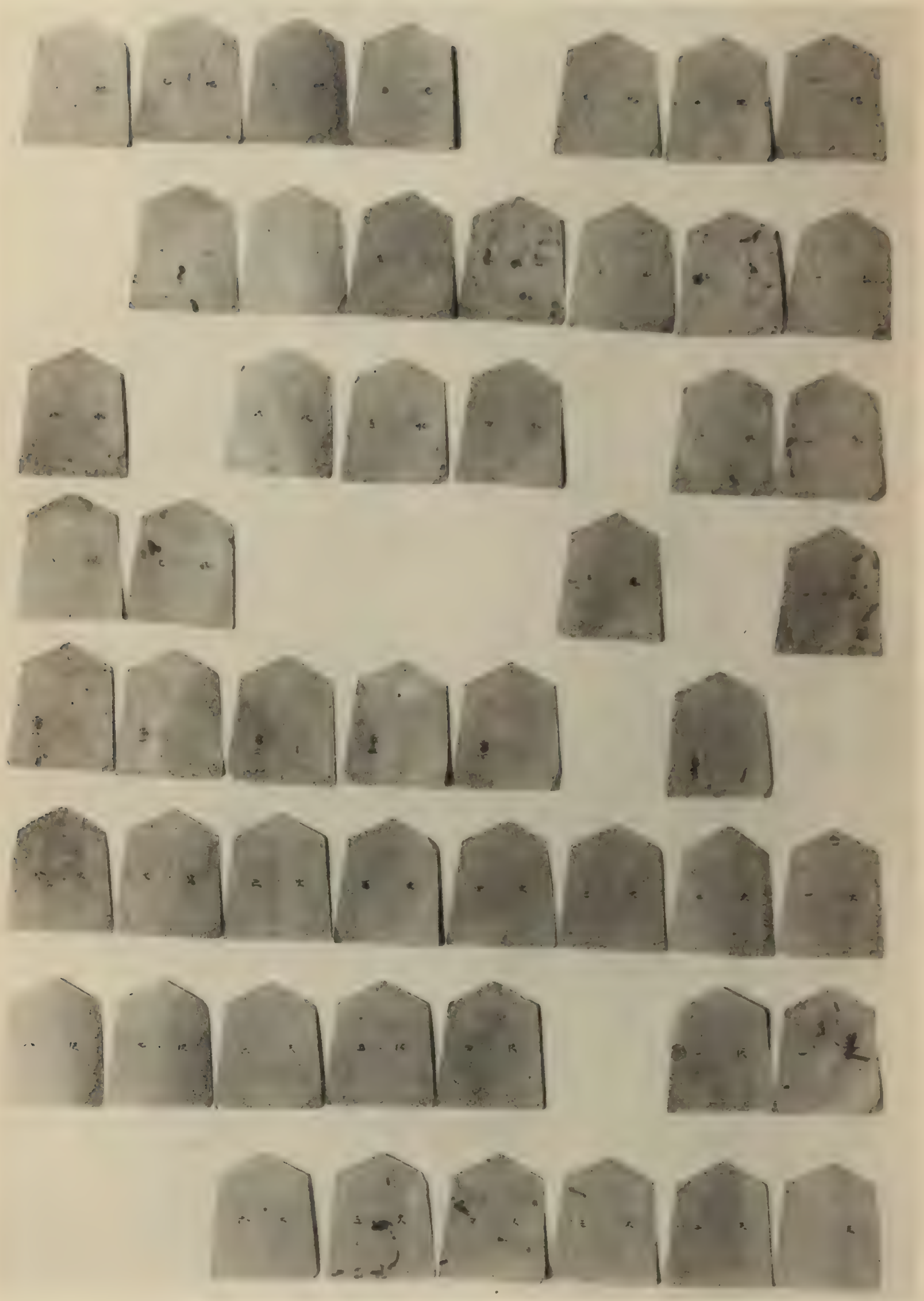


第二種（裏）　第三種（裏）

易卦圖（其五）

第四種（表）強靱なる紙片にて作れり（高さ一寸五分 底邊一寸三分）豫・謙・未濟・蒙・大過・恒・巽・井・无妄・噬嗑・睽・大畜・泰の卦を佚して五十一卦現存す。

易卦圖（其六）



第四種（裏）

昭和十五年九月一日印刷
昭和十五年九月五日增訂第一刷發行

藤樹先生全集第一冊

著作權者　財團法人　藤樹書院
右代表者　西川伴三郎

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
發行者　岩波茂雄

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷者　菊地眞次郎

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
發行所　岩波書店
電話九段(33)〔一八七・一八八番／一八九・一八〇番〕
振替口座東京二六二四〇番

大日本印刷　大森製本

小店出版物中、萬一不完全な品（落丁・亂丁等）がありました節は、御手數乍ら遠慮なく御申出下さる事を御願ひ致します。たとへ御讀後でありましても早速お取替致します。

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02974 4729